とある憑霊の帝都物語

河井

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある憑霊の帝都物語

【Ｎコード】
Ｎ３７９７Ｓ

【作者名】
河井

【あらすじ】
道を歩いていたら、次の瞬間には人工呼吸器つきでベッドの上にいた主人公。どうやら知らない誰かに憑依という例のパターン。とりあえず今いるのは『学園都市』らしいのですが……なんか聞いたことあるけど、どこの町だっけ？　そんな彼に無双などできるわけもなく、狙いを次々に外しつつも悪あがき。そんなお話です

前口上の一　ある朝、グレゴール・ザムザが（前書き）

初投稿で大作の二次に挑むこの無謀さ。
ご笑覧ください。

前口上の一　ある朝、グレゴール・ザムザが

混線。
そして、混合。
たがいに混じりあったものを、もはや元には戻せない。

――わがねむりをみだすな

――れいのそんざいはしんじられ……

――はをくいしばれよ、さいじゃく

――かとうさん、めいふで、まつ

――とくにえらばれたのうりょくしゃに……

――うしとら、つまりほくとうです

――やつめ、こざいくをつかいおったわ

――すでにじっけんはちゃくじつに……

――のづちとはすなわち、つちのれいであり……

――りくつはない、げんりはない

――てんじょうびとにとっても……

――いいかげんにはじまろうぜ

――ときはいたった

――をはうぉとはつおんされていました

――のこりいちまんにんをみごろしに……

――ろはんのような、てらだのような……

――うしわかまるにけんをおしえた……

――もしもかみじょうが『こううん』にも……

――のばなしにはできません

――なにもかもてのひらのうえ、というわけです

――りゅうなんて、いらねえだろうが

未来、あるいは過去へ。
市内、あるいは市外へ。

思想の自由な時代、または人間が各自の理想を持ちながら、孤独ではない世界へ。
真実が人々に開かれ、起きたことの捏造がきかない世界へ。
……そんな世界があるのかどうかはともかく。

管理の世界から、孤独の世界から、科学の世界から、研究の世界から――

挨拶を送ります。
はじめまして。

……変な電波を受信したな。
現実逃避はやめて、目を開けよう。

視覚以外から情報は入ってきているし、みょうに清潔さを強調する洗剤臭やら変に滑りのいいシーツやらを想像させるデータが脳内にたまってきているが、一応目を開けないと始まらない。
なんだかんだいって、まだ五感はぼんやりしてるし。

「……うお、まぶし」

蛍光灯が真上でした。真っ白でした。
そして目をこらすと、とたんに他の感覚が帰ってくる。
他のベッドから聞こえる寝息以外は何も聞こえない、というだけでも、そこは重要だ。

静かなのは嫌いだ。
熊野(くまの)で亡霊に囲まれた時も、奇門遁甲(きもんとんこう)にはめられた時もそうだった。
お父が海に出たきり帰ってこなくなってから、悪いことがあるといつもそうだ。

この学園都市で暮らすようになった以上どうしようもないんだろうが、実験と称して機械に放りこまれた時も、一瞬だけ自分の周りが静かになるような気になった。
けっきょく、たぶんそのせいで今、こうして病院ぽいところで起きることになったんだろうけど。

よく考えれば、とんだことに関わったものだ。
幼稚園の年長組あたりで『置き去り(チャイルドエラー)』にされた弱い立場とはいっても、不満はある。

ま、しかし今そんなことはどうでもいい。
窓のない部屋に病人用ベッドを押しこんだバカのせいで、ほとんど視界が真っ白だ。
それでも、おれが寝ているベッドは横に長い病室の真ん中だからまだいい。両端のベッドあたりは光に埋もれて見えやしない。

だれか見回りに来ないかな。さすがに一日一回は来ると思いたい。
就職難のせいで大学院を目指していた俺としては、今ここにノーパソを持ちこんででも卒業論文を早く終わらせたい。
つけていたはずの腕時計もなく、時間すらわからないので余計あせる。

とりあえず、ベッドの中で手足の指を動かしてみた。
普通に動く。血蚕（けっさん）どもは仕事をしたらしい。
では第二段階（ステップ2）。

「よっこいせ、っと」

ベッドから上半身を浮かせた。
そこで落ちた。
腕の力が抜けてる。

目を凝らすと、頭上に透明なプラスチックの覆いが見えた。
どうも、大きなカプセルのようなベッドに入れられていたらしい。
頭を上げなくてよかったのか？　これは。

かなり長い間眠っていたのか、腕に力が入らない。布団をのけようとしただけで手がしびれる。
暗がりで目を細めてみると、着てるのはよくある緑の手術衣。
そして、腕につながるチューブ。手がしびれるのは点滴のせいか。

意識を失う直前、おれは私服を着ていた。ショルダーバッグも持っていた。
中に卒業論文用の資料を入れて、肩が痛かったのを覚えている。
ということは、そういう私物は別の場所にあるのだろう。

しかし、自分がいつも持ち歩いていた腕時計と眼鏡と携帯のセットがないと、何となく不安になる。
式のひとつも打てば、話は早くてすむのに……。

「え？」

思わず声が出た。

ちょっと待て。

今、おれは何を考えていた？

周りの寝ている連中がたてる寝息が、やけにはっきり聞こえる。
彼らのために室温は調整してあるはずなのに、いきなり嫌な汗が吹き出てきた。
紙かプラスチックでできているらしい手術衣のぱりぱりした表面に、瞬く間に汗が染みていくが、そんなことを気にしてはいられない。
声に出してみる。

「式ってなんだ?」

それは“打つ”ものなのか?
その式を使えば“話は早くてすむ”って、いったい何する気だったんだ、おれは?

いや、そうじゃない。式も大事だが、最初の違和感はそこじゃない。
それよりもっと前だ。

「血蚕が仕事をした?」

なんなんだ、血蚕って?
「けっさん」って読むことも今わかったこのおれが、そいつらを使っていたのか?

「チャイルドエラー？」

そもそも置き去りって、なんのことだ？

“実験”が許される子供（チャイルド）って、どんなブラック学校だおい。

「お父が海に出たきり帰ってこなかった？」

意味が分からない。まず、おれは父を“お父”なんて呼ばない。

帰ってこなかったのは、いったい誰の父親だ？

それに、極めつけ。

「熊野で亡霊に囲まれた？」

そもそも熊野なんて山奥、行ったことがないのに？

奇門遁甲は、卒論で取りあげた占いの一種だ。それに“はめられた”だと？

「落ち着こ、おれ」

自分に言い聞かせる意味でつぶやく。

一瞬「ある朝、グレゴール・ザムザがなにか気がかりな夢から……」などと口走りそうになった自分を立ち直らせねば。

よし、状況を整理しよう。

おれは吉備津脱解（きびつ　とりひろ）、二二歳。

出身は京都府、関西の中堅私大四回生。史学部の国史学科、大学院志望。

標準語が抜けないのは、小中高ずっと神奈川にいたから。

いまの課題は卒業論文の完成、題目は――

「検非違使と掃除の神聖性について……」

そう口のなかで声に出した直後、それまでとは桁違いに大きな音がした。

機械音。

「うお、うるせ」

思わず目をつぶったが、よく考えると意味がなかったので開ける。
右をに顔を向けると、病室の扉が全開になっていた。
どうやら、そちらの端に扉があったらしい。移動式ベッドが通れるように幅広い扉の前で、白衣姿の女性が立っていた。

あごを外す勢いで、口をぽかんとあけながら。

そこで。

「か……」

「か？」

「かとう君？」

おれは、自分によくないことが起きたらしいと、やっと気がついた。

$$>i2181\overline{1}\overline{2}938<$$

前口上の一　ある朝、グレゴール・ザムザが（後書き）

見切り発車。
大御所『とある』と、元祖風水小説『帝都物語』を混ぜてみました。
どうか生温かく見守っていただければ幸いです。

前口上の二　伸びる手

“かとう君”こと吉備津脱解です。どうも。

自分以外に起きている人が現れて、やっと周りを見る余裕が出てきた。
ふと自分の手を見て、絶句した。

ちょっと小さい。
肌のきめが細かい。
手指に生えていた毛がない。

よく考えてみれば、眼鏡をかけていたはずのおれが、自分の手を観察できてる。
裸眼で。

……これはおれの体じゃない。

じゃあ、誰のだ??

おれは意識を失う前、ショルダーバッグを背負って図書館から下宿に帰る所だった。

一方通行一車線の典型的な生活道路を歩いていると、いきなり足を払われたような感触があって視界がぐるぐる回り、そのままブラックアウトである。

しかし、意味不明な“記憶”のラストシーンでは、自分は白い粉を飲み、ヘッドセットをつけて何かの機械に飲み込まれるところで意識を失っていた。

その時は小学生だった。

……意味が分からん。

だいたい、さっき出てきた回想も明らかにおかしい。

海で遭難した親とか置き去りってだけでわけがわからない。

しかも、血蚕とか亡霊とか奇門遁甲とかは、それまで実生活にまったく縁がなかった単語といってもいい。

卒論の題材がオカルトだったから、字面を見たことはあるけど。

状況的に、おれが自分以外のだれかの記憶をもっているのは間違いない。

そういう妄想だとしても、今は判別できない。
小学生までの記憶しかないから、“ガキ”と呼ぶことにする。

ついでに、和風オカルト関連の知識ももっている。かなり詳しく。
こっちも、知識の持ち主の記憶が混じる。
仮称“オカルトさん”にしよう。

で、なんでこの“ふたり”の記憶が、おれの中にあるのか、なんだが。

答えが出る前に、ベッドというかカプセルのそばへ、足音が近づいてきた。
まあ、なんとなく誰かは分かる。
なぜかカプセルベッドにも覚えがあるし、見知った場所なんだろう。
“元いた施設”ってのがどこかはともかく、白い粉を飲んだ“ガキ”の記憶に従えば、そういうことになる。

足音が止まった。
天井からの光も遮られる。
誰かと考えるまでもない。例の、白衣を着た女性だ。

まず美人と言っていい顔立ちと、逆光の成果明るいベージュの髪。
少し悪い方へ変わってはいるが、見覚えのある顔だった。ガキの記憶という意味で。

どうやらその人は、ガキの世話役とか担任とか、そんな位置づけらしい。

まあなんにしろ、限界まで目を見開いてこっちを向いている彼女に、ぼさっとした面を見せるわけにもいかない。

妙に動きにくい顔の筋肉を動かし、笑顔に見えそうな程度に口をひきつらせて、

「おはようございます、きやませんせい」

とりあえず、おれは挨拶した。

>i21811—2938<

それからが大変だった。

目の下のクマが危険水準に達している（ソースはおれ）その“きやませんせい”は、一瞬の早業でベッドの覆いをとっぱずし、ひとしきりおれの額に手をあてたりペンライトで瞳孔収縮を確認したりしてから、こんなことを言い出した。

「よし、かとう君、病室を変えるぞ」

「えっ」

思わず聞き返す。顔をしかめる“きやませんせい”。
彼女が目元をぬぐったのは幻覚ということにしておこう。
でないと唐突すぎて意味わからん。

「……自分では気づかないだろうが、君はかなり長いこと目を覚まさなかったんだ」

「そですね。手が大きくなってますし」

小学生になりきって答える。
大きくなってるとはいえ、十二歳ごろのレベルだ。

……が、“きやませんせい”はまた目を丸くしていた。
何か間違ったかな？

「と、とにかく。
この病室は、そういう子たちが安静にしておく部屋だ。
いったん目が覚めた以上、日当たりのいい部屋にうつった方がいい」

「わかりました」

とは言ったものの、本当に長い間寝ていたらしく、手足の筋肉も相当弱くなっている。
点滴も刺さったままで、チューブはベッド内部に固定式。
要するに動けないため、看護士さんがベッドを動かしてくれるのを待つしかない。

逆に言えば、どこか変なところに運ばれても、逃げ出せないだろう。

今この状況を経験している“本物”のガキは実験材料にされていたみたいだし、正直“きやませんせい”も信用していいか微妙なところだ。“ガキ”はかなり好感情を持っていたようだが、実際どうだか分かったもんじゃない。
ちなみに“オカルトさん”知識は、信用できないと結論した。

これについては、おれも同意見だ。
子供を使って“超能力（サイキック）”を研究する連中なんて信用できるか。

その“きやませんせい”と対照的に、足音を立てずひとりの男が部屋に入ってきた。
正直びびった。

「よーし、じゃあかとう君、部屋うつるからね？」

小児科医特有の、作ったようなやさしい声だ。ただし顔はカエル。
いちおう病院の体裁は整えているらしい。
事務的にベッドの後ろについて、“きやませんせい”とアイコンタクトだけでベッドをさっさと病室から引き出しているあたり、やっぱりプロなのかね。

あと、気づきたくなかったことだが。
ゴロゴロと音たててベッドを動かされるときに左右を見まわしてみたら、ガキの記憶にある顔がいくつか見えた。

どうやら、“ガキ”＝かとう、で決定らしい。
そういえばとベッド天板の名札を見れば、加藤若一という字が見える。

ああそうですか、これが憑依ってやつですか。
……勘弁してくれ。つーかおれの体どこいった。

“きやませんせい”が、ずっとベッドについてきてる。妙に神経質だ。

そういえば、廊下の明かりでＩＤタグが見えたけど、どうやら「木山」先生みたいです。

下の名前は「春生」だそうだ。読み方はわからない。

「……ずいぶん落ち着いているね」

「へ？」

その木山先生がまた話しかけてくる。

「意識もしっかりしているし、ちゃんと話せる。

私なら、ここはどこ？　とか、なんで寝てるの？　とか、ふしぎだろうに。

どうして平気でいるんだろうと思ってね」

それについては、おれが聞きたい。

脳内に電波が二種類も入ってきてそれどころじゃないからだとは思うが、そんなことを言えばまた何を飲まされるか。

まあ“加藤くん”からすれば、おれが電波なんだけど。

あと、どうみても木山先生の方が落ち着いてませんから。

なんて言うわけにもいかず、本音を返す。

「何をさいしょに聞けばいいのか、わからないんです」

「はは、それは私も同じかな」

木山先生は、まだまだ加藤（おれ）くんを使い潰すつもりらしい。

そういえば、どうしておれは木山先生に悪口ばかりなんだろう。おれ自身は彼女と初対面だし、記憶のなかの加藤くんは木山先生をかなり信用している。

なら、もうひとつの電波――オカルトさんが原因か？

どうも“おれ”つまりキビツ意識系は、このオカルトさん思考系にコマンド優先権を持っていかれた“データベースとしての加藤くん思考系”に寄生した外付けハードとして成立しているようだ。

英字の「L」で考えると、一番偉いオカルトさんが縦棒のうえで、加藤くんが縦棒の下。おれは突き出た下横棒の先、墨がたまる打ち止めのところ。

で。

加藤くんの日常の記憶と外付けで増えた“外の世界の記憶”によって、まずこの異常な二重憑依というか三重人格を維持しつつ外界と接触して、問題はゆっくり解決しよう、とオカルトさん知識体系が考えたわけだ。

改めましてどうも、受付の吉備津です。

だとすると、こんなことを移動中にベッドの上で考えられる現実逃避スキルも、たぶんそこからだ。

“おれ”つまり吉備津脱解が大学でもらった東洋学知識によれば、呪術を使うにはこの世ならざるものとの付きあい、あるいはそのフリが必須で、そのためには集中力が欠かせない。

今はその集中力を高められる、いい機会だと判断したんだろう。

……誰の思考回路だよこれ。

まあ集中力といえば、

「木山先生は、なんだかあせってますね」

「！！」

つぶやくと同時に、ベッドが止まった。

木山先生も、前方を見たまま動かない。

……あれ、またなんかやったか？

「困りますねぇ木山さん、被験体を勝手に持ち込まれては」

おれのせいじゃないみたいですね。
妙な安心をしたが、ほかの三人はそうでもないようだ。

「何を勘違いされているのか。私は彼の治療を行うだけですよ」

微妙に上ずった声で、木山先生がそう答える。
いやバレてますって。

こわばった首を動かして、声のする方を見てみる。

男がいた。
木山先生よりはるかに清潔な白衣と顔。
いかにも“わたし科学者です”といわんばかりの外見だ。
そのまわりに、わかりやすい黒背広（メン・イン・ブラック）の男たちが三人。

「治療。ほうほう、それはご苦労なことで。
ですがねぇ、その被験体は書類上、ここにいるはずがない。
元プロジェクトメンバーだからといって、ルール無視は感心しませんなぁ」

「彼は私の患者だ、だからここで治療すべきだ。
しかし、あなたの場合そうはいくまい」

「置き去りの代用はストックされている。
こういう時こそ、資源の有効活用が肝要と思いますがねぇ」

「くりかえすが、彼は私の患者だ。戸籍もある。鼠ではない」

おうおう、木山先生が怒ってる。
まあ他人事ではないので、ちょっと内容を整理しよう。

科学者Aは、加藤くんで実験したがってる。たぶん根回し済み。
科学者Aはもともと加藤くんの“使用”を考えていたが、木山先生が横槍を入れて、加藤くん（と、中にいるおれ）を持っていこうとした。

科学者Aは「そりゃないぜ」と突っ込んだ。
木山先生は「実験は他あたれ」とつっぱねた。

科学者Aは「別のだれか使えばいいじゃん」と抗議した。
木山先生は「おまえこそ別のだれか使えよ」とあしらった。

……いやー、人間性ってなんだろうと思いますね。
子供をモルモット扱いかよ、平凡な大学生だった“おれ”はそう思わざるを得ない。
記憶によれば加藤くんは、幼いながらも諦めの境地に入ってたみたいだけどね。

まあ、怒ったところで、いち被害者のおれに何ができるわけでも

――あれ？

後頭部根元から脊髄にかけて、なにか違和感が走った。

人間が手足を動かすとき、脳から手足それぞれの神経に命令が出ている。

逆に、痛みや冷たさ熱さは、それぞれの神経から脳に送られた信号とされる。

そして時には、ないはずの器官からの“信号”を、脳がわざわざ“受信”してしまう。想像妊娠や幻肢痛という現象がそれだ。

おれは今、それと同じ状況にあった。

両手の指先から、見えない“伸びる手（マジックハンド）”が二本、いや四本出ているような感触があったのだ。

これが“超能力”ってやつなのか？

「規則は規則。たとえ覚醒していようが、私の実験を妨害されるとおっしゃるなら、相応の処置をとりますよぉ？」

「あなたは規則や科学を振りかざすが、自分がそれを無視している。制御実験の貴重な成果。その意味を分かっているのか！？」

「今さら制御実験などと、綺麗ごとをおっしゃられても困りますなぁ。

結局あれが核実験以外のなんでもなかった、という事実。あなたにだけは知らないと言わせませんよぉ？」

お二人の言い合いもヒートアップしてますが、そろそろＭＩＢ連中が動くころだ。

よく考えれば、ふつうにＭＩＢが銃なりなんなりを掃射してればよかったのだ。

それなら、こういう口喧嘩タイムにならずに済む。

人道を捨てた連中ならやりかねない。

……脳内のオカルトさんは「おれもそうする」と結論している。

目覚めてからの一人称「おれ」は、たぶんオカルトさんの記憶が原因だな。

いや、どうでもいいか。

ともかく、何かしらの事情があるんだろう。
木山は（あるいはカエル顔は）殺すな、みたいな。

もちろん、おれがそのあたりを汲んであげる必要はない。
木山先生も科学者Ａも、つまりは加藤くんで超能力関係の研究を進めたいんだろう。
そして、まだ木山先生の方が、加藤くんのことを考えた内容のようだ。

なら、科学者Ａの方で実演してもいいんじゃないかな。
そんな無知からくる悪魔の囁きを、実はいまだにびびっているおれが受け入れても、しょうがないと思う。

「やれやれ、仕方ありませんなぁ」

うん、仕方ないよね。
とりあえずお前ら一発ずつぶんなぐる。

四本の見えない腕を四人の頭にのばした（ような感触を覚えた）おれは、いい加減疲れてきた首をまた枕に乗せて、思いっきり両手の人差し指と中指を握りこんだ。

――ピシャッ。

え？　ピシャッ？

今なんか場違いな音しなかった？　具体的には水がはねたみたいな。

こわばって動きそうにない首をなんとかねじまげて、木山先生を見上げる。

木山先生は、あいかわらず前を向いて黙ったままだ。

「木山先生？」

うわ、ビクッとしたビクッと。

何にそんなおびえてるんだか。

「あ、ああ、大丈夫だ。早く新しい部屋に行こう」

そんな風に言ってくれる木山先生は、たぶん加藤くんを落ち着かせたいんだろう。

本人が落ち着いてないけど。

できれば、こっち見て言ってくれるとありがたいんですが。

あとカエルのおっさん、蒸しタオル顔にかぶせないで。

「あの、息できません」

……無視ですかそうですか。

ともあれ、ベッドは動き出した。

さっきよりカエルのおっさんが力はいってるせいで、ベッドががたつく。

視界が蒸しタオルでふさがれ、今度こそ行き先を握られた。

それにしても、あの“手”は音が鳴るだけの欠陥品らしい。

まあ、すごい能力なら超能力“実験”にかりだされるわけないか。

隠し芸レベルでも超能力を身につけたことが分かったのに、なぜか特に嬉しくも何ともないおれは、

――莫迦め、手本を見せてやる

そんな声を聞いた瞬間、また意識を失った。

前口上の三　Ｈｅａｒｉｎｇ

「架空の記憶？」

「はい」

新しい病室にうつって一週間たった。

大きく日当たりのいい窓に、分厚い遮光カーテン。これぞ入院病棟の大部屋だ。

とりあえず、筋肉の異常衰弱と骨のカルシウム不足がめだつ以外は内科的な病気もないらしく、ただの栄養失調あつかいになっている。

食事は普通にとれるので、点滴もない。

ただ長期間昏睡していたということで、今いる町の常識をおさらいした。

もちろん、おれにとっては全部初耳だけどな！

科学的に超能力を研究してる「学園都市（がくえんとし）」だなんて信じられるか。

文句つけてもしょうがないから信じたふりはしてるけど。

本物の“加藤くん”が『置き去り』――学園都市の奨学制度を悪

用した捨て子なのも、あのとき白い部屋のベッドに並んでいた他の連中が似たような境遇だったのも、だからこそ人体実験に利用されたのも、事実みたいだし。

そこで、おれは木山先生に、大事な話があるといって面談室に連れて行ってもらった。

まだ自分では立ち上がれないので、もちろん車椅子だ。

おれがいたところは「小児用能力教材開発所」というらしい。

もう小児ではないということで、カエルのおっさんがいる病棟に移された。

開発所系列の病院はもちろん抵抗したが、木山先生の肩書き（脳生理学者だそうだ）とプロジェクトメンバーの資格、そして

「これまでロクに追跡さえしなかっただろうに」

という追撃が決まって、今にいたる。

まあ、実際のところ加藤くんの実験を主導していたクソジジイが雲隠れしている上に、目覚めた加藤くん（要は“おれ”）の能力がカケラも発達しなかったので、えらい人たちが放置を決めたらしいんだが。

本当に放置してやがったからな、あいつら。
内科的な病気はないが、外科的な病気はできていた。

右のふくらはぎに“床ずれ”ができて、グロ注意になっている。
半径一センチほどの半球状に肉が腐り落ちて、今ではそこだけ真っ赤なクレーターが開いていた。
清潔にしろと言われているが、治る見込みはなく、単純にクレーターが広がらないようにするための措置だそうだ。

木山先生がどこからか入手してきたテーピングの補助伸縮力で、いちおう本来あるべき筋力は出せるようになったみたいだけど、今度はそのテーピングの正体が気になっている今日この頃。

なんだっけ、バネ包帯だっけ。これの名前。

ちなみに加藤くんの本名は加藤若一（かとうじゃくいち）、十一歳。
誰かに憑依中。どうみても厨二病を患っております。

>i21811—2938<

おれが木山先生に話そうと思ったのは、“記憶”のことだった。

ここでゲロッとかないと危ないのだ。

先生は脳の専門家で、おれより加藤くんのことを知っている。

彼女も加藤くんを“唯一の生き残り”として特別扱いしている面があって、いろいろ突っ込んだ質問なんかもされる。バレるのは時

間の問題だ。

さらに、下手したら他の医者が独自に感づいてしまう。
それは絶対にまずい。
小学生ひとりを、ＭＩＢ三人がかりで持ち出すやつがいる町だ。
病院におれを研究したいバカがいないとは限らない。

とはいえ、憑依などと正直に話せば、こんどは木山先生がおれの脳みそに電極を刺しかねない。
加藤くんは否定しそうだが、“オカルトさんの常識”ではそうなる。
おれも同感なので、いまは加藤くんのふりをしている。

ありがたいことに、彼の性格が助けてくれた。
彼は引っ込み思案で、記憶の中でも話しかけられないと声も出さなかった。

施設へ来る前は少しだけ能力が発現していじめられ、学園都市では逆に能力が伸びずにからかわれていたらしい。
木山先生が回診に来たとき持ってたカルテには、そう書いてあった。
不安人格障害（ＡＰＤ）とかいう記述もあったが、見なかったことにする。

だからこそ、おれが自分から木山先生に「話したいことがある」

と言い出したことで、彼女もことの重大さを勝手に推測してくれたわけだ。
じっさい重大だけどさ。

「ふむ……身に覚えのない記憶とは面倒だ。
その“キビツさん”と“オカルトさん”は、きみに話しかけてくるかい？」

「話しかけてはきません。
でも、ときどき映画を見てるみたいになります」

というわけで、カウンセリング中。
オカルトさんの名前は、“キビツさんの記憶”からつけたことにした。
本当なんだからしょうがない。

「というと？」

「ベッドに座ってると、目が覚めてるのにいきなり夢を見ます。
このまえはキビツさんが、みんなの前で宿題を発表してる夢でした。
魔法を信じてたえらい人たちの話でした」

これはうそだ。
白昼夢は見たが、加藤くん視点の夢だった。
掌にのせた葉っぱを浮かせようとして、丸めてしまった。
あれはあれですごいと思うんだが、他のガキどもに大笑いされた。
加藤くんがんばれ。

ちなみに“キビツさんの宿題”は実話だ。
おれの三回後期ゼミ発表である。

「それは、どういう話だった？」

木山先生は発表の内容まで書きとめる気だ。
脳機能障害のサンプルにでもするんだろうか。

「むかしの人は魔法を信じていたから、法律をつくって魔法使いをやめさせようとした、みたいな話をしてました。あと役人しか魔法を使っちゃいけないようにしたとか、それで魔法使いの役人が町にある魔法使いのお店をやっつけたとか」

これも、おれが調べた限りでは史実だ。
“魔法使いの役人”は安倍晴明（あべのせいめい）、やられ役は蘆屋道満（あしやどうまん）という。
後に晴明が物語の主人公、道満はボスキャラになった。

後で知ったが、なにごとにつけて科学万歳の学園都市では、安倍晴明は陰陽師ではなく天文学者として知られている。

「なるほど。では“オカルトさん”目線の夢は？」

「えっと、あまり見ないんですけど……」

ここが重要だ。

オカルトさんは、名前の通り魔術関係の知識が、多く脳内に流れてきている。

その真偽はともかく、白状すれば妄想あつかいだ。

最悪、人格統合の名のもとに、彼にまつわる記憶を消されかねない。

というわけで、こういうことにした。

「たぶん、あの人はレベルがかなり上の、超能力を持ってます」

「どうしてそう思うんだ？」

「そういう夢ばっかりなんです」

これも実話だ。

オカルトさんの夢は、魔術の実演が主だった。
女をさらったり、空を飛んだり、二二六部隊に協力したり。
暴走族と喧嘩したり、火山爆破したり、地震起こしたり。

……制服制帽黒ブーツで暴れまわる夢を見て、こいつ楽しそうだなと思った。

だが、よくよく考えてみると、だいたい力場を発生させている。
女をさらうときは家の屋根を引っぱがして空中から乗りこんでいたし、空を飛ぶのは念動力の典型。暴走族のとき手から出した光線は、おれの見えない手の進化系に見えた。

「……みたいな感じで。
あと時々、わけわかんない字を書いてました」

「“わけわかんない字”？」

「はい。頭の中ではちゃんと文章を書いてるつもりなのに、夢でオカルトさんが書いてる字はぜんぜん違うんです」

我ながら痛々しいが事実だ。
時代が買った言い回しを漢字や記号に直しているので、とても読みにくい。

「書いてみてくれないか」

うわあ、木山先生の目が輝いてる。
脳の動きと聞いて黙っていられなくなったか。
いちおう、目の前に突き出された紙に、覚えているところだけ書いてみる。

『二二八八〇十二一八〇』
意味は“富士山は快晴”。

『三四三四三四一津九ノ?三』
意味は“太陽と月を見て暦を求めよ”。

『万二一十和天二不成千?一十一津二成天?ノ九二三四千天九四十』
意味は“ドイツとイタリアは先に降伏し、日本が集中攻撃される”。

「……ふむ」

紙をちらりと見て、考え込むそぶりの木山先生。
親身になってくれる、いい先生なんだよな。
あと“あの悪癖”さえなければ。

いちおう、ただの誇大妄想と言われないように、先手を打つ。

「ひょっとしたら、全部ただの夢かもしれませんけど。
でもオカルトさんは、僕が思いつかなかった能力の使い方が多くて」

「なに？　どういうことだ」

食いついた。

「僕だったら、石を浮かせて投げるとか、そういう風に使います。
でもオカルトさんは、見えない竹馬とかひもをつくって、それを操ってるんです。
あと、周りを暗くしてました」

ここから、ゴマカシの仕上げに入る。

「……それは、ありえない。
多重能力者はありえない。“頭がパンク”するからね。

私もきみに、そう教えたはずだが？」

念動力とは別に、光を操る能力もある。両方をかねる能力者はいない。

これは常識だ。そうでなくても、専門家の言葉は重い。

だからこそ、加藤くんのセリフが説得力をもつ。

「僕もそう思いました。そしたら、オカルトさんが
『光でも物に当たれば跳ねかえる』
みたいなこと言ったんです。
たぶん念力で、理科で使う遮光板をつくったんだと思います」

正確には、遮るのは片側から入った光だけなので、マジックミラーのようなものだったのだが。

車いすでベッドまで送ってもらい、妙に焦りながら木山先生が出

て行ってから、いつものようにベッドの上でぼーっとしていると、いつものように夢を見た。

今日はオカルトさんの夢だ。

オカルトさんも加藤くんも、夢を見るたびに彼らの記憶が鮮明になってくる（頭の容量的に大丈夫かと心配になるが）。面白い夢だとありがたいのだが、ときどき胸クソが悪くなるような内容だったりつまらなかったりする。

加藤くんが偶然、移籍した子どもの末路を聞いた夢はきつかった。リアルに頭がパーンしたとかいう話を笑いながらしゃべる大人の声を聞いて、加藤くんは悟りを開いたらしい。

あと、オカルトさんが重傷を負い、寝たきりになって延々レバーばかり食べてた夢は、はてしなく味気なかったと言っておく。

今回の夢は、バトルシーンだった。

オカルトさんは明治の後半から、東京の龍穴（パワースポット）を活性化させ、その力を使って日本政府の象徴である東京に復讐しようとしていた。

まず、その影響を受ける女の子“ユキコさん”をねらう。

ちなみに、ユキコさんは三人目の被害者だ。

以前“タツミヤさん”と“ユカリさん”の兄妹をねらい、どちらも失敗。

ユキコさんはユカリさんの長女だ。

……こりないな、オカルトさん。

だが今度は、タツミヤさんの妻“ケイコさん”の妨害が入る。

ケイコさんは東京の地龍（エネルギー）を鎮めたいらしい。そのエネルギー自信を神格化した相馬俤神社（そうまおもかげ）の巫女さんだそうな。

オカルトさんとケイコさんは、何度かユキコさんをめぐって近所迷惑なバトルを繰り広げており、今日もユカリさんを操ってユキコさんをさらおうとしていた。

ユカリさんを拉致したとき、オカルトさんは彼女と精神的リンクを構築ずみで、彼女を代理に使って魔術っぽいことをやっている。

勘違いされるだけあって、ユカリさんにも資質はあったらしい。

ただ、おれの関心はそこにはない。

前の夢で何度か、ケイコさんがオカルトさんに叫ぶときがあった。

「カトォ――――ッ！」

と。

疑問がわいても仕方ないだろう。
実はオカルトさんの本名は“かとう”ではないか。
フルネームは“かとうじゃくいち”なのではないか、と。

だがしかし、そうだと思ったところで、まったく対策はない。
実際にオカルトさんと加藤くんが同姓同名だから、どうなるわけでもない。
このふざけた憑依合体（笑）の真相がわかるわけでもない。

何より、ふたりが同姓同名ならば、なぜ“おれ”すなわち吉備津脱解の意識が加藤くんの体に乗り移ったのか、その説明がつかない。

「わからんな」

夢を見ている最中なのに、ぼそっと呟いてしまった。

うん、分からない。
分からないことは、考えないでおこう。
ただでさえ、学園都市という単語に聞き覚えといやな予感があるんだから。

そう独りぎめした瞬間、ケイコさんが投げた札が額に直撃。
札の上で“急急如律令”の文字が光り、オカルトさんが舌打ちして夢は終わった。

――憑霊が、愚かなことだ

――しかし事実であるから仕方がない

――原理はない、理屈もない、ただ現象だけが起こる

隣のベッドの子いわく、おれは寝言でそんなことを呟いていたらしい。
また非科学的な。さすがオカルトさんの夢というか。

数日後、おれのカルテに“解離性同一性障害（DID）か”と小さく追記されたのは言うまでもない。

この一言のせいで、おれの退院は伸びた。

まあ、おかげで二月後に病院を出て（なぜか木山先生が指定した）マンションへ向かうころには、栄養失調も治っていたんですがね。

その間ずっと、あの読みにくい謎文書を書かされつづけていた俺は、そんなことに気を回す余裕はなかった。

……ちなみに。

おれの入院代から服代から、すべてを木山先生が立て替えてくれており、その合計額（主に入院代）が平均的サラリーマンの年俸を超えると知ったのが、そのマンションで郵便受けにねじ込まれていた領収書コピーの束を見たときで、ついでに言えばそこは木山先生の（ほとんど住んでいた形跡のない）私宅だった。

どうすればいいんだ、これ。

この一件からもわかることだが。

木山先生は、おれの身柄についてかなり心配している。暗部、と総称されているらしい、学園都市えらい人子飼いのエージェント集団がいて、彼らがおれを処分あるいは実験したいと思ったときは、そいつらが迷わずおれの喉首かっ切ることになっているのだという。

ちょっと信じがたいが、木山先生は命の恩人だ。それに科学者ＡとＭＩＢの例もあるので、笑い飛ばすわけにもいかない。

そもそも、たかが十一歳の子供にそんなことを話してくれる方がおかしいのだ。

おれに打ち明けてくれたのは、“架空の記憶”によっておれの精神年齢が強制的に引き上げられたと考えられ（子供のフリって難しいです）、そしておれが若干ヤケぎみに彼女を問い詰めたからだろう。

よく考えてみれば、あれも答えはビンタ一発で済んだんだよな。

木山先生もよく教える気になったもんだ。

「言わない方がおおごとになると判断した」らしいが、意味が分からん。

まあ、なんにせよ。

“加藤くん”を乗っ取った“オカルトさん”に憑依した“おれ”＝吉備津脱解、という異常事態が、こうして本格的に幕を開けたわけです。

などと思っていたら。

加藤くんに憑りついたおれが初めて経験した身柄の拘束は、強盗でした。

前口上の三　Ｈｅａｒｉｎｇ（後書き）

お読みいただきありがとうございます、河井と申します。
ときどき作中の単語を注釈などしていきたいと思います。

注…
『Ｈｅａｒｉｎｇ』
「事情聴取」。

『床ずれ』
寝たきりなどで姿勢が固定された時、体の一部が圧迫されて血行が止まる病気。
当然、酸素も栄養もいかない部分は腐ってゆき、放置すると骨まで達する。

『不安人格障害』
精神障害の一種。
本当は違うのに、自分はどうしようもないダメ人間で、周りに迷惑をかけてばかりだと思いこむ。
失敗を恐れて人と交流しなくなり、人間不信や自閉、引きこもりなどの症状が出る。

『解離性同一性障害』
精神障害の一種。
つらい記憶から逃れたくて、その思い出をだれか別の人の経験だと思いこみ、本当に“他人”が脳内に生まれてしまう。いわゆる多重人格。

“加藤くん”に関しては、もちろん違う。

幕明　郵便局

中一になった今だから言える。
木山先生に土下座して頼みこんで、安い下宿を借りたり自炊したりして、金の大事さを再認識した今だから言える。
いや、独立採算と下宿は木山先生的にも（加藤くんがやられた実験とのつながりを隠す意味で）賛成だったらしいが、ともかく今だから言える。

この強盗犯バカだ。

なんでわざわざ郵便局なのか、その根拠を問い詰めたい。
もっと値打ち物がありそうな場所はたくさんあるだろ。
費用対効果という言葉について、今なら徹夜で語れる。
ああ、語れるとも。

どうも、加藤若一（かとうじゃくいち）です。
強盗事件の人質になったことがよほど自分でショックだったのか、おれは局内でそんな現実逃避をしていたのだが、これも多分にオカ

ルトさんのおかげが大きい。

オカルトさんは、おれに知識とその運用法としての記憶を残してくれた偉大な人だが、やっていることはとても褒められたものではない。

自分の邪魔をする人間は殺す気でかかっている。

相手がどれほど俗世の権威や権力をもっていようがお構いなしで、弱い者いじめもよくやっていた。

そんな人の思考回路が一部移植されたおれも、犯罪への忌避感が弱い。

“手早く稼ぐ方法”という認識すらある。

そんなおれが未だに少年院へ送られていないのは、自分にはその実力がなく、逮捕されれば木山先生も連座させられると自覚しているからにすぎない。

いや、わかってますよ。

自分で言ってて厨二乙と突っ込みたくなりますよ。

しかしオカルトさんという外付けＨＤと肉体年齢が合わさった時点で、そうなるのは仕方ないと思っておきたい。

でないと恥ずかしくて。

それはともかく。

そういう自分の精神構造に少し酔ってるおれは、

「ったく、アホか」

柿のような色のジャンパーを着た二人目の強盗犯に驚いていた。

＞i21811―2938＜

これだけだと、おれが少年院予備軍どころか精神科病棟予備軍になってしまうので、とりあえず状況の説明。

場所は郵便局。
まず、緑のニット帽をかぶった男がピストルで威嚇。
典型的カネカネキンコの瞬間、赤みががった茶髪をツインテールにした女の子がその男に突進していった。
誰が動く間もなく、女の子は男の左足を床に縫いつけ右のひざ裏から脚を払って打ちたおし、肺を圧迫して武装解除までやってのける。
局内の空気がゆるんだその時、柿色ジャンパーの登場。

と、いう流れがあって今に至る。

ちなみに男にしては髪が長いジャンパーの彼は、左手をそのポケットにつっこんだまま、右手は果物ナイフを持っている。
そのナイフの切っ先は、彼が捕まえたのであろう別の女の子に向けられていた。

「なーにガキに伸(の)されてんだよ。使えねぇ」

自己中心主義を前面に押し出して、ジャンパーがぼやく。

ニットの彼には申し訳ないが、ジャンパーの気持ちはわかる。
これで郵便局なんてケチくさいターゲットを選ばなければ、おれは一も二もなく同意していただろう。
ジャンパー主導の犯行なのは間違いなさそうだし。

こういうことを考えているのが、目の前の非情な現実から目を背けたい一心からなのは言うまでもない。

“伸びる手”を使うことも、英雄願望ある男の子として考えた。
しかし、どう使えというのだ。
今おれの“手”は音を鳴らす以上のことができる。
だが、人質の子に傷をつけずにジャンパーからナイフをもぎ取れるかと言われれば自信はない。
“手”を四本まとめて使えばジャンパーひとりを引きずり倒すぐらいの力は出るが、だいたいナイフを奪っても犯人はまだ動けるし、かといって転ばせると女の子が危ない。

「ういはるっ！」

茶髪ツインテールの女の子が叫ぶ。

先ほどまでの意思と余裕はどこへやらだ。
それに気づいたのは、何もおれだけではない。

「ありゃ、おまえの知り合いだったのか。
……ふーん、こりゃ好都合」

そのタイミングで感情丸出しにすれば、まあバレますよねという話。
ジャンパーも鈍くはないようだ。
おれ？　膝がゲラゲラ笑ってますが何か。

「おっと、動くなよ？」

一瞬で攻守が逆転した局内で、ジャンパーの一人舞台が出来上がりつつあります。

「おまえ、『風紀委員（ジャッジメント）』か。
『風紀委員』が人質を見捨てるわけねえよなぁ？
ましてや、自分の知り合いを」

重犯なのか、相変わらず落ち着いているジャンパー。
郵便局の入り口付近に立ちっぱなしのおれには、少々目障りになってきた。

うん。
もちろん、相手を見下して精神的な均衡をとっているだけなのだが。
実際のところは怖い。とにかく怖い。

ちなみに。
『風紀委員』というのは、学園都市の治安維持組織のひとつだ。
その名のとおり能力者の学生が自警的に行っている活動で、おもに学校内部で行動している。逮捕拘禁は、また別のグループが行うらしい。

よし、現実逃避完了。

「ほかにも仲間がいるんじゃねぇのか？
出てくんなら今のうちだぞ」

ジャンパーのセリフ。
自分が優位にあるうちに、能力者の位置をあぶりだしておきたいのだろう。
ほぼボランティアの『風紀委員』には正義感が強いものも多く、最悪人質にした女の子に顔を傷つければ、すぐに名乗り出そうでは

ある。

が。

ジリリリリリリリリリリリリ……！

その機会は永遠に失われた。

その非常ベルはだめだ。

警察に直接通報が届くならともかく、火災や危険物用の店内に響きわたるようなベルを今頃鳴らしてどうする！

ジャンパーが暴走したら、真っ先にやられるのはこっちなのに。

カウンターの傍にいた眼鏡のお姉さんも渋い顔をしている。

あいつ絶対『風紀委員』だろ。

などと思っていると、いきなりガラガラッと音がした。

振りかえった視線の先にあるのはシャッター。

「……あぁ？」

ジャンパーのうなり声が遠い。

オーケー理解した。
ここの郵便局員ども、客に関しては何も考えちゃいない。
なにしろ

『セキュリティ信号を受信しました。
侵入者を排除します。
武器を捨てて、床に伏せてください』

客がまばらに立ってる状態で、警備ロボットなんて繰り出すんだからな！

シャッターの件がなくても確定だ。
次来たらまっさきにゆうちょ解約しよう。

「……チッ、めんどくせえ」

ジャンパーがポケットを探る。
明らかに人より強いロボットにも全く動揺しない。隠し玉がある
な、とオカルトさん回路が脳内で警報。

『警告完了。実行します』

警備ロボットが、三本の歩脚で“立ち上がる”。
その後ろで腰をかがめるツインテール。

何をする気だ、って

「おい！」

あのガキ走り出しやがった。
ロボットにくっついて行けば安心だとでも思ったか！
肩書きは『風紀委員』でもしょせん小学生か。ジャンパーが警備ロボット見て眉一つ動かさなかった理由を考えてみろって……

ジャンパーが、なにかを放り投げた。
パチンコ球か？

その球はなぜかゆっくりと“等速直線運動”をはじめ、
そこに警備ロボットとガキが

猛スピードで

つっこんで

ロボットが破損

“手”が
火花
出て

爆風が収まったあと、そこには上半分が吹き飛んだロボットの残骸があった。

「おっと！　……なっ！？」

ジャンパーの声。
何に驚いているのやら。

……ってあれ？

いない。
ガキが。
そしてカウンターのお姉さんが。

結局その身を砕いて迷惑にしかならなかった警備ロボットの破片は、かなりの広範囲に広がっていた。
近くにいたものは、何かしらの傷を受けたはずだ。
そのふたりが消えている。

能力犯罪者確定のジャンパーが右を向いた。
カウンターしかない。従業員が肩をすくめる。

「ひいっ」じゃねえよ。
おまえら局員のダメな判断のせいで、今こっちは閉じこめられてんだぞ。

左を向いた。
おれしかいない。
だからそんなに睨まないで下さいよ。
おれ何もしてませんよ？

「おいガキ」

「……あえ？」

だから何でおれなんだよ。
だからそんな目を据えるなっての。
自分の顔が引きつっていくのが分かる。一番やばいのがめくれあがった唇で、見ようによっては威嚇しているようにも取れてしまう。
さっきの浮き球を見るに、ジャンパーがおれより上の能力者なのは間違いない。
わざわざおれみたいなチンケな相手に

「せんぱい！」

すぐ左から声。

……は？

首の後ろから背筋にかけて冷や汗。
嫌な展開だ、それも非常に。

もういい認めよう。
ああそうだよ、いい加減気づいてたよ。
視界の左端から前方に、二本の足が出ている。
消えた連中のことを考えれば、それが誰の足か、少なくとも誰の足でないかは推測するまでもない。

……どういうことだ。
ガキとお姉さんが、どうしておれの隣にいる？

「やっぱり仲間がいたか……
　さっきやられたバカみてえに、俺もやれると思ったのかよ？」

おうおうジャンパー怒ってる怒ってる。
ついに人質の女の子からナイフを離して、直接手を握りだした。
そんなことを考えている場合ではないのに、おれはくだらないことしか考えられない。
つーか、その相手がどうしておれなんだ？
おれは『風紀委員』でもなんでもないってのに。
思わず舌打ち。聞こえないように愚痴をこぼす。

「なんだテメェ、この状況からケンカ売ってんのか？」

「い、いやいや滅相もない。
つーかなんでおれなんすか？」

反応されたし。
震える声で言い訳を試みるが、成功してないだろうな。

視界の端で足が動く。

いや、ケイレンというのか。
何にせよ非常にまずい。今ジャンパーのタゲは間違いなくおれに向いていて、かんじんの『風紀委員』はお姉さんが何らかの内傷、ガキの方もそれにショックを受けて動けないようだ。

ふたりが小声でぼそぼそ話しているが、知ったことか。
おれの身すら守れそうにないのだ。ふたりには自力で行動してもらうしか

「うおっと!?」

ジャンパーの足が背後の窓ガラスにぶち当たって震える。
逃避している間に間合いを詰められた。
バカかおれは。

「っのクソが!」

毒づくジャンパー。
思わず頭をひっこめた自分をほめたい。
さすが大人、ふつうに中段キックでおれの頭狙えるわけだ。
じゃなくて!

カウンターの方へ駆け出し、振り向きざまに“手”をのばす。
ジャンパーの左を回りこんで後頭部へ。

おれはオカルトさんの影響もあって、古いことを信じるたちだ。
ロン毛よ思い知れ。

「ぐぁっ、なんだ！？」

調子に乗っていたジャンパーの間抜け声で、知らずほくそ笑む。
物理的に“後ろ髪を引かれる”痛み、たまにはチンピラ（おまえら）の側が味わってもいいだろう。
中学に入ってから、よくこれで捕まったもんだ。財布目当てに。
何か声が出たような気がするが、覚えていない。

後頭部を引っぱられ、バランスを崩すジャンパー。
つられて姿勢が崩れる人質の女の子。
彼女の足を、お姉さんの下から這い出してきたツインテールのガキが掴み――

消した。

「いっ！？」

そこで驚いたおれは悪くない。そのはずだ。
ただ道徳的にどうでも、その場の状況的には明らかによくなかったのだろう。

状況を深く考えていないジャンパーが

「なめんなっ！！」

おれの腹にブーツを叩きこんだ。

覚醒は痛覚と同義だった。

……などと脳内でカッコつけながら体の痛みをなだめてゆっくり目を開けると、痣がいくつか増えているツインテールのガキに向けて、ジャンパーが何やらご高説を垂れていた。

自分の能力でも自慢しているのだろうか。

かすむ目でその光景をぼんやり眺めていると、左足に電気が走ったような感触が。

ジャンパーに追加攻撃を食らったらしい。

マジいてぇ。

ここにきて負傷。

……というより、結局おれは何をしていたんだろうか。
先ほどの人質が消滅したあれは、おそらく空間移動（テレポート）か何かだろう。
ということは、役立たずの警備ロボットが爆発したときに『風紀委員』ふたりがおれの方へ逃げてきたのも、それが理由になるはずだ。
あの時とっさのテレポートで郵便局の外へ移動しなかったのは、プロ意識のなせる業か、それとも本当にとっさだったからか。

で、おれが目をつけられ、後ろ髪を引いて蹴飛ばされ。
恐らくは今、足に何かの傷ができているはずだ。
床ずれ部分がじくじくする。

なんという無駄な英雄精神の発露。
一番あとで怒られるパターンじゃないですか。どんだけ浮ついてたんだ。
オカルトさんの補正があってこれだ。情けないといったらない。

金属音。
何かと思って顔を上げれば、正面のガラスとシャッターが引き破れ、大きな穴が開いていた。
その穴の周囲に向けて、パチンコ玉が飛んでいく。

ああ、あの等速直線運動か。

そこまで考えて、オカルトさん回路が動き出した。
なぜか知らないが、オカルトさん知識体系は変なところで働く傾

向がある。今回もその状態なのだろうし、そういうものだとこの二年で諦めてしまった。

しかし、その結論はつねに示唆に富んでいる。

「……これからは俺と組まないか？　俺とおまえが組めば無敵だぜ、どうだ。

“俺を手伝えば、全員解放してやるよ”」

もってまわった言い方で、ツインテールを脅迫するジャンパー。

中学生や小学生を踏んづけて笑っているような輩が、そもそも口約束を守るわけがないのはともかく、いきなり組もうとはどういう要求なのか。

あまり想像したくない。

やはりオカルトさんの手に乗るしかないようだ……

「ずぇ～ったいに、お断りですの」

……おっと。

そうきたかツインテール。

ジャンパーの動きが止まる。これこそ好都合というもんだ。

「仲間になる？
　あいにくと、郵便局なんか襲うチンケなコソ泥はタイプじゃありませんの」

ツインテールの追撃に、ジャンパーが口をねじらせている。右ポケットが動いた。
いかんな。今は“手”を出すのに都合がいいはずなのに、なぜか腹の底から笑いがこみあげてくる。
いいぞチビもっとやれ。

「それにわたくし、もう心に決めてますの。
自分の信じた正義は、決して曲げないと！」

だめだ。
もう耐えきれない。

「……そうか、残念だ。
なら」

バリバリッ

ジャンパーが格好つけたその瞬間、いい音を号砲にしてざらざらとパチンコ玉が床へ流れだした。

ポケットにパチンコ玉が詰まっていて、それを能力で武器にする。ならば、パチンコ玉を取れないようにすればいい。

よしんば手に取る以外にやり方があるとしても、散乱するパチンコ玉の一つ一つを軌道演算して操れるなら、もうやっているはずだ。

そして。

おれの“手”を四本総動員すれば、今なら大人ひとりを引き倒すこともできる。

それだけの力が瞬間的に出るのなら、

「……なんだと？」

ジャンパーのポケットを破りとることも。

握られた指をこじ開けることも。

結果として、ジャンパー手持ちのパチンコ玉を床へ引き流すことも。

不可能ではない。

結局、おれは我慢しきれなかった。

パチンコ玉が郵便局の床に散らばってゆくのを見ながらおれは大

笑いをはじめ、それは目を血走らせたジャンパー男が内ポケットから拳銃を取り出した直後、その銃口がシャッターの大穴からさしこまれた電磁流によって溶けるまで続けられた。

おれが電磁流の正体を理解するのは、年を越してからになる。

ところで、事件直後の話だが。

おれが電磁流とオゾンで気絶したあと、ツインテールチビのおかげでジャンパーは無事拘束されたらしい。

その後、くだんのチビ（白井黒子（しらいくろこ）と名乗った）によって『風紀委員』支部に連れこまれ、不必要な介入で無駄なケガを負ったダメな例としておれがさんざん説教されたのは、はなはだ余談である。

……人のこと言える立場かっての。

幕明　郵便局（後書き）

邂逅編。

幕明補遺　上道田狭（前書き）

「朝廷の使者だと？　笑わせるな。
昔はお互いに肩や肘すりあわせて、同じカマの飯を食った仲じゃないか。今さら使者になったからって、このオレがキサマに平伏するとでも思ってるのか？」

『日本書紀』、筑紫君磐井

幕明補遺　上道田狭

その晩、おれは夢を見た。

これは夢だとはっきりわかる、自分は架空の視点からどこかを見ていて、映画館の最前列にでもいるような夢。

スクリーンに映し出されているのは歴史の考証番組。

テーマは？

決まっている。

これは、オカルトさんの目から見た先祖の歴史だ。

その真偽はともかく、彼はそう信じている。

＞i２３３４６―２９３８＜

さいしょの主人公は、上道田狭（かみつみちのたさ）という男だった。

いかにも奈良時代を思わせる、左右で蝶の羽のように結った髪型に冠、白い官服のいでたちだ。髭が特徴的な中年の渋いおっさんである。

視界に「上道田狭」と字幕が出る。

そんなとこまで歴史番組か。

字幕によれば、彼は、吉備氏という一族の大物だった。
元“吉備津家”の人間としては、なんか親近感。

その田狭さんが、髪をととのえて腰に剣をさし、四方の山をぐるりと見上げてから、高床式の大きな御殿に入ってゆく。

何やら決意した顔で中の大広間を見渡すと、そこは宴席。
焚火を中心に、乾物などの食品が多く並んでいる。

宴は今はじまったばかりのようで、まだ誰も顔を赤くはしていない。
上座にあぐらをかいている、小柄だが気迫がこもった目つきの男が、田狭が入ってきた正面入り口をちらりと見て笑いかけた。
田狭さんは目礼。
……この人とは、あまり仲が良くないようだ。

「おうおう吉備の、何をそんなところで突っ立っとるか。
はようこい！」

そのちょっとした緊張感を打ち破る、しゃがれた声。
声は現代語吹き替えらしい。

オカルトさんのそういう気配りはありがたいんですがね。

宴席の左手奥で、かなり年をとった老人が田狭さんにむけて盃を差し出していた。

とたんに表情が和らぎ、そちらに向かう田狭さん。

あんた態度が露骨だな。

また字幕が出た。

この老人は、葛城蟻(かつらぎのあり)。

古代日本で超がつく名門豪族、葛城氏の総帥だ。

ここで場面が変わり、背景説明。

吉備氏は、その名のとおり古代の吉備国を治めていた豪族で、伝説的な大吉備津彦(おおきびつひこ)を共通の祖先として、また部族精霊(トーテム)として崇めていた。

大吉備は、今ではおとぎ話のモデルとして有名だ。

オカルトさん補正で、お話より精悍な顔になってるけど。

この話では、大吉備津彦と温羅(うら)という男の対決が下敷きになっている。

吉備氏は発達した製鉄技術で大勢力としての力をたくわえていったのだが、最初にその製鉄技術を持っていたのは温羅がひきいる百済(くだら)系の武装難民グループだった。

「ィヤーッ！！」

裂帛の気合いとともに、剣を振りおろす大吉備。
同時に毛皮をまとった大柄な男の肩から、大きな石が転げ落ちる。
いや、石じゃない。
髪とひげがつながったあれは、頭だ。

「鬼ノ城（きのじょう）の温羅、討ち取ったり！！」

大吉備が雄叫びをあげる。
周囲の剣をさげた男たちが、うわーっと歓声を上げた。
大吉備の脇に控えていた、彼と似た顔つきの若い男が、自分の手柄のように満面の笑みで拳をつきあげる。

場面転換。
吉備氏の一族は大吉備ではなく、後を継いだ弟の子孫ということになるらしい。
あの若い方かな。

とにかく弟の曾孫たちが別々に三家をたてて、それが続いてきた。
田狭さんは大吉備を初代とすると、上道流の七代目当主にあたる。
ところが田狭さんは、いま立場が悪い。
大王に対抗できる力と、相応の疑惑を持っていたからだ。

ふたたび宴席。
蟻じいさんが、あの小柄で目つきが鋭い男に田狭さんを紹介している。

「大王（おおきみ）、こちらが上道の若頭領にございます」

「吉備一門にて上道の流れ、田狭と発します。
大王にあっては何とぞお引き立てのほどを」

ムスッとしたまま、頭だけその“大王”に下げる田狭さん。
やる気が感じられない。

それは小柄な“大王”も感じたようで、思わず苦笑いしていた。
その右に控える三人の壮年男性が身構えている。
こいつらが側近か。

「そうむくれるな。
名族のお前としては、新参ばかり引き立てるこの大長谷（おおはせ）の前に連れだされるのは、確かにうれしくないだろうがな」

ずいぶん率直な王様だな。
などと考えていたその時、視界の下に字幕がいくつも出てきた。

中央の“大王”には、大長谷王の表示。
右の三人にもそれぞれ字幕が浮かぶ。

平群真鳥（へぐりのまとり）。
大伴室屋（おおとものむろや）。
物部目（もののべのめ）。

ここまで人物紹介されれば、国史学科三回生としていやでもわかる。
この三人、後にそれぞれが日本の政治を左右する大豪族の先祖になる人々を、まとめて中央政界へひっぱってきた大王。
地方豪族をばっさばっさと切り捨て「大悪天皇」と呼ばれた男。

この小柄な男の名は大泊瀬幼武（おおはせわかたける）。
後に言う、雄略（ゆうりゃく）天皇だ。

字幕。

この時代は天皇といっても、他の部族長とくらべ特別に権威があるわけではない。

議長ポストのようなもので、まだまだ周囲に遠慮せねばならない立場だ。

たとえば、当時の大和は朝鮮南西の百済と強く結びついていたが、吉備氏は南東部の新羅（しらぎ）と関係がふかい。さらに物部氏は、北部の大国・高句麗（こうくり）と取引していた。

それを名実ともに中央集権制度へとつくりかえ、後世になって日本とよばれる政治連合をつくったのが、この小柄なおっさんなのだ。

「それで葛城の、こやつをわざわざ引いてくるとは何の用だ。いよいよ命を狙いにきたか」

雄略天皇こと長谷のおっさんが、蟻じいさんに話しかける。

蟻じいさんも、長谷さんとは仲が悪いようだ。

字幕が流れる。

葛城氏は歴代八人の皇后を出してきた有力豪族だったが、大王家のお家騒動で大王候補のひとりに肩入れしてボロ負けし、数年前に一族が壊滅してからはどん底らしい。

そもそも蟻じいさんも、氏族を主導していた長老がのきなみ殺されなければ、トップに立てない傍流の家系だったようだ。

で、その大王候補を殺したのが長谷さんってんだから、もうね。

もともと長谷さんは、謀略が好きらしい。

田狭さんが彼にマイナス感情をもっているのも、親戚の下道(しもつみち)一族から大王の側に裏切り者が出て、その裏切った弓削(ゆげ)の小衾(おおぞら)虚空の手下たちと大王軍が下道本家を皆殺しにしたからだ。

オカルトさんいわく、長谷さんが虚空をそそのかしたとか。

さすが長谷さん、おれ達にできないことを平然とやってのける！

そこにシビれるあこがれるぅ！

字幕終わり。

「いえ、ここは大王に、人の縁をお見せしたく」

「人の縁？」

蟻じいさんの呟きに、長谷さんが興味津々で聞く。

ふと右を向くと、腰ぎんちゃく三人のうち大伴さんがちらちら外を見ていた。

大伴氏は大王の親衛隊をまとめる豪族だ。

何かあったら、すぐに兵士を突入させるつもりだろう。

ところが、そんな場面を理解しているはずなのに、蟻じいさんは余裕綽々だ。

「ご存知でしょうが、葛城（うち）から吉備（かれ）に人をやりまして。吉備の、毛媛（けぬのひめ）はどうだ、元気か？」

毛媛と聞いた田狭さんの顔に、笑みが戻った。

この人、奥さんに相当いれこんでるんだな。

「ええ、毛媛（つよいおんな）という名前はいかがかと思いまして、稚媛（わかひめ）と名を与えました。

子も無事にふたり育ててくれまして……」

まさかの大王にノロケ。

大伴さんが、安心すればいいのか不敬を怒ればいいのかよくわからない、と気持ちを前面に出して、面白い表情になっている。
長谷さんは若干引き気味。

おれはここまで来て、この夢の状況をはっきり理解した。
これは「日本書紀」にも記された、日本政治史上の大事件の前兆になるエピソードだ。
とりあえず田狭さんは、死亡フラグという言葉を知った方がいい。

オカルトさんの字幕解説によれば。
蟻じいさんは、古い大豪族である葛城氏と吉備氏の結びつき（どうみても政略結婚）を見せつけることで、葛城に手を出せば吉備が出てくるぞと言いたかったらしい。

ところが、長谷さんには別の考え方があった。
地方では朝廷と豪族の影響力が逆転する、それどころか都でも地方豪族が幅を利かせる。葛城や吉備、九州の筑紫（つくし）氏などは、その最たるものだ。そういう体制こそ彼の変えたいもの第一位に他ならない。

つまり、大王家の完全集権体制をつくるには、大勢力の吉備を潰すしかない。
開戦の理由は、これから作ればいいのだ。

弱体化した葛城など、気にする必要はない。

場面転換。

安心のフラグ回収により、田狭さんは任那（みまな）の国司に任命された。

任那。

現代の朝鮮半島南端にあったと考えられる地域だ。

先にのべた製鉄技術などで倭とかかわりの深い場所であり、倭からはかなり距離があるのになぜか日本で発見される文献が非常に多い地域でもある。

政治的意見を抜かせば、任那は大和系豪族たちが支配していたとされている。

鉱産資源にとぼしい倭が鉄鉱石をとるためにも、隣の百済と連絡をとるためにも、任那は生命線だったのだ。

このころ倭と百済は同盟国であり、高句麗から独立した新羅とも手をくんで、高句麗を相手に分の悪い戦いを続けていた。

いわゆる朝鮮三国時代である。

そんなところに大豪族のボスをふっとばせるのも、すでに権力が集中している長谷さんならではの荒技といえる。
吉備が総力をあげて大和に攻め上っても勝てるだけの動員力があるのだ。
しかも田狭さんは単身赴任。
裏があると気づくべきなのは、おれだけではないだろう。

「……すまん。繰り返せ」

あーあやっぱりこうなったか。
額に青筋たてて、使者の口上をリピートさせる田狭さん。
別に耳が遠くなったわけではない。
内容の問題だ。

「はっ。

稚媛様におかれましては、畏れ多くも大王のお目にかない、此度めでたくご婚儀の栄に浴することとあいなりまして……」

「ご婚儀の栄、だと？」

田狭さんが怒る理由はただひとつ。
その理由である、本国からの使者が暗記してきた内容もただひとつ。
長谷さんが彼の嫁を寝取ったのだ。
本人がいない間に権力をかさにきて、根回しをすませて。

「なるほど、なるほど。
俺は大和の族長に、まんまとコケにされたってわけだ！」

田狭さんがどなりちらす。
これでほとんどの将軍に事情がばれた。
と同時に、士気も上がる。

字幕。
オカルトさんによれば、長谷さんにとって稚媛が美人かどうかは

問題ではない。
実際、彼女はそういう名をもらうだけの年齢差がある若い人だったようだが、大和政権にとって今回の暴挙は、弱体化した葛城氏を大王家に取り込みつつ吉備氏にケンカを売るという一石二鳥の手だったらしい。

これが現代なら外交官の出番だろう。
だが、古代の話だ。
貴族どうしのあれこれが、そのまま兵事につながる。

特に豪族には、メンツもある。
今回も、吉備氏の中ボスである田狭さんがここまでされてなにも反応しなければ、たちまち周りの小豪族に見限られ、やはり吉備氏は衰退の道をたどるだろう。

そういう意味で、田狭さんのとった行動は周囲（特に長谷さん）の予想通りでもあり、ある意味ではその斜め上でもあった。

「全軍に告ぐ。
我々はこれより新羅に降る！！」

新羅は百済と同盟を結んでいるが、百済や大和政権と友好的なわけではない。
むしろ経済的ライバルだと思っていた。
百済との同盟にしても、高句麗に一国だけでは立ち向かえないからという単純な理由のもので、中国を統一した唐にいちはやく臣従し百済と冷戦をはじめたことは、文系の学生なら誰でも覚えているだろう。

場面転換。
葛城の地にある、あの大きな高床式の御殿。

「任那はいまや、上道派と反対派の内戦状態です。現地豪族は中立を崩していません。
任那は百済と新羅にはさまれています。上道が新羅と連携すれば、残った我々の部隊は挟み撃ちを防ぎきれません！」

物部さんが力説する。
物部氏はもともと武器をつくり補給する一族だった。そのため王位継承争いでは武器庫っぷりを発揮して長谷さんサイドで存在感を

だし、軍隊として成長してきた。

もとから軍事に強い家系の大伴さんも、しきりにうなずく。

いまや長谷さんの親衛隊長だが、戦争に異論はないらしい。

さらに援護射撃が入った。

「任那が落ちれば、我が国への影響ははかりしれません。対馬海峡を新羅に抑えられれば、もはやどの国とも貿易ができなくなります。貴重な鉄資源の輸入もこれからは新羅の気分しだいでしょう。そうなれば、ただでさえ技術が遅れている倭国は石器時代に逆戻りです」

いまにも泣きそうな顔をしている別の人の下に字幕が出る。

蘇我韓子（そがのからこ）。

大和政権の外交を一手にひきうけている蘇我氏の若きリーダー。

母親が百済人で祖母が高句麗人という、国際色あふれる人だ。

だから彼は、今の朝鮮の状況を分かっている。

半島の北半分を満州とともに高句麗が支配し、南半分を西から順に百済・任那・新羅が分けあっているこの状況では、互いに同盟を結び、また緩衝地帯になっている任那を文明のおくれた倭国が管理することで、どうにか対高句麗連合が成り立っていたのだ。

その任那を新羅が取ればどうなるか。
新羅は喜ぶだろうだが、百済にとっては冗談ではない。

百済は倭をもっとも友好的な国として扱い、今も王子を大和に留学させている。
これはどのみち朝鮮を通して中華と連絡をとるしかない倭に対し、自分たちは裏切りませんよとアピールして倭を自分たちにつなぎとめる策だった。

その倭と百済をむすぶ交通ハブにあたる任那を新羅に取られれば、あたりまえのように倭国は新羅と同盟を結びなおすだろう。

……とまあ、百済の首脳陣はそう考えているはずだ。
実際は親戚づきあいもあるし、百済の言うことに倭国が逆らえるわけないのだが、どうにも文明国の上層部というのは疑り深い。
逆切れして自分たちが任那へ侵攻してもおかしくないレベルだ。

ひるがえって、倭国にとっての任那の重要性は言うまでもない。
任那を奪われれば蘇我さんの言うように貿易が自由にできなくなる。それは任那の主が百済になっても同じことだ。
どちらにしろ、今までより高圧的な態度に出てくるのは間違いない。

それに、小さな土地でも対馬海峡の向こうに飛び地のような勢力圏があったからこそ、大和系豪族が倭国を統一できたようなもので、国内政治的にも絶対に落としてはいけない場所だった。

「ああ分かっておる」

これに対して、長谷さんはテンションが低い。
正直、田狭さんの新羅入りという発想はなかったようだ。
オカルトさんが大笑いしている。

「だが任那に戦上手を出せば、こんどは残された吉備氏が反乱を起こすぞ。
田狭には男子がふたり、どちらも成人しておる。りっぱに軍を率いることもできる歳なのだからな」

「そもそも、なぜ彼を任那の国司などに就けられたのです。
吉備氏と新羅の関係はあらかじめ明らかだったはず」

冷やかにつっこんだのは平群さん。
彼は政治力だけで一族を引っぱってきた出来頭だ。
だが、

「いちおう、織り込み済みだったのだ」

長谷さんの意外な答えに、彼も目を丸くする。

「と、おっしゃいますと？」

「やつが反乱を起こすことまでは考えていた。
新羅が介入したがるだろうことも考えていた。
だがおそらく、やつは倭に帰ってくるだろうと思っていた。
それなら十分に迎え撃てるからな」

取らぬ狸のなんとやら。
狸が虎を呼んでしまったわけだ。

「新羅の介入だけでも危険なのでは」

「あやつらとて、高句麗とやりあっている。いつまでもあの地域大国に背を向けていられまい。百済との同盟も生きていることだしな」

やる気のない声で、長谷さんは答える。

「だが、任那の支配者が自発的に臣従したとなると、話は別だ。
新羅にとっても兵を進める大義名分が立つ。最悪、北部領を高句麗に捨ててでも任那を食いちぎろうとするかもしれん。

鉄も魚もとれるし、暖かいしな」

そのありがたくない未来予想図に、群臣たちが沈黙する中。

「まあ、ケツは拭いてもらおうか」

長谷さんは、ニヤリと笑った。

このどうみても古代史番組にしか思えない夢が、オカルトさんの家系や人生にかなり深く関わっている光景だったと知るのは、半年ほど後のことになる。

幕明補遺　上道田狭（後書き）

はい、唐突に過去編入りました。
このように時々『補遺』と題して、“オカルトさんの記憶”をたどってみたいと思います。
脚注はネタバレになるので自粛。

……次回、やっと本編に入ります。前置き長くてすみません。
まだ始まったばかりですが、感想・評価などいただければ幸いです。

第一話の一　『身体検査』（前書き）

やっと本編。

第一話の一　『身体検査』

七月十六日。

『身体検査』の日である。

身体検査と書いてシステムスキャンと読む。

この学園都市独特らしいルビの振り方がされているこの行事は、もちろん学園都市独特のものだ。

「初ちゃん、これからどうすんべ」

学園都市といえば、ふつう西東京の学園都市をさす。

法律的にはともかく政経軍事的に日本政府の管理下にないその巨大都市は、さまざまな名目をつけて超能力を研究している。その余禄として、科学技術水準を十年単位で先取りするという成果がもたらされている。

また、総人口約二三〇万人のうち約一八五万人が学生という、異常な街だ。

「いや、検査受けようよ検査」

さて、超能力の開発制御を目標にしている学園都市の教育機関では、定期試験の後に、身体検査として学生たちの超能力を“測る”。

能力者は、能力がうむ利益によって強度（レベル）分けされる。
分野は工業的だったり経済的だったり、いろいろだ。
個人の能力はあまり勘案されない。
とはいえ絶対的な物理力をもつ能力は、兵器産業とのかねあいもあってレベルが上がるのが常だ。

「いいじゃねえか、何も変わりゃしないって」

定義上の強度は、レベル0から6まで七段階。
このうち、

――超能力が全くないか、あっても役に立たない『無能力者（レベル0）』
――理論上はありえるらしいが、該当者がいない『絶対能力者（レベル6）』

以上をのぞく五段階が、実質的な能力者となる。
レベルが上がれば奨学金の額も、知名度も上がる。
すなわち実験への協力要請も増え、その研究所や学園都市上層部の金回りもよくなる、というわけだ。

「検査受けないと奨学金でないけど？」

身体検査ではそれぞれが能力向上に励んだかわかるとともに、授業や教育カリキュラムがそれぞれの能力にどう影響するかを調べているらしい。

要するに、みんなそろってモルモットなのだ。

授業する教師も含めて。

ともあれ、身体検査は学生にとっても教師陣にとっても、むろん研究者たちにとっても重要なものだ。

となれば、当日に学生たちの間でどんな会話が交わされるか、言うまでもない。

「う、それは困る。ただでさえ借金しょってるのに」

「そう思うんなら、普段の授業態度を改めるべきだと思うな」

「言うなよ自覚してんだからさ」

……おれについては、そうでもないが。

＞i2181１１―2938＜

どうも、戸籍も確認して正真正銘の加藤若一（かとうじゃくいち）です。
あいかわらず憑依してます。不審者コース一直線です。

まあそれはいいか。

小学校六年の三学期に転校というひどい始まり方だったが、この学園都市での新しい暮らしも三年目だ。
無事に中学校にも入れた。今年はリアル中二。
もちろん、本物の加藤くんはいまだに帰ってこない。
オカルトさんと同じように、夢の中で追体験だけしている。

オカルトさんといえば。
夢の中のケイコさんが、ついにオカルトさんのフルネームを叫びました。
彼はカトーヤスノリという名前でした。ええ。
ヤスノリさんってのもなんか失礼だし、今後もオカルトさんで統一しよう。もっと失礼とか言わない。

「まあまあ、どうせやるんだから今やっちゃおう。
だいたい、検査サボって何するつもりだったのさ」

そう笑いながら、自分も鞄から体操着を取り出しているのは、進級してできた一人だけの友人だ。

名前は、介旅初矢（かいたびはつや）。

茶がかった黒い髪が常設のヘッドホンから伸びて円い眼鏡にかかり、こけた頬が陰鬱さをかもしだす、典型的な外れ組といえる。

人のこと言えないとかつっこまないで。

性格が悪いわけじゃない。

加藤くんの無口無愛想キャラを修正しきれず、ときどき例の謎文字を間違えて書いたり『風紀委員（ジャッジメント）』に経歴をばらされたりしたせいで悲惨な中学生活二年目に突入したおれに、果敢にも唯一話しかけてくれた。根はまじめで優しいやつなのだ。

ハブられ者どうしがくっついたともいう。

最後の部分を説明すると、おれは公式記録に

「能力暴走により昏睡、入院」

と書かれているらしい。

加藤くんの夢でもわかるとおり、学園都市では能力を制御できないやつはレベルがどうでも落ちこぼれ、という意識があるらしく、自分でやったわけでもない能力暴走のせいで、おれはいっそう味方をなくしていた。

ともあれ、いささか以上に軽蔑の念をこめられているものの、お

れたちふたりは周りから“針金コンビ”と呼ばれるまでには市民権を得ている。

初ちゃんこと初矢が眼鏡＝針金。
おれが痩せ形のっぽ＝針金、というわけだ。

ちなみに、おれの背丈は退院以降いっきに伸びた。そろそろ１６０に届く。
昏睡のブランクを取り戻すがごとき成長率です、はい。
下顎も伸びたのは納得いかんがな。髪の色が紺色から真っ黒に近くなったのも。
眉の上と口の下が日光にあたると光るんです。不本意ながら。

さて、彼の能力は『量子変速（シンクロトロン）』。レベルは2。
重力を伝える媒介の重力子を加速して拡散させる能力だそうで、高レベルの能力者なら見わたすかぎりの地面をガラスに変えるという。
彼自身は、マグネシウムを燃やす程度の能力らしい（本人談）。
ただ、おれが彼の能力について話を聞いたとき

「すげえ、リアル重力子放射線射出装置だ」

と呻いた記憶がある。
むかし読んだマンガに出てくる光線銃の名前だ。

それ以来、重力子を一方向に打ちだす練習をしていると言われた。
言いたくないけどこいつバカだ。

そうそう、おれの能力は『遠隔操作（テレキネシス）』でした。漢字は木山先生の作。
めずらしくもないし、意外でもない。加藤くんもオカルトさんも使ってたしね。

レベルは3。
去年の年度末検査で、例の“伸びる手（マジックハンド）”を使って砂袋を二十回連続とんぼ返りさせたのが効いたんだろう。
あれから色々原理を調べて、おかげで素粒子には詳しくなった。
なんでか知らないけど。
そのおかげなのか、今では音をたてる以上のこともできる。

始業式あとの検査で同じことをやったら

「あと何回かできないか」

と担当教員に言われてげんなりしたのも、いい思い出。
できないことはないが、やると下校までに倒れる自信があったので辞退した。

いや、能力って使うと体の他の部分に影響でるんですよ。右足の

クレーターとかね。

まあ何から何まで、オカルトさん知識のおかげですがね。

夢に出てきたとおりに念じてみるだけ。

超能力の発現には、能力開発とともに脳の情報処理能力が必須だそうだが、この知識の持ち主である“本物”のオカルトさんがその道のエキスパートだったらしいというのは、身にしみて実感できました。

彼のような、自然に超能力を身につけた人を“原石”というらしい。

それにしても明治期からずっとバトルの連続だったのに昭和の終わりまで生きるって、どんだけフリーダムなんだあの人。

ところで、初ちゃんいわく

「ジャクはなんか隠してる」

らしい。
自覚はないのだが、以下彼との会話を抜きだす。
ちなみにジャクってのは、おれのあだ名だ。

「ほら、昼休みにふたりして絡まれたことあっただろ」

「あったなそんなこと」

学園都市の治安を一言では表せないが、まず天国ではない。
じつは、レベル0が学生の六割を占めている。
学園都市も、彼らには衣食住に最低限いるだけの援助しか与えない。能力レベルの高い学生は彼らを見下しがちだ。
中にはそういう連中狙いの犯罪者もいる。

そして、能力者ならビクビクしているわけがないという一般則から、実は能力者なのにおれや初ちゃんも狙われるのだ。

「あのとき、おれ『風紀委員』に通報しようとしたよな」

「そうそう、結局来なかったけど。
助けが来ないのは毎度のことだからしょうがないね」

そして、治安維持システムも万全ではない。
能力者の学生でつくる『風紀委員』は武装がなく、教職員が警察の代わりをしている『警備員(アンチスキル)』は人がいないからだ。

自然と、学生生活や凶悪犯罪が優先される。

被害額も少ない低レベル能力者は泣き寝入りするしかなく、初ちゃんのような軽犯罪の多重被害者は『風紀委員』を信用していない。

「言うな、おれたちが惨めになってくる。

まあ、無期限無利息無制限とかさらっと言っちゃう連中の頭もかなり惨めだけどな。

とにかく、それで？」

「それで、じゃないよ。

ジャクが例の“伸びる手”を振って、学校の壁に切れ目ができたんじゃないか。

亀裂じゃなくて切れ目が」

……うん、そんなこともあった。

不良連中や初ちゃんは壁を見て驚いていたが、おれはそれよりビビリ体質が勝ったので、そのあと辺り一帯を真っ暗にして逃げた。

もちろん、オカルトさん謹製“遮光板”の真似だ。

もちろんこちらから外は見えるのだが、日が射す方に外面を向ければ日光が遮られるわけで、逃走用に重宝している。

「でも結局あのあと試してみても、何も出なかったし」

「とりあえずやってみれば？
あれを実演したら、レベル４も夢じゃない」
「ご指摘おおきに。じゃあ次回はやってみようかね」

クラス別に体育館へ入り、列をつくる。
列の先端には、なんだかよくわからない機械が鎮座していて、それで能力適性を測ってから実技にうつるという段取りだ。
おれと初ちゃんが初めて会話したのも、この列だ。
入学式後の初測定で「寒いねえ」などといった程度だが。

学園都市でも、五十音順に出席番号が振られる。
初ちゃんが「かいたび」。
おれが「かとう」。
当然のように出席番号が連続したおかげで、おれと初ちゃんはお互い話をした人間をクラスに作ることができ、出席順の座席にされたおかげで学校でも位置が近くなり、お互いに早くからつるむようになったわけだ。

「よーし次、加藤」

「お願いしまーす」

おれの番だ。

ひとつ前にいた初ちゃんは、早々に適正検査の用紙を受けとって実技会場へむかった。量子変速がどういう分類かは知らないが、校庭でやるらしい。

たぶん、おれもだ。

「よし加藤、座れ」

椅子に一本棒のついた、座高測定器のようなものに座る。

白衣を着たスタッフさんが、腕や頭にさっさと電極を貼りつけてゆく。

「入学式でもやっただろうが、一応説明する。

これで能力のあるなし、あれば種類を検査する。

五分もかからんから、落ちついて深呼吸していろ。

……最高値レベル3か。なかなかだな」

「うい」

おれの中学はエリート校ではない。中堅だ。

だから、レベル3といえば上位にはランクインできる。

おれの“手”をどうやって工業的な利益に変えるのか、おれ自身はいまひとつ理解できていないのだが。

こめかみにピリッと刺激が走った。

検査開始だ。

本当に五分かかった。

念動力（サイコキネシス）と透視能力（クレアボイアンス）に適正があるそうです。

完全に、おれじゃなくてオカルトさんの得意技だけどな。

そして校庭へ行けとの指示。

あたりまえだが、前回と同じパターンである。

念動力は、学園都市ではポピュラーな能力だ。

レベルもピンキリ、念動力といってもいろいろな種類がある。

おれがこれまで見てきた中には、無機物を基盤にしないと念力が出せないやつとか、空気の流れを操って物を動かすやつがいた。

おれの『遠隔操作』は、あまり使い手がいないらしい。ものに思念を送り、それが直接物理的な力になる。

……まあ、“手”の原理は分からないのだが。

ともあれ、ここでも列に並ぶ。
なかには能力を出しはじめてから一分後あたりに値が爆発的な上昇を見せるやつもいるとかで、人の流れが詰まっているらしい。

おれが並んだのは、ハンマー投げのような会場だった。
小さな台が一つあり、その上に砂袋や金床なんかが乗っている。
台の前方には、一定の距離ごとに半円形の線がいくつも石灰で書かれていた。
台の上からひとつ選んで、できるだけ遠くに飛ばすらしい。
今回からはコントロールより射程を見るわけか。

なんて納得していたが、そうでもないようだ。

受検者はそれぞれ能力が違っている。
ある生徒は校庭の土で“腕”をつくり、それで砂袋を投げつけるという荒業に出て失敗していた。
投げる途中で“腕”が崩れたのだ。

さて、おれの番が来た。
初ちゃんには悪いが、“手”は普通に使おう。

「試験のやり方は、見ればわかるな?
念動力で砂袋を遠くまで飛ばせ」

「わかりました」

といっても、“手”はその名の通り手や腕のような働きしかしないから、こういう時はちょっと非効率だ。

だから、またオカルトさんの真似をさせてもらう。

最終決戦のシーンを除けば、オカルトさん視点の夢は一九四五年以前がほとんどだ。

当然、天敵ケイコさん登場より前の夢もある。

まだオカルトさんがユカリさんを狙っていたころ、天皇家に仕えていた陰陽師の一族、土御門家と戦ったことがある。

そのとき、オカルトさんは露骨な念動力を見せていた。

つまり、

左の掌を相手にむけて、念をこめ

押し出す

ドンッ！

ズザザザ……ガシャンッ

……いや、ドンッて。

「……は？」

台から視線を上げて前方にむける。
自分でやっておいてなんだが、ちょっと呆然とした。

あの砂袋、二〇キロはあるはずだ。生身でも中学生、特におれのようなもやしっ子が持ち上げられるか怪しい。
だからこそ、前回は四本の“手”で四隅をもち、とんぼ返りでごまかしたのだ。

それが、まっすぐ前に飛んでいった。
着地点は校庭の端だ。さらに滑走してフェンスにぶち当たっている。

ピ――――ッ

甲高い電子音。
砂袋に埋め込まれていた発信器から、データを受けとった測定機の音だ。
あれ、前回は合成音声が能力を読み上げてたんだが……。

測定器からコピー用紙が吐きだされてくる。
担当教員はその内容をちらっと見て、そっけなくおれを呼んだ。

「……加藤」

「はい」

「測定無効だ。暫定的に『強能力者（レベル3）』とする」

……は？

測定無効？
なんだそりゃ。

「無効、ですか？」

「また後日、場所を広くとってやりなおす。レベルが上がったのかもしれんぞ？もしそうなら、わが校から五人目の『大能力者（レベル4）』だ。しっかりやれ」

「……はあ、どうも」

たぶんおれと同じようにひんまがった、教員の口元が印象に残った。

「めんでえ……」

列から離れて、溜め息をつく。

そりゃまあ、レベル＝ステータスが上がる可能性があるのは愉快だ。

だが、えてしてこういう能力は天井が見えている。体より完成がはやい脳の勝負で、鍛え方もわからない。

普通に考えて上がるわけがない。

しかも、それはおれの成果じゃない。

能力は加藤くんの借り物、使い方はオカルトさんの盗作だ。それも強制亢進のウェイトが大きく、夢の中以外では訓練してない。

だいたいなんなんだ、あの結果。

測定無効だ？　おれはともかく、担当教員すら納得してなかったぞ。

誰か手を回したのか？　だとしたらなぜ？　おれは木山先生の実験しか関わってない。

また科学者Ａみたいのが湧いたか？

それならどうして強制措置を取らないんだ？　検査入院→人体実験の流れが、学校という環境では面倒がないはず。オカルトさん論理いわく、路上で誘拐が一番らしいけど。

実はただの無作為抽出だったりして。

それが一番困る。

どう見ても不安要素の方が多いだろ、これ。

こんなん手放しに喜べるか。

ともかく、意味不明な結末に混乱していたその時。

ドゴォォォン！

誰かの能力で、すごい音がした。

検査を終えた野次馬が、わらわらと集まってくる。
何やら土煙が上がっているし、そのまわりの生徒たちが何人か倒れたり尻餅をついたりしているし、おおごとには違いない。
おれも行こう、と思ったのは仕方ないと思う。

なにせ、まさか

『記録――――
生成消費エネルギー総量１．５ＴｅＶ
量子加速時間１５．８ｓｅｃ／１ＧＦ
重力場持続時間ｕｎｄｅｒ０．００１ｓｅｃ
総合評価３』

そんな測定機の合成音声を聞きながら、たったいま自分が作った直径二メートル弱の穴を眺めているのが、

「……初ちゃん、何した？」

「……これといって身に覚えが」

校内にひとりしかいない、自分の友達だとは、ふつう思わないだろう。

保健室に連行されました。

ええ、ふたりとも。

「あれ、ジャクもなんかやらかしたの？」

「おれじゃなくて測定機がな」

「どうだかねえ。
君って、手足の一本二本なくしても平気そうだし」

「じゃかあしい。
人を見かけで判断しちゃいけません」

初ちゃんのニヤニヤ顔がめざわりだったので、しっしっと手で払う。
それが冗談だとわかってくれるようになったのは、最近のことだ。

もちろん、手足なくしても平気なんてことはない。
オカルトさんはともかく、おれは無理。

まあ、初ちゃんの気持ちもわかる。
『量子変速』は日常生活で使える能力ではない。ゆえに全力を出せる機会は、それこそ大覇星祭（都市合同体育祭。まあ、上位常連校はほぼ固定）か身体検査ぐらいのものだ。

前回の検査から二ヶ月弱。
それだけの期間で急激に能力が成長するのは、まずありえない。
暴走の可能性を自覚していて、不安なのだろう。

特に最近、能力レベルが急に上がったやつがいるなんて噂もある。
犯罪に走りやすい、というオマケつきでだ。
おれと同じで、ひいき目にみてもオタクに分類される初ちゃんのことだ。大手サイトに上がった都市伝説を知らないわけがない。
不安にもなるわな。

「静かにせんか。保健室だぞ」

まあ、それはともかく。

問題は、いま向かいのベッドに腰かけている教頭先生だ。

「介旅初矢、加藤若一」

「はい」

「はあ」

「どういうことか、説明してもらおうか」

こっちが聞きたい。

どういうことなの……

第一話の一　『身体検査』（後書き）

作者の文才がないせいで、どうも一日を描くのに四万字以上かかりそうになりました。

さすがに読みにくすぎるので、これまで通りキリのいいところで区切っていきたいと思います。

言い忘れていましたが、“加藤くん”の世界すなわちこのＳＳは

・『とある』アニメ版に準拠
・一部『とある』小説設定を挿入
・『帝都物語』関係については小説の記述を優先し、ＯＶＡ版も参照
・一部『とある』と『帝都物語』のすりあわせのため捏造設定を挿入

……という、カオスな事態になっております。

それでもよろしければ、これからもどうぞお付き合いください。

第一話の二　ＬＥＶＥＬ３（前書き）

説明編。

第一話の二　ＬＥＶＥＬ３

さて、今さらだが。
白状せざるを得まい。

めずらしいことに、加藤くんやオカルトさんではなく“おれ”、キビツ自身の記憶の中から、学園都市という単語が見つかっていた。

大学三回生、後期の期末試験直前のことだ。
大学院一直線でノートだけはまじめにとっていたため、友人から勉強会にさそわれた。
要するに「オレんち来てノート写さして」の会ですね。

そんなわけだからノートを写してからは、ただの泊まりになる。
就職の話からサークルの話、ついでアニメの話になった。
そこで出てきたタイトルが、

『とある魔術の禁書目録（インデックス）』。

視聴していなかったおれは、盛り上がる他のメンツをながめていただけだったのだが。

うん。

超能力の科学的開発？

マッドサイエンティストの巣窟？

巨大学園都市？

認めざるを得まい。

いま自分がいるこの街が、そのメディアミックスの舞台に酷似しているという点だけは、少なくとも。

しかし、その『とある』という作品がどんなジャンルであれ、ストーリーも主要キャラクターもほとんど知らないのであれば、それは未知の世界と変わらない。

それにバタバタ死人が出るような話なら、自分の身近な人が死ねば主人公を恨みもするだろう。

だからおれは、加藤くんの世界を現実だと思わざるを得ない。

そうでなくとも、みんながみんな腹に一物もって自律的に行動しているという意味で、おれにとってはまぎれもなくこの世界こそが現実だ。

身近にいるのか知らないけど主要キャラクターに好意を向けられる可能性もまずゼロ、それどころか助けてくれる人なんてどこにもいないしね。ラスボスが進めているのだろう何だかよくわからない計画を邪魔せずに、とにかく地味に生きていきたい。

二度目の死はごめんだ。

＞ｉ２１８１１―２９３８＜

いろいろと疑問は残るが、そういう風に思っておけば、今後は楽になるだろう。

そう思ったのが、去年の春。
入学式で噂になっていた、『第三位』について知った時だ。
『禁書目録』の登場人物“ミサカ・ミコト”のことらしい。

有名人ではあるが、まあどうせ関わらないし、別にいいよな。
……という甘い考えを吹き飛ばされたのが、去年の晩秋。

例の郵便局事件のことなんだが。
あの時おれの意識を刈りとった一条の雷。
年明けに、落ち着いて考えてみれば。

ええ、『超電磁砲（レールガン）』です。

弾道周辺の電磁場で、新しく買ったばかりだったスティック状の携帯が死んだのが印象的だった。
説教も食らった上での畳みかけに、家に帰って泣いた。

ともあれ、おれはあの作品をほとんど知らない。
主人公“カミジョーさん”と、彼に恋する人間砲台（バッテリーガール）“ミサカ・ミコト”がいて、ふたりを中心にたくさんの人々が勇気と狂気と損得勘定で世界じゅうを駆けまわるらしい、というぐらいの認識だ。

聞いた話だと、みんなの行動原理に愛はない。
たぶん。

そんなわけで、おれはこの世界の行く末よりも自分の生活を安定させて、できれば木山先生に借金を返して後ろ暗い人々と縁を切りたい。

といっても、そっちも危ないのだが。
今年に入ってから木山先生に連絡がつかない。
携帯の番号とアドレスが知らないうちに代わっていて、研究施設は引き払われていた。
定期健診でカエルのおっさんに聞いてみても、要領を得ない答えばかり。

去年の冬あたりまでは、最低週二回はカエルのおっさんがいる病

院へ通って、何だかよくわからない透析やカウンセリングに忙しかったんだが。
おれから絞りとれる情報はもうないってことか。
それならいいんだが、あの人はよくわからん。
不安要素が増えた。

……さて、現実逃避はこれぐらいにして、教頭の話を聞こうか。

うちの教頭は、基本的に無関心な人だ。
校長の引きで教頭におさまり、教務の先生に全て任せている。
そのはずだったんだがなあ……

「あの、教頭先生」

「なんだ加藤」

「何が“どういうこと”なんですか」

まず、その前提条件から知らないことをアピールしないと。

となりで初ちゃんも全力で頷いている。

これについては責めないでほしい。

保健室に着いた途端、ベッドに座れと指さされ、カーテンまで仕切られた。

危機感を持ってもしかたないだろう。

そんなこちらの気分も知らない教頭は、ひとつため息をついた。

「おまえらはな、わが校だけでなく、通念的にもおかしな存在なんだ」

「え？」

驚きよりも呆れを前面におしだした声は初ちゃん。

いいねえ、初ちゃんもそういう声だせるようになったのか。会ったばかりの頃は声も小さいし目線も下だったが。

……キビツ時代のおれみたいにな！

教頭は、具体例なしでの説明をあきらめたらしい。

舌打ちをひとつして、初ちゃんをにらんだ。

「まず簡単な方からいこう。
介旅、今日の身体検査について述べろ」

「は？」

「だから、今日の適性検査と実技測定について口頭で報告しろと」

「あ、わかりました、わかりました」

ぺこぺこ頭を下げる初ちゃん。
おれもすぐ、やることになるんだろうな。

初ちゃんが話し始める。

「適性検査は、念動力がＡで、あとはＢでした。
実技判定では、その……」

「なんだ早くいえ」

教頭いらついてるな。
落ち着いてください。いらついてるのは、あなただけじゃないんですから。

「何か目にみえる成果を出せと言われました。
それで、量子を一点に集めて、同じ方向に逃がしました」

「……なんだと？」

おい。
何やってんだ初ちゃん。

「ごめん初ちゃん、今んとこもう一回」

「え？　だから量子の集束を変えたって」

「そこを詳しく」

教頭が物理的に頭抱えてる。
おれも抱えたい。

「え、と。
これまで僕は、なぜか量子の流れが見えたので、それを一回集めてから３６０度に拡散させてたんです。
今回それをやめて、集めた量子を一方向だけに流しました」

詳しくは分からない。
分からないが、初ちゃんは今、全世界の素粒子物理学者を敵に回

した。
そんな気がする。

「……初ちゃん、日本語でたのむわ」

「爆竹の火薬を鉄砲につめてみた、みたいな感じかな」

「……だから一方向への威力が上がった、と思うわけか」

「ええ、はい……」

苦笑いする初ちゃんを見て、眉間をもみはじめる教頭。
彼の気持ちも、よくわかる。

本人いわく、彼のもつ『量子変速』能力は、本人が言ったとおり量子（正確には重力子）を加速させ、拡散させることで元素の相互反応異常をおこし、なにかを破壊したり結びつけたりするらしい。

ここでダウト。
重力子は重力の媒介になる粒子で、光速で移動する。
つまり本来以上に加速はできないし、できても認識できるわけがない。

つーか、能力で鉄砲作ったって、それ明らかに練習の成果だよな。
おれの「重力子放射線射出装置」発言に原因がある、例のアレだよな。

くそ、変なことになってきた。

「しかし、それで校庭に穴があくもんかね」

「僕もあれは予想外だった」

冗談半分で飛ばしたワードで、予想外に初ちゃんが釣れました。
そこは流しとけよ！

「予想外だと？」

ほら教頭が噛んできた。

「ええ、まあ。
想像したのがマンガに出てくる光線銃だったからかもしれません」

ちょ、それ言うな！

「……ということは、場合によっては校庭に井戸ができていたわけ

だ」

教頭先生も本気にしないでください！
重力子の“加速”で校庭に穴が開くとか、どんだけ非常識なんだ。

まあ、このへんは屁理屈かもしれない。
超能力の基礎『自分だけの現実（パーソナルリアリティ）』というやつである。

要するに、初ちゃんが

「重力子とは、こういうものだ」

と妄想して、その前提にたって

「おれは『重力子』を加速できるし、その過程で反応をおこせる」

と思いこめば、そういう能力が生まれるのだ。
実際そうやってるし。

教頭も超能力の原則で、脳内の常識をつぶしたらしい。

「……まあいい、介旅も晴れてレベル3だ。
それについては、教頭としてすなおに祝福させてもらう。
いろいろ言いたいことはあるが、まずはそこからだ」

「はあ、ありがとうございます」

「うん。ところで加藤」

はい来ました。

「いったい何の真似だ？」

「……は？」

最近そればっかりだなと、自分で思いながら問い返す。

「すみません先生。
先生のおっしゃっていることが、今ひとつ分からないんですが」

そう声に出した瞬間、教頭が鼻を鳴らした。
おいあんた、さっき初ちゃんをほめてたからいいけど、その態度は生徒に対する教育者としてどうなんだ。

「分からない？
それなら、こいつはどういうことだ」

ばさばさと音をたてて、教頭が折りたたんだコピー用紙を取りだす。
見覚えがあった。

「あ、それ」

「そうだ、おまえの実技測定結果表だ。
これを見て、なおかつ何も知らないと言い張るのか？」

「いえ、検査担当の先生が見せてくれませんでした」

これは事実だ。教頭だって文句は言わせん。
どや顔になりつつもちらりと初ちゃんを見ると、なぜか可哀そうなものを見る目で見られた。
どういうことだ初ちゃん。

「ジャク、本当に何したの？」

「いや何もしてねえって」

さすがに、友人にまで疑われてはたまらない。

「おれは普通に砂袋を『遠隔操作』で飛ばしただけだよ。それが結果も見せてくれないし測定無効とか言われるし、説明ほしいのはこっちだ」

「『遠隔操作』？　加藤は念動力者だろう」

みょうなところに食いつく教頭。

保健室でする会話じゃないな、しかし。

「えーと、入院してた時の検査官さんの受け売りなんですけど。『念動力』は思念で物理的な重力とか磁力とかを発生させて物を動かすもので、『遠隔操作』はその一種なんですが、思念でつくったものが自然物に影響するんだそうです。『念動力』は火力発電で、『遠隔操作』は水力発電だとか」

もちろん、検査官とは木山先生のことだ。

木山先生はとても優しい人だが、常識にかける。
今の発電方式のたとえも、おれが大学生の記憶を持っていなかったら、聞き返していただろう分かりにくいものだ。
まあ、教頭は分かったみたいだな。

この中学校はエリート校ではないので、超能力の分類も大きなものだ。だから、超能力判定は“念動力”で出てくる。
念動力の中でも能力名が分かれるから、珍しくもないらしい。

「……なるほどな。
要するに、おまえは測定中に特別なことはしなかったと。
そう言いたいわけだな」

「はい。何がおかしいのかすら分かりません」

力をこめて肯定すると、納得した顔の教頭が用紙を差し出してくる。

「なら、見てみろ」

よれよれの紙を受け取った。
上下をひっくり返した。
左から、初ちゃんがのぞきこんだ。

「……ジャク、なにこれ」

「知るか」

「本当に何もやってないの？」

「……自信なくなってきた」

そこには、なんともはっきりと、こう書いてあった。

『記録――――
ｅｒｒｏｒ：１０２６
ｔｒａｎｓｍｉｔｔｅｒ　ｌｏｓｔ
ｅｘｔｅｒｎａｌ　ｆａｃｔ，ｐｓｙｃｈｉｃ
ｐｒｅｓｓｕｒｅ，ｆｒｏｍ　ｒｅａｒ　ｔｏ　ｆｒｏｎｔ』

「おまえら、このぐらいの英語は分かるな。
そこに書いてあることの意味も分かるだろう」

教頭の声が、みょうに遠い。

「エラー番号１２０６。
発信器の失探。
超常的外部要因、測定機方向から遠方への圧力。
要するに、測定機は砂袋の発信器をおまえが壊したと、そう主張してるんだよ加藤若一。
言いたいことはあるか？」
「おれが発信器を壊した？」
「おまえ以外に誰がやるんだ」
当然のように生徒を疑う教頭。
ひょっとして前例あるのか？
「いや、壊しておれに何の得があるんですか」

「だからどういうつもりだと聞いている。
過失かもしれんとは言われたが」

「ジャクはまだレベル3ですよ？
砂袋の中の発信器だけ正確に探りあてて壊すなんて器用なこと――」

「レベル4には、不可能でもない」

初ちゃんのフォローをうまく切り返してきた。
教頭やるな。

……じゃなくて！

「ジャク、レベル上がったの？」

初ちゃんが、喜びと失望の入りまじった顔でこっちを見てくる。

ほらこうなった。
本人がレベルアップして喜んでる時に、そういう話を出さないでくれ。

「だから検査無効だったんだって」

「その原因をつくったのがおまえではないか、という話をしてるんだ」

「冗談じゃないですよ！
砂袋の中の発信器を潰すなんて器用な真似ができたら、とっくにおれはこの保健室から脱出できてます」

「だが、故意か過失かさえ把握できておらん」

「そんなわけあるか」

吐きだすと、教頭の唇が下にひきつった。

「まあ落ちつけ、加藤」

となりで初ちゃんが身を固くするのが分かった。
無理もない。
仏頂面の教頭から、まるで落ち着いたふりをするオカルトさんのような、気味のわるい猫なで声が出てくれば、誰だってそうなる。

「無意識下で能力が発動することは、珍しくもなんともないぞ？
たとえば、あのレベル５の『超電磁砲』でさえ――」

え？
そこでミサカさんネタ？

「――自ら常に発する微弱な電磁波のせいで、人間以外の動物には接触すら自重せねばならんそうだ。おまえが過剰反応してもおかしくない」

へえー。
レベル５なんてチートにも、そんなちみっこい欠点があるのか。
オカルトさんの論理では「精神障碍者（しょうがいしゃ）をほめておだてる猿山」の「お山の大将」らしいけど、実際はもっと庶民的な人なのかもしれない。
本当の話かどうかはともかく、そんな噂が立つ程度には。

……と、思わせるのが目的ですかね。

彼女は、実はレベル１から鍛錬をかさねてレベル５までいった努力の人だとか、能力開発後のレベルアップがありうる実例だとか宣伝されている。
学生たちにとって希望の星でもあるわけだ。
今の噂にしても、はるか高みにのぼってしまった彼女が“実は普通の女の子”だと強調するために、誰か偉い人が流したデタラメだろう。
それも、学生の大半をしめるレベル０にとっては“へー、すげー

”で終わってしまう話なのだが。

いや、問題はそこじゃなくて。

「過剰反応、ですか？」

単語の響きが気になったらしい初ちゃんの質問。
つーか、教頭はおれを何だと思ってるんだ。

「知ってのとおり、身体検査で使われる測定機は、ＡＩＭ拡散力場を利用したものだ。
ではＡＩＭ拡散力場とはなにか、介旅いってみろ」

「え、は、はい」

真面目な初ちゃんは、こういう時でも普通に答えてくれる。
つっこみ役としても十分有能だ。

「ＡＩＭ拡散力場は、能力者が無意識に出す力場です。
人間は感知できませんが、一人ひとりが独自の波形パターンを持ちます」

「まあ、いいだろう」

これは中一の授業でやった。
二次方程式を習う年代の子どもに何やらしてんのと思ったもんだ。

「では、そのＡＩＭ拡散力場を生成する要素を、加藤いってみろ」

「はあ。
まず、ＡＩＭ力場は現実にたいする量子的干渉なので、干渉となる運動。
そして干渉を行うための能力レベルと『自分だけの現実』……」

あ。
読めた。
教頭の言いたいことが。

「そうだ。量子的干渉には、その強度とエネルギー源がいる。
そして強度はともかく、エネルギー源とは能力者各自の“思いこみ”だ。
介旅が答えたように、ＡＩＭは千差万別。エネルギー源によって異なる。

つまり――」

「ＡＩＭを解析すれば、『自分だけの現実』がわかってしまう……？」

「その可能性もある、ということだ。
もちろん、そうと知って解析を阻むことも不可能ではない」

第一話の三　災難ふたたび

話がおかしな方向にずれてきた。

教頭は、要するに身体検査の測定機がおれの超能力を解析しようとしたために、おれが過敏になって発信器を壊したと、そう言いたいのか。

いや、でもあの人、さっき

「いったい何の真似だ」

とか言ってたよな。

何について？

「いや、でも、それはジャクだって、わざとやったわけじゃ」

「さっき言わなかったか？」

初ちゃんのフォローがまた潰れた。
むしろおれの墓穴掘ってないかこいつ。

「過失か故意か、まだわからん。
それに知ってのとおり、能力測定は現実への干渉を観測して行われる。
つまり、能力者が全力を出すことが、正確な能力測定の大前提になるわけだ。
なにぶん物理法則を無視する超能力だし、ＡＩＭ拡散力場の測定はうちの機材では不確実なものになるから、能力者に全力を強制することはできない」

……何が言いたいんだ？

「どういうことでしょう」

「つまり、うちの生徒たちの能力は、身体検査で全力を出し切っていることを前提に測定しているんだ。
だが、こればかりは自己申告だ。加藤がこれまで全力を出していた証拠もない。
“実は計測器に異常を引き起こすような能力を持っていた”としても、それをわれわれ学校側が証明することはできん」

おい待て。
アンタどれだけ疑えば気が済むんだ。

「いや、なんですかそれ。
いくらなんでも身体検査で手ぇ抜きませんよ」

「それなら、なぜ前回と今日とで、能力が違うんだ？」

いやいやいや。
能力同じだから。
どっちも“手”使ってるから。

「能力は同じですよ。使い方変えただけで」

「なぜ変えた？」

「前回までは遠くまで飛ばせとか言われなかったんですよ！　砂袋を持ち上げろって言われただけで！
ふつう砲丸投げで、お手玉の態勢ならないでしょ！？」

「いや、じゃあなんで今まで砂袋でお手玉してたのさ……」

「小学校からの得意技だったんだよ！
つーか砂袋で成功したのは今年入ってだし！
初ちゃんはちっと黙っててくれ！！」

＞i218811―2938＜

結局おれと初ちゃんは、午後二時まで帰してもらえなかった。
能力はどうでもよく、検査の影響でここ一週間午前授業になることだけがうれしい一般学生にとっては、もう遊び盛りの時間帯になる。

実際、おれたちが今いる高台の並木道も、ショッピングセンターなどに出入りする若者でにぎわっていた。

「んだよあのクソオヤジ、人がカケラも意識してないようなことまで疑って根掘り葉掘り聞きくさってからに……
初ちゃん、これからどうすんべ」

愚痴の一つも出ようというもんだ。
ちくしょうめ。

「まあ、ここはお互い骨休めしよう。
いま僕らが遊び行っても、有り金全部取られるだけだ。
僕は今日、能力はひねるもんだって学んだし、もうそれでいいよ」

耳かけヘッドホンを装着しながら苦笑して、夢も希望もないことを言うのは、もちろん初ちゃん。

だが、彼のいうことは正しい。

この時期、不良少年たちの活動は早くなる。どの学校も定期試験や『身体検査』で放課が早まり、女の子たちが午後いっぱい遊びまわるからだ。

そういう連中の活動資金として、青アザや足跡と引きかえに持ち金を失うモヤシ君たちも、当然増えるというわけである。

もっと言えば、おれたちふたりはそういう場面で当事者になったことがある。

あの時、中身がない財布だけを握りしめて下宿に向かうおれたちは、肺に金網がまとわりついたような虚無感を心の底にもてあましつつ、両目だけを凍りつかせていた。

そういう精神的に不健全なことにならないためにも、大通りや明るい所を通って下宿に直行するのは大事なのだ。

「確かにな。いくら努力したって、いくらレベルが上がったって、地べた這いずり回ってる人間の顔ぶれは変わらないわけだ。そんじゃ、おとなしく帰っとくか」

「そうしようそうしよう。
このへんも、裏路地に入ると結構危ないしね」

「じゃ、また明日」

「ああ、また明日」

おれは、諦めがよすぎるといわれることもある。
たとえば今日、遊びに行かないと決めたことについて。

主に内心の罪悪感という形で、オカルトさんがそうしつこく言ってくる。
返り討ちにすれば済むことではないか、と。

まあ。
諦めの悪さは、別の時に取っておくんですよ。

借金も返したいしね。

なんてカッコつけてたのがいけなかった。

「……また明日って言ったよな」

「十五分ぐらい前に言ったね」

「この空しさをどうしてくれよう」

「まあいいんじゃない？　僕らこんな感じだし」

学校脇で別れたはずの友人と、なぜか銀行のＡＴＭコーナーでばったり会うの図。

初ちゃんとおれの通学路は学校南西で直角に交わってるから、学校の南南西にある銀行で出くわすこともないとはいえないんだが、なぜこの日に。

「夏休み前に奨金引き出しとは、いい御身分ですなあ」

「ジャクだってそうだろ。言っとくけど、今日の段階ではそっちの方が奨学金多いんだから」

まあ、それは確かに。

三日もすればレベルアップした学生に出る登段特別奨学金の上乗せ分で、毎月の収入はおれの方が少なくなるけどな。

レベル５の学生は遊んで暮らせるがレベル０の学生は貧乏生活を強いられるという、十九世紀から変わらない科学万歳主義の学園都市では、成長するものにだけ与えられる特権というものが存在する。登段奨学金もそのひとつで、おれには縁のない金だ。

「ま、路地裏に引っ張り込まれないよう、お互い気をつけようや。今みたいにヘッドホンで音楽ばっかり聞いてると、周りに注意が回らんぜ」

「相手がぶつかってきたら、どうせ同じだよ」

お互いニヤニヤしながら、ＡＴＭ前の列が進むのを待つ。

まったく、初ちゃんは音楽好きなのはいいが、場所をかまわず耳かけヘッドホンで音楽を聴くのはやめてほしい。

銀行の中は当然として路上でもだ。

それがカツアゲへの第一歩だと、いつになったら学ぶのか。

冗談ではなく本気だ。

見た目がなよなよしているふたりは、狙われたかのように金を巻き上げられる。

おれはまだ“手”をふり回したり“遮光板”をつくれば逃げきれる可能性が残っているが、今日レベルアップしたばかり、それも下準備で十五秒もかかるような面倒くさい能力の初ちゃんは、まず逃げられない。

平日昼間ではあるが、おれたちのように身体検査の影響で半休になった学生が遊ぶ金や里帰りの交通費を引き出すためだろう、列にもちらほらと制服が見受けられる。

銀行にて騒ぐ女子中学生の図。

彼らは何も心配しなくていいんだろうな、と思う。

ここでいう心配は、カツアゲ云々ではない。

もっと大きな話だ。

消息不明の木山先生も心配のひとつではあった。

だが残酷なようだけれど、おれは彼女についてなかば諦めているのかもしれない。

ちょっとした暑さや服の汚れで脱衣を始める奇癖についてではなく、社会的・物理的な生命の話だ。

木山先生は去年末、見るも無残な外見と生活におぼれていた。

彼女はおれが目覚めたことで、加藤くんが復活したと思いこんでいる。それ以来、ほかの九人を助けることに没頭するようになり、ついには統括理事会というらしい学園都市のサミット的な部会に直

訴しはじめた。
寒ければ着ぶくれダルマになり、暑ければ人目もはばからず服を脱ぐようになったのも、おれが目覚めてからだそうだ。
あれはやめてほしい。そろそろおれもごまかしきれない。

おれが先生の行状を知ったのは去年の秋だ。
カウンセリング中にぽろっと零してしまったような感じだったが、オカルトさんの知識がはじき出した計算では

「上層部がなぜ彼女を排除しないのか不思議」

だとか。

木山先生が申請したのは、学園都市随一（せかいさいこう）の並列演算システムの実験使用許可らしい。
それを使えば、子供たちが昏睡に陥っている原因から対策まで、すべてを割り出せるのだという。

それを使えれば。

あの実験に最終的なゴーサインを出し、同時にストップをかけたのが統括理事会そのものだったことを考えれば、まず使用許可は下りないないだろうとすぐ思えたし、実際そうだった。

先生はおれたちを実験台（モルモット）にしたことを悔やんでいた風に見える。

しかし実際は、自分が主要メンバーとして参加した実験の再開を願っているだけなのかもしれない。
そもそも、おれたちの飼い主が木山先生だったかどうかも怪しいものだ。

先生が今何をしているにしろ、偉い人たちはあがく彼女を盗聴盗撮などして嗤いながら眺めているのだろう。そんでもって、失敗したときにその副産物だけかっさらおうなどと考えているに違いない。
みんな死ねばいいのに。

こういうことをすぐに考えつくのは、自分が染まってきたからだ。
オカルトさんのムダ知識は妙に現実的だ。
平和な学園都市を見ていても、裏で何があるか推測させられてしまう。
そして最悪なことに、その大部分は説得力があるのだ。

まあ、とりあえず今は銀行から下宿まで気を付けて帰ることに集中しよう。
などと考えていると、

目の端に口元を布で覆った三人組が乱入して

「全員伏せろ！　焼けても知らねーぞ！！」

「姉ちゃん、このカバンに入るだけの札束よこしな。ケガ人出したくなかったら、できるだけ急いだほうがいいぜ！」

古典的な銀行強盗の口上とともに、カウンターの真上で火の玉が炸裂した。

ああいう連中は、こちらがどう出ても向こうからやってくるらしい。

実に九か月ぶりの人質体験。

誰も望んでいなかったその事件は、前回の郵便局みたく劇的な展開もなし。

特にヒーローもおらず、おれたちがヒーローになることもなく、金の引き渡しはつつがなく開始された。

変わったことといえば、初ちゃんがずっとヘッドホンをつけていたぐらいだ。

いつまでやってるんだと、さすがに小声で言った。

「初ちゃん、さすがに今は外せよ」

返答は以下の通り。

「いやいや、これがスルメなんだって」

スルメ。

噛めば噛むほど味が出てくる乾物のスルメから転じて、視聴を重ねるごとに良いものと感じるようになる楽曲、映像作品をさす。

ただ、彼がここ最近聞いている曲はいかにも機械音の寄せ集めをつなげたようなもののようで、一昨日むりやりフルで聞かされた時に判断したかぎり、“おれ”の趣味には合わないようだった。

テクノをけなすつもりはないが、あれはないわ。

そもそも、状況が状況なのだ。

よくまあ音楽を聴く根性が出るものである。

「冗談じゃねえ。

人質なってる時にアタマ引っかき回されるようなの聞くか普通」

「慣れてくるとそれが楽しみになるんだけど」

正直なおれの感想に、嫌味も何もなく返してくる初ちゃん。
ちょっとダメな方向に進んでないかこいつ。

「言いたくないけどそれ病気だよ」

「一般生活に影響が出ないんだからいいじゃないか」

「影響が出てからじゃ遅いんだっつの」

そこで犯人のひとりが睨んできたため、会話は切れた。

「アンタらには悪いが、あと五分じっとしててくれや」

「俺たちのバカに付き合わして、申し訳ねえと思ってる。
だがそれはそれ、俺たちが車を出す前に非常ベル鳴らしやがったら、このビルまるごと燃やすからそこんとこよろしく」

金をカバンに詰め終えて、意外にさわやかな声で妙に律儀なこと

を言い終えた強盗は、掌に火の玉を転がし、閉じていたシャッターに投げつけた。

「目ぇつぶれ！　耳ふさいで口あけろ！」

誰だか知らないが、ナイス判断。

衝撃波を体から逃がす方法だ。屋内でやっておいて損はない。

多くの店員や客が、やっと解放されると安心感に包まれてとっさに判断ができない中、オカルトさん補正のおかげで身構えていたおれと、おれが肩をつついて注意喚起していた初ちゃんは、すぐ従うことができた。

しかし、本番はそこから。

このまま五分間伏せていようかと思った矢先、

「『風紀委員』ですの！

器物破損、および強盗の現行犯で拘束します！」

意外性あふれる内容の懐かしい声が、外から飛び込んできたのだ。

第一話の四　『風紀委員』（前書き）

や、やっと七月十六日の昼が終わる……

第一話の四　『風紀委員』

何か事件があったとき、テレビのワイドショーとかで『犯人をよく知る人』とか『目撃者の佐藤大輔（だいすけ）さん（仮名）』みたいな人たちが淡々としゃべっているのは、学園都市でも変わらない。
おれは昔そういう手合いと、ついでに彼らで銭を稼ぐテレビ屋をバカにしていたのだが、今日からは気持ちを改めようと思う。
彼らの気分がわかった。

いや、銀行の外から聞こえてくる強盗の末路を思うとね。
まさに圧倒的でした。
体術から能力まで使いまくり縦横無尽に飛びまわる『風紀委員』
……だろう声と、犯人たちのうめき声。御愁傷様です。

そしてなんといっても、最後のアレだ。
これは警備員が来るまで時間稼ぎどころか消耗戦に持ちこめるな、さすが『風紀委員』、などと思っていた矢先に一条の雷。
続いて、なにか大きなものが圧潰する音。

ええ、レールガンです。

>i2181 1—2938<

結局そのあと、大した怪我もなかったおれたちは解放され……

「お疲れのところ申し訳ございませんけど、人質になったお客様にも事情をお聞きせねばなりませんの。学生の聴取は、わたくしたち『風紀委員』が担当いたしますわ」

……るわけがなく、『風紀委員』の事情聴取があるということで、おれ以下七人の元人質学生は『風紀委員』の支部詰所まで歩くことになった。

先導するのは口調ではっきりわかる白井黒子（しらいくろこ）さん。郵便局のツインテールチビだが、当然あちらはそんな細かいことまで覚えていないだろう。ツインテールとも言いがたい髪型になってるし。

おれにとっては鮮烈な記憶だが、彼女にとってはどうだか。

詰所があるという中学校が見えてきたあたりで、初ちゃんが一言。

「あ、ここ知ってる」

「初ちゃん来たことあんの？」

「受験でね。学力考査で落ちたけど」

「……お疲れ」

ともあれ、その柵川（さくがわ）中学校で、事情聴取が行われることになった。

なったのだが……。

「けっこう一人ひとりに長く時間とるんだね……」

「さすがに二時間近く待つことになるとは思わなんだ」

現在まさかの四時半過ぎ。

詰所の外で廊下の壁にもたれている、あのとき銀行にいたふたりだけの未成年男子は、そろそろ足が疲れてきています。

「これは、同時にカウンセリングもやってるくさいな」

「なるほどね。僕は強盗の現場に居合わせたことより、下ろすはずだった現金を目の前でさらわれたことの方がショックだけど」

「お前らしいわ」

初ちゃんにはあまり関係のない話だが、銃を向けられたり能力のターゲットにされると、馴れない人は精神面のダメージが大きいそうだ。

おれの場合、目覚めた直後の体験が鮮烈すぎて、ショックを受けにくいようだが。

それはともかく。

この支部は女子が多いように思えるし、これといって守るものがない場合、精神的に女子の方が強いわけではない。

そういう方面のアフターケアもかねているのだろう。

となると。

「おれたちは五分かそこらで終わるんだろうな、事情聴取」

「まあ、そのへんで甘いこと考えちゃいけないと思うよ」

先に話を聞かれた女子の証言から事件の全貌はつかめたし、おれたちが改めて言うことはないだろう、というおれの嘆き。

対して、いつも通り現実を追認するような発言しかしない初ちゃん。

だが、おれはこの不毛なやり取りに安心している。

いつもこういう会話なわけですし。

いや、言い訳させてください。
こういう軽いセリフを言い合えるのが、今の中学じゃ彼しかいないんですよ。
脳内の加藤くんもオカルトさんも、そういうこと言えないような重い記憶が結構あるしね。

ふたりの記憶や知識からは楽しそうな様子しか見えなくても、時系列が狂ってるせいで系統的に思い出を連想せざるを得ないおれとしては、かなり辛いものがあるんです。
特にご両人の最期とか。

加藤くんは言うまでもなく、木山先生に騙され実験で昏睡。
たぶん、あとで論文探してて見つけた“木原幻生（きはらげんせい）”とかいうジジイが元凶だ。
木山先生も確実にクロだが、“おれ”をもう一度実験しなかったあたり、実は知らずに働かされていた可能性もある。
希望的観測だけどさ。

オカルトさんの方は、百年ずっと探しつづけ途中から破壊衝動まで加わっていた東京の守護霊（パワースポット）が、なんと自分を生みだした存在と判明。
狂ったように大笑いしながらその名を叫び続ける彼は、体の内側から見ていても身の毛がよだつほど恐ろしく、悲しかった。

「すみませーん、だいじょうぶですかー？」

「……あ、はいはい」

「お待たせしてすみません。事件についてお話を伺いたいんですが」

「はあ、失礼します……」

こっちの口の中が甘くなりそうな声に毒気を抜かれて、思考がはっきりしないままそんなことを口走ったが、さて正しかったのかどうか。

詰所の扉が半分だけ開いたむこうから、文字通り“頭がお花畑”のようなヘアバンドをつけた人がこっちを覗きこんでいて、一瞬そんなことを考えてしまった。

まあ、『風紀委員』支部の正面で『風紀委員』に「入れ」と言われれば、どうしようもないんですけどね。

『風紀委員』か。

学園都市でも感づいている人間はいるだろうが、『風紀委員』もレベル5とは別の意味でエリート集団だ。

能力測定をふくむ身体測定や誓約書と適性試験の嵐、そして一年の四分の三にも及ぶ厳しい研修を突破した者のみが、あの緑色の腕章を身につけることを許される。活動支部には指紋・静脈・微細動パターンの三種を登録してからでないと入室すらできない。

ほとんど長点上機学園や常盤台中学といった名門校と変わらないセキュリティ、ついでに排他性を誇る彼らは、その時点で学園都市における栄達を保証されているようなものだ。

そして逆に、実力主義といえば聞こえはいいものの、無能力者の人間――すなわち今回の事件で被害者となりつつある連中は、たとえその意志があってもほとんど委員になれない。レベル3でも怪しいものだ。

さて。

厳重なロック機能も、ガラス板に指先を押しつけるだけで通り抜

けたおれは、手前の椅子でどうみてもダレながら聴取に応じている初ちゃんを横目に見つつ、詰所の右へと案内された。

初ちゃんと彼を相手取るメガネをかけた女子高生が向かい合っているものと同じデスクが鎮座していて、お花畑の人は奥の椅子に腰かけている。

ノーパソを立ち上げて、スタンバイするまでが早い。

おれも手前の椅子にさっさと座ることにした。

「きょう事情をお聞きする初春飾利（ういはるかざり）です。

これからよろしくお願いします」

「どーも」

カザリとは、なんともストレートなネーミングだことで。

ひょっとして頭の花飾りは、名前とかけてるのか？

……いま“おれは昔、彼女と会ったことがある”的な妄想が脳内に浮かんだが、さすがにそんなわけはないので普通に頭を下げておいた。

おれってこんなストーカー体質だったっけ。

「さっそくですが、お名前は」

そしてすぐ始まる聴取。彼女も早く帰りたいのかな。

「あ、ああ。カトウジャクイチ」

「かとうじゃくいち……どんな字を書くんですか？
このパッドに書いてみてください」

「あーいや、口で言うわ。
カトウは加減の加に藤原氏の藤、ジャクイチは若者の若に数字の一」

「かとう、じゃくいち、さん……
南沢（みなみざわ）中学の二年生なんですね」

「そっすね」

のんびりした口調とは裏腹に、秒速八キーほどの速さでキーボードを打っている彼女が、確認のようにつぶやく。
おそらく今、おれに背を向けて開かれたノーパソの画面には、おれの個人情報がかいつまんで記されているのだろう。
個人情報保護法ってなんなのかね。

ちなみに、パッドに書かなかったのは意味がある。
といっても簡単なことで、いまだにあの謎文字を書きだすクセが抜けないのだ。
紙媒体なら消しゴムで消せばすむが、電子情報は書いた瞬間に彼女の見ているモニターへ転送される。

あんな意味不明な文字を描けば、不審者扱いは必至だ。

テスト用紙の氏名欄に「?十二八…」と書きかけて必死に消したのも記憶に新しい。

「それでは、いそべ銀行に入ったところから、できるだけ詳しくお願いします」

「いや、できるだけ詳しくっつっても……とりあえず、ＡＴＭで金を下ろそうとして銀行に入ったら、彼と会って」

言いながら左を指さす。

「お知り合いなんですか?」

「同級だよ。で、並んでたら爆発音、覆面三人組が登場して『みんな伏せろー』って叫んだから、言われた通りにした」

「それから、どうされました?」

ちらりとノーパソの画面を見ながら、そんなことを言う初春さん。

レベル3なのにどうして抵抗しなかった、とか考えてるのかね……？

二時間立ちっぱなしでいらついていたせいか、そんなどうでもいい考えがよぎる。

常識的には、そんなことを考える方が怒られるのは確実だ。

「強盗のひとりが、おれたちの間を回って携帯とかモバイルを没収した。たぶん『警備員』が押収してるし、明日受け取りに行くつもり。

あとはずっとうずくまってるだけだった。犯人たちが派手に脱出をして、店長がその瞬間外線にとびついて通報、外から『じゃっじめんとですのー』とか懐かしい声がして、外に雷が落ちて一件落着。

……ってのが、おれの記憶」

「あ、ありがとうございます……

ところで、懐かしい声というのは？」

「ああ、去年秋に郵便局にいたら強盗に出くわしたんだけど。

その時助けていただいた……というか、いっしょに捕まった『風紀委員』さんと同じ声口調の人が今日道で立ち回ってたっぽいから、そう思っただけ」

「なるほど」

誇張した最後のシーンに反応したのか、二度も強盗事件に合う不運に思うことがあったのか、初春さんも少しだけ笑みを返してくれ

た。

それとも、『風紀委員』がおちょくられた反感か？

まあどちらにしろ、これで聴取は終わり。

閉じられたノーパソを見てそう独り決めしたおれに、

「加藤さん」

初春さんは、追加のクエスチョンをぶつけてきた。

「……あなたは今日の強盗さんについて、どう思いますか？」

「……はい？」

とくに考えもなく、そんな単語が出ました。

質問が予想外すぎる。

つーか風紀委員の詰所で何深刻なこと語ろうとしてんの、この子。

「……それは事情聴取？　それともきみの個人的な興味？」

「両方です」

おずおず聞いてみると即答。

あれですね、当面は自分だけの秘密にしておくけど、あとで何か事件に巻き込まれた時は不利な証拠に早がわり、というような言質を取る気ですね。

ルックスいいし声は甘いけど、腹の中身はそれなりに黒いってか。

風紀委員になるだけあるな。

おれの風紀委員に対するマイナスイメージはともかく、彼女は真剣に聞いてきているように見える。

これは真剣に答えないと、後が怖いかもしれん。

とはいえ、どうせ木山先生と同じように、まじめな人々が集うこの詰所にも誰かが聞き耳たててるんだろうな。

この学園都市に、プライバシーが存在しうるのかどうかは別として。

どっちにしろ、真面目くさった返答しかできないか。

理屈をこねてごまかそう。

「無駄が多いな」

「……無駄？」

「ええ」

ちょっと意外だったらしく、おれが答えると初春さんは目を少し開いた。

「どういうことですか？」

「たとえば、このノーパソでも見れると思うけど、おれは『強能力（レベル）者』[3]。

隣のあいつも、いつ情報が反映されるか知らんけど、今日レベルが上がった」

ここまで聞いて、初春さんのまぶたがふっと落ちた。

どうやら彼女は伸び悩んでいるらしい。彼女はどうも人がよさそうだから、実は友人がそうなのかもしれないが、この際それはいい。

「でも、おれたちは弱い」

「え？」

「言葉のとおりだよ。
おれもあいつも、レベル3とは言いながら、犯人たちに手も足も出せないまま言うことを聞いてた。
もちろん、治安上はその方がいいだろうさ。でも能力と関係ないツール、今回はメールなりなんなり使って通報はできた。電子パッドのフリック入力なら『いそべ銀行たすけて』ぐらい五秒で打てる。
でも、おれたちふたりはそれさえできなかった」

もちろん、実力的にも弱い。
不良から逃げることしかできないし、喧嘩では言うまでもない。
今日の犯人グループに交じっていた発火能力者がおおむねレベル3、強度こそ同じでも場数や能力の差でおれたちに余裕の勝利をみせるだろう。

「生き物としてはあいつらの方が上だ。
超能力を含めて、とっさに何かできる才能と経験については」

「そんなこと……」

「だからこそ。
だからこそ、その才能と経験をわざわざ犯罪に使うのは“無駄”だろ。
もっと金になる商売は、他にもあるのに」

生き物として下と言われたからか、さらに眉毛が八の字になりつつある初春さんの目の前に、そうつないで指を一本たてる。
そのまま、高校生にぽつぽつしゃべっている初ちゃんの方へ指先を動かした。
初春さんの目が、初ちゃんに向く。

「さて、あいつは今日レベル3になったけど、能力自体は役立たずだ。
それはレベル2のころから、本人も分かってる。
だから能力関係では、あんまり鍛錬してない」

ちょっと支離滅裂だな。初春さんが半目になってきた。
ここから無理なくいい話にまとめなければ。

「でも、あいつは自分の能力を理解して、使い方をいろいろ試してた。
本人は遊び半分だったけどね。
それでもちょっとした試行錯誤で、レベルアップの可能性も自分の選択肢も広がる。

あいつの言い方だと『能力はひねるもんだ』そうだ」

ここだけは本音だ。

夢の中でオカルトさんがあれだけ多彩な術を操っているところを見せられれば、誰でもそう思うだろう。

それに、オカルトさんの敵にも努力家がいる。

「それからもうひとり、ここにいない知り合いに『大能力者（レベル4）』がいたんだが、彼の話では執念とか気力がものを言うんだそうだ。

一回そいつに挑んでボロ負けした『無能力者（レベル0）』が、復讐一筋でいろいろ試したら能力を手に入れたらしい。レベル4のやつも強い方だが、一度は動けなくなるまで追いつめられたってさ」

その元レベル0“ナルタキさん”の場合、それこそ十年単位の潜伏と奮起、そして若いころから理学バカと呼ばれるほどの物理学知識あってこその快挙なのだが、それでも能力至上主義のバカどもに聞かせたい話なのは間違いない。

今そんな些細なことは言わなくていいよな。

「レベル0に、そんなことができたんですか？」

「ああ。その人はどうしてもリベンジしたかったから、自分の選択

肢を広げるためには何でもやった。
能力が出てくる前は、頭脳戦や経済戦も狙ってたそうだ」

「選択肢を広げる……」

顔に変な影を落として、初春さんが呟く。

「隣の彼も、そうやって能力の引きだしを見つけて、レベルを上げた」

「それは、どうやって」

「さあな。
広がった選択肢のうち、どのチョイスが能力開発につながるかは知らん」

そう正直に話すと、やっぱり眉毛が中央による初春さん。
彼女は正直な人みたいだ。

いや、おれも正直ですよ?
少なくとも初ちゃんがアタリを引いたのは事実だ。
ナルタキさんも遠回りはしたものの、オカルトさんを追いつめるような能力の使い道を見つけていたのは間違いない。

……まあ“使い道が見つかる可能性”をもつ能力者の、無責任な発言ですよ。

レベル０の人が聞いたら怒られる。

「ただ、とにかくやってみて、それを使えるようにした。そんな例を知ってると、取れる行動の幅を広げられるやつが自分からそれを潰すのは、壮大な無駄に思えるんだ」

そうしめくくって、おれのこっぱずかしい独演会は終わった。自分で言ってて突っ込みどころ満載だったよ。

しかしまあ、噛まなかっただけでも表彰ものだ。あーしんど。

初春さんの顔色を考えると最後のは余計だった気がしなくもないが、とりあえずおれと初ちゃんは風紀委員から解放されたので、この場はよしとしたい。

……そういうことにしといて下さい。

そうそう。

詰所から出ようとした時、白井さんに

「今回は我慢なさったようで何よりですわ」

と呟かれ、反論できずにむっつりと柵川中学を後にしたのは、はなはだ余談である。

第一話の四　『風紀委員』（後書き）

注…

『フリック入力』
タッチスクリーンの日本語入力方式。
テンキー状にあ段のキーが配置され、押すと周囲に同じ行のカナが表示される。それぞれのカナにむけて指をはじくことで入力。
慣れればローマ字キーボードに次ぐ速さで文字入力が可能とされる。
ちなみに作者は使えない。

というわけで、第一話本伝終了となります。
……ええ、まだ次の日には進みません、長々すみません。

引き続き、評価・感想いただけましたら幸いです。

第一話外伝　ある教師の復帰（前書き）

教頭先生のお話です。

第一話外伝　ある教師の復帰

やれやれ。
これほどうるさいやつとは思わなかった。

目の前でわめいているのが、私の主監督生徒である加藤若一。
その右で加藤をなだめているのは、たしか同じクラスの介旅とかいうやつだったはずだ。

見張りなど、引き受けるものではないな。

教頭としてこの中学校に赴任してきたのは、去年の四月のことだ。
それまで小さな研究所の嘱託、という名目で飼い殺しにされてい

た私を、強引すぎる方法でひっこぬいた男がいた。

「……あまり好きじゃない方法なんだがね？」

彼は善良そうな顔に憂いを浮かべて、そう言ったものだ。

「あの子については、そうも言っていられないみたいでね？」

「歯切れが悪いですね、先輩」

センパイと、わざと強調する。

その時の私は、かなり頭にきていた。

医者として、この学園都市で並ぶもののない人脈の広さをもつ彼は、名簿のうえで同じ大学出身ではあるものの、一言も口をきいたことのない人間だ。

そんな名物人間が、私ごときを呼び出してどうするのだ。

などと思っていた私の浅慮を、後悔すべきなのだろう。

>i2181 1—2938<

「……きみは、これまで何の研究をしていたんだね？」

「例の制御実験に、端役で参加していましたが。
結局だいじなところは、みんな誰かさんに持っていかれましたがね！
それを確認されたいのでしょう？」

例の制御実験。
といえば聞こえはいいが、要するに能力者の暴走を誘発させる、いってみれば誘爆実験とでもいうべきものだ。
そういう実験に自分がかかわっていたと知ったのは全て終わってからのことだが、この実験は私に大きな影響をもたらした。

まず、失敗したとはいえ著名な実験に関われたという名誉。
そして、人体実験に対するトラウマだ。
特に後者のせいで、私はまだ若いながらこの学園都市で研究を続けられない頭になってしまったのだ。

「そんなに怒っても、いいことはないよ？」

先輩は表情を変えずに、淡々と諭してくる。

分かっているさ。
しかし、怒らずにいられるか。
いまさらあの実験について、あなたが私に求めるものなど推測もつかない。

「それで、私に何をお求めですか？
制御実験についてなら、私より研究の中核にいた方ともお知り合いのはずだ。
なぜ私なのです？」

「君にしかできないこと、といったら？」

その笑顔をやめろ。
その台詞もやめろ。

私にしかできないこと？
この学園都市は、同時に世界最大の学術研究都市だ。
ある者は金づるを求め、ある者は外部より二〇年以上進んでいる自分の専攻分野の成果を求め、またある者は超能力研究の発達を求め、この学園都市の門をたたく。結果は入門を許されたり門前払いをくったり落命したり、人それぞれだ。
私の代わりになる人間など、いくらでもいるじゃないか。

「それは？」

「おや、話を聞いてくれるんだね？」

「聞かねば生きて行けませんよ」

“先輩”が微笑む。

ああ、私は行方不明かな。

そんなことを思っていた私の予想をはるかに超える答えが返ってきた。

「君、教育者に戻るつもりはないかね？」

制御実験からこっち、私は人体実験に関わったことはない。

だが、だからこそ、研究者から教育者に変身させられた人間をひとり覚えている。

その結果については、できれば忘れたいものだ。

「なんです、それは？
まさか、また木山学級をつくるおつもりでも？
あなたの評判からは想像もできませんね」

「まさか。
僕は木原くんと、その件で意見が一致したことはないからね？」

「木原ねえ……迷惑なことばかりやる連中ですな。
学園都市の意向に沿ってるからなお悪い。
ナユタのガキも変な方向に育って、将来が心配です」

ここにいない人間の悪口でも言わないと落ち着けない。
我ながらずいぶん堕落したものだ。

しかし、そういう場面で槍玉にあげても後で罪悪感にかられないほどの非道な一族が、今言った木原姓の連中だ。
研究者には偉大な学究一族と言われているようだが、その研究成果は人の心をどこかに捨ててきたから生まれたという事実を忘れてはいけない。要するに自分たちは安全圏内にいながら、被験者をボロボロになるまで使いつぶすのだ。
科学の大勝利と科学者の惨敗を、一身に表しているといえよう。

「それについては、コメントを控えさせてもらうよ？
とにかくまあ、当たらずとも遠からず、君にはあのときの子供を観察していてほしいんだけどね？」

……なに？

今この目の前の男は、何と言った？

「……生存者がいると？」

「正確には、復帰者と言った方がいいかもしれないね？」

「復帰者？　そんなバカな」

バカなと言ってはみたものの、実際のところ可能性はゼロより大きい。

ただ被験者が昏睡に陥った経緯を考えると、納得できないのも事実。なんせこれまで、彼らを“起こす”研究も細々と、だが予算を打ち切られることなく延々と続けられてきたのだ。

ひとりでに起き上がる可能性はそれこそゼロ、外部刺激も――

「いったい何をしたんです」

「なんのことだね？」

「とぼけないでいただきたい。
被験者が覚醒するには、まず能力の暴走を止めなければなりませんん」

それができるのは、正しい現状認識と能力のある人間。

「このあたりは、あなた方には自明のはずだ。
つまり」

目の前のカエル顔か、“担任”の彼女。
実験を主導していた木原幻生が雲隠れした今、そのどちらかまたは彼らが共同で“適切な刺激”を与えなければ、暴走状態の昏睡者が意識を取りもどすことはありえない。
あの実験の関係者で、今それができるだけの力と意欲を持っているのは、彼女以外にはいないはずだからだ。

「あなたがたが手を入れなければ、彼らは目を覚まさない」

「君もそう思っていたんだね？
残念だが、僕らは何もしていないよ？」

「ではなぜ！」

「それについては、ちょっと長い話になるんだがね？」

目の前にいる男から滲み出る空気が、変わった。

「……なるほど、その坊主を危険視する理由は分かりました。“念動力で大人四人の首を切りおとす”とは、なんとも過激なレベル3ですな。
それで、その正体不明の子供を見張れと」

「あの時は慌てたね。思わず顔に蒸しタオルを押しつけたもんだ。とはいえむしろ、僕としては彼自身よりも、あの子について嗅ぎまわっている困った人たちを見張ってほしいがね？」

「好奇心は猫をも殺すというやつですか」

「本当に猫が八回生き返るのなら、実験も楽なんだけどね」

「まったくですな」

私は予定通り、その話を受けることにした。

どうせ選択肢はなかった。
承諾する前に目的を教えてくれただけでも、御の字というものだ。
それが本当の理由かどうかは、この際どうでもいい。

そして私は、この南沢中学校へ転任してきた。

ほとんど校長の引きでやってきたよそ者の教頭、という評判が職員たちのあいだで一瞬のうちに広まり、わたしはかえって気が楽になった。

それまで教頭を務めていた教務主任に引き続き教務を任せることで、私は校長とカエルの顔をした先輩を取りもつ仕事に専念できたからだ。

そもそも、先輩独自の命令系統というものはない。
彼はただ、その手腕と人脈を使って“お願い”するだけなのだ。

そして“お願い”を断るものには、相応の損失が待っている。
私の場合は、今となっては完全に誤った理論をだらだらと述べている、過去に発表した論文を掲載した学術誌が、なぜか古本量販店BOOK OFF

の店頭に並ぶことになる、とか、そういったものだ。
まあこれより悪いことにはなるまい。なんだかんだ言って彼は優しいのだ。
自分の都合だけで、教師ひとりの復帰をお膳立てする身勝手さはあっても。

「どうだ」

「部長」

教務準備室、という名前に隠された校内唯一の喫煙スペースで、そんな事をつらつらと思い返していると、私の境遇がこうなった元凶のひとりがやってきた。
南沢学園理事、兼中等部長。
生徒になじみのある肩書きで言えば、校長ということになる。

「今日は一学期の男子期末身体検査だったな」

「ええ、そうですが何か……」

「きみに話しかけた時点でわかってくれるだろう」

というと何か。
本当に、あの先輩に押しつけられた子供が問題を起こしたのか。
ただの念動力者に、なぜそこまで過保護になるのかと思っていた

が。

「問題ですか」

「大問題だよ」

大問題？

珍しいこともあるものだ。この部長は、どちらかと言えば控えめに物事を表現することが多い。官僚出身というから頷ける。

「おっつけ、ここにも彼の検査結果出力用紙が来るだろう。それを見てから、保健室に行きたまえ。問題児ふたりもそろそろ向かっているはずだ」

「失礼ですが」

それだけ言って、タバコに火をつけようともせずに立ち去るそぶりを見せた部長の背中に、私は声を投げかける。

疑問は少ない方がいい。

「問題児“ふたり”とは？」

歩き出しながら、部長が答えた。

「あの加藤の同級生に、介旅というものがおる。
……そいつが、校庭に重力小井戸（ワームホール）を作りだしおった」

第一話外伝　ある教師の復帰（後書き）

加藤くんの“手”は、音を出す以外にもとりえがあったということで。

第一話補遺　大長谷王（前書き）

「草をお摘みのお嬢さん、どこの出か言ってみなさい。
大和の国はすべて、私が支配しているのだ。
国をあまねく、私が君臨しているのだ。
私から言おう、氏族も名前も」

――『万葉集』、大長谷王

第一話補遺　大長谷王

また、夢を見た。

半年前の続きの夢。

雄略（ゆうりゃく）天皇こと長谷（はせ）のおっさんに叛旗をひるがえし、仮想敵国の新羅（しらぎ）に支援を求めたわれらが上道田狭（かみつみちのたさ）司令官。

どうみても失策が原因になったこの乱を、長谷さんはどうおさめるのか。

あれ？

主人公長谷？

＞i２３３４６―２９３８＜

「ご真意をお聞かせいただきたい！」

どなりあげたのは物部（もののべ）さん。

倭国軍の総司令官が目を剥いている。

高床式宮殿の中央、空中三メートルあたりに浮いているおれの視点は、いま深い同情の目線を彼に送っているだろう。

このイメージをおれに見せているオカルトさん的には腸が煮えくり返るような発想なのだろうが、おれとしてはそれより先に

「こいつ正気か？」

と言いたくなる。

なんと長谷さんは、よりにもよって任那（みまな）の討伐軍を、吉備弟君（きびのおとぎみ）に任せると言い出したのだ。

任那で反乱を起こした田狭さんの次男に。

「まあ、聞け」

いきり立つ重臣たちとは正反対に、長谷さんは落ち着いている。

これが王の貫録か。

違うよな。

「いずれ、放っておいても田狭の息子どもは兵を起こす。
それならいっそ命令で都から遠ざけねばならん。
不服なら不服でけっこう。反乱を起こすなら、それこそ好都合というものだ」

「討伐軍に討伐軍を出すおつもりですか？
申し上げにくいことですが、倭の国にそれほどの軍勢はどこにも残っておりません。
そもそも彼らに持たせる剣がない」

笑顔の長谷さんに、親衛隊長の大伴（おおとも）さんが切り返した。

字幕解説が入る。
このころの部族連合でしかない倭の国で、総動員など夢のまた夢。
各族長に檄をとばして、それぞれ自分たちが弱体化しない程度に兵を出すかたちが普通だったようだ。

ところが、これも長谷さんは笑い飛ばす。

「軍勢がいない？　おるではないか、そこに」

目線を向けられたのは、外交担当の蘇我（そが）さん。

……の、右斜め後ろにひかえる人物だった。

「なっ！！」

「まさか！！」

群臣が一様に驚くその人物の名は、小鹿火（オガノヒ）。

日本書紀に『土蜘蛛（つちぐも）』と書かれた陸奥の住人、いわゆる蝦夷（エミシ）の民だった。

「韓子（からこ）よ。おまえの北を向いたコネは飾りか？　そやつはおまえの召使いではない。

目（め）にしてもそうだ。親戚の近所づきあいは把握しておけ」

顔を戻した長谷さんが、蘇我さんと大伴さんを叱る。
外交の専門家だったはずの蘇我さんはあたりまえとして、物部さんは分家が出羽で勢力を広げており、蝦夷との交流もあったため、彼らを利用する発想があって当たり前と考えたのだろう。

おれは、ちょっと言いすぎな気がするが。
朝鮮で倭が見下されたように、彼らも蝦夷を見下していた。自分たちと高句麗のあいだにかかった橋としての価値しか見ていない蝦夷を倭の本国で大々的に利用するなど、考えつけたかどうか。

ともかく。
いちおう臣下として認められているらしいオガノヒは、群臣に一礼して発言を求める。

「申せ」

長谷さんの許可。

「おおきみは、まえからしらきいりをすすめるおつもりかと」

大王は以前から新羅侵攻を予定していた！

ぎこちない標準語（の吹き替え）を聞いて、物部さんの顔がまた歪む。

「大王、これはいかなる」

そして長谷さんはいつも余裕。

「聞いたままだ。
いずれ新羅とは戦うことになった。そのための準備を目、おまえもずっと実行してきたはずだな」

「しかしそれは、任那への増派のためで……」

「同じことだ。任那を救うには、新羅に侵攻の余裕をなくさせるしかない。
人選はあらかじめしておいた。今から名を呼ぶものは前に出ろ」

目を白黒させる物部さん。
それにかまわず、長谷さんは派兵を実質的に了解させ、その空気のまま大将の選抜へと話を進めてゆく。
全員決めてあると言っていたから、あとは呼ぶだけなのだろうが。

「最初に言っておく」

大王は、高床式の御殿に参集した重臣たちを見回して、言った。

「吉備（なか）と新羅（そと）。一撃で潰すぞ」

場面転換。

朝鮮南端の諸島部に、吉備（きび）艦隊がいた。

率いるは上道田狭の息子、弟君。

父を討ちにゆけと言われた上道弟君は、当然のように命令を無視

した。

ただ歓因知利（かんいんちり）という百済（くだら）系の技術者が

「百済には私たちより腕の立つ職工が多くいます。朝鮮へ行くなら、この機会に倭へ来てもらっては」

などといらぬ進言をしたため、とりあえず百済までは来たのだ。しかし、そこから進もうとはしなかった。

田狭さんからも

「もう、ふたりして新羅に住もう」

などという書簡ももらっていたし、吉備氏とその属民が大多数の討伐軍では意気上がるわけがない。

彼自身は、知らない土地でも平気だ。

蘇我韓子さんやその父で高句麗人とのハーフ、蘇我（そが）高麗（の こま）さんたちのことを考えれば、貴族階級にあるものの国家間移動はめずらしくもなかった。

だが兵士はそうもいかない。
副将で同族の海部赤尾（あまべのあかお）が報告するには、知らない土地で不安も高まり、行軍さえままならないようだ。
いろいろな意味で、決断の時だったのだ。

「ねえ」

ほぼ意思を固めつつあった弟君さんを引きとめたのは、彼の妻だった。

「樟（ショウ）か。どうした？」

樟さんの下に「樟媛」と字幕。
それによると、吉備と朝鮮各国との通商をなかだちしていた任那豪族の出らしい。
里帰り半分で従軍してきたそうだ。
しかし、有力者の子供は国際的な政略結婚が当たり前なんだね。

……もうオチが見えたな。

「あなた、もう一月もこの島に停泊したままよ？
御父君も何をするでなし、これからどうするの？」

「そのことなんだがな」

狭い船の中でもどうにか特別あつらえにした唯一の個室で、弟君さんは嫁に笑いかける。

「俺も親父も、新羅に降るよ」

「え？」

「このまま帰れるわけじゃない。
任那の国軍は新羅軍を見張るだけで精いっぱい、おれたちが引っぱってきた“討伐軍”とかいうやつだってこれじゃ烏合の衆だ。
それならいっそ、この地で勝ち馬に乗ろうと思ってね」

「そう」

自分の考えをそれなりに筋道立てて話したのに、短い答えしか返さなかった樟さんが妙に引っかかる弟君さん。
まあ、その疑問はすぐに解消される。
なんせ、

「じゃあ、死んで？」

剣を自分の腹に押しこまれちゃあ、ねえ。

オカルトさんが倭国側の軍議シーンを見せていたことにも意味があった。

そもそも、圧倒的に距離が近い新羅が動きを見せなかったのも、百済が田狭さんの討伐ついでに任那をかすめとろうなどと思わなかったのも、長谷さんの対応が早かったからという一言に尽きる。

対応が早かったのは、情報が早く届いたからだ。

ではなぜ現場からもっとも遠い大和に、もっとも早く情報が届いたのか。

行動を起こす前から、反乱に賛同しない者がいたからに他ならない。

次官級の。

字幕とスライドのエピローグ。

上道弟君、暗殺。

これによって百済に駐留していた討伐軍は混乱、副将の海部さんが“予定どおり”兵をまとめて帰国。

援軍の当てがなくなり四面楚歌になった田狭さんは、事態を冷たく静観していた百済に亡命した。

こうして、田狭の乱はあっけなく終わりを迎える。

なお、“弟君討伐軍”として大伴さんの息子・大伴談（おおとものかたり）を中心に四軍が編制されていた軍勢は、これも予定どおりに海を渡って展開し、任那から新羅へ出撃した。

大王親衛隊だった大伴の跡継ぎを出すあたり、長谷さんの本気が見える。

だが“一撃”とは行かなかった。

反攻軍は新羅軍に大きなダメージを与えて南部国境から撤退させたが、新羅軍はねばり強くゲリラ戦を行い、四軍の筆頭将軍とされた談さんが戦死。

さらにふたり目の紀小弓（きのおゆみ）が陣中で病死し、かわりに派遣された息子の紀大磐（きのおおいわ）が、文武両道を見こまれ三人目として従軍していた蘇我韓子さんを優先指揮権の奪いあいで射殺。

これを見た四人目のオガノヒさんが帰国したまま再出撃を拒否するなど、全体としてはさんざんな結果になった。

字幕が視界に現れては消えてゆきました。

ひどいもんだ。

場面転換。
百済は王都だった漢城を陥とされ、任那の地に再建されていた。

岩場にはさまれた、小さな浜。
黄海の穏やかな波が、砂の上をすべっては引きもどされてゆく。

沖合に停泊している船から、小さな木舟が陸地へやってくる。
浜にザリザリと乗り上げて、乱暴に停まる木舟。
まず降り立ったのは、鎧帷子に身を包んだ将軍とその兵士たちだ。
将軍はいかにもと思わせるような筋肉ダルマで、伸び放題のあごひげがスチールウールのようにごわついている。

次に、赤ん坊を両手で抱いた女の人が出てきた。
着ている服は汚れているが、生地は兵士たちよりよほどいい。

「ここが三山（サンザン）です。アスヤ殿、こちらへ」

スチールウール将軍がそういいつつ、女の人に背を向けた歩き出す。

誘導の形をとった露骨な命令。

アスヤと呼ばれた女の人は将軍をにらみつけつつも、周囲の兵士が持っている剣をちらりと見てからそれに従った。

字幕。

アスヤとは、高句麗の言葉で「若い人」という意味らしい。

どうやら、そういうあだ名の捕虜のようだ。

漢城陥落の時に逃げおくれて捕まったという。

続いて小舟からなかば突き落とされたのは、たぶん侍女だろう。

砂に足をとられてよろけながらも最初の女の人に続く。

「殿下！　御子はご無事ですか――」

「うろたえるな」

侍女のキンキン声がアスヤさん（仮）の一括で遮られた。
高句麗兵が驚いて警戒態勢をとる。
その殺気にあてられたのか、赤ん坊が泣きだした。

スチールウールが、眉間にしわをよせつつ振り向く。

「アスヤ殿、お早く」

慇懃に嫌味。
ただ、この武人と言えるような人のセリフが敬語で吹き替えられているということは、オカルトさん的にはアスヤさん（仮）はかなり偉い人なのだろう。
などと思っていると、裏付けが取れた。

「殿下！　しかし……」
「妾（わらわ）も吉備子（キビコ）も大事ない。騒ぐな。
それに」

アスヤさん（仮）は、言いかけてキビコと呼んだ赤ん坊をあやしつつ、狐のように戦闘的な笑みを浮かべた。

「大百済国の王女が、はじめて自ら高句麗の土を踏んでやったのだ。これは快挙と思わんか？」

新羅で戦死した蘇我韓子さんは、母親が百済人だったために“韓人の子”という意味の名前をつけられたのだという。

実質的に吉備の王だった上道田狭さんが百済に亡命し、百済に“吉備子”という名前の子供がいれば、これはもう何が起こったか明白というものだ。

田狭さんは百済でも成功したらしい。

でなければ、アスヤさん（仮）に婿入りなどできないだろう。

この吉備子という子供は健康に育ち、三山の地で吉備上道氏の家系が三百年ほど血脈を保つことになるのだが、それをおれが知るのは次の夜のことになる。

第一話補遺　大長谷王（後書き）

「補遺」の記述は“オカルトさん”の先入観に基づいたものです。現実の世界、“オカルトさん”の世界、あるいは「とある」世界の歴史的事実とは関係ありません。

第二話の一　Ｂａｔｔｅｒｙ-Ｇｉｒｌ（前書き）

次の日。

第二話の一　Ｂａｔｔｅｒｙ-Ｇｉｒｌ

「あ……」

おれは今、冷や汗をだらだらと垂らしている。
加藤くん、すまない。
理由は分からないが、何となく謝っておいた方がいい気がする。

「あんたは……」

ひとつ後ろのテーブルについている初春（ういはる）さんも、笑顔が動かない。
おれをここに連れてきたのは彼女だが、この展開を予想していたわけではないようで、安心すればいいのか怒ればいいのか。

「……あんたは私のママかあああああっ！！」

初春さんと同じテーブル、位置関係的にはおれの斜め後ろ・初春さんの向かいの席で、全身をばねにしてレストラン『Ｊｕｌｉａｎ』のソファから勢いよく立ち上がり、高射砲のごとく両手を差しあげて吼える御坂美琴（みさかみこと）さん（１４）。

座席の位置関係からしても“関係ない”ふりをしている点からしても、おれは初春さんのフォローを期待することしかできない。

そもそも、なんだ、コメントに困る。

「あ、あの……」

ダンッ！

と、音をたてて両の掌をテーブルに叩きつけた御坂さんは、そのまま怒り冷めやらぬと全身で主張しつつ前方を覗きこみ、

「ねえっ！　どう思う初春さんっ！！」

……そんなこと言われても困ると思う。

「え、ええっと、とりあえず座りませんか、御坂さん」

御坂さんの向かいにいる初春さんが、そんな言葉をひきつった口元から落としているのを遠く聞きつつ、おれは自分を呪わざるを得なかった。

どうしてこうなった……。

＞ｉ２１８１１―２９３８＜

どうも、加藤若一（かとうじゃくいち）です。

そもそもの始まりは朝出だった。

強盗事件にあった経験のせいなのか、オカルトさんの夢も過激化している。

古代歴史ドラマと同時上映で、回転軸式全電動自転車（シャフトドライブドエレクトロサイクル）――要するに電動バイクで暴走する『自転車（サイクラー）乗り』とよばれていた連中を目からビームならぬ“指先からビーム”のようなもので切り刻んでニヤニヤしたうえ、さらに自分も暴走するイメージが浮かんだところまでオカルトさん視点で再放送。

早めにセットしていた目覚ましのおかげで、おれは七月十七日の朝を健康的に迎えた。

朝日っていいもんですね。新聞は遠慮したいが。

さて、今日は学校で女子の身体検査（システムスキャン）が行われ、男子は一日空いて

いる。
で、おれは『警備員』の支部に出向いて強盗犯に没収された携帯を受けとろうと思っていた。
だが、なぜかその支部で初春さんにつかまったのだ。

「緑のＩＳＡ０５……これか。
一応確認のために、認証完了画面を見せてほしいじゃん」

『警備員（アンチスキル）』第七三活動支部。
書類に必要事項を書きこんで、頭が三つかと見まごう巨乳の警備員さんに携帯を返してもらい、言われたとおり画面に暗証番号を打ちこむ。
立ち上がり画面を、彼女の方に向けた。

「確認お願いします」

「よし」

いかにも形式だけですと言わんばかりに、ちらっと見ただけで書類に目を走らせる警備員さん。
しかし、この人はジャージ以外のものを着た方がいいのではないか。

おれは他人の外見を口にできるほどのファッションセンスもないし、私服を二、三日使い回すケチではあるが、そのおれから見ても今の状態で十分美人と分かるのだから、服に気をつければまた見違えるだろうに。

バカなことを考えている間に、警備員さんは書類手続きを終えた。

「うん、よし。
それじゃ、遅刻しないように急ぐじゃん……お？」

「はい、ありがとうございま……うおっ」

頭を下げようとして、大きく振り向いた警備員さんの後ろ髪に顔をはたかれそうになり、あわててのけぞる。
そこで、彼女が振り向いた先から

「あっ、加藤さん！　ちょうどいいところに」

と聞こえたのが、運のつきだった。

嫌な予感しかしない。
しかもその予感は、部分的に正しかったのだ。

「初春、おつかれじゃん」

とどめは警備員さんが決めてくれました。

ここまで周りから情報が与えられれば、反応しないわけにいかない。

「えーと……昨日の『風紀委員（ジャッジメント）』さん？」

「はい！　そうです！

実はですね、あのあとちょっと問題があって、このあともう一度お話をお聞きしたいんですけど」

言い終えると満面の笑み。

巨乳の警備員さんがまたこっちを向いたり、ほかの警備員さんも注意を向けてきているが、こっちはそれどころではない。

初春さんの笑顔が怖いのだ。

明るいのはいいが、春の日差しなんて生やさしいものではない。

ハワイアンな太陽のごとくギラギラしたものを感じる。

なぜかわからないが、意味もなく逃げ出したい。

こんな時に限って、オカルトさんの知識体系は「話だけでも聞いておけ」などと結論を出してくる。加藤くん記憶系が恐怖心だけでそれに追随。

脳内で逃げ道がふさがれるってどんだけだ。

「え、おれ今から学校……」

「南沢中学校は、きょう女子の身体検査ですから男子は休みですよ？」

「えっ」

そんなおれの絶望的な脱出プランは、一瞬で砕け散った。

なぜバレたし。

「つーかあの事件、校外だったし警備員の仕事じゃ……」

「いえ、事件とはあんまり関係ないかも」

それは何か、事件と関係あるかどうかわからない個人的な相談事だけど、いつか証拠として提出される可能性はあるってか。

おい、なんだこの政治的動物。

中一でこれとは、やっぱ『風紀委員』こええ。

「いや、一般人が私的なことに立ち入るわけには……」

「相談に乗ってほしい人が他にもいるんです。加藤さんなら、アド

バイスしてくれるかもしれないって思って」

「いやいや、そういう個人のデリケートな問題とかちょっと……」

「昨日の続きみたいなものですし、そんな緊張しないで。
それに、加藤さんとも関係あるんです」

お願いしますっ、と初春さんのお辞儀。

ふと我に返ると、おれはかなりの窮地にいた。

ここは『警備員』支部で、周囲は非番の先生ばかり。
『風紀委員』に協力しないとなると、白い目では済まされないだろう。これから何かにつけて疑いをかけられる可能性もある。

そこまで計算して、初春さんはここで頭を下げたとしか思えない。
ここは従わないと危険だ。
……と、脳内でオカルトさん知識が“おれ”を調略。

謀ったな初春！

で、やってきたのはファミリーレストラン『Ｊｕｌｉａｎ』。
そして“おれにも関係ある”相手というのは、ほとんどいない友人ではもちろんなく、一瞬拘束されたかと危惧した初ちゃんでもなく、窓際の席で腕と足を組み、口をへの字に曲げた茶髪ボブヘアーの女の子でした。

夏服ですと無言で主張する半袖シャツ。
同じく存在感あふれるベージュのベスト。いや、サマーセーターとか言うんだっけ。
店内の位置関係的に見えにくいが、どうやら灰色らしいプリーツスカート。
名門・常盤台の生徒か。

それ以前に、まあ加藤くんに憑依してからはよくあることだが、相当整った顔立ち。
おそらくは、この世界を舞台とした物語の主人公格なはずだ。
おれが知っている“主人公”で女性といえば……

そこまで考えてよくない予感がよくない確信に変わったおれの隣で、

「あ、御坂さ～ん」

その女の子を、溶けるように甘ったるい声で初春さんが呼んだ。

「どうもはじめまして、加藤若一っていいます。
半年前に続けて昨日も助けてもらったみたいで、ありがとうございます」

なぜか同学年なのに敬語を使っているおれ。
主人公でレベル5で常盤台、といった要素のせいなのだろうが、
その御坂さんの返事は意外にあっけらかんとしていた。

「私は御坂美琴、よろしく。
昨日のことは気にしないで。あれは単純に私がムカついたから一発やっただけ、ただのケンカなんだから……
ていうか半年前？」

「あ、いいです。大したことじゃないんなら……
って初春さん、おれに用事があるのってこの人じゃないよな」

とりあえず状況を隣、ソファの窓側に座った初春さんに確認する

と、答えがまた意外な方から。

「私が初春さんを呼んだのよ」

もちろん御坂さんでした。

そして始まる暴露大会。

ガールズトークの始まりを悟って、ジャムマヨ入りクロワッサンの皿とともに奥の空いているテーブルへ移動したおれは、なにも間違っていないと思う。

さて、おれの後ろに背をむけて座っている御坂さんによれば。

最近、一点に突然熱が集まって、ゴミを燃やしたりビル壁を溶かしたりといった事件が多発しているらしい。

当初はボヤや小規模暴走かと考えていた治安当局だが、人工衛星の記録によれば通報の数分前、事件現場では秒間十度単位で光量と温度が急上昇しているとのこと。

これにより、上層部は事件を能力犯罪と断定。
『警備員』と『風紀委員』が捜査を始めたそうだ。

初春さんによると、関係者たちが仮に『白熱光線（ソーラーレイ）事件』と呼ぶようになったこの事件は、『偏光能力（トリックアート）』か『熱量輻射（アップドラフト）』の応用と予想され、また被害者層や現場の立地から、能力者犯罪集団どうし、あるいは『武装無能力集団（スキルアウト）』との抗争で能力が使用されたものとみられている……そうだ。

カタカナ語が多くて分かりにくいな。

さて、御坂さんはルームメイトで『風紀委員』のシライさんに、“レベル５の戦闘能力”を押しだして捜査協力を持ちかけた。
ひょっとして“あの”白井黒子（しらいくろこ）さんか？

……だが実は彼女、単に強そうな能力者と戦いたいだけであり、それを喝破したシライさんの説教が始まってしまう。
好戦的な姿勢から生活態度や趣味嗜好などなど、関係ないことまでまとめてシライさんに叱られた彼女は、腹立ちをおさえきれず初春さんに愚痴を聞いてもらおうとした、ということらしい。

……いや、シライさんが正しいだろ。
『超電磁砲』が捜査協力なんてしたら、被疑者が感電どころでは

すまない。不良どもを擁護する理由はないが、さすがに同情心はある。

あと、なぜかシライさんを応援したいおれがいる。

それともうひとつ。

スカートの下に短パンは、まあいい。

だがシライさんのセリフ引き写しとはいえ、きるぐまーを抱いて寝るとか湯船にゲコ太とかパステル色彩の下着やパジャマとか、そういう話を周りの席まで聞こえる音量で言い放つのはどうなんでしょうか御坂さん。

おれはまあ、彼女が竹を割ったその中にメルヘンが詰まっている人なんだと理解できたので、別にいいんだが。

教頭が言ってた噂話にも信憑性が出てきたな、こりゃ。

「たぶんですけど、白井さんは御坂さんを危険なことに巻き込みたくないんですよ」

そんな御坂さんに、初春さんのフォローはいりました。

内容には同意できないけど。

「キケンねえ」

どう見ても納得していない様子の御坂さん。
まあそうだろうな。
むしろ彼女が不良や犯罪者どもにとって危険な気がする。

「その白熱光線事件だって……」

「あ、そんな名前がついたんだっけ」

「最初は細い路地で、ケンカの苦しまぎれに使ったみたいな跡だったのが、最近じゃあ小道のすぐ裏や人通りの多いところで爆発が起きたりして、被害も……」

「ひっどいことするわねー」

会話が続いて、ちょっと安心する。
何より御坂さんがさっきとは別の相手、純粋に人へ害を及ぼす行動に対して怒っていたので、かなりほっとした……

とか思ってたのがいけなかった。

「それで、さっきから黙々と食べてるあんたはどう思うのよ」

「え？　そこでおれに振りますか」

ここで会話のボールがまさかの背中越し。

まあ、ご指名とあらば、まだ消えない不安について注意を喚起しておくか。

オカルトさんが、なんでもいいからしゃべれと脳内でうるさいし。

「……被害をこれ以上増やしたくないというのは、まじめな『風紀委員』なら考えるかもしれませんね」

ふたりの方に首をひねってしゃべりかける。

どれほど注目してくれるかね。

「……どういうこと？」

振り向かれた。

正面から予想外に剣呑な視線が来ました。こええ。

「御坂さん、そんな睨まなくても」

「ああいや、大丈夫だから初春さん。慣れてるし」

初春さんにお手間おかけしますと会釈してから、向き直る。
御坂さんの眼光マジこええ。オカルトさんとは別の意味でこええ。

「で、えーと、ひとつ考えてみたわけです。
御坂さんが捜査に協力することになったとしましょう。事件の前触れとされる温度の急上昇が観測されたと言われたら、すぐそこへ向かうはず」

「もちろん」

御坂さんが疑われるのは心外と言わんばかりに頷く。
その反応を待っていた。

「さて、犯人も太陽熱だけで爆発を起こすほどのエネルギー収束をこなすからには、まずレベル3以上。レベル間の壁を考えれば、レベル4でもおかしくない。
そこに御坂さんが駆けつけ、電撃をくらわせる。
ザコはそれで一掃、そこからはレベル4の『熱線砲（ブラスター）』とレベル5の『電磁砲（レールガン）』がガチでぶつかりあう、貴重な一幕が始まるわけです。
たぶん次は、大通りのすぐ脇で」

「！！」

テーブルの向こうで初春さんが驚いてくれる。反応ありがとう。
ただ、犯行現場が繁華街に近づいているといったのは初春さん自身だ。次に白熱光線が降る場所がどんなところかぐらい、予想できるだろう。

この場合、バトルそのものは可能でも周囲に大きな被害が出る。運よく負傷者がいなかったとしても、電気系統の一斉ブラックアウトは都市の生活基盤に大きなダメージを与える。
事件の捜査を主導している『風紀委員』や『警備員』としては、組織の性格上どうあっても許可できない事態だ。

御坂さんは、苦虫を噛んだような顔をしている。
もし“そう”なっても、能力至上主義の統括理事会あたりは笑って彼女を許すはずだ。御坂さんを追及しないよう、圧力すらかけかねない。
しかし、いち中学生にとって友人や教師からの小言は、何にもまさる威力をもつ。それ以前に彼女自身が、人的被害を許せない人間のようだし。
その辺を天秤にかけてくれているんだろう。

さすが常盤台のレベル5、頭の出来がおれとは違うね。
オカルトさんの知識を有効活用できない自分が恨めしい。

今の話に埋めたサギ――すべて状況証拠から出てきたおれの妄想にすぎないという事実――に気づいていないか、あるいは可能性の

問題を考えて黙ってくれている点も、個人的には好感度が高い。
ふつうなら考えすぎだが、この街の学生は教育内容もあいまって頭の回転が速いので、名門校の生徒となれば後者の可能性が大きいだろう。
常盤台はいい仕込みしてるね。

「……というわけで、戦闘力（パワー）の大きい人は危険性（リスク）も大きい、みたいな話もあるんじゃないでしょうか、『風紀委員』から見れば」

あははは、と誤魔化してみる。
御坂さんはふくれっ面をしていたが、しばらくして溜め息をついた。

「ホントにそうならいいんだけど」

「といいますと？」

「いろいろあるのはわかるけど、それ以外になーんかある気がするのよね」

そういわれても、おれとしては首をかしげるしかない。
話を聞く限り（少し変態の気があるものの）、シライさんは御坂さんと“並んで立つ”ことのできる数少ない仲間であり、気心の知れた相手のようだ。
その彼女がわからないことを、おれに理解できるはずがない。

「もちろん、それだけってわけでもないでしょうけど。
白井さんは、御坂さんのことを心配して――」

そこでいい話に持っていこうとする初春さんのもくろみは、

「お待たせいたしました。
こちら、ジャンボフルーツパフェになります」

「わあ、きたきた！」

目の前の天国に反応して出た歓声でもろくも崩れ去り、

「いっただっきま――」

「う～～～い～～～は～～～る～～～ぅ？」

「えっ」

新たな人物の登場によって、完璧に打ち砕かれた。

第二話の一　Ｂａｔｔｅｒｙ－Ｇｉｒｌ（後書き）

美琴登場。

注…

『Ｂａｔｔｅｒｙ－Ｇｉｒｌ』

「電池・少女」または「砲台・少女」。

第二話の二　多重遭遇（前書き）

多重改稿の余波でこの第１３部が一時消滅していました。
おわび申しあげます。

第二話の二　多重遭遇

「しっ、白井さん！」

声が高いです初春さん。

あと御坂さん、視線向けられた半秒後に目をそらすのやめましょうよ。

しかも首ごととか、どんだけ露骨なんだアンタ。

さて、その赤茶けた髪を頭の二か所でまとめた（しかしツインテールとは呼びづらい）女子中学生は、顔を近づけるために上半身全体を曲げて、初春さんを追及しはじめた。

「こんなところに油を売るとはいい度胸ですの。さあ、パトロールに行きますわよ」

「あ、はい、でもパフェが……」

「でももしかしもありません！
まったく何をやっているかと思えば、勤務中に……」

先ほどの御坂さんの反応からして、彼女がルームメイトのシライさんだろう。
個人的にはたぐいまれな敵前の勇気を示してくれた“郵便局のツインテール”であり、昨日会ったばかりの『風紀委員』白井さんなのだが、ここでこの展開とは世の中案外狭いな、などと思っていたおれは、

「お二方、失礼いたします。
初春は『風紀委員』の職務がありますので、ここでお別れですの」

振り向いて目より下だけ笑っている彼女に、両目をいつのまにか射抜かれていた。

「え、おれも対象内？」

「そうです！　加藤さんと初春がどのようなご関係かは存じませんが、わたくしとしては公私の区別をきっちりつけていただかないと……」

「ちょっと待てや」

どんな認識だ。
つーかおれの名前知ってるのか？
これは反論せざるを得ないと思った矢先、

「私が、初春さんにつきあってもらったのよ。彼にもね。文句があるなら私に言えば？」

うわあやめてそこで介入しないで御坂さん。
話がどんどんややこしくなるじゃないですか。

＞ｉ２１８１１｜２９３８＜

華麗に髪をかきあげる白井さんは、先輩の横槍をまったく意に介さない。

「どういたしまして。これは『風紀委員』の問題ですから」

「一般人は口出し無用ってわけ。はああ」

「お忘れですの、お姉様？
『風紀委員』のお仕事は、お姉様が思ってらっしゃるほど……」

ほらやっぱりこうなった。
ただおれとしては、この空間をどうにかしたい。また午後四時に呼び出しを食らうのはごめんだ。

なにかしら石を放りこまないと。

「えーと初春さん、結局おれの聴取ってどうなんの……」

「！　そ、そうだ！
加藤さんにお聞きしたいことが……」

おれの質問で思い出しましたと言わんばかりに、件の白井さんに引きずられていた初春さんが続く。

……本当に忘れてたのかもな、これ。
ジャンボフルーツパフェとか頼んでるし。

やはりそういう疑いを持ったのか、白井さんはおれをじろじろ見た後で、初春さんに確認を取る。

「聴取？　一体なんのことですの」

「え、えと、加藤さんはきのうの事件で人質になった人で、きのうとった調書にちょっと食いちがいがあったので確認を」

「存じております。加藤若一さん、何度か人質の経験がおありとか。
ですが、聴取にお姉様やパフェが必要とは思えませんわ。
だいいち、どうして彼は別のテーブルにいらっしゃるんですの？」

正論どうも。
あと人質の経験とか言うなし。

「お、同じ事件の関係なんですよう！」

「言い訳は見苦しいですわよ」

「……少なくとも、おれが呼ばれた理由は事件関係なんだけど」

もはやおれにも本当のことなのかその場の出まかせなのか分からないことを言いだした初春さんに対し、白井さんはあくまでも厳しい。
そのまま遅れて突っ込んだおれに向き直り、

「加藤さん、初春がご無礼をいたしました。
重ね重ね申し訳ありませんけど今日はお引き取りくださいまし、日を改めてまた事情をお伺いいたしますわ。
日時は広報で連絡させていただきますので。ではごきげんよう」

「へ？　それはどういう……」
「ちょっと待ちなさい黒子！」

問い返す間もなく。
おれの疑問と御坂さんの怒りを残して、白井さんは嵐のように去っていった。

「いったいなんなんだ……」
「何よえらそうに、二言目にはジャッジメントジャッジメントって！だったら一度くらい私が不良やっつける前に来てみろっつーの！！」

おれのうめき声が、御坂さんの怒声に紛れて消える。
それはいいのだが、

「あんたもそう思うでしょ！？」

後ろ向いてこっちに同意を求めないでほしい。
別のテーブルですからね、何度も言うけれども。

「……昨日助けてもらった立場としては、ちょっとコメントしづらいっすね」

はぐらかしながら、御坂さんのいるテーブルへ戻ってくる。

さすがに御坂さんの隣に座るなどという自殺行為はできないので、さっきまで初春さんが座っていたスペースの隣まで遠回りしました。

尻が冷たい。

「あ、そっか。あの時人質だったんだっけ」

「そういうわけで。ただ」

まあ、思うところがなくはないので、一応言うが。

「去年度の合計で、九万六千円と六時間を持っていかれた立場としては、風紀委員に多少のスピードアップを求めてもいいと思います」

「どういうこと？」

「中1時代に不良連中が巻き上げていったのが九万六千円で、そのあと『風紀委員』の取り調べでロスした時間が六時間。

『置き去り（チャイルドエラー）』の身には、ちょっと痛い数字でして」

これは事実だ。

悲しいことに、おれや初ちゃんの不良エンカウント率は尋常ではない。“いじめられっ子オーラ”というやつの実在を信じたくなる。“手”や“遮光板”がなかったら、おれの財布から泣く泣く旅立っていった野口さんや樋口さんたちの人数は、二倍以上に膨れ上がっていただろう。

だからこそ、福沢翁は絶対に引きださなかったんだけどな！

さて、おれの解説を聞いた御坂さんは、なんとなく顔に影をつくっている。と思ったら口より上が青くなってきた。一体どうしたんだ？

「……ごめん、初対面で無神経なこと言っちゃって」

「へ？　何が？」

「お金のこととか、『置き去り』とか……」

ああ、なるほど。

おれの周りには多くいたから気にしてなかったが、『置き去り』は学園都市にとって大きな社会問題で、名前が知られている割にその実数は決して多くない。

初対面でそんなことを言われれば、確かに驚くか。

しかし、おれ（正確に言えば加藤くん）は加えて人体実験の被害者でもあるわけですが、これは知られないようにした方がいいだろうな。木山先生まで御坂さんに潰されたら、それこそ目も当てられない。

信用ならない立場の人だが、感謝はしているのだ。

……目も当てられないのは、今の御坂さんも同じか。

顔がこれでもかと曇ってます。なんとか浮上させないとまずい。

というか、この人レベル5だった気がするんだが。学園都市の暗い所まで知ってるはずなのに、こんな細かいことでいちいち顔に影作ってて、よく精神が持つもんだ。

尊敬すべきこととは思いますがね。

「いやまあ、それはいいんですけど。

なれなれしいようで申し訳ないんですが、いろいろ恩を受けてますし。

郵便局では危ない所を助けていただいたようで」

必殺話題替え。

どこまで効くかは知らないが。

「郵便局……あ、あ～～！

君ひょっとして、あの時黒子といっしょにいたっていう無茶な男子？　そりゃあの子も覚えてるわけね」

効果はあったらしい。
やはりエリートは記憶力も違うものなのか。

「ええまあ。あの時は本当にありがとうございました」

「いいのいいの、困ったときはお互い様。
でもそれなら、君って『風紀委員』にも結構恩があるんじゃないの？　黒子はわからずやだけど、『風紀委員』の仕事は本気で打ちこんでるし」

あくまで“わからずや”を強調する御坂さん。
そして、発言自体は正しい。
ただ、『風紀委員』の全員が全員、白井さんほど精力的に活動をしているわけでもないでしょうしね。

「あの一件に関しては恩ですが、それ以外も含めるとどうにも。
とにかく、足で稼ぐだけじゃなくて、メンバー全体的に機動力を底上げしてほしいとは思うわけです。
“この”腕章と数台の自動二輪（バイク）だけで何でも解決するわけじゃ――」

そこまで言って気づく。
何かおかしい。

結局また安っぽい『風紀委員』批判に走ってしまったことを自ら戒めると同時に、おれは自分の右手が指さしているものをあらためて見た。

御坂さんも、同じものに視線が吸い寄せられている。

緑の地に三本の白線、盾形の模様。

有名な『風紀委員』の腕章だ。

ここで事実を確認。

おれも御坂さんも、『風紀委員』ではない。

つまり、この腕章はおれたちふたりの持ち物ではない。

同じ疑問がわいてきたらしい御坂さんと、ゆっくり目を見合わせる。

では。

この腕章は誰のものか？

「初春さん！？」

大声を出したのは御坂さん。

あっけにとられているおれには目もくれず、机に置いてあった腕章を引っつかむと

「私これ届けてくる！　あとお願い！」

とドップラーな宣言を残して、店から駆け出て行った。

あとに残ったのは、おれと手つかずのパフェ、そして三人分の伝票。

「……どうしろと」

そのまま出るのも悔しいので朝飯がわりにジャンボフルーツパフェをたいらげ、会計に向かおうとして、

「あだっ！」
「ぐぇあ」

立ち上がりざま、通りがかった女の子の顎に頭突きをかましてしまった。

言いかえれば、彼女の下顎がおれの脳天にクリーンヒット。胃が重たかったとはいえ、注意力散漫だとオカルトさん知識の評論を聞きつつ、痛みをこらえ急いで立ち直る。

「いつつつ……悪い、大丈夫か」

「ええ、はい……」

相手はまたもや中学生だった。私服なので分からないが、たぶん。左手であごの骨をおさえつつ、それでもしっかりと喋れているあたり、重いけがはないようだ。

目にみえる損害と言えば、片側を花つきのピンで止められてはいるものの基本的に後ろへ流れていたロングの黒髪があちこちに散らばり、貞子のような見た目になっていることぐらいか。

右手でしっかり抱えた、ビニールの薄い手提げ袋が印象的すぎる。

新盤でも買ったのかな。

「いや、本当に申し訳ない」

「大丈夫です大丈夫……ところで」

謝り続けるおれに、つやのある髪を整えた女の子は別の話題をふってきた。

しかもタイムリーな話題を。

「ひょっとして、頭に花飾りつけた子、見ませんでした？」

「そうですか、入れ違いですかー」

「『風紀委員』ってのも、大変みたいだね」

「ですねー、私なんか尊敬しちゃいますよ」

ちょっと誇らしげに、でもなんとなくさびしげに女の子は笑った。

しかし、この子はなぜ初春さんを探しているんだろうか。

「……つーか君は？　初春さんの知り合い？」

「あ、すいません。
　初春のクラスメイトの佐天涙子（さてんるいこ）でーす。なぜか呼び出されましたー」

「こりゃどうも。おれは加藤若一、南沢中学二年。
なぜか初春さんに呼び出されて取り残された」

「おお、ご同慶の至りで」

「あんまりめでたくないけどな」

おれがそう返すと、あっはっはと笑ってくれる。
基本的に明るく優しい子らしい。
または、そういう役割を自ら引き受けているのか。

しかし、佐天涙子か。
あいかわらずこの学園都市には、親のネーミングセンスや由来が気になる名前の人たちが集まっているらしい。おれの吉備津脱解（きびつとりひろ）という“本名”も大概だとは思うが。

やはり、ここに来てからみょうに電子機器が進んでいるのは、学園都市の科学が世界をリードしているだけではなく、“おれ”がいた世界より未来だから、という理由もあるのだろう。

いわゆるＤＱＮネームというか独創的な名前が広まりすぎて、もう誰も「おかしな名前」というだけでは特別な反応を起こさないのかもしれない。
……ちょっとうらやましい。
いや、どうでもいいか。

気が付くと、佐天さんがこちらをじっと見ていた。
……この気配は。

「……何？」

「いえ、初春とお知り合いなのかなーって」

「きのうの事件で事情聴取を受けただけなんだけど。
……初春さんから、なんか聞いてる？」

「いえ何も」

即答でした。
となると、おれは彼女と話題をつなげない。
初ちゃんあたりと喋るときは似た者同士ということもあって会話が合うが、そうでない人間相手には基本的に人見知りをこじらせて閉鎖的になってしまうのだ。
我ながら、昨日の演説はよくやったと思う。

これが“おれ”と加藤くんに共通する悪癖だった。
要するにダメなオタクなのだろう。

「うーん……。
初春さんはなんで君とおれを呼んだんだ？」

「会って二日目の男を呼ぶとは、やるなあ初春」

変な感心をしている佐天さんは置いといて、真剣に気になる。
白井さんに襟をつかまれた時の反応から考えて、昨日の事件についての再聴取がただの口実なのは間違いない。
しかし、おれは見知らぬ人に人生相談を受けるほどできた人間でもない。
そうでなくても、短期間にお互いつながっている人たちと多重エンカウントが起こって神経がすり減っているのだ。

……。

つまり……どういうことだ？

「考えてもよくわからないので、店を出ることにしました」

「加藤さん、何ぶつぶつ言ってるんですか？」

結局、御坂さんに遅れること十五分で、おれたちもレストランを出た。

知り合って間もないどころではないふたりだけで話が進むわけもない。

「いやなんでもない。

とりあえず、また会う機会があればということで。

早く新曲聞きたいだろ」

「えっ！？」

最後の一言が余計だったのか、こんどは両手で手提げを抱えこむ佐天さん。

「な、なんでわかるんですか！？」

まるで変質者を見るような目で見られた。
ひでえ。

「なんでもなにも、ビニールのぺらい手提げに正方形のシルエットがあったら、ＣＤ買ったぐらい分かるって。
おれたちの年代で中古ＣＤをピン買いするマニアはそういないだろうから、新曲って言っただけだよ」

「な、なるほど……」

あからさまにほっとしないで下さい。ヘコむから。
他にも理由はあるんだし。

「まあ、あと……」

おれも下宿にテレビはつないでいる。
ライブミュージシャンとしては破格の人気を誇り、軽薄そうな外見のわりに大人な行動や民族派じみた発言もあいまって一躍スターとなった一一（ひとつい）一（はじめ）のニューアルバムについても、ＣＭを見て知っていた。
おれはファンではないが、この人すげえ、と思ったことは何度かある。

「一一一の歌はかっこいいし、一日遅れてあせる気持ちはわかるから」

きょとんとしていた佐天さんが『Ｊｕｌｉａｎ』の入口前で爆笑しはじめ、何事かと振りむく通行人に視線で責められたおれが三分ほど冷や汗を絞り出しつづけたのは、はなはだ余談である。

第二話の二　多重遭遇（後書き）

事情聴取されただけの出会いから二日目の人が知りあいを呼びだしたのに、その用事の原因を思いつかないアホの加藤くん。
その用事が果たされることはあるのでしょうか？

注…

『民族派』
日本人の特殊性を重視する考え方。一部右翼も含む。

第三話の一　カミジョーさん

思えば、前兆はあった。
前兆はあったのだ。
気づかなかったおれの不明というしかない。

まず、二時間ほど前。

「あぢい」

暑いと口に出せばますます暑くなるという。
聴覚から脳を通じて手足の末梢神経にあやまった情報が送られるからしい。たしかこういうのを共感覚（シナスタジア）とかいうんだったな、などとオカルトさんのムダ知識で現実逃避していると、列が少しだけ進んだ。

「お、動きがあったかな」

今おれは、長い列の最後尾付近にいる。

理由は単純。特売があるからだ。

総人口の五割近くをレベル０の学生が占める学園都市にあって、“セール”や“特売”という言葉は単に食品価格が安くなる以上の意味をもっている。

要するに、貧乏学生たちがセール会場に殺到するのだ。

レベル３というランク付けがされているおれの場合、毎食ファミレスでもいちおう金が余る額の奨学金をもらっている。

ただ現実にそれをやると服も本もまとめ買いできるのが数年後になるし、借金も残っているおれはもらった額の半分以上を貯蓄しているため、生活が豊かとはいえない。

つまり、おれも気分だけ苦学生というわけだ。

こういうのを自己満足と呼ぶのかもしれないが、とくに借金については深刻にならざるを得ないので許していただきたい。

「ぎゃ――――――――――っ！！」

悲鳴が前方で響いたのは、並んですぐの頃だったか。
何か押し問答をしている雰囲気が、列の前からのざわめきでなんとなく感じ取れる。

いざこざは数分で収まったらしく、音は消える。
かわりに、裾を出した白いカッターシャツに紺のスラックスという制服としか思えない服装の男子が、背中を丸めてツンツン尖った髪を前方にふりむけ、敗北感を丸出しにして後ろの方へ歩いてきた。

「はぁ……あそこまで行って横入り扱いとは、不幸だ……」

彼のそれは独り言だったのだろうが、だいたい状況は理解できる。

何かの拍子に列から抜けてしまった彼が、直後に並んでいた学生との口論に敗北、あえなく最後尾に回らざるを得なかったのだろう。
経験者としては同情しきりだが、おれも自分の位置を譲るほどの聖人君子ではないし、そんなことをすればまた一悶着あることも予想できる。

自分より年上であろう彼の健闘を祈りつつ、おれは財布の中の残り少ない兵力とともに、また一歩自らの収穫にむけて前進した。

>i218811—2938<

次に、二〇分ほど前。

あの後、買い物袋をふたつ完備していたおかげで、おれは一週間もつだろう量の食料品を手に入れることができた。
今おれは、遠出専用の自転車（サイクル）にまたがって鼻歌を歌っている。

年度初めのこと。
数か月分の貯蓄で服でも買おうと思っていた時、なぜかオカルトさん知識体系が“必要”と強硬に主張したので、思いきって昨日の夢に出てきていた全電動の自転車を購入したのだ。

一部ではバッテリー付きチャリンコを略して“バッチャリ”などと呼ばれバカにされているが、これが意外に優れものだ。

さすが学園都市というべきか、サイレントモーター式。
強化プラスチックと軽高張力合金の組立式フレーム。
スタート時にペダルをこぐだけでモーターにきりかわり、最高時速一〇〇キロ強を叩きだしながらも無音に近いという、ちょっと怖

い性能を誇る。

オカルトさんの記憶にあるものとはちょっとギア周りが違うが、それにしてもいつもこんな乗り物を使っていたんだろうか。

ヘルメットを追加購入したおれは正しいと思う。

オカルトさんによればほとんどのサイクラーはフルフェイスのヘルメットを好むようだが、さすがにフルフェイスで電動自転車に乗る中学生みたいな真似はしたくない。

体（ガワ）は中学生だけどさ。

さて、そのカゴと後部キャリアにおしこまれた買い物袋の重みを思うとつい笑みを浮かべてしまうおれの耳に、

「ぎゃあああ――――――――っ！！」

またあの悲鳴が聞こえてきた。

しかもまたもや前方。

厄介ごとには巻きこまれたくない。

だが今日はサイクルを引っぱりだすほど遠出したので、正直回り道はしたくない。

バッテリー代もばかにならないし狭い路地でもないし、直進しち

まおう。

そう思ったおれを、今では殴りたい。

ウィ――ンと、かすかなブレーキ音が足から伝わってくる。

生活道路ということでさすがに減速しながら進んでいくと、そこには一瞬戸惑うような組み合わせのケンカが起きていた。

かたや、今朝ファミリーレストランで咆哮していた御坂美琴さん。

かたや、先ほど特売の列で理不尽な目にあっていた男子高校生。

そしてその男子高校生の周りにはジャガイモやニンジンが転がり、手前には横倒しになったスーパーのビニール袋。

さらに、サイクルを停めて混乱するおれに追い打ちをかけたのは、二人が言い争う内容だった。

「……特売品を手に入れられるかどうかは死活問題なんだ！　常盤台のお嬢様にはわかるまい！」

「こっちだって大変だったんだからっ！　汚れたスカート脱ぎだすわ、しょうがないから洗ってあげるわ、あげくの果てにはツン……」

そこで停止する御坂さん。
わけがわからない高校生とおれ。

「ツン？」

その聞き返しをきっかけに。
ボン、と音をたてそうな勢いで、御坂さんが真っ赤になった。
顔から煙が立ったのは、錯覚だったのかどうか。

「とっ、とにかく勝負しなさい、勝負！」

……御坂さんの反応を見ていて、特におれの姿も視界に入っているはずなのに何も対応しないあたりを見ていて、心当たりがひとつ浮かんできた。
元々中身がないうえ薄れつつある“おれ”の『とある』知識によれば、人型砲台ミサカの心中にあって（その意味合いはともかく）常に大きなウェイトを占めている、ひとりの男子高校生が存在するという。

……それがおれの持つ『とある』知識のほぼ全てなのだが、ともかく。

そうか。

彼が“カミジョーさん”か。

それはともかく、そろそろ声をかけよう。

素通りできる雰囲気ではない。

「あのー、大丈夫ですか？」

ここでおれがいることに初めて気付くふたり。

カミジョーさん（仮）はおれに背を向けて言い争っていたからいいとして、御坂さんは完全におれのことを視界に入れていなかったらしく、また顔を赤くする。

いや、今じゃなくて『Ｊｕｌｉａｎ』でやりましょうよ、それ。

「あ、あんた今朝の！」

「おー、そっちも特売帰り？」

ふたりの声がダブる。そして同じタイミングで目を合わせ、にらみあう。

何だこのカップル。結婚式には呼んでくれ。

「ええどうも、今朝方ぶりの加藤若一です。
特売帰りもおっしゃる通り、先ほどは災難でしたね」

とりあえず両方に答えるおれ。
だが、

「先ほどの災難って……
列に並んでるとき押しだされたことか？　それとも店内で会った？　ひょっとして、今こいつに絡まれてること？」

この返しは予想外だった。
つーか、店内でも何かあったのかこの人。

「ちょっと！　あんたがいつもいつも私から逃げまわってるのが悪いんでしょ！」

うん、こっちはなんというか予想通りの反応。
逃げまわるってのは意味が分からないが。

「逃げまわってる？」

「そうよ！
こいつ、私が勝負しろってずうっと言ってるのに、毎回毎回のらりくらりと……」

え、勝負？

「だから勝負ったって……」
「すみませんちょっといいですか」

今日会ったばかりの人と見知らぬ人の会話に割りこむとは、人見知りをこじらせたおれらしからぬ行動だが、思わずとっさにサイクルを寄せてしまった。
オカルトさんという名の後付理性も賛成しているし、いいか。

「あんたからも、何か言ってやってよ！」

「おいおい、このタイミングでケンカ大好きっ子追加か」

「いやそうではなくて……」

そしてふたりからの同時攻撃ふたたび。
能力的にも性格的にも、御坂さんと同一視されてはたまらない。

「おれはどっちかというと、路地にひきずりこまれる側です。
えーとそれで、失礼ですがお名前は」

「俺は上条当麻。
そこのビリビリ中学生に日々追い回されてる哀れな男ですよ」

「ビリビリ言うな！
あんたが勝負に乗らないのが悪いってさっきから……」

なんというか様式化した受け答えをいただきました。

しかし、この上条さん。
ひとつの物語で主役を張るだけあって、外見は軽そうでも中身は剛を制す。おれのような半端者にもひとつの信念を感じさせるお方だ。
自転車に乗ったままでは失礼にあたるだろう。

そう考えたおれは、サイクルを道路のわきに立てかけ、ヘルメットを取って

「それはお疲れ様です」

腰から上を四五度折って、お辞儀した。

言い訳になるが、これはまっとうな反応だと思う。
上条さんの言い分が、少なくとも彼から見て正しいのは明白だ。

御坂さんも上条さんを追跡しつづけていることを認めていた。
かつ、今日まで逃げ延びていることに対して腹を立てていた。
その点に関しては、言い分が一致しているのだ。

つまり上条さんは事実として、学園都市第三位の『超電磁砲（レールガン）』から一ヶ月もの間逃げまわっていたことになる。
おれごときが想像できる苦労ではないだろう。
彼女の恐ろしさを目の当たりにしたおれとしては、彼に敬意を表したかったのだ。
上条さんが、どれほど凄い能力を持っていようとも。

だが、

「ちょっ」
「あはは、そう言ってくれると上条さんは心が休まります」

笑う上条さんの快活な声を聞きながら頭を上げたおれの視界が、肩を小刻みに震わせている御坂さんをとらえたと思った時には、

「おまえらそこに直れぇぇぇぇぇぇっ！！」

もう遅かった。

御坂さんいわく、

「あんたみたいに人をバカにするやつに思い知らせてやるんだから！」

というわけで、おれはサイクルのカゴに買い物をつめこんだまま、すっかり日が落ちた多摩川の河川敷に来ている。

というより、連行されてきた。

言うまでもなく、御坂さんと上条さんの試合（？）を観戦するためだ。

御坂さんによると、この河川敷での勝負は

一、上条さんに対する御坂さんの優位を確立する

二、おれのような不心得者が失礼な口をきかないよう、力を見せつける

三、第三者をたてて、上条さんが御坂さんにかなわないことを証明させる

という目的があるらしい。

なぜ会って一日のおれを証人に引っぱりだすのか分からないが、多少なりとも面が割れていて偶然その場にいたから、というのが大きいだろう。

ひどい話だ。

最初は勝負そのものを渋っていた上条さんだったが、御坂さんが勝つまで追いかけると危ない宣言をしたため、しかたなく乗り気になった。

ちょっと話しただけだが、この人はどうも御坂さんを“ただの中学二年生”として行動している節がある。それは彼女にとってもいいことだと思うんだがな。

「悪いな、付き合わせちまって」

「いえ、首を突っ込んだ方も同罪でしょう。おれとしては、自分が雷撃を浴びないだけ万々歳ですよ」

「ほほう、君は上条さんに被害担任を押しつけると。最近の若者には年上をいたわる心ってものが……」

「なんか言った？」

「いや何も」

「特に何も」

上からどれが誰の発言か、わかっていただけると思う。

ひとり意気揚々と河川敷へついてくる御坂さんを先導しつつ、上条さんはなぜか、サイクルを押しているおればかりに話しかけてきた。

おれが、実は御坂さんとは知人とすら言えない準他人だと知った後は、何ごとにつけてねぎらいの言葉をかけてくれる。

巻きこんだ罪悪感があるのかもしれないが、それを差し引いても優しい先輩だ。

学園都市で目覚めてから小学校では六年転入、中学校では幽霊部

員で先輩というものに縁がなかったので、少しテンションが上がる。

「……ところで、上条さんはなぜ御坂さんとリアル鬼ごっこを始められたんですか」

「それがよく分かんねえんだよな。
不良に囲まれてたところを助けようとしたら、放電で全員倒しちまうし。
俺がそれを防いだら、今度は『なんで立ってんのよ』とか言われるし」

「えっ」

……なんだと？
そう、心の中でうめいたのはおれではない。
オカルトさん知識の暫定結論だ。

基本的に、能力のレベルはひとつ上がるごとに等比級数的、どころか総合評価の数だけ十を累乗する勢いで、干渉できる相手が変わってくる。
レベル３のおれがレベル４に上るには、よっぽどの一芸がないかぎりＡＩＭ拡散力場の濃度も範囲も安定度も今の二倍半ほど広げる必要がある。
レベル５は論外。
論理的にはどうあれ、実感となると圧倒的だ。

かんじんなところで非科学極まりないオカルトさん知識体系に照らしても、御坂さんのレールガンを完全に防ぐのは並大抵のことではない。

目撃経験から言えば、おれには無理。

それを。

おそらくは音速など軽く突破しているだろう、彼女の二つ名（レールガン）を生みだす圧倒的な電力を。

彼は防いだという。

もちろん、御坂さんも本気ではなかっただろう。

もしそうなら、骨付き肉が散乱していたはずだからだ。

だが、それにしても驚くべき能力には違いない。

……超能力の分類知識はないオカルトさん系の記憶回路が反応したということは、彼は能力者ではないのかもしれない。

本当に何か“別の力”を、持っているのかも。

「おーい、なに考え込んでんだ？」

気づけば無言だったらしい。
サイクルを押しつつ汗が出てきたおれの方を、上条さんが覗きこんでいた。
もう日の入りだ。この汗は外気温によるものではない。
何だ、この冷や汗？

「……いえ、僕も御坂さんの能力は見る機会がありまして」

「あんなのを俺に向けてバンバン撃ってくるんですが」

ひどいだろ？　と同意を求めてくる上条さんは、一度振り返った方がいい。
冷や汗の原因が分かった。

「それを消し飛ばす上条さんもおかしいと思います。ひょっとしてレベル５とか？」

「いや、俺は正真正銘のレベル０」

「……へ、へえ～」

これは確定かな。
オカルトさん知識がそう結論を出しかけたところで、目の前にコ

ンクリと芝生と土手の多摩川河川敷が広がった。
そして、首から背中にかけての冷や汗が最高潮。

どういうわけか。
御坂さんのターゲットシーカーが、自分にも向いている気がするのだが……

「ねえ、加藤だったっけ」

「……は、ハイッ」

気がするのだが……

「あんた居残りね」

「へ？」

気がする……

「コイツぶっ倒したら、次はあんたと勝負だから。逃げないでよ」

「ちょ、なんで」

気が

「逃げないでよ」

「……ハイ」

……気のせいじゃありませんでした。

思えば、前兆はあった。

前兆はあったのだ。

第三話の一　カミジョーさん（後書き）

ようやく主人公登場。

第三話の二　電撃のある風景

「準備完了、と」

サイクルのスタンドとチェーンを確認。
前後のカゴとキャリアにネットをかぶせ、ガードレールに密着して立てかける。
ヘルメットの紐を前輪にからめて、とりあえず準備完了。

気が進まないが、おれがいないと御坂さんは勝負を始めようとしないし、上条さんの方はそもそも手を出す気がない。
そしておれが遅いと、御坂さんが放電してくるのだ。
正確には雷撃というべきか。

土手を一番下まで降りて河川敷を小走りで進み、これから戦い始めるふたりから等距離に、正三角形をつくるような位置に陣取る。

ちらりとこちらを見た御坂さんが、口の端で笑う。
超能力者と魔術師の頂上決戦などという場にいるんだから、顔が

少しぐらい面白いことになっていても許してほしい。

「おれはいつでも」

そう言って傍観者に徹する。

とはいえ、おれとしてもこの勝負は他人事ではない。

なんせ上条さんが斃(たお)れれば、次はおれに電子の暴風が降ってくるのだから。

しかも道路橋の街頭に照らされて、視界が良好な河原で。

……なんでおれが。

そう、言わざるを得ない。

もちろん、一番そう思っているのは、いま視線の先で御坂さんに相対している上条さんなのだろうが。

＞i２１８１１―２９３８＜

「ここなら、誰にも迷惑かかんねーだろ。あいつ以外」

おれのスタンバイを見てとった上条さんが、口上を始める。

ふたりは距離をとって仁王立ちしていたが、上条さんも“おれの

いない試合は無効”という御坂さんのスタンスを知っているため、俺を待っていてくれたのだろう。
なんというかすみません。

「いつでもいいぜ、かかってきな」

上条さんの気のない挑発と同時に、左の方が明るくなる。
人間アーク灯のお出ましだ。

「言われなくても、こっちはずっとこの時を……」

御坂さんが体に電光をまとわせつつ前かがみになって

「待ってたんだからっ！」

勢いよく体をそらす。
と同時に、彼女の前方数十センチの虚空から稲妻が飛び出した。
例のアレか。

いつも思うのだが、これだけの電撃やあれだけのレールガンを生

みだす電位差を、彼女はいったいどこから手に入れているのだろう。
少なくとも人体からではないはずだ。

つーか、アレを一発目に持ってくるとは。
上条さんの能力はどれだけ油断がならないのか。

そんなことを他人事のように考える一瞬の間に、光は落下するような直線を描いて上条さんへと襲来し――

「ぐっ！」

上条さんの手前数十センチの虚空で飛散、土煙を巻き起こす。
煙が晴れると、そのむこうには左手で右腕を支え、その先の右手を開いて真正面に向けている上条さんがいた。

……なんだあれは。
いま御坂さんが放った電撃も、並大抵のものではない。
それが土煙をあげるまでに減衰され、しかもかんじんの上条さんは傷一つなし。

いったいなんだというのだ。

まるで『自分だけの現実（パーソナルリアリティ）』が否定されているような理不尽さ。

これは、能力に自負をもっている御坂さんが追いかけ回すのも分かる気がする。
少なくとも、おれはわかる。

なにしろ、非科学分野において絶対の自信があり、なおかつ超能力に関しても“おれ”すなわちキビツ系思考回路より格段に優れているオカルトさん知識体系が、いま高速回転を始めているのだから。

「やっぱ電撃は効かないか……」

ふと顔を向けると、そんなことを呟く御坂さん。
だが、それで諦める彼女なら、おれは今ここにいないだろう。

「なら！」

彼女の右手が下に突き出された。
小さく電光が散り、彼女が立っている地面の脇から黒い渦が湧きだす。
いや、なにかの粉が吹き出したような…
砂か？

「あ……なに？」

上条さんがいささか気を抜かれて眺める間にも、砂の渦は大蜘蛛の足のように輪を描いて広がり、御坂さんの右手に集まって棒のような形を取りはじめた。

「うわ、あぶ」

のたうち回る砂の触手が、おれにも迫る。

おれが“手”でそいつらをいなしている間に、その棒は剣の形で固定された。

「ちょ……おまえ、得物使うのはずるいんじゃない！？」

これには上条さんも真剣に。

だが真剣ならぬ偽剣を握りなおした御坂さんは止まらない。

「能力で作ったものだもん」

楽しげな声を聞きながら、おれと上条さんは見た。

今の黒砂の渦でまきおこった風が吹き落とした木の葉を、その偽

剣がいともたやすく両断したところを。
御坂さんが、特に何もしないのに。

「……うげ」

まさかとは思うが。
まさかとは思うが、あれは高周波振動つきじゃ

「砂鉄を振動させてチェーンソーみたいにしてるから、触れるとちょーっと血が出たりするかもねっ！」

ですよねー！
あとそんな物騒なセリフ吐きつつ走りださないで下さい御坂さん！
つーか砂鉄ってガチ鉄剣かよ！
逃げてー！　上条さん逃げてー！

「どう考えてもそれじゃすまないと思うんですけ、どぉっ！？」

叫びながらも頭を下げて、砂鉄の剣を上条さんがかわす。
そのまま御坂さんは追撃の二振り、三振り、四振り、五振り。
そのすべてをきわどくかわし続ける上条さん。
動体視力凄いなこの人。

「逃げんなぁ！」

「無茶だろ！」

……というかですね、最初の一撃からずっと、基本的にあの砂鉄剣が狙ってるのは上条さんの首なんですよね。
例外は四回目だけで。
それだって、正面から大上段だったし。

御坂さんは、勝負ごとになるとリミッターが外れるようだ。
今後の安全のためにも、覚えておこう。

さて。
ここまでくると、御坂さんが次に使う手も見えてくる。
オカルトさん知識によれば、こういうときは先入観を使うそうだ。
今の状況でたとえれば、御坂さんがその砂鉄剣を長くふり回し続けることで、上条さんは「あいつは砂鉄で剣を作って攻撃してくる」と考え始めるのだという。

だがおそらく、御坂さんの能力は電磁気力の操作。
砂鉄で作れるのは、なにも剣だけではない――

「ちょこまかと逃げまわったって、コイツには……」

あ、やべ。

「こんなこともできるんだからぁっ！」

砂鉄剣の刀身が曲がった。というよりも、柄以外が柔らかくなった。

そして御坂さんはその柄を振りぬき――

砂鉄の鞭が前方へ飛んでゆく。

上条さんの背中に向かって。

「剣が、伸びっ！？」

すみません、上条さん。

なんかフラグたててしまいました。

さっきからフル回転していたオカルトさん回路が、さらに動きを増した。
目の前の光景が、組み上げている論理の補強になったらしい。
うらやましい頭してるな。

「でぇぇっ！」

上条さんは振り向きざまに右手を伸ばし、掌で鞭を止めるような動作。
そして

ビキィィィィン！！

耳に痛い金属音とともに、砂鉄の鞭は大部分が飛び散った。
一部が御坂さんの手元に戻り、そのまま風に流れて消える。
さすがの死亡フラグクラッシャー。

……いや、ありえないだろ。
どんな能力だそれ。電気を消すだけでじゅうぶん異常なのに、電磁結合とっぱずすとか物理の相互作用なめきってる。

「ふおぉぉぉぉ、ひえぇぇぇ」
「……ッ」

自分の右手をじっと見て声にならない声を発する上条さんと、そんな彼をじっと見て何も言わない御坂さん。
そして仮説を導き出す、おれの神経回路。

おそらく、彼は魔術師よりも能力者に近い。
あるものを消滅させることにかけては、呪術のように方程式と対抗策が決まっている理論体系よりも『自分だけの現実』に頼った方が応用も利きやすい、とオカルトさん回路が主張している。
御坂さんが起こした現象をいちいち呪術的な効果で相殺（そうさい）しているのではなく、上条さんの『自分だけの現実』が、御坂さんの能力で生まれた現象を“なかったこと”にしているわけだ。

そして、その条件というのは……

「しょ、勝負あったみたいだなあ」

上条さんが上ずった声を出す。

あれは、もういい加減帰っていいですか、という意味だろう。
気持ちはわかるが、次にあれを食らうのは対抗手段がないおれなのだ。どうせ主人公になるほど心身強い人なのだし、できれば電池切れ目前まで行っていただきたい。
――御坂さんに“エネルギー切れ”という概念があれば。

おれのそんな下心は、ある意味当然に叶えられた。

「さあ、それはどうかしら!?」

当然だ。
“この程度”でひるむ御坂さんなら、おれは今ここにいない。
おれは今ここにいない。

……泣けてきたおれは、もう周囲のあちこちから砂鉄が吹きあがってきても、特に関心をしめせなかった。
いちおう周囲に“遮光板”を立ちあげて、砂鉄の侵入だけは防ぐ。
あんなものに切られれば、傷痕がむごいことになるだろう。

「おまえ……風に乗った砂鉄まで!?」

しかし、御坂さんは何をするつもりなんだろう。
もう軽く人ひとり分をこえる体積の砂鉄が空中を舞っているのだが、上条さんを物理的にすりつぶすつもりでもないかぎり、完全な無駄だ。
実際、

「こんなこと、何度やったって同じ結果じゃねえか！」

ギィィィン。

やはり、砂鉄の触手は上条さんの右手に触れただけで飛散する。
この砂鉄雲の利点といえば、街灯の光をさえぎることと派手なこと、砂鉄剣の切れ味を知っているだけに警戒してしまうこと。
理由はともあれ、注目を向けざるを得ない……

陽動？

「取った！」

背後に回りこんだ御坂さんが、上条さんの右手をつかんだ。

「よし」

……思わず声に出してしまった。危ない危ない。
またフラグか、と思ったが思わぬ誤算。
御坂さんは、上条さんの“右手”をつかんだ。

オカルトさんの推測が正しければ、これで上条さんの勝率はぐんと上がる。
なんせ彼の右手は、御坂さんには残念ですが――

「飛んでくる電撃は打ち消せても、直接――」

流れる電流も打ち消せるんです。
これほど恐ろしい能力はない。オカルトさんはそう結論しているし、おれも実際にそう思う。

「……え!?」
「うーん……」

固まる御坂さん。
考えこむ上条さん。

結局のところ、双方手を握った状態から動かず、

「……」
「ひっ！」

ただの拳骨には弱いようで、振り上げられた上条さんの腕にびくつく御坂さんを呆れてながめていたおれは、

「え～っと……
ぎゃ――――あ――――あああぁぁぁぁぁ」

わざとらしい形で“負ける”上条さんを見ることになり、自分にこれから襲いくる現実を回避できる可能性にすがろうとしていた。

「ま、まいりましたー。がくっ」

棒読みすぎます上条さん。

彼が一方的に進めようとしているこの試合ですが、いちおう私が証人兼審判のはずなんですよね。

両者ともに記憶している様子は見受けられないが。

「……ふ」

まあ、よく考えればおれに彼を止める理由はない。

このまま進行してもしなくても、今まで通りおれの身の危険に変わりはないわけだし、それどころか現状では上条さんに進行をまかせた方が、想定外の副産物を手に入れられるかもしれない。

「ふ」

おれがのりうつってしまった加藤くんがどういうキャラクターかわからない以上、こういうところで主人公から積極的におこぼれをもらわないとね。

どうせふたりとも、もう会わないだろうし。

「ふ」

ただ、逃げ出すことはできない。
自分から逃げ出したのではなく、あくまで御坂さん主導の、おれ一人ではどうしようもない状況に追い込まれなければならない。

「ふっ」

そのためには上条さんが必要なのだ。
彼の事件体質は、その不幸ぶりと御坂さん相手の立ち回りで確認済みだ。おれの出る幕ではない。

「ふっ！」

……さて、逃げないにしろ、今おれは遮光板を作るべきだろうか。
作るべきだろうな。
バチバチ音たててる人型砲台を見る限り。

「ふっざけんなあああああっ！！」

「どわっはっ」

縦一本の稲妻が走り、逃げる上条さんの右手にあたって飛び散る。
こっちにも来て遮光板が消し飛んだ。危なかった。

「真面目にやんなさいよ！
ちょっと加藤、あんた今の見たでしょ！？　どうなのあれ！？」

まあそう来るよな。
都合のいい時だけ思い出してくださいまして、まったく。

「どうって……上条さんから見れば、当然の反応だと思いますけど」

「何よそれ！」

語気荒くこちらを向く御坂さん。
タゲこっちに向いたか。いささか言葉選びを間違えたな。
もうこのままいくか。

「いや、だって御坂さんはこの勝負、勝つまで続けるんでしょ？
だったら上条さんとしては、なんでもいいからわざと負けてさっさと勝負を終わらせる……っていう……方法も……」

尻すぼみになる声は、もちろんおれ。

睨まれた。

ものすごい睨まれた。

蛇に出会った蛙という諺があるが、言いたいことがとてもよくわかる。

今おれが一歩も引かずにいられるのは、オカルトさんの冷徹な理性が残っているからにすぎない。

キッ！　と効果音がしそうな振りかえりで、今度は上条さんが睨まれる。

「あんた、そんなこと考えてたの……！？」

「違う！　いや、確かにそういう計算もないとは言わないけど、いやちょっと待てよ、だいたいお前ビビってんじゃん！」

上条さんのカウンター。

御坂さんの顔が順調に染まっていきますね。数メートル離れてたおれからも体が震えたのが見えたから嘘ではないだろうが、図星さされて逆上したのかな。

「ビビってなんかないわよ！」

図星みたいですね。

「嘘つけ。こーんな風に涙目になって、ビクッとしてたら――」

「ちょ、上条さん！」

今度は思わず叫んでしまった。
手まねとかそういう演技過剰なことしなくても！
もう移動砲台がスタンバイしてますから！

「げっ」
「逃げてー！」

上条さんのうめき声と、おれの絶叫が何を指すのか、言うまでもない。
あわてて光源から逃れるべくスタートを切る上条さんめがけて、御坂さんの電撃による槍が放たれた。

「死ねぇ――――――っ！！」」

……結局、おれは来なくてもよかったんじゃないだろうか。

無人の河原で三分ほど電撃が遠ざかってゆくのを眺めてから、おれは土手を上ってサイクルへ向かった。

先に「次はおれ」の約束を反故にしたのは御坂さんだ。

文句は言わせない。

道の脇に置いてあったおかげなのか、ふたりの追いかけっこには巻きこまれずに済んだようで、少しガードレールからずり落ちていただけだった。

ロックを解除しスタンドを跳ねあげ、ゆっくりと漕ぐ。

モーターの始動音を背景に思うのは、やはり上条さんの能力のことだ。

オカルトさん知識体系の大半を占める、学園都市では使えない呪術知識が、珍しく役に立ったといえる。

さっき脳内説明があったように、上条さんのアレは超能力と考えた方が論理的だ。

おれ自身は、まだ対案である“呪術”を信じられていないが。

しかし科学的超能力も、高度な選択干渉は高度な演算を要する。最悪、戦闘中は自分だけ安全なところに引っ込んででも集中力を維持することが必要になってくるが、彼は明らかにそうではない。つまり彼は、その場その場で消したいものを選び、対応していたわけではない。

となると。

上条さんの右手は『あるもの』を無差別かつ完全に潰し、あるいは人知の及ばぬ次元へと強制的に移動、ひょっとしたら何か別の力で対消滅させているわけだ。

ここで「消す」と断言しないあたりがオカルトさん知識の慎重さ。

“それが本当に上条当麻の能力なのか、実は誰かが彼に呪いをかけたのではないか”とか論理展開が一気に飛んだりするのは、まあご愛嬌というところだ。

で。

その『あるもの』の候補にあって、オカルトさんが挙げた最悪の予想。

それは、

『彼が不合理と判断した現象すべて』

というものだった。

……いや、なんだその世界の選択。ワロス。

笑えないけど。

……下宿に帰って気づいたのだが。

買い物袋につっこんでいた卵パック二セットの中身が全滅しており、ドロドロの卵白に白菜とニラの束が完全なまでに浸されているという事実を認識して、おれが深い絶望に包まれたのは、はなはだ余談である。

第三話の二　電撃のある風景（後書き）

書き溜めが……切れるっ……！

第三話補遺　下道真備（前書き）

「夢を取る、ということがある。
あの方の夢を、私に取らせてくれないか」

――』

宇治拾遺物語』、下道真備

第三話補遺　下道真備

ここんとこ、おれは寝つきがいい。
というより、強制的に意識を飛ばされるというべきか。

どこに？
もちろん、オカルトさんの独断と偏見による捏造古代史の世界へだ。

字幕。

上道田狭（かみつみちのたさ）による反乱が収束してから、吉備（きび）系氏族は大和（やまと）朝廷に服属することになった。

それから三百年。
吉備一族のなかでも上道氏より先に大和の侵攻をうけ、本家を皆

殺しにされて残りの家族が従属していた下道（しもつみち）氏から、ひとりの天才が世に出ることになる。

＞i233346―2938＜

今日は、この天才まわりの視点で話が進むらしい。

赤く塗られた大きな船の上で、その男は別の男と会話する機会があった。

「さて、外国（とっくに）だ」

そう海へ放つように声を出した男は、若かった。
おれから見ても若かった。
たぶん高校生ぐらいの年齢だろう。

対して、いまオカルトさんとおれが頭蓋の中にもぐりこんで視界を共有している男は、彼よりいくぶん年を取っている。
加藤くんに憑りつく直前のおれぐらいかもしれない。

「だいぶ気分を高めておいでのようだね」

「これは下道殿」

おれが視界を借りている下道の男は、若い男に声をかけた。
かなり気さくな感じだ。友人だろうか。

「そうですね、海というだけで気が昂ぶります。
故郷に海はありませんでしたから」

若い男も、素直な感想を返してくる。
この時代は田狭の乱から三百年以上の未来、つまり奈良時代から平安時代。
赤い大きな船ということは、おそらく遣唐使船だろう。

そんな重大な意味を持つ船の上で、男たちは仕事をするでもなく、上等そうな服を着て甲板でだべっている。

つまり、下道の男と若い男は遣唐使。
あるいはそれについてきた留学生ということになる。

「都育ちの方には、なんでも珍しく見えるものかな」

頭に響くような声。

快活だが、言っている内容はあまり好意的ではない。

彼は今、若い男が世間知らずのお坊ちゃんと揶揄したようだった。

奈良近辺で育てば、そりゃ海なんて見たこともないだろう。

ただ“外国”ということは、少なくとも奄美諸島あたりまで来ているはずだ。そこまで海が飽きないのは、やはり若さゆえか――

そこまで考えて、大学受験用につめこんだ日本史年表が脳内で復活した。

六世紀末から七世紀初頭にかけての最年少遣唐使。

ひょっとするとこいつは

「これは御厳しいことを。しかし、それは下道殿も同じことでは？」

「私は上京する時に、嫌というほど瀬戸の内を見てきたからね。

ただし波はこちらの方が荒い」

「さすがは大洋ということですね」

「まあ、そうなる」

若い男の名前を思い出して、やっと気づいた。

バカかおれは。

田狭さんの騒ぎを夢に見て忘れていたが、彼よりよほど名を知られた吉備氏出身の政治家が、若いころ遣唐使に任命されていたではないか。

菅原道真（てんじんさま）と並んで、学者から大臣にまでなった古代の大碩学（せきがく）。

出身地の町や駅に名前が付けられるほど有名な歴史的人物。

おれは今、吉備真備（きびのまきび）と視点を共有している。

そしてもちろん、彼と喋っている史上最年少の遣唐使といえば。

百人一首にも名を残す、阿倍仲麻呂（あべのなかまろ）に他ならない。

唐の皇帝に謁見したとき、初めてふたりの名前が字幕に流れた。
“下道”真備と“安倍”仲麻呂だってさ。
遅いわ。

さて、それで確定した下道さんが留学生として何人もの師匠の下で、勉学に励んでいた頃のこと。
なんだかんだいって二〇代前半で留学生に抜擢されるだけあり、彼は儒学を基礎としつつ天文学や兵学、さらに占術まで学んでいた。
占術といっても、ばかにしてはいけない。
この時代、人の体内や天地の様子をみて人間社会への影響を考えることは、農林水産や国政にも直結する重大な学問だった。

ともあれ、そんな政治知識を学んでいた下道さんが、割り当てられた私邸へ帰ってきた時のことだ。

ほとんど長屋に近い集合住宅の一角に、ひとりの女の人が立っている。
どちらかといえば少女と言えそうなシルエットだ。
もちろん夜なので顔は見えないが、その人が立っているのはどうみても下道さんの下宿の玄関だった。

「なんだ？」

下道さんが声に出したのも無理はない。

月明かりもない夜、女性が一人で出歩くだけでも危ないのだ。

真っ暗闇の中、人の家のまえで待ち人ともなれば、相当の覚悟がいる。

あるいは、

「妖怪のたぐいか？」

という可能性になってくる。そういうものが、まだ現実的だった時代だ。

言われるのは予想されていたのか、少女がくすりと笑った。

「妖女のたぐいではございません」

って言ってるけど、オカルトさんが夢で彼女にあててきたＣＶ、けっこう怪しい声色だからね。

展開的にたぶんこの人もオカルトさんの縁者だと思うんだが、そういう扱いでいいのだろうか。

「どうかな。酒に酔ったものは、自分が酔っていないと言いたがるものだ」

下道さんによる“自称シラフの法則”。
この頃からあったんだな。

そして、言いながら何やら墨で染めぬかれた札をとりだして構える下道さん。
さすが新米ながら占術師らしい態度だ。
さらに、そんなものを見てもまったく動じない少女。

「そのようなものは無駄ですわ、私はただの人ですもの。ところで、はるか大唐の地で親族にめぐりあって開口一番が妖怪とは、いささか冷たい態度ではございませんか？」

少女の口調が冷たい。
ただの人うんぬんは嘘を言っているように見えないが、じりじりと自宅へ近づいていく下道さんを嘲っているようでもあり、大唐（笑）といった雰囲気の声だ。

ただ、下道さんはどうも彼女が言った内容に気が向いたらしい。

「親族だと？　私の一族が入唐した記録はまったくないぞ」

言いかえした瞬間、少女の両眉がはねあがった。

「そうですか？　では、上道田狭という男のこともご存じない？」

あっ、と口をおさえる。

下道さんの反応を楽しむように、彼女は言葉を継いだ。

「私は高麗（こま）からの流れ民、備稚媛（びちえん）。

大和名では上道稚（かみつみちのわか）と申します。

田狭と百済（くだら）の女から生まれた、高句麗の吉備氏ですわ」

上道稚と名乗った少女を結局むかえいれた下道さんは、大和にある彼の私宅よりかなり手狭なその家で、使用人兼監視役の人に事情を説明し、適当に粥を作ってもらっていた。

先祖のひとりが同じというだけなのに、ずいぶんな厚遇。

まあ、海のむこうの外国に親戚がいれば、確かに嬉しいのかもしれない。

「田狭の裔と申されたな」

その菜粥をすすっている稚さんに、あらためて下道さんが声をかける。

「はい。三山浦（さんざんぽ）から移ってまいりました。

私の名もその証。稚とは、家祖・上道田狭の妃にちなんだと聞いております。

もっとも、田狭様は彼女を武王が奪ったことで起（た）たれたのですが」

「武王……大泊瀬（おおはつせ）大王のことか？」

「大和での名は長谷（はせ）、と伝えられておりますが」

稚さんの答えに頭を抱える下道さん。

そこから説明するのか、そんな声が聞こえてきそうだ。

字幕。

オカルトさんによると、長谷が本名なのだが『日本書紀』では大泊瀬と表記されている。発音がそうなってきたらしい。

まあ、信用はできないが。

オカルトさんの記憶はどうも大和朝廷や公式文献をバカにする傾向があり、これはこれで鵜呑みするわけにいかなかった。

ちなみに、この時まだ長谷さんを“雄略天皇”と呼ぶ人はいない。字幕によると、中国風の贈り名が習慣になるのは上道さん晩年のことだ。

「……とにかく、いまの答えで確信できた。

そなたは間違いなく、上道氏田狭の子孫だろう。三国に分かれ争っていたうえに大和を何かにつけておとしめようとする高麗の出で、われらが陛下の御名を知るものがいるとは思えないしな」

ここで下道さんがいう高麗とは、朝鮮半島をさす地名だ。

むっとする稚さん。

「あら、私の体も九割五分がたは高麗の血ですわ。
それに、大和が文明的に立ち遅れているのは事実でございましょう」

「もちろんさ、だから私のようなものがこうして学びに来ている。私が我慢ならないのは、単に地続きで道のりが近いから中華文明の影響を受けやすかったにすぎない高麗の連中が、われわれ倭人は気質や徳目、魂が劣っているなどと言いはることだよ」

愚痴になってきた。
脳内で、オカルトさんの盛大な舌打ち音が幻聴される。
どうも下道さんは大和万歳な考え方のようだし、遠い親戚で大和政権が嫌いなオカルトさんには耐えがたい言い方だろう。
それは稚さんも同じだったらしい。

「では下道様は、大和が唐よりすぐれているとお考えですか」

「バカな！　それなら唐から大和に学生が来ているだろう。私はただ、われわれが文明を作りあげられなかった責任を、“徳”などというどうにでも言い訳できる代物のせいにしてほしくないだけさ。

もしもだ。
もし本当に、そのせいでわれわれが文明を生みだせなかったのなら、だ。

なぜ隋はわずか三代で滅んだ？
なぜ高麗では三百年も、分国が互いに戦ばかり仕掛けあっていた？
そもそも大和からの遣唐使、すなわち文明の受けいれが滞った理由のひとつに高麗の戦乱があったことを、やつらは知っているのか？
そんな国々の帝王に徳があるのなら、それこそ神代の昔から一度も大王の血統が絶えていない大和国（こちらがわ）の方が、よほど徳にあふれているだろうが」

変に口調が激しくなった下道さんを見て、稚さんが黙りこむ。

いわゆる万世一系神話だ。
あれはどうみてもウソだが、旧三国時代の法制度や文化を土地ごとに残していた“統一”新羅よりは、確かに大和の方がまだ統一感あるだろう。

オカルトさんが盛大に脳内で不快感を表しているから、あまり言いたくないのだが。
下道さんの気持ちもわからなくはない。

この時代も、大和は後進国だ。
だからこそ遣唐使を出そうという気になったし、実際この遣隋使・遣唐使が始まってから奈良期日本の文明が作られはじめた点もある。
彼も自分で言うように、儒教を学んでいる。

だからこそ、自分たちも学習すれば彼らと同じ高みにたどりつける、という思いを否定されれば、反論のひとつもしたくなるだろう。
稚さんに愚痴るのは大人げないと思うけど。

「……すまない、くだらないことを言った」

「いえ。
それよりも下道様、お願いがございます」

「お願い？」

今の話をさっと流して自分の話題をもちだす稚さん。
スルースキルある人は優秀ですね。

「ご親族のお話を。
わが先祖が百済に逃げ去った後、吉備一族がどのような運命をたどったのか……
それをお聞かせいただきたいのでございます」

そう言って、稚さんは板の間に三つ指ついて頭を下げた。

指先に滴が落ちたのは、見間違いではないだろう。

『……それでは、田狭がたくらんだ反乱は、いまだ達成されていないのですね』

陰鬱な表情で、上道さんがそう呟いた。

字幕。

二日後、阿倍さんに割り当てられた家を上道さんが訪ねた理由が、それだった。

「だそうだ。その後大泣きされて、葬式でも出たのかと周りに騒がれた」

「……それはまた」

阿倍さんが軽く引いている。

そりゃそうだろう。三百年つづく怨みというのは相当なものだ。

「それはまた、ずいぶんと健気な女子ですね」

……あれ？

「阿倍殿？」

下道さんもおれと同じで、阿倍さんの反応が予想外だったようだ。
安倍さんが頭をかきながら続ける。

「いえ、私たち阿倍氏も、元をたどれば大王家と婚姻政策をとれる程度には有力な豪族だったといいます。
それが今ではこうして大和にかしずいていることを考えると、一族の誇りを胸にもちつつ異国で暮らしてきたその女子が、尊敬すべきではと思えてきまして」

「おいおい、昔と今は違うんだ。
そんなことを言い出したら、われわれ入唐留学生の意味がなくなるよ。
大和も独立独歩が理想になるし、何より同じ吉備氏の私なんか大王に歯向かわなくてはいけなくなる。

私はそんな無駄なことはしたくないね」

もちろん、君もそうだろう？
言外にそう含めて、下道さんがたしなめる。

字幕。
この時代、阿倍氏の権勢はすでに大変なものだった。吉備一族が地方に強いただの豪族まで成り下がっているのに対し、国政でも有力な地位を占め、立派な宮廷“貴族”へ進化したのが阿倍氏だったのだ。

だが。
都育ちのお坊ちゃんには、別の意見があったようだ。

「その方に、機会があれば会わせていただけませんか。
今はあちらも唐人とはいえ、三山浦から留学生の私宅にまで押しかけるなんて、そこらの女子供にできることじゃありませんよ。
そんな女傑の顔は一度拝んでおかなくちゃ」

朗らかに笑う阿倍さんを見て、下道さんは不気味な感触を残している。

おれも嫌な予感しかしなかった。

おれが覚えたその予感は色々と最悪な形で当たっていたのだが、
それはまた次の夜の話ということになる。

第三話補遺　下道真備（後書き）

第三話終了。

次から、やっと『幻想御手』＋αに入ります。

見苦しいところも多々あるでしょうが、このままお付き合いいただければ幸いです。

第四話の一　訪問（前書き）

ＰＶ４００００、ユニークアクセス５０００突破、ありがとうございます！
これからも精進してまいりますので、よろしくお願いいたします。

第四話の一　訪問

御坂さんと上条さんの“勝負”から一夜明けた、七月十八日。

“おれ”こと戸籍上は加藤若一（かとうじゃくいち）、自己認識では吉備津脱解（きびつとりひろ）は、初ちゃんこと介旅初矢（かいたびはつや）とともに、バスで南沢中学へ登校していた。

「しかしあれだね、つくづく『風紀委員（ジャッジメント）』と縁があるね僕たち」

「なんだろうな。どっかで不運担当を押しつけられたか」

朝の日差しがきつい。

モノレールの線路をくぐり、おれたちはしゃべりながらつり革と一緒に揺れる。

余計疲れるとわかっていても、そうでなければ陰鬱な二人旅になる未来が、ありありと予想できてしまうのだ。

「気に病んでもいいことはないよ。
僕らより苦労してる人もいるんだろうし」

「『風紀委員』とかな」

「まあ、そうだといいね。
意外に遊びに出てたりするかも」

「ひがむなって」

『風紀委員』に休みはない。
それどころか休日にこそ出動率が上がるのだから、夏休みが迫った今などはパトロールのシフトも大変なことになっているはずだ。
これがボランティアで、そのメンバーになるにも試験に誓約書に生体認証を取られるというのだから、まったく頭が下がる。
自分がやるのはごめんだが。

これは木山先生からもしつこく言われたことだ。
『風紀委員』は学園都市で治安活動にあたる組織のひとつであり、その立場は市内では公職員になる。

たとえ雇員（バイト）未満でも、役所で働くには変わりない。
そんなところのファイルに名前が載ろうものなら、加藤（おれ）くんが目覚めたことを知らなかった外道研究者B、C、Dが現れて、立場の

弱いおれや木山先生を狙ってくるのは明らか、というわけだ。

……もう遅い気がする。

郵便局といそべ銀行の事件に遭遇して、二度も調書を取られているわけだし。

後で説明するような別の理由もあるが。

ともかく。

いまエンジン音の中で明るくふるまっているように見える初ちゃんではあるが、これは単に落ち着かないだけだ。

それどころか、おそらく内心は恐慌状態だろう。

表面に出てきていないのは、それだけのプライドがあるからだ。

ただ、学校でそれを表に出されるよりは、いま片づけておいた方が互いのためにいいかもしれない。

「初ちゃん」

「なんだい改まって……」

「わかってんだろ？どうすんだよ」

水を向けると、予想にたがわず初ちゃんは黙りこんだ。
続けて促す。

「正直マユツバだぜ？　例のアレ」

「わかってるさ」

今度は間髪入れずに、初ちゃんは切り返してきた。

「だけどジャクだって見ただろ。
……いま、僕のレベルは異常なんだ」

>i218112938<

昨日の夜、珍しく初ちゃんから電話がかかってきたのは、卵とまじりあった野菜を活用するため、買ってきた一週間分の食料の三割を泣く泣く鍋にぶちこんで、豪華な豚すきをさみしく食べていた時だった。

サイレントに設定しているため、端が光るだけの携帯を手に取る。

「……なあ、ジャク」

「おー、初ちゃん。どしたいきなり」

答えながら、内心ではオカルトさん知識が起動していた。
初ちゃんの口調がおかしい。呼吸も短めで、せっぱつまっている様子だ。

「えっとさ、いま大丈夫？」

「別にこれから用事とかはないけど」

「ごめん、ちょっと相談したいことがあるんだ。今からそっち行く」

え？

思わず携帯を取り落としそうになった。
今から来るって、だいたい……

「おまえ、おれの下宿どこにあるか知ってんのか？」

「わかる。それも含めて相談したいんだ」

意味が分からない。
うちまでの道順を知ってることについて相談？

「は？　どういう意味だそれ」

「いいから。もう切るよ」

「おいちょっと待」

ブツ。

……こうして、おれにとってはその日最後の事件の前兆が終わり、

五分後、盛大に音をたてて開始された。

ドゴォォォォォォォォォォン！！

「ごあっ！？」

爆発音よりも振動で、意味不明の感嘆詞を口にのぼらせつつ、反射的に玄関のドアを開けて廊下に飛び出した。

ドアを開けるまではともかく、飛び出すのは危険なのだが。

下宿の前の路地がつながる通りを南に百メートルほど行ったところから、夜目にもわかる黒い煙が上がっていた。

「なんだ！？

あの『白熱光線（ソーラーレイ）』とかいうやつか！？」

語調はともあれ、音量ではひとりごとのレベルだったはずなのだが、

「あれも後で説明するよ。
とりあえず、中に入れてくれないかな？」

しっかりと聞かれていたようだ。

……誰に？

「どあっ！？」

またもや意味不明な感嘆詞。

いや、今回おれは悪くない。
爆発事件があってマンションの廊下に飛び出してみたら、離れて住んでいるはずの友人がすぐ近くにいたとあっては、驚きもするだろう。

「……どうなってんだ」

「だから早く入れてくれ。じゃないとごまかしきれない」

「……どうした？」

おれは半ば本気でたずねた。

どう見ても、いまの初ちゃんはおかしい。

声が何かに追いつめられているようなのは電話と変わらないが、加えて眼の下のクマが心なしか濃くなり、頬もこけている。

ついでに言えば、一日絶食したように体がふらついている。

「だから入れてくれって」

「了解りょーかい、わかったよ早く入れ」

勢いに押し切られた感が強いが、ともかくおれは玄関ドアの前から体を脇にのけて、初ちゃんの道をつくった。

一応の礼儀としてか、おれの前を通りすぎる時にちょっとだけ会釈した初ちゃんの目が、ついでに周囲をぎろりと睨みつける。

その瞬間だけ、視界全体にちらちらと遠く白い光が見えたような気がして、おれは特に関連性を見つけられぬままひるんだ。

正直、部屋は悲惨だった。

よくある学生用ワンルームマンションで、正面のベランダへつながるガラスのドアを中心に、左右にベッドと学習机が置いてある。手前右側にクローゼット、床にカーペット。

そして、ベッドの横には学習机についてきたコースターつきの引き出しが持ちだされ、その上に半分中身が残ったどんぶりが載っている。

要するに、おれはベッドに座って引き出しを食卓がわりに夕飯を食べていたわけだが、カーペットの上に放り出した様々なものや部屋干ししていた洗濯物のにおいとあいまって、何とも言えぬ異臭が漂っていた。

そんなわけで、個人的にはこの部屋に他人を呼びたくなかったのだが、

「座らしてもらうね」

ハンガーの束を払いのけてカーペットに胡坐をかく初ちゃんは、そういうことを考える余裕もないらしい。

理由はそんなものだが、いよいよ尋常ではない話のようだ。

部屋を一度見わたした初ちゃんがおれの方に目線を向けると、また部屋の片隅で小さな光がちらついた。

「おい、なんだ今の」

《黙レ》

おれは声も出なかった。

初ちゃんに黙れと言われたからではない。

いまの“声”が、耳から聞こえてこなかったからだ。

普通に考えて、驚くべきことではない。

ここは学園都市だ。

口を動かさずにしゃべる方法は、科学的に解明されている。

耳には何も聞こえないのに誰かの声がわかる方法も同じだ。

ただ、それは『念話能力（テレパシー）』と呼ばれる立派な能力だ。

『自分だけの現実（パーソナルリアリティ）』がまさしく個々人の差によって生まれることから、その原理は人それぞれだが、ともあれ初ちゃんが扱える能力ではない。
そのはずだ。

おれは黙って初ちゃんを見る。
初ちゃんは、黙って握手するように、右手を差し伸べてきた。

「……むう」

いささか戸惑いのうめきなど洩らしつつ、おれもその手を握る。

瞬間。

ドン、と感電したような衝撃が全身に走った。
思わず手を放そうとするが、腕の筋肉が言うことを聞かない。

「てめ……」

《待テ》

まただ。
初ちゃんはいったい何を……
《ごめん、回路をつくるのに時間がかかったんだ》
《回路だ？》

聞き返してから気づいた。
おれも、口を動かさない会話ができている。
しかし、なんだこの状況。ぜひとも説明してもらいたい。

《とりあえず、これはどういうことか、そこから聞こうか》

意思表示として握っていた手の力を強める。
初ちゃんの顔が引きつった。

《ちょ、痛いって。
まあ簡単に言えば、重力子の微調整で生体電流をパターン化して神経電場から直接伝播することで、君の情報伝達物質分泌量を操って会話してるって感じかな。
同じように重力子を操って電子を誘導して、監視システムいじくっといたからここまで来れたんだけど》

《なるほど、さっぱりわからん》

正直に感想を伝える。

実際、なにか回りくどいことをやっているとしか思えない。

しかし初ちゃんは取り合ってくれない。

《ただこれでも、どうしても指先の電場から周波数が体外にもれるから、あんまり秘密の会話はできないんだ。

なにか暗号みたいなもの知らない？

監視してるやつらが復活する前に体系をつくっとかなきゃ》

またわけのわからないことを言い出した。

いったいこいつは何をしたいのだ。

まあ、あまりためらっていると握手している掌がピリピリしてくるので、早めに答えるべきだろう。

おそらくこの“念話”と同じ原理なのだろうが、腹が立つ。

いちおう、暗号というか意味不明の筆記体系を、おれはひとつ知っていることだし。

《じゃ送るわ》

《ありがとう》

そうイメージを送ってよこした初ちゃんの手に、おれはひそかな復讐の念を抱いていた。

一体おれに何をしてくれたのだ、この気弱な男は。

いつぞや木山先生の前で書いてみせた、象形文字と語呂合わせの混じったオカルトさんいわく“日月文字”を伝えると、初ちゃんは素早く手を放した。

自分でも気持ち悪かったのだろう。

いちおう理屈をつけてはいたが、そういうことだと思う。

さて。

初ちゃんがいきなり発現した『多重能力（デュアルスキル）』じみた能力は、重力子を操ってこしらえたそうだ。

彼の能力『量子変速（シンクロトロン）』は、重力子を“加速”することができる。

ここでいう重力子とは学園側が適当につけた名前で、実際のところ物理学的には広い意味での重力場とでも言った方がよさそうだ。

重力子は素粒子のあいだの相互作用を伝える役割をもつ“ゲージ粒

子”で、質量ゼロ電荷ゼロ、初速からして光速という素人には意味がわからない存在なのだし。

ともかく彼はそれを加速・集束することで、ごく小さな重力異常――たとえば、手先の神経にかぎってイオン濃度が上下するような――を作りだして自分の生体電流を操作し、それをおれの手に伝えることで手の神経を少しだけ狂わせ、中枢神経に働きかけておれが『念話』を受けたように錯覚させることもできる。

そういう面倒くさい方法で、エセ『念話』におよんだらしい。

……うん、意味が分からん。

つーか初ちゃん、いつそんなことができるようになった。

そこまでして隠したい話って、いったいなんなんだ。

だいたい監視って誰の話だ。

うちのようなワンルームマンションに隠しカメラもないだろうに。

そして結局、同じ重力異常という手を使っておれと直通の“電子回線”を空気中につないでいるくせに、初ちゃんは何も話しだそうとしない。

じれてきた。

《三天九五？成？十七六（けっきょくなんのはなしだよ）》

初ちゃんがこちらをあらためて見る。
どうせ、意外に“念話”を使いこなせていることに驚いているのだろう。
そういうあたり、おれは妙に信用がない。
しかし気を取り直した彼は、すぐにこんなことを伝えてきた。

《？无十三天成九ノ四リ十？（レベルアッパーって　しってるか）》

《？无十三天一七（レベルアッパーだと）》

また知らない単語が出てきた。
少なくとも学生の下宿で話すことじゃない。

しばらく黙りこんでいると、脳内で変化が起きる。
お互いの会話を素早くするためだろう、この面倒くさい日月文字を解読・変換する短絡回路のようなものを、オカルトさんが実装し

てくれた。

さっそくその要旨を日月文字で送りつけた後で、ようやく浮かんできた質問。

《結局、それ何なんだ?》

《文字通りの意味だよ。能力開発を受けた人の『強度（レベル）』を上げるんだ》

なんだそれ。

聞いたこともないぞ。

《バカな。だいたいどうやって》

《ジャク!》

そこまで伝えて、いきなり強い電波を送られた。

顔を上げると、初ちゃんがこちらを睨みつけている。

《君も見ただろ。さっきの爆発もこの“念話”も、みんな僕の能力だ》

その点はうなずかざるを得ない。

少なくとも彼の能力は急激に伸びて――

待て。
つまりこいつは、

《お前、それ使ったのか？》

おれのいささか戸惑いがちな電波に、初ちゃんはすぐ答えてきた。

《使ったというより、聞いた、かな》

第四話の一　訪問（後書き）

介旅、ブースト発動。

第四話の二　お釈迦様の掌の上

おれの下宿に飛び込んできて、いきなり念話を始めた初ちゃんに、おれが驚いている暇はなかった。
それどころではない内容の語りが始まったからだ。

……どういう状況なんだろうね。

初ちゃんの話をまとめると、こうだ。

一週間ほど前にアクセスした音楽サイトに、隠しページがあったらしい。
おれも携帯の着メロなどをよく補充するサイトだが、学園都市の例にもれずゲテモノが多いところだ。おれが昔ダウンロードした中での色物には

『ＡＫＩＲＡ　Ｒｅｑｕｉｅｍ　～Ｖｅｒ．　Ｂｈａｖａｎａ

Ｄｈａｒａｎｉ　ｏｎｌｙ～』

などというタイトルがあったりする。映画のサントラアレンジだ。

で、その隠しページに、なんかレアそうな配信データがあった。

……この時点でつっこみたい。

投稿者名は「ＵＮＫＮＯＷＮ」、ファイル名は「ＬｖＵｐｒ．ｍｐ３」。

ちなみに曲名は『幻想御手（レベルアッパー）』。

……つっこんだら負けだと思った。

＞ｉ２１８１１｜２９３８＜

おおかた、低レベル能力者の間で広まっている“能力者のレベルが急に上がる”という噂に便乗した誰かのしわざだろうと判断した初ちゃん。

そこで捨て置けばよかったのだ。

だが、しょせんは中学二年生。そんな学園都市ならではの都市伝説に釣られるのもまた学生の特権だと思ったそうで、特に躊躇（ちゅうちょ）せずダウンロードしたという。

少しは迷えよ。

《そりゃ、もし本物だったらなんてことも考えたけどね。

レベル2じゃ不良から逃げることもできない》

そう付けくわえた彼の下心を、見透かされていたのかどうなのか。

『幻想御手』自身は特におかしなところもない、もっと言えば面白みも魅力もないただのインストゥルメンタルだった。

初ちゃんが銀行強盗のさなかにも聞いていた、あれだ。

個人的には古臭いタイプのテクノだと思った記憶がある。

まあ、そうはいってもコトは脳に関わる。

本当に効果があったとしても半月は続けて聞く必要があるだろう、などと言いつつ、その曲が妙に気に入った彼はしじゅうそればかり聞くようになった。

彼いわく

「これがスルメなんだって」

というやつだ。

彼が違和感を覚えたのは、あの『身体検査（システムスキャン）』だ。

レベル3の判定。

そして、時間をかければ大きな破壊力を作りだせる能力。

この時は、その後教頭のとんちんかんな追及があり、くわえて銀

行強盗に巻きこまれ『風紀委員』の事情聴取を受け、と色々あったので、能力のことは忘れていた。

《今考えれば、忘れててよかったよ。銀行に穴開けてたかもしれないし》

《それはシャレにならんからやめろ》

さて。

彼の能力は、“マグネシウムを燃やす程度の能力”だった。

それが“アルミニウムを燃やす程度”、さらには“金属を爆発させる程度”にまで変質していることに気付いたのは、十七日の朝のことだ。

《コンビニ帰りに缶コーヒー飲んだんだけど、ごみ箱が見つからなくてさ。

清掃ロボットがいるとは言ってもなんとなく気が引けたから、消えてなくならないかなってちょっと思ったら》

パン、と音がして。

コーヒーのスチール缶がはじけ飛んだという。

《なんだそりゃ》

《これもレベル3の能力の応用かな、とか思ってたんだ。
なんせレベルアップしたばっかりで、自分の能力がどのあたりで限界なんだろうとか、いろいろ試していた時だったしね。
けど下宿に帰る途中で――》

初ちゃんが遭遇した、というより感知したのは、異常な存在だった。

“おれ”つまり吉備津脱解は、加藤くんに憑く前は文系の大学生だった。
しかし、さらにその前の高校時代は理系だった。
その文転組のとぼしい物理知識と、加藤くんに憑依して以降に読みこんだにわか知識によれば、こういうことになる。

初ちゃんの能力は『量子変速』の重力型で、主にとても弱い相互作用をもたらす重力場をあやつる。
現実に干渉する力だけは相当なものだが、その干渉する相手が弱すぎた。
しかし彼が『量子変速』の能力名をもらったのには、理由がある。

彼は、重力場以外も認識できるのだ。

俺が知っている物理学によれば、世界は四つの力で成り立っている。

まず、陽子と中性子を結ぶ“核力”、別名“強い力”。
次に、御坂さんの能力を実現している“電磁気力”。
そして、陽子や電子を維持する“素粒子力”、別名“弱い力”。
最後に、引力や遠心力をうみだす“重力”。

それぞれの伝達物質あたりのエネルギーは、上から順に強い。
こうした力が、たとえば素粒子力でまとめられた陽子と中性子が核力で原子核をつくり、電磁気力で電子がとりついて原子ができるわけだ。
そして、その原子がこれまた電磁気力で分子に結びつき、その分子がおれたちの全てをつくっている。

さて、重力だが。

実は重力というのは、原子レベルでは無視できるほど小さい。隕石などの大質量になって、はじめてあらわれてくる。

そんな細かい力をいじっている初ちゃんが、それより億兆以上のケタで強い三つの力を感じとれないわけがない。

だいたい、すべての力を生みだす素粒子それぞれにごくわずかでも質量がある時点で、その質量を“伝える”初ちゃんの能力からは逃げられないと言える。

もちろんその中には、公共無線や携帯の電波などもふくまれているが、

《電話局のアンテナに向かわないで、空中から空中にまっすぐ伸びる電子ビームなんて、ふつうありえないよね》

結局。

そのナゾの“発信器（バグズ）”を少しだけ観察して怖くなった初ちゃんは、逃げるように下宿へ帰ったという。

《さわらぬ神になんとやら、ってか》

冗談交じりにそう伝えると、怒涛の反応が返ってきた。

《それどころじゃないよ！　僕がそのよくわからないのがある方を

見上げたら、あっちが僕の方に寄ってきたんだ。絶対見られてた》

《バカな。誰が見るんだよ。だいたい寄ってきたって、空中に浮いてんだろ？》

《空中をこっちに泳いできたんだよ！
おまけに電子ビームあっちこっちに出すし、レスポンスも早いし》

そう泣き言を言っている初ちゃんこそが恐ろしい存在だと思うのだが、そのへんは深く考えないことにする。
日月文字体系を“念話”で送った自分も、恐ろしい連中の仲間になるからだ。

《だいたい、それがなんかの発信器だって、なんでわかる》

《あれだけ光子が集束励起してれば、誰だってそう思うさ》

いささか飽きてきたおれの相槌に等しい質問にも、腹立たしげに初ちゃんは答えてくる。

ちなみに光子とは、名前のとおり光を伝える素粒子だ。
光は電波の一種だから、光子は電気や磁気も伝えている。
光子は重力子などと同じように、今の人類が観測できる最小単位の粒子で、その単位が「量子」と呼ばれる。

光が量子単位で動き回っていることを感知してしまった初ちゃん

は、“発信器”の中で多くの情報がやりとりされていると踏んだのだろう。
同類に通信もしているそうだし。

《それに》

初ちゃんが続けた次の言葉で、おれは静かに腰を抜かした。

《百メートル歩く間に十から十二個は見つけたよ、そいつら》

……待て。

百メートルに十から十二個？
八～十メートルかそこらおきに浮いてるとでも？

《そういう計算になるね。
ちなみに、ここに来るまでもだいたい同じ頻度だったよ》

《バカな》

オカルトさんからおれにうつった口ぐせで、懸命に否定する。

冷静に考えろ。

相手は空中浮遊物だ。

八〜十メートルおきというのは、たてよこ高さ全てにおいての話だろう。

つまり約七二〇立方メートルにひとつの“発信器”がある計算になる。

こういうことを笑い飛ばさずにまず考えてしまうのは、ひとえに三人分の記憶と知識が同居しているからだろう。

吉備津脱解は、ありふれた人生を送り、ありふれた原因で死んだ。

本物の加藤若一は、孤児として育ち、実験台として死んだ。

そして加藤保憲は、刀と呪術の世界に生きて、そこで死んだ。

ふたりの加藤について知っているからこそ、おれはこの学園都市で何があってもおかしくないという前提をつくれたのだと思う。

で、計算の続きだが。

学園都市は正円に近いかたちだから、端数をとって直径三〇キロとすると、面積がだいたい七〇七万平方キロ。

学園都市の周縁部では壁を越えられる位置に飛んでいることはないだろうが、中心部では高層ビル周りに飛んでいそうだ。間をとっ

て高度は五〇メートルとしておく。
学園都市全体の体積は約三五．三立方キロ。
単純に割ってやると……
《学園都市全体で、ざっと四九〇〇万個は“発信器”があることになるぞ！？》
さすがに声は出さなかったが、叫ぶように念を叩きつける。
いくら学園都市が無駄に廃（ハイ）スペックで変な方向に残念な街と知ってはいても、ちょっとこれは信じがたい。
ところが、初ちゃんの方は冷静に返してきやがる。
《そのぐらいあるかもね。上空でも交信してたし》
《常識ってなんだっけ……》
《投げ捨てるものじゃない？》
ひどい立場逆転もあったものだ。
うちに入ってきた瞬間に比べてずいぶん落ち着いてきた初ちゃんと対照的に、おれの方が疲れを感じている。

《で、この異常な連絡回線は何のためのもんなんだ?》

《そりゃ発信器対策だよ》

平然と伝えてくる初ちゃんに、こっちも毒気を抜かれてきた。

《正直今の、空気中に念話ばらまいてる方が不安なんだが》

《今のはそんなんじゃないよ。大気中の窒素に重力子を集中させて固定してる。その回路の中に充満した導電体の電子交換で会話を通してるから、まだ安心のはずだよ》

《この部屋にもいるだろう発信器連中から隠れるために、わざわざそんな非効率なことをしたってのか?》

《まさか、この部屋のはさっき破ったよ》

イラつきがおさまらないおれと、余裕すら出てきた初ちゃん。

《……破った?》

《うん、いたから引き破った。
　質量あたりの重力を五〇〇倍にしたら、自分の重みでちぎれてくれたよ。
　僕らの会話を聞かれたら、誰に告げ口されるかわかんないし》

《あのな》

……とんでもないことを平然と伝えてくる。

まあ、初ちゃんの気持ちもわからなくはない。
誰だか知らないが（どうせ統括理事会かその上の親船なんとか理事長あたりだろうが）、こういった情報収集ネットワークを作っているやつが、その存在に気づかれて喜ぶとは思えない。
だいたいこういう手合いは、自分が選んだ相手にだけ得意そうに教えてやるのがふつうだろう。
　まして、学園都市全体となれば――

学園都市全体？

おれの部屋にもいた？

ということは、当然――

おれの覚醒も木山先生の研究も、すべて筒抜けになっていた？

ほ～お。

どこのゴミクソか知らんけど、ええ根性してはりますなあ。

《で、これからどうしよう》

……初ちゃんの話がいきなり戻った。

初ちゃんの言いたいことはわかる。

『幻想御手』というインチキ臭い音楽が本物で、自分はその結果どう見てもレベル４以上になり、そしてその能力のおかげで、彼はいかがわしすぎる空中通信ネットワークに感づいてしまった。

放っておけば、文字通り災難のもとだ。

だが、自分たちで立ち向かうなんて無理。

『風紀委員』には解決するほど権力もないし、その権力の目こぼしとお情けでやらせてもらっている『警備員』が真剣に動くわけもない。

加藤くん他九人が昏睡したときだって、何もしてくれなかったしな！

気持ちを無理やり押さえつけて、答えを伝える。
ほとんどオカルトさんの提案が脳内で通っただけだけどさ。

《……まあ、そうだな。
聞かれた時だけ、『風紀委員』に知らせりゃいいさ》

《『幻想御手』や“発信器”のことはしゃべらない？》

《信じてくれるか疑問だね。知ったところでどうもできねえよ》

《なるほど。ところで、さっきからジャク怒ってる？
なんか伝わってくる波が粗いんだけど》

初ちゃん、言わないで気にしてるんだから。

《別に。人生いろいろってやつだよ。
具体的に言えば、掌（て）の上でダンスも意外と面白いってとこだな》

《ふうん、まあいいや》

そう短く伝えてきた初ちゃんが台所に目を向けると、置いてあっ

たやかんの口からいきなり湯気が吹き上がり、一瞬で静まった。

上の換気扇から、新しい“発信器”が入ってきたらしい。

それはいいだろう。

だが、持ち主に断りなくやかんの中を減圧するのはやめてくれ。

第四話の二　お釈迦様の掌の上（後書き）

『幻想御手』登場。
介旅は余計なことに気づいてしまったようです。
そして、学園都市のトップは親船最中だと勘違いしている加藤くん。

注…

『ＡＫＩＲＡ　ＲＥＱＵＩＥＭ』
（Ｃ）　芸能山城組／ビクター『Ｓｙｎｐｈｏｎｉｃ　Ｓｕｉｔｅ　ＡＫＩＲＡ』１０．　ＲＥＱＵＩＥＭ、１９９４年。
もちろん上述のアレンジタイトルは作者の創作。

第五話の一　Ｉｍａｇｉｎａｒｙ　Ｃｏｍｐａｎｉｏｎ

午前授業のうえ、『風紀委員』から繁華街連続テロの通告があったため、授業を切り上げるとすぐ帰るように全校放送があった。

「さって、帰るか」

「あれ、ジャクおとなしいね」

校門を通った途端、初ちゃんがおれの発言にちょっかい出してきた。

おまえはおれを何だと思っているんだ。

「おとなしいのが普通だろ。好んでテロの現場に行くやつがどこにいる……

おまえ推定レベル５になったからって、ヒーロー気取りはマジや

めろよ。
犠牲者はそうやって増えるんだ」

真剣に言う。
レベル5だからどうという話ではない。

前にも述べたが、ここでいうレベルはあくまで“能力の工業的価値”によって決まるのであって、対能力者戦で優位に立てるかどうかが第一義ではない。
まあ、レベルのような大雑把な分け方になるとあまり関係はないが、能力レベルが高いことで慢心などしていられないのだ。

ただでさえ、『幻想御手』でレベル5に近づいた男がここにいることだし。
他にレベルアップ済みの能力者がいない保証も、ほかの擬似レベル5が白熱光線事件にかかわっていない保証もない。

「まさか、事件の内容もわかってないのに？
郵便局の事件を君から聞いて、無茶はしないと心に決めたんだ」

だがまあ、初ちゃんは頭に血が上っていないようだ。
安心安心。

「お、いいねそれ。おれも座右の銘にしよう」

「君の座右の銘は“無理が通れば道理が引っ込む”だろ」

「なんだそれ。おれはどっちかっつーと引っ込んでる方だから」

「ないない」

治安維持の責任がない気安さか、意外に冷静な初ちゃんとそんなことを言いつつ、交差点で別れる。

おれは南西へ、初ちゃんは南東へ。

まさに“運命の分かれ道”というやつだ。

>i218112938<

歩きながら、おれは考えていた。
『幻想御手』について、である。

『幻想御手』は、超能力のレベルを上げるものらしい。
つまり、脳の演算能力を爆発的に上げているわけだ。

しかし、能力開発を受ける条件として年齢があるように、そもそも機能別に脳のどこが使われるか分かれている人間の脳では、中学生になってから爆発的に脳神経回路パターンを増やすことは有り得ない。

能力開発といっても脳に刺激を与えることが主で、その刺激に応じた演算回路を新しく作ることで前提が生まれる。

そこに『自分だけの現実』という妄想（デタラメ）をつっこむことで、“計算上ありえなくはないが普通ありそうにない”ことを起こすのが超能力だ。

……あらためて考えると。

オカルトさんが「精神障碍（しょうがい）」と切って捨てたのも、うなずける。

ところが、『幻想御手』はその前提を破っている。

初ちゃんは頭痛など、体への影響が何もないようにふるまっていた。

ということは、脳の神経回路を強制的に成長させたわけではないだろう。

つまり、初ちゃんの脳の中身は変わっていない。

だが、演算能力は増えている。

効率問題のレベルではない。すでに初ちゃんは量子単位で世界を見わけ、アルミの消滅反応を起こしている。レベル5に近づいていると言えるのだ。

……どういうことだ？

その自問に答えるように、

――しかし、事実であるから仕方がない

“声”が聞こえた。

「んあっ！？」

思わず声が出る。

それでも小声にとどめたのは、おれの理性のなせるわざか。

だがそんなことに構わず、“声”は続く。

――うつけめ

――人に背負われた亡霊の分際で、一人前に理を語るか

うわあやめてやめて。

特徴的な口調にはひとりだけ心当たりがあるけどやめて。

これ以上はやめて。

結構気にしてたんですよ。

現代異能バトル世界に迷いこんだオリキャラって時点で、天の上からいくつもの厳しい視線が注がれている自覚はあったんですよ。

この上脳内（イマジナリー）のお友達（コンパニオン）と会話って、痛々しすぎる。

――言ったとおりだ

――おれがこの世に復活した。その事実が問題だ

――ふ、ふ

おいそこ笑うな！　変な間を開けて笑うな！

などと言っているあいだにも、“声”は続く。

笑いながら。

うぜえ。

――そう邪険にするな

――おれがこうして不安定ながら復活できたのも、きさまの行動だ

――正確を期せば、あの介旅とやらいう小僧か

なんだと？

初ちゃんがどうかしたのか？

ここ数日にわたって異常事態が続いたせいか、結局頭の中から響いてくる毒電波を相手にしても普通に応対している自分がいることにちょっと傷つきつつ、おれは“声”に問い返せざるを得なかった。

――ハ、ハ、ハ

――どう、とは随分と漠然とした質問だな

――あの小僧が貴様に聞かせた電気式の音楽だ

――あれが、おれをきさまの内から力の海へと押し出したのではないか

――忘れたとは、言わせんぞ

コンクリートジャングルという言葉が、これほど似合う場所もないだろう。

学園都市を南北につらぬくモノレールと、その支柱を中央分離帯にする大通り、さらにその両側に乱立する高層ビル街。

今の時期には灼熱地獄一歩手前になるそんな場所で、おれは脳内

の声に指摘されたことを、もう一度その脳で反芻していた。

そうだった。
おれも『幻想御手』を聞いちまった。

整理しよう。
おれと初ちゃんは『幻想御手』を聞いた。
その結果、なぜか彼の能力レベルが上がった。
そして、なぜかおれの頭の中に“声”が……

いや、もう何度目かになる逃避はやめよう。
この声はオカルトさんだ。
なぜかおれの頭の中に、オカルトさんの声が聞こえるようになった。

もう何が何だかわからない。
おれの頭の中には、オカルトさんの呪術（笑）知識と加藤くんの健やかに悲惨な記憶が入っている。
むしろ、加藤くんの頭の中にオカルトさん知識とおれの意識が入っている。

それが、どうして
“オカルトさんの意識が目覚める”ことになるのか。

――言っただろう、あの電気式音楽によるものだ

――あれに身をゆだねたのは、小僧やお前だけではあるまい

あいかわらず冷めているオカルトさんのご託宣。
あんたの覚醒も『幻想御手』のせいと申すか。

――血のめぐりの悪いやつだな

――きさまの霊的地平が広がり、圧迫されていたおれの意識が復活したのだ

思考を読まれるのがつらい。
声に出せば考えを一本化できるのだが、さすがに天下の公道で独り言をつぶやき続けるわけにもいかない。

人通りがなくても、あの“発信器”のことがある。

見つかればすぐに黄色い救急車で特別病棟送り、さらに無意味きわまる“精神科医療”を受けさせられて、貴重なおれの強みであるオカルトさんが消されてしまう。

もっと悪ければ、おれの意識が消えてしまう。

二度目の死は勘弁だ。

炎天下、予想外の事態に究明を放棄したおれは、神経を高ぶらせつつ考える。

なぜ『幻想御手』を使うと、オカルトさんが出てくるのだ。

――ハ、ハッ！　このありさまでは勝負も見えた

おいてめえ何言ってやがる。

同居人なら質問に答えるぐらいやれよ。

だいたい誰が何の勝負をするというのだ。

――きさま正気か？

オカルトさんはあいかわらず嘲るだけ。

人格者ではないと思っていたが、これなら知識だけ頂いた方がなんぼかマシだった。

などと考えていると、今度はあちらから問いかけられる。

――ならば問うが、きさまは合理的精神の徒であろう

――そのきさまが、霊や神仙の秘術を修したおれを知り、あまつさえ言を交わして

――なぜ冷静になれるのだ？

その指摘には反論できない。

事実だし。

ただオカルトさんは、科学信奉者といえどもしょせんは人間であり動物であるという点を過小評価しているらしい。

まあ、学園都市をおれの目から三年も見ていれば、当たり前かもしれないが。

簡単に言うと、自分が加藤くんに憑依してしまった時点で、科学万能とは思えないのである。

そういう人間が、他にもいたという話は聞かない。

いたとしても、ひっそりと裏世界で幕を閉じたのだろう。

つまり学園都市の専門基地外どもは、その人の秘密を解き明かせなかったわけだ。

というわけで、科学で解明できないこともまだあるんじゃないかな。

――ハハハ……早まるな

――科学には限界があるからと、呪術を認めるのは危険だ

――まあいい、きさまは自分の行動に理由をつけているだけだ

――おれが教えてやる

なんかまた変なこと言い出したよこの人。

おれがオカルトに耐性ついたのは、オカルトさんのせいでもあると思うのだが。

それを『遠隔操作』にアレンジしようと思ったのも。

……うまくいくとは思わなかったけどさ。

ところが、オカルトさんが持ち出してきた“理由”は、かなり予想外だった。

――きさまの正体を教えてやろう

――なぜ、それほどまでに冷静になれるのか？

――ハッ！　なぜならば、きさまは鬼だからだ！

――きさまは鬼だ！　この学園都市とやらを破壊させるべく、

——すべての餓鬼どもから遣わされた復讐鬼なのだ！

……はぁ？

——フフ、それにしても愉快ではないか

——都市が築かれて以来何十年にわたった、餓鬼どもの生き残りたるきさまが

——このうすぎたない街を、きれいに焼き払ってやるというのだ

——おれの目的は旧敵の力の象徴を、自分の手で叩きくだいてやることだ！

——あの逆十字を血祭りにあげることが、おれの復讐の前奏曲だとすれば

——悪くはない座興だ

……もうたくさんだ。
おれ自身が電波であり、そういう存在に出会ってもおかしくないとは思っていた。
しかしこんな身近に、こんな強度のやつがいるとは。
つーかオカルトさん、今あんた復讐って言ったよな。
私怨確定ですかそうですか。

「頭いてえ……」

思わずよろけて近くのビルにもたれかかる。
足取りがおぼつかないまま、近くにあった喫茶店のテラスに腰を落とした。

「いったいなんなんだこの厨二展開」

――フン、認めないか

あたりまえだろ。
誰がそんなダークヒーローになるというのだ。
こちとらただの中学二年生だぞ。“そういう”年齢とはいえ、脳内のおともだちに発破をかけられるほど狂った覚えはない。
……今ちょっと巻きこまれ型テンプレなどと思ったのは内緒だ。

――おれは、そのぐらいの歳には鬼を見ていたぞ

私は現象を客観的に見ることができるんです。
あなたとは違うんです。

そんなばかげたやり取りをしていたおれの視界の隅に、東の方で立ち上がる一筋の光が見えた。
なにかの発射光のような……

東？

ふと気になって、初ちゃんの携帯に短縮コールでつなげてみた。

『おかけになった電話は、電波の届かないところに……』

「おいちょっとまてふざけんな」

口走りつつ、ガタンと音をたてて椅子を蹴とばしたおれの脳内で。

——奇妙な女だ

——自分は死人のように心が空ろなくせに

——生きている人間の魂を取りもどそうとする

聞き捨てならないことを、オカルトさんも口走っていた。

この時は流してしまったのだが。

よく考えれば当然のことだ。

初ちゃんは銀行強盗にあって自分の財布がさびしくなったことを第一に心配するような、ちょっとどこかずれた人間ではあるが、そ

の点も含めてなんというか思いつめる人間であり、なにより不良連中の被害者でもあった。

能力を手に入れれば見せびらかしたくなるのは人の常。

その相手を不良能力者に絞ったとて、倫理面以外に何の不思議があるだろう。

「ちきしょー！　なんで思いつかなかったんだよおれ！」

そんなことをやはり小声でつぶやきながら、おれは男の子として憧れていたアクションのひとつを実行に移している。

“屋根走り”だ。

オカルトさんの誘導をなぜか素直に受け入れて路地裏に駆けこんでいたおれは、そこで自分の“手”が目で追いきれないスピードで目標へと伸び、つかむのを感じた。

この場合、ビルの屋上にある縁石なわけだが。

――ほう、音を抜くか

とは、オカルトさんの感想。
初ちゃんが巻きこまれた、むしろ事件の中心にいる可能性があるのに、何言ってやがる。

「は？」

――喜べ、きさまの念播は音速を越えたようだぞ

「ああそう！」

言い捨てて、おれはビルの屋上に飛びあがった。
音速越えてようが何してようが、初ちゃんの危機に間に合わなければ何の価値もない。
そもそも“手”の強化は『幻想御手』を使った時点で確定なのだ。
今更感あふれる報告ありがとよ。

で、おれはその音速で飛ぶ“手”を使い、ビルの屋上から屋上へ飛び移って光の柱がたった方を目指していた。
黒煙が上がっているから、目指す方は簡単だ。
難関だったモノレールの線路も、ほとんど空中ブランコのように越えられたし。

人間焦ると、自分のキャパの範囲ではなんでもできるらしい。
『幻想御手』に頼りきりで、その原理すらわからない不気味な代

物なのに、そんなことは気にせずビルを越え道を越え、おれはいまだ煙が立ち上っているショッピングモールに降り立った。

そこであたりを見回した直後、奇妙な風音がして新たに右前方で土煙。

あっちか、とまた“手”をフル稼働させてその場所へとびこむ。

ここにきてなんというテンプレの連続。

自分でも頭の片隅で思ったものだ。

だが、

「あれ、ジャクどうしたの？
空から降りてきたりなんかして」

おまえまでテンプレートとは思わなかったよ初ちゃん。

だからさ。

まず、頬についた返り血を拭こうか。

第五話の一　Ｉｍａｇｉｎａｒｙ　Ｃｏｍｐａｎｉｏｎ（後書き）

厨二病開始。

注…

『Ｉｍａｇｉｎａｒｙ　Ｃｏｍｐａｎｉｏｎ』

直訳すると「空想上の仲間」。イマジナリーフレンドとも。

幼児が遊ぶとき、本当は側に誰もいないのに、いっしょに遊んでいる友達を“認識”すること。多くは小学校卒業までに“別れ”がある。

第五話の二　加藤若一、憤激を演ずること

日の光が通らないような狭苦しい路地で、チャラチャラした格好の若い男たちが何人もうずくまっているのは、正直胸が悪くなる光景だ。

男たちの腕や足が“ひしゃげている”事実が、その感触を引き立てる。

何人かは血だまりに沈んでいた。

肉がちぎれたか、とオカルトさんの分析。

その実行犯と思しき、手前に立っている少年の後ろ姿に見覚えがあるとなれば、なおさらのことだ。

「初ちゃんこそ、何してんのさ」

おれは努めて気軽に返す。

今、初ちゃんのテンションがメーター振り切っているのは明らかだ。

「何って……えーと、善意の協力ってやつかな。
よく『風紀委員』とか『警備員』が言ってるやつ」

朗らかに応える初ちゃん。
あんなさわやかな顔はじめてみる。

「くっそガキが……」

男のうめき声。
初ちゃんはその方向を見もせずに、左手の中指を下に向けた。
ゴンと音がして、上に何も載っていない男の体が道路に押しつけられる。

「初ちゃん、こういう派手なのはよそうや」

「何言ってんのジャク。
今まで僕ら、地味にやってきて割食ってたんだよ?」

なるべくやわらかい声をかけようと努力したのだが、失敗。
しかしまずい。
今の答えで、だいたい彼の動機が固まった。

――牛頭天王（ごずてんのう）に復讐を誓い、鬼となって帰ってきた

――あほうじゃ、あほうじゃ、加藤は最初からあほうじゃ……か

って、こんな時に何バカなこと言ってるんですかオカルトさん？

――おれの先代が嘲られたことだ

――この小僧、先代に似ている

なんじゃそりゃ。

鬼がどうとか言う論議より、とにかく『風紀委員』が今すぐ駆けつけるだろうこの状況で、一刻も早く逃げる算段を整えなければ。

おれや彼がなぜここにいるのかを説明するハメに陥る前に。

――となれば

――ここで殺すわけにはいかぬ

先にオカルトさんが動いた。
おれの意思とは関係なく“手”が伸びる。

二本の“手”が初ちゃんの首を絞め、1本が初ちゃんの右腕をつかみ

残る一本が初ちゃんの二の腕に

切れ目

深手

血

何針

だ

あ

れ

――体を返してもらうぞ

そんな声につられて、おれのもやしメンタルは早々に意識を手放した。

＞i218811―2938＜

けっきょく、おれが目覚めたのは日が暮れてからだった。
携帯にニュースが配信される時の着メロで意識が返ってきたらしい。

起き上がってベッド枕元の読書灯をつけ、あたりを見回す。
向かいの本棚に積まれた新書と文庫の山、ベッドの脇に鎮座するコースターつきの引き出しとその天板におかれたノーパソ、部屋干し特有のにおいが染みついた洗濯籠、小物が散らかり放題の床。
おれの下宿だ。

どうやってここまで戻ってきたか不審に思いつつ、携帯を開く。

おれの部屋にはテレビがない。
ノーパソからインターネット経由で情報を仕入れることはできるが、やはり携帯からのニュース速報もありがたいものがある。

そのニュース速報は、当然というべきか白熱光線事件についての記事で埋め尽くされていた。

「白熱光線事件　犯人グループ拘束」
「被害者延べ人数９１人」
「第七学区、治安悪化歯止めかからず」
「狙われたＳＥＶＥＮＴＨ　ＭＩＳＴ　関係者は語る」
「『最悪なら広島級』　専門家の分析」

最後のふたつが特に笑える。

この学園都市に、能力関係者も物理学の専門家も腐るほどいるし、実際に一部は腐っている。

近くを歩いている大人に声をかければ（そもそも成人人口が少ないとはいえ）、それは立派に“情報筋”の証言になりうるのだ。

その辺をぼかすあたり、学園都市でも報道機関は変わらない。

肝心の、例のショッピングモール……ではなく服飾量販店「ＳＥＶＥＮＴＨ　ＭＩＳＴ」での事件については、記述があまり多くない。

中途半端に終結したせいだろうか。

しかしまあ、目下最大の関心ごとは

「初ちゃんどうなったんかねえ」

ぼそっと。

独り言など出すものではない。

なにしろ声に出す時点で、脳の少なくとも言語機能分野はそれひとつに関心ごとを収斂させるわけであって、それは声に出す前から統一される。

だからして、

――案ずるな。あの小僧は腕をへし折っただけだ

オカルトさんが答えてしまうのだ。

しかもなんか聞き捨てならんこと言ってるしな！

腕をへし折った？

――あの小僧が蹴散らした莫迦どもは、みな手足を折られていた

――そのままならば、同じ場所に倒れながら切り傷しかない者が疑われよう

——そうならぬための策だ

策だ（キリッ、じゃねえよ。
骨折つったら、マスコミでは重傷あつかいだぞ。

だいたいそこまでやって、なんで信頼できるとこに駆けこまなかったんだ！
カエルみたいな顔の医者がいる病院とか。

——可能ならばそうしていた

——あの小僧の意識を刈りとる寸前までいったのだ

ならどうして！

——人の足音と女の声が聞こえた

誰か知らないが、助けを呼んでくれたといいけど。
つーかどこの病院に運ばれたんだ。
それぐらい把握してるよな！？

——急くな

——確か、水穂機構病院といった

はい死亡フラグ立ちましたー。

学園都市で「機構」とか「委員会」とか、公的組織がつくった病院が怪しくないわけがない。

そう、たとえばあのクソいまいましい木原幻生（きはらげんせい）がトップに収まっていた

“先進教育局木原研究所付属特殊学校法人ＲＦＯ”

とかな！

どうも学園都市の研究者たちにとっては、あの木原のクソジジイは学者を多く輩出してきた木原一族の大元締めとして尊敬され、みずからも研究成果について高い評価を受けるべきお方らしい。

レベル６誕生をめざす“システム教”の大本尊というわけだ。

だがおれにとっては、おれたちを使い捨てたゴミ屑にすぎない。

ついでに、木山先生ほか多数をだまくらかした件もつけくわえておく。

そんなに実験したければ身内を使えと。

現在は行方不明と言われてはいるが、単なる雲隠れだろう。いずれは大手を振って歩きだすに違いない。
今死ねすぐ死ね骨まで砕けろ。

で。

「その病院はどこにあるんだ」

――手元の電算機（コンピュータ）は張り子か？

――おそらく、今から向かっても面会はかなわぬだろう

分かってるよ。
午後七時を回っている。面会時間はそろそろ終わるころだ。

……つーか、オカルトさんパソコンが分かるんだね。
よく考えれば、自称加藤保憲（かとうやすのり）（１８６５年～１９９８年）だし、“あっちの世界”では亡くなる前にゲイツの覇道が始まってたわけか。
そう考えると、意外に身近な人だな。

だが、明日にでも面会にいかないと。

直接的に初ちゃんが入院する原因をつくったのはオカルトさんであり、つまり対外的にはおれだ。
なにより、おれも一歩間違えば同じく担ぎ込まれていたところだったのだ。

そこまで考えて携帯を開き、着信があったことに気づく。
時刻は午後二時すぎ。
だいたい、おれが気絶したころだ。

この時間帯に俺と連絡を取りたかったということは、『風紀委員』あるいはただのろくでもない連中だろう。
知らない番号だったが、一応非通知でリダイヤルしてみる。

こちらの番号をばらさないためには公衆電話があればありがたいのだが、下宿の近くにそんなものはない。
ろくでなしならすぐ切って着拒すればいいが、『風紀委員』だと後が怖い。

非通知でコールすると着信拒否されました。
わかったよ普通にかけるよ。

「もしもし？」

電話の主は白井さんでした。
とても意外。
あと不気味。

「夜分に折りかえして申し訳ない。
つーかなんでおれの携帯の番号知ってるの」

「おとといの調書にご自分で書きこまれてましたわ。
それで、本題なのですが……」

受話器の向こうから小さな呼気音。
なにか重大発表でもあるんだろうか。
ひょっとして、初ちゃんに何か？

「……落ち着いてお聞きになってください。
あなたのお友達の介旅初矢さんが、例の白熱光線事件で逃走した
犯人グループに巻きこまれ、病院に運び込まれましたの」

「……は？」

思わず問い返した。
病院云々は、おれとしてはもう知っている。
だが“攻撃され”ならともかく“巻きこまれ”ってどういうことだ。
ひょっとして『風紀委員』は、彼の暴走を知っているのか？

「介旅さんの命に別状はありません。
ただ容体は安定しているそうですが、決して軽いケガではありませんわ」

「……って、具体的には」

「わたくしがうかがったところでは、両前腕部の深部組織熱傷、右手指に多数の筋肉裂傷と脱臼、同じく右前腕部裂傷に上腕複合骨折。
このような結果になったこと、『風紀委員』としておわび――」

「いや、待てよ」

おれはあわてて口を挟んだ。
ケガが増えている。
初ちゃんの責任が問われる前に、こっちから犯人と彼女たちの責任ということにして、言いたいことを言っておく方がいいだろう。

実際、一般人を犯罪に巻きこんだのは『風紀委員』の落ち度という建前なのだから。

「なんで初ちゃんがその場にいたんだ！？
おかしいだろ、おれとあいつは南沢中の西交差点で別れたんだぞ。
繁華街には寄らずに！
犯人グループが逃走もなにも、おまえらが今日封鎖してたのはあのセブンなんとかっていうデパートだけだろうが！」

意図的に甲高い声で叫ぶ。
これも携帯ニュースで確認したことだ。

正確には、セブンなんとか（これも真剣に名前を忘れた）を封鎖していたのは青色灯の『警備員』だが、同じ陣営ということで通じるだろう。

「ええ……」

さすがの白井さんも、すらすら言い訳は出てこないようだ。
ということは、初ちゃんの暴走は知らないのか。

それなら確かに詰まるだろうさ。
心中で毒づき、そんな俺の精神状態をオカルトさんが嗤う。

――きさま、よほど未練があるとみえるな

未練ねえ。
そりゃそうだ。あるに決まってる。
かなり責任転嫁が入っているが、それでも初ちゃんをこんな状態にした責任の一片は、まぎれもなく『風紀委員』にあるのだ。
おれがあの暗い路地に降り立った時、倒れ伏す数人の不良どもと、ひとりで右手を開閉しながら不思議そうな顔をして突っ立っている初ちゃんしかいなかった。
繰り返す。
不良と初ちゃんしかいなかった。

つまり。
白熱光線事件、特に大型ビルの一角が吹っ飛ぶような大規模テロの初動調査であっても、結局のところ初ちゃんの立場はあいかわらずだったわけだ。

“有り金を巻き上げられた後で事情聴取だけ受ける”役だったわけだ。

「あいつら来んの、いつも事件が起こってからだろ？」

学校で初ちゃんを狙っていた、某たかり屋のセリフだ。
そいつはおれが屋上まで引き上げて逆さ吊りにしたが、まあいい。

あの場に初ちゃんが行かなければ良かった、と言うのは簡単だろう。
しかも、

――意図して向かったのだぞ

ああ、そうさ。
オカルトさんの言う通り、彼は自分からあの場所に近づいたのだろう。
おそらくは不良どもに復讐するために。
おれはオカルトさんと違って、そういう考え方は嫌いだ。
しかしそれでも、ひとつ確信をもって言えることがある。

今回、犯人どもが逃げるついでに焼こうとしたのが初ちゃんでなくとも、その人は同じように“後で事情聴取だけ受ける”役に回っていただろう、と。

白井さんの声明発表が再開される。

「介旅さんが現場を通りがかったことは、不幸としか言いようがあ

りませんわ。
もっとも、そのおかげで犯人たちを確保でき――」

「あ？　今なんつった？」

特に意識していないのだが、低い声が出てきた。

頭の奥底におしこまれた理性が、自重しろと叫んでいる。
オカルトさんはそんなおれに爆笑中だ。

理論的にはオカルトさんの反応が正しい。
今のところ、中学高校の『風紀委員』は一校につき数人が原則だ。
マンモス校ならいざしらず、校外で活動するメンバーは学校にひとりといっても過言ではない。
要するに人手不足なのだ。

逆に言えば、白井さんという優秀な戦闘向き能力者が前衛につき、

さらに協力者として一般学生最強の戦闘力をほこる御坂さんを迎えている一七七支部は、『風紀委員』としては非常に優秀と言える。

その一七七支部にくだらない理由で文句をつけているおれが、オカルトさんには滑稽でしょうがないのだろう。

だが、おれにとって初ちゃんは、加藤くんに憑いてから初の友人だ。

同時に、これまで『風紀委員』が助けに来てくれなかったのは、自分たちがつまらない事件の被害者だからだ、と傷をなめあってきた仲でもある。

その前提が崩れた今、おれは平静を完全に失っていた。

初ちゃんの非と『風紀委員（あいつら）』の失態は別問題だ、と考えられるほどに。

「初ちゃんのおかげで犯人確保できた、だ？

それはあれか、初ちゃんが犯人連中とやりあったってことか？」

「現場検証からは、そういう結論が出ておりますわ。

わたくしたちが到着したのは、ほとんど事態が収束してからですので、なにぶん――」

「おいガキ。
てめえふざけんなよ」

今度こそ。
遠慮や理性を振りきって、おれははっきりとブチ切れた。

オカルトさんが逃げたときにあの路地へやってきたのは、『風紀委員』ではなかったというのか。
つまり、初ちゃんはオカルトさんに痛めつけられた状態で、まだ立ち上がってきていた犯人どもと戦い、両者ともに別の誰かに叩き潰されたことになる。
前半はおれとオカルトさんのせいにしてもだ。

冗談もたいがいにしろ。

「『風紀委員』が来たころには、もう全員倒れてたってか。
つまり、初ちゃんは時間稼いでたわけだな？　風紀委員以外の誰かが来るまで。

誰が来るまでの時間だ？」

「それは……」

頭に血がのぼり、けっこうな速度で飛躍した論理を繰り出すおれに、白井さんが言葉を途切れさせる。

だが実際のところ、おれにはもう予想がついていた。

オカルトさんが加藤くんの体を操って“手”を飛ばした時、初ちゃんの二の腕に切り傷が入るのをおれは見た。

初ちゃん自身が言っていた“壁に切れ目”というやつを再現したのだろう。

そしてそのあと、オカルトさんは初ちゃんの腕を折ったと言っていた。

つまり、ここまでで白井さんの言った

“右前腕部裂傷に上腕複合骨折”

は、納得がいく。

残るケガについても、推測はたやすい。

――手指の筋肉裂傷と脱臼は、半端な魔術師に特有の症状だろう

――おおかた手を前に突きだして、霊力を放つか吸うかしたのだ

――そこで霊力が暴れ、体が傷を負ったわけだ

というオカルトさんの講釈で、手の指のケガは説明がつく。学園都市風に言い直せば、初ちゃんの手指はＡＩＭ拡散力場の軽い暴走による負荷に耐えきれなかったということになるだろう。

で。

残る初ちゃんのケガは――

「答えられません『風紀委員』の守秘義務です、ってわけだな。オーケーオーケー。じゃあ質問を変えるか。……さっき言ってた“両前腕部の深部組織熱傷”ってのは、誰がやった？」

第五話の二　加藤若一、憤激を演ずること（後書き）

責任を『風紀委員』になすりつけて怒っているふりだけするつもりが、結局マジギレしていた大人気ない加藤くん。

注…

『牛頭天王』

いわゆる祇園さん。日本神話のスサノオ、蘇民将来物語の武塔神、仏教の薬師如来、陰陽道の天道神など、およそ古代日本にあったほとんどの宗教に出てくる神と同一視されるチートキャラ。

中国出身とも朝鮮出身ともいわれ、「異国の神」「旅する神」「疫病神」……要するに“理解不能な神様”として恐れ敬われた。

“オカルトさん”が信仰している。

第五話の三　電話

「“両前腕部の深部組織熱傷”ってのは、誰がやった？」

「加藤さん？　いきなり何をおっしゃいますの」

調子にのったおれは、自分とオカルトさんがやったことを棚に上げて、白井さんを絶賛問責中だ。

電波の向こうで戸惑う白井さんの声がノイズ交じりに。

誰か盗み聞いてるのかな。まあ知ったことじゃない。

おれの念頭にある人なら、たいがいの困難は自分だけで切り抜けるだろう。

そうでなければそれでよし、オカルトさんとおれが得をするわけだ。

“原作”のストーリーを知らない身としては、もうそのあたりのことを考えないようにしている。

ともあれ、今はこの演説を続けねばならない。

「答えろ。
初ちゃんのケガは手のいろいろと腕のヤケド、切り傷、骨折だ。
切り傷と骨折は犯人グループにやられたんだろう。手の指がなんとかってのは、能力を使おうとしたんだろう。初ちゃんその辺こらえ性がないから」

「では――」

「で、ヤケドはどうなんだ」

自分でも、白井さんにつらく当たってばかりいる事について、思うところはある。
だが、今は気にする余裕がない。

熱傷と裂傷を併発すると、最悪感染症で寝たきりだ。
そうした原因が白熱光線事件の犯人グループ以外、おれの予想でいけば『風紀委員』側の人間となれば、冷静ではいられない。

「まさか白熱光線の能力者がやったとか言わないよなあ。
犯人はあんなでかいビルから黒煙吹けるような実力の持ち主だ。
まともに食らってたら、初ちゃんは今ごろ影しか残ってないだろうよ。

犯人グループの別人って線もない。
あたりまえだ。もっと強い能力があれば、そっちを犯行の前面に出す。
だから犯人ども以外で、しかも体の内側にヤケドを通せる高レベルの電気系能力者が、初ちゃんを焼きやがったんだ。
てめえ『風紀委員』なら、そっちも知ってるよな。
捜査してないんだから、もう犯人分かってんだよな。

もう一度聞くぞ。初ちゃんのヤケドは、

誰がやった？」

……沈黙。

沈黙。

沈黙。

チッと大きく舌打ちすると、受話器の向こうから息が漏れてくる。
まだ切ってはいないか。

「で？」

吐きだすように受話器のマイクへ声を押しつけると、

「……ですわ」

返答の残骸らしきものが電送されてきた。

「あ？　聞こえねえよ」

「……介旅さんを倒したのは、御坂美琴（みさかみこと）お姉様、ですわ」

だろうな。

自分でいうのもなんだが、おれがあそこまで尊大な態度をとっても白井さんが怒らない時点で、彼女の身内が何かやらかしたとは思っていたんだ。

予想がここまであたるとは思っていなかったが。

しかし、どうやらあの支部に、この件で犯人になる可能性があるような『電撃使い（エレクトロマスター）』はいないらしい。

これで大事なことは聞きだせた。今の会話もそれなりに効果があっただろう。

これ以上回線をつないでいる必要はない。

「もういいわかった。

たかだか一学生に『風紀委員』おん自らのご連絡、このカトージャクイチ感謝の極みであります。明日初ちゃんの見舞いに行くよ。

これからは、言うだけの仕事はしてくださいね。じゃ」

「加藤さん、お待ちくだ」

おれは携帯を乱暴に閉じ、ベッドに寝転がった。

行動が厨二じみているとは思う。
ある意味、年相応の反応かもしれないが、それでは学園都市でやっていけない。

白井さんには、後で真剣に謝罪しなければならないだろう。
まだやったことのない土下座も視野に入れねば。

だが、それは今ではない。
そう思うことにする。

>i218112938<

白井さんにどうみても八つ当たりでしかない罵声をあびせたことで、おれ自身にも何か悪い影響が出ているらしい。

よく考えてみれば、ＫＹだった吉備津脱解の頃はともかくとして、“おれ”が加藤若一に憑りついてからは、こうした態度を誰にもとったことがないような気もする。

そんなことする余裕がなかったというべきか。

そりゃそうだろう。

木山先生にもカエル顔の医者にも、おれが恨み言をぶつける資格はない。

ふたりともおれの社会復帰に、かなり手を貸してくれた。

そもそも彼らは、“おれ”の存在に気づいている節がある。

脳波の周波数が子供にしては早いとかヒソヒソ話してたし、今からするとフラグでしかありません。あの時はいい方法だと思った“架空の記憶”の話も、どこまで信じてもらえたか。

そして『取り替えっ子（チェンジリング）』の可能性を考えながら、それでこっちを責めるどころかいまだに“加藤くん”として扱ってくれる木山先生の心労その他を考えると……

無理無理。

泣きつくとか。

まあ、泣きつこうにも物理的に無理なんですけどね。

木山先生は通告なしで携帯とアドレス変えてるし、カエルのおっさんとも同じころから会えていない。ふたりしておれから姿をくらましたタイミング的に、なにかの研究で忙しくなったんだろう。

心身両面で不安ではあるが、今のおれには他にも不安要素が満載だ。

大人より身近な人を心配するのが筋だろう。

――ハ、ハ、ハッ！

……不安要素のひとつが介入してきたけどな。
オカルトさんうるさいです。
今どっか笑うポイントあったか？

――これだからうつけと言うのだ

――きさまもしょせん憑霊か、おのれの現状を理解しておらんな

そんなことを言ってあざわらうオカルトさんだが、おれは言い返したい。

現状を理解できるやつがいたら名乗り出ろ、と。
今すぐこのポジションかわってやる。

だいたい人のことを憑霊憑霊って、あんたも似たようなもんでしょうが。
しかも意識が最近まで戻らなかった点では、おれにすら劣る。

――ハッ、違うな！

――たしかにおれは今日覚醒したばかりかもしれん

――だがそれは、この体があまりにも虚弱すぎたためだ

えー、何その理屈。
加藤くんに謝れ。

は？

――自身に何をもって謝せというのだ？

――今日あの時、あらためておれはこの体の主となった

――正確には、これまでもおれはこの体の主であったのだ

――あのくだらん電気実験のせいで、きさまという横槍が入ったにしてもな

どういうことだ？
オカルトさんの言っていることが正しいとすれば、おれが憑りつくより前からオカルトさんは加藤くんに入りこんでいたことに……

――バカな！　入りこんでいたのではない、おれとしての認識は

天来のものだ

――生まれでた時から、すでにおれはこの体に備わっていたのだ

それこそ“バカな”だ。

いくらオカルトさんが魔術師だろうと、子供の脳に大人の意識をすりこめるわけがない。

だいたい、それは昔の陰陽師が使ったといわれる術じゃないか。

――ほう、反魂の術を知るか

――きさま、陰陽の端くれか？

その肯定はいらなかった！

彼に“オカルトさん”とあだ名を付けたのはおれだが、本格的にどんどん言動がオカルティストっぽくなってるぞ。

魂を戻すとか笑えないから。

――きさまの好きなように言いかえることもできる

――脳神経細胞の細部伝達波形をまるごと転写した、と言えばわかるだろう

どっちにしろ電波トークなのは変わらないし。
なんとなく言いたいことはわかる。要するにオカルトさんが加藤くんに“転生”したと言いたいんだろう。
あるいは人工的に意識を写したか。

どっちでもいい。
この学園都市でも、大がかりな機械なしにそういう実験を行うのは不可能だ。説得力がまるでないのは変わらない。
あと、少なくともキビツ系の“おれ”については

「霊力だなんて冗談じゃない」

つい声に出してから“発信器”のことを思い出す。
あわてて頭の中だけの答えに切りかえた。

――霊力だなんて冗談じゃない

――おれはただ、安倍一族の悪事を研究していただけですよ

その瞬間。

――ハ、ハ、ハッハッハッハッハハハハハハハ！！

オカルトさんが嗤いだした。
なんだ、いったいどうした？

――安倍の悪事か！

――ハッハッハッハッハ、これは面白い！

――憑霊よ、きさまとは長い付き合いになりそうだな、ハハハハハ！

安倍晴明（あべのせいめい）。
いわずと知れた、日本一有名な陰陽師だ。
この人が講談からよみがえり現代でメジャーになるには、荒俣宏（あらまたひろし）さんや夢枕獏（ゆめまくらばく）さんなどオカルト作家のみなさんの努力が大きく影響している。しかし安倍晴明は、彼らが描いたほどヒーロー的存在とは言えない。

特に荒俣さんがのちに学外で発表しているように、しょせん安倍晴明は宮廷魔術師で、つまり役人だ。陰陽師でありながら地方の国司までつとめている。

のちにボスキャラあるいは噛ませ、時に彼の輔佐役をわりあてられた蘆屋道満（あしやどうまん）のような連中の方が、生活に密着した役割を担っていた。

こういう民間陰陽師は、お坊さんの格好をしていたため法師陰陽師（ほうしおんみょうじ）という。

奈良から平安の時代は仏教僧すら国家公務員だったし、公式記録に残っている貴族の味方が正義の味方になるのは仕方ない。だから今では暴露研究が盛り上がるのだが。

さて、オカルトさんは安倍晴明に恨みがあるらしい。蘆屋の一族なのか？

――バカな！　おれは道満と関係はない

――ただ、晴明や郎党がひきつぶした者どもの怨みを背負っている

晴明や郎党というのは、おそらく彼の子孫や陰陽師公務員たちの

ことだ。
彼らが“ひきつぶした”のは……

――ちがう！

――晴明の郎党とは、すなわち認められ位を昇ったヤマトのことだ

ヤマト？
貴族のことだろうか。
しかし、奈良時代の日本貴族というのは、ほとんど政府の要職どころではなく公職全てを独占する勢いだった。
氏族のトップが政治家になる時代だから仕方ない……

あれ？
そうすると、オカルトさんの狙いは

《一一一十？一十八（ジャク　いまちょっといい）》

そこで唐突に、初ちゃんから“波”が来た。

たぶん初ちゃんは、おれの頭が冷えるのを待っていたのだろう。
昨日波が粗いとか言ってたし、おれの居場所さえわかっていれば、おれの感情を見るのもたやすいはずだ。
しかし、こう脳内の電子を見られると、オカルトさんもすぐバレそうだな。

《……初ちゃん、離れててもこれ通じるんか？》

例の日月文字で返事を送る。
オカルトさんが満足そうな反応を見せているあたり、おれの日月文字文法は間違っていないらしい。

《いや、『風紀委員』支部から回路は繋いでたんだ。
僕らが話すことって、携帯なんかで気楽にしゃべるわけにいかないし》

ごもっともです。

《……なんか待たせたみたいで悪い》

《いやぁ、なんか照れるね、ああいうこと言ってくれると》

《何が？》

《『風紀委員』にあそこまで強く出てる人、初めて見たよ》

そして全部聞かれてたというね。

もういちど釘をさすか。

《照れるね、じゃねえよ。

そもそも初ちゃんが突っ走らなきゃああはならなかったんだぞ》

《ジャクだってけっこう容赦なかったじゃないか》

《いや、あれは……》

言い訳できないのはこっちも同じなんですけどね。

《そういえば能力でカッター使えるようになったんだね。腕五〇針は確実だってさ。

僕が悪かったけど、もうちょっと手加減してほしかったな》

《その件はマジすみませんでした》

さすがにオカルトさんの所業は正当化できない。

白井さんの前では、おれがやったってバレてないからでかい態度とったけどね。

ここんとこクズ化してるおれがいる。

《あいつら連携して能力使ってくるから、結構つらかったんだよあの後》

《連携？》

《それがさ、あいつらのトップが三人いて、全員レベル2とかだったんだ。

で、一人めが光をねじまげる能力で、二人めが光を増幅する能力で、最後のやつが熱を集束する能力だったんだけど、三人そろうと強力なビーム砲ができあがるってわけ》

なんと。

複数の能力者が協力していたとは予想外だった。

というか、他人の能力と演算結果を一瞬で把握して自分の能力につなげられるだけの頭があったら、とっくにレベルが上がっていないとおかしいんじゃないか。

《そんな芸当できるのか？》

《もともとつるんでたみたいで、呼吸はあってたよ。
それに、『幻想御手』使ってからは互いの演算がだいたい予想できるようになったぜ、とか自慢してた。
その隙にひとりビルの屋上まで逆バンジーやらせたけど》

おまえも容赦ないな初ちゃん。
というか『幻想御手』ってそんな効能もあったのか？

《それは『幻想御手』のおかげと言えるのかね》

《僕らみたいに、こういうことやってるのかもしれないね。
光をねじまげる能力者もいたし、まさに光子通信ってやつだ》

《いや、その理屈はおかしい》

《ハハハ》

文字でわざわざ笑いを送ってよこす初ちゃん。
入院中だというのに、ずいぶん余裕があることだ。

《おまえ平気そうだな》

《平気ってわけじゃないよ。ただ鎮痛剤打たれてるし》

こうして、結局おたがいに大事なことはなにひとつ話さないまま、和やかな会話が続いていたのだが。

さて、そろそろ互いに謝罪でもするかと思ったその時。

――小僧、誰かに口を寄せられたか

脳内でぼそっと呟いたオカルトさんの声が、おれの脳に残った。

――いきなり何言いだすんですか

――わからぬか、あの小僧は何者かに魂を繋がれておる

そういう笑えないことを言わないで下さい……

《ジャク？　どうかした？》

――魂を繋がれている？

――この体にもそのきらいはあるがな。なにか別の霊が乗り移ろうとしておる

オカルトさん用語を脳内で翻訳する。

魂というのは脳波や脳磁界パターンのことだ。

乗り移るという表現は、それが書き換わると言いたいのか？

さっき自分で否定したばかりだが、いくらこの学園都市でも脳波なんてものを外部から上書きできるのはＡＩＭ拡散力場しかないはず。

ＡＩＭ拡散力場に関わるアイテムと言えば……

――……おれの予想は外れてますよね

――確たることは言えん、直接聞け

オカルトさんに突き放されて舌打ちするおれ。

この人には振り回されてばかりだ。

《なあ初ちゃん》

《何？》

《『幻想御手』使ってから、頭がボーっとするとか知らないはずのことを思い出すような錯覚が来るとか、そういう経験あるか？》

《あー、ジャクもそれあるんだ？》

当たってほしくない予想に限って当たるものだ。

勘弁してくれ。

この後オカルトさんがおれの脳内でまたもやおしゃべりを始め、初ちゃんに疑いを抱かれたこともあって、明日の午後一番に面会を約束させられたのは、はなはだ余談である。

最初からそうしようと思ってはいたんだけどさ……

第五話の三　電話（後書き）

注…

『反魂の術』
文字通り、体を離れた魂――固有思考波形パターンを、体に呼び戻すこと。
当然、その体が腐ったりしていると面倒なことになるので、死の直後か別人の体に行われることが多い。

『口寄せ』
他者の魂を自分の体に乗りうつらせる方法。呪術としては多くのパターンがある。
ここではもちろん『幻想御手』をさす。

第五話外伝　Ｍｅｍｏｒｉｅｓ（前書き）

ところ変わって、常盤台中学女子寮のお話。

ツー、ツー、ツー……。

いつまでも変わらない、回線が切れた音。
その音を無感情にスピーカーから流し続ける携帯電話をじっと見つめていた黒子が、小さくため息をついて電源を切った。
何事もなかったように、寮の学習机に向かって座っていた自分の姿勢を正して、一言。

「本当に、殿方ってわかりやすいですこと。
ねぇ、お姉様？」

最後の“お姉様”は、私にむけた言葉。

「……いや、話のつながりが分かんないんだけど」

>i2181112938<

私は今日、白熱光線事件の犯人グループ逮捕に協力したらしい。
服を買いに行った店が事件の現場だった。
で、犯人を追いかけてたらあんまり感じのよくない学生と路地裏でケンカしてたから、全員一気に放電で倒しただけなんだけど。
みんな電気には弱い能力だったみたいで、素直に倒れてくれた。

これがあのツンツン頭だったら、そんな簡単に行かなかったと思う。
まったくアイツは……

……いやいや、何考えてるのよ私！
アイツは今回なんっにも関係ないじゃない！

それはさておき。
今日の“事件”が今の電話のテーマみたい。
『風紀委員』の仕事は、私もいろいろあって参加しちゃったり黒子から聞いてたりしてたけど、今のは『風紀委員』に来る典型的な苦情。

しかも愚痴たれてたのは、私の知ってる人でもある。

加藤若一。
黒子の初仕事でいらない介入をしたらしい、無茶な男子。
たぶん、初春さんがきのう『Ｊｕｌｉａｎ』に連れてきた彼と同じなんだろうな。
聞いてたのと違って好戦的でもないし、意外だったけど。

「あの加藤さんという方、平素は落ち着いたそぶりをしていますけれど、非常事態になると目の色が変わる方のようですの。
それほど強い能力を持っているわけでもないのに……」

学習机のパソコンに視線を戻して、黒子が呟く。
そんな彼女を、私はベッドに座って眺めている。
寮の、いつもの風景。

いつもと違うのは、黒子の動作。
私が気絶させた犯人グループのひとりが、『風紀委員』とも立ち回ったらしい。その時に負傷者が出たと聞かされたが、その“負傷者”の中に黒子が入っていないとは聞かされなかった。
本人は隠してるつもりかもしれないけどバレバレだ。

だからって、私に何を言う資格もない。
本人が気づかせたくないのなら、それが行動を妨げるまでは黙っておくのが筋。

ともかく。

「加藤って、きのうの朝私と同じレストランにいた彼でしょ？どこが好戦的なのよ。むしろ引っこみ思案っていうか」

「それは、彼がそうなろうと努力なさっていたからでしょう。私も郵便局では最初そう思いましたし、ご自分の気性について、思うところがあったのかもしれません。しかし普段の冷静さを失えば、手近なところにお怒りをぶつけられても不思議はございませんわ」

それにいちいち反応するような小さな器は持ちあわせておりませんけど、と小さくつけくわえる黒子。

加藤くんは、いつか黒子にお礼しなきゃいけないわね。

それにしても。

「なんであんたは、そんなに加藤って人を狂戦士（バーサーカー）みたいに言うわけ？」

「お姉様もご存じでしょう」

黒子がため息をついて、こっちに振り向く。

「忘れもしない、あの郵便局でのことですわ」

――いける！

そう確信してつっこんだ。

彼女自身にもいささか懸念がなかったわけではない。しかし、郵便局などの金融・公共サービス施設に配備されている警備ロボットは、拳銃弾など食いとめてしまうほどの防御力を持っていると知っていた。

だからこそ、めったなことでロボットが壊れはしないと思ったのだ。

だが。

「おい！」

聞いたことのない声。

今しがた降りたばかりのシャッター側に立っていた中学生らしき男子が、右目を大きく見開いて彼女に警告を発していた。

だが今は犯人の確保が先決だ。特に初春が人質にとられているとなれば――

しかし、声に反応して駆けだしたばかりの足が一瞬方向に迷う。

強引にそれを意思でねじふせ、再び直線コースに乗った次の瞬間、

「チッ」

犯人が何かを放りなげ、そして……

ガゴンッ！

一直線に進んでいた警備ロボットがつんのめるように急停止。

さらに火花を散らす。

――えっ？

思わず足が止まった彼女――白井黒子を、三つの衝撃が襲った。

ひとつは、左からの衝撃。

何かやわらかい、そして大きなものが、それ自体の重量で強制的に黒子の運動コースを変えようとねらったもの。

自分の左へと流れていく視界のなかの警備ロボットを追いつつ、彼女は一瞬だけ自分に何が起こっているのか考えようとした。

そこでふたつめの衝撃が襲ってくる。

こちらは衝撃というよりも、力。

透明人間が黒子と彼女にぶつかってきた何かをつかんで、背負い投げを決めようとしているような指向性のある引力だった。

それによってさらに郵便局正面の側、さきほど彼女に声をかけた少年のいる側へと引きよせられる黒子と何か。

第三の衝撃は、そこで起こった。

電子音。
金属音。
衝撃波、一瞬おくれて爆発音。

警備ロボットが、自らの役目を残して早すぎる活動を終えたのだ。

「――せんぱい！」

黒子は思わず、自分の体の痛みをきれいに忘れて叫んだ。
彼女は今、郵便局の正面ガラス窓にもたれかかる形になっている。
あれだけの爆発があったにもかかわらず、体にはほとんど傷がない。
なぜなら、

「相手の手の内が、わからないうちは、突入しない……
　覚えておきなさい」

彼女に覆いかぶさっていた指導員の固法美偉（このりみい）が、ロボットの破片

から衝撃まで、すべてを代わりに受け止めていたのだから。

「せんぱい……どうして……？」

「まったく……」

勝手に突入して余計に状況を悪くしたのが自分だと、黒子も気づいている。

そんな自分をかばい、なおかつ平常運転と言わんばかりに自分を優しくたしなめる美偉に出した悲痛な問いかけは、

「おいガキ」

「……あァ？」

その空気をまったく無視するふたりによって破られた。

彼女たちではなく、その隣にいる中学生ほどの少年を睨みつける犯人。

少年もその視線をまっこうから受け止めている。しかも口をニッと広げ歯ぐきを見せて、どうみても挑発の態勢だ。

犯人はなぜ彼に注目しているのか。

……ひょっとして、自分たちをここまで引っぱってきたのは彼？
だとすると能力者なのか？

「やっぱり仲間がいたか……
さっきやられたバカみてえに、俺もやれると思ったのかよ？」

「チッ、てめーの知ったことか」

――この方は、いったい何を考えているんですの？

黒子は思わず叫びだしたくなるのをこらえた。

今のやりとりで、彼が念動力系の能力者なのは確実になった。
彼女たちを安全圏と思われるシャッター際まで引っぱったのも彼だろう。

だが今の答え方はどういうことだ。
理由はどうあれ非常ベルが鳴ったのだから『警備員』が来るまで時間を稼げばいい、と計算している可能性もないではない。
だが、もしそうだとしても挑発だけでいつまで保つと思っているのか。

「なんだテメエ、この状況でケンカ売ってんのか？」

「いやいや、めっそーもない。
つーか、なんでオレなんスかぁ？」

あいかわらずひきつったような笑いで犯人を煽る少年。
これ以上は無茶だ、黒子がそう身を乗り出そうとしたとき

「待ちなさい……」

美偉のささやき声がした。

あちこちに血がにじんではいるものの、美偉には騒ぐほどの外傷もなければ、金属片が突き刺さっているわけでもない。
あの中学生の声で一瞬黒子が迷った分、ロボットと距離が取れたからだろう。
だが息は荒い。不用意に口を開ける状態でもない。

「せんぱい？」

「あの子の行動が、正しいかどうかはともかく、犯人は落ち着きを、なくしているわ。

犯人が、こっちに来たら、人質の子だけでも、助けられるかもしれない」

「ですが……」

「もう彼のしたことは、取り返しがつかないわ。今さら犯人も、落ち着いたりしない。
それなら、今の状況をできるだけ、うまく利用し」

バンッ！！

「！？」

美偉が言い終えるより早く、犯人は初春をひきずりながら突進し、全面ガラスに大きく蹴りを入れた。

「うおっと～ぉ？」

ニヤニヤした笑みを顔に張り付けたまま、それを難なくよける少年。
そのままカウンターに走りだす。

「っのクソが！！」

犯人もそれを追ってUターンしようとしたところで

「ぐぁっ！」

いきなりバランスを崩した。

「なんだ！？」

「ざまぁ」

思わず悲鳴をあげる犯人と、それを嘲る少年。

そして、見えない手で後ろに引っぱられたように犯人の左手が大きくふられ、その手に掴まれていた初春の体も黒子たちの方へとゆれ動く。

「今ですわ！」

黒子は初春の右足を捕まえる。

瞬間、彼女はシャッターの向こう側へ“送り出された”。

「……よし」

「なめんなっ！！」

少年が犯人に蹴り飛ばされたのは、その一秒ほど後のことだ。

そしてそれは、

「さあて」

振り返った犯人の目線が、唯一動ける黒子に集中することも意味していた。

「“俺を手伝えば、全員解放してやるよ”」

あとから考えてみれば、少年はこの発言も聞いていたのだろう。

だがこの時、黒子は人命と信念を天秤にかけさせるような犯人の言い方を、どうやって叩き潰すかしか考えていなかった。

だから、

「ずぇ～ったいに、お断りですの」

自分が犯人相手に啖呵を切っているとき、

「仲間になるぅ？
　あいにくと、郵便局なんか襲うチンケなコソ泥はタイプじゃありませんの」

その少年の頭が持ち上がって前のめりになり、

「それにわたくし、もう心に決めてますの――」

肩を震わせていたことも、上目づかいに犯人を見ていたことも、

「自分の信じた正義は、決して曲げないと！」

もっと後のタイミングではじめて知ったことになる。

それは、

「……そうか、残念だ。
　なら」

バリバリッ、という音で始まった。

「……ッ！」

呆然とする犯人。
ジャラジャラと、本来それが使われている店の中にでもいるような音をたて流れおちる金属球たち。

そこで黒子が動かなかったわけではない。
ただ、その直後に聞こえてきたおぞましい笑い声が、彼女の動きを再び止めてしまった。

「……ックックックック、ヒャーッハッハッハハハハ！！」

嗤い声だった。
それは間違いなく、大の大人をゴミのように見下す、罵倒に等しい声だった。

「パチンコ玉の敗北ってか！　“なーにガキにハメられてんだよ、

使えねぇ”！
キャッハハハハハハハハハハ！！」

この時、まさに少年は場を取り仕切っていた。
だからこそ、誰も気づけなかった。
さんざんいたぶってきたはずの少年少女にいいようにあしらわれ、もはや能力を使う前に誰かがとりおさえることもできたはずの犯人が、ジャンパーの“内ポケットから”拳銃を取りだしていたことに。

「……逃げて！」

美偉の叫びで、黒子も我に返る。
しかしその時には、すでに拳銃は抜き出され、少年に向けられていた。

「……能力しか使わねえとは言ってねえぞ！！」

思わず目を覆うものも出た、その半秒ほど後。

銃口から吐き出されようとした銃弾が、拳銃そのものの前半身と一緒に溶け落ちた時には、少年はすでに気絶していた。

……横隔膜痙攣と過呼吸で。

彼には目もくれず、黒子は挽回とばかりに素早い立ちまわりを見せた。いまだ床で大の字になっている相方と同じように、犯人の男を引き倒す。必死に床を探って金属球をひとつ摘みあげた犯人の顔には、すでに黒子の掌が押しあてられていた。

静寂。

そののち、黒子が口の端を引きあげて告げる。

「貴方の鉄球と、わたくしの空間移動（テレポート）。どちらが早いか勝負します？」

「ッ……クソッ」

「……これでも、お姉様は彼が好戦的でないとおっしゃいますの？」

「う～ん、そう言われると……」

ベッドの上で、思わず腕を組む。

あまり話したがらなかった黒子の初仕事について、初めて郵便局の内側の実情を教えてもらった。

私は初春さんの泣き声で事件に気づいたから、内部のことは知らない。

で、今の話を聞くかぎり。

たしかに、郵便局の中ではとても戦闘的だったみたい。

でも、きのうの朝『Ｊｕｌｉａｎ』で会った加藤くんは、おとなしめの性格だった。初春さんが黒子につかまった時、遠慮がちに声をかけていたのもそうだし。

『半年前に続けて昨日も助けてもらったみたいで、ありがとうござ

います』

あのセリフに真実味があるのは、今の話でよくわかる。
でも、大通りの近くで私が能力を使うことを嫌がる人だ。

「でも、昨日の朝と夕方に彼と会ったときは、そんなに気が強い人には見えなかったんだけど。
そりゃ、人をバカにしたところはあっても」

思い出すとなんだか腹が立ってきた。
私から逃げまわってるあの高校生が自己紹介で私をだしに使ったのに、彼はあろうことかそれに乗って「お疲れ様です」なんて言いだしたのだ。

……結局、彼と勝負してないわね。
今度会ったらちゃんと約束を守らせなくちゃ。

とにかく、黒子は私の意見に頷けないみたい。ふくれっ面。
そんなに初仕事がショックだったのかな。

「ですから、それはたぶん彼自身がそうあろうと努力されているからですの。
はっきり申し上げて、彼の努力は実を結んでいらっしゃいません。なにか納得できないことがあれば、すぐに本性を現しますわ」

「そこまで言う……？」

「実際、先ほどのお電話ではなかなかの剣幕でしたわ。
……ま、ちゃんと理性をお持ちになった方のようですから、一晩頭を冷やせばお姉様が考えるような彼に戻るでしょう。
事件の後で『風紀委員』の支部にご同行願った時も、素直に反省文を提出していただけましたし」

「反省文、ねえ……」

私はその単語で、ちょっと言葉を濁した。

『風紀委員』の仕事に介入すると、とんでもない量の反省文を書かされる。
五枚と言われて受け取ってみれば、大判のレポート用紙に罫線が裏表に引かれていて、実はふつうのノート十五ページ分なんてこともある。
……なんでそんなこと知ってるかは聞かないで。

「ともあれ、加藤さんは裏表がはっきりした扱いやすいお方のご様子ですの。
お怒りの時も適当に合わせておけば、すぐおさまりますし。
お姉様がもし彼とまたお会いになっても、彼のそんな面を見ることにならないよう、お願いいたしますわ」

「何よそれ。私が恨みでも買ってるみたいじゃない」

そんな前科はない。

と、反論しようとしたら、黒子はとんでもないことを言ってくれた。

「お姉様にレベル5としての自覚が足りないと黒子が常日頃から申し上げているのは、特にそのあたりですわ。
レベル5という高い能力をもちながら超然としていらっしゃるお姉様は、それだけで一般人からの嫉妬を買いかねませんもの。加藤さんはその典型例ですわ。
それに」

「……それに？」

「お姉様がきょう倒した方々の中に、ひとり巻き添えがいらしたでしょう。
実はあの方、加藤さんの無二の親友らしいんですの」

第五話外伝　Ｍｅｍｏｒｉｅｓ（後書き）

注…

『Ｍｅｍｏｒｉｅｓ』

「記憶」または「回想」。複数形。

第五話補遺　阿倍保名（前書き）

「日本の晁卿　帝都を辞し、征く船小さく　蓬莱を巡る
明月帰らず　碧海に沈み、白雲愁色漂い　墓所に満つ」

――李白『哭晁卿衡』

第五話補遺　阿倍保名

字幕。

もちろん夢の中のことだ。最近では寝つきがよすぎるほどにいいので、これが夢なのかうとうとしているときの幻覚なのかは、今ひとつはっきりしないが。

ともかく字幕によると、おととといまで見ていた夢の主人公だった上道田狭（かみつみちのたさ）の子孫が唐に逃れ、そこで遣唐使留学生の下道真備（しもつみちのまきび）、別名吉備（きび）真備に出会い、そのことを聞きつけた同僚の阿倍仲麻呂（あべのなかまろ）に引き合わさせられることになった。

今日は、その続きらしい。

＞i233462938＜

「今日はありがとうございました、下道殿」

「なに、同じ大和の出じゃないか。こういう遠く離れた土地では、たとえ文明国でも同郷で助け合うのが筋ってもんさ」

深く頭を下げる阿倍さんと、気安く応える下道さん。
ふたりの先輩後輩という間柄は、五年たっても変わってはいない。
司経局（しけいきょく）の校書（こうしょ）つまり公文書館の司書職をあてがわれて、今では阿倍さんの方が地位は上になっているが、それでも年長者を敬う考え方が、ふたりとも唐の地であらためて身についていた。

さて、使用人兼監視役をひとりつけられた下道さんは、腕を組んで歩いていた。
正直、無作法と言える。

「下道殿、いかがされた？」

こちらもぶしつけに尋ねるのは、提灯持ちの監視役。
主人の位が上がると使用人まで偉そうになるのは、古今東西変わらない。

「いえ、つまらない考え事ですよ。
道を踏み外すようなことはありませんから」

そんな使用人にも、笑って答える下道さん。
しかし彼の心中は、穏やかでなかった。

今日彼が阿倍さんに呼ばれたのは、内内の儀式を行うためだ。
阿倍さんと上道稚（わか）との結納だったのである。
あの田狭さんの子孫だ。

ただでさえ、唐では皇帝に召し出されたということで、阿倍さんは大和での評判が悪くなっているという。下道さんの同期ということで、彼自身の出世にも差し支えが出るかもしれない。
だが、唐で和人の子孫と結婚したと言われれば、へえそりゃうらやましい、で済むものだ。

本来なら。
だが相手が問題だった。

「上道稚。上道田狭の子孫」

下道さんが低くつぶやく。
あの大長谷（おおはせ）大王に制圧された地方豪族のうち、最も激しい抵抗を展開しようとした男の末裔だ。
結局それは親族の内紛と内部の裏切りで阻止されたが、一歩間違えば国際紛争に発展しかねないものだった。

この結婚も、じゅうぶん国際紛争になりうるのだ。

さらに。

吉備一族という点からしても、この話は歓迎できない。

字幕によると七世紀以降、吉備氏はいくつもの支族に分派した。

田狭さんや稚さんを出した上道氏や宮廷貴族候補が多く出している下道氏のほかにも、同じく中央貴族として発展した笠(かさ)氏や宗教に特化した香夜(かや)氏などが有名だ。

――余談だが

オカルトさんが夢に入ってきた。

本当にフリーダムだなこの人。

――この香夜氏は、のちに賀陽(かや)氏と改姓する

――子孫は岡山にある吉備津(きびつ)神社の宮司となったそうだ

――きさまの一族も、案外この賀陽氏の郎党かもしれんな

……そういえば、“前のおれ”はキビツ君でしたね。

ともかく、吉備氏は一族の内紛が絶えない。
そして、そういう分派支流が相争う中で、ここ数十年で急速に力をつけてきた阿倍氏と婚姻関係が結ばれればどうなるか。

「めでたい縁もあったものだ」

口調だけは和らげて、阿倍さんの使用人を安心させる。
だが内容は違う。阿倍氏とつながれば、歴史だけしか持たない弱小氏族だった上道氏がいっきに復活することになる。
大和朝廷とつながることで権力を維持してきた下道氏や笠氏にとっては、まさに悪夢だ。

「それに」

また、下道さんが声に出してつぶやいた。
もし上道系の復帰が成功し、二匹目のどじょうを狙う吉備系氏族の一部が阿倍氏などを頼っていけば、彼を中央政界に押し上げてきた“吉備一族の圧力”が消える。
その原因を作ったのは、阿倍さんと稚さんを引き合わせた下道さん本人だ。
彼とその子孫が出世できる目も消えるのは間違いない。

「これからは、阿倍殿におすがりすることになるのかな」

自嘲気味に放たれたその言葉を、阿倍さんにつけられた使用人兼監視役は、ただの弱音あるいは自衛策と見てとった。

しかし下道さんは、それほど諦めのよい人間ではない。

阿倍と上道の縁など、できる限り切るべきだ。

だが阿倍さんは、自分の友でもある。

そのどちらを優先するか、この時はまだ迷っていたのだ。

さらに十五年が過ぎた。

下道さんも阿倍さんも、いい歳のおっさんになっている。

官位も順調に進み、阿倍さんは唐の官庁にくいこんでいた。現在は門下省左補闕（もんかしょう さほけつ）、上奏文や詔勅など公文書を審議し、皇帝にさえ直接文句をつけられる立場にある。天下御免の突っこみ役というわけだ。

さらに秘書監（ひしょかん）という、皇帝個人の書庫管理職にもついていた。
ここで文学関係の仕事が多かったことから、彼はそのころ有名だった詩人たちと飲み友になっている。李白（りはく）や王維（おうい）などの名前を、中学高校で暗記させられた人も多いはずだ。
彼らとつるんだからか、名前も中国風に晁衡（ちょうこう）と変えている。

さて、この間にも下道さんは考え続けていた。
稚さんをどうするか。

現実問題として、ふたりの婚姻にはいい面もある。
これで吉備氏全体が阿倍氏になびけば、そのまま血族グループ単位での復権もありうるだろう。
しかしその場合、彼個人の出世はなくなる。

「やあ阿倍殿、今回はおめでとう」

「これは下道殿」

ともあれ、下道さんは人だかりに声をかける。
仕事柄、玄関先や居間で上司の使いや部下たちの祝儀を受けてい

た阿倍さんは、敷居をまたいできた下道さんを見つけると当時にしては大きな声で呼び返した。

列に割り込んだようで不作法にみえるが、周囲の役人たちは「同郷なら仕方ないな」と道をそれなりにあけてくれる。

彼らも似たような経験があるのだろう。

「いや、ありがとうございます。

なんだか下道殿にはお礼を言ってばかりで、申し訳ない」

「こちらこそ。

ただの留学生を出産の宴に呼んでくれて、ありがたい限りだ」

相変わらず阿倍さんは明るい。下道さんもつられて笑みをこぼす。

で、かんじんの稚さんなんだが。

「あら、下道様。

わざわざありがとうございます、勉学のお邪魔をして申し訳ありません」

「いや、とんでもない」

使用人に赤ちゃんを任せて、すっかり回復したようだ。

あたりまえかもしれない。
乳幼児の死亡率が高かった時代、出産祝いは出産直後ではなく、ある程度体が丈夫だとわかった時にやるものだった。
“おれ”の記憶にあるかぎり、お正月や七五三は、非日常を演出する年中行事であるとともに、新年や三歳、五歳、七歳まで生き延びたことを祝う行事でもある。
つまり、

「うな～」

祝宴が開かれるころには、赤ちゃんが匍匐（ズリバイ）前進ぐらいできていても、おかしくない。

「なに？」

「三郎様！　どちらへ――」

突然足元から聞こえる声に驚く下道さんと、奥で叫ぶ使用人。
事情は察しろということか。

「ハハハ、元気のいい三郎殿だ。

さては同じ和人と知って、謁見を許されたか？」

「下道様、また申し訳ありません……」

「いやいや、あなたはまだ供応があろう。私や稚殿に任せておけばよい」

「……それでは、保名（やすな）をお願いいたします」

「保名、名声を保つか。よい名だ」

赤ちゃんを抱き上げて上機嫌の下道さん。

そういえばこの人、勉強一筋で結婚とかそういう話がまったくなかったな。

下道さんは、この二十年間とにかく学業に打ちこんだ。

おれの知るところでは儒教、兵学、天文、音楽、史学などを学び、さらに陰陽五行説（おんみょうごぎょうせつ）を日本に持ってきたのも彼だという。

陰陽師（おんみょうじ）の元祖というべき人だ。

一説には、そういう真面目な姿勢が評価されたのか、それとも阿倍さんの先例があったからか、唐の官庁からちょくちょく「科挙受けろ、拾ってやる」と圧力をかけられていたという。

だから二十年も唐にいることになったとか。

だが、それも今年限りだ。

去年、また大和から遣唐使が到着していた。
新世代の留学生も唐で研究をはじめ、さすがにオールドタイプの出る幕ではなくなったのだ。

阿倍さんは唐で公務員になっているから無理として、下道さんの帰郷も皇帝に認められ、帰る支度をしている最中の出産祝いだった。

このことが、下道さんの決心を促すことになる。

数か月後。

下道さんが、遠ざかる大陸を静かに船から眺めていたころ。

阿倍さんは、

「……あ、あ、あああああああああぁぁぁぁぁぁぁ！」

妻を喪っていた。

夜盗に家が狙われ、一家はほとんど全滅。
だが、わざわざ役人の家を襲うにしても、彼の家は狙うメリットがほとんどない。
メリットがある心当たりは、彼にとってもただひとり。
阿倍氏と吉備氏の結合を統一大和の視点から嫌がる、下道真備だけだった。

稚さんの葬儀は三日後だった。

初期儒教が浸透した国で、葬儀がしめやかに行われることはない。
個人に哀悼の意をしめすため大泣きすることが礼儀とされているし、ショックのあまりそれができない親戚に代わって泣くことを仕事にしている人もいる。
そして友人知人が集まり、思い出になった人と“いっしょに”宴を開くのだ。

もちろんその場には、喪主である夫や子がいなければならない。
しかしこの時、その両者ともに儀式には参列していなかった。

三山浦（さんざんぽ）。
過去には三山（さんざん）と呼ばれた稚さんの故郷であり、海に連なる港町でもある。
そこに阿倍さんは来ていた。

生後数か月の、保名くんを連れて。

字幕。

阿倍さんも、当然ながら呪術のことは知っていた。
なにしろこの時代、呪術は遠い世界や天文学的事象と人のつながりをもつ手段のひとつであり、それは今でいう物理科学にあたる。
そしてその概念や体系において、唐は最先端を行っていた。
文学専攻の彼とて学ばないはずもない。

そこで彼が学んだことのひとつが『偶像の理論』だ。
少なくとも字幕ではそう翻訳されているが、要するに姿かたちや目的、役割などが似ているものどうしは影響しあい、性質や能力さえも互いにわずかながら似通ってゆくものとされている。

――陰陽道などは、まさにこの技術が発展したものだ

――世の中の全てを、陰陽五行という“偶像”にあてはめるのだ

からな

と、オカルトさんの解説。

そしてこの理論で行けば、恐ろしいこともできる。
形式だけを知り、儀礼にのっとった扱いをすれば、その本質を何も知らない者でさえも呪術の発動を可能とするのだ。

もともと聖人（キリスト教――十字教的のそれではなく、ふしぎな力を備えた政治的・道徳的指導者という意味）に一般人が近づくために発展した中国密教体系において、
「形式だけの素人魔術」
というのは、何にもまさる褒め言葉となる。

なにせ、“素人”が“形式だけ”真似をした場合でもそれなりに効果がある呪法だ、と保証されたようなものだし。

東洋呪術で重視されたのは“インパクト”と“汎用性”。
自分たちの知識を護るために保守化するまで、まだ数百年が残されている。

もちろん、形式を重視する魔術のことだから“呪い返し”というのもある。
それを防ぐため、呪術師たちはあの手この手を使って自分の使う呪術を強化、複雑化、あるいは隠蔽するわけだ。

さて。
阿倍さんが今やろうとしていることは、最後の部分には全く関係ない。
小舟を作って丹砂で赤く塗り、保名くんを両手で高々と差しあげる。
この状態は、まさに古代神道の破魔祈願形式だ。

彼は自分の呪術を隠そうとしていなかった。
それだけ自分の怨みに自信があったし、そもそも大和の誰かがこの呪いに気づく可能性すら低いと思っていた。
だから彼は、大声で吼える。

『呪われよ、大和よ！　吉備真備よ！
我はここに幼な子ひとりを、国つ神のもとに送り申さん。
我が氏神、一言主（ひとことぬし）よ！　これなる子を得ませ、拾われませ！
しかして稚なる女の抱きし思いを、その子に伝えませ。

大和征伐の
企みをば！』

阿倍さんは言い終えて、保名くんを朱塗りの小舟に乗せ、一巻きの書物を彼の脇に放りこんで海へと押し流した。
唐で習い覚えた、あらゆる呪文をその船に乗せてゆく。
今やっと、呪術防衛の必要性に気づいたとでもいうように。

字幕。
彼は呪術を使えない。
霊力なるものを自分で生成できないからだ。
だが今の阿倍さんは、霊力（たぶんここでは“生命エネルギー”の意味）を怨念という形に変換し、それを呪術の原動力にしているらしい。

――つまり

――自ら異能をもつ者も、場合によっては呪術を使えるということだ

何やら意味深なオカルトさんの解説で、その夜の悲劇は終わった。

第五話補遺　阿倍保名（後書き）

怨みの帰還。
次話から話が動きます。どうぞ見捨てないでください。
ついでに評価・感想などいただければと、あつかましくもお願いいたします。

今回は後に関わる単語がいくつかあるので、注釈をつけておきます。

注…

『陰陽五行説』
唐から概念が伝わり、日本で独自に発展した世界観。
万物は陰陽の二元と木・火・土・金・水の五行という属性の組み合わせで成り立っており、それらの相互作用で目にみえる現象がおこるという。原始的な化学の一種。
たとえば、人が刃物で傷つくのは人が「木」属性であり、「金」属性に弱い（『金剋木』という）からだと説明される。「木」の木刀で「木」の人が傷つくのは、単に強度の差。

『陰陽道』
上述の陰陽五行説をもちいて物理を研究し、また人為的に物理現象をひきおこす学問。よくある呪いや占いから行政事務、建築・都市工学まで広く応用できる。
陰陽道の研究者を陰陽師とよび、ヤマト朝廷には陰陽寮と呼ばれる専門機関もあった。陰陽師貴族として、賀茂家や土御門家が有名

（どちらも宗家嫡流は断絶）。

『丹砂』

現代でいう硫化水銀。鮮やかな赤色と毒性から中国で漢方薬の原料や化粧品、古代日本では対抗呪術、あるいは単に魔除けとして用いられた。

転じて、戦装束にも赤色を取り入れるようになる。

第六話の一　経営統合

「江島（えのしま）」

「はいっ」

「エルハズレット」

「は～い」

「押切（おしきり）」

「うい」

「介旅（かいたび）」

……

「介旅？」

……

「介旅初矢（かいたびはつや）！」

先生が初ちゃんの名前を連呼しているところで、おれは我に返った。

あ、まずい。

朝礼で報告するのはおれの役目か。

＞i21811―2938＜

「先生」

挙手して発言許可を求める。

こういうところだけ厳しいうちの学校に疑問を覚える今日この頃。

どうも、加藤若一（かとうじゃくいち）です。

七月十九日。
授業時間数とのかねあいだか何だか知らないが、一学期最後の日すなわち終業式を土曜に持ってくるという学園都市の空気を読めないカレンダーのせいで、おれたち学生は教師とともに休日出勤を余儀なくされていた。

「どうした加藤」

「初……介旅は今日欠席です。昨日入院したんで」

「なに？」

さすがに入院と聞いて注目されたようだ。
クラスのたいして親しくもない連中が、おれに好奇の目をむけてくる。
さすがにまだ朝礼ということで、寝てるやつはいないみたいだ。

……しかし、初ちゃんを心配してそうなやつがひとりもいないな。
予想はしていたが。

「理由は聞いてるか？」

「不良に集団でボコられたらしいです」

同じ教室の中で後方に陣取っている、いつも初ちゃんをゆすっていた奴をガン見しつつ即答。
教室の注目がそっちに向いた。

常に半袖のそばかすデブがうろたえる。
声は割れているわけでもドスが効いているわけでもなく優しいのだが、やっていることはゲスの一言ですむような奴だ。

おれは今年の一月ごろ、『遠隔操作（テレキネシス）』でたかり連中のひとりを屋上から逆さ吊りにして以降、校内では無事だ。だが初ちゃんはそうもいかない。
おれと彼が一緒に行動するのは、報復攻撃を防ぐ意味もあった。
そんなわけでこういう小さな仕返しは許してほしい。

さてペッパーピザ、クラスの人気者にしてやったぞ感謝しろ。

「ちょ、なんで俺のほう見るんだよお」

豚が嬉しそうに鳴いている。よかったよかった。

目から上が笑ってないのは、見なかったことにしよう。

「いや別に。早く犯人捕まればいいなーっと」

「どういう意味だよそれ！」

「なんでもねえよ。
ただ単にいじめマジカッコ悪いって思っただけだし」

「おい！」

そろそろ目をそらしたくなるが、オカルトさん回路で筋肉を硬直させてさらにガン見を続ける。
奴の顔が赤くなっているところを見ると、本気で怒りだしたらしい。
まあ“今回だけは”あいつのせいじゃないし、当然か。

クラスの空気も悪くなっているが、今さら気にもならない。
そもそもピザがここに存在する時点で空気が重いのだ。朝礼で誰かがはしゃいだところで、何が変わるわけでもない。
実際、教室の中には苦い顔の連中もけっこういるし。
「ついに入院までやりやがった」とか思ってるんだろうな。

もう頃合いか。
初ちゃんが“誰かにリンチされて入院”しており、おれが学校のたかり屋どもを疑っているのだろうと、みんな分かってくれたはず。
おれも嘘はついていない。
初ちゃんが白熱光線（ソーラーレイ）事件の犯人グループ＋α（ミサカ）とやりあったのも、それがもとで入院したのも本当のことだ。

それに、どうせすぐこの空気は解ける。
なにしろ、

「ほら、おまえらもうその辺にしとけ。点呼続けるぞ。加藤――はいるから、つぎ岸辺（きしべ）」

「うっす」

ピザの睨みつけは、いつも通り先生が破るからね。
鳥岡（とりおか）安治（あんじ）。
われらが南沢中学二年Ｂ組の、愛すべき事なかれ主義者だ。

さて、今日の放課後はさっさとどこかに隠れないと。
さすがにこっちから煽ってしまったので、サイフと手足が危ない。

逃げられませんでした。
そりゃ、召集かけられたら機動力で劣るおれに勝ち目はない。

「おい加トちゃんよお。
けさぁ随分なめた真似してくれたらしいじゃねえかよ」

ぼさぼさ髪で頬が張ったやつが、水木しげる先生風に口をとんがらせて因縁つけてくる。
加藤茶にちなむのは別にいいし、今回はおれが悪いのだが、うぜえ。

彼はたかりの主力メンバーだ。
顔の左右に一目でわかる頬骨があるので、こいつらにボコられて

いるもやし連中は彼を密かに“キム”と呼んでいた。しかし本当に中国・朝鮮系の人たち（学園都市にも多い）に失礼ということで、さいきん改名されている。

今度は「オウム口のぼさぼさ頭」らしい。

略してアサハラ。

「なめた真似って、いつもおれたちの財布なめ回してんのお前らじゃん」

言い返した瞬間、オカルトさんが脳内で非常ベル。

すみません調子乗ってました。

『幻想御手（レベルアッパー）』を使った連中が犯罪に走りやすいというのも、なんとなく理解できる。

要するに、今まで自分の手にとったことのない能力があふれてきて、それを誰かに自慢したくなり舞い上がってしまうのだ。

ついでに、本当はできないことも今の自分ならできると勘違いする。

おれもそう。

今しがた調子に乗っていたのも事実だが、その原因になる能力のブーストも確かに経験していた。

“伸びる手（マジックハンド）”が六本になったり。
その一本だけで下宿の本棚を持ち上げられたり。
六本で別々のことをしても大丈夫だったり。
何より、オカルトさんの脳内完全復活で戦後の記憶もいっきに蘇ってきたり。

これがレベル４の力か、と感心したものだ。
そんなわけで、彼らにつきあうつもりはさらさらない。
ちょうど五人だし。

「ッざけたこと抜かしゃがって。
てめえまた身の程を知った方がいいみたいげぼっ」

一隻轟沈。
口から黄色いものを吹きだして、アサハラが崩れ落ちた。
“手”の腹パンはかなり効いたみたいですね。超能力はないらしい。

「なんだこのやろ」

「うっせえよ」
「ごふっ」

以下略。

相手が戦闘態勢に入っていないうちに一撃目を仕掛けて成功すると、後が楽だと初めて知った。
なにしろ、そういう状況に自分を持っていけたことがないもので。

壁におしつけたのが三人、最初に沈んだのがひとり。
あとの二本の“手”は、反射的に自分の前にもってきてました。
さすがおれ、ビビり体質は健在か。

「てんめ何やってんだあああ！」

残ったのは、鼻梁にペッパーなピザ。
今朝おれがクラスのアイドルにしてあげた彼ですね。

そいつのチョイスは突進、だった。
まあ重量あるし、おれみたいなひょろ長には衝撃ぶつける方がいいと踏んだんだろう。

だが。

――それで奪ったつもりか、莫迦が

ナイスですオカルトさん。

すでにオカルトさんの神経回路はおれの脳内に造られていて、運動信号が手足の筋肉にどれだけ早く指令を送れるかはその脳の神経構造にかかっている。となれば、左翼過激派を相手に自衛隊でこっそり対テロ作戦の指揮をとっていたオカルトさんの回路を装備するおれが、避けられないわけもない。

……なんという他力本願、泣けてきた。

それはいいとして。

マンガでよくみる右腕を高く掲げた姿勢で飛びかかってくる胡椒豚。

こっちの左頬あたりで骨にひっかけて殴り飛ばす気だろう。やりたいことが素人にも丸わかりの、いわゆるテレフォンパンチというやつか。

だがオカルトさんはそのあたり百も承知。

膝の力を抜く。

腰を直下に落として中腰で固定、直後に前傾。

その位置から支えの左足を後方に蹴りだし、地面に押さえつけていた右爪先をバネのように前方上へ跳ね出せば

「ぐぉっ！？」

そこには股間、というわけだ。

金的蹴りは危険もあるが、たかが中学二年生のもやしがいい加減に狙っていた程度では何も起きない。せいぜいデブが股間を押さえて、背骨の中を駆けあがった体内の電撃に悶絶するぐらいのものだ。

治療費かからないケガで済んだんだから、感謝しろとは言わないが勘弁してほしい。

金的と鉛筆の刑は憲兵の常套手段、とはオカルトさんの弁。
使われると思ったら、膝蹴りでブロックするといいそうな。

で。

「えーと、じゃあ皆さん、このたび介旅銀行は加藤銀行と正式に経営統合することになりました。あんたらクソガキ向けの口座はきょうで全部凍結。関連営業再開は永久になしってことで。
ご了承いただけますね？」

日頃の怨みを込めて、にこにこ笑いながら宣言しておく。
これで退院した初ちゃんが報復くらったなんてことになったら笑えない。
だから悔しいが、彼らの財布は温存してあげよう。

アサハラが何か言いたそうにしている。
デモンストレーションは彼で決定かな。

「なにか？」

「てめえ、調子こくのもいいかげうわがっ」

“手”で頭を引き上げ、そのままアスファルトに叩きつける。
鼻折れたかな。
いいよね、たかり屋だし。

そのまま壁の三人も前髪を掴みなおし、倒れた胡椒豚の背に乗る。
もういちど宣言。

「彼は賛成してくれるらしいです。いやあよかった。
皆さんは？」

異論はなかった。

初ちゃんが入院している水穂機構病院へ向かうバスの中で、ちょっと思いついたことがある。

おれは昔、木山先生に「オカルトさんは超能力者だ」と言ったことがあった。

呪術うんぬんなどと口にすれば本職の精神科医がカウンセリングに来そうな学園都市で、あの夢を説明するにはそれが手っ取り早かったのだ。

そして、ここ最近まで自分でもそうだと思っていた。

だが、どうやら厳密には違うらしい。

今さらこんなことを言い出した理由はある。

脳内お花畑な今、なにかと現実世界につっこみを入れてくるオカルトさんの話を聞いていると、どうもこの人は独特の概念をもっていることがわかってきた。

いや、独特のエキセントリックな思考回路という意味ではなく、自分が使っていた（と主張する）あやしげな術についてだ。

魔術、という言葉がある。

これはオカルトさんが言われて気を悪くする単語のひとつだ。

彼も一般人ができないことをやっていた自覚はあるらしく、奇門遁甲（きもんとんこう）だとか地相占術（ちそうせんじゅつ）だとか難しい単語を使ってはぐらかそうとして

いるが、それでもかたくなに拒否するのが“魔術”の語だった。

彼いわく、

――自分が使うのは、俗世間のやつらが言う魔術ではない

――天地五行の運行にしたがった、自然の破壊力を味方につける合理的な兵法なのだ

……だそうだが、傍目には何が違うのかさっぱりわからない。

――天然自然の法則は、人間ごときに理解できるものではない

――ゆえに、経験論的な前例の積み重ねからその場に合った例を真似ているだけだ

――不合理でもなんでもなかろう

本人の解説はいりました。

それにしたって、地龍とか式神（しきがみ）とか、どうみても非科学的だろ。

——ハ、ハ！　式など、地中の龍脈から霊力を吸いだして創った幻にすぎん

——自然環境が勝手に生みだしたものを利用するからといって

——おれを非難する資格など、この西洋科学の街にはない

そりゃそうかもしれませんけどね。

ただ、今の言い方だと“龍脈”ってやつが近くにないと、呪術はほとんど使えないことになるんじゃないのか？

——案ずるな、憑霊

——北東亜細亜（アジア）最大の龍脈は、大連（だいれん）から東京をつらぬき太平洋に潜る

——この学園都市も、その直上にあるからな

オカルトさんのドヤ顔を幻視した。

ちなみに大連というのは中国東北部の都市で、昔は三山浦（さんざんぽ）と言ったらしい。

阿倍保名くんが呪いを込めて送りだされたあそこです。よく知っ

てるはずだよ。

つーか、誰だそんな場所に科学の街を造ったのは！

――恐らくは故意のことだ

――この都市のどこぞでは、大深度地下建設の名目で巨大な坑道が掘られていると聞く

――龍脈を鎮める、あるいは断ちきるため以外の目的は考えられん

……ああ、そうですか。

学園都市が呪術がらみの土木事業とは穏やかじゃない。

まてよ。

大連、つまり中国から東京に通じる龍脈っていうのが実在するとして、それを東京西部にある学園都市が堰（せ）き止めようとしている、とすれば。

つまりそれは

――東京に龍脈が届かぬ

――生気をなくす、すなわち気枯(ケガレ)れを引きおこす腹だろう

吐き気がした。

超能力の開発にあきたらず、オカルト的な宣戦布告までやってのける。

いったい、学園都市は何がしたいんだ？

第六話の一　経営統合（後書き）

第二二学区の深さ数百メートルにおよぶ地下階層と二重らせんの道路について知ったとき、呪術的な何かの関係を疑ったのは私だけではないはずです。

……たぶん。

注…

『龍脈』

地龍、地脈とも。

地中にあるエネルギーの流れ。川のように合流・分流し、呪術的・土木的な処置によってコースの変更や新しい放流路の開削もできるとされる。

第六話の二　たすけて

「……という事があったのさ」

話し終えると、ベッドの上の初ちゃんが盛大にため息をついた。

「ったく、相変わらず調子乗ってるねジャクは」

「なにおう」

水穂機構病院の病室。

名前のとおり、水穂なんとか機構の附属病院であるここは、しかし本家の金回りがいいのか知らないが、結構な設備だった。

堂々合計六三針の重傷を負った初ちゃんは、個室に放りこまれている。

その傷を負わせたのはおれの中にいるオカルトさんだが、彼が入

院した本当の理由は別にある。
両腕から肩まで伸びた進行性壊死帯。
『超電磁砲（レールガン）』による深部組織熱傷、いわゆる体内ヤケドだ。

で、約束通り面会時間が始まってすぐにおれは病室へ行ったのだが、そこで警戒態勢を解かない脳内のオカルトさんを抑えつつベッドの脇に座り、さっきの経営統合エピソードを話したらこの反応だ。
おれ、そんなに間違ったことしたか？

「あのねえジャク。
行動原理の良しあしはともかく、気に入らないやつを能力で叩きつぶすなんて、僕らが一番嫌いなやりかたじゃないか。
今の話聞いてると、どうせジャクも『幻想御手』の効果が出てきたんだろうけど、そうやって出てくる能力成金が僕らだけじゃないって分かってるだろ？
僕にもとばっちりは来るだろうけど、痛い目見るのはジャクなんだから」

病人に説教されるとは思わなんだ。
しかも以前なら喜んで頷いていたはずの正論。
納得できないのは、おれが持てる者の優越感というやつに染まってしまったからだろうか。

>i2181 1—2938<

いや実際、この優越感はものすごい。

自分にできないことはないような、そういう危険な錯覚を伴う。

レベル3、自分より強度が下の能力者を見下すような傾向が強まってくる位置にいるおれでこうなのだ。ふだんから無力感に身を焦がしているだろうレベル0の使用者ともなれば、その度合いは半端ではないはず。

無力感云々はただの妄想だが、そう間違ってもいないだろう。

学園都市で教育をうけて超能力者になるというのは、一度は誰でも夢みる話。その夢を完全にブチ砕かれるのが、最初の身体検査（システムスキャン）だ。

超能力と科学の未来を高らかにうたいつつ、自分はそのグループの外に弾きだされたと告げられるむなしさを、高位能力者は知らない。学園都市はそういう若き特権階級のための街といっても、まあ罰（ばち）は当たらないだろう。

そう考えると、加藤くんもかなり恵まれた立場なのだが。

この学園都市で、少なくとも学生の間でモノを言うのは学歴とレベルだ。

レベル3、偉い人のランクわけで中堅どころに位置するおれですら、学生人口の一割弱といったところ。学生の六割はレベル0、レベル1はその半分だ。

にもかかわらず少数のレベル5を称賛してレベル0を見下す姿勢をやめようとしない学園都市のメディアや公的機関が、根源的には

『武装無能力集団（スキルアウト）』なんかの凶悪犯罪集団を生みだしていると言えなくもない。

言わないけどね。

口にしたら何されるかわかったもんじゃない。特に、能力をそのまま使って人を殺せるレベル４以上の人には。

まあ本人の努力次第でレベルはどうとでもなると思ってる、一部研究者にもこんなことは言えないだろうけど。言ったが最後、不穏分子とみなされて行方不明にされかねない。

それはともかく。

普通に考えて、あの時のおれが傷害罪に問われるのは確実だ。

「……うん、すまん。悪かった」

《それに》

謝罪に続いて言い訳をしようとした瞬間に、恒例のエセ念話が来ました。

《なんだいきなり》

《高レベル能力者を量産して、意味があるとは思えない》

……なに？

《初ちゃん、詳しく》

《こういうことは、ジャクの方がアタマ回るんじゃないかな……。学園都市では能力開発が進められてるけど、僕らがやってるお勉強とは違って、あっちは“どうやったら能力が上がるのか”を考えてるんだろ？　確かに『幻想御手』はその答えかもしれないけど、無料配信なんかして派手にやる必要はないはず》

《……なるほど》

おおう、初ちゃんが大人の思考だ。

そして彼の疑問は、おれの疑問でもある。

さらに言えば、昨日明らかになった現象と関連があるだろう。

実際、この病室に入った時のオカルトさんのあわてぶりは半端じゃなかった。

「ところでさ初ちゃん」

おれは声に出して話し始める。

ここから先は高等テクニックだ。おれにできるかどうかわからないが、病室という声の響きやすい場所では例の“発信器”も当然いるだろう。やってみるしかない。

《こっからは声と回路で別の話題にするし》

《めんどくさいことするね》

表情には出していないが、怪訝そうな念を送ってくる初ちゃん。

こいつすげえな。表情筋を自由に操る能力でもあるのか。

《そんなのあったら、ハッタリで不良を追い散らしてるよ》

ごもっともです。

思考がそのまま漏れるってのも厄介だな。

ともかく、理由の説明。

《発信器がこの部屋にいなくても、ガラス伝いとかで声を拾われるからな》

《なるほど》

「……なに？」

初ちゃんもさすがに慣れないのか、しばし沈黙してから声を返してくる。

発信器の向こうにいる人には、気まずい空気と思ってほしいものだ。

「お前が会った『白熱光線（ソーラーレイ）』の話、してくれよ。風紀委員も手こずる凶悪犯だったらしいし」

《昨日言った、頭がボーっとするとかその辺だけど》

「うーん……会ったとか言わないでよ。どうみても偶然だったんだし」

《ああ、あれね。副作用って言いたいんだろ？》

「つったってな、風紀委員以外で“アレ”を見たのは初ちゃんぐらいなもんだ」

《そうだ。ＡＩＭ拡散力場を通して、誰かの思考が漏れ出てるのかもしれない。下手すると頭まるごと乗っ取られかねないんじゃないか？》

先に言っておく。

乗っ取られる云々は、オカルトさんの警戒態勢とウンチクから適当に引っぱりだしただけで、真剣に言ったわけではなかった。

だからこそ、

「ビーム砲だったよ」

《もうすぐそうなるだろうね》

「はぁ！？」

冷静な返事を受けとったおれが思わず叫んだのも、許されるべきだろう。

思わず腰から上をねじって初ちゃんを見下ろす。
彼はいつも通り、気の弱い笑みを浮かべていた。

「落ち着いてよ。学園都市じゃビームなんて珍しくもないだろ？」
《落ち着いてよ。きみだって予想はしてたんだろ？》
「落ち着けるか！　なんだそりゃ！？」

おれは回路を使わなかった。
どっちの会話にも、その言葉を当てはめることができる。

――やはりか

――なんということだ、科学によって魂を吸い取るとはな

今まで空気を呼んで黙ってくれていたオカルトさんが、ようやくコメント。
彼は昨日から“魂へ働きかける術”について心配していた。おれ

はそれを非科学的だと相手にしなかったのだが、ここでおれは間違っていたことになる。

いや、それ以上に。

初ちゃんはなぜそれを、苦もなく受け入れているのだ？

「低レベル能力者でも、三人そろえば兵器になるみたいだね」

《きみも分かってるはずだよ。誰かの思考が漏れてるんじゃなくて、誰かが僕らの脳まで支配圏を広げようとしてるんだ。

いまんとこ、抜本的な対策はない》

「そういうことを言ってんじゃねえよ。理屈が分からん」

《そういうことを言ってんじゃねえよ。分かってるなら何で言ってくれなかったんだ！

どうせおれや、ダウンロードしたほかの連中の問題にもなるのに》

「そんなの僕も知らないよ。逃げてるだけだったんだから」

《それはないよ。だいたいの人は、その“誰だか知らないけど侵入してきた思考の主”が神経活動のマクロ的視点からみて半分以上を奪った時点で、自動的に昏睡する。

僕が今まだ無事なのは、神経の電子にかかる重力をあやつって強制的に自分の思考回路を取りもどしてるからさ》

「……は？」

もう完全にわけがわからない。

初ちゃんが重力子をあやつることで電子をあやつって云々は、前にも聞いたからいいとして。

初ちゃんが冷静なのも、それで頭の中の感情を抑えつけていると仮定して。

なぜそんな芸当ができる？

なぜそんな芸当ができるのに、抜本的解決をはからないんだ？

脳の中をいじれば、『幻想御手』の影響だって抜くことも――

「つまり、ぼくはたよりにならないってこと」

《つまり『幻想御手』でレベルアップした能力で『幻想御手』に対抗してるってこと。

もともと『幻想御手』は他人と脳をシェアしてレベルを上げさせてたっぽいから、実は正しい使い方なのかもね。でも、能力の演算に『幻想御手』のプロセスが入ってるから、『幻想御手』の影響を完全に消すことはできない。

それに》

消そうとしても、無意味だ。

伝えられるより早く、おれは直感的に気づいた。

『幻想御手』が誰かの思考回路を上書きしようとしているとすれば、初ちゃんが伝えたとおり、それは他の『幻想御手』利用者とＡＩＭ拡散力場でつながっていることになる。そして、他人とつながることでより大きな演算能力や経験が自分にながれこみ、それがレベルの上昇というかたちで現れる。

そのネットワークに頼れば頼るほどつながりは増え、最終的に共有から支配へと関係が変わっていく。

一度『幻想御手』の干渉を受ければ、干渉そのものが止まるまでは何度影響を排除してもイタチごっこだ。

こうしてみると、なんのことはない。

『幻想御手』の目的は他人の脳神経回路の共有であり、逆にレベルアップこそが副作用だったのだ。

そして、その共有ネットワークを支配しようとしているやつがいる。

「初ちゃん？」

「ざんねんだったね、ほかをあたってくれよ」
《ああ、もう喉と舌に信号が行かなくなってきたね。この年で幼児語はちょっとやだな》

「いや、初ちゃん、どうしたんだ？」
《その声出てないのはわざとだよな？　そうだよな？》

「ちょっとねむたくなってきた」
《悪いけど、今僕は真剣に声が出ない。
あと、きみの予想はだいたい僕と同じだ。
『幻想御手』の目的は、人の脳をつなぎあわせて高い演算能力を得ることだと思うよ。それで何をするつもりかは知らないけど》

「おい初ちゃん」
《ちょっと待てよ、今までずっと耐えてきたんだろ？　なんで今になって》

「いまはむり」
《こういうのはダムとかと同じみたいだね。いったん限界を越えたら、一気に連鎖反応で崩れていく。誰かが僕を“経営統合”するまで秒読み段階ってわけさ。
『風紀委員（ジャッジメント）』あたりに言いつけた方がいいよ。僕らじゃ手に負え

ない》

「おい初ちゃん！」

《そんなこと言ってる場合か！　早くナースコールとか》

「ああ」

《それこそ感動的だが無意味、ってやつだよ。命に別状はないし、コネもない僕が誰かを動かせるわけじゃない。

まあ、でも、欲張ったことを言えば》

「じゃく、たすけて」

初ちゃんの声が、途中で切れた。

「……初ちゃん？」

ナースコールを十六連打で押し続けた。
医者に個室から追い出された。
オカルトさんが何か言っているが、聞こえない。

おれはビビリと同時に、予想以上の打たれ弱さを誇っていたらしい。
次に気がついた時には台所でジャガイモの皮をむいていた。
その中身とハムを炊いて簡単な飯を食い、おれはそのまま床についた。

今日は、オカルトさんの夢に逃避したい。
今日だけは。

第六話の二　たすけて（後書き）

というわけで、介旅が一時退場したところで「巻二」の本伝を終わらせていただきます。
相も変わらず、評価・感想などお待ちしております。

ちなみに。
加藤くんがレベル3にもかかわらず低・無能力者を気にするのは、自分の能力が本質的には戦闘に向いていないと思いこんでおり、なおかつカツアゲのとき実際に能力をうまく使えていないため、レベルよりに見合った実力がないと思いこんでいるからです。

『物理的に弱い』点で同類意識を持っているんですね。だから「能力があってもなくても、上に行くやつは行くし行けないやつは行けない」という考え方になってきます。
レベル1でも『風紀委員』になっている初春のような人と、自分を対照的に見ていることになりますね。

第六話補遺　安倍晴明（前書き）

「天道神は牛頭天王である。
何をするにも、この方角を向いて儀式を行えば、一切の望みが成就する」

――伯道『金烏玉兎集』

第六話補遺　安倍晴明

――ハ、ハ、笑うべきではないか、呆けて泣き寝入りとは

――だが、夢は逃げこむ先ではないぞ

――特に今宵はな

オカルトさんの笑い声が、どこか悲しげに聞こえた。

安倍晴明（あべのせいめい）という男は、オカルトさんが知る限りでは例の阿倍保名（あべのやすな）くんの子孫らしい。

保名くんは恨みの力というべきか、なぜか大阪湾に漂着し、あたりを通りがかった呪術者に拾われて吉野の山奥に連れてこられ、そこで呪術の教育を受ける。

ただどうも、この呪い師は保名くんより、彼と一緒に舟に放りこまれていた巻物の方を重要視していたようだ。字幕によると『金烏玉兎集』という書名だった。

呪術者として成長した保名くんは独り立ちし、彼の手元に帰ってきた金烏玉兎集狙いの同僚や弟子たちとともに、紀州中南部の集落にうつって共同生活をはじめた。

その集落は役小角という行者が開いたところで、のちに呪術師の村“龍神村”となる。

金烏玉兎集を持っていた保名くんは、その巻物を書いた“伯道”という男にちなんで、伯道仙人と呼ばれるようになった。

さて、保名くんの誕生から二百年ほど後。

蘆屋道満という男がいた。

字幕によると、彼は髪をそり坊さんの格好で庶民を相手にする法師陰陽師。

要するに、町の占い師だ。

にもかかわらず彼は陰陽道のエースであり、基本的に貴族以外は人間扱いしない朝廷さえもその実力を認めざるを得ないほどだった。
このため、彼は陰陽博士という職を与えられ、民間出身者では初めて日本の陰陽師たちのトップに立つことになる。

法師出身の陰陽博士。
蘆屋さんは法師陰陽師たちの誇りだったが、同時に朝廷のエリート官僚だった官人陰陽師（かんじんおんみょうじ）と陰陽道の名門にとっては、間違いなく敵だった。

その蘆屋さんには弟がいた。
いま家来とともに、必死になって河内――いまの大阪東部の森を駆けている男だ。
もともと筋肉質の体に似合った凶悪な面がまえだが、今はその顔に焦りがしみ出てさらに恐ろしい表情になっている。

字幕。
彼の名は石川悪右衛門（いしかわあくえもん）。しがない地方官僚だ。
ちなみに“悪”という語は、むかし勇敢だとか暴れん坊という意味があったので、男につける名前としてはいい字だと弁護しておく。

「兄上、それで結果は」

数日前。

彼は公用もないのに京を訪れ、官職を押しつけられてから自由行動ができない、などと贅沢な悩みを吐いている兄の家にとびこんだ。

見かけに似合わず愛妻家の石川さんにとって、その嫁さんが病気にかかったとなれば、薬を買う金も誰かから奪う権力もない彼が頼れるのは、当代きっての術師である蘆屋さんしかいなかったわけだ。

「……“若い女狐の生き肝を与えよ”だそうだ」

「本当か!?　それで本当に稚(わか)は助かるのか!?」

渋い顔の蘆屋さんに、弱気な顔でつめよるというレアな行動を見せる石川さん。

つーか、また稚かよ。絶対吉備氏だろ。

「獣の肝に滋養効果があるのは事実だ。
肝を食べさせるまえに死ななければ、だがな」

「わかった！　今すぐ郎党連れて狐狩りだ。兄上、助かった！」

まだ何か言いたそうな蘆屋さんを置いて、石川さんは大慌てで屋敷を後にした。

その後ろ姿を見ながら、蘆屋さんは苦々しげにつぶやく。

「……必ず狐をとらえてくれよ。
自分の占事ながら信用したくはないが、その狐を取りにがせば、おれたちふたりの先には破滅しか待っていないらしいからな」

＞i２３３４６―２９３８＜

さて、同じ河内の森に、別の男がいた。
狩衣徒歩の軽装だ。信太明神（しのだのかみ）にお参りに行った帰りらしい。

字幕。
彼は安倍安名（あべのやすな）。先祖の名前をもらった、龍神村の一族だ。

彼は伯道阿倍氏の分家で、先祖が“安倍”に改姓したのをきっかけに自分たちも安倍を名乗り、一家そろって河内に移住していた。
彼らが開拓した地域は、本家の名をとって“阿倍野”と呼んでいる。

道のかたわらにあった岩に腰かけて彼が持参したおにぎりをぱくついていると、唐突に現れた白狐が岩の裏へとびこんできた。
奇怪な音がして振り向けば、そこに白狐の姿はなく、小さな岩があるばかり。

同時に蹄の音。

「なんだ、こんなところで狐狩りか。くっだらねえ」

静かな食事を邪魔されて、安名さんは一気に不機嫌になった。
呪術師の端くれにとっては、化け狐より騎馬にマイナスイメージがあるのだ。
この時彼が起こした気まぐれが、千年後に響いてくることになる。

……オカルトさん、さすがにこれを史実とは言わないよな？

さて、史実では。
分家の安倍一族からは呪術に秀でた人間が出ることもなく、朝廷でも冷や飯を食らっていた。
プライドが無駄に高い龍神村系の氏族にしてみれば、先祖の阿倍仲麻呂が最初に学んだ呪術が一般人に牛耳られるのは許せなかったから、ふてくされた毎日を送っていたのだ。

だから、

「おいそこの！　狐を見なんだか？
おれは河内守護の石川だ。正直に答えろ」

その“一般人”代表になった蘆屋さんの親族の協力など、死んでもしてやるものか。
そう思っても、無理はない。

「狐？」

安名さんがとぼける。
騎馬の男たちが十二、三人で取り囲んでいる中の発言だと思えば、なかなか肝が据わっているといえるだろう。

「ああそうだ。今俺たちが追っていた白い狐だ」

「そんな目立つもの、見ませんでしたよ。だいたい白い獣といえば瑞兆じゃないですか。なんでそんなものをわざわざ狩ろうとするんです」

「めでたいから狩るのだ！　そうでなくとも蘆屋道満さまの占いの結果だ。
従わない法があるものか」

この瞬間、安名さんの感情は決定的に悪化した。
あの生意気な蘆屋の親族というだけで好きになれないのに、その

占いに従うなど、絶対にお断りだ。

「私は存じません。そういえば、山の方でガサガサ音がした気はしますが」

「それだけ聞けば十分だ。すまなんだな、者ども行くぞ！」

保名さんの持っていたおにぎりに砂煙をかぶせて、石川さんたちは去ってゆく。

「……けっ」

小さく吐き捨てた安名さんは、蹄の音が聞こえなくなる頃合いを見計らってまた後ろに振り向き、

「食うか？」

顔だけ出している白狐に、砂まみれのおにぎりを差し出した。

字幕。
白い狐が瑞兆というのは事実だったらしい。
この後、安名さんには幸運が続いた。

河内の豪族からいきなり縁談が舞い込み、葛葉（くずのは）という落ちついた感じの美人と結婚できた。
子供もすぐに生まれ、しかも早くから呪術の才能を示したため、喜んだ彼は京の名門であり大陰陽師である賀茂忠行（かものただゆき）に弟子入りさせた。意地でも蘆屋さんの弟子にはしたくなかったのだろう。

この子供に、賀茂さんは新しく「晴明」と名を与えた。
安倍晴明の誕生である。

ちなみに、石川さんの妻の稚さんは、あの後すぐに亡くなった。
蘆屋石川兄弟は、それぞれの理由で悲しみに沈んだという。

こうして生まれる前から他人の運を奪ってきた安倍晴明は、その後も他人の何かを奪い取って出世を進めていった。

賀茂さんの息子の賀茂保憲（かものやすのり）さんは兄弟子だったが、彼の才能をしめす「鬼を見た」というエピソードを横取りして朝廷に広めたり。

遠い故郷である龍神村近辺にいた盗賊の元締めを捕まえて自分に従属させ、あげく魂を奪って“式神”にしたり。

さらにあの時の嘘がばれた安名さんが身の危険を感じると先手を打って石川さんを呪い殺し、それについて蘆屋さんが訴えるとむりやり話を呪術合戦に持っていって圧勝、無罪を勝ち取ったり。

さらに安名さんが殺されかけたと嘘の奏上をして、ついには蘆屋さんの首まで狩り取ってしまった。

そんな彼は、ついに龍神村の支配権までも手に入れようとたくらむ。

この時、元祖のはずの伯道氏は男子がおらず、長女がとりしきっていた。

その名前はオカルトさんも知らない。ただ一族が儀式をおこなう場所にちなんで、先祖代々伝わる通称「デクチャヤ」が伝わっているのみだ。

彼女個人は

「若一党（じゃくいちとう）の総領娘」

と、呼ばれていた。

視界の真ん前に、古風な身なりの老人が現れた。

膝から下が足袋につながったような形の袴と胴衣の姿で、髪の毛はテレビで見たバカ殿さまのように細く結い上げている。

字幕。

龍神村の“怨霊”、庄司新九郎（しょうじしんくろう）。

「して、そこなる吾子（わこ）は？」

新九郎さんがおれに、いや“オカルトさん”に尋ねた。

おれが視界を共有するオカルトさんが、振り返って見下ろす。

視線の先には、加藤くんと同じように背が高く顎が長い少年。

「思わぬ拾いものだった。熊野の浜に辿り着いたところで、この熊野王子（まのおうじ）に巡りあったのだ」

「熊野王子に！　それはまた幸先のよい！」

なんだか知らないが、新九郎さんは今の意味不明な説明で喜んでいる。

少年は引き気味だ。そりゃそうだろ。

年号が明治になって十年ほどたったこのころ、廃仏毀釈（はいぶつきしゃく）の流れは神仏習合の伝統が長い地域にも押しよせていた。熊野権現とかそういう迷信は、真面目に受け取るべきものではなくなっている。

――熊野王子は、熊野の神だ

――神は童形（どうぎょう）ゆえに王子と呼ぶ

――この体の名が示す若一王子も、その一柱だ。ニャク、とも読む

脳内にオカルトさんの声。

へー、加藤くんの若一って神様の名前だったのか。解説ありがとう。

でも今のオカルトさんと庄司さんの前にいるオカルトさん、ずい

ぶん声が違いますね。

――当たり前だ

――これはおれの記憶であっておれの経験でない

――むしろおれは、あの王子と呼ばれた小僧の方だ

……え？

あの少年が？

じゃあ“この”オカルトさんは？

――言ったろう、転生は可能であると

混乱しているおれにオカルトさんの追い討ちがかかり、そして同時に目の前では勝手に話が進んでいく。

「この小僧は死人を見ることができる」

「なんと！　死人を！　それはみごとな」

「それにもう一つ、熊野王子は死人をこの世に還すことがでいる」

「おお、それこそは反魂の術！　若一党の陰陽師がよくする業でござった！」

拍手までして大喜びの新九郎さん。

だが、その手から音は鳴らない。寒々しい風が吹いてくるだけだ。

隣の“現オカルトさん”が、ますます引いている。

“旧オカルトさん”が、一段と声を低める。

「ところで新九郎、俺がここまで戻ってきたについては理由がある……」

すると新九郎さんが、妙にうつろな声でそれを遮った。

「待たれよ！　皆まで申されるな……母様と父様のことであろう。父様はある日の丑三つ刻、無残にも晴明の策略にかかり、腹あばかれ、崖より突き落とされてござる。

母様は京より遣わされた陰陽寮の者どもにより、笠塔山（かさとうさん）の頂きに

連れ去られ、自害いたしてござる――」

「待て！！」

映像が揺れる。
新九郎さんの顔がいぶかしげに、一瞬おいて驚愕、後悔、そして悲痛に歪んでいった。

「いま……なんといった？」

「……」

「答えろ、新九郎」

「母様は……笠塔山の頂きで……」

「その先だ！！」

「……じ、自害を……」

視界が伏せられた。

おれといっしょにいる脳内のオカルトさんが、この言葉を聞いて存在感を薄めた。

おれも何も言わないことにする。

新旧のオカルトさんはこの時、自分（そして、いずれ自分となる人生の大先輩）の出生にまつわる秘密を、初めて知ったのだから。

しばらく沈黙した当時のオカルトさんは、顔を上げて問いを再開した。

「教えてくれ、真実を！」

新九郎さんは、人を殺せそうな旧オカルトさんの視線をまっすぐ

に受け止め、青ざめた顔をひきつらせて話し始めた。
この人も相当の胆力だ。

「よろしいか、母様はあの日、安倍晴明一党の手で笠塔山の頂きに連れ去られた。
おそろしいことだが、花山天皇が身辺に召されんとした母様に、晴明めが横恋慕いたした。欺いて思いを遂げ、あげくに母様を笠塔山の頂きへ運び上げた」

つまりあれか。
安倍晴明は旧オカルトさんの母さんが邪魔だったわけだ。陰陽師的な意味でも、天皇の側室的な意味でも。

どっちにせよ、陰陽師一家として安倍氏が栄えるには障害でしかないわけだから。
……だから自分で手を付けた？
天皇の側室になる人に？

「母上を、そこでどうしようとしたのだ？」

「熊にでも食わせるつもりだったのでしょう。天皇に申しひらきするには、母様が神隠しにあったとでもいうほかありませぬゆえ」

念の入ったことで。
蘆屋さんをハメ殺したあとでは、龍神村の若一党本家さえ潰せば彼と安倍氏の陰陽系列独裁まで一直線だからな。
……うん、これはおれも怒っていいよな。
脳内オカルトさんが沈黙している今となっては。

「で、母上は？」

「むろん、はずかしめをうけた以上、命長らえるわけにはゆきません。山頂にて自害されたが、そのとき母様は身重にて、臨月まで三ヶ月という時期にござった」

「それで」

「身共（わたし）は、安倍の一党から離脱せる賀茂保峯（かものやすみね）と申す陰陽師より聞き知りました。
母様は落命されんとする折、賀茂保峯に懇願したといいます。
どうかわが怨みにより、熊野王子に願掛けしてほしい。わが身果てたのちも腹の内なる子を助け、安倍一党を操りし京の者どもに祟りなせ……と」

すさまじい人だ。

安倍というより吉備の人は、どいつもこいつも自分の命を使い果たしてでも目的をなしとげるという執念を感じる。

晴明もその例外ではない。自分の命を使わないだけで。

「……母様は亡くなられた。安倍一党は母様を裸にしたうえ腹を暴き、子を取りだしたのち、母様の亡骸のそばにさらしたと申します」

そこで新九郎さんが、一度のどをグッと鳴らした。

現オカルトさんはもう恐怖で、表情が顔に出てきていない。

旧オカルトさんの顔は見えないが、事情を知らない人間が見てもこわがるだろう確信がおれにはあった。

「そして……そして一思いに子をひねり殺さんとしたとき。

いまだ臍の緒すら取れぬ赤子が、泣きながら母様の亡骸に這い寄り、乳房にむしゃぶりついたのでござる！」

沈黙。

沈黙。

沈黙。

新九郎さんが覚悟を決め、話を続ける。

それまでにかなり長い時間が経っていた気がするが、それはどうでもいいことだ。

誰だってそうなるだろう。少なくともおれはそうなる。

「……安倍一党は、死骸の乳房を含み、乳をむさぼる赤子を見て、恐怖いたしたのでござる。これは、母様が呪いのことばとともに申されたる熊野王子の祟りじゃ、と感じたのでござる。

赤子を死骸もろとも放りだし、我先に山をくだっていったと申します。ただ一人、賀茂保峯だけが勇をふるい、赤子を死骸から引き剥がしたのでござる。

しかし、泣きさわぐ赤子をどうしても殺すに忍びず、ひそかに下山して賀茂の流れをくむ加藤家に養育をゆだねた次第……」

「それで……おれは加藤なのか……」

酷薄そうなこれまでの声とは違う、枯れた音がのどの奥から出た。

旧オカルトさんも、加藤と言ったらしい。

いやむしろ、加藤の名字は彼のずっと前から始まっていたのだろう。

新九郎さんもその考えを肯定した。

「はい。加藤家は、安倍晴明の師とも高弟ともいわれた名門、賀茂保憲の流れにござる。

赤子を託された加藤家は、晴明よりも上座に君臨せし家祖、賀茂保憲にちなみて、貴殿を加藤保憲と命名した、と聞いておりまする」

長い話は終わった。

――せめてもの救いは、

と、脳内オカルトさんが初めて口を開いた。

同じ声が耳から入ってくる。旧オカルトさんと声を合わせているのだ。

今や旧オカルトさんは、薄笑いを浮かべていた。

『おれが安倍晴明の子ではないと分かったことだ』

『おれはやはり、龍神村の陰陽師の倅（ガキ）だった』

『うれしいじゃねえか！』

第六話補遺　安倍晴明（後書き）

総合ユニークアクセス１００００突破、ありがとうございます！！
これからも精進してまいりますので、何とぞよろしくお願いいたします。

カトー出生の秘密。
そして巻二の終了。そろそろ話が動きます。

注…

『役小角』
奈良時代の呪術者。呪文で鬼や土地の神々を働かせたりしたという伝説が知られている。
のちに山岳信仰（山自体の崇拝。山で修業すれば、人間より高いレベルへたどりつけるとする）が広まると、役小角は史上初の「修験者」とされ、役行者とも呼ばれるようになる。

『葛葉』
安倍晴明の母とされる女性。
実は彼女、安名さんが助けた白狐が恩返しに変身して嫁いできたのだが、ある日正体を現してしまい、涙しつつ息子に別れをつげる――というのが、講談「しのだ妻」のあらすじ。

『賀茂保憲』
平安時代中期の陰陽師。当時の陰陽寮で安倍晴明とツートップを形成する。

陰陽道・暦道・天文道のすべてを制覇した父・忠行のもとで、陰陽寮の黄金時代を維持した。

『笠塔山』

和歌山県田辺市の山。標高１０４９メートル。

古くは神山といったが、安倍晴明がこの山の妖怪を退治して改名されたという伝説がある。

第七話　お久しぶりです

夏休みの初日。
昼過ぎに起きたおれは、まず全電動自転車（サイクル）で病院に行った。
なぜか昨日夜に変電所が不具合を起こしたようで、信号が消えた交差点ではヘルメットをかぶった『風紀委員（ジャッジメント）』が笛と蛍光棒で交通整理していたが、おれには気にもならない。

初ちゃんの個室は、扉のモニターに面会謝絶の表示がある以外は、何もかも昨日と同じ様子だった。
うるさいオカルトさんを無視して、ふらふらと病院内をうろつき回る。
停電のせいか、冷房はない。

こうしてみると、おれはかなり初ちゃんに頼っていたらしい。
よく考えれば中学校に入ってからはほとんど彼ひとりとつるんでいたようなものだし、その唯一無二の友人に目の前で倒れられたら、ふつうはこうなるのだろう。
加藤くんの体に乗り移って、もう二度と両親には会えそうにないとわかったとき大泣きしたが、自分でもそれ以来の落ち込みようだ。
そう思いたい。

おれが豆腐メンタルなだけかもしれないが。

特に何を考えることもなく、そのままクッションがくたびれた病院の待合スペースに差しかかった時、オカルトさんの警告を無視してから

「『風紀委員』の白井黒子です。容態は？」

ここ数日で聞きなれた声に目をむけるまで、数秒かかった。

＞i21811―2938＜

このろくでもない世界の法則性として、おれが一番興味を持っていたのは、他でもない人間の名前だ。

おれの“前の世界”とはかなり違った名づけ方が一般的になっている。

それについて、おれなりに考えをまとめてもいた。

まず、第一のパターン。

単純に漢字の内容や語呂で決まっただろう名前だ。

たとえば、レールガンこと御坂美琴（みさか みこと）さん。

彼女は単純に「美しい琴＝共鳴（こもりおと）・和音」ということになる。

彼女がつけ狙っている高校生の上条当麻（かみじょう とうま）さんは、たぶん「当に麻（まさ みことのり）

＝至上命令のごとし」といった意味あいだろう。

そういえば加藤くんの記憶の中で、彼と同じ実験台になった女の子に枝先絆理（えださきばんり）さんという子がいた。

「絆の理（きずなことわり）」に発音を距離単位の“里”とかけて、“絆は万里を越えてある”ということか。一里四キロで計算したら万里は四万キロ、地球を一周して帰ってくるけど、そんな野暮はともかくいい名前じゃないか。

彼女は昏睡したままだが、本当に絆が健在だといいですね。

さて、初ちゃん……介旅初矢は言うまでもない。「初の矢」だし、たぶん長男だろう。

「介旅」には激しくつっこみたいが、この際放っておく。

学園都市には、おれから見ると意味不明な名字が多すぎるのだ。

……まったくの語呂合わせで、語源は「尊（みこと）＝貴い人」や「御言（みこと）＝おことば」だったりするかもしれないが。

「とうま」の語呂は不明。

読みかえで「当麻（たいま）」からつなげるのかな？　だとすると、大麻とか退魔とか、ぶっそうな単語が出てくるんだが。

次に、第二のパターン。

何かマイナーな人名などにちなんで名づけられた場合だ。

これは、おれの“前の名”が例にあがるだろう。
吉備津脱解（きびつとりひろ）の脱解は、日本出身で古代朝鮮の新羅（しらぎ）国に流され、その地で王になった脱解尼師今（タッレイサグム）という人の伝説にちなんでいる。
やっぱ、おれの家系は吉備氏系なのかな。ここで新羅が出てくるってことは。

今“おれ”たちが同居している体の持ち主は加藤若一。
この読みにくい名前は、昨日明らかになったが熊野の精霊のひとつ若一王子（じゃくいちおうじ）にあやかったものだ。

さすがに若一“党”とはまだ信じたくない。
王子堂の近所に先祖が住んでたとか、単に「若い一番」の意味だった、などの可能性も残ってはいるけれど。

あの音楽好きの佐天涙子（さてんるいこ）さんはもっとわかりやすい。十中八九、明治期の作家兼ジャーナリスト黒岩涙香（くろいわるいこう）が元だ。

……実は何かの事情で「涙から生まれた子」だったり。
そんな突拍子もない理由でもないと、女子に「涙」の字をあてる発想が理解できないんだが。

さて。第三のパターンは、名詞の直輸入だ。
この分類に気づいたのは、レベル5のひとりの名前を聞いた時だった。

麦野沈利（むぎの しずり）。

「しずり」は「しずる」の名詞形で、木の枝や屋根からずるっと落ちる雪のことだ。

おれが最近どんどん世話になりつつある『風紀委員』の初春飾利（ういはる かざり）さんも典型例。本人も花飾りを常備しているのが印象的だった。

第四のパターンは、おれが知っている名づけ方を総称している。

クラスの鳥岡先生や、声が聞こえた白井さんなどがこの部類に入る。安治とか黒子とか、名前を発音しただけでなんとなく安心感がわきおこってきます。

つーか“おれが知ってる名づけ方”がひとつのカテゴリとして成立してしまうほど少数派なのが、涙を禁じえない。

で、何が言いたいかというと。

人生のなかでは、他の人にとっては当たり前でも、自分には信じられないようなことが起きるものだ。

名づけに関する常識が崩れているのは“ＤＱＮネーム”報道とかで知ってはいたが、ここまでとは。

夢で見る古代世界とネーミングセンスが大差ないってのがね。

――そのようなことはどうでもいい

――一刻も早く解決策を見出さねばならん

で、信じられないようなことが起きる。
初ちゃんが意識を失ったのもそのひとつだ。
今ここに白井さんと御坂さんがいたのも、そのひとつだろう。

――わかっているのか

――きさまも昏睡に陥れば、おれとともに意識が消えるのだぞ

うるせえ黙ってろオカルト野郎。
今おれは実在する人物と話をするんだ。

「……情けない話ですが、当院の施設とスタッフの手に余る事態ですので、外部から大脳生理学の専門家を招きました。
現在こちらへ向かわれているとのことです」

「わかりました、ありがとうございます」

医師との話が終わり、待合スペースにやってくるふたり。
そこにはすでにおれが力なく腰掛けている。
力なく、というのはオカルトさんの表現だから、おれは知らないが。

――憑霊め、きさまも腑抜けることがあるのだな

――早急に行動せんか、このたわけが

黙ってろっつってんだろ。
今のを翻訳すると「元気出せよ」ということになるんだが、この人がそういうセリフを吐くと励ましでもなんでもなく、ただ単に自分の意識体を案じているのだと確信できる。
もともと利害の一致があったからこそ、おれの意識を生かしてもらっている節もあったことだし。

ともあれ、今は加藤くんの体をおれが支配している。
ならば、今のうちに御坂さんと白井さんに近づかせてもらう。

もともとこのふたりとの接触を進めてきたのはまだ知識体系だったころのオカルトさんの結論だ。そうでなくとも『風紀委員』のエースと本物の『超能力者』につなぎをつけておけば、後になって大いに役立つだろう。
おれとオカルトさんが出していた結論においても。

「……あれ、おふたりともどうされました」

「加藤さん？」

おれの間抜けな声で、虚空からおれの方に顔を向ける白井さん。
そして、その隣でおれを見た瞬間に唇がへの字に曲がる御坂さん。

まあしょうがないよな。
とりあえず全力で誠意を示すしかない。

そう混乱した思考回路で考えたおれは、

――もういい、おれは知らん

「……あ、ええと」

何に対してか放置を決めこんだオカルトさんの声に背中を押され、

「昨晩はまことに申し訳ありませんでした」

流れるような動作、と後に語られるがごとく土下座していた。

「……えっ？」

「いやほんと正直すまんかった。
今おれはかなりの役立たずだけど、できることはするから許していただきたい」

あの後。
三〇秒ほどで『空間移動（テレポート）』をくらい、強制的に土下座を解除されたおれは、彼女たちの向かいでとにかく頭を下げていた。

「もうそれはいいですの……って、今おれは？
加藤さんも、何かあったんですの？」

かなり迷惑そうな顔をしていた白井さんが、鋭いつっこみを入れてくる。
まあ『風紀委員』が病院に来てるんだし、あっちも何かあったと思うのが普通だろう。

「初ちゃん……介旅が昏睡した」

「かいたびって……例のあいつ？」

初ちゃんを知らない御坂さんの当然の疑問。“例の”というのは、自分が焼いた人間という自覚があるらしい。

それを聞いて下を向く白井さん。口元が歪んでいる。

笑っているわけじゃない。どうした？

「……まさかとは思っておりましたけど、やはりそうでしたの」

「どういうことだ？」

初ちゃんが倒れることを予想していたような口ぶりだ。これはまたおれのテンションが嫌な方向に上がるフラグですかね。

いや、それならそれで白井さんが唇をかんだりしないはずだ。

「実は、白熱光線（ソーラーレイ）事件の犯人たちが意識不明に陥ったと連絡を受けて、今わたくしたちがここに急行したんですの。

恐らく、彼らも『幻想御手（レベルアッパー）』を使っていたのでしょう」

「は？」

犯人が『幻想御手』を使っていた？
それ以前に、白井さんが『幻想御手』の存在を知っている。
なにがあったんだ？

「ちょっと待ってどういうこと？」

「いやいや、『幻想御手』って都市伝説のアレか？
つーか初ちゃんから聞いた話だと、あいつらレベル2か3らへんの連中が協力してビームを作ってたんだろ？　それなら『幻想御手』もいらないんじゃ」

「介旅初矢さんは、例の銀行強盗事件で加藤さんとともに人質となった方ですわ。おとなしい事情聴取した時に、自分にもしものことがあれば加藤さんを頼れと……。
それで加藤さん、書庫（バンク）の存在はご存知ですわね」

おれのつっこみを遮って、両方に答える白井さん。
何か言いたいのだろうが、今おれの注目は彼女の背後にある。
そんな恐ろしいものに立ち向かうような勇気凛々の目を、おれに

向けないで下さい。
おれはただのザコなんだから。

「事情聴取で初春さんが使ってた、能力者図鑑みたいなやつ？」

「ええ、その認識でおおむね正解ですわ。
その『書庫』によれば、あの犯人グループの中にレベル２以上の能力者はひとりもいませんでしたの」

「なるほど。
てことはつまり、端数切り捨てでレベル０や１の判定だったやつらが『幻想御手』を使ってレベル２になってたってことか？」

「おそらく、そういうことでしょう。
それに登録されたレベルと被害状況がかみ合わない事件は、介旅さんの例をふくめて、かなり増えてきておりますの。『幻想御手』の真偽はともかく、そうした効果のあるモノや現象が起きている可能性は高まってまいりましたから。
介旅さんについては、あなたにお聞きしたいこともありますし」

相変わらず暗い顔で肯定する白井さんから視線を外して、おれは唸る。

「そういう手があったか……」

しかし結局、『風紀委員』は特に有力な情報を掴んではいないようだ。
初ちゃんの推理を披露すべきか、彼女たちに先入観を与えないように黙っているべきか、そんな見当違いのことを悩んでいたおれの思考は、オカルトさんによって断ち切られた。

――憑霊、心しろ！

――尋常ではない霊力だぞ！！

ほとんど絶叫に近かった。

オカルトさんは基本的に、自分に関係ないところでは空気を読む。今もガキっぽいおれの「黙ってろ」につきあってくれる余裕のある人だ。
そんな彼が脳内にあっても“叫んだ”となれば、ただごとではない。たとえ霊力だとか電波な内容でも、日本語に直せば意味がちゃんとあるのだ。
それを翻訳するのは、キビツの役目。

「失礼。それで、病院としては原因不明ってことか」

御坂さんの視線から逃れるように、おれはちらちらと周囲を見回

す。

そういえば、御坂さんと白井さんは寮で同室だったな。そりゃおれに怒るのも無理ないかもしれないが、白井さんが許してくれたんだから勘弁してくれ。

おれみたいな“レベルの低い”相手は、毎日さんざっぱら叩きのめしてるんだろうし、たまに言い返されるぐらい許してもらいたい。

「ええ。ただおかしなことに、今週に入って犯人たちや介旅さんと同じ症状の患者が次々と運ばれてきているらしいんですの。それも、同じような事件を引き起こした人たちですわ」

尋常ではない霊力。

すなわち、尋常ではない規模、あるいはもしかしたら“種類”の能力を脳内に隠しもつ人が接近しているということになる。

なんでそんなことが分かるかといえば、オカルトさんが今朝から勝手に周囲へ弱い斥力場を出してやがるからだ。

これが近づく誰かの能力でどれだけ押しのけられるかで、その誰かの大まかなレベルを測ってしまえという強引な発想だが、信じがたいことに効果あったらしい。

「この病院には“手に余る事態”のようでして……」

唐突にうなじがピリッと痛む。

意味が分からないまま後方へ聴覚を集中したおれは、

「解決のために外部から大脳生理学の専門家をお呼びしたとのことで、今その方をお待ちしていたんですの」

コツコツと床に細い杖を討ちつけるような音が聞こえてくるのを、察知していた。

おれはこの音を知っている。
ここではないどこかで聞いた音。
おれではなく“加藤くん”が聞いた、懐かしいヒールの音。

「まさ、か」

「あら、いらしたようですわ」

コツン。
そして音は止まる。

サイズの大きい白衣のポケットに両手をつっこんだ、茶色という

には薄い色彩の長髪をほとんど整えていない女の人が、廊下に突っ立った。

「お待たせした。
水穂機構病院院長より招聘を受けた、木山春生（きやまはるみ）……」

そこまで言って、うつむいていた顔を上げる。
同時に、その両目が猫のように開かれた。

「……かとう君？」

「お久しぶりです、木山先生」

第七話　お久しぶりです（後書き）

木山先生、再登板。

第八話の一　木山春生の茶番

「かとう君……どうしてここにいるんだ？」

口走ったのは、当然ながらこの場で最年長者である木山先生。
おれとはそれなりに因縁がある。

ひょっとすると、オカルトさんとも。

どうも、加藤若一です。
ずっと会いたかった人がいきなり目の前に現れると言葉が出てこないとは言うけれど、本当だね。
別に感極まったわけじゃないが。

「友人が昏睡しまして。どうも今回の集団意識喪失と関係があるらしいので、『風紀委員』の方にお話を伺っていたんです」

「！！　……そうか。それは大変だな。
私も専門家として、解決に力を尽くさせてもらう」

「それはどうも」

いきなり目をそらし、普段使わない大げさな言葉遣いになった先生。
どうしたんだ？

「あ、あなたは！」

そして素っ頓狂な声を上げたのは……御坂さん？
なんで御坂さんが？
……いや、都合いいと思うべきなのかな。

「あれ、お知り合いで？」

「あんたこそなんでその人と親しいのよ！」

混乱しているからか、質問に質問で返してくる。
電磁力なんて計算式のものを扱っているからもしかしたらと思っていたが、あんた国語弱いだろ。

「いや、前におれの能力が暴走してヤバくなった時に治療していただきまして。
ですよね、木山先生？」

「……ああ、その通りだ。
キミの症状はあまり例がなかったから驚いたよ」

「へ～……」

感心しきりの御坂さん。
彼女が素直な人で助かった。
素直とは思えない隣の白井さんに対しては、あとで追加設定をバラしておこう。どうせ『書庫』でも見れるたぐいの情報だしね。

おれは能力の暴走によって昏睡に陥り、その際に反復性偶発性念動力症候群（RSPK）という病気が発症したことになっている。
それが完全に治ったのが去年末ということになっているらしい。

まさか、それだけで連絡取らなかったわけじゃないだろうな、先生。

>i21811—2938<

「……それにしても暑いな。
ここは真夏日でも冷房を入れない主義なのか？」

先生が露骨に話題変えやがった。

しかも実際に緊急性のある話題だからタチが悪い。
もはや雑誌なんかで『怪奇・脱ぎ女』などと言われているのだ。
これ以上面倒なことをされてたまるか。

「そうですわね……」

白井さんが乗ってくる。
やはり女性は暑さに敏感なんだろうか。違うと思うんだが。
と、そこに看護士さんが通りかかる。

「申し訳ありません、それが昨夜停電がありまして、まだ復旧していないんです」

「うっ」

看護士さんの説明にかぶさったのは、顔の方向を変えた御坂さんのうめき声。
とりあえずおれは顔を正面に戻す。
位置関係的に、そうすれば木山先生を見なくて済むからな！

――奇妙な女だ

オカルトさんがつぶやく。
まったく同感です。

「……そうか。非常用電源は手術や重篤患者に使われているしな」

「へ」

白井さん気づいたな。だがもう遅い。彼女をだれにも止められはしないのだ。

……それっぽいこと言ってるけど非常に不本意です。

「はぁ……」

「またはじまった」

木山先生の無駄に色っぽいため息と、御坂さん二度目のうめき声。

もう何が起きているか容易に予想がつくから、おれは目を閉じていることにする。

「な、何をいきなりストリップしてますの！」

「いや、だって暑いだろう」

「殿方の目がありますの！

そっ、そうですわ、加藤さん！？」

白井さん怒涛のつっこみを暗闇の中で聞く。
話をおれに振らないでくれ。おれは絶対にそっちを向かないからな。それどころか両目をきつく閉じているんだからな。

「おれは何も見ていない。何も問題はない」

「ご存じなら事前に制止していただきたいですの！　なぜあなたひとりが逃避を」

「中学二年生の男子に、公共の場で女性の下着姿に関する話を振れと？」

「ああもう、それならそれで……！」

おれに文句をぶつけながら、彼女の声が位置を変えてゆく。
木山先生の服を直すつもりなのだろう。おれにはできない作業なので頑張ってほしい。

「下着つけててもダメなのか……」

どこかがっかりしたような先生の声。
これは数年前からこの話題を取り上げなかったおれが悪いんだろ

うか。そんなことないよな。

「ダメです！」

「そうか」

本当にがっかりしてる。前から思ってはいたが何なんだこの人。

「き、木山先生、専門家としてご意見を伺いたいんですが」

頼れるアネゴ御坂さんが強引な振り。いいぞもっとやれ。

「それはいいが、ここは暑すぎる……」

先生の返答がこれだ。

「では、どこか涼しいところへ……お姉様、加藤さん、参りましょう」

「へ」

それに対する白井さんの回答がこれ。
ちょっと待てよ、なんでおれまで。

「おれ？」

「当然ですわ！　今のあなたは情報提供者として、専門家に詳しく考える材料を与えられる立場なんですから。
……もうひとりの情報提供者の伝言に従えば」

最後の一文では声を落として、病室の並びをちらりと眺める。
この場でおれに関係ある入院者と言えば、ただひとり。

「初ちゃんが情報提供者？　そりゃどういう意味だ」

「先日、白熱光線事件の犯人たちとの接触について事情をお伺いしたときに、自分が倒れたら加藤さんにお話ししろと伝言をいただきましたの。
どうも彼は、こうなることを予期していたようですわね」

……くそ。
初ちゃんを出されちゃしょうがない。

おれも『風紀委員』に出しておくべき情報が増えたし、オカルトさんがあれほど警戒した理由を木山先生に言いたいこともあるし、たしかについて行って発生する損害はおれのメンタル面だけという事になる。

しかし、さっきまで初ちゃんのことなんか知らないというふりを続けておいて、いきなりこれだ。やっぱり『風紀委員』は怖い。

よく考えたら初ちゃんの伝言があった時点で、たぶんおれも『幻想御手』を聞いたことが発覚しているのだ。おそらくすでに準備されているだろう予防拘禁の解除と引きかえに証言するのなら、安いものかもしれない。

そう思ってしまうこの思考誘導。さすがだ。

「かとう君が『風紀委員』に協力しているのか？」

動物園でふて寝するパンダを見た子供のような目でおれを見る木山先生（たぶん怒ってるんだろうな、目立つことしたから）に、白井さんがとどめの一撃を放った。

「ええ。これから『幻想御手』というものの情報を提供していただきますの」

「……さて先ほどの話の続きだが。
同程度の露出でも、なぜ水着はよくて下着はダメなのか」

キリッ、と擬音がつきそうな表情で木山先生がのたまった。
冷房の効いたファミレスに移動し、飲み物も運ばれて落ちついた途端のことである。
サイクルは病院に置いてきた。

『いや、そっちではなく』

半目の常盤台コンビがダブルつっこみ。
ふたりが情報提供を終えるまでは役に立たないので、いわゆるお見合いシートの特性上しょうがなく木山先生の奥に陣取ることにしたおれは、おとなしくアイスコーヒーをすすっていることにしている。
正直に言うと、つっこみは任せたい。
『幻想御手』に関する説明も。

「『幻想御手』……。
それはどういったシステムなんだ？　形状は？　どうやって使う？」

ざっくりしたふたりの説明が終わると、一気に質問が来る。
科学者としては当然か。
それを受けて、なにか決然とした表情の白井さんが、ポケットからｍｐ３プレーヤーを取りだした。
誰かが『幻想御手』をダウンロードしたものを押収したんだろう。

思えば、『幻想御手』について初めて意識したのは、自覚がなかったにしても銀行強盗の時だったか。
『風紀委員』の支部まで足を運んだのが、ずいぶん前に思える。

『風紀委員』か。

前にも言ったが、『風紀委員（かれら）』もレベル５とは別の意味でエリート集団。
実力主義といえば聞こえはいいものの、無能力者（レベル０）の人間――すなわち今回の事件で被害者となりつつある連中は、たとえその意志があってもほとんど委員になれない。
レベル３とレベル４の壁は厚いというが、実際に能力者たちのいざこざに関わる以上それと同程度、あるいは能力以上に“使える”一芸や個性がなければ、試験前に書かされる誓約書すら突破できな

いのが実情だ。

――で、そういう厳しい試練を突破したうえで『幻想御手』について独走を続けている清く正しい『風紀委員』の皆様方に、今回の事件を（心理的な面の事後処理まで含めて）きちんと解決できるのかという点も、もちろん怪しくなってくる。

なんせ理解できないだろうからな、努力しても報われないと暗に言い含められた人間がどんな行動を起こすかなんて。

そんなやつらに協力してるおれ。

「……クソ」

――莫迦者が、喉を鳴らすな

オカルトさんの警告。

ふと顔を上げると、ほかの三人が驚いたような顔をしてこっちを見ていた。

やべ、声に出てたか。

「いやいやすんません、どうぞ続きを」

「……はぁ。では、これですの」

おれの方を“明日には肉屋の店頭に並ぶ運命のなにか”を見るような目で見てきた白井さんが、そのプレーヤーを提示する。

選択された曲のファイル名は「ＬｖＵｐｒ」。

例の“古臭いテクノ”だ。

「……これは、音楽プレーヤーか？」

いぶかしげな声を出す木山先生。さすがに信じられないか。

「この音楽プレーヤーは白熱光線事件の犯人から押収したものですが、問題はここにダウンロードされたファイル。

昨夜接触した“協力者”の方が、この音楽ファイル試聴をきっかけに能力レベルが上昇したと証言されておりますの。

実際にお姉様の立ち会いのもと、実証されましたわ」

珍しく力説する白井さん。

「昨夜」に「お姉様の立ち会いのもと」実証されたということは、御坂さんとその使用者が昨日の夜にバトルしたんだろうな。

変電所のどうこうで停電ってのはそのせいかもしれない。

「実証……と言われてもね。

研究者としては、伝聞の話を鵜のみにするわけにはいかないんだが……」

「これは昨日分かったことですが、意識不明に陥った方は彼だけではありません。

そして昨夜並行して行われた強制執行の結果、白熱光線事件の犯人グループを含めて、今までに昏睡されている方の大部分が、この音楽ファイルを携帯されていたことが判明いたしましたの」

ここで白井さんから予想外の証言が出た。

まさか搬送された患者たちのポケットをあさったのか？

相手が犯罪者だからできたようなものの、ずいぶん強引なことをする。今ごろメガネのお姉さんは始末書でも書いてるんじゃないだろうか。

「……とにかく君たちは、この音楽ファイルがなんであれ、昏睡した学生たちに関係しているのではないかと、そう考えているわけだ」

木山先生の言葉に、状況証拠的には、とうなずくふたり。

忘れられそうな気がしたので、おれも一緒にうなずいておく。

初ちゃんの証言は結構重要だと思うし、言い忘れないように気を付けないと。

「はい。
能力を向上させるということは、脳に干渉するシステムである可能性が高いと思われますの。ですから『幻想御手』の候補であるこの曲について、専門家である先生にぜひその真偽やメカニズムを調べていただきたいんですの」

白井さんが正式回答の最後にちらりとおれを見る。
だんだんこの子、視線でおれを動かすのがうまくなってきたな。
まあ、さすがにここで否とは言えない。

「おれも“木山先生と連絡さえ取れれば”異存ありません。
いちおう初ちゃ……介旅も『幻想御手』を使って倒れた可能性が強いです。いつ目覚めるかは分かりませんし、そのときに『風紀委員』を通して問い合わせるより、学者先生に一報入れたいですから」

今度はおれが木山先生をチラ見。

「そんな条件でよければ、むしろこちらから協力をお願いしたいね。大脳生理学者として興味がある」

おお、意外に好感触。
勝手に携帯番号やメアドを変更したのも、深い意味はなかったんだろうか。だがこの人、無駄はしない主義だしなあ。

……などと考えている場合ではなかった。初ちゃんの推理を伝え

んと。

「ありがとうございます先生。
それで、介旅が昏睡に陥る寸前に、レベルアップした自分の能力を使って『幻想御手』のシステムを推測していたんですが」

「そのお話、詳しく聞かせていただきたいですの」

白井さんが食いつく。本当に『風紀委員』が天職なんだな。
逆に木山先生はあまり動かない。むしろ別のことに気を取られて……

うん。これは自分の口からは言いたくない。

「私もそう言いたいところだが、それよりさっきから気になっていることがあってね。
……あの子たちは知り合いかね？」

全面ガラスのすぐ向こう側に両手と顔をべったり貼りつけた佐天さんと、その脇で申し訳なさそうに頭を下げる初春さんが立っていた。

初春さんは、白井さんと佐天さんに挟まれて座った。
佐天さんは、木山先生とおれに挟まれて座った。
つまりおれは、さらに席の窓側つまり奥へとおしこめられたわけだ。

白井さんはどうあってもおれを逃がさないつもりらしい。
そんなことしなくても逃げないのに。

「へえー、脳学者さんなんですかー……白井さんの脳に何か問題が！？」

「いや、その結論はおかしい」

仕切りなおした瞬間の開幕ぶっぱ。初春さんマジパネェッス。
おれもさすがにつっこまざるを得なかった。

……ちょっとハイテンション気味だな。女性五人に包囲されて気分が浮ついてるのか、それとも初ちゃん昏睡のショックが抜けてないのか。
あるいはオカルトさんの出生の秘密が原因だったりして。

――話を聞け

オカルトさんごめんなさい。

「……『幻想御手』の件で相談してましたの」

白井さんもさすがに訂正する。

「ああ、それなら」
「黒子が言うには、『幻想御手』の所有者を保護するんだって」

何か言いかけた佐天さんを、御坂さんが遮った。
御坂さんグッジョブ。今なぜか無性にそう言いたい。

「え、どうしてですか？」

「生命の危険もあるからだ」

初春さんに間髪入れず答えたのは、おれだ。
やはりどういう形であれ、初ちゃんの昏睡はおれにとってダメージがあったらしい。
茶番劇をちょっとばかりねじまげたい意図もあったが。ＡＩＭ拡散力場のせいにしておけば、とりあえず説明つくことだしな。

こうしてみると、ＲＳＰＫ症候群という嘘設定もなかなかよくできている。

「……」

「あれ？」

周囲から“いきなり何言ってんだこいつは”と言われているような気がして顔を若干上に向けると、そんな表情が五つきれいに並んでいた。

咳払い。

「いや、そう推測してたやつがいるってことですよ」

「それはどなたで――」

言ってから気づいた顔の白井さんだが、気づいてない人のために言っておこう。

「介旅初矢。

おれの親友で、『幻想御手』を使ったせいで昨日の昼ごろに意識

を失った。
いまのところ、目覚める気配はまったくない」

「介旅さん……って、あの銀行強盗事件の被害者の方ですか？」

いちおう記憶には残っていたのか、初春さんが返してくれる。
御坂さんはもう知っていたからか、ちょっと苦い顔。
そして一番意外だったのが、こっちを覗きこんでいた佐天さんがなぜかとてもショックな顔をしていることだ。

確かに、彼女は自己紹介でレベル０と言い切るような子だし、『幻想御手』に何か期待していてもおかしくはない。
だが、顔に出るほど衝撃を受ける必要はないんじゃないか？

「……まあ、間違ってはおりませんわね。
昏睡に陥った方は、ろくに食事もとれないのですから」

一発目に脅しをかけたおれを咎めるように、白井さんが補足してくれる。
勘違いしているが。

「いや、そういう意味じゃない。
さっき白井さんがいった“脳に干渉する”って部分が、ちょっとヤバい」

おれの再訂正。
御坂さんと白井さんが反応する。

「どういうこと？」
「それは介旅さんのご意見ですの？」

そして初春さんは、佐天さんに視線を向けていた。

今は彼女に話を振ってくれるなよ。能力者なんて、学園都市の五割弱を占めるレベル０の学生にとっては天上から降りそそぐ蔑みの視線でしかないだろうし。
なんで能力者のおれがそんなことを言えるかって？
キビツ時代の経験だよ、言わせんな。

さて、白井さんに答えなければ。

「白井さんは知ってると思うけど、介旅……おれは初ちゃんと呼んでたんだが、初ちゃんの能力は『量子変速（シンクロトロン）』。重力子を操る能力だ。彼は『幻想御手』を使ってレベルアップしたせいで、その能力を応用して自分の電気的思考メカニズムを理解できるようになった。重力子を操るってことは、重力子より大きなあらゆる素粒子の影響力を排除できるってことだからな」

電子を操る御坂さんがむっとするが、今は無視。

「で、こっからはおれにも未知の領域なんだが、彼は『幻想御手』の効果がどこから来てるのか、突きとめたらしい」

「それは？」

珍しく、隣の木山先生が口を挟んできた。

これはあくまで初ちゃんの意見であって、そもそも彼のレベルアップどころか能力すら確認できない木山先生にとっては、ただの与太話のはずだ。

反応する意味に注目したいが、言うべきことは言う。

「他人ですよ。

初ちゃんいわく、『幻想御手』を使った人間はＡＩＭ拡散力場の

相互干渉か何かを使って、他人と神経伝達パターンの一部にも干渉しているそうで。脳の部分並列化で演算能力を一気に高めれば、そりゃレベルのひとつやふたつ上がるでしょう。

その過程で誰かの思考回路を強制されて、結局は自分の意識をなくすことにつながる……らしいんですが」

この茶番劇の中で、最初に気づいたのはオカルトさんだった。

おれを見る木山先生の視線が、変わっていることに。

第八話の一　木山春生の茶番（後書き）

注…

『反復性偶発性念動力症候群』
略してＲＳＰＫ症候群。能力者が一時的に自律を保てなくなり、能力が暴走して不可解な物理現象をひきおこす疾患。
暴走時に起きる現象はさまざま。

第八話の二　Ｗｒｅｔｃｈｅｓ　ａｎｄ　Ｗｉｔｃｈｅｓ

その後、何かにあわてた佐天さんが左手をふりまわしたせいで机の上のアイスコーヒーがこぼれ、ストッキングにコーヒーがかかった木山先生が以下省略、という一幕があったのち、おれ・御坂さん・白井さんの三人が携帯の番号とメアドを教わって解散ということになった。

「……なんというか、ちょっと変わった感じの方ですの」

「白井さんよりもですか？」

「むっ」

白井さんと初春さんは、なかなかいいコンビのようだ。

ブラウスが一部スカートからはみ出たしまらないスタイルで、夕焼けの中を颯爽と去ってゆく木山先生と、それを見送る『風紀委員』たち＋αを遠く見ながら、おれは地上約十センチの空中に掴みとめた佐天さんの耳元で小さく声を撃ち出す。

「あんまり騒がないでくれよ。
あんたとは話すことがありそうだ。白井さんに知れたらまずい話題だとおれは考えてるんだが、そこんとこどう思う？」

佐天さんが、必死な目線をこちらにむけて頷いた。

きっかけは、最近おれの理性役を務めてくれているオカルトさんだ。

“霊力”がどうのと病院で騒ぎだしてから、ずっと木山先生に注目していたオカルトさんが、その向こうに座っていた佐天さんが何かをポケットにつっこむ音を確認していた。おれはそのころ、突如としてストッキングを脱ぎだした木山先生を怒鳴りつける白井さんの悲鳴しか耳に入っていなかったのだが。

……しかし、能力使って人気のない場所に女の子を引っぱりこむって、どうみても悪役のやることだよな。
被害者から小悪党に進化を遂げたおれ。

レベルが上がると犯罪に走りやすいって噂も、間違っちゃいないようだ。

＞i218811―2938＜

「さて」

まず誤解されないように、彼女を下ろしたおれは

「すまんっ」

頭を下げた。

「え？　え？」

何が起きたのか混乱している様子の佐天さん。

今のうちに情報を彼女の頭に叩き込んでおかなければならない。

「佐天さん、とりあえずおれの話を聞いてくれ。

話っつーか愚痴だし、正直うざいとも思うが、とりあえず聞いてほしい。

おれはきみが『幻想御手』を欲しがってるのかどうかも、持ってるのかどうかも、実はもう使っちまってるのかも知らない。だから、まずは話を聞いてくれ」

さらっと脅しが入った気もするが、とにかくそう力を込めて吐きだす。
上目づかいで見てみると、佐天さんが小さくうなづくのが分かった。

「ありがとう。で、本題だが……
君が『幻想御手』を使うなら、おれは止めない。そんな権利はない。でも、ひとつだけ言わせてくれ。

おれはもう使った。
で、今めっちゃビビってる」

「……へ？」

予想外の展開なのか、佐天さんがまた混乱しつつある。
だが、ここから先はかなりシリアスな話題なので、聞き逃してもらうわけにはいかない。オカルトさんが呆れている気配がするが、知らん。

「どういう、ことですか？」

「おれと初ちゃんは、同じ時期に『幻想御手』を聴いてるんだ。
そういう効果があることを知っていたかどうかは問題じゃない。

おれたちは実際問題としてあれを聴いちまったし、それで彼は能力が上がった。おれはあんまり上がった感じしないけど。

ああこれ、白井さんにばらさないでくれよ。お互い」

「……『幻想御手』が効かないこともある、って言いたいんですか？」

「そうじゃない。

効果があろうがあるまいが、一週間内には確実に意識を持っていかれる、って言いたいんだ」

「……」

目の前の顔が不満そうに黙る。

そりゃそうだろう。まだ昏睡と『幻想御手』の関連性は実証できていないのだ。おれが唯一の友達を失ったショックと加藤くんのトラウマで、むやみに泣き叫んでいるだけという可能性だってある。

音楽サイトの隠しページなんていう適度なレア度で手に入れれば、尚更だ。

だが、おれもここは後に引けない。

木山先生に話したいことがある今のおれには、それこそ尚更なのだ。

「今、初ちゃんは面会謝絶だ。だがああなると、周囲の疲労もかなりのものになる。
飯が食えないから長期間の点滴は必須になるし、それでも入浴やトイレは欠かせない。脳がやられてるからそもそも漏らす可能性だって高い。さらに寝たきりだと筋肉もやせて衰えるから、復帰にはリハビリが必ず必要だ。
それに“床ずれ”っていう病気もある。血行が悪くなったところが腐って……」

「なんなんですかっ！！」

……怒らせたか。

「いったい何の話なんですか！　『幻想御手』の話してると思ったら今度は寝たきり？　加藤さんは私が昏睡すること前提で話してるじゃないですか。レベル０はそんなに信用できないんで――」

「バカな！！」

思わずこっちも大声が出てしまった。

やっぱり彼女は無能力者（レベル0）であることにコンプレックスがあったみたいだ。そこを突っついたおれが言うのもおこがましいが、それが『幻想御手』流行の原因だと思うんだけどね。能力者が何ほざいても説得力ないけど。

さて、完全に路上の『風紀委員』コンビに気づかれたな。佐天さんがびくついてるうちに、手早く話を進めよう。

「おれは昏睡状態になった“経験談”を話してるだけ。他意はありませんよ、ええ」

「……経験談？」

佐天さんの眉が八の字に上がる。

どうもおれは、自分で言ってて訳が分からなくなってきているようだ。とにかく『幻想御手』を使ってはいけないと言いたいだけなのかもしれない。

人にわざわざ昏睡経験をゲロるとか、どれだけおれは恐怖心を抱いているんだ。会ってまだ数日の人をこれほど必死こいて止めようとする自分がいるとは思わなかった。

これは佐天さんもいい迷惑だな。

だが一応、終わりまでしゃべっておこう。

「詳しいことは初春さんに聞きゃわかるさ。

とにかく、経験すると再現がかなり怖くなるんだ、意識不明って

のは。怖いって気持ちを抱くべき自分自身が存在しないわけだから。しかも、目覚めたら病気をたっぷりかかえてる始末だ。

レベルが上がっても、廃人一直線じゃ意味ないだろ。

おれはそういう人間をこれ以上増やしたくないってだけだよ。しょせんその程度の恐怖心で動く臆病者なんでね。

じゃ、いろいろ悪かった」

おれはもう一度頭を下げると、裏通りに小走りで抜けた。

……結局何が言いたかったんだろうね、おれは。

彼女に『幻想御手』の正体を説くでもなく、プレーヤーを取りあげるでもなく。

そこまでして捜査に寄与したくはないってことか。事件を利用したいオカルトさん回路のせいだってことにしておこう。

そうでなくても、状況によってはひとり利用する気満々なんだし。

――憑霊、代われ

徒歩で木山先生を追っていると、オカルトさんに突然そんなことを言われた。

取りに戻るヒマがなかったので、病院にサイクルを置いたままだ。

『自転車（サイクラー）乗り』としては恥ずべき行為だが、それはともかく。

冗談きつい。

今おれがいるのは、モノレール駅の近くだ。これまでは木山先生が徒歩だったからまだ尾行できていたが、この辺の駐車場からあの青いスーパーカー（見たかぎりではカクカクしたシルエットからしてランボルギーニ製）で出発されれば、もう“発信器”にバレない形での双方向通信は不可能だ。

今のところ、教え子のおれが『幻想御手』についていろいろと情報提供しているから見逃してもらえているだろうものの、今の木山先生の所業は彼女自身が昔おれに言っていた“学園都市の暗部”にとって、腹立たしい以上のものだろう。彼女が今夜死なない保証はない。

そう。
オカルトさんとおれの中で、『幻想御手』事件の犯人は決定していた。

彼女には動機がある。
数千人の能力者の脳を並列につなげば、かなりの演算回路ができあがるだろう。それこそ彼女が何度も申請しては却下され続けている、並列演算システムの足元ぐらいには及ぶ程度の回路が。

能力もある。
低レベル能力者たちの能力底上げに集団昏睡という、放っておけば被害が広まるばかりの“大事件候補”を初動で潰せると判断されただけの学識や判断力が。

そしてもちろん、そういう雑事に派遣される程度に学園都市から嫌われ、相応に恨みも持っている。
これについては説明しなくていいよね。

そしてそれが今まで大目に見られてきた理由は、学園都市上層部の目的、つまりレベル６を生みだす可能性があるから、とオカルトさんは言う。
だが、もしそうなら能力者レベルのバランスが崩壊した時点でレベル６を生みだす“実験”は失敗、木山先生はいらない子になる。

それがいつか、おれは知らないのだ。

……といったことを分かった上で言ってるんだろうか、オカルトさんは。

――当たり前だ、おれの言いだしたことだ

――だが今は、それより格段に重要なことだ

――下手をすればこの都市そのものの存続にかかわる

だから、そんなものをこの無駄によくできた学園都市が見逃すわけないでしょうが。

親船って理事長はどんだけ腹黒いんだろうね。

――その理解にも一言あるが、まあいい

――神経系を明け渡す気がないのなら、せめてその歩道橋の脚まわりを探れ

オカルトさんも、だんだん科学に染まった言い方になってきました。

このまま放っておくと実力、というか“霊力”というやつで強制的に神経系を奪われる可能性があるため、彼の言うとおりにする。

おれがまだこの体に入っていられるのは、単純に学園都市になじみやすいと判断されたからにすぎないのだろう。この点について、オカルトさんは沈黙しているが。

といっても、橋脚は折り返し型の階段踊り場を支えているもので、歩道から外れて近寄ると変な人にみえる。

周りの視線を気にしつつ、ざっと橋脚を一周してみるだけで済ますか。

「……？」

そのはずだったんだがなぁ……

オカルトさんは、意識が出てくる前はその知識体系が自動的に現象を説明づけて、おれを誘導しようとしていた。今でもその傾向はある。

んで。

そのオカルトさん知識体系が、警報をガンガン鳴らしているんだが。

「……星形？」

そこにあったのは、トランプサイズのカード。
中央に黄色い輪で囲まれた赤丸、さらにその中に白抜きの五芒星が描かれている。星形の真ん中には、リボンのようなマークが黒く刻んであった。
四隅からは赤丸に向かって赤線が伸び、十字型のようにそれぞれが横線と交わっている。

――西洋の魔術を知らぬきさまに教えてやるが

――それは耶蘇（ヤソ）、いやここでは十字教の魔除けでもある

――『ソロモンの星』と言えば、きさまにも分かるか？

ソロモンの星。
伝説のユダヤ王ソロモンが使った魔除け。

この科学万歳の街に、なんでそんな迷信みたいなものが？

――うつけめ、決まっておろうが

――それを迷信と考えていない輩が、ここにいたということだ

――だから、体を代われ

それはもう要求でも命令でもなく、宣告だった。

あれ？
この前はオカルトさんが加藤くんボディの支配権をとった時おれは気絶したのに、今はまだ見えている。
まるでオカルトさんの夢の中のようだ。

「今はおまえにも見てもらうべきものがあるからな」

そういって、オカルトさんは素早く行動を開始した。

二本の“伸びる手”で周囲の空気を撫でまわす。“発信器”を壊したんだろう。
今度は六本すべてを出し、カードのまんなかのリボンマークと星型の五つの頂点を同時に刺し貫く。
それをさらに、六本の“手”で勢いをつけて車道へ放り投げた。
この時、両足の膝下はひそかにタップダンスを踊っている。

――いったい何やってんですか？

「反撃に決まっているだろう」

おれがとっさに発した質問に、オカルトさんが楽しそうに答える。

「陣を描くだけなら、誰にでもできる。呪術とはそういうものだ。
そして描いた陣に霊力を注ぎ込めば、誰でも呪をかけうる」

ぼそぼそと独り言を言いながら、オカルトさんが乗っ取った加藤くんのタップダンスは加速してゆく。
両足で交互に足踏みし、毎秒にかかとを揃える。その繰り返し。
おれこんな運動神経あったんだ。

「なにも自分で霊力を作る必要はない。龍脈から霊力を取って食えばよい。
そして自分で霊力を食う必要はない。陣に口を開ければよい。
むろん自分で口を開ける必要はない。呪術的意図のない現象でも、霊は導かれるものだからな。『偶像の理論』というやつだ」

タップダンスが止まらないオカルトさん。見られてるよ周りから。

「極端に言えば、歌や踊りだけで呪術を打つことも防ぐこともできる。
たとえば支那の風水という概念では、呪術を知らず霊力もないものが、ただ置物道具を並べるだけで呪術を発動させうる。陣と呪符と霊力吸収のきっかけさえあればな。
この足踏みも、そうした霊を呼び寄せる現象だ。見ろ」

そう呟いた彼の――加藤くんの足が止まる。
次の瞬間。

人が消えた。
ざわついていた夕方の繁華街が、一瞬で無人の廃墟となっている。

――は？

言葉がないおれ。
そして空っぽになった街、その前方遠くの歩道には、ひとりの女がこちらに背を向けて立っていた。
一言で表せば“変な恰好の女”といえる。

「奇門遁甲（きもんとんこう）の基礎、八門陣だ。
もとは罠だが、人払いにも使える。覚えておけ憑霊」

何をどうやって覚えるのかすら分からないまま、その女が振り向いた。
すごい形相だ。

「うまくもぐりこんだな、黒宗（くろしゅう）」

声が届かないだろう遠くに相手がいるのに、なぜかその顔が見える。
不思議な話だ。
そんなことを思っていると、今度はオカルトさんが女に猫なで声で話しかけた。

だから声届かないでしょうに。

相手の女はこっちを見ているだけだ。
つーか黒宗ってなんだ、宗派名？

「反応すらせんか。一派まるごと名を変えるというのは事実らしい。
何と呼べばいい？　カクレか、ハラジョウか、マルヤグミか？
あるいは――」

加藤くんの顔をしたオカルトさんが、ニヤッと唇をゆがめる。

「アマクサシキ、かな？」

半秒後。
“手”が前方に殺到し、同時に女が消えた。
さらに視界が激流に飲み込まれたような移動を開始する。

左からガキン、と金属音。
アスファルトを金棒で突いたような音……実際そうなのか。

――ほお、かなりの使い手だ

――これは仕掛ける相手を誤ったかな

おいしかも何さらっとモノローグで大事なこと抜かしてやがるオカルト野郎。
おれと加藤くんもおなじ脳に保存されてるって忘れてるだろ。

――黙れ、きさまこそ忘れていないか

――“こういう類のもの”を認識できる輩が、この都市に潜んでいるのだぞ

言われて気づく。
この女、これほど非科学的なものに慣れていながら“発信器”をかいくぐって来ていることになる。
もしかして、堂々と許されて入っている？
なぜだ？

考える暇もなく、オカルトさんが“手”を伸ばす。
あちこちで聞こえたパチパチという音の源に目をやると、日光が反射して細いワイヤーを浮き上がらせていた。

ワイヤーアクション？
くそ、相手は格ゲーのキャラかなんかか。

「ハッハ！　さすが黒宗、すでに鋼糸を張るか！
我は加藤保憲（かとうやすのり）、帝都を呪う者なり。女、名を名乗れ！」

“手”を伸ばして前方に笑いかけるオカルトさんを見ずに、彼女は逆に問う。

「……それは魔法名と考えてよろしいのですか」

「フン、西洋の術師らしい物言いだな。
こちらが氏名とありようを続けて名乗ったのだ、返してみせろ」

魔法名？　なんだそりゃ？
声に出すこともできないおれの疑問をよそに、女は続けた。

「これは失礼しました……神裂火織（かんざきかおり）、と申します。
魔法名、『救われぬものに救いの手を（Ｓａｌｖａｒｅ００）』」

そして。
その答えとほぼ同時に、オカルトさんが爆発した。

「ハ、ハ、ハッハッハッハッハッハッハッハッハッハ！
救われぬものに救いだと？　これはいい！　ハ、ハ、ハッ！」

……いきなりつっこみどころがそこだ。
おれは困惑したが、女は違う反応らしい。
多少手に力がこもっている。

「知らぬか？　そうだろう、きさまらヤソは自分たち以外のだれをも同じ人として扱わぬからな！

ならば教えてやろう、黒宗女。
救われぬものに救いの手を差し伸べろ“などという程度のこと”はな、ヤマトで何百回となく言い古されてきた『常識』なのだ！

縄張河童が！　御籠坊主が！

筆持旅笠が！　蘆屋法師が！
親切馬鹿が！　半端煩悩が！
神楽神社が！　御筆先女が！
抜け出せなくなった地獄に、おまえも足を踏み込んだというわけだ！

ハ、ハ、ハ、ハ、ハ！！

仮にもヤマトの土を踏んで、これら救いがたきを救わんと狂言のごとく舞った愚かな者どもを、よもや知らぬとは言わせんぞ。ヤソの一派というから何か思案に違いでもあるかと思ったが、結局はおまえも衆愚の一ということか！

“まず足元を見るがいい”！！」

女がこっちを睨んだ。オカルトさんはもうアクセル全開だ。

「今なんつったこのド外道」

「フン、口は動くが訳もわからんという面だな。
足元を見ろと言ったのだ！　本来ならば救われるべきだった誰かでも、救われるべきでないと断じられた誰かでもない。助けを求めるどころか自らの存在さえ否定された民が、この坂東には数えきれ

ぬほど眠っているのだからな。

それすら分からんおまえや十字教の術師なぞ、己に酔って踊るほど客に笑いをもらう、ばかげた傀儡（にんぎょう）にすぎぬわ！！」

第八話の二　Ｗｒｅｔｃｈｅｓ　ａｎｄ　Ｗｉｔｃｈｅｓ（後書き）

ひとの魔法名にケチをつけることがどれだけ失礼か、オカルトさんにはわかっていません。本名を隠すためのコードネームだろうぐらいに思っています。

そのコードネームが彼にとって噴飯ものだったため、物知らずが何様のつもりだと言ってやった、その程度の認識です。

……彼女は「聖人様」なんですけどね。

注…

『Ｗｒｅｔｃｈｅｓ　ａｎｄ　Ｗｉｔｃｈｅｓ』

「ろくでなしどもと魔法使いたち」。

『耶蘇』

キリスト教（十字教）の日本語訳“耶蘇教”の略称。教祖イエス・キリストの「イエス」を音訳したもの。

「耶蘇」「ヤソ」という表現には、不快感・侮蔑のニュアンスがある。

『支那』

中国本土（歴史的に漢民族の多く住んでいた地域）を限定してあらわす伝統的な言葉。これに対し「中国」は、中国本土を中心とした多民族国家をあらわす。

政治的な事情で、戦後日本では右翼以外ほとんど誰も使わなくなった。“オカルトさん”は基本的な単語力が戦前に作られたので、「支那」と呼ぶことに遠慮がない。

『黒宗』

現在の鹿児島県に本拠を置いていた隠れキリシタン集団。または、その後継のカルト教団。強大な祟り神をあがめる、儀式で人の肝臓を食べる、などの俗説が多い。

天草式とは何の関連もないが、“オカルトさん”は「十字教系の東洋魔術師」という意味あいでこの単語を使った。

第八話の三　教会魔術師

前方に空気の揺れ。

気が付いたら、目の前に女がいた。

オカルトさんが、道路から鼻先をかする勢いで“遮光板”を立ち上げる。

「……今のことば、取り消していただきます」

「やってみせるがいい。おまえがどれだけ言を弄そうが、おれたちの足元に何千、何万という骸（むくろ）が怨みを呑んで埋まっているのは事実なのだ。

今の反応からすれば、それをおまえが知らなかったのも事実。

術師ならば理解しているかと思ったが、期待外れだな」

「……こんなところで留まっているうちにも、インデックスは……！」

オカルトさん絶好調。かつ微妙に後じさり。

意識だけに閉じ込められてから妙に頭の回転が速くなったので、今オカルトさんが死亡フラグ建築に使ったセリフを考え直してみることにする。

まずは名乗り。

おれが加藤くんに憑依してから一番気になっている“名前”の部分だ。

そもそも口で言わないと集中できないらしい呪術分野で、声に出す言葉というのはかなり重要な地位を占めている。これはオカルトさんの受け売りではなく、民俗学的に考えての話だ。

その名乗りがひどい。

“我は加藤保憲、帝都を呪う者なり”

これが正しいとすれば、オカルトさんは東京に何かよくないことを起こすつもりでいることになる。こういう時に嘘を言う性格ではないし、連日にわたって俺に見せているあの夢からしても彼は自分語りが好きらしいから、ここは本当だろう。

とんでもない爆弾抱え込んでるんだな、おれ。

次に、神裂とかいう“黒宗女”を挑発するときに使ったセリフ。

ここに関しては日本史を選択していればわかることだが、文転組の自分のためにも頭の中で整理。

行基（ぎょうき）は、西日本の貧しい集落のために陣頭指揮をとって堤防や橋を作ったお坊さんだ。

最澄（さいちょう）と空海（くうかい）は平安仏教の二大教祖。学問だった仏教を民衆信仰レベルに広めることに貢献した。

道満（どうまん）は、おそらく夢に出てきた彼、民間出身で安倍晴明に殺された法師陰陽師の蘆屋道満（あしやどうまん）さん。

法然（ほうねん）と親鸞（しんらん）は、念仏さえ唱えれば誰でも極楽に行けるのだと説いて戒律を否定した、鎌倉仏教の教祖。

中山（なかやま）みきと出口（でぐち）なおはいずれも、貧困層に支持された新興宗教の教祖。

鎌倉から幕末まで時間が飛ぶのが気になるが、いちおう全員が“救われぬものに救いを”与えようとした人々ではある。

だが、さらにその次が問題だ。

“現世に助けを求めることもできず、それどころか自らの存在さえ否定された民”とは、いったい誰を指しているのか。

この言い方でつじつまが合う議論を、おれはひとつ知っている。だがそれは、むしろ超古代文明や○○起源説といった、どちらかといえば胡散臭い部類に属している説であり、おれとしてはあまり支持したくないのだが……

――きさまの思い浮かべた、それで正しいのだ

ですよねー。

どうもオカルトさんはトンデモ学説の申し子みたいなところがあって困る。

そういえば。

どうもこの女、インデックスなるものを探しているようだ。

なんの目次（インデックス）が目当てなのやら。

＞i218811—2938＜

“遮光板”がまた開いた。
あの神裂が打ち出した光の槍を相殺して散る。

……なんだありゃ。

――それならそれで、安易に死亡フラグを撒き散らさないで下さいよ

――あんたほどのオカルティストが、あの長刀を知らないとは言いませんよね

――当然だ、珍しいものを持っている

――あれは恐らく、何らかの加護をもった人間だな

“遮光板”で四方から襲ってくるなんだかよくわからない力場を跳ね返しつつ、おれが文句ついでにぽろっと話題に出したことまで、いともたやすく返してくる。

ついでに視界を流れる廃墟と光線。そして左腕に摩擦熱。

長い鞘を振りぬいた神裂が刀を返してくるのを、前方に飛び込んで回避。

あぶねえ。

ふざくんな。加護とかある人間にケンカ売ってんじゃねえよ。

つーか逃げたい。真剣に逃げたい。相手が悪すぎる。

視界が揺れる。というよりブレる。

オカルトさんが常にこの“陣”の中を走り回って、防御に適切な位置を占めようと必死になっているからだ。

で。

おれが伝えた“長刀”とは、神裂が腰に巻いたウエスタンベルトの余りを帯取に使って佩いている、おれに足すこと三〇センチはある彼女の上背よりさらに長そうな曲刀のことだ。刃を下向きにして腰からぶら下げているから、たぶん軍刀とかと同じ“太刀”の分類に入るんだろう。

しかしウエスタンベルトといい、とにかく変な恰好の女だ。

長い髪のまとめ方については、おれもセンスがないから何も言わない。

だがTシャツの裾をほとんど肩から胸だけ包む形に結び、左側だけ根元からぶち切ったジーンズの下に片足ずつブーツと靴。その上太刀を佩用。

認識阻害でもかけるつもりなんだろうか。

“手”で太刀を拘束したオカルトさんが、右手の人差し指と中指

以外を握りこんで女に迫撃する。
刀印と呼ばれる密教のしるしだ。
しかし神裂は固定された刀を支点に体を軽く引きつけ、手刀は空振った。

……さて。
時代劇でよく見る日本刀は、これとは逆に刃を上にして鞘にいれ、腰の帯に直接差しているものが多い。わざわざ太刀、しかも二メートル近いものを腰に佩いているということは、オカルトさん知識によれば……

――はるか古代、神降ろしの類（たぐい）に使われたものであろう

――あれが長柄となり、武蔵坊弁慶の使う薙刀（なぎなた）となった

……だそうだ。

だからそんなもの持ってる相手にケンカを吹っ掛けるなと。魔術師だろうが何だろうが、加藤くんの命が危険にさらされているのは間違いない。
おれならすぐに正座して頭下げているレベルだ。
もちろん頭頂部から前面にかけて“遮光板”を立ててから。

――ハ、ハ、きさまも少しは頭が回ってきたようだな

オカルトさんのコメント。

ちなみに、そう言いながらオカルトさんはおれの鞄をあさり、ルーズリーフを抜き取って細かくちぎっては、何枚か重ねて折りたたんだり丸めたりして捨てている。“手”は相変わらず、あちこち撫でまわしてワイヤーを断ったり大忙し。

その間、加藤くんの周りでは、もうおれには追いきれない赤白青の光が乱舞していた。

“遮光板”越しでも見えるような光だ。

それとは別に鎌鼬（かまいたち）が飛来。

たぶんそういうものなのだろう、地割りがこちらに疾ってきた。轟、という音だけをどうにか耳で感知して、“手”が交代で弾き飛ばす。

地面に足を叩きつけて後退。ギシギシ言っている左足をクッションにして着地、腰から上を前に倒して左へ跳ぶ。

右から黒鞘が襲来。その後方に続いて回し蹴り。

ぶざまにすっ転がってかわし、即座に“遮光板”を立てて“手”が支柱になっていた神裂の右足を狙うが、空に逃げられた。

……これ無理だろ。

迫力とかそういう以前に攻撃の筋が見えない。

「これはいかんな」

オカルトさんが、今度は外部についてコメントした。

だから挑発するなと。

言った直後に、視界が光り

――ちょ

理由も分からず発したおれの念で、弾かれたようにオカルトさんが動いた。

六本の“手”をおれの前面に集中して重ね、さらに“遮光板”を打ち上げる。

衝撃が来た。

ドンッ！

……一瞬で、“手”と“遮光板”がかき消された。
いちおう七重の防御だったはずなんだが。

「いい加減にしていただけませんか。
私も暇ではないので」

二〇メートルほど前、道路の中央分離線に降り立った神裂が言う。
彼女の数メートルほど手前からおれの足元まで、何本もの爪痕が見えていた。

「なんだ、分かっていたのか。
おれが舐められているのかと心配になった」

オカルトさんがニヤつきながら答える。
今、オカルトさんは呪術を使っていない。それどころか、ほとんどそっち方面を避けるかのように加藤くんの能力ばかりで防戦一方だ。
それで“舐められている”もないだろう……

まさか、

「お互いここまでは小手調べ、とでも言うおつもりですか？
あなたが科学的能力者であることは一目でわかります。対して、
私はまだ魔術を使ってすらいない。
魔法名を名乗るべきではなかったのかもしれません」

……えー。
あんたまだ呪術に手をかけてもいないと。

――どうすんですかオカルトさん、向こう切り札にすらなってないって

――なればこそ

再び“手”が再生し、おれの周りをひとめぐりする。
キラキラと光が散った。またワイヤーか。

「フ、フ、おれが見た時よりは進歩しているようだな黒宗。
科学の力もそれひとつで用いるか、さすがだ」

「……っ！」

へ？　どういうことだ？

科学の力……あのワイヤー？
ひょっとして今の攻撃、呪術とかそういうのじゃなくて、あのワイヤーでおれを切ろうとしていたのか？
ひでえ。いろんな意味でひでえ。サギだ。

――気づくのが遅いな、憑霊

――この八門陣も、本来は地形を利用するための知識理論を応用したもの

――相手も同じく実証的技術を利用することは考慮すべきだ

へえ、そうですか。
それでこれから、どうやってあの人から逃げ切るおつもりで？
陣とか作って逃げ道を自分で断ってるわけですが。

……いや、神裂の顔が凍りついてる。
図星さされたのがそんなに意外だったのか？

「……それを知ったところで、どうしようというのです？
あなたはこの七閃を破っていない」

「破る必要などない。おれがおまえを一時でも封じ込めば、それで用は済む」

「可能だとお思いですか？」

「ああ」

――きさまの更紙を生かすのだ

オカルトさんがおれと神裂の両方に喋りかける。

あんたよく混乱しないな、つーか更紙……ルーズリーフ？

――なかなか正確な罫線だったので、利用させてもらった

――あんなものでも重ねればドーマンセーマンが浮きあがる

ドーマンセーマン？

――まあ見ていろ

オカルトさんが、先ほどの防御態勢をとった。“遮光板”が立ち上がり、その内側に六本の“手”が巨大化して重ねられる。

同時に、足がまたへたくそな足踏みを始めた。

右、左、右、左、右、左、右……。

「反閇（へんばい）……！！」

神裂がそれを見て目を丸くする。心当たりあるのか？

加藤くんの右手が動く。

“手”から受けとった例の護符カードを指に挟んで刀印を結び、力をこめて頭上に押しいただいてから、カードを捨てて五本の指を目いっぱいに広げ、左から右へ切り払うように腕を振りはらった。

走りだし鯉口を切る神裂、同時に見えているだけで四方向から光がちらつく。

“遮光板”が出現し、瞬時に切断され消滅。

――逃げてー！

――莫迦め

頭の中でそんな叫びあいを演じつつ続いて親指を折りこみ、四本になった指を上から下に振り下ろす。

ブゥン

と音がして、その指が通った道筋が九本の線になって赤く光った。その上に、あのカードに印刷されていたのと同じ五芒星が浮かび上がる。

脇腹に冷たい痛み。
“遮光板”を切り刻んだワイヤーが焼かれて失せた。

「早九字……二重封印!?」

「ハ、ハ、ハ！　ドーマンセーマン、使わせてもらったぞ！」

オカルトさんが久々に笑った、一秒ほど後。

何かに動きを封じられた神裂の周囲八方向で土が吹き上がり、彼女の姿が消えた。

独りになった廃墟で、オカルトさんが立ち尽くす。
まさかあの女を待つわけじゃないだろうな。

――で、これからどうするんです？

「あやつはシナイの山神から加護を受けておる。九星の内陣も破られるかもしれん。もちろん今おれがいる八門外陣は、破られることを前提に張った。
だからその前に、おれがこの外陣から逃げる。二重封印は術者が内にいるべきでない」

ずいぶん率直なご意見だことで。
要するに結界の中でもう一度結界を張ることで、相手を手間取らせようという時間稼ぎなわけですね。
だがこの結界みたいなものは、どこから出るんだろう。

「舐めるな、自分で張った陣の生門（でぐち）など把握しておる」

そう呟きつつ、オカルトさんはさっき土煙のあがった場所を避けるように、道路の向こう側に作られた歩道橋の足元へと向かった。
煙の元にはさっき丸めて捨てたルーズリーフが置かれ、その下の土が焼け焦げている。
……これは護符のようなものか？

――もともと霊力を呼ぶ代物だったので、使ってやった

――呪術を自由に使えぬ体では、これが手っ取り早い

自慢げに脳内でモノローグがかかり、おれの耳に街の喧騒が戻った。

基底現実の世界は、すっかり日が暮れていた。どうやらあの八門陣の中から見える空は、なんだか知らないが術が完成したときのものを写し取っただけらしい。

しかしどっちにしても、服の裾がボロボロのおれは悪目立ちしている。病院の駐輪場に置きっぱなしのサイクルを取りに戻る気力もなく、歩いてます。

あ、携帯が真っ二つになってやがる。あのクソアマ。

――いい加減に呪術を認めてはどうだ

――それにしても、日暮れの直後におれは九星陣を張ったわけか。幸運なやつめ

オカルトさんがおれに伝達神経系を譲ってくれたので、またおれが表に出ている。

こういうこと何回もやっててなんだけど、本物の加藤くんマジごめん。脇腹がチクチクするのも、たぶんオカルトさんの呪術のせいだわ。

どんな副作用か知らんけど。

「占いなんて信じられるわけないでしょうが。
つーか、何なんですかその日暮れで幸運って」

おれも呪術が存在しない世界の意識系であり、かつ学園都市なんていうところに住んでいるわけで、あまりオカルトを信用したくない。
もっとも、おれの記憶体系には超能力もなかったわけだし、心のどこかではすでに可能性を認めている部分もあるのだが。

――九星陣は道教における冥王、北大帝（ほくたいてい）の力を借りている

――北大帝は死者を支配する。正確には死霊を支配する

――九星陣は北大帝信仰の術であり、生者と死者が交錯する時に霊魂を呼びこむ

――この交錯する時は日昇日没時にあたる

最後だけは理解できた。
いわゆる“逢魔が刻（おうまがとき）”の概念ですね。

昼と夜の境目は、同時にこの世とあの世の境目でもあるってわけだ。凶事が起こりやすい時間帯ということで、大禍時（おおまがとき）とも呼ばれるらしい。

この昼夜のスキマから現れる妖怪、なんて伝説もありました。たしか、完全に隙のない西洋の時計――時間概念を突きだされて負けたんだっけ。

最初に言っていた“九星陣”というのは、おそらく縦横に三列の土饅頭で結界を張ることから来た名前だろう。オカルトさんの知識にある八門陣と同じ性格なら、中央のひとつを除いた八つの盛り土のうち、この世に生きて帰れる出口はふたつ。

あとの六方には、死の罠が待っている。

で、なんでその北大帝の陣が幸運と関係するんですか？

――わからぬか、九星陣も日昇日没時に冥界へ呼びこまれるのだ

――だから九星陣に陥ると、日の出・日の入りの時刻までに脱出できなければ

――そのまま陣は冥界に移動し、中にいるものは廃人となる

おい。
そんな厨二病ものを作り上げやがったのかお前は。
そもそも冥界ってなんだ。んなもん実在するわけないだろ。

――術により接続される電磁場だ、もちろん陣と同時に経路は消えうせる

――日没日昇とともに、体を離れてそこへ通された霊

――すなわち固有の神経伝達波形も消えるわけだ

なかなかゴマカシがうまくなってきたなオカルトさん。
だがまだある。呪術を自由に使えぬ体とか言ってなかったのか？
そもそも能力と呪術云々って併用できるわけ？

――併用はできまい、超能力とは別方向から超常を求めたのが呪術だ

――だが術が自ら成るまでの準備はできる

――宗教心がなければ難しいが、そんなものは誰にでもある

――このおれに不足していると思うか？

なるほど。
学園都市はともかく“外”には、まだまだ宗教観豊かな人も多い。そしてあんたほどその道に傾いた個性は、この科学の街にあと何人いるかって感じですからね。

――おれの見立てでは、今は六、七人ほどいるな

――とにかく、それであの女を葬りたかったのだが

――山神の加護は大きいらしい、おれはあの陣を日没直後に張っていたようだ

マジレスどうも。
つまり彼女に残された時間的猶予は、明日の夜明けまでの十時間弱。彼女の実力をみるかぎり脱出できる可能性は限りなく大きい、イコールまた加藤くんを襲ってくる可能性もでかい、というわけですね。

やめてそういうの。
やっと下宿近くの学生寮地区まで帰ってきたのに、また不安になるから。

と思ったところで、遠くで爆発音が聞こえた。
あわてて顔を上げると、数ブロック先の一角で炎が上がっている。
「……おいおい、白熱光線グループは捕まったんだろ」
さらに連続して爆破された学生寮の方向をながめ、呆然としているおれの耳元で、またもやオカルトさんが嗤いだした。
……いったい今日はどうなってるんだ。
――ハ、ハ、ハッ！　なんという皮肉ではないか！
――Ｈｕｎｃ　ｍｅｒｉｔｏ　ｐｏｔｅｒｉｔ　ｄｉｃｅｒｅ　Ｒｏｍａ　ｐａｔｒｅｍ．．．ローマの父とはよく言った！
――あのような暴君を使うとは、よほど余裕がないとみえるな
――なあ、“教会魔術師”どもよ？

その後、おれが一直線に下宿へ帰ろうとして、その考えを見抜いたオカルトさんにいともたやすく加藤くんを乗っ取られたのは、はなはだ余談である。

……冗談じゃないんだけどな。

第八話の三　教会魔術師（後書き）

注…

『シナイの山神』
十字教の唯一神ＹＨＶＨの蔑称。
預言者モーセには「シナイ山の神」と名乗っておきながら、ユダヤ教からキリスト教へ発展し教勢が拡大するにつれて「唯一神」「絶対神」を自称しはじめた十字教の神を、“オカルトさん”はあえて最初の名乗りで呼んだ。

『反閇』
独特の歩調をとることで魔を祓い、その場を浄めて結界を張る呪術。
本来は渦巻き状に歩き回るなどして結界をつくるが、“オカルトさん”は呪術を使えない加藤くんの体を考えてその場での足踏みにとどめ、その不完全な呪術を“護符カード”――刻印（ルーン）から魔力を汲みだす呼び水にした。

『ローマの父』
ローマ教皇インノケンティウス八世の通称（蔑称）。
魔女狩りや異端審問などローマ教会の教義統一を図るとともに、ハデな女性関係や親族優遇などで有名。聖職者でありながら十六人の子供を残し、のちに息子たちがローマで特権を得たため「彼こそローマの父」と皮肉られた。

第八話外伝　『禁書目録』（前書き）

本編介入。

第八話外伝　『禁書目録』

チン、と音がした。

くぐもった機械音とともに、高層マンションの廊下へ光がさす。

昇降機（エレベーター）から漏れる電灯は、スプリンクラーが作動し人口の雨にぬれる廊下に、ぼんやりと明るい半円を形作った。

「っ！」

それを確認して喉を鳴らすのは、赤毛長髪の青年。

二メートルを超えるだろう身長のほとんどを黒いコートで覆った、何とも奇怪な恰好の煙草をくわえた若者だ。

対してエレベーターを降りた男も、また若い。

寝癖なのか髪型なのかイガ栗のように尖った髪とは対照的に、ワイシャツにスラックスという学生として標準的な服装の少年。

かれは廊下に出て、ゆっくり黒コートに向き直る。

歩き出す上ってきた少年。

両者の距離は縮まる。

「『魔女狩りの王（イノケンティウス）』はどうしたんだ」

いささか焦りを見せる黒コート。

これに対し、少年は余裕綽々といった表情だ。

「ったく、参ったぜ。あんたすげーよ。

正直ナイフかなんかで刻印（ルーン）でも刻まれてたら、勝ち目ゼロだったよ」

過去形。

彼の言明はつまるところ、勝機は我にありとの宣告に等しい。

これといった対抗手段を持たないはずの少年から発せられる不敵な宣言は、黒コートの青年にとって屈辱的とすら言える再戦の布告だった。

「まさか！　『魔女狩りの王』は三〇〇〇度の炎の塊！

こんな散水程度で鎮火するものか！」

「バーカ、炎じゃねえよ。
てめえは人ん家に、何ベタベタ貼っつけてやがった？」

「！！」

少年の宣言に、黒コートの男が口元をゆがめる。
彼の魔術（オカルト）は、古代ゲルマン人の使用したルーン文字を場に刻むことで発動する。刻むと言ってもこのような高層建築物の場合、文明の利器――セロファンテープなどで貼りつけるしかない。

ルーンの媒体はもちろん紙。
この散水は、ではその媒体を経由して、魔法陣の消滅を狙ったものなのか？

しかし。
少年の背後に、明るい炎が上がる。

すでに床にたまった水を一気に蒸発させて盛大な白霧を上げながら、それは少年の背後へと突進した。
水蒸気が黒コートの口元に押し寄せる。
意せずニヤリと笑うその口まで。

そして結局、その蒸気は現象に伴う影のような存在でしかない。

少年の背後で急速に広がる霧を呑みこんで、白光さえ放つ炎が渦巻いているのだから。

「ふっ、ははっ、はっはっは！　すごいよ！　だけど経験が足りないかなぁ。コピー用紙ってのはトイレットペーパーじゃないんだよ？　たかが水に濡れた程度で、完全に溶けてしまうほど弱くはないのさ。

――殺せ」

黒コートが勝利を確信したそのとき。

メキッ、と嫌な響きがあって、廊下の手すりが外側へ引き寄せられた。

――炎を発する式ならば

それがなんなのか、この場のだれも気づかないまま

「……焼けぬ手足を使うまでよ！！」

猿叫とともに突如として飛来した、黒い正方形とその背後を占める人影に。

『魔女狩りの王』は、圧潰された。

＞i21811―2938＜

ズボゥン、と呆気ないほどの音をたてて、三〇〇〇度の炎の塊だったものは破裂し、そして飛散する。

「なっ……」

「へ？」

それまで舞台を仕切っていたふたりは、このあからさまな侵入者にも注目を向けざるを得なかった。

最初に次のことばを発したのは、黒コートに相対していた少年。

上条当麻である。

「……おまえ、たしか河原の」

「ええ、その節はお世話になりました加藤です。

それで、そっちの英人だが」

当麻への挨拶もそこそこに、黒コートへ向き直るもうひとりの少年。

そう、少年だ。

しかも当麻より、数年若いはずの中学生だった。

「エイジン……ってのは、僕のことかい？」

多少落ち着きを取りもどした風を装って、黒コートが尋ねる。

それに答えた加藤を名乗る少年は、いきなり口の両端を釣り上げた。

「きさま以外に誰がいる、魔術師の端くれよ。

何の目的でこの霊と縁のない街へ寄ってきたかは知らんが、ゲルマン文字による護法陣はもはや破られた。あの大仰な炎の巨人どころか、鼠一匹すらもきさまの掌から出すことはかなわん」

いきなり舐めたことを口走られて、眉間にしわを寄せる黒コートの魔術師。

そして、加藤の態度に衝撃を受けたのは彼だけではない。

両者の中間に立つ上条当麻も、また彼に驚いている。以前河原まで話した時とは、まったく違う彼の言葉遣いと目つきに。

「……いきなりあらわれて何を言い出すかと思えば。

僕のルーンは、まだ死んでいないよ？」

「ほう、ならばなぜ」

魔術師の返答に加藤はそこで言葉を切り、醜い笑みを浮かべた。

「あの炎は復活しないのだ？」

彼の後ろに屹立しているのは、ようやく飛散したタールのようなその体を統合して起き上がった、黒い巨大な影。

そう、“黒い”巨大な影だ。
そこに炎はない。

「なんっ！？」

完全に予想外だったのか、黒コートがうめき声を上げる。
さらに。

「なあ」

当麻による追撃。

「コピー用紙は破れなくても……
水に濡れりゃ、インクは落ちちまうんじゃねーか？」

きしっ、と耳障りな音がした。

スプリンクラーから放出される水に溶かされていくようにして形を喪ってゆく、『魔女狩りの王』の最期を悦ぶかのように。
加藤と名乗る少年が、歯をこすり音をたてて嗤っていた。

「そういうことだ、魔術師よ。
“経験が足りないかなぁ”？　ハッハ、言ってくれるではないか！
『ローマの父（イノケンティウス）』まで駆り出して、たったふたりのガキにやられるとはな！　ハ、ハ、ハ！」

「このっ……
イノケンティウス、『魔女狩りの王』っ！」

その挑発に応えるかのように、自身から最も遠い距離にある黒いヘドロの塊を呼び続ける黒コート。
しかし、その呼声に応えるものはない。

「さて、話は済んだみたい……」
「まあ待て、上条」
その彼へ向けた一歩を踏み出しかける上条を、抑えるものがいた。
「なんだよ加藤」
「真打ちは遅れて登場するものだ。先鋒はお任せいただきたい」
「おい！」
そう言い捨てて、答えも待たずに飛び出す影。
「灰は灰に（Ash to Ash）――」
目標は、両手を広げて構える魔術師。
おそらく勝機を引き寄せようとしているのだろうが
「無駄なことだ。南無、朱雀金精大明神」
その言葉とともに、加藤の姿が消える。

もちろん物理、または光学的な意味ではない。
いくら異常とはいえまだ人の枠内にいる魔術師の眼が追いきれなかっただけだが、結果は同じことだ。

“手”と体重移動、つまりは自ら前方に倒れこむ勢いと姿勢制御を使って低位高速移動を可能とした加藤は魔術師の眼前に現れ――

「塵（Ｄｕｓｔ ｔｏ）は……っ！？」
「――御免なれ」

大きく足を振り上げ、脊髄の終端手前よりに蹴りを入れた。

会陰。
かつて彼が用いた金的とは異なり、睾丸と肛門の中間にある一点。

ここには、心臓から降りてきた大動脈の分岐点がある。正確に打撃をくわえれば、股間から血をふきだして失血死もありうる急所だが、加藤にそこまでする意思はない。
誰であれ組織的バックが相手にある時点で、彼を殺せはしないのだ。

だが、痛めつけることはできる。

魔術師の長身が折れ曲がる。
急所をすばやく保護し血行を保全しようとする反射機能のおかげで、彼は無意識のうちに膝を曲げ、腰を引き頭を前に突きだす。
目の前に白光が飛び散っているが、彼はまだ意識を保っていた。
まだ、意識を保っていた。

だから、自分の右をいまいましいカトーという少年が駆け抜けたことも、彼に続いていたもうひとりの少年が“あの右手”を握りこんでいることも、視界に収めていた。
視界に収めていたが、しかし今は脳から背中に駆けめぐる激痛で、有効な対応策をとることができない。

起死回生になるべき一手、胸ポケットから引きずり出したルーンが指先から零れ落ち、

前屈していた頬を上条当麻の拳に貫かれた魔術師は、その長身で放物線を描きつつ無動力飛行の栄誉を与えられた後、水を張られたコンクリートの床へと墜落した。

「で？」

「何が『で』なんだ？」

先ほどの戦闘とはうってかわって疲れた表情の、それどころか後悔や何かに対する怒りも含まれるような表情を見せている加藤が、当麻に対して一音だけ吐きすてた。

当麻はさっきの一件で、この加藤若一という中学生への考え方を、大きく見直さざるを得なくなっていた。

彼の予想では、大人しいうえに自分への被害を避ける人間のはず。

しかしあの戦闘に自ら飛び込み、くわえて最も危険度の高い『魔女狩りの王』を真っ先に攻撃していた。

あのタイミングで。

最悪、彼も魔術結社の一員という可能性もある。

……あの容赦ない金〇攻撃を見る限り、なさそうな線だが。

さて当麻は、今日知り合ったばかりの、そして重傷を負っているところをさっき助けたばかりの「インデックス」という少女を、道路わきにつけ加えられた野外休憩スペースのベンチに腰掛けさせていた。

インデックスという名前を聞いた加藤の脳内で、彼とは別の低く通る声が“まさかＩＮＤＥＸ　ＬＩＢＲＯＲＶＭ　ＰＲＯＨＩＢＩＴＯＲＶＭか？　英人もやることはやっておる、さすが野蛮だ”などと高笑いしていたことを、当麻が知らなかったのは幸運かもしれない。

そこへ不審な加藤から、さらに問いがくる。

「この子なんなんですか？」

「……妹」

「じゃあちょっと失礼しますね、公衆電話探さないといけないんで」

「おい、待ってくれ！」

歩き出した加藤の背中に、当麻は知らず大声を出していた。

加藤の足が止まる。

ここは街路の脇にある休憩スペースだ。夜ともなれば声が大きく響く。彼はここで騒ぎを起こさないことを優先したのか、こちらに舞い戻ってきた。

「いやさすがに妹はないっすよ」

気絶したままの彼女を控えめに指さして、加藤がつっこむ。

彼女は髪が明るい銀、目は碧、肌は白。

上条家が養子をとるほど裕福でなければ、“妹”という言い訳はまずありえない。

「だけどこいつ、いろいろあって学園都市のＩＤ持ってないみたいなんだ。

俺の妹ってことにでもしないと、満足に病院もいけない」

「……深くは聞きませんが、彼女のことを学園都市の運営側が知ったら、あとで困るのはおれたち、ということですか？」

「そんなとこだ」

「……ひょっとして、彼女も魔術がどうとか言ってます？」

そんな質問をしてきた加藤が探るような目をしていて、当麻はいささか視線を強めた。

内容の不穏さはいざ知らず、加藤の目の奥に嘲笑が淀っているような気がしたからだ。

「そうだ、と言ったら？」

「上条さんとはいい愚痴会ができそうだ、ということですね」

だがその問い返しの答えは、拍子抜けするような内容。

愚痴会？

「なんだそれ」

「おれもさっきの夕方に、魔術がどうとかいう女に襲われたんですよ。ワイヤーでこっちを切ろうとかしてくるし、おかげで携帯が真っ二つです」

「お前もか！？

インデックスもそうだし、なんなんだいったい」

思わず顔を寄せる当麻から逃げるように上体をそらしつつ、ほら、とポケットから携帯電話の画面“だけ”を取りだす加藤。

思わず当麻はため息をつく。

「これで連絡手段は全滅か……」

思わず眉を下げる上条当麻。
そこに、

「……とうま？」

またもや、三人目の演者が登壇することになる。

「とうま、だいじょうぶ？　顔色悪いけど」

当麻に背負われていた純白に金の修道衣をまとう少女は、開口一番にそんなことをのたまった。

「人の心配してる場合か！　早くそのケガなんとかしねーと」

今、彼女の背には大きな切り傷がある。
このまま活動を続ければ、いずれ失血死は免れない。

「大丈夫、だよ。

とにかく、血を止めることができれば……」

それを理解しているのかいないのか、むしろ無理矢理に当麻を元気づけようとしているかのように、弱弱しい笑顔を浮かべたままインデックスは倒れこむ。

冬山野宿のごとく唇が変色していては、到底笑顔に見えないのだが。

「おい、おい！　インデックス！」

当麻はあわてて彼女を両手で支える。

その間、事態についていけないのか、加藤は一言も発せずにただ立ち尽くしていただけだった。

「……超能力っていうのが、もうダメなの。

魔術っていうのは、キミたちみたいに才能のある人間が使うためのものじゃないんだよ。才能のない人間が、それでも才能のある人間と同じことがしたいからって生みだされたのが、魔術」

インデックスの説明が続く。

超能力者以下、科学的能力者が魔術を使おうとすると神経が焼き切れるという恐るべき事実を前に、男ふたりは反論する術を持たな

かった。
特に加藤は、目だけで上を向いて何事か憤慨しているが、それだけだ。

「なら、能力開発のカリキュラムを受けてる、この街の学生には……」

「うん、回復魔術は使えない」

「ちっくしょう……そんなのってあるかよ」

もはやこの少女を救うことに将来をかけているかのような当麻とインデックスを、加藤が見比べる。
そこで彼は、この休憩スペースで初めて意味のある言葉を発した。

「なら逆は？」

その言葉に、当麻がうつむいていた顔を上げる。

「逆？」

「能力開発を受けていない人間は、つまりそこの彼女の言う“才能のない人間”ってことになります。ただ能力開発を受けていないっ

てだけでいいんなら、学園都市にも相当数の人がいる……」

「そうか！」

上条当麻の属する学級で担任をつとめる月詠小萌（つくよみこもえ）の私宅に、当麻とインデックス、そして当麻にふたりの輸送を命じられた加藤が到着したのが、午後八時十分ごろ。

加藤若一の能力“伸びる手”を使うことで高低差を乗り越えた直線的移動が可能となり、大幅に移動時間を短縮できていた。

その加藤若一が昏倒したのは、到着から三分後のことである。

第八話外伝　『禁書目録』（後書き）

本編に関しては大筋の介入はできませんが、少しずつ時間がズレてゆくことになります。

第八話補遺　加藤彌二郎（前書き）

「あなたの名は？」
「鳥岡彌二郎」

「あなたは現世にお戻りに？」
「鬼は二度と死にませぬ」

「そして現世でのお名前は？」
「加藤保憲と申します」

――荒俣宏『帝都物語』

第八話補遺　加藤彌二郎

……あれ？
今日は夢に入るのが、ずいぶんと早い。
ついさっき、インなんとかいう女の子を連れた上条さんに引っぱられて、彼のクラスの担任らしい先生の家にお邪魔したと思ったんだが。
それにしても、先生いないみたいだったな。いたのは子供だけ……

その子供と反対なのが、あのおいさんだ。
長身痩躯とは、まさにあの人のためにある言葉だろう。龍神村の集落で廃仏の部隊ともやりあって、新九郎とかいう死人に会って、本当にあのおいさんはよくわからない。

……あれ？
今どうなっているんだっけ？

――きさまは役に立たん

――そこでおとなしくしているがいい

脳内のオカルトさんの声が、遠ざかる。

木偶茶屋（でくちゃや）という、新九郎さんが言う“笠塔山の頂き”にある開けた土地に来てから、保（やす）には声しか聞こえなかった。

あの黒衣の陰陽師が、絶対に目を開けるなと厳命していたからだ。

……保ってのはいわゆる“現オカルトさん”、背が高い少年のことだ。

とにかくそのせいで、おれもほとんど音声に頼る現状認識になりつつある。

しかし、

「げ・ど・う！」

その声で、保は思わず、はじかれたように目を開いた。

すぐ前に陰陽師の加藤、つまり旧オカルトさんがいた。その先に、なんだか相撲取りのように、さらに言えば蛙のようにぶくぶく肥った人物が座りこんでいた。

しかし、暗くてよくわからない。

青白い閃光とともに、その肥った人物の両目が不気味に光る。

その時。

前方に坐った人物が、両腕を高く上げた。

両袖がさっと広がる。黒く染めぬかれた丸に五芒星が、あざやかに見えた。

「セーマン！」

衝動的に保は声を出してしまった。

セーマンというのは、彼の生まれた村で魔よけとして漁民たちに使われている印のことだ。潜り漁師や海女たちは、白い手巾に黒く五芒星を染めぬき、身につける。

「莫迦者！　目をつぶれ！！」

旧オカルトさんが気づき、怒号を上げた。

しかし保は目を閉じることができない。すでに魅入られているのか、前方の人物を見つめたままだ。

脳内でおれが早く目を閉じろと叫ぶが、もちろん何の効果もない。

「見るな！　安倍晴明を見てはならぬ！」

旧オカルトさんのその声で、保はやっと呪いが解けたようにまぶたを閉じた。

しかし、その間に別の音が耳に入っている。

土を内側から掘り返すような音。狭い穴から、何かが這い出てくるような音。

そして、泥がはねる音。何かを吐く音。

状況がどうなっているのかわからないが、ともあれそれが

「せ・い・め・い――――ッ！！！

きさま、母を成仏させなかったな！！」

旧オカルトさんを絶叫させるほど侮辱的な動きだったのは、確かだ。

そして、

「ホホホホホホ……」

名を呼ばれた妖怪は、いやらしい声で笑った。

「この女は、そなたの母御か。ホホホホホホ、ならばそなた、余の子じゃの。
余は母御と毎夜交わったゆえの、ホホホホホホ……」

……なんだと？

＞i233346—2938＜

唐突に、マンガの一場面を思い出した。
主人公がラスボスと判明した男に、啖呵を切るシーンだ。

『吐き気をもよおす“邪悪”とは、なにも知らぬ無知なる者を利用する事だ……！！
自分の利益だけのために利用する事だ……！！』

今、おれというか保の目の前で（目を瞑っているにしろ）繰り広げられているのは、要するにそういうことなのだろう。
闘う相手の親族をひっぱりだして死体を操り人形にするなんて、正気とは思えない。

おかっぱの兄さん、あんたは正しい。
今おれは、現状を認識して吐き気が止まらないよ。

保という暗闇に閉じ込められた中でも、外界の剣戟や叫び声は聞こえてくる。
旧加藤が必死に母を呼んでいるが、その声はもはや死体には分からないようだ。

「けがらわしい！　ケガラワシイ！」

狂った女の人の声。
思わず瞼を上げた保は、

「見るな！　熊野王子！　おまえだけは、見るな！」

黒衣の陰陽師が放った魂の叫びで、再び視界を放棄した。

あとは混乱した音しか聞こえなかった。
保の脳内では、色とりどりの光が渦巻くばかり。
あのいやらしい、ホホホホホと息を弾ませる笑いが響く。肉と肉とが激突する振動も、地面を通して伝わってる。

旧オカルトさんと妖怪は、互いに鍔迫り合い、そして言い合っている。

陰陽師の絶叫と、怪物のくぐもった声の応酬だ。もちろんそれは両者が行いつつある死闘の副次的な生成物に過ぎない。

だが、目を自ら閉じた保には、それが何よりも状況を伝えていた。

「晴明よ、なぜ母上を犯した！」

「すべては……お上の思し召しぞ、ホホホホホホ」

「バカな！　花山院は自ら母上を欲したはず！　それを裏切るとは、きさまそれでも陰陽寮の一員か！
ヤマトにへつらい糧を得る、官人陰陽師の仲間ではなかったのか！」

「ホホホホホホ、そなたに説く理はないわ」

「なに！」

そのとき、気味悪い声が張り上げられた。
副産物を主装備に反映させることを決めたらしい。

「賀茂（かも）もいらぬ。道満（どうまん）もいらぬ。小角（おづぬ）もいらぬ。
余は吉野熊野の霊地を得るのじゃ。陰陽の術をこの地に永久に根づかせるために。

か・と・う――――そなたの若一党（じゃくいちとう）もいらぬわ。
すべての秘技は、この晴明のものぞぉっ！？」

声が途切れた。

ふと、目を開けると。
旧オカルトさんが、保の上にのしかかっていた。

異常な姿だった。
頬の下には傷がぱっくりと開いて、血がしたたり落ちてくる。血に染まったのは頬だけではなく、黒い瞳まで目が真っ赤になり、口元に塗りつけられた緋の周りには腐臭のする肉がこびりついていた。

「おいさん！」

保が叫ぶが、彼は動かない。

あわてて横から這い出し、旧オカルトさんの体を寝かせて、自分が上から顔を覗きこんだ。
頬がえぐられ、白い骨が見えていた。

「おいさん、平気か！」

その言葉で、初めて気がついたように旧オカルトさんが目を開けた。
満身の力を振り絞って仰向けになり、保と（つまりおれとも）目が合う。
旧オカルトさんは苦痛にゆがむ顔を、一瞬だけほどいて笑った。

「小僧……」

「あの……セーマンは？　妖怪は？　女の人は？」

「食った。
おまえが死人を見ようとして蛇を食うように、おれも……怨敵を……食った！
すべて平らげた……おれの母もな！」

沈黙が広がった。
保はどうしていいのかわからずに、旧オカルトさんの顔を見つめたままだ。
その旧オカルトさんが、ようやく表情をゆるめはじめた。

「おれは……怨念の源に帰りついた。そして……熊野王子にも会えた……」

彼は言葉を切って、片手に握りしめた血まみれの手巾を、保に押しつけた。
墨で星形が染めぬいてある。

「これを……取れ……おまえが……新しい加藤になるのだ……
この印は、日本を永遠に呪う者どもの印なのだ」

旧オカルトさんの声が、どんどん弱弱しくなっていく。
保は頭をふって抱きついた。

「そんな、できねえよ！　おいさんみたいになれねえよ！」

旧オカルトさんの呼吸が不規則になってきた。
その乱れた息の下から、ささやきき声が漏れる。

「いや……できるさ、熊野王子……
そういえば……まだ聞いていなかったな……おまえの名を……」

言われて、保も思い出す。
彼は自分に、一度も名を聞こうとしなかった。

だがもはや、その機会は訪れないだろう。保は声をしぼりだす。

「……保っていうんだ」

「保、だけではないだろう?」

「やすのり、っていうんだよ……」

保――“現オカルトさん”が答えると、旧オカルトさんは微笑し、もはや聞き取れぬほどかすかな声で答えた。

「……小僧、奇遇だったな……おれも、保憲(やすのり)と名のっていたときがある……

今を去る一千年の昔、この世に生まれた時につけてもらった名はな」

彼はそうつぶやくと、微笑しながら口を開け、震える舌を長くながく突きだす。

そして……

加藤重兵衛保憲、その二代目は、人形のように動かなくなった。

暗転。

「取り返しのつかぬ罪を犯した修験者（しゅげんじゃ）は、神罰を受けて恐ろしい死にかたをしたと言います――」

唐突に語りが始まった。

戦後まもない東京。焼け野原から雨後のタケノコのようにバラックや急造の家屋が並び始めたころ。

しっかりしたつくりで焼け残った瀬戸物屋の二階に、語り部はいた。

上がブラウス下がモンペというちぐはぐな恰好で、長い髪を後頭部で団子にまとめた、いかにも終戦直後という雰囲気を出している女性。年齢は三十代前半ごろか、もう少しは老けているだろうか。顔のしわが加齢によるものか苦労によるものかで話は変わってくる。

「どんな？」

字幕。

語り部は相馬俤神社（そうまおもかげ）の巫女にして平将門の守役、辰宮恵子（たつみやけいこ）。

ケイコ。

夢の中で何度もオカルトさんと戦っていた、あのケイコさんだ。

「話しましょうか、ユキちゃん」

続いて説明。

明治大正の時期にオカルトさんと戦った人々も、多くはすでに亡くなっていた。

ケイコさんと結婚したタツミヤさんは二・二六事件で反乱部隊に抵抗し殉職、彼の親友だったナルタキさんは終戦直後に鹿児島へ行ったきり行方不明。彼を支援したひとびとも、それぞれ病死あるいは消息不明になっている。

「ええ、よかったら――」

関係者のうち残っているのは、今この瀬戸物屋二階で昔話をはじめようとしているケイコさんと、その話に興味津々の被害者ふたり。つまり寝たきりになったタツミヤさんの妹ユカリさんに、芸者で母の食いぶちを稼いでいる娘のユキコさんだけだった。

三人は今日、ほとんど奇跡的な再会を果たし、ケイコさんがユカリさんにおみやげとしてさしだした骨の笛にまつわる伝説を話すところなのだ。

ケイコさんの語り。

鎌倉時代から現れた修験者、別名“ゲンザ”は、山の険しい自然の中にわけ入って修業をつみ、究極的には人以上のものへ昇華しようとする人々だ。

古来から神がいるとされ、竹取物語のラストにも登場する富士山は、彼らにとって人気スポット。奇蹟が起きたという噂も絶えずあり、それが新たなゲンザを呼んでいた。

物語の主人公、伝説では加藤彌二郎（かとうやじろう）という名の男も、ゲンザのひとりだ。

ゲンザの多くがそうだが、彼も江戸時代の人という以外の身元は分かっていない。本姓は“鳥岡（とりおか）”だという噂があり、自分では紀伊の山奥にある龍神村の出身と周りに言いふらしていたが、龍神村にそういう名字の家はないらしい。

ええ、もう分かりますよね。旧オカルトさんです。

人が千年生きられるわけがないなんてのは野暮というもの。そもそもこの夢世界は理屈が通用しないんだから、架空の物語と思って対応するしかない。

……きょうの魔術師とか見てると、現実にありそうで怖いが。

で、その彌二郎は富士山に入り、三年間修業を続けた。

そしてある夜、夢枕に天女が立つ。彼女いわく

「小田原で金輪を帯びた霊鳳をとらえ、肝を食い喉骨を笛として奏でるべし。
さすれば汝、不死身とならん」

とのこと。
夢のお告げに喜んだ彌二郎は一気に下山、小田原でその“霊鳳”＝ありがたい鳥を撃ち落とすべく探しまわった。

お告げを気の迷いとか何かのいたずらと考えないあたり、素直だな。
つーかまた肝か。白狐といい、死亡フラグだろ。

さて“金輪を帯びた霊鳳”は、意外に早く見つかった。
小田原近くの村に、毎年金の首輪をつけたタンチョウヅルがやってくるというのだ。伝説では首輪をつけたのは源頼朝その人とされ、それ以来何百年も同じ鶴が渡ってくるらしい。

これだと大喜びの彌二郎は弓矢を持って夜まで草陰に隠れ、日の入り直前になって金の首輪をつけた鶴を発見、これを一撃で射抜いた。
湿原に飛び込んだ彌二郎はしかし、

ギャアッ

と鳴きさわいだ手負いの鶴が最後の力を振りしぼって打ちこんだ自らのクチバシに、胸を貫かれてしまったのである。

幻覚。

気が付くと、這いつくばっている自分の周囲りを、赤や黒に焼けただれた肌の大鬼たちが取り囲んでいた。
彼らは口々に叫ぶ。

「やい、やい、彌二郎め！」

「ゲンザの彌二郎、霊鳳殺しの罪は重いぞ！」

わめきながら、彼らは彌二郎を木の十字架に縛りつけ引きたてた。
すると、鉄のクチバシをもった黒鬼が進み出る。

「それほど不死が欲しかったか？　よかろう、このクチバシをくれてやる！」

鬼はそういうと、自分のクチバシを取り外し、彌二郎の顎に押しつけた。磔にされては手も使えず、首をいくらふっても取れない。

続いて二本角の赤鬼が飛び出す。

「それほど不死が欲しかったか？　よかろう、このツノをくれてやる！」

赤鬼は額の左右に生えている角をねじ切り、彌二郎の頭にさしこんだ。血があふれ、両目のわきを流れる。

さらに、赤毛の黒鬼が現れでた。

「それほど不死が欲しかったか？　よかろう、この髪をくれてやる！」

黒鬼は桶に水を張り、そこに長い赤毛をつけた。しばらくして髪を引き上げると、その色は落ち、かわりに水が赤くなっていた。

子鬼たちがはやし立てながら、その赤い水を彌二郎の頭からかける。

またたく間に彼の髪が朱色に染まった。

こんどは緑色の体をした鬼が現れ、同色に輝く目を光らせて叫んだ。

「やい、彌二郎。それほど不死が欲しかったか？
よかろう、俺の目玉をくれてやる！」

鬼は眼窩に手をつっこんで目玉を取りだし、彌次郎のまぶたの上に押しつけた。両の目から血が霧のように吹きあがり、視界が赤緑に変わった。

最後に、大きな頭に頭巾を乗せた赤鬼が現れて叫んだ。

「やい、彌二郎。それほど不死が欲しかったか？
よかろう、清めの塩をくれてやる！」

手足の先だけ焼けて白く変色しているその鬼は、突然右手を彌二郎に押しつけて奇怪な声を発した。
白い粉が掌から吹き出し、鬼たちがつけたクチバシやツノを塗り固める。

「やい、彌二郎！　望みどおり不死をくれてやる。
おぬしはこれから地上へ戻り、永遠に鬼となってさまようがいい！」

鬼たちの哄笑が、耳に痛かった。

暗闇に横一線の光が入り、上下へ広がっていく。

彌二郎が目覚めたのは、小田原の宿場町にある診療所だった。

歩けるようになってすぐに彼は診療所の水がめを覗きこみ、張った水にうつる自分の顔――額の生え際が左右二か所で異常に後退し、顎が細長く目玉が大きく、そして髪が赤茶けた顔――を見ることになる。

その後、路地に響いた絶叫が誰によるものかは、定かでない。ただ加藤彌二郎という男の消息はそこで途絶え、その代わりとなるように加藤重兵衛という名がゲンザたちの間で聞かれるようになる。

彼が持っている“鶴笛”の音を聞けば不老長寿の体になれるという話まで流れ、富士のゲンザはその数をますます増やしていった。

彼らの狂騒は、戊辰戦争まで続く。

聞き終わったユキコさんは、声もなく顔を落とした。年老いたユカリさんも、寝床のまま静かに目を閉じた。

ケイコさんだけが、ただ平静を装っていた――

第八話補遺　加藤彌二郎（後書き）

オカルトさんの伝説が語り継がれていることを示すため、ちょっと時系列がずれます。

注…

『吐き気をもよおす“邪悪”』
（C）荒木飛呂彦／集英社『ジョジョの奇妙な冒険』第五部『黄金の風』第6巻、２００５年。
ブローノ・ブチャラティの名台詞。

『鶴笛』
修験者・加藤重兵衛が作りだしたとされる笛。
鶴の喉まわりの骨で作ったとされる笛で、吹けば体に元気内力がめぐり、健康長寿に役立つとされる。
ちなみに人骨で似た笛をつくった場合、徐々に使用者の精気が吸いだされる。直ちに健康への影響はないが、還暦前には確実に死亡する。

第九話の一　Ｄｉｓｐｕｔｅ　ｂｅｔｗｅｅｎ　ａ　ｍａｎ　ａｎｄ．．．（前

一夜明けて、小萌先生のアパートです。

第九話の一　Ｄｉｓｐｕｔｅ　ｂｅｔｗｅｅｎ　ａ　ｍａｎ　ａｎｄ・・・

左側頭部と右腋下に激痛。
一気に目が覚めた。

「ごっあっ……」

閉じきれない口から間抜けな声が漏れる。
思わず手で押さえようとするが、腕がしびれて動かない。

いや、これは本当にしびれているのか？　何かの感覚異常なのではないか？
だとするとどういうことだ。何が原因だ？

超能力関係ではまずない。
おれの“手”や“遮光板”は、自分で出そうと思わない限りはなにもない。逆にもし『幻想御手（レベルアッパー）』の副作用なら、自覚する間もなくバッタリいってるはずだ。

だとすると呪術か？
あの目次（インデックス）とかいうチビガキが何かしでかしたのか？　それとも単

に、能力を持っているおれが呪術を使ったから何か障害が残ったのか？

――それはないな

突如、脳内に低い声が響きわたる。
キビツ時代に打ちあげで悪く酔った時のような響きかただ。

オカルトさんの声が聞こえてくる。
ということは、おれはまだ『幻想御手』の影響下にあるわけだ。

――だが、おれは今いささか動きにくくなっておる

――見ておれ

と、みょうに遠慮したしゃべり方のオカルトさん。
これまでの傍若無人ぶりはいったいどうなったんだ、と思いつつ、周りを見渡してみる。

おれは今、冬用の毛布にくるまれていた。下は畳だ。
右には本棚、積まれたビール瓶、煙草の剣山ができている灰皿、

布団。

その布団の中には、ウサギの耳が付いたピンク色の寝巻をまとった、あの（たぶん）昨日の夜に出会った薄青い――いや、銀髪の女の子。

彼女の右に、同じくらいの背格好をした、ピンク髪の女の子。

彼女の左には、至近距離すぎて見えないが、何か柱のようなものが立っている。

おれのすぐ左は壁。

昭和を感じさせるアパートのような、木造モルタルと断定したくなる薄い塗り壁だ。

薄いところまでなぜわかるかといえば、その上の窓から縞模様になった日光が漏れてきているからに他ならない。

で、縞模様に窓からさしこんでくる日光を遮っているのは、もちろんおれの“遮光板”ではなく。

「お、こっちも目が覚めたか」

日光を遮る太い柱のようなもの……ではなく両足をひっこめ、窓枠に胡坐をかいて下をのぞきこんできた上条当麻さんでした。

……おれ、どこにいるんだっけ。

混乱してきた。

>i2181 1—2938<

「動かないでください！　まだ安静にしてなきゃだめです！」

頭をあげようとすると、いきなり右からキンキン声が飛びこんでくる。

声の主は、どうやらピンク髪の女の子らしい。

「言われなくても、こんな頭も腹も痛くて動けるかっつの……」

ぼそぼそと呟くように反論するが、実際頭痛がなくとも肩から下が動かないのではどうしようもない。

今になって手足が動かない恐怖がこみあげてくる。

「……あれ？　おれ寝たきり？」

「そうだぞ加藤、とりあえず先生の言うことを聞いて、リハビリできるぐらいまで回復しないとな」

頭上から降ってくる上条さんの声。

上条さんは無事だったんですね。よかったというかなんというか。

しかし、気になることも言っていた。

「……せんせい？」

「ああ！」

さわやかすぎる笑顔で肯定する上条さん。そしてとんでもないことを言い出す。

「この人が、月詠小萌（つくよみこもえ）先生。俺のクラスの担任だ」

「……へ？」

おもわず口がだらしなく開く。

そりゃそうだろう。

先生？　社会的に大人でこの背丈と声なら、このひとあと二百年は余裕で生きられそうな気がするぞ。

「よろしくです！」

「……は、はあ。きのうは夜分すみませんでした」

しかし本人に満面の笑みで挨拶されては、立ち上がれない分の失礼をまともな返答で補うしかなかった。

「ところで上条ちゃん！」

「うごっ」

キンキン声ふたたび。

直後のうめきは当然おれ。両手で耳をふさげないのがすごく痛い。おれの頭に響くんですが無視ですかそうですか。

ともかくその月詠先生（？）は、ビシッとインデックスなんとかかんとかさん（仮）を指さした。

顔から「わたし今怒ってるんですよ」オーラがほんわかと出ている。

……真剣にあの銀髪の女の子、名前なんて言ったっけ。

昨日上条さんと二人だけで話が進んでたから、会話に割り込めずにそのままなんだよな。

「結局この子は、上条ちゃんの何様なんです？」

「んー……妹？」

そして上条さんの答えは、昨夜からまったく進化していなかった。

「そりゃねーよ」

思わず脇腹の痛みも忘れ、二コ上に対してタメ口を聞いてしまったと思った時には、月詠先生の顔が桃のように膨らんでいる。

よくない兆候だよな、確実に。

「大嘘にもほどがあるです！　モロ銀髪碧眼の外国人少女です！」

「あああ、あの、すんません、ホントすんません！
嘘つきました、あああすんません、ごめんなさい許してください！」

地団駄を踏んで怒る月詠先生と、手と膝ついて平謝りを続ける上条さん。

なんとなく、この一室における力関係が分かってきた。

ただ、それでは困る。

上条さんの推測が正しければ、学校側すなわち学園都市の運営者サイドに彼女のことが伝わるとまずい。何よりあの黒宗女や黒コートと同じように、許可をとらずに学園都市へ入ってきたらしいのが非常にまずい。

奴らにケンカを吹っ掛けたうえ、ケツまくって逃げただけのおれも何がしたかったのかと詰問されるだろうが、一夜明けて何もないとなれば泳がされているのだろう。

……本当に昨日はギリギリだったからな。

オカルトさんは余裕ぶっこいた喋り方してたけど、実は黒宗女が世界中に百人といない十字教の『直接加護』を受けた廃スペックな戦闘能力の持ち主で、あのときは二重に封印しないと生きて帰れない可能性がけっこうあったり、黒コートに蹴りが決まったのも上条さんの奇想天外な反撃策、必殺スプリンクラーがあってこその勝利だったり。

このことが後で尾を引いたりしたら、恨みますよオカルトさん。

ともかく。

ゲスト用ばかりでなく外部からのトラックや郵便物にまで使いすての身分証とＩＤ番号が発行されるこの街は、高度に発達した監視

社会だ。すでに住民どころか移動体すべてが総背番号化されていると言ってもいい。

そんな場所で未公認の人間がいるとわかれば、面倒なのは間違いない。初ちゃんが見つけた空中の“発信器”まで考え合わせると、人道的な扱いも期待できない。

まあ“発信器”はこの部屋近くにもいるのだろうから、それを統制しているだろう上層部と黒コートや女の子をいまだ拘束できない治安当局に、あまり情報のやりとりがないのは間違いないけれど。

頼りになるとも思えないが、いちおう助け舟は出すか。

「おれは、たぶん難民（レフジー）だとおもうんすけど」

おれのかすれ声に、上条さんと月詠先生が顔だけこちらに向ける。

「難民？」

「どういうことです？」

「まああの、言っちゃ悪いですが、雑誌の表現を使えば強引な置き（チャイル）去り（ドエラー）、と言えるかもしれません」

インデックス（仮）さんがこの造語を知らないことにかけて、わざと発音する。

案の定、月詠先生はこちらに怒りのまなざしを向けているが、上条さんとインデックス（仮）さんはポカーンとした表情で病床のおれを見ている。

ふたりがボケてる理由はそれぞれ違うのだろうけれど。

月詠先生が声に出して怒りださないうちに、理由をでっち上げとくか。

「転入手続きが始まらないうちに、その手続きが不可能になった。保護制度もこの短期間では機能できていない。

そういう事例、この広い学園都市にはあるでしょう。

そもそも学園都市はセーフティネットが少なすぎると、おれは常々思ってたんですよ。だから宗教なんかやってる彼女には特にあたりが厳しい、というか手当てがない。たぶんそういう子だと思うんですけどね、経験から言うと」

ちょっと意地悪になってしまったが、おれはそう長ゼリフを吐いて深呼吸をひとつ終えたのち、また毛布にくるまった。

「だいたい昨夜、上条さんとその子が襲われたのだって、もとはといえば――」

「ちょっ！　待てこらストーップ！」

「へ、何がモゴッ」

ところが、おれの愚痴ともいえる状況説明は、上条さんに止められた。

口まで押さえられて。

脇痛いです。

まあ、遅かったみたいだけど。

月詠先生が腕を組んでこちらを見ている。

「上条ちゃん、襲われたってどういうことです？」

「え、いやそれは」

「どういうことか説明してほしいです。

上条ちゃんたちがいったいどんな問題に巻きこまれてるか分からないですけど、それが学園都市の中で起きた以上、解決するのは教師の役目、大人の義務です」

おお。

この人、どうやら真剣に教職やってる人間のようだ。

うちの某クラス担任の某鳥岡安治（とりおかあんじ）氏なんかとはずいぶん違うね。

きっとクラスでも人望あるんだろうな。

さらに月詠先生、しゃがんで上条さんと同じ目線で畳みかける。

「上条ちゃんたちが危ない橋を渡っていると知って、黙っているほど先生は子供ではないのです」

「……先生が赤の他人だったら遠慮なく巻きこんでるけど、先生には『魔術』の借りがあるんで巻き込みたくないんです」

「むう、何気にかっくいーセリフを吐いてごまかそうったって、先生は許さないですよ？」

上条さんの反撃も無効。

そして言いながら立ち上がる月詠先生。こいつは厳しい戦いになりそうだ。

って、他人事にしてるけど、絶対おれにも火の粉かかるよねこれ。

この人なら大丈夫な気もするが。

「あれ、先生どこへ？」

あわてだす上条さん。おれはもう何も言わない。

ここまで臭いセリフをいち生徒に向けて真剣に吐ける先生が、理事会なんぞに告げ口するわけがないと思うからだ。

そういう器が小さいキャラもいるにはいるが、上条さんが訳ありのケガ人を迷わず運びこむ家の人間なら、まずないだろう。

オカルトさんは脳内でぶつくさ言っているが、おれは当たっていた。

「執行猶予です。
先生スーパー行ってご飯のお買い物をしてくるです。上条ちゃんと加藤ちゃんは、それまでに何をどう話すべきか、きっちりかっちり整理しておくですよ」

いや、整理ったって今言った設定以上のものは思いつかないんだが。
つーか上条さん、おれの名前出してたんですね。

「……それと」

え？

「それと？」

「先生、お買い物に夢中になってると忘れるかもしれません。帰ってきたらズルしないで、ふたりから話してくれなくちゃダメなんですからね？」

玄関のドアが閉まる。

——あの小僧、よい師を持ったな

いや、まったく。

音量と空気の読める人格オカルトさんに、おれは心中で深く頷いた。

さて。

結局おれが昏倒した理由だが、案外簡単につかめた。

——宿主の記憶を探ってみろ

と、オカルトさんに言われてみたのだが。

何も思い出せない。

いちおう覚えていた両親の顔も、学園都市に捨てられてから孤児院で遊んだ子供の名前も、そのあと木山学級で知り合った子供たちも。

これまで木山先生に問い詰められるまでは特に思い出す必要がなかったから、ふとした瞬間に思い出すだけで済ませてきたのだが、いまこうしてあの薄暗い部屋で目覚める以前の記憶を失って初めてわかる。

加藤くんは、いまおれの脳内で死に体だと。

――きさまの知識では、多重人格者は人格によって霊波が異なるそうだな

――ということはこの体には、いま三種の霊波が混在するわけだ

解説を始めるオカルトさん。

論理演算のエキスパートだけあって頭もまわるらしい。

霊波ってのは、たぶん脳波とか脳磁界のことだろう。

――あの倒れた小僧いわく、霊波をあわせ乗っ取ることで口を寄せているのだから

――もっとも弱いわれらが宿主の魂をまっさきに併呑するのは

――理にかなっているだろう

……なるほど、そういうことか。

頭の中に三つの人格があるから、加藤くんの脳全体に影響を及ぼそうとすれば活動が不活発な順に意識障害が出てくると。

要するに、おれやオカルトさんの昏睡は全く回避できていない。加藤くん意識を生け贄にして、期限を延ばしただけだ。

……キビツという“おれ”が乗り移ってから一回も彼に神経系を返してないどころか、今のようなモノローグ合戦的な会話すらしていないのだが、こういう事実を突きつけられるとやはり罪悪感というものが湧く。

――なにを殊勝なことを考えているのだ？

――しょせん相手は抜け殻だ。その中におれが宿っている

オカルトさんの嘲りにも反論する気になれない。

だがしかし、

「有……毒……？」

右から底に響く声。
人が感傷に浸っているときに、そういう話を繰り返さないでいただきたいんですが。
まあしょうがないか。
上条さん、そういう人らしいし。

真面目な顔で語りだしたのは、ウサギの耳が付いたフードを脱いで銀髪を背後へ流したインデックス（仮）さんだった。

「……私は宗教防壁で脳と心を守ってるし、魔術師は自ら限界を超えて、そういう世界に辿りつくことを望んでる。でも、そうじゃないこの世界の普通の人間が、違う世界の知識を知ると、それだけで脳は破壊されてしまうから。
特に、宗教観の薄いこの国の一般人なら――もう一度唱えれば、終わる」

「破壊って……魔術ってそういうものなのか」

今さらのように、上条さんが呟く。
ひょっとすると、彼はあの謎の右手のせいで、そういう別の世界を甘く見ていたのかもしれない。おれもだけどさ。
個人的には不本意だが。

「知りたい？」

本心から知らせようと思っているのか大いに疑わしい声で、イン（略）さんが流し目をくれる。

「私の抱えてる事情（モノ）、全部知りたい？」

ほほう。
最初から思っていたが、このイン（略）さん、加藤くんと同じタイプの達観をした気になってるな。

おおかた、できれば肩の上のもの全部放り出して逃げたいけど、それだと周りのみんな（今は特に上条さんとか）に迷惑がかかるから彼から身を引こう、なんぞと思っているのだろう。

正直言って、実際それはたぶん正しい。
オカルトさんが能力を使うたびに、恐らくおれは『幻想御手』にとらわれていく。今の状況で、昨日の黒宗女や黒コートのような連

中を相手にどうこうできるとは思えない。

ではあるが。

おれはともかく、昨日からの行動を見るにつけ

「何てゆーか。

それじゃ、こっちが神父さんみたいだな」

上条さんが二の足を踏む理由は、今のところないのだ。

おれとしても、誤解は解いておきたい。頭痛も消えたし。

「イン……デックスさん、おれからもちっといいですか？」

「へ？」

「なんだ？」

また、ふたりが顔だけこちらに向ける。

おれは寝ていると思ったんだろうか、意外そうな顔だ。

息を吸う。脇の下から右手に上がってくる針の列のような感覚は

無視。

「まあ、大したことじゃないんですけどね……

納莫悉怛哩野地尾迦南（ナウマク　シッチリヤ　ジビキャナン）
薩縛怛他蘖多喃（サラバ　タタギャタナン）　？……（オン）」

「んなっ！
い、いきなり何を歌いだしているんですか！？」

上条さんが意味不明の歌詞に揺らいでいる。敬語なのは単に癖なのか、それとも本気で下級生のおれに丁寧語を使うほど動揺しているのか。
どちらにせよ、おれのターゲットは彼ではない。

「部尾婆縛娜縛利縛者梨縛者來（ボビ　バンバダバリ　バージャリバジャタイ）
祖魯祖魯駄羅駄羅薩縛怛他蘖多（ソロソロダラダラ　サラバタタギャター）
駄覩駄梨鉢娜含婆縛底惹也縛梨（ダドダリハンドマ　バンバチジャヤバリ）
畝怛梨薩磨羅薩縛怛他蘖多……（ボーダリサンマラ　サラバタタギャタ）」

「あっ」

そのあたりまで唱えたところで、イン（略）さんが声を上げた。

「それ、宝篋印陀羅尼（バーヴァナダーラニー）……！」

「御賢察」

気づいてくれたようなので、詠唱をやめる。

おれが今唱えかけたのは、一切如来心秘密全身舎利宝篋印陀羅尼経という長ったらしい名前の仏経――通称“宝篋印陀羅尼（ほうきょういんだらに）”だ。

『この経を読誦し、または写経し、または塔中に収めれば、地獄へ落ちるべき者も浄土往生できる』

という詐欺みたいな謳い文句のお経だがそれゆえに有名になり、中世から近世の日本では金持ちや武士どもが先を争って写本をつくり、仏塔を立ててそこに収めた。

おれが知ったのは映画のＢＧＭとしてだけどね。

無理に息を吸って胸を動かしたからか、ちょっと上半身に血が通ってきた。

じんわりと温かくなる両腕をどうにか動かしてひじで上体を起こし、イン（略）さんに視線を向ける。

「インデックスさんならお判りでしょうが、今のは死後に魂が極楽

浄土へ行けるようにと願うための呪文です。
　霊魂や来世やそれにまつわる儀式を信じている人たちは、この国でもかなり多いんですよ。そもそも自然信仰だって、ちゃんとした宗教ですから。

“宗教観”には、教義も教典も教団も教祖もいりません。一般的な日本人たちが聖誕祭（クリスマス）だの結婚祭（バレンタインデー）だので遊びまわるのは、単に十字教徒が圧倒的に少ないせいで、非宗教的な祭りでも政治的・呪術的に問題が起きないからでしょう。日本人が軽薄ってんじゃない、ただ単に十字教から自由なだけですよ。
　現に神道の例大祭（おやまつり）や仏教の灌仏会（はなまつり）は、今でも宗派ごとに時期こそ違え、畏敬の念のなかで行われているわけですし。

……あの自称魔術師といい、宗教観が薄いとかなんとか好き勝手言ってくれてるけど、十字教目線で他人のイメージ捏造するのは感心しませんね。

　あんたの常識で測れない存在ってのは、その辺にゴロゴロしてるんだ」

第九話の一　Ｄｉｓｐｕｔｅ　ｂｅｔｗｅｅｎ　ａ　ｍａｎ　ａｎｄ．．．（後）

注…

『Ｄｉｓｐｕｔｅ　ｂｅｔｗｅｅｎ　ａ　ｍａｎ　ａｎｄ．．．』

「ある男とその○○との会話」。古代エジプトの連詩が語源。

『あんたの常識で測れない存在』

アラハバキ・ミシャグジ・マタラなど、日本神話にも仏教説話にも出てこないのに儀式祭礼だけ残された神格とその信者たちは、本当に山ほどいる。

しかし十字教徒たちは、政治にまで進出している宗教団体がありながら、クリスマスを厳粛に祝わないだけで「日本人は宗教観が薄い」と言う。“オカルトさん”と“キビツ”は、これに不快感を覚えた。

第九話の二　上条当麻、宣言す（前書き）

旗揚げです。
フラグ的な意味で。

第九話の二　上条当麻、宣言す

「……十字教目線で、他人のイメージ捏造するのは感心しませんね。あんたの常識で測れない存在ってのは、その辺にゴロゴロしてるんだ」

いきなりお説教から入っちゃってすみません。

ここんとこ演説が多いと自分でもわかっている。

しかし、オカルトさんの強い後押しもあって言わざるを得なかった。

異教徒を人間扱いしない純粋培養の十字教徒ならともかく、イン（略）さんは多神教の術式をふくめて魔術を知っているはずの人間だ。その彼女が、日本の神仏天羅やそのほか正体不明の尊格（ナントカさま）を確率的に信じる日本人の感覚について“宗教観が薄い”というだけで片づけるのは、独りよがり以外の何でもない。

ちなみにキビツ時代のおれは本願寺（ナンマンダブ）の門徒だった。オカルトさん

は牛頭天王（ごずてんのう）という神様を信じているらしい。

ふと見ると、上条さんが学園都市の学生らしく、変な顔をしていた。

自分の予測がはずれていますように、という。

「……加藤？　おまえも宗教やってるのか？」

「ああこれはどうも失礼しました。脱線しましたね。

今言ったとおり、むかし霊魂とよばれた頭ン中の神経伝達パターンを、確率論的に保存できるかもしれないと信じている意味では、おれも宗教を信じてますよ。

だいたい、科学的に超能力を開発できたからって、宗教で奇蹟を起こせないと決まったわけじゃない。なんにでも可能性はありますし」

「……それじゃ、他の学園都市の学生と一緒じゃねえか」

「だから、そういう方向性の考え方って話ですよ。“その程度の”じゃなくて。

脳に電極くっつけて何かしなくても物理現象を無視できると確信することは、れっきとした宗教観だと思いますがね」

上条さんはまだ変な顔をおれに向けている。

イン（略）さんは不満そうだ。話の腰を折ったのだから当然かもしれないが、お互いの価値基準をはっきりさせておかないと面倒だし、ここは許してほしい。

「まあ例えがアレでしたが、この上条さんもたぶん、人格的にはあなたの常識で測れない存在ですから。
自分語りするだけで、そんなにビクつくことはありませんよ」

「それはどういう意味かな加藤くん」

「……言ってることはわかるけど、ここまではっきりバカにされたのは初めてかも」

イン（略）さんが頬を膨らませている。

下世話な話だが、そういう仕草もかわいい。御坂さんといい、主人公のまわりに美人が集まるのはこの世界の基本法則のようだ。
上条さんの反応は無視。おれの常識でも測れない人ですからね。

「無礼な言い方については申し訳ありません。しかし十字教徒に限らず、学園都市の中でも“宗教”を勘違いする人がいるもので、ど

うかご勘弁。

……で、さっきの一〇万三〇〇〇冊がどうのって話、詳しくお願いしたいんですが。

あの髪が赤い自称魔術師に蹴りくらわせた以上、おれももう無関係のふりしていられる立場じゃありませんからね」

＞ｉ２１８１１―２９３８＜

気を取り直して。

結局おれは起き上がって頭を下げることを要求されたが、そこはお互いの体調を案ずる上条さんが止めてくれた。

ありがたやありがたや。

いや、実際腰骨の上側面が痛くて、起き上がるのもつらいんです。

「なんでだと思う？」

『禁書目録（インデックス）』さん――本人に名前を伺ったところインデックス＝リブロルム＝プロヒビトルムさん、まさにオカルトさんが“インデックス”から予想した通りの名前だった――は、額に冷やしタオルを乗せられながら、まずそう問いを発してきた。

ちなみにインデックスが目録、リブロルムが書物、プロヒビトルムが“禁じられた”という意味らしい。ラテン語の目的語後置ですね。

つーか個人名すらないのかこの人。

「十字教なんて元はひとつなのに、旧教（カトリック）と新教（プロテスタント）、ローマ正教、イギリス清教、ロシア成教、エキュメニカル制教、ネストリウス派、アタナシウス派、グノーシス派。どうしてこんなに分かれちゃったんだと思う？」

上条さんが考えこむ。

おれはこの問いについては黙っていよう。

まあ、科学的無神論入門なんていう社会主義国家っぽい授業を受けている高校一年生に、この問いは少し意地悪だろう。

中学校で習う世界史での十字教関連項目はだいたいカオスだった、という記憶ならあるが、そこから

“なぜカオスになったのか”

を導き出すのは面倒くさい。

さらに言えば、その道の専門家を前に、うかつな答えは出せない。

ついさっき彼女を罵倒してしまったおれとしても、あまり変なことは言えない。

――俗ずれ坊主という言葉ひとつで、分かりそうなものだがな

オカルトさんは黙っててください。

そんな古臭い言葉、専門でもない高一が知るわけないっての。

「うーん……そりゃあ……」

「宗教に政治を混ぜたから、だよ。

分裂し、対立し、バラバラの道を歩くことになった。同じ神様を信じてるのに」

そこは認めるんですね、よかった。

まあ、その程度に余裕があるからこそ、おれの暴言も内容だけはとりあえず受け入れてくれたのかもしれない。うわあ、おれ大人気ないな。

「よくある話ですね。仏教だって神道だって、誰かひとりが新しい考え方を作った瞬間に派閥ができて、ついには口もきかなくなる」

おれの補足。

これは事実だ。平安二大仏教とよばれる東宗と北宗は、なんと今世紀までまともに一対一の交流をしてこなかった。その内部でも、儀式の作法にかかわる論争で分派したやつらがいる。

独自性を得たといえば聞こえはいいが、要は分裂だ。

キビツ知識にある本願寺だって、もともとは教祖の墓だったのが寺になり勢力を広げたのだ。もちろんその過程で他の宗派から寺を奪いとり、ひどいときには地域まるごと乗っ取ったりした。

「それは十字教も同じ。それぞれが独自の進化を遂げて、個性を手に入れたんだよ」

「個性ねぇ……」

上条さんが呟く。おれの補足説明で、分派にネガティブなイメージができたようだ。

インデックスさんは一息入れて、続けた。

「ローマ正教は『世界の管理と運営』を、ロシア成教は『非現実（オカルト）の検閲と削除』を、エキュメニカル制教は『反十字教（アンチキリスト）の弾圧と攻撃』を。

そして、私の属するイギリス清教は……」

間。
上条さんが水に浸していたタオルを絞りにかかる。
「イギリスは魔術の国だから、魔女狩りや宗教裁判――そういう『対魔術師』用の文化が異常に発達したの。だから、イギリス清教には特別な部署があるんだよ。
魔術師を討つために、魔術を調べあげて対抗策を練る。
『必要悪の教会（ネセサリウス）』」
「ネセサリウス？」
――ハッ、笑うべきではないか！
――身内に泥を押しつけて、自分たちは玉座におさまる蛆虫どもめが
オカルトさんがすぐに吐きすてる。この人はとにかく、公式の場で身ぎれいにしている偉い方々が気に食わないようだ。
いや、“自分たちだけ”身ぎれいにしている人々が気に食わない

のか。

「敵を知らなければ敵の攻撃を防げない。だけど穢れた敵を理解すれば心が穢れ、穢れた敵に触れれば体が穢れる……

その穢れを一手に引きうける部署、その最たるものが――

うぁっ」

インデックスさんはこれぞ一神教理論というべき上から目線の発言を連発していく。

最後のひとことは、額の上の濡れタオルを上条さんが交換したときのものだ。

「一〇万、三〇〇〇冊……」

彼女の後を受けて、上条さんがつぶやいた。

質問するのは今しかない。

「あの、それなんですけど」

「ん？　どうした加藤」

「一〇万三〇〇〇冊なんて分量の本、いったいどこに収められてんですか？

市立大図書館の本館がだいたい蔵書一一〇〇万、第七学区分館が五十万、区立図書館が五万冊前後だ。市立のは別次元としても、区立図書館の二倍を収めて誰にも怪しまれないような場所なんて――」

そこまで言ったとき。

上条さんがいきなり立ち上がった。

おれの目の前に来る。

頭を掴まれ、視線が固定された先にいるのは、インデックスさん。

「あそこだ」

「あそこ？」

「一〇万三〇〇〇冊の魔道書は、インデックスが“記憶”してるんだよ――！」

……は？　記憶？

いきなりのことで反応できない。
沈黙を保ち、脳内で聞く。

――そんなこと可能なんですか？

――科学としてはできぬこともないだろうが、その先がわからぬ

オカルトさんも困惑の体。

彼がむかし戦った相手に、映し出されたものすべてを記録し、持ち主の脳へ映像を転送する宝玉『世界の眼（オクルスムンディ）』を持った、国際秘密結社『メソニック協会』の長老がいた。
名前はジェラルド＝トマーゾ。

しかしトマーゾの場合、直接記録を脳に刷りこんだわけではない。
“なぜ人の脳に記録しなければならないのか”は不明のままだ。

……それはそうと、魔道書という単語にはつっこまなくなった自分が悲しい。

「いや、費用対効果とか隠蔽工作の手間とか考えてもやっぱり訳が分からないんですが、インデックスさんどういうことなんでしょう」

結局オカルトさんとの無言のつかみあいを放棄し、おれは話を彼女にゆだねる。

「魔術っていうのは計算式みたいなものだから、上手に逆算すれば相手の攻撃を中和させることもできるの。世界中の魔術を知れば、世界中の魔術を中和させることもできるはずだから……

私には一〇万三〇〇〇冊の魔道書が叩きこまれた」

「フン！　そんなヤバいモンなら、読まずに燃やしちまえばいいじゃねえか」

上条さん怒りの追撃が入る。

きのう知り合ったばかりの人外にも全力で感情移入できる男、上条当麻。願わくばその行動力が、危険物に触れないことを祈りたい。

ま、無駄だろうけどさ！

おれは“シナイ（ヤハウェ）の山神”を信じていないし。

「重要なのは本じゃなくて中身だから、原典を消してもそれを伝え聞かせちゃったら意味がないの」

インデックスさんの解説。

ある小説を思い出した。文字媒体で情報を残すことが禁じられた

未来の世界で、それに対抗する人々が数少ない書籍をかきあつめて暗記するという話だ。

焚書されても書いてあった内容が後世に伝われば問題ないという理屈なのだが、魔道書などという有害物質でそんなことをやられたらたまったものではない。情報は流出経路をコントロールして、初めてそれ自体が単体の武器になりえる……

まさか

「それに原典の処分は人間には無理……正確には、ヒトの精神では無理なの。
どうしようもないからこそ……」

「書物の呪術的側面をすべて封印し集中管理させる」

解説に割り込んだ。
そこまで聞けば、おれにもオカルトさん知識を援用して説明文を組みなおせる。

「加藤、わかるのか？」

「魔道書ってのは、要するに極秘データファイルでしょ？　電子暗

号化も人がやるわけで、一般人に解析処理できなければ、昔ながらの収蔵法が一番ですから。

誰でも見られる紙なんかに書き写したら、発見されてそれで終わりです。見つかっても自分で逃げられる、そして確保されても情報をすぐに吐き出さない媒体といえば、やっぱり人間でしょう。

ついでに“図書館”となった人物それ自体の脳によって記録された情報の内容を整理、分類、統計させ、攻撃されたときのため護法陣を張る……

ってとこですかね」

布団の山に目を向けると、大きな目をさらに見開いたインデックスさんが小さく頷く。

いやあ、合理的ですね。リアル華氏四五一というわけだ。

感動のあまり発案者の頭をカチ割りたくなるが、この話はまだ終わらない。

「さらに古今の呪術を頭におさめていれば、古今の呪術に反撃どころか“持っている知識を総動員”することもできる。そうなれば――」

布団の中に鼻より下をひっこめていたインデックスさんが、おれの発言が終わったのを感じて、重そうな口を開いた。

「“世界の全てをねじまげることができる魔神”になれる……」

「で、全世界のオカルト連中は英国清教会の魔術師魔女軍団より先に、このインデックスさんを狙って攻撃をしかけてくるってわけだ。ゲス野郎どもが」

……下の悪罵はおれの愚痴です。

そりゃそうだろう。もちろん誰かに彼女がさらわれた時のことを考えて、プロテクトのひとつやふたつ掛かっているに決まってる。そのプロテクト解除キーを持っているのは、やっぱり安全な場所で騒ぎをニヤニヤ見てる偉いさんなわけだ。

そうとも知らない黒コートや黒宗女は、派手派手しく襲撃に来てるわけだが。

要するに、人間を携帯通信端末兼精密誘導爆弾扱いしているのだ。スマートフォン　スマートボム

やることが中世から何も変わっていない。

“発信器”もあるし、そこまでは言わないけど。

おれの愚痴に触発されたように、両膝の上にあった上条さんの手が握られる。

「つまり連中や魔術師たちは、お前の頭にある核弾頭を手に入れたいってわけなんだな？」　ばくだん

「……うん……」

インデックスさんは、消え入りそうに不明瞭な声で、そう答えた。

「やっぱり、無理だよね……ごめんね……」

だがしかし。

彼女が不用意に、いや本人としてはたぶん予防線のつもりで放ったこの一言が、部屋に残る男子ふたりの目を開けさせることになる。

ついでに、オカルトさんの目も。

――憑霊、情が移ったか

オカルトさんの含み笑いが想像できる念の送り方だ。

こっちもやりかえす。

――ご想像にお任せしますが、あの子と一緒にいれば再戦の機会は増えますよ

――ああ、きさまに言われずとも理解しておる

――少しは血が巡ってきたようではないか

血が巡ってほしくない患部もあるけどな。

とにかくオカルトさんの黙認を得たところで、現実世界に帰ってこよう。

上条さんは胡坐をかいたまま熱血モードだ。

「そんな大事な話、なんで今まで黙ってやがった！」

「……だって、信じてくれると思わなかったし、怖がらせたくなかったし、それに……

あの、嫌われたく、なかったから……」

今、おれに加藤くんの記憶はない。

だが実際、彼がこういう状況に陥ったら、まず上条さんが自分に疑いの目をむけている前提で行動していたはずだ。

おれのが覚えている“加藤くんの記憶の記憶”では、間違いなくそうだった。

そこをクリアしただけでも、インデックスさんは大したものだ。

が。
もちろんそんな言い訳は通用しない。
「ざけんなよテメェ！　舐めたこと言いやがって！」
上条さん怒りの片膝立ち。
ヒッと小さく悲鳴をあげて、インデックスさんが掛布団に隠れる。
おれはクックックと小さな笑い声。
「『必要悪の教会』？　ネセサリウス？　一〇万三〇〇〇冊の魔道書？
確かにとんでもねえ話だったし、聞いた今でも信じられねえ！」
だけどな、と上条さんは一言おいて、
「……たったそれだけなんだろ？」
それはもうばっさりと、彼女の葛藤をぶった切ってみせた。

「見くびってんじゃねえ。たかが一〇万三〇〇〇冊覚えた程度で、気持ち悪いとか言うと思ってんのか？
ここは超能力の街、じゅうぶん非常識な所なんだ。今さら魔術がどうこうなんて聞いた程度で、怖がったり嫌ったりなんかしねえよ。ちったあ俺を信用しやがれ……
人を勝手に値踏みしてんじゃねえぞ」

いい笑顔です上条さん。
ですが

「……上条さん。
おれはまだ下半身不随なんで、先に言っときますが」

「うおっ！　なんだいきなり」

忘れられてたみたいですね。しかし言うべきことは言わないと。

「おれの分まで彼女を元気づけてくれて感謝します。感謝しますが……
局所的な大雨警報。手巾の携帯推奨ですね」

「へ？」

訳わかんねー、と言っている上条さんの後ろで、

ふぇ、と声。

ようやくというべきか、インデックスさんが年相応になった瞬間でした。

「後はお任せします、歩けないので」

「ちょっ、加藤おまえ、腕と首は動いてたよね!?」

「腕力では解決できませんよアレは……」

泣き出したインデックスさんそっちのけで男子ふたりが不毛な言

い合いを始めたところに、折悪しく玄関を開けた月詠先生が爆発し、結局おれが歯を食いしばりつつ今日はじめて立ち上がったのが、月詠先生とインデックスさんへの土下座に続く予備動作の一環だったというのは、はなはだ余談である。

第九話の二　上条当麻、宣言す（後書き）

原作を読み進めていて、イギリス清教側がインデックスをどういうポジションにおいて取り扱っているのか、いまひとつ分からなくなってきた作者です。

手元にずっと置いておきたいわけでもないでしょうし。

伝家の宝刀「捏造設定」が入った場合は、平にご容赦を。

第九話外伝　模範囚たち（前書き）

魔術師コンビのお話です。

第九話外伝　模範囚たち

室内にいる人数の増加で、一気に騒がしくなった古いアパートから数百メートル離れた、雑居ビルの屋上。

そこに、ひとりの男が胡坐をかいていた。

足首まで届く黒いコートに黒い上下。

赤い長髪は伸びるままになり肩に達しているが、紙煙草をくわえた口元をふくめて顔は若々しい。

左手を下ろすと、その手にある双眼鏡で隠されていた眼元があらわになった。

視線の向かう先は変わらない。

右方に人の気配。

「ステイル、インデックスは？」

落ち着いた、若い女性の声だ。

ステイルと呼ばれた黒コートの魔術師は、なじみ深いその声に返答する。

「生きてるよ。やっとまともに動けるようになった」

「彼女に同伴していた少年たちの身元を探りました」

若い女性が、同じ方向を見据えたまま報告する。

魔術師ステイル＝マグヌスは、振り返ることなく質問を返した。

「で、アレの右手はいったい何だった？」

>i21811—2938<

彼の疑問は当然といえる。

魔術師にとって、魔術とは計算式であり、なかば以上に机上の戦争だ。

その前提をぶち壊してくれたのだから。

魔術と言っても、おとぎ話のように便利なものではない。
ただ呪文を唱えれば解決というわけではなく、敵になる、あるいはなったのだろう相手の術式や特徴を予想して、その相手と戦うときだけの魔術を組み上げなければならない。

ありえないことだが、事情を知らないものが不幸にもバトルシーンを見てしまった場合、派手な魔法の撃ちあいにみえるかもしれない。しかし魔術の戦いはむしろ謀略戦というべきであり、両戦う前から勝敗は決まっているのだ。
そうしたすべてを覆し、ただ魔術を“消す”あのガキの右手は、彼にしても納得のいかないものだった。

しかし。

女性――加藤が“認識阻害女”と呼んだ特徴的かつ露出の多い服装の女、神裂火織（かんざきかおり）の答えも、ステイルが期待していたものではない。

「インデックスの防御結界を打ち砕いたとされる少年については、少なくとも魔術師や異能者の類ではない、としか」

「なんだ？　もしかしてアレがただの高校生とでも言うつもりかい？　……やめてくれよ。何の力も持たない素人が『魔女狩りの王（イノケンティウス）』を退けられるほど、世界は優しく創られちゃいない」

何を使うでもなく、ただ憤懣を燃料とするように煙草の先へ点火した十四歳の愛煙家を横目に見つつ、神裂は言葉を続ける。

「そうですが、むしろ問題なのはもうひとり、私と相対した少年の方です」

「というと？」

「本人は偽名を名乗っていたようですが、彼の情報はすぐに集められました。学園都市の専門用語でいう『強能力者（レベル3）』……この街では“エリート予備軍”としての部類に含まれる、遠隔操作能力者（テレキネシスト）とされています」

その答えに、赤毛の魔術師は両眉をつりあげた。

「おいおい、冗談もたいがいにしてくれよ。
『魔女狩りの王』だけならともかく君にケンカを売って無傷で逃げおおせるやつが、この街の“中堅どころ”だなんて信じたくもないね。しかも僕の刻印（ルーン）を盗んで魔力を補うような外道が。

だいたい、それを思いつくほどには魔術の理解があるようなやつが、なぜこの街で科学的超能力なんか学んで、おまけに何の対応策も取られていないんだい？」

彼の『魔女狩りの王』を押しつぶし、あまつさえ股間に蹴りまで入れたあの少年が神裂とも戦っていたことは、ステイルも聞き及んでいる。

なんでも『偶像の理論』を多用し、みずからはいっさい魔力を使わずに魔力変動を引き起こすことで“自働的に”東洋結界を発動させ、その内部でさらに時限式結界を展開する“二重封印”までやってのけたという。

ステイルとしては、あまりお目にかかりたくないタイプだ。

遠距離戦や結界は彼の得意分野だが、研究されていない相手のは好みではない。さらに神裂でさえもなかば強制的に魔法名を名乗らされ、本気でなかったとはいえ彼女の得意技『七閃』を止めるなど、相手は戦術的能力も侮りがたい。

神裂の戦闘能力は、ステイルのそれをはるかにしのぐというのに。

しかし、最大の問題はそこですらない。

“魔術を使えないはずの科学的能力者が魔術戦に生き残った”というその事実が、今は重要だった。

もしも。

もしも、この学園都市で『レベル3』とみなされた以上の能力者がみな彼のような連中だとするならば、それが人数比でこの街の学生全体の一割としても十八万人強が彼と同等の能力をもつ、ということになる。

それが意味する異常性は明らかだ。

ステイルとて三下魔術師ではない。

ただで弱者の評を許さないだけの矜持も実力もある。彼ひとりに壊滅させられた魔術結社が複数あることを考えただけで、その腕を疑う者はいないだろう。

それを思えば、彼レベルの魔術師十八万人に換算される戦力をもつ学園都市――すなわち科学サイドは、魔術サイドに大きく水をあけていることになる。

無視できない事態なのは言うまでもない。

もちろんこの街に潜りこんでいる魔術師、すなわち潜入工作員（エージェント）がそのような報告をしてこない以上、たまたま神裂に当たった能力者が異常ということだろう。

しかし、そんな偶然がありうるのか。

「彼は現に魔術によって結界を張り、私をその中に閉じ込めようとしました。

結界自身に攻撃術式が含まれていたのか単なる時間稼ぎか……というより、術式自身が古すぎて誰も使わないようなものでしたので、すべてにおいて詳細は不明ですが」

「日本の古式結界ねえ。アイツに聞いてみるかい？」

神裂の要領を得ない答えに、ステイルはとある“共通の知人”を話題に上らせる。

「やめましょう。今、危険な行動は控えるべきかと」

そして、その言はすぐに切り捨てられた。

ステイルもその程度のことはわかっている。潜入工作員とみだりに接触するのは、自分たちにとっても彼を監視しているだろう学園都市側にとっても無益だ。

ただ彼は、その“友人”に確認を取りたいレベルの骨董品とみなされる魔術が使われたのかを確認しただけだ。神裂もそれに対し「危険な行動」と答える――質問内容そのものの否定をさけることで、“古式結界”の可能性を認めていた。

神裂は報告を続ける。

「加うるに、学園都市では彼らふたりがそろって喧嘩っ早い、あるいは気弱なダメ学生というカテゴリになっています。公的に分類されている、と言っていいでしょう」

ステイルは煙草を指でつまみ、白煙を前方へ打ちだす。

彼女の示唆するところは、十分理解できていた。

「情報の意図的な封鎖、かな。

しかもインデックスの傷は、魔術で癒したときた。あの東洋魔術のガキが関わってないにしても」

「彼も私と同じ融合型魔術を用いていましたから、純粋なイギリス清教の術式を使えないのでしょう」

「どちらにしても、やつらは単独行動を行うにはまだ弱い。

神裂、この極東には“他にも”魔術組織が存在するのかい？」

ステイルはこの時、インデックスを自分から守り通したふたりについて、日本の地域的魔術結社の支援を受けていると見ていた。
でなければ彼らのような魔術師が、科学で何もかも解決したがる学園都市に潜りこめるはずがない。そういう常識的な判断からきている。

特に“魔力を使わない魔術師”という困った存在については、どんな結社であれ放っておくわけがなかった。
すでにどこかへ加入、あるいは不審死をとげているのが普通だ。

それが大いなる誤りだと、彼はまだ気づかない。

「学園都市で動くとなれば、何人も理事会のアンテナにかかるはずですが」

同僚にそう返答しつつ、神裂きは空を見上げかけて、顎を引きもどす。
全身黒ずくめの神父と、大太刀を携えた白い裾締めTシャツに片足ジーンズの女。
肉眼で、つまり警備ロボットの光学センサーに捉えられた映像を見ても、間違いなく異常なカップルだ。このうえ、はるか上空から常に学園都市を見つめている監視衛星たちにまで情報を与えるわけにはいかない。

「敵戦力は未知数、対してこちらの増援はなし……難しい展開ですね」

「いつものことだよ」

「――ところで」

神裂が、珍しくステイルに本題から関係のない話題をふった。

「なんだい」

「私を襲撃したあの少年と、インデックスを守った少年のあいだに、何かつながりがあると思いますか？」

ステイルの煙草をつまむ手が止まった。

「……そういう言い方をするのなら、否定する根拠があるんだろう？」

問い返した少年魔術師の方を見ないまま、うなずく神裂。

「一戦交えた時のことですが……彼は私に、魔法名ではなく“ありよう”と称するものを名乗り、私の魔法名についても日本史の観点から批判的指摘を加えました」

「なんだと！？」

ステイルが声と顔の両方に感情を叩きだした。

理由がある。

魔法名はただのコードネームではない。真の名を相手に知られることを防ぐ役割はもちろんあるが、そもそも魔術において自らの『名称』はとても重視される。

自らの信条や位階、戦法、覚悟などをあらかじめ相手に知らしめる役割も持っており、この宣言を行うまでは魔術戦と言えないほどのものだ。たとえば今顔をゆがめたステイルにとっては、ほとんど“殺し名”と同義でさえある。

これを名乗らないのは、近代魔術師（アドバンスドウィザード）と隔たりをもつ地域魔術師。

そして名実の相違がどうであっても、他人の魔法名に悪意をもって講釈するなどという最大級の侮辱を行って平然としている以上、西洋魔術の何たるかすら知らないといえる。

現在、たとえ魔術結社であっても帝国主義の時代をへて、近代西洋魔術がスタンダードになっている。十字教系に限らず近代的結社に所属していれば、万一のため西洋風の魔法名を決めておく魔術師もいるほどだ。

だが、その少年はどちらも無視したという。

と、いうことは。

「君に当たった彼は、一匹狼なのか？」

「あるいは。それに戦闘中も、ただ私が学園都市に潜入したから迎撃した、というような口ぶりでした」

「……彼の雇い主は学園都市かもしれない、か」

さらに複雑化してきた状況に、ステイルは頭を垂れる。

「どっちにしろ、僕たちはそれぞれ一度ずつ戦っている。それに僕は、オハナシはあまり得意ではない。できることなら同じ日本式の魔術師として、神裂、君に行ってもらいたいのが僕の意見だけどね」

そう言いつつ、ステイルはまた煙を口から前方へと放射する。

神裂は彼と同じ方向を見据えながら、囁くように答えた。

「相手を分断できたところで、情報がないことには変わりありません。

それにステイル、あなたのルーンは防水性において致命的な欠点を指摘された、と聞いていますが」

「その点は補強済みだ。ルーンはすべてラミネート加工した。同じ手は使わせない」

いまいましげな返事と同時に、ステイルは黒コートの袖からルーンが刻まれたカードを何十枚も振りだした。

カードが列をなして空中を舞い、彼の手に集まる。

「今度は建物のみならず、周囲二キロの空間に渡って結界を刻む…

…六〇時間ほどで準備を終えるよ」

「それでは、その間に私はあの少年たち、そして彼らと接触した疑いのある魔術組織に関する情報を集めます。最終的に必要と判断した場合は、少年たちに直接交渉を試みます」

「ああ」

生返事ともとれるステイルの反応に、神裂は不満を覚えない。

宣言しておいてなんだが、調査期間が一日から三日半に増えたところで有用な新情報を引き出せるとは思わなかったし、もし学園都市側に強攻をかけるとなれば、物騒な反応が返ってくるだけと予想できている。

自分でも、期待はしていなかった。

「……楽しそうだよね」

双眼鏡を覗きこんでいたステイルが呟いた。

神裂はステイルの後ろから、先ほどまで自分が向いていた方角へ再び視線を向ける。

常識では裸眼で何が見えることもないはずだが、彼女は世界に二〇人といない十字教の『聖人』であり、その身体能力は並ではなかった。視力にあっては、検査基準を延長した値になおせば“８．０”にもなる。

視線の先には、四人がひしめく古いアパートがあった。

焼き魚に野菜のお浸し、茶碗に山盛りの白米。

日本ではおおむねどこでも見られる四人前の昼食をちゃぶ台にところ狭しと並び、過剰に恐縮するふたりの学生と、すなおに喜ぶ白い修道衣の少女がその周りを囲んでいる。

その少女は、満面に笑顔を浮かべていた。

箸が転がっては笑い、ツンツン頭の学生が文句をたれては笑い、顎の長い学生が脇腹を押さえ泡を吹いて倒れこんでも笑う。

ツンツン頭が慌てだしても、まだ少女は笑っていた。

屋上のふたりとは、まるで対照的に。

「本当に、楽しそうだ。あの子はいつでも楽しそうに生きている……僕たちは、一体いつまでアレを引き裂き続ければいいのかな」

「複雑な気持ちですか？　“かつて、あの場所にいたあなたとしては”」

「……それこそまさに“いつものことだよ”」

第九話外伝　模範囚たち（後書き）

約物については、セリフとともに位置関係を変更させていただきました。
このＳＳは、セリフはアニメ準拠＋捏造です。

とにかく、これで巻三は終了となります。
引き続き、評価・感想などいただければ幸いです。

第十話の一　加藤重兵衛（前書き）

「覚めることのない夢は、夢なんかじゃなく、現実だっていうこと……」

――勇嶺薫『夢迷宮』

第十話の一　加藤重兵衛

……あれ？　またオカルトさんの夢？
今、月詠先生に昼飯をごちそうになろうとしていたはずだが……

おれの疑問に答えは示されず、また歴史映画が始まる。

ひとりの男が、山の中腹にたたずんでいる。
まだこの時期には珍しい丸筒袖（ようふく）の上に陣羽織をつけ、総髪の髪は五分にわけられており、前髪から覗いて見える目元は涼しく、口は一文字に結ばれている。
見るからに精悍、という言葉が似合う男だ。

字幕。

通名、内藤隼人（ないとうはやと）。
元新撰組副長。徳川幕府陸軍伝習隊（でんしゅうたい）参謀、兼ねて“新選隊”隊長。
土方歳三（ひじかたとしぞう）。

その彼を、強引に会津城へ引き戻した男がいた。
もともとは会津藩の学校奉行だったのが、薩摩・長門その他連合軍がしかけてきた内乱に伴って急激な出世をとげ、今では家老になっている。会津も戦時体制というわけだった。

時は慶応四年。
鳥羽・伏見で始まったこの国の未来を決める内戦は、ついに会津にまで押し寄せようとしていた。

「会津の武士は体面を重んじる。死ぬことが名誉となるなら、躊躇（ちゅうちょ）なく死ねるのだ」

「古くさいな」

城内の一室。

軍議の席で家老が発した大声を、土方さんは苦笑で捨てた。

実際、上野の戦いで薩長軍が見せた火力戦は、もはや日本刀や武士道で覆せるものではない。

しかし、家老は真剣だ。

「われらとて、いたずらに死ぬことを望むものではない。できるだけ生きのびて、西軍を叩きたい。

そこでだが、土方君に大笑いされるのを覚悟の上で、さらに古めかしい戦法を、土蔵のほこりをはたいて出してくることにした。

――八門遁甲（はちもんとんこう）の術を」

「なんだと！　バカいうな。

三国志のいくさじゃあるまいし、今は大砲の時代だぞ」

土方さんが驚くのも無理はない。

八門遁甲とは、要するにオカルトさんがあの神裂相手に使っていたまじないそのものだ。土方さんにも、たしか“孔明の罠”の一種だったな、という程度の知識しかない。

だが、家老の方はあくまでも真面目だった。土方さんの驚きぶりを冷たくみつめながら、話しつづける。

「古来の兵法を馬鹿にしたものではない。あきらかに兵力不利というときは。

われらは策士をひとり雇い入れた。今となってはまことに珍しい、

八門遁甲を使える術師だ」

「だれだ、そんな時代錯誤の野郎は？」

「加藤重兵衛（かとうじゅうべえ）という。幕府の直参（はたもと）だ。江戸から、会津兵についてやってきた」

家老は返事をすると、その部屋に本人を呼んだ。手回しよく、先に控室へ通しておいたらしい。

ふすまが開き、板張りの廊下で正座する男が、一礼した。

「こちらへまいられよ、加藤氏」

家老が声をかけ、男が顔をあげる。

青白く細長い顔。

丸く大きな額に浮かぶ青筋。

吊り上った細い眉の下であやしく光る、落ちくぼんではいるが大きな目。

とがった鼻の両脇につきでた頬骨。

……予想通りというかなんというか。

「加藤にござる。見知りおかれたい。

つい数日前より、会津若松城に参内いたしております」

土方さんをちらりと見たあと、座敷に上がって末席に着く加藤重兵衛。

もとい、旧オカルトさんでした。

場面転換。

いささか時計の針が進み、奥羽越列藩同盟はすでに崩壊しつつあるころ。

久保田藩秋田城の下町はずれに、せまい屋敷がある。

掲げられた扁額には『雷風義塾（らいふうぎじゅく）』。

ここは神道のなかでも一風かわった教義をくりだしている平田学派の支部道場であり、幕末日本でも有数のスパイセンターでもある。

この当時、雷風義塾と同レベルの情報を収集できる勢力は少ない。

中でも日本の組織となると、平田学派本部の氣吹廼舎（いぶきのや）をのぞけば伊勢神宮や本願寺など、トップダウン型の宗教団体だけだった。

「なんだと！」

屋敷の中に、驚きというより怒りの叫びがひとつ。
声を上げたのは、場に三人いるうち上級の武士だ。
彼が怒りだした理由をかいつまんで説明すると、次のようになる。

字幕。

ひとつの地域を治めるにあたって、古代の人々は霊的な影響にかかわらず、行政能力を地域の中心に置くべきとわかっていた。
そして地域を統一し治めるためには、まず単位を統一しなければならない。
場所ごとに長さや重さの基準が違うと、一般人も政府も面倒だ。

というわけで、国を改革するときは単位系を定めなおすべし、という先入観があった。平田派が崇拝している平将門も、蜂起の直後に単位を新たにしている。
そして“将門単位系”の原器だった“瑠璃尺”という定規が、会津のある寺に収められていたのだが――

その瑠璃尺が、薩長軍に奪われたというのだ。
しかも、その役割うんぬんではなく、ただ縁起物として。

国が定めた単位系と暦法、つまり空間と時間を支配することで古代の王朝は民衆を統制してきたのだが、これを見抜いたのが平田学派の祖である平田篤胤だった。
このため彼は天文、地理、単位系の正確な把握と現状にあった修正を論じ、結果として江戸を追われ、亡くなった。

だが、その影響力はいまだ大きい。
彼の娘おちょうさんは、婿養子の平田銕胤とともに平田学派ネットワークの維持発展を続けているし、今ここで憤慨する上級武士を落ち着かせようとしている学者風の男も、平田さんの弟子だったことがある。

「忘れるな。幕府が天文、地理、そして暦の抜本的改革に着手し、高橋作左衛門や伊能三治郎に暦や地図のつくり直しを命じたのも、篤胤大人と同じような危機感がきっかけだったにちがいない。
しかし、幕府や薩長軍は西洋の科学技術を利用できても、古代の神々の叡智までは活用できぬ。これを今の世に活用できるのは――」

「平田一派をおいて他におらん」

学者のことばを、三人目の下級武士がつないだ。

ちなみに学者があげたふたりは、日本史上の有名人だ。

高橋至時（たかはしよしとき）は、天文学をきわめて寛政暦という暦をつくりあげた“時間の修正者”。

伊能忠敬（いのうただたか）はもちろん、世界的に見ても精密すぎる、“現在の”国土地理院も一部参考にしていると言われるあの『大日本沿海輿地全図』をつくりあげた“空間の修正者”だ。

――伊能の場合、地図に呪術的な意味まで備えおったがな

とは、オカルトさんの解説。

本当にそうなのかは知らないが、とにかく幕府はこうやって地理的・時間的な現状認識を改めることで対策をとり、内部的な延命をはかっていた。

しかし列強や薩長同盟という外部要因で、今は滅亡の危機に瀕しているわけだ。

もはや三人の意志は一致していた。

残るふたりを代弁するように、上級武士がまず叫ぶ。

『行こう！　会津へ！』

だが、そのころ。
陥落したばかりの会津若松に、凶報がもたらされていた。

「なんだと!?」

字幕。
奇しくも秋田の侍と同じセリフを吐いたのは、官軍――つまり若松を占領した薩長同盟軍の参謀。
臨時作戦本部として借り上げた寺の本堂で、伝令を震え上がらせた。

「繰り返せ」

「は、ははっ！
申し上げます！　長岡表への輜重(しちょう)段列に襲撃あり、段列は壊滅いたしました！」

「壊滅だと？　運んでいた食糧は、作戦命令書は、資金は！？」

「すべて奪われましてございます……」

頭を下げる伝令に、参謀は怒りを抑えきれない。

持ちこんだばかりの西洋机に握りこぶしを叩きつけ、吼える。

「そんなバカな！

もはや会津はわれわれの勢力圏。旧幕臣の残党だけで、官軍の輜重段列をまるごと食い殺せるものか！」

「しかし……」

伝令が言いよどむ。

「しかし、なんだ！」

「生存者の伝えるに、賊は化けもの、いえ小鬼を複数使役して、段列を襲ったとのこと。妖術や幻覚の心得ありと考えます！」

「鬼、だと……？」

参謀は住職が使っていた座布団に尻を落ち着け、腕を組んだ。

ぎりぎりと口から嫌な音が漏れる。

彼は伝令を下がらせるのも忘れて、この理不尽な報告の裏にあるものを読み取ろうとしていた。この時代に、鬼などと兵に言わせる相手の正体はなんなのか。いくら伝統墨守の旧幕府勢とはいえ、そこまで古くさい戦法をなぜとるのか。

そもそも理不尽と言えば、奪われた積み荷にふくまれるあの瑠璃尺も理不尽なのだが、戦局への影響に気を取られた参謀はそのことをきれいに忘れていた。

「おもしろい戦いだった」

首のない新撰組隊士の白くなった手首を踏みつけながら、五稜郭（ごりょうかく）の土塁を踏みしめて旧オカルトさんが嘲（わら）った。

「おれの送りこんだ死者の兵を、よく倒したものだな。たいていは、首のない死体を見て乱心し、死者が襲ってくる妄想にとらわれるところなのだが――」

そのとき、土方さんがようやく言葉をとりもどした。

「外道！　血迷いおって！」

だが、そう叫ぶ土方さんサイドを見ても、なかなかに怪しい光景だ。

字幕。

土方さんは旧オカルトさんとともに幕府軍別働隊へ参加していたが、さんざん青森近辺を引っぱりまわされたうえに“闇の内裏”なるものの建設工事につきあわされ、つまりは旧オカルトさんも幕府をつぶす気だと知って隊を離脱、徳川海軍が逃げこんだ箱館（はこだて）五稜郭へ合流していた。

いわゆる蝦夷（えぞ）共和国であり、土方さんにはそこで陸軍奉行並――陸軍参謀総長の役職が与えられている。

しかし。

その五稜郭に、毎日毎夜のごとく怪奇現象が頻発する。

目にみえない何者かが、兵馬を通り魔のように襲ってくるのだ。

これでは薩長軍がやってくる前に全滅かと思われたところで、旧オカルトさんが狙っていた“公定単位系”による概念武装と防御法が示された。

つまり“正しい長さ”と“正しい時間”による退魔法。

それが土方さんの目の前にある、“正確に等間隔で並んだ柱とし め縄”であり、“回転をつづける灯籠”だ。

発想は“逢魔ガ刻（おうまがとき）”の逆といえる。

魔物が出てくる“死角”や“スキマ”をなくせば、霊も現世には出てこられない。出てきてもどこかへ通り抜けることはできない、という理屈だ。

実際、回り灯籠によって「亡霊」の接近が探知され、彼らが柱の列にぶつかって動きが止まると、生身の五稜郭兵たちも敵を次々に切り消すことができていた。

魔を封じられた亡霊たちは“ただの敵兵”になりさがったわけである。

……本当に、この夢シリーズは呪術関係が多いな。

とにかく、そこで真打ち登場とばかりに姿を現したのが、土方さんにとっても単なる敵以上の存在となった、旧オカルトさんなのだ。

土方さんが問いかける。

「なぜ、われわれを追い出そうとするのだ。五稜郭を奪おうとする理由をいえ！」

旧オカルトさんは、静かな声で答えた。

「考えてみれば……おれたちは闘うあいだがらではない……おれの望みは、おぬしらの望みでもあるのだからな」

「バカいうな！　おれときさまのどこに共通するところがある？」

激しく首を振る土方さんを見ながら、旧オカルトさんはつぶやき続ける。

「おれは怨霊の国を作る。この国は、多くの怨霊を埋めた呪わしい地の上に築かれる。

すでにこの国の内裏は陸奥に築かれた。あとはこの国の砦だ。この世を支配するための力の本拠地だ。怨霊は、地下で逆襲したがっている」

「それがどうした。おれと、どういう関係がある？」

「新選組も、その怨霊の仲間だからよ。
昔からの幕臣どもは、この蝦夷地に新しい幕府を作りあげんとしている。だがきさまら新選組は、もはや存在しない“昔の幕府”の怨霊として戦っているにすぎん！」

反論は出なかった。
図星をつかれた。
土方さんは実際、江戸幕府へむけた感情で参戦していた。徳川の世を続けることに関心を持っていない。

答えられない土方さんを見て、旧オカルトさんがさらに続けた。

「……だから、おれが五稜郭に何を築きたいのか、わかるだろう。
冥府の王城だ。ここに、冥府と通じあう俗世の地獄を造りあげる。
地獄の風が全国に流れ、日本はやがて枯れ、死滅する。こうして冥府の国ができあがる。すなわち、怨霊が奪回せる日本がな」

「血迷うな、加藤！」

土方さんが立ち直って反撃するが、旧オカルトさんは嘲笑うだけだ。

「フン、血迷うなときたか。土方、きさまはどうなのだ！　おぬし、死ぬ気だろう。この地に崇り続けるつもりだろう。誠の旗はあっても、それを立てる国がなくなったことを悟ったからにはな」

「違う！　誠の国は――新しい新選組は、異国に立てる。商人スネルが募る渡米移民とともに、会津の若者たちと――」

「言い訳だな。おぬし自身はこの地に崇りつづける気だ」

「待て、加藤！」

刀を持てば無双のはずが、舌戦で劣勢になってゆく土方さん。見かねたのか、この呪術的な陣を組んだ幕臣勢から横やりが入った。

「加藤、いっておこう。土方さんがどうであれ、きさまと手を組むいわれはない。去れ。ここは怨霊の宮殿ではない！」

「笑わせるな！　この国がいかに多くの怨霊を生みだしてきたか、いかに罪深い国であるか、知っておろう」

旧オカルトさんが叩きつけた反論に、しかし発言者はにやりと笑う。

「怨霊の国だというんなら、怨霊に鎮まってもらうしかない。おれたち生者がいればこそ、怨霊は鎮まれるのだからさ」

「わかった。ならば――
いでよ、怨霊よ！」

旧オカルトさんが叫んだ刹那。
五稜郭の地面が揺さぶられ、回り灯籠がひっくり返って灯が消えた。
見えない何かが、四方から急速に迫ってくる。
暗転。

そのすぐ後。
五稜郭が木々に隠れた、箱館のとある丘の上に、旧オカルトさんはいた。

「――日本を滅ぼさねばならぬ理由が、旗本であったそなたのどこにある！？」

縄を引かれつつ叫んだのは平田篤胤の娘、おちょうさん。
彼女は雷雲義塾から連絡を受けて陸奥にとんできたのだが、陸奥の“闇の内裏”で旧オカルトさんに捕まり、巫女の役割を押しつけられていた。
今はそれほどいい扱いではないが、旧オカルトさんは彼女を平田派への撒き餌にしようとしている。
……ユカリさんといい、毎度やることが単純だ。

しかし行動パターンはともかく、その問いはシリアス。
そしてオカルトさんもシリアスに返す。

「ふざけるな、おちょう！
なにが日本だ？　大和心だ？　惟神道（かんながらのみち）だ？

笑わせるな！　そんな純粋な連中が、いつこの国にいたというんだ？
この島はな、異国から流れついた者どもの最後の栖（すみか）だった。この島では、人々は孤立を守るのではなくたがいに混じりあうことで子孫を栄えさせた。

それを、きさまら大和の政権が潰した。
ことごとく抹殺したのだ！」

「ちがう！」

と、おちょうさんが反論。

「――そうではない。加藤、大和には、はじめから神ながらの知恵がありました。天然自然の真理のことです。あるがまま、理が直に貫いており、清らかな――」

そこまで言ったとき、旧オカルトさんが思いきりビンタを張った。おちょうさんが血を吹く。外道なのは前世からか。

「黙れ！　話にならぬ！
自然は、確かに真理を教えるかもしれん。が、世の中は人がつくるものよ。人は私情にうごかされ、敵意と怨念が生じる。その怨念がついに自然をも歪めるとき、この国は破滅するのだ！」

旧オカルトさんはそこまで一息に叫んで、おちょうさんを蹴りつけ、そばに控えた黒装束の男たちに命じた。
彼に従う子鬼どもだ。

「この女を木に吊り下げろ！　囮（おとり）だ。
平田一派も何もかも、みなここへ集まってくる」

結論から言おう。

旧オカルトさんの言うとおり、雷雲義塾の三人組もおちょうさんの旦那の銕胤さんも、本当にその場へ集まってきた。

そして彼らは、新九郎さんが言っていた“反魂の術”を実現し、そのとき開いた“黄泉（よみ）の扉”の中へと旧オカルトさんを落としこむことに成功した。

要するに、旧オカルトさんはいかにもオカルトかつ古典物理学的な方法で、平田一味に殺されたのだ。

この部分を詳しく夢で再生しなかったのは、夢の目的がオカルトさんの自分語りだからという以上に、このシーンが歴代オカルトさんにとって黒歴史だったからだろう。

他にもどんなシーンが省略されているか、知れたものではない。

ともあれ、このつまらない支離滅裂な夢で大事なことはふたつ。
まず旧オカルトさんが、一度黄泉へ下ったということ。
そして彼、あるいはその意識を引きつぐ者が“黄泉還(よみがえ)った”ということだ。

つまり旧オカルトさんの魂、すなわち固有の神経伝達パターンは少なくとも一度、日本の心霊学者が“黄泉”と呼ぶ電磁場へ落としこまれており、そこで“黄泉の水に洗われた”――有機的に初期化された。

そして、その“初期化”によって削除されたはずの怨念すなわちウイルスプログラムが、現実には保存されていたということだ。

どこに?

決まっている。
五稜郭に来なかった怨霊のところへだ。

そして――
何者かが、闇の中で目覚めた。

第十話の一　加藤重兵衛（後書き）

注…

『八門遁甲』

遁甲盤とよばれる式占盤、あるいは係数対応式（遁甲局数）によって方位の吉凶を占う“奇門遁甲”のうち、八門方位を重視する計算方法のこと。地形を利用し、この法則を強引に現実世界へ当てはめる呪術が、“オカルトさん”が神裂に使用した八門陣である。

ここでは薩長軍を同じ八門陣へ陥れ、会津戦争の時間稼ぎを実行しようとしている。

『公定単位系』

国が決めたいくつかの基本単位と、それを基にした組立単位の集合。これを全国で統一しておかないと、土地の測量から租税までめちゃくちゃになる。

アメリカに行って「マイル？　ガロン？　カ氏温度？」と混乱した人は少なくないはず。

第十話の二　加藤保憲（前書き）

「全世界の斗う人々に連帯の挨拶を送る」

――東京大学全学共闘会議

第十話の二　加藤保憲

数年前から見ていた、脳内＝現オカルトさんの時代まで戻ってきた。

時は明治四十年。
大蔵省敷地内、御手洗池（みたらしいけ）。

オカルトさんと夢に出てくる彼の被害者たちとの縁は、ここで始まった。

明かりがない夜中。
手探りで首元を押さえて、ぜいぜいと息をつく青年がいる。
今まで鋼鉄の腕に押さえられ、呼吸もままならなかったことを思えば当然だろう。
ボタンダウンを第一まで留めた上にはチョッキ、下はスラックスという、時代を考えると気楽な服装だ。

字幕。
大蔵省官吏、姓は辰宮（たつみや）、名は洋一郎（よういちろう）。
ユカリさんの兄、ケイコさんの夫だ。

「これを持っておれ」

真っ暗な夜の闇の向こうから、底冷えする声が届く。
同時に、白い小さな何かが辰宮さんに投げかけられた。あわてて受け取り、白い手袋と確認した辰宮さんに、再び声。

「甲のところをよく見ろ。それがきさまを護ってくれる」

言われるまま、彼は裏返しになっていた手袋を元に戻す。
すると白い手袋に、墨で黒く星形の紋が描かれていた。

「五芒の星ですか？　少尉がこんなまじないを？
今夜の儀式といい、なぜです、なぜなのです？」

「きさまは大蔵省派遣の東京市臨時市区改正局員ではないか。今夜のことは、いわば公務といってよい」

「すると少尉は、うす気味わるい首塚の上で男同士ふたり抱き合っ

て一晩を過ごすことが、帝都改造の職務の一部だといわれるのですか？」

「その通り。

今夜はきさまを依童（よりわら）に使って、大蔵省に祟りをなす亡霊がとり憑いたあの塚で、帝都改造の障害となる邪霊を呼び出そうとしたまでだ」

字幕。

この当時、大蔵省の祟りはかなり現実味のある噂だった。

役所の名前と実体ができてから、すでに大蔵省の火災事故は数えきれない。紙幣を作る印刷局でも何度か大火があり、身を挺して新札の貯蔵庫を守った英雄の話ができるほどだ。

その原因とされたのが、ふたりが今夜しのびこんで妖気をまとう蛙に金縛りをうけるという異様な体験をした塚、通称“首塚”だったのだ。

少尉と呼ばれるあたり、相手の男は軍人らしい。

「ヨリワラ？」

「俗な言葉でいえば、巫女のことだ。きさまに憑きものを降ろそうとしたまでの話だ。

夜が明けたら、すべてを忘れることだな」

聞きなれない言葉に問い返した辰宮さんは、しかし冷たく命令を突きだされた。
いったいこいつは何なのだ。だいたいわかるけど。
辰宮さんは、言われてこれまでこの軍人相手に貯めてきたものが爆発したのか、いきなり怒鳴りだした。

「あなたは鬼だ！　鬼だ！
何も知らないわたしをこんな危険な神降ろしに引っぱりこむなんて！」

「鬼か……フフ、たしかに」

だが効果はない。相手の軍人は冷たくあざわらうだけだ。

字幕。
陸軍少尉、加藤保憲（かとうやすのり）。

「鬼のあなたが戦いをしかけたその邪霊というのは、いったい何者だったのです。
教えてくださる義務がある、あなたには！」

長い顔の軍人――オカルトさんは、詰め寄られて意味ありげに笑った。

「タ・イ・ラ・ノ・マ・サ・カ・ド！！」

＞i233346－2938＜

字幕。

このころ、東京市臨時市区改正計画というものがあった。

むかし江戸と呼ばれた町を西洋風の近代都市につくりかえ、不平等条約などを押しつけてくる欧米列強の人々にその威容を見せつけて外交の道具にしたい政府と、ごみごみした下町どころか貧民窟をどうにか区画整理して、一国の首都にふさわしい行政区画と住環境をととのえたい市当局が考えた都市計画のことだ。

日露戦争後にこの計画は実現へと動きはじめ、財界の協力もあって“帝都改造計画”にまで発展していった。

その計画メンバーの一員として、財務の立場から意見を出すために大蔵省の辰宮さん、国防上の視点で注文をつけるために陸軍の参謀が呼ばれ、その参謀の随員としてオカルトさんも計画会議に参加していた。

そこでオカルトさんは、ユカリさんを知ることになる。

三年間ユカリさんを狙い続け、ついに誘拐したまではよかったが、結局オカルトさんは平将門の“霊”を呼び出せなかったうえ、ユカリさんは奪い返された。

そこでオカルトさんは、多少強引にでも将門の霊を現世に解き放とうと考えはじめる。

将門は庶民の英雄になり、神として神社に祭られた。

つまり守護霊、はっきり言えば地縛霊だ。

これを叩き起こすには文字どおり土地を叩く、つまり地震しかない。それも霊に関係のあることだから、霊的エネルギーの爆発が地盤に影響するという形が一番いい。

その“霊的エネルギー”が何なのか、というおれのつっこみはともかく、オカルトさんは東京で中国・朝鮮（併合されて韓国から名前が変わった）の反日活動家をまとめあげ、テロを連続して行わせるとともに、自分は中国にわたって東京の直下をつらぬく霊的な道――エネルギーの流れをさかのぼっていった。

このエネルギーの流れを龍脈、または生き物あつかいして地竜という。

大連。

ロシア語で“最果（ダールヌィー）”を意味する地名を日本が流用したこの土地こそ、かつて百済のアスヤ姫が上陸し、上道稚（かみつみち）さん（の）（わか）が生まれた三山の村が成長した姿だった。

今は日露戦争あとの条約で、日本軍が駐屯している。

そしてオカルトさんは今、この地の盗賊とともに爆弾テロを連続させていた。

しかしその方法が納得されているとは言いがたい。

今もまた、馬にまたがった髭づらの男が、彼に問いかける。

「カトー、おまえのやり方にはまだ合点いかない。われわれは日本軍を撃退できれば満点だ。だが、おまえはいつも余分の爆弾を埋めて爆発させる。なぜだ？」

「話しても無駄だ。これは日本の首府東京を破壊するための呪術なのだ」

「カトー、お前はいつも魔術を使う」

「バカな！　魔術ではない。自分が使うのは、自然の破壊力を味方につける合理的な兵法なのだ」

軍人口調がまだ残っているが、しかし彼はもう日本の軍人ではない。
満州の軍閥と手を結んで、日本軍の施設破壊活動の指揮に当たっていた。

「本当の目的はなんだ、カトー。おまえはわれわれの味方なのか？」

「目的はすでに言ったろう。帝都東京を破壊することだ」

「東京を？」

「そうだ。おまえたちは風水を知っておるだろう？
その風水によればな、ここ大連から走る霊力の流れは、東南に下って海に出で、さらに日本をつらぬいて太平洋の海底へ落ち込んでいる。そしてこの風水の龍は、大連を尾とし、東京を頭としているのだ――」

「大地の龍か。それならわれわれも信仰している。龍の威力にはあらがえぬ」

「だからこそ自分は、巨龍の尾にあたるこの地点で爆破を繰り返し、龍脈の流れを一気に貫通させる助力を与えているのだ。
やがて東京は巨大な地揺れに襲われ、海中へ没する」

「……カトー、おまえは日本人ではないのか？」

「今となっては国籍など無意味だ。
自分は韓（から）と唐（から）、また水人（みなと）や土蜘蛛（つちぐも）の怨念を一身に担った化現なのだ！」

オカルトさんが唇の両端をつりあげて嗤う。
正直怖い。でも痛い。おれの黒歴史がうずいて痛い。

「なぜだ、なぜ、おまえは――」

「訊くな！　いずれ判る」

その意味を、馬賊連中が理解していたのかは分からない。
だが、日本人はすぐ理解するはめになった。

この年、九月一日。
神奈川県直下を震源として東京をはじめ関東一円に大惨事をもたらした地震は、のちに“関東大震災”と呼ばれることになる。

走馬灯のように、早送りのシーンのように、切り取られた場面が視界を流れる。

崩壊する浅草十二階。

陸軍の戒厳令。

甘粕正彦（あまかすまさひこ）事件と軍法会議。

辰宮さんと目方（めかた）恵子（けいこ）――ケイコさんの結婚。

寝たきりのユカリさんを世話するケイコさんと、彼女を「おばさま」と呼んでなついたユカリさんの娘ユキコさん。

仕事でろくに帰宅しない辰宮さんのかわりに、何かにつけて家へと顔をだす“まだこの時は”レベル０のナルタキさん。

そして、オカルトさんの再起動。

「フフフ……おまえが辰宮恵子か」

オカルトさんが笑う。

いつものとおり、粘ついているくせに冷気を含んだ声。
ただし、その口は彼のものではない。
辰宮家の座敷に横たわるユカリさんが、男の声を出していた。

「加藤保憲ですね」

凛とした女の声。
ケイコさんは、ユカリさんがとりつかれた時のショックで気を失ったユキコさんを抱いたまま、視線をユカリさんに刺している。
ユカリさんの唇がねじれ、体全体がかしぐ。
いや、そのまま浮き上がって足裏を上に向けた。
今、彼女は“天井に立っている”。

「なにゆえ辰宮家に嫁いできた」

グルン、とユカリさんの頭が一八〇度左に回った。
しかしケイコさんは声ひとつあげない。

「あなたと対決するため」

「フッ、フフフ……
将門のような祟り神が復讐をわすれ、それどころか帝都を滅ぼさんとするおれに討手をさしむけてくるとはなぁ。

おれの邪魔をするやつは……殺す！！」

「どうぞ。あなたが現れてくれれば手間が省けます」

「フ、フ、ハハハ……」

ユカリさんの眼の奥にいるだろう長身の男を睨みつづけるケイコさん。

ユカリさんの口を閉じたまま、笑い続けるオカルトさん。

両者の緊張は、玄関を開ける音で切れた。

まさに糸が断たれたように、座敷へユカリさんが落下する。

ユキコさんは膨れ上がる不安をとにかく解消してもらおうとケイコさんを見上げ、そのケイコさんは表情から角を取って微笑んだ。

「雪子さん、ちょっとここで待っていてね。
お父さんをお迎えしなくちゃ」

オカルトさんは当座の目標を切りかえ、ケイコさんの奪取に成功した。

その後はまた大連に戻り、日本の遅すぎた帝国主義を嘲笑うように満州でゲリラ活動を展開する。

ケイコさんに色目を使った青年将校をわざわざ罠にはめてソ連軍

人に殺させたところを見ると、それなりに情を通じてはいたらしい。

戦後。

あの加藤彌二郎（かとうやじろう）の伝説をケイコさんが語り、彼女が渡した鶴笛によって魂を吸いとられたユカリさんが亡くなってから二〇年余り。

オカルトさんの記憶にひとつ、興味を引かれるエピソードがあった。

日本の学生運動を“アメリカ帝国主義の非公式植民地である日本で起きた民族解放闘争”だと言って来日したセルゲイ＝ドルジェフという車いすの超能力者が、おれの能力の上位互換だったのだ。

名前がロシア人、どうみてもソ連の援助なのだが、まあいい。

彼の能力名は『邪視魔眼（イービルアイ）』。

厨二乙と言いたくなるが、これが本当なのだ。
このジジイは実際に目からビームを出して、それに当たったものを衝撃ではねとばし、また高温で溶かすことができる。
とはいえ、ビームを目から出すのは単純に目がレンズ構造だからしい。両目の焦点が合わないとビームも強力にならないし、逆に体のどこからでも弱い力場なら出せる。

だが、車いすに乗ったビーム砲。射撃体勢に入るまでの速度は御坂さんを上回るんじゃないだろうか。

ドルジェフの本名はわからない。
十九世紀ロシアにゲオルギー＝グルジエフという神秘主義者がいたが関連性は不明。彼は、中央アジアを放浪している時期にドルジェフと名乗ったそうだ。
本人が中央アジアで修行していた時の名はイスケンデル＝ルーソウル。
チベットでの名はガワン＝ロサン＝ドルジェハ。
親がつけた名は永遠に謎のままだ。

とにかく彼はイスラムの密教というべきスーフィーの行者から指導を受け、アラブ系民間信仰のひとつ『邪視魔眼』を身につけた。
これはまさに物理的な“眼力”と呼ぶべきもので、その眼光自体を防ぐには高度な結界や魔術が必要になる。さらに、眼光から生まれる衝撃波や熱もただの物理現象ではなく、科学的には対抗できない。

ただし邪視の源である“目”を攻撃するとなると、話は別だ。

ドルジェフは視覚障害者ではない。つまり彼の目は、邪視を放つと同時に物を見ている器官でもある。

とはいえ、単純に目つぶしなど試みようものなら砂や指ごと邪視で溶かされてしまう。

ただ、彼の視覚情報に対する認識は、ごく常識的なものだ。

つまりどういうことか。

彼が“思わず目を背けたくなるような”、あるいは比喩的表現において“目が潰れるほど醜い”ものを見せればいい。

言霊効果を発揮する東洋系魔術と併用すれば、さらに威力が増す。

「惠子！！」

オカルトさんが叫んだ。

場所は高田馬場駅前。

一九六八年一〇月二一日、国際反戦デーに行われた日米安全保障

条約の延長に反対する学生デモ、だったはずが今ではただの暴徒の群れと機動隊との血みどろの戦場となっている、その一角で。

日本政府の転覆をねらうドルジェフと、自衛隊員として密かに彼を止める任務を負っていたオカルトさんも、多くの命と機材と燃料を消費し、彼らなりの死闘を続けていた。

そして、その戦場に乱入した相馬俤神社（そうまおもかげ）の巫女、ケイコさんも。

「グッ！！」

加藤相手には笑うだけだったドルジェフが、喉を詰まらせたような声を上げる。

そこには鬼女がいた。

逆立つ髪が天を突き、黒く隈取りした目が輝き、耳まで紅を引かれて傍目には裂けた口がカッと開かれた。

片方の肩を遠山の金さんのようにはだけ、衣と同じ紫色の帯を押し下げ胸をさらけ出している。

ドルジェフが不快感に顔をゆがめた。

だしぬけに、肥えた老超能力者が足元に白い光を吹きつけた。この光を両目から発することで、機動隊や加藤を押し飛ばしてきたのだ。

ドルジェフは車椅子から立ち上がると、数歩進む間に両手を空へつきあげ、目から黄金色の火花を散らして白い光線を発射した。

白光が鬼女へ襲い掛かり、突き倒した。オカルトさんの眼が凍りつく。

あおむけに倒れたケイコさんの右胸には、何もなかった。

“あるべき何物も”なかった。

そこにあるのは、赤い切り株のような傷痕だけ。

彼女は右の乳房を切り落として、その痕跡を邪眼への武器としたのだ。

ドルジェフは怒り狂っていた。

正視できないほどむごたらしい傷を見せつけられて、気分がよくなる者はいない。能力者という一般人を見下しがちな集団を母数としても、その率は低い。

そんなことした鬼婆とは早く決着をつけるべきだが、その機会は意外に早くやってきた。

ケイコさんは身にまとっていた大袿（おおうちぎ）を裏返した。白地に墨で染めぬかれた五芒星が、ドーマンセーマンの印が踊っていた。

その印を翻らせ、老人とは思えない速度でケイコさんが突き進む。

意表をつかれたドルジェフが後じさりしようとして、自分の車椅子にぶつかりバランスを崩した。邪眼が下を向く。

ケイコさんが頭上に掲げたドーマンセーマンの衣を投げつけ、投網のように老人の頭上へと押しかぶせた。

そのまま押さえつける。

「恵子！　よせ！！」

オカルトさんが叫ぶ。

衣は内側から白い光の放射線を受け、風船のように膨れ上がっていた。シャーッと摩擦音が外まで響き、衣自体が赤く変色している。

危険を感じて、オカルトさんが駆け寄ろうとした。

その時。

ダォンッ！！

紫色の衣が、ドルジェフの首を巻きこみ、轟音とともに爆発した。

この一連の騒乱事件以来、オカルトさんの記憶は“おれ”や“加藤くん”の知るものと異なった歴史を歩みはじめる。

学園都市が建設されないのは（おれにしてみれば）もちろんのこと、中央造山帯から伊豆・小笠原にかけての火山が一気に活発化。それらの噴火・降灰の被害から逃れようと多くの地方住民が首都圏に押しよせ、なかでも最も人口が多く最も政府に対する要求が激しい“新都民”は流行語にまでなった。

治安の悪化は止まらず、もはや政府は東京周縁部を見捨てる感すらある。

地震や噴火は当たり前、問題は“大震災”がいつくるか。

そんな異常な“日常”を背景に、オカルトさん最後の冒険が始まる。

第十話の二　加藤保憲（後書き）

注…

『水人』『土蜘蛛』
いずれも、「古事記」「日本書紀」「風土記」などに登場する武装勢力の蔑称。
かなり嘘の混じった記述をされているが、要するにヤマト朝廷が成立するときに滅ぼされた地方豪族のこと。
のちに名前のイメージがひとり歩きして、妖怪とされた。

第十話の三　相馬将門（前書き）

「どうせ労役で死ぬのなら、名前を残して死のうじゃないか。
王様に貴族、将軍に大臣、どれだけ肩書きが立派でも、結局はふつうの人間だ。
天下を取れば、俺たちだってああなれる」

――『史記』、陳勝

第十話の三　相馬将門

昭和七十三年。

“元レベル０”のナルタキさんが、その知識と超能力でつくりあげた長寿を保証する薬を政府に売りつけることによって――その薬を某人物が服用し、健康を保ち続けることによって、オカルトさんの世界では昭和という時代が長く続いていた。

“おれ”がいた世界のようにバブル景気や“失われた十年”はなかったが、かわりに恒常的な自然災害、特に噴火と地震が絶えず、政府はいつまでたっても補正予算に災害対策費を盛り込まねばならなくなっていた。

「この昭和ももう七十三年だぜ。

みんな、昭和が終わるってことを信じられなくなってきている」

その“薬品”について調べまわっているフリーのジャーナリストは、ナルタキさんの養子にそう言って笑いかけたものだ。

ケイコさんも使命を終え、地に還っていった。

終わらない昭和。
だが、その終わりに目処が立つ日がやってくる。

昭和七十三年十月二十八日、午後六時五十八分。

海底の地震計と連動して炎を発する東京湾の海上バーナーが、ふいに青い炎を発した。同時に、都心部にまで響きわたるサイレン音に、東京じゅうがつつまれた。

日本政府はこの日があることを予測して、地震予知連絡システムを“おれ”の世界よりもはるかに発達させていた。西暦一九九八年時点で地震を“予知”できる技術力は、そのまま政府の危機感の表れでもあった。

だが民衆レベルでは、逆に「いつか来るなら、いっそ早く終わってほしい」という空気ができつつあったのも、また事実だ。

誰もが恐れ、しかし待ち望んでいた巨大地震が、ついに東京を襲った――。

＞i２３３４６―２９３８＜

海龍、すなわち海底の龍脈（エネルギー）を呪術で刺激することに成功したオカ

ルトさんは、すぐ次の行動を始めた。

大正時代の戦いを生きのび、戦後行方不明になっていたナルタキさんが大金持ちとして復帰したのは、例の“長寿を保証する薬”が原因だ。

本人がオカルト学から疑似科学、そして自分で身につけた超能力へと関心をシフトさせていったのも成功の秘訣だが、やはり“薬品”の威力は絶大だった。

この薬品、名をジンタンという。

商品名の「仁丹」ではない。人胆（じんたん）、すなわち人の肝臓を原料として作られた漢方薬だ。

中部地方から伊豆小笠原までまんべんなく火山が噴火し、東海日本の広い範囲で地震がたえず、失業者や孤児が多く東京に流れこんでくるというオカルトさんの世界だからこそ成り立つ商売だった。

ただ、これさえもナルタキさんにとっては副産物に過ぎない。

彼は単純に自分が死なないためだけに、この人胆を作りだしたのだ。

本当の理由はただひとつ。

在りし日に彼の恋人であり、オカルトさんのせいで散々な目にあった霊能力者を、現代の日本によみがえらせることだ。

辰宮由佳里（たつみやゆかり）。

オカルトさんに唯一、魔術戦で優位にたてるだけの霊力と霊媒資質を持ち、“将門の娘”とも呼ばれたシャーマン。
夢の中の名前でいえば、ユカリさんだ。

血まみれのオカルトさんは考える。
彼はすでに、若い姿のユカリさんが実体をもって甦っていたのを知っていた。
その場に遭遇して何もできず、得意の式神すら呼べなかった屈辱的なシーンだったのでおれの夢ではカットされているが、実際には確認していた。

だからこそ。
だからこそ、最初の激震が収まって間もない今、あちこちで火の手が上がりだしている今、もはや自力で歩くこともかなわない老いたナルタキさんの豪邸まで出向き、彼を一刀のもとに叩き斬ったのだ。

だが、しかし。
ナルタキさんの能力で発現したはずの“過去のユカリさん”は、一向に消え去ろうとしなかった。それどころか“霊体”――意識だけの自律飛翔体として逃亡をはかり、さらにその状態から魔術を使って逃げ切ってみせた。

プランAが崩壊したことを知ったオカルトさんは、さらに次の行動に移る。

顎の長い軍人を私邸で待っていたのは、華族会館（かぞくかいかん）の事務をとりしきる中年男だった。

字幕。

華族会館というのは、建物の名前であり組織の名前だ。

建物としては戦後に華族――日本の貴族階級がなくなったため、「霞会館（かすみ）」と名前をあらためた。だがここ数年で復活してきた旧華族の政治連合が本部をすえたことで、また名前を華族会館にもどしたのだ。

同時に、国際的な王侯貴族のサークル『正統王国評議会（アカデメアイデアルム）』の日本事務所がこっそりと入居したビルでもある。

名目上ふたつの組織は構成もトップも違うが、メンバーはかなり重複がある。

そしてその両方の大幹部になっているのが、オカルトさんの向かった屋敷の主だった。

「地相を占っていただきたい」

男はオカルトさんとの初対面で、いきなり言い放った。

字幕。

元侯爵家当主、梅小路文麿（うめこうじあやまろ）。

「……地相を？」

「さよう。東京に代わる聖都を」

「首都機能の移転……遷都（せんと）か？」

冷たいオカルトさんの確認に梅小路さんは小さく頷き、ソファの脇に置いたブリーフケースから分厚い書類をとりだして、机の向かいにいる自衛隊幹部にさしだした。

ひったくるように受けとるオカルトさん。

レポートをめくる音に覆いかぶせて、旧華族がしゃべり続ける。

「ここ数年、東京湾の海水温度や潮位、地震の回数が異常に高まっている。

シミュレーションの結果、その後ろに書いてある通り、東京は今から約三年後、大きな地殻変動により壊滅または水没するとの予測

がはじき出された」

「あと三年、か。その大地震をどう食いとめる気だ？」

「食いとめられませんな。
それが分かったものだから、政府もわれら華族も、ひそかに東京を捨てる計画をたてたわけです。

しかし予測されるその時は二〇〇一年だ。
昭和七十六年。
われらは手をこまねいておられない。東京水没までに、欠くべからざる人と物とは、ひそかに定めた新しい首都に移しておく必要があります。そして東京が壊滅すれば、遷都の大義名分は立つ」

だから、と。
梅小路元侯爵は、汗をふくこともなく脂ぎった顔を空中に押しだした。

「新首都は、東京以上に霊的に防衛された聖地でなければならん。
その聖地を、貴殿の風水をもって、選定していただきたいのだ」

大して興味もなさげに、オカルトさんが立ち上がろうとする。

「代償は？」

「貴殿の最も欲しがっておられるものを、われらから特別に進呈しよう」

「進呈？」

「さよう。東京です。この東京をさしあげよう！」

空気が固まった。

どちらからも話しはじめる気はなく、危険な沈黙が続く。梅小路さんはそのまま書類をブリーフケースに詰めなおし、先に予備動作を始めたオカルトさんよりもすばやくソファから立ち上がって、豪華な会談場所――陸上自衛隊市ヶ谷駐屯地の陸幕総監室を去ろうとした。

呼びとめる声がかかったのは、その時だ。

「……本気か？」

オカルトさんは胸ポケットから白手袋をとりながら声を押しだす。刃のように冷たい声と、粘り気を含んだ声が交差する。

「本気だ。
次の大地震で、われらはほとんどのものを失うだろう。だが最小限のものは護らねばならん。その保証を貴殿が与えるというのなら――」

「廃墟の東京など、惜しくはないということか」

「さすがに話が早い」

あれから五〇日。
地震で屋敷もめちゃくちゃになった梅小路さんは、その一日で老けこんでいた。
震災があることを前から知っていたひとりだが、地震の発生が予想外に早まったことで行動計画にも支障が出ているらしい。

「加藤君、頼む！
東京はくれてやる。くれてやるから、どうか頼む。天皇陛下の安全と、それから皇居をお移し申せる吉相の卜定を、どうか！」

「承知している」

オカルトさんをいまひとつ信用できないのか、梅小路さんはさらに食い下がろうとして、とんでもない爆弾発言をくりだしてきた。

「我らに二心のない証を、君に示したい。君が天敵とみなしておる平将門の塚は、本当は首塚ではないのだ！」

「何だと！」

オカルトさんの顔がこわばり、長身をおりまげ両手が蛇のように伸びて梅小路さんの襟元にかかった。

これまで平将門の遺骨はすべて“将門首塚”に埋められていると思いこみ、首塚に攻撃を集中してきたオカルトさんにとって、百年後にそんなことを言われては取り乱しもするだろう。

もう彼の年齢につっこむのはやめている。

「待て加藤君、離せ！　殺す気かね、わたしを……！」

「言え、将門塚の本当の場所を」

オカルトさんは手を放したが、その声に威圧がこもる。

綾小路さんは締められた首に手を当てて、あえぎながら声をしぼりだした。

「話すよ。

明治大帝が新たな東京の祭主となるべく、首塚にみずからはいられ、サレコウベを祈り寄せられたのだ。

大帝は首塚に一夜を明かされた後、宮城に戻られた。そのサレコウベと共に」

「皇居か！」

歯ぎしりが聞こえた。オカルトさんの唇が紫色になっている。

「わたしの父が昔、明治神宮の宮司をしておられた鷹司公（たかつかさ）から密かに聞いたところによれば、大帝はざれごとに、余は神田明神（まさかど）の隠れたる大宮司であると申されたことがある、そうだ。とすれば――」

「わかった！　梅小路さん、よく知らせてくれた。

約束は守る。自分が次なる聖都を、君に連絡しよう。失敬！」

加藤二佐は無駄のない動きで敬礼し、青ざめた顔を扉口に向けると、半開きになった扉に右肩をぶつけながら出て行った。

蝶番がふっとび、扉板が音をたてて外れた。

梅小路さんの依頼を成功させて東京の破壊を確実にするため、ひとつおぼえのように大地のエネルギーを追っていったオカルトさんは、そのエネルギーが向かう先こそが新たなる首都にふさわしいという発想を捨てざるを得なかった。

霊力の流れは空に上がり、北極星へと続いていたのだ。

――神界に遷都することは不可能だ

オカルトさんはそう呟いて、目の前を逃げるエネルギー体――実はユカリさんの意識体――を地上に“撃墜する”ため、腰の日本刀で北極星への霊道を断ちきった。

もっとも、そのあとユカリさんの霊体がどこへ落ちたかについては、梅小路さんが正しかったことになる。

彼女の魂は保護者、つまり将門の居場所に逃げこむはずなのだが、

「やはりな」

ユカリさんが一直線に落ちて行ったのは、皇居だった。

皇居に侵入したオカルトさんは、再三自分が起こしてきた地震に阻まれた。

地割れで昭和六十年代に完成した北の丸共同溝にお堀の水が流れこみ、揺れもどしで逆噴射した。

腰の軍刀を地面に突き刺して抵抗しながらも、結局は大量の水とともに共同溝へと流され落ちたオカルトさんを待っていたのは、共同溝の底からそれだけのためのように突き出た、大仏かと思うほど大きな武者人形だった。

髪はざんばらで水に濡れ、長い顎の先には長い顎ひげがまとわりついていた。眼光するどく灰色に光り、こけた頬に目の下のクマ、唇は薄くつりあがっていて――

それは、自分で動いていた。

それは、正体をオカルトさんの前に一瞬で表した。

それは、オカルトさん自身の顔だった。

「将門め！　将門め！　ま・さ・か・ど・め！！」

もはやそれが誰の声だったのか、そこに加藤保憲という個性があったのか、夢の視点から推し量ることはできない。

しかし軍刀で岩のような相手を切りつける自衛官と、その十倍も大きい彼の“実身”はもつれ合い、かたや不自由な片手で切れ味鋭い日本刀をふりまわし、かたや巨大な両腕をゆっくりと押し付けようとしていた。

地上では、昭和大震災が新たな展開を迎えている。
もはや半数が役に立たなくなった海上バーナーも、使命を残して機能を停止したサイレンもなく、多くの新旧都民たちが震える中で起きた四度目の地震は、ついに東京湾口から大きな化物を呼びよせた。
津波災害が震災に加わった瞬間である。

この瞬間、東京は近代都市として存在することをやめた。

暗転。
雑音混じりの音声。

――ま・さ・か・ど……。

――ま・さ・か・ど。

――……。

――そうか！　これはうかつだった！

――そうか！　東京の大地霊、平将門はすでに目醒めていたのだ！

――おれとしたことが！　ハッハ……！

――恵子！！

――聞こえるか、ハッハ！

――おまえは目標を果たしていた！　おまえはおれの正体を突きとめたのだ。

――将門の霊を受けいれた地上の肉体が、このおれであったことを！

――兜の下のおれの顔を見届けた！　褒めてやろう！

――ただし、

――おまえが見届けたとき

――将門がすでに抜け殻だったことまでは知らなかっただろうがな！

――ハッハ……。

――将門は、地獄に睡（まどろ）んではいなかった！

――目醒めていた！　目醒めて、地上に復活していたのだ。

――おれが東京を亡ぼした。おれが、将門とともに東京を亡ぼした！

――見ろ！　おまえへの供物だ！

――将門の首だぞ！

フラッシュバック。

『――食った

――おまえが死人を見ようとして蛇を食うように、おれも……怨敵を……食った！

――すべて平らげた……おれの母もな！

――これを……取れ

――おまえが……新しい加藤になるのだ』

『……』

『……ク』

『……ジャク』

「ジャク！」

「……え？」

第十話の三　相馬将門（後書き）

「補遺」の記述は“オカルトさん”の先入観に基づいたものです。
現実の世界（ｒｙ

ちなみに、もはや明らかなことですが。
この夢は、“オカルトさん”の実際の経験そのままとは限りません。彼は“キビツ君”が見る夢の内容を、自分に都合よく書きかえられるからです。

第十一話　加藤若一、現世に復すること（前書き）

久々に現実世界。

第十一話　加藤若一、現世に復すること

聞こえる。

声が聞こえる。

懐かしいわけではないが、親しみを覚える声。
内容はともかく、話だけは聞いてやろうと思える声。

声質の問題ではない。
おそらく、記憶のなかでそうしてきたのだろう。

記憶。
誰の記憶だ？

――おれだ

「……え？」

真っ暗闇に、横一本の筋が入る。
光は徐々に上下を押しあげ、暗闇を塗りつぶした。

……まあ、目を開けただけなんですがね。

おはようございます、加藤若一（かとうじゃくいち）です。
なんというかものごっついデジャヴ。
また誰かに乗り移ったとかないよな？

「……うお、まぶし」

また蛍光灯が真上でした。真っ白でした。

「ジャク！」

あの声。

というか、もうだいたい誰かは分かっているのだが。

手術衣とかシーツの肌触りとか、いろいろ思い出したくないものを思い出しつつ、おれは枕に半分埋もれた首を曲げた。

やっぱりというか。

そこにいたのは、わが友介旅初矢（かいたびはつや）でした。

＞i２１８１１―２９３８＜

「はっ、ちゃん？
おきたのか？」

とっさに意味不明な言葉が出てくる。
だが初ちゃんに言いたいことは伝わったらしく、彼は照れるように笑いながら、こちらを見下ろしつつ頷いてみせた。

「おかげさまで起きられたよ。
三時間ほど精密検査くらったけど」

だろうな、と思う。
誰ひとり起きあがってこなかった集団昏睡事件の被害者のなかで最初に意識が戻ったとなれば、集中検査が三時間で済んだほうが意外だ。

重い頭を上げて、ついでにベッドへ膝をつく。
移動式ベッドといっても、“おれ”が学園都市で目覚めた時のように生命維持装置つきの豪華なものではない。担架にキャスターがついたような簡易式のアレだ。

そこまで考えて気がついた。
月詠先生の家と違って、手足が自由に動く。あと右のわき腹がズキズキします。

頭を起こすと、初ちゃんが簡易ベッド右脇に腰かけているのが見えた。
周囲は自分と似たような形で、夕日がさしこむ大部屋に簡易ベッドが並び、とりあえず息だけしている生徒たちがそれぞれ横たわっている。
……あ、あの時の銀行強盗もいやがった。

左にはプラスチックの棚があり、引きだしを開けるとＩＤなどの小物が入っていた。
窓の外は見事な橙色。

「初ちゃん、これどういう状況？」

「どうって言われても」

質問がざっくりしすぎていたのか、心の底から困ったような声の初ちゃん。
それとも起きたことを整理でもしていたんだろうか。

「つーか、なんで初ちゃん起きてんの」

「そっちは言われると思った。
まあ、言いやすい方から説明していきますか」

そこから、初ちゃんの解説が始まった。
もちろん例の、たわいない会話と念話のダブルコースで。

まず、初ちゃんが語る『幻想御手（レベルアッパー）』のしくみについて。

おれは昏睡前の初ちゃんとの“念話”あたりから、あの古臭いテクノ、というよりチップチューンが脳に何らかの影響を与えることで、他の『幻想御手』使用者とＡＩＭ拡散力場だか何かの相互干渉を起こし、強制的に力場の強さを引き上げたり云々することで強制的に能力レベルを引き上げるものだと考えた。

このとき、ＡＩＭ拡散力場の基準となるパターンを誰かの脳波に設定していたため、その誰か――というより開発者でおれの恩人でもある木山春生（きやまはるみ）先生に意識系を乗っ取られ、ついには生命維持すらおぼつかない昏睡状態に陥る――

というのがおれの推論であり、『風紀委員（ジャッジメント）』にも非公式ながら証言していた。

結論から言おう。

だいたいあっていたが、つっこみどころ満載だった。

「さすがに、医者以外に原因究明は不可能だと思うんだけど」

《さすがに、ＡＩＭ拡散力場の乗っ取りは不可能だと思うんだけど。

脳神経回路制御を奪って間接的に力場を動かすならともかく。
その発想、どこから出てきたのさ》

苦笑する初ちゃん。
おまえは笑ってるけど、実例あるんだぜ。

「そう言うなら思い出してほしいんだが、ポルターガイスト現象って知ってるか？」
《これ関係ある話だからな》

「何も力が働かないのに物が動き出すってあれだよね。
もう科学的に解明されてるんじゃなかったっけ？」
《別にいいけど、何の話につながるのさ？》

「そうそう。
あれ解明したの、医者じゃなくて物理学者だったぜ」
《あれは念動力（サイコキネシス）系能力者の暴走で、反復性偶発性念動力症候群（RSPK）っていう病気の同時多発が原因なんだ。
おれの持病でもある》

「え、何それ聞いてない」

「言わなかったからな。
とにかく、超能力の研究者の方がこの分野も進んでるってことはありえるだろ」
《とにかく、ＲＳＰＫ症候群は個人的な能力暴走だからめったに同時多発現象なんて起きないんだが、過程が過程だ。ＡＩＭ拡散力場の異常だから、脇から刺激でも入れば何がどうなるか分かったもんじゃない》

「それにしたって、なんで脳学者？」

「能力研究の一環でやりかねないな、って思ってさ」

おれの答弁に肩をすくめる初ちゃん。
おいそこのメガネ、今露骨にバカにしただろ。

「脳学者って仮定がどこから出てきたのかも分かんないけど、それならもっと楽な方法を取ってたと思うよ」

「たとえば？」

「脳磁界を見るとか」

初ちゃんが自分の能力を使ってたしかめたところでは、『幻想御手』による脳内の侵略は、次のような過程をたどって行われるはずだった。

まず、こいつはあの音楽ファイルを聞き直したらしい。

どうせ昏睡するんだから、あと一回ぐらい聞いてもどってことないよ、とは本人の弁。

開き直りすぎだろ初ちゃん。

で、その時に分かったことが。

まず、聴覚から脳の神経に直接影響するような周波数のシロモノが混じっていたということ。

外国の警察が使ってる、音響制圧装置というやつですね。

次に、そこから表層意識では連想しないような感覚器官の励起が認められたという。

なんでそんなものが分かったかといえば、もちろん能力だ。

彼の能力『量子変速（シンクロトロン）』は小さな重力場を感知し、操ることができる。こいつにかかれば生体電流も重力異常のひとつなのだ。

で、その“顔面から手にかけての重力異常”を感知した彼は、それが脳の中で異常な動きをしていることに気づく。

ふつう、ヒトの脳細胞とよばれるものを働かせるとき、ある点から電気信号がジグザグに神経細胞の中を走ってゆき終点におさまる、というパターンが支配的だ。

だがそのとき、意識しないうちに脳内の別方向へと“予告”がなされ、付随して反射的な運動が起こりうる。

梅干しやレモンの切れ端を想像しただけでなぜか涎がでてくる、といった現象が有名だが、その上を行く例もある。

つまり、視覚どころか脳内の情報が、現実に動いているほかの感覚器官に影響を及ぼすことがある。ある色を見て、特定の楽器や音を幻聴する例なんかがそうだ。

それが初ちゃんの脳内で起こったのだ。

こういうことは『共感覚（シナスタジア）』と呼ばれている。

共感覚は一種の神経症、つまり病気なのだが、日常生活に困ることもないし、なにより共感覚者たち自身から見れば“特別な才能”に他ならないわけで、治療するという発想が誰にもない。

ともあれ、こうして初ちゃんは五感のすべてを『幻想御手』に支配されることになり、『幻想御手』が呼び出したあらゆる感覚的記憶や情報を脳内にたたきこまれた。

思想管理とか洗脳にぴったりだな。

さて。

脳を乗っ取った“御手情報体”によって、彼らに都合よく思考回

路が組みなおされ、迂回され、突破されてゆくのを不快に思っていた初ちゃんは、病室でちょっとした実験をしたのち、まさかの自己手術に取りかかった。

「前から思ってたけど、おまえバカだろ」

「お褒めにあずかり恐悦至極」

「褒めてねえっつの。
なんで自分で行動すんだよ。もうちっと分ってもんをわきまえたらどうだ?」
《なんでそこで自分の脳をいじくり回そうとすんだよ。もしかしたら、おれが知ってる“初ちゃん”は永遠に消えてたわけだろ?
だいたい影響力がどこまであって、どこからが本当の自分の脳神経系なのか、ちゃんとわかった上でやってるんだろうな?》

「いや」

いちおう確認のために聞いてみたのだが、いともたやすく返ってくるえげつない回答。
すごく頭が痛い。脇腹も痛い。

「おい本当に大丈夫なのか?」

「そこはまあ、日付が変わるまで考えたよ。結局この病室に来ることになったんだけど」
《そこはまあ、日付が変わるまで実験したよ。
腕動かしたらどこに電流が流れて、ＡＩＭ拡散力場を出したらどこが活性化して、みたいなサンプルはかなりとれたからね。
サンプルが取れて、結局変わってるのは脳波だけって分かってきたから。病院側が脳波検査したときに変わりまくってたらしい、ってだけなんだけど》

「……で？」

「能力で強引に起こしてみました」
《能力で、ちょっと刺激に反応しやすい重力場を作ってみました》

「……は？」

初ちゃんいわく、『幻想御手』でレベルアップした彼の能力では、時限式・刺激反応式に生まれる重力場というものも作れるらしい。
こいつもうレベル５だろ、などと思いつつ呆れて聞いていたのだが、体内リズムを整える松果体という器官のまわりにそれを“貼りつけた”あたりから中枢への攻撃が激しくなり、おれの見舞いもむなしく昏睡に陥ってしまったというのだ。

「じゃあ、おれが起きたのはただの偶然？」
《おまえが起きたのはその“時限爆弾”のおかげ？》

「そうなるね」
《そうなるね。個人的には“岩ザメ”とか言ってほしかったけど》

「……初ちゃん、ＳＦって好き？」
「大好きだけど、それが？」

おれはため息をついた。

岩ザメというのは、とあるＳＦ小説に登場するガジェットのひとつで、岩盤や建物などを自律的に破壊していく機械のことだ。
要するにその“反応式重力場”が脳内の重力異常――木山先生の脳波パターンを強制的におしつける脳内信号を片っ端から食っていった結果、初ちゃんは脳波パターンの縛りから解き放たれた『幻想御手』使用者になり、意識を回復したわけだ。

話を聞いていると、どうも彼が自分の脳内に仕掛けた極小サイズの岩ザメは、五つ六つでは足りないらしい。
というより、そうでもなければこんな短期間に覚醒できるわけがない。
一度は昏睡まで行ったのだから。

……あれ？
介旅チート？

そこまで考えて、おれは悪い予感にとらわれた。
ふたりめの生還者であるおれは、初ちゃんに助けてもらったようなものだ。
あと、表の会話で「能力で強引に」とか言っちゃってたよねこの人。
ということはつまり

《……ひょっとして、おれにもそれやった？》

《うん》

……ですよねー。

「何をしたのか、キリキリ教えてもらおうじゃないか」
「ちょ、ジャク、痛いから首から手離して」
そんな漫才を静かな大病室でやったあと、おれは自分の首から上に起こったことを戦慄とともに知る羽目になる。
「回診を担当してるハゲの先生に、どうなってるんですかって聞いてみたんだ。
そしたらまあ、何もわかってないみたいでさ」
《回診を担当してるハゲの先生に、脳波どうですかって聞いてみたんだ。
そしたらまあ予想通りというか、他人の脳波を押しつけられてるみたいにみんな均一化してるっていうから、特になぜかサンプルが多かったらしいジャクの脳波形図と脳磁界図を見せてもらってさ。
結構しぶられたけど、第一帰還者って強調したら見せてくれたよ》
「うわ、ひでえ……まあ実際は進んでるけど、患者を不安にさせたくなかったのかもな」
《うわ、ずりい……
まあ別の病院だけど、おれはよく脳波取ってたからな。例のＲＳ

PKの件もあったし》

「なるほどね」

そしてこいつは、とんでもない行動に出た。

木山先生とカエルの先生が姿をくらまし、代わりを押しつけられた新人の医師がこの4月初めに形式ぶりながら取っていた脳波形図と今の（昏睡状態の）脳波形図を見比べて、差を取り消しにかかったのだ。

彼の“反応式重力場”で。

「おい、退学もんだぞ」

《てめえ、下手すると記憶喪失じゃねえかどうしてくれる》

「まあまあ落ち着いて。脳に直接どうこうできたわけじゃなし」

《脳細胞に直接どうこうするわけじゃなし、狙うのはジャクの脳神経の信号パターン修正だけなんだから。

だいたい今ジャクが起きてるってことは、今んとこ成功しつづけてるみたいだし、いきなり能力解除したりすればまたぶっ倒れるよ？》

初ちゃんの弁明に、思わず腕を組んでうなるおれ。

よく考えたら、今もその重力場どもがおれの脳内で活動してるから、おれは自分の脳波に戻れたようなもんだ。

そして、腕を組んでも何らの違和感がないということは、やはりおれの脳は正常な活動をしているということになる。
月詠先生の家では、それすら難しかったからな。

そうだ。
もう一つ、聞かなければいけないことがあった。

「んで初ちゃん。
おまえとかおれのレベル、また下がったん？」

聞かれたメガネが下を向く。
どういう反応だ？

「ええと、僕の場合は違う」
《僕は新しく開拓された神経伝達パターンを見て、僕以外の他人と接続するために作られた部分は電位移動を止めたけど、それ以外の短絡回路なんかは細胞の重力いじって擬似的に再現してみた。だから、レベルも前に戻ってるわけじゃない、と思う》

なるほど。
観葉植物とかの生体電流レーダーを、通信用に改造したみたいな

形なんだな。

で。

「おれは？」

「……ごめん」

《レベルアップから作られた伝達パターンと『幻想御手』のネットワークに使われる伝達パターンの差が分からなかったから、前回の波形図にないパターンは全部止めた》

「……まあ、そうじゃないかと思ってた。起こしてくれてありがとな」

そうじゃないかと思ってた。

これは本音だ。

なにしろ、これまで直接脳の中に語りかけてきていたオカルトさんの幻聴が、まったく聞こえなかったのだから。

「……ところでさ」

「ん？」

まったく別の話を振ろうという意思がみえみえの初ちゃんにあえて乗る。

こんな思い空気を振り払うためのネタにしても、こんなところで沈んでるわけにはいかない重要な話にしても、痛みをこらえて聞く姿勢はちゃんとしないと。

そんなことを思っていたのだが、

「今は夜だけど、君にほぼ毎日お見舞いに来てた人がいてさ」

「はぁ？」

思わず疑いを多く含んだ疑問形で返してしまった。

実際そんなことをしてくれそうな唯一の友人、“針金コンビ”の片割れである初ちゃんがおれより先に昏睡していた以上、そんな心あたたまる人の心当たりはない。

……自分で言ってて悲しくなってきたが。

「頭がイガグリみたいにとんがってる高校生ぐらいの人と、僕らと同い年ぐらいの変な服着た外人の子だったよ。
十字教のシスターっていうんだっけ、ああいう格好してる人」

いや、訂正。
だいたい予測ついた。

「……その人たちは、たしか知り合って数日しか経ってないはずなんだけどな」

「よっぽど濃い共通の体験でもあるの？」

不思議そうに聞いてくる初ちゃん。
そうですね、実はありますね濃い経験。言えないけど。

……そうか、あの人たち見舞いとか来てくれてたのか。ほぼ初対面なのに。
何してんだろうね。ありがたいけど。

「とりわけ、これといって……。
まあいいか、次あの人たちが来た時に寝てても申し訳ないし、適当に手紙でも書いて脇の棚に乗せとこう」

「そうだね。ジャクもまだ安定してるわけじゃないし」

何を勘違いしているのかニヤニヤ笑いながら、初ちゃんがそう締めくくってベッドから腰を上げた。

悪い、初ちゃん。
おれ明日の朝になったら、病院を抜け出そうと思ってるんだ。
上条さんとインデックスさんにも、何かお礼しなきゃいけないし。

そのためにも、夜に病棟の外へ出られるかどうか試さないと。
こればかりはぶっつけ本番だ。

第十一話　加藤若一、現世に復すること（後書き）

というわけで、覚醒です。

第十二話　声ある声

「ねえ教えてください！
いったいどうやって目が覚めたんですか、何したんですか！！」

「ちょ、ま、くび、ふる、の、や、め、て」

……状況を理解していただけただろうか。
無理だよな。おれも無理なんだから。

時間を少しさかのぼって、七月二十四日の朝。
ベッドで起きあがったおれの両肩を掴んで思いっきり揺さぶっているのは、例のここんとこ世話になりつつある『風紀委員』の女の子だ。

まだ下半身とくに足首あたりのコントロールに難があるとかで、今さら松葉杖をついておれの病室まで歩いてきた初ちゃん――介旅（かいたび）初矢（はつや）が、苦笑いしながらこっちを見ている。見ているだけで何もしてくれないのだが。

脇腹の痛みは治まっても、これじゃまた痛いとこが増えそうだ。

「はっ、ちゃん、たす、け、て、くれ」

「正直に証言してください！　これは『風紀委員（ジャッジメント）』としての要請ですよ！」

ほとんど必死といっていい彼女の態度に不安を抱きつつ、横からやっと救いの声。

「……えーと、初春さんだっけ？
とりあえずジャクを証言できる状態にしてあげないと……」

「はっ！　しまった！」

そんなギャグ漫画のようなセリフをはいて我に返った初春飾利（ういはるかざり）さんの急激な運動停止によって、おれはがっくりとうなだれた。

＞i218111―2938＜

「……で、『幻想御手（レベルアッパー）』についての情報とか集まってるの？」

「それが全然」

おはようございます、加藤若一（かとうじゃくいち）です。

ほとんど徹夜で携帯とにらめっこ続けたり虫を集めたりして心身ともボロボロになった状態から、そのまま直行で木山先生の追跡を始めようというおれの魂胆が、非現実的だと言われればそれまでなのだが。

寝落ちしたと気づいて私服のチノパンツにシャツとパーカーへ着替えたところで朝食前点呼に引っかかり、渋々メシを食べていたおれの病室にまで突撃してきた目の前の小柄な『風紀委員』によって、そのもくろみはあっけなく崩れ去っていた。

初春さんは、銀行強盗事件のあとでおれから事情を聴取した人だ。その調書に不備があったとかでおれに再出頭を求めていたが、結局今日までのびのびになっており、一応その件もかねて病院に来たらしい。

もちろん主なお題は、初ちゃんがここにいる理由とも重なるのだが。

つまり、おれたちは『幻想御手』被害者のなかで、今朝までのところふたりだけの覚醒例なのだ。誰かが昏睡患者についてほざいたという「多数の声なき声（サイレントマジョリティ）」という言葉を借りれば、おれたちは対応する「声ある声」といったところだろうか。

『風紀委員』としては、ふたりとほかの被害者の差を知りたいのだろう。

「木山先生に連絡を取ってみたんですが、やっぱり音楽を聞いただけでレベルが上がるというのは、現実的じゃないみたいです。
ただ、加藤さんの推理以上に有力な情報もきてなくて……」

「ジャクの推理？」

「初ちゃんに昨日言ったことだよ。ほとんどお前の説を丸パクリだけど」

例の『Ｊｕｌｉａｎ』会合で、いささか誇張めいて話したことを初ちゃんに伝える。
事後承諾だけどいいよな。

「ああ、あれに関して新情報あるんだけど」

「本当ですか！」

その一言で、初春さんのフォーカスが初ちゃんに向く。
何か気がかりなこともあるんだろうか。

「とりあえずまあ、証拠はないけど……
僕が自分の能力でアレを調べてみた感じ、『幻想御手』は聴いた

人たちの脳をつなげて演算能力をサギ的に上げることでレベルアップを再現してるらしい、ってのはジャクから聞いたかな？」

へたくそな笑みをどうにか浮かべる初ちゃんに、真摯な瞳で応える初春さん。

やりにくそうだな。

彼もおれと同じで、よほどのことがなければ人見知りをこじらせてる人間だし。

「はい。ＡＩＭ拡散力場を使ってるみたいだ、って言ってました」

「うん、厳密には違うかな」

「えっ」

花飾りの下の目が点になった。

「さすがに、ＡＩＭ拡散力場をまんま介して脳の信号に干渉するのは無駄が多すぎるよ。

僕より理解力がある人はいると思うんだけど、僕は生体電流の輻射拡散と各力場の周波帯別鋭敏化で……つまり弱い電気をそれぞれが発してＡＩＭ拡散力場の波にあわせることで、通信ネットワークを作ってるんだと思う」

「電気ですか……ひとり得意そうな人は知ってますけど」

そんな答えが返ってきた。
嫌な予感しかしないが、まあ聞いてみよう。

「それ、ひょっとしてあの常盤台の人？」

「あ、加藤さんは知ってますよね。
常盤台中学の御坂美琴（みさか みこと）さんです！」

満面の笑みで得意そうに言われた。
なぜか“常盤台中学”を強調された。
初ちゃんが軽く引いてる。

「やっぱりあの人か。
頭ん中のぞかれるのはちょっとなー……」

「いえ、そこまでしてもらわなくても！
御坂さんもなんとかしてくれますよ」

先に極端な例を挙げておくと、案の定初春さんはおたおたしはじめた。
予防線張っといてよかった。初春さんがどうでも、御坂さんはそのぐらいやりかねん。能力を人に向けることの重大さを、あまり認

識してない節がある。
どうも彼女も、個人的に『幻想御手』を追っかけてるみたいだし。

「なあ、その常盤台のミサカさんって誰？」

「初ちゃんは面識ないんか。その方がいいよ」

「どういう意味ですかっ！？」

せっかく聞いてきてくれた初ちゃんの身の安全を思って、おれが実感とともに吐きだした言葉が、ベッド左側の初春さんに勢いよくつっこまれる。
だがおれは撤回しない。絶対に。

「ほら、ウチの教頭がおれたち説教するときに、レベル５の『超電磁砲（レールガン）』がどうとか言ってただろ？
彼女のことだよ」

「ふーん」

興味なさそうに流された。
聞いといてそれかよ。まあ彼は電撃を撃たれた側だし、余計なこと言うのもあれだからいいんだけど……

などと思っていたら。

左前方で、金属板を瞬間的にねじり切ったような音。

何事かと振り返った初ちゃんの正面に緑の腕章が突きだされ、

「『風紀委員』ですの。

南沢中学二年の介旅初矢さん、加藤若一さん、これより『幻想御手』被害者として事情聴取を行わせていただきますわ」

どこか枯れている、しかし凛とした声が鳴りわたった。

……そういえばこの人、空間移動能力者（テレポーター）だったな。

「……どっから話せば、いいのかな」

「できれば『幻想御手』を手に入れたところからお願いいたしますわ」

さらっと無茶振りをかけてくるのが、『風紀委員』で初春さんの先任にあたる白井黒子さん。

で、初ちゃんが必要以上に緊張してる理由は、もうひとりにある。

病室で四人目の茶髪。

意識がある人間の中ではふたりめの茶髪。

さっきまで話題にしていた常盤台のレールガンが、そこにいた。

「……おおお久しぶりです、御坂さん」

「久しぶり。ていうか敬語やめてよ、気持ち悪い」

もちろんおれが緊張していないわけもなく。

そもそもあの病院廊下で木山先生と出くわす瞬間まで、彼女がこっちに向けていた敵意……じゃなくて隔意については疑うまでもない。御坂さんが今ふつうの態度を取っているからといって、おれへの敵対心というか加虐性がなくなった保証はどこにもないのだ。

そうでなくとも、こっちはレベル5と『風紀委員』という、自分の苦手意識では最大最悪の組み合わせに改めて気づいてしまっているのに。

病院でよく平気だったな、おれ。

どうやら御坂さんは“捜査協力”を称して、事務メンバーが集まるこの水穂機構病院へとついてきたらしい。

その捜査も、白井さんによれば行きづまる一方だというのだが。

「何しろ他の支部は、『幻想御手』が音楽ファイルだという確たる証拠がない以上、そのファイルだけ集中的に捜査するより手を広げるべき、などとおっしゃいますの。

おかげで、今あなたがたに話を聞けるのもわたくしたちだけですわ」

ベッドの右側で壁に寄りかかりつつ、腕を組んで嘆息する白井さん。

まあ、考え方としては正しいんだろうが、被害者的には文句を言いたい。

言わないし、言えないけどね。

「しょうがないよ。実際僕たちも『幻想御手』の細かい原理までわかっちゃいないし」

初ちゃんが苦笑する。
どうやら『共感覚（シナスタジア）』については、直接的にはゲロらない方向で行くらしい。この病室の中にも浮いているだろう“発信器”のことを考えると、それが安全策ということか。

白井さんの状況説明が改めて始まる。

「木山先生の話では、短期間に大量の電気的情報を脳に直接入力するための『学習装置（テスタメント）』という特殊な装置もあるそうですの。
でも、それは視覚・聴覚・味覚・嗅覚・触覚の五感すべてに働きかけるもので……」

「『幻想御手』はただの音楽ソフト。聴覚作用だけってことね」

御坂さんが言葉を継ぐ。

「植物状態となった被害者の部屋を捜索しても、あの曲のデータ以外なにも見つからないんです。
おかげで捜査もそこで行き詰まりです……」

初春さんの補足。
いや、本当にさっきから彼女の口調がおかしいんですが。どうみ

ても、前に比べて何かしらに不安を感じている。
それが何かは分からないけど。

……本当に分からないのか？
あの『Ｊｕｌｉａｎ』にいて、今この場にいないのは誰だ？
木山先生と、もうひとり。

おれはただ単に、言いたくないだけなんじゃないのか？

久々に稼働を始めたオカルトさん知識系が、そう囁いてくる。
しかしおれは無視した。

いい加減に、誰か気づいてもいいころだ。レベル０と呼ばれることは、半端者と呼ばれるより辛い道になるという可能性について。
もちろん、他にも理由はある。
おれも精神的に保身はしたいし、もっと大事そうなことをしゃべっている声が、耳から届いていたことだし。

声の主は御坂さんだった。

「……曲自体に、五感に働きかける作用がある可能性はないかな」

「……五感？」

「どういう意味ですの？」

『風紀委員』のふたりが反応する。思うところがあったのだろう。

そして、おれと初ちゃんが思わず顔を見合わせる。

『共感覚』について、常盤台コンビの側でも追究していたらしい。

どれだけ勘が鋭いんだか知らないが、被験者として初ちゃんが証言することも考えなければなるまい。

《言うべき？》

《話が出るまで黙ってた方がいいと思う》

《じゃ、その線で》

念話している間にも話は進む。

「前にかき氷食べたときの会話、覚えてない？」

「え～っと……食べくらべ？」

「いや、そっちでなく」

……何の話をしているんだ？
ここで話題がそれるとまずい。初ちゃんを見る。

「……『共感覚』？」

ぼそっと呟いた初ちゃんの声で、常盤台コンビが弾かれたように顔をあげる。

『共感覚性！！』

「なんですか？」

頭上にはてなマークを連発させそうな表情の初春さんに、白井さんが向き直った。

「共感覚性ですの！　ひとつの刺激で、複数の感覚を得ることですわ」

「ある種の方法で感覚を刺激することによって、別の感覚も刺激さ

れることよ」

謎が一気に解けたといわんばかりの笑顔で、初春さんに説明を加える常盤台コンビ。

こいつら本当に中学生離れしてるな。

「つまり音で五感を刺激し、『学習装置』と同じような効果を出していると……」

初春さんも納得とまではいかないが、可能性については思い至ったようだ。

初ちゃん、仕上げ頼むよ。

「シライさん、質問があるんだけど」

「何ですの、介旅さん？」

学校のように手を挙げた初ちゃんに、弾んだ声で白井さんが答える。

今ので相当進展したんだな。

「あ～……それは、たとえば音を聞いて視界に色がつくとか、手足がむず痒くなるとか、そういうこと？」

「視覚や触覚に働きかけた情報が異常を起こすのなら、そうなりますわ……

まさか」

白井さんはやっぱり気づくのが早い。

このタイミングでこの発言者がこの内容をしゃべったら、当たり前かもしれないが。

「『幻想御手』を繰り返し聞いていると、そうなった記憶はあるね」

「……ちなみに加藤さん、あなたは？」

「手足がしびれたり頭痛がしたことはある」

初春さんがその場で木山先生に連絡し、おれからすれば白々しいまでの敗北宣言とともに『樹形図の設計者（ツリーダイヤグラム）』なるものの使用申請について言質（げんち）をとった。

そのまま初春さんは挨拶ひとつして病室を出て行ったのだが、『樹形図の設計者』すなわち彼女が言うところの「学園都市一のスーパーコンピューター」。

……木山先生が何度も使用を却下されたっていう、アレだよな。

まずい。

非常にまずい。

今すぐにでも木山先生を止めないと、完全にあの人は学園都市の入っちゃいけない場所に拉致られてしまう。

それはだめだ。

あの人が有罪にしろ無罪にしろ、彼女には健全な生活を送ってもらわないと困る。

木山先生が統括理事会あたりの査問にでもかけられれば、自分がそれなりに正しいことしてると思ってる彼女は、普通におれのこともゲロってくれるだろう。

一理以上あるのは認めるが、統括理事会がおれのことを嗅ぎつけた瞬間、まともな人生は終わる。

これは加藤くん知識体系が強く主張しているし、間違いない。

そして、おれにその“まともじゃない人生”を送るだけの度胸も知能も体力もない。
つまり。

「それでは、わたくしたちも失礼いたしますわ」

「え？　黒子どこ行くの？」

「支部に戻るんですの。初春でなくとも、あちらの方が情報を処理しやすいですから。
『書庫（バンク）』のこともありますし」

そんな会話を交わしている常盤台コンビが出ていくと同時に、自分も病室の窓から脱出する必要がある、ということだ。
初ちゃん抜きで。

……無理そうだな。

《ジャク》

《どした？》

《……言い忘れてたんだけど。
例の重力場貼りつけるときに、君の記憶を一部だけ読んじゃったんだ》

《えっ》

《んで聞きたいんだけど、犯人の目星ついてたんでしょ？　なんで言わなかったのさ》

無理でした。

第十三話　笑えない冗談（前書き）

やっと行動開始。

第十三話　笑えない冗談

おれは基本的に、腹を立てたことがない。
無駄だからだ。

たかり屋相手に怒ってみせたところで、引きだせる反応は相手のさらなる変態的な行動ぐらいのものだ。幸運にも、キビツ系意識の生ぬるい“常識”が怒り狂うべきと判断するような相手に出会ったこともない。
友達といえる相手も作ったことがなかったから、そういう関係の言い合いもしたためしがない。

ただそれも、今日かぎりになりそうだ。

介旅初矢は嗤っていた。

松葉杖を放り出し、尻を床に落とし、両手で腹を抱えて哄笑していた。

「木山春生（きやまはるみ）は被害者だった」

嗤い声。

「同時に加害者でもあった。だから贖罪（しょくざい）をもくろんだ」

嗤い声。

「もくろんで、それを実行した。だからそいつは、加害者から加害者扱いされた」

嗤い声――

「誰が加害者で誰が被害者だ。死神を捜し葬ろう！
バッカじゃねえのか！！」

「おい」

「ひでえ冗談だ。クソ面白くも何ともねえ冗談だ！」

「おい、笑うな」

「みんな狂ってる。おまえだってそうだよジャク、おまえも狂ってる！

そんな奴の肩を、自分を守るために持つなんてな！」

「笑うなっつってんだろうがっ！！」

＞ｉ２１８１１―２９３８＜

介旅がハッと最後に空気を吐きだし、唇の両端をつりあげてこちらを見下した。
目は笑っていない。むしろ怒り狂っているのは、こいつなのかもしれない。

「なんで？
どうして笑っちゃいけないんだ？　最高の楽屋落ちじゃんか」

「だからだよ。
おまえ、これがひとりの女の狂人騒ぎだと思ってるだろ！」

介旅はほんの短い間だけ考えこんだ。

「学園都市の運営システムが、子供を助けたかった教師を狂わせた？」

「そうだ」

おれは強い口調で肯定してやった。

実際、加藤くんが参加させられた実験まで含めて考えれば、どうにかレベル6を生みだしたいという木原幻生（きはらげんせい）の欲望が木山先生をあそこまで極端に走らせたのは疑いない。本人が犯罪者のひとりだとしてもだ。

彼女があそこまで綱渡りを続けている理由もそこにある。

ほとんどだれも信用できないと思っているのだろう。

「で？」

介旅の答えは簡素だ。

「だからどうしたのさ？

その木山って女が実験台の子供たちをどうにかしようといろいろ苦労して、それが全部報われなかったのはだいたい上のせいだ。

だけどそこで、こともあろうに無関係の学生を多数巻きこんで、それこそ学園都市の上の方に目をつけられるような大間抜けをやらかしたあげく迷惑をまきちらしたのは、どう見たって木山本人だろ。

誰も許しちゃくれないよ」

「さっき言っただろ。

だからこそおれは、あの人を安全なところに引っ張りこまなきゃ――」

「どうやってだよ！　どんな女か知らないけど、どうせ安全対策なんか何も考えてないんだ。今の僕たちみたいに感情だけで突っ走ってるのを、こっちが無理やりコース変更なんかできるわけない」

《そう思うだろ？》

むこうも念話に切りかえたところを見ると、“発信器”のことを言いたいのだろう。

たしかに、今日まで彼女が見逃されてきた点については、おれもかなり意外の感を禁じえない。どうせ独り言も試行錯誤も筒抜けだろうからだ。

いつかおれがひがんで妄想したように、統括理事会に実験の失敗を見届けるとか、そういう意図があれば別だが。

「彼女なら」

「あ？」

《ジャク、何言ってんだ？》

「彼女なら木山先生を止められる」

《汎用性の高い電磁気力系の能力者、しかもレベル５なら対抗しや

すい》

おれのそれは、自覚していなかったがうめき声だった。

「……」

《つまり何か？　ジャク、おまえあの『超電磁砲』をパシらせる気だったと？》

《ああ》

御坂美琴を、積極的に事件へ介入させる。

このプランを出してきたのは、例によってオカルトさん知識体系だ。

今から考えれば、『風紀委員』や御坂さんに近づいておけという結論がしつこく脳内で繰り返されてきたのも、ほとんどこういう時の保険に理由があるのだろう。

木山先生を無事に返せという加藤くん知識体系の強迫観念をおさえつつ、ほとんど第三者的な立ち位置にいたキビツ意識体の採用するところとなったそれは、ありきたりで他力本願という救いようのない予備案だった。

が、オカルトさん自身が魔術師の女にちょっかいを出し、その影響か予想外に早く昏倒して貴重な時間をロスするという失態のせいで、きのう目覚めてから急遽本採用とあいなったのだ。

まあ、『幻想御手』のことを知ってすぐに準備だけ始めてて良かったとは思うが、無駄だった感も否めない。

結局、おれが彼女を煽れたのは白井さんに『白熱光線』と『幻想御手』の関係を匂わせたことと、『Ｊｕｌｉａｎ』での茶番劇の時だけ。

本来は白井さんあたりを経由してもうちょっと焚きつけるつもりでいたんだが、そんなことをするまでもなく本人が首をつっこんできてたし、おれが昏睡したせいで最後の最後まで中途半端な手助けに終わってしまった。

木山先生に協力を依頼した時点で情報の隠蔽も進む。捜査の進展がなくなるぐらい予想していてしかるべきだったのだ。

やっぱり、知りあって数日ではまったく重要視されませんね。

ただ何度も言うように、それではおれが困る。

“学園都市の暗部”というのがどういう連中かは知らないが、レベル５の上位を抱え込んでいてもおかしくない。普通に暮らしていて“七人のレベル５”という言葉はよく聞くが、それがどんな面子かは知らないことだし。

とにかく、そういう団体が木山先生を狙っていないにしても見張っている以上、勝負ができる程度の能力者に介入してもらわねばならない。

おれ個人は木山先生がめざしている、高性能の有機コンピューターを使った解析結果を望まないわけでもない。

だがレベル６を生みだせる可能性より学園都市の治安や社会の乱れが大きくなった以上、暗部が介入する可能性はもはや限りなく高い。このままいけば木山先生は間違いなく拘束され、裏世界でひっそりと生涯を終えることになる。

しかもごく近い将来に。

それはおれにとって危険すぎる。

彼女が実験に参加したことで罪に問われようが、加藤くんが悲しむ以外に影響はない。だがその過程でおれの覚醒や異常な言動（覚えのない記憶とか）についてバラされると、おれも一緒になって近い将来死ぬことになるからだ。

暗部の攻撃を防ぐためには、最低でも御坂さんのようなレベル５能力者の介入が必要、とオカルトさんは考えている。

能力がすべての学園都市において、レベル５というのは特権階級にひとしい。

けっこう何をやっても許される空気が教育・研究関係者からはにじみ出ているし、実際その気はかなりある。

もっといえば、御坂さん本人が無意識にそれを押しだして、事件に首をつっこんでいる節もある。彼女自身はさばさばした姐御肌（あねごはだ）だが、あのバトルジャンキーぶりにはレベルもかなり影響しているだろう。

ともかく。

どうせいるだろうレベル5を抱えた暗部の襲撃を未然に防ぐには、学園都市でもおそらくもっとも有名な御坂さんというビッグネームの乱入が有効なはずだ。

そして彼女は常識人だから、すなおに先生を『警備員』へ引き渡すだろう。

加藤くんのクラスメイト九人を救えるのが彼女だけという現状で、切り札の木山先生を喪うわけにはいかない。

たとえ刑務所にぶち込まれても、生きていれば出てこれるのだ。

偶然とはいえ知りあえたのは何かの縁。この際利用させてもらう。

“おれ”がいなかったキビツ世界のアニメや小説で、この時期に彼女が何をしていたかは知らない。だがこの現実で有力なコネをほかに作れなかったおれが身を守るには、そうでもするしかないのだ。

この騒ぎでレベル6が生まれない以上、木山先生はともかく『幻想御手』の被害をどうにかして回復することが、おそらく学園都市

側の優先目標になってくる。
ならば、おれごときが動いても偉いさんは気にしないだろう。
木山先生とて、さすがに『幻想御手』の解除キーのようなプログラムや音楽ファイルを持っていると思う。もともと演算のためだけに他人の脳を乗っ取ったのだし、それを放置して彼女自身が生きていけるとも考えられない。
そこは対策があるはずだ。

正義感の強い超能力者を事件に食らいつかせるぐらいなら。
解除キーをちらつかせて身柄の安全を確保するぐらいなら。
先生を暗部ではなく『警備員』の監視下に置くぐらいなら、なんとかなる。

そういう、楽観的な計画だった。

「……で、木山が“悪い人たち”に捕まってジャクが困るのはなんで？」

「決まってんだろ。再実験なんてごめんだよ。
もし他の九人も目覚めたとして、同じような実験でまた死ぬような目に遭うなら、今のままの方が幸せってもんだ」

介旅にはもう地声で加藤くんが喰らった実験について話してしまったので、遠慮なく声に出す。
それを聞いた彼は、さっきまでとは違う笑みを浮かべた。

「じゃあ、ここで何してるの？」

「ふざけんじゃねえよ。
今おれが飛び出してもおまえの重力場には勝ち目ないから、こうしてイラつきを押さえながらしゃべってるんだろ」

おれの答えは本音だったのだが、介旅はふぅ、とため息をつく。

「何だよ」

「あのさ、よく考えてみてほしいんだ。
僕は昏睡状態の君を、『幻想御手』の干渉波を押し潰して戻した。
同じことを、君の“同級生”にもできるとは考えないわけ？」

「……は？」

いったい何を言い出すのだこいつは。

おれが眉をしかめたのも間違ってはいないと思う。

「だから、その昏睡してる“最初の十人”の残った九人が起きれば、木山もジャクも一件落着なわけだろ？
今の僕なら、それができるって言ってるんだけど」

「……あのな」

おれ、正確には“加藤くん”のクラスメイトといえば、要するに眠りつづける木山学級の面々のことだ。
だいたい、おれを起こすのだってかなりの負担がかかったはず。
それをあと九人分やるだと？
気でも狂ったか。

そんなことをして、初ちゃんにどんな得がある？
友人にまでは親しくしても“友人の友人”まで話が及ぶと「それは気の毒に」で済むのがこの街だ。自分から危険に首をつっこまないという点ではその考え方も賞賛されるべきだし、おれも別にそれを否定するつもりはないが、真っ向からそれを打ち破るやつは逆に疑わしい。
だが、初ちゃんにどんな裏があるというんだ？

問題はほかにもある。
物理的な課題だって、ないとはいえないのだ。

「えーとな、確かあんときの実験は、なんたら結晶とかいうものをおれたち低レベル能力者に投与して、わざと能力の暴走を起こして経過観察するもんだった。

だからその結晶、正確には影響に個人差あるだろうからその“原本”ってやつがないと、誰がどういう風に脳活動を暴走させてるのかも、そこから逆算したもともとの脳波や神経伝達パターンも分からん。

いくらおまえでも、そこまでの“巻き戻し”はできないだろ」

とりあえず知っていることを答える。

オカルトさん体系は貧弱な理屈に不満そうだが、呪術なんて言いはじめたらまた介旅が笑いだしかねないので却下。

だが。

「できるね！」

ここで介旅が攻勢をかけてきた。まるで噛みつくような口調で。

ほとんど恐るべき自信だ。そこまで言える根拠がどこにあるのか、こっちにはさっぱりわからない。

こっちにはもうほとんど余裕がない。

『幻想御手』がある特定個人の脳神経パターンを統一プロトコルにして、低レベル能力者たちの脳でネットワークを作っていると証言したのはおれだ。『幻想御手』が共感覚を使って脳を刺激しているとわかった以上、仮説上の統一プロトコルの種類や原版が割れるのも時間の問題。

そして『風紀委員』には『書庫』がある。

前にあれを能力者図鑑と表現したが、今から考えると成年犯罪者も管轄に入る可能性があるし、学園都市で働く大人たちの個人情報も含まれていると考えた方がいい。

そこに木山先生の脳波がファイルされていない可能性は低い。

要するに、そろそろバレている頃なのだ。

介入を心配する立場上、戦力のない『風紀委員』だけを先行させるわけにはいかない。彼女がバトルジャンキーという点も不安なので、それなりに戦闘を回避する必要もあるし、どこの誰がいつ割り込んでくるかわからない状況では、やはりおれは現場に行かねばならない。

彼女のかしこい頭から繰り出される奇想にできるかぎり対応するためにも、俺がその場にいることは重要だ。

そこで介旅が邪魔なのだが、あちらは一向に退く気配がない。

「何も人間の脳を使って大容量の演算をやる必要はないさ。『幻想御手』を作れるほどの腕がある科学者なら、その“結晶の原本”を手に入れればいい。

さっきジャクが言ったみたいに、そこから逆算して元の脳神経パターンを再構築するか、少なくとも暴走シグナルを算出できればいいんだから」

「だから、その結晶の原本がないのに元のパターンを解析できるのかって聞いてんだ」

「僕が言ってるのはそういうことじゃないよ。
今の話を聞くかぎり、一刻も早く木山って女を確保して、結晶の原本を手に入れるのが最善じゃないかって話。
木山がそれを見つければ、自分で解析してくれる。解析できればワクチンを作るまでもなく、あとは僕の出番だ」

針金メガネは、そこでいったん言葉を切った。

「……なあジャク、僕はそんなに頼りないか？
自慢に聞こえるかもしれないけど、レベルアップした僕は正直な話、君ひとりが木山を追いたてるよりもずっと役に立てる。
そうじゃなくても、独りよりは現実性が上がるはずだ」

おれは黙っていた。
理屈はわかる。
だが損得についてはどうなのだ。

「……要するに、丸く収めるのを協力してやんよってか？
正直、それでおまえにどんないいことがある？
言ってくれるのはありがたいけど、友情がどうとかで話がうまく転がるような単純な事件じゃないことを、一番よく知ってるのはおまえだろ」

この際なのではっきり言っておく。
“発信器”があることに最初に気づいたのも彼なら、『幻想御手』の正体について学生の中で誰よりも早く突きとめていたのも彼だ。
だからこそ、ただの義侠心でここまで食いついてくるのはありえない。

何かしら自分の得がある。はずだ。
そうでなければ、こいつは頭がおかしくなっただけだ。少なくとも、おれと加藤くんとオカルトさんの共通見解ではそうなる。

しばしの沈黙の後、帰ってきた答えはこうだった。

「自分が楽になる。
『幻想御手』の影響を脳から常時掃き出すのは、なかなか負担でね。それにジャクの話だと、ここでまた倒れたら僕らもあの“最初の十人”みたいに、昏睡したままいつまでも放ったらかされるかもしれない危険がある。
あと、ジャクには悪いけど僕を関係ないことで巻きこんでくれた木山って女に、彼女が選んだ方法以外の解決策を見せつけてやれる」

あの御坂さんもまじめに木山を追ってるんだろうけど、どうでもいい。
実際それについては何も企んでいなかったのだろう彼は、彼女を一言で切り捨ててからこっちに目線を固定した。

「木山に後始末をつけてもらう。
被害者としては、当然の反応だよね？」

「……で、初ちゃんの結論は？」

「早いとこ木山をさらいに行こう。
ジャクだって、最初からそうしたかったんだろ？」

高出力のサイレントモーター。
強化プラスチックと軽高張力合金の組立式フレーム。
人力スタート（マニュアル）の発動機（オート）無段変速ギア。
最高時速一〇五キロ、無充電走行距離一四二キロ。

おれの全電動自転車（エレクトリックサイクル）は、水穂機構病院の駐輪場にまだ停められていた。

「これで行くの？」

「バッチャリなめんな。時速一〇〇キロは越えるんだ」

「充電大丈夫？」

「その時はあなた様の能力で、リチウムイオンバッテリーの酸化補充電をお願いできますでしょうか」

「なるほどね。走行中に見えないバッテリーの重力引っかきまわして電子のやり取りしろっての？　なんて無茶振り」

「初ちゃんが後部キャリアに乗らなきゃ、もうちっと走行距離も伸びるんだぜ」

「わかったよ、やればいいんだろやれば」

多少ぎこちないながら、互いに表面だけでも復活させつつある友人関係を仕切りなおしつつ、そんなバカな話をしたおれたちは出撃準備を整える。

フレーム中央下に小さくついている両足スタンドを蹴り上げ、サドルにまたがる。
初ちゃんはフレーム末端の後輪ハブに片足をかけ、後部キャリアに尻を乗せる。
ハンドルバーの真ん中につけられた充電メーターを見た。
四〇パーセント。まだいける。

「とりあえず充電はまだいい。この後五〇キロは走れるはずだし。最初は木山先生の場所を探ってくれ」

「了解」
《と、ここで携帯とりださないあたり、僕らもう完全に目をつけられてるよね》

エセ念話で嫌味を言ってくるが、その割に不満は感じられない。
彼も何かしら腹をくくったのか。

《今さら何を言ってんだか。病院であんな露骨な会話してる時点で、“発信器”どもが誰かに御注進してんだろ》

《確かに》

表面上は無言でそれぞれ姿勢を固定し、回頭。
腰を上げてペダルを踏み込む。

オカルトさん知識にある“別の歴史”では、こうした本当の意味での“原動機付自転車”が我が物顔で東京を走り回っていた。
中にはフロントフォークに刃物をとりつけて、不用心な一般歩行者を跳ねとばすことに快感を覚えるようなバカも出現し、特に湾岸地区は産業トラックと武装サイクルの激戦が繰り広げられていたという。

そういう暴走族もどきに徒歩で戦いを挑み、呪術というチートがあったにしても二〇台近いサイクルを全滅させたオカルトさんは、やはり実力者なのだろう。
自分もサイクルを駆って暴走族どもと“走り対決”までやったあげく、敗者を飼いならしていたモンスターに食わせるのはどうかと思うが。

とにかく。
二〇年ぶりに、オカルトさん知識体系が生かされる。

「じゃ、行こうか初ちゃん」

「了解。せいぜい笑えない冗談を噛ってやろうや」

モーターが本格的に駆動。ヒュ――ン、と小さくうなる。
世紀末の東京湾から、新世紀の西東京へ。
場所は移ったものの、この微音が示すことはただひとつ。

『自転車（サイクラー）乗り』の復活だ。

第十三話　笑えない冗談（後書き）

注…

『誰が加害者で～』

（C）Ｓｏｕｎｄ　Ｈｏｒｉｚｏｎ『５ｔｈ　ｓｔｏｒｙ　ＣＤ「Ｒｏｍａｎ」』０３．見えざる腕、２００６年。

第十三話外伝　置手紙（前書き）

空になった加藤若一のベッド脇にある、ツールワゴンの天板に置かれていた手紙。

第十三話外伝　置手紙

『ツクヨミ　コモエ　様

この前は無理に泊めていただいたところ、いきなり二度も倒れてしまい、本当にご迷惑をおかけしました。
ちょっとした脳機能障害だったようですが、もう日常生活には支障がありません。

本来なら自分の足でお礼に上がるべきところなのでしょうが、あいにく急用ができてしまってそちらに顔を出すことができません。
というよりも、カミジョウさんに案内していただかないと道順が分からないので、どちらにしても僕が先生の家へお礼にうがうことはできません。

なので、この場を借りてお礼を言わせていただきます。
一宿一飯の恩忘れまじく候。ありがとうございました。

カトウ　ジャクイチ』

>i2181 1—2938<

『カミジョウ　トウマ　様

魔術師相手のバトルとか倒れたおれの処置とか、ほんとにいろいろすみませんでした。通報もしてもらったみたいで、ありがとうございます。

おれはこれから退院して、ちょっとやり残したケンカとお礼参りをしてこなくちゃいけないので、病院でカミジョウさんに直接話すことができません。

でも、インデックスさんについてお話しておきたいことがありまして。

こうして慣れない文章にしてみました。

まず、おれは学園都市に来るまで魔法みたいなものが好きだったので、そのとき覚えたことからいくつか通用するかもしれない“おやくそく”を書き留めておきます。

特にああいう西洋魔術師は、民話なんかに語られている決まりき

った術式が、そのまま真実を言い当てている例も少なくないと思うんですよ。民俗学的に考えて。

魔力みたいなものがあって、それを方程式に通さないと何もできないとか。

自覚があればだれでも呪術を使えるけど、体に悪影響があるとか。

属性があって、魔術師によって得手不得手があるとか。

あの赤毛黒コートは、明らかに火の魔術師ですし。

カミジョウさんがどんな能力持ってるのかは知りませんが（御坂さんから電撃もらって無傷なんですから何かあるんですよね）、ケンカ慣れしてるみたいですし、逃げまわった方がいいと思います。

ナマ言ってすみません。

次に、インデックスさん本人のこと。

正直いまだに、彼女が魔道書ってものの集合だなんて信じられません。信じられませんが、赤毛黒コートみたいなカルト野郎が実際

に彼女をねらってるようなので、その前提で話します。

とりあえず、記憶について。

一〇万三〇〇〇冊を丸暗記とか、一年分しか記憶がないとか聞いたもんで、念のため。

能力が暴走したとき主治医やってくれた脳科学者にみてもらって雑学つけたんですが、人間の脳は順当に生活していけば一四〇年分の記憶をたくわえられるんだそうです。

要は一年分の記憶が、脳容量の一％未満なんです。

これは科学的事実ってやつです。

学園都市の外でも、脳外科医ならみんな知ってます。

逆にいえばカミジョウさんの言うとおり、中身がどうでも一〇万三〇〇〇冊の本を覚えた程度じゃ、彼女はふつうの人間と何も変わらないはずです。

もし何か異常があれば、真っ先に魔術師を疑ってください。

それから、よく心配されることなんですが。

記憶容量をオーバーしても人は死にません。

処理落ちの高熱かなにかで間接的に体がやられることはあっても、容量オーバー即死亡はありえません。

だいたい、脳の場所ごとに“個人的な思い出”とか“単語の意味知識”とか“手続き”とか、記憶するものの種類によって部位が決まってきます。魔道書を覚えること＝知識と一般的にいう記憶喪失、つまり“思い出”をなくすことには何の関連性もありません。完全にデタラメです。

きっちり何日ごとに容量整理するとか俗説がありますが、大嘘です。

これも事実です。アカの他人ふたり分、合計一〇〇年分近い記憶を脳に新しくつっこまれても、それを睡眠中に整理して元気に生きている人もいるんですから。

状況が状況だから白状しますけど、その記憶つっこまれた人ってのはおれです。

魔術師とのバトルに乱入したのも、こうやっていろいろ書けるのも、だいたいその記憶のせいで思考回路が変わってきたからだと思います。

だから相手が記憶を口実に保護とかほざいたら、遠慮なく言ってやってください。

呪術家はそういうエセ科学も得意なはずです。

これはおれの当て推量ですが、もし本当に彼女がなにかの脳障害を持っていたら、それは呪術のせいだと思います。
特に、何年単位で日取りを決めて脳を治療していたような場合は。

前におれがツクヨミ先生の家で愚痴ったように、誰か知りませんがインデックスさんの仲間はともかく“持ち主”は、彼女を人間扱いしてない節があります。何十日ごとに祈祷（きとう）をかけないと自殺するとか意識がなくなるとか全身不随になるとか、そんな呪いでもかけてるんでしょう。

呪いといえば、彼女は魔道書がどうのと言っているわりに、呪いや魔法みたいなものが自分にかけられている可能性を口に出していません。
カミジョウさんにこれ以上迷惑かけたくない、ってだけかもしれませんが、おれが思うに呪いを偽装する別の呪いがかかってるんじゃないかと。

ひょっとすると、その偽装呪術が破られた時に発動するような、別の迎撃呪術がさらに仕掛けてある可能性もありますが、そういうこと言ってるとキリがないので、このへんでやめときます。

それから、彼女の身分について。

よく考えてみたら、あの人って魔術師と同じで明らかに不法入境者ですよね。

カミジョウさんの話だと、バトルが始まるまえ掃除ロボットに見つかってたみたいですけど、その時点で学園都市の治安部隊にはバレてると考えるべきです。

カミジョウさんがこれを読むのはたぶん二十四日なので、かなり日にちが経ってます。『警備員（アンチスキル）』が彼女を捕まえないのは、ほかに大事な不法入境者がいるからか、ひょっとしたら統括理事会あたりと密約があるのかもしれません。

なんにしても、彼女がまだ捕まってないなら、裏で身分保証がされてると考えていいと思います。公式の場でＩＤ確認されなければ大丈夫でしょう。

最後に、魔術師のこと。

赤毛黒コートはカミジョウさんの方が詳しいと思うのでいちいち言いませんが、たぶん次は例のカードに防水加工とか物理的な彫りこみとかしてくると思います。

あいつとやりあった時にタメ口きいたのはマジ勘弁してください。

もうひとつ。

休憩スペースでちょっと言いましたが、あいつにはもうひとり仲間の女がいます。

名前はカンザキなんとか。

片筒切ったジーンズにTシャツのすそを結んでて、二メートルはある刀を持ってます。でも、たぶん最初のうちはそれを使うふりして、細いワイヤーでカマイタチみたいなのを撃ってきます。たぶんカミジョウさんの能力でも防げません。

そこら辺の男より力持ちじゃなきゃ、あんなマネはできないと思います。

正直あれチートです。勝とうと思わないでください。

ただ、しゃべりかけるのは有効かも。

彼女はブチ切れなければ人の話を聞くタイプみたいですし、赤毛よりは理性残ってる人のように感じました。

なんでインデックスさんをつけ狙うのかはわからないので、チャンスがあったら聞いてみてもいいと思います。ひょっとすると本人

はまったくの善意で“悪い魔法使いからインデックスさんを守る・取りかえす”つもりなのかもしれません。ｐｇｒ。

もっとほかに仲間がいることもありえます。インデックスさんはそうとう狙われやすい立場みたいなんで、余計なお世話かもしれませんがホントよろしくお願いします。

なんでか知りませんが、逃げてきた彼女をこのまま学園都市に泊めとかなきゃいけない気がするんです。
よく分かんないですねすみません。

なんかいろいろ指図してるみたいでホントすみません。
一晩ツクヨミ先生の家にいただけでこんな偉そうなこと言うのはあれですが、どうせ誰かがわけわからん連中と戦うのなら、事前情報はあった方がいいかと思っていろいろ書いてみました。

何か、参考とかにしてくれたらありがたいです。

では、お元気で。

カトウ　ジャクイチ

追伸：

この手紙といっしょにおいてある白いハンカチは、売店で買いました。

真ん中に黒で書いてある星形のマークは、お守りみたいなものです。呪術が使われてる時には、身につけていれば何かの効果もあると思います。

その上に乗っかってる白い飴玉は、インデックスさんの分のお守りです。見た目通りのしろものので、ふつうに彼女が口の中で転がし

てくれればそれでいいです。

右手では触らないでくださいね。割とマジで。

カトウ　ジャクイチ』

第十三話外伝　置手紙（後書き）

一応、念のため。

注…

『ｐｇｒ』

インターネットスラング、ローマ字略語の一種。発音は「プゲラ」他。

他人を嘲笑する「ププッ、ゲラゲラゲラ」の両擬音語が、連結・略語化されたものらしい。語意より音から意味を汲むべきもののひとつ。

第十四話　『自転車乗り』（前書き）

捏造設定多発注意。

第十四話　『自転車乗り』

「ジャク、できるだけ軌道は安定させてくれよ！」

「努力はするからそっちも早いとこ頼む！　青いスーパーカーな！」

ノーヘルで後部キャリアに人を乗せるという大胆な道路交通法違反を実現しつつ、サイクルで歩道から飛び降りて直線軌道に乗せる。しょせん健常歩行者用に作られた歩道は、高速無音を売りとするサイクルには段差が多すぎて向いていない。逆に横幅と重量がある自動車、中でも学園都市に多い無人バスむけにアスファルトを分厚くした車道へ出れば、こっちのものだ。

いくら最高時速が一〇〇キロ超とはいっても、巡行速度は四〇キロ。

都市高速に入るまでは六〇キロ以上出すわけにいかない。違反切符的な意味もあるし。

落ちついて運転しているその間に、初ちゃんが木山先生の居場所を探るというわけだ。どうやっているのかは知らないが、街じゅう

にある監視カメラの映像端末から警備ネットワークにでも侵入しているのだろう。
電子にかかる重力を操るという、面倒極まる方法で。

こんなことをうわの空で考えていられるのも、ほとんどオカルトさん知識のおかげなのだが。
後ろでカッターシャツの両裾をバタバタ言わせている初ちゃんはもちろん、パーカーでだいぶ風を押さえられているおれにとっても、長時間の二人乗りはきつい。
最短距離で先生に追いつかなければ。

おれは、このサイクルの能力を目いっぱいに出し切ったことがない。
バスの路線がない方に遠出するときに、まさしく巡行用に使っていただけなので、交通法規はきちんと守っている。
そもそもサイクルのカタログ値を信用していなかった。

ところが、現実にこのサイクルはモーター音の増量もなく、軽々とオートモードで五〇キロ台に入っている。
そして何より、その状態で体重移動や周囲の確認をすばやく行うだけのクセが、この身についていることが意外だった。
この体は加藤くんのものであって、オカルトさんのものではないのに。

もっとも、オカルトさんに言わせれば当然ということかもしれない。

彼が以前おれに見せた夢によれば、体は脳内の思考に引きずられる。

無意識レベルではその逆もかなりの割合でありうるが、脳が勘違いしたまま体にそれが出るということは珍しくもなんともない。

たとえばオカルトさんの記憶では、彼と同様に魂の“転生”――意識体の伝達パターンを転写された女性の眉びさしが深くなり、薄かった瞼が上下に大きくひきさかれ、声まで野太くなったシーンさえ存在する。

要するに前世はかなり鍛えていた男だったわけだ。

ちなみに、その男の名は三島由紀夫（みしまゆきお）という。

作家であり、剣士であり、霊能力者だった男だ。

オカルトさんとは一時共闘、のち対立し、最後は追いつめられ自殺した。

《ジャク、そこを右！》

いきなり脳内に意思が伝わってきた。

何事かと思う間もなく、おそらくはオカルトさん回路のおかげで、反射的にハンドルを右へと切る。右足を推進力としてはもう用済み

のペダルから蹴り飛ばすように離し、地面へなでつけるように広げた。

エセ念話の方が、ヘルメットに覆われた上に風のせいで耳が使い物にならないおれへの呼びかけに向いていると踏んだんだろう。頭に血が上っておれは考えてなかったが、実にありがたい話だ。

《何かわかったのか》

《南にかっ飛ばしてる青いスーパーカーが、中央環状線左回りの監視カメラでフォーカスされてる。『風紀委員』もさすがに追ってるみたいだね。

だいたい一分半前、四号線のすぐ北》

《第七学区を出る気だな。今どこだ》

《予測進路上の監視カメラに入ろうとしてるけど、やっぱ電磁気相手はきついよ》

《なるべく早く頼む》

それだけ言って念話を切る。

先生がどこに向かっているか、だいたい読めてきた。

＞i２１８１１―２９３８＜

中央環状道路は、名前のとおり学園都市の中央部をしめる第一・第五・第一八・第七・第八学区をぐるりと一周する高速道路だ。第七学区では東の第一八学区と北の第八学区につながるので、おおむ

ね南東から北西に抜ける。
都市高速四号線はこれと交差する放射状の道路で、始点は第七学区中央部、内環道から分かれて学園都市の南西に向かっている。

南西にあるのは第一五・第一三学区。
第一五学区には繁華街やマスコミが集中していて、先生の逃走先とは考えにくい。
だとすると目標は第一三学区になる。

学園都市を東西に流れる大川にかかった拝島（はいじま）橋を、サイクルが一直線に南下していく。橋の上からでは、川面は見えない。

……やはり彼女に裏はないのか？

《初ちゃん、たぶん向こうの狙いは学園都市南西部だ。四号線外郭を当たってくれ》

《南西部？　なんでわかるのさ》

《バカ、四号線つったら第七学区から南西方面だろうが。
それに、あの道は終点が第一三学区だ。あそこは幼稚園や小学校が多い。つけ加えると、おれの母校もあそこにあった》

《母校？》

《先進教育局、児童能力教材開発所、附属小学部、臨時編入生学級。
通称『木山学級』だよ》

後ろで一瞬息をのむ気配が、風に流れて後方へ消える。

《……そこが目的地ってこと？》

《いけるか？》

それまで自信ありげにおれを誘導しつつあった初ちゃんが、とたんに口ごもる。
どういうことだ？

《学区の外に出られたら、もう僕の能力じゃ追跡できない。
ジャク、このチャリ高速に上がれる！？》

《こちとら出力二・五キロワット、法律的には普通二輪だ。上がれないわけあるか》

《今すぐ行って。南に一キロ弱》

《四号線第七インターだな！》

純粋に距離が離れすぎると、電子ネットワークに干渉できないの

か。

能力的限界か本人の不慣れか知らないが、今の初ちゃんにも弱点があるのを喜ぶべきか悲しむべきかなどと考えてオカルトさん理性に叱咤されつつも、念話だけ威勢よく答えてモーターを加速させるためにペダルを踏み込んだ、

そのとき。

初ちゃんから悲鳴が聞こえた。

《ジャク、どうなってんだ!!
四号線下りに青のスーパーカーはいない！　中央環状線をまだ南下してる!!》

脳より先に脊髄が動いた。

非科学的だが、そうとしか思えない速さでおれの両手はハンドルを切っていた。

今度は左のペダルがアスファルトとこすれてガタガタ跳ねたが、サイレントモーターが強引に突っ切る。

どうなってやがる？　こっちのセリフだ。
あそこに行かないとしたら、木山先生にどんな逃げ場がある？
まさか無計画に高速を突っ走るようなことはしないはず。テンパったおれならともかく、彼女は頭がいいんだから。

ならばなぜ？
どこに？

などと頭を混乱させつつ、おれの中のオカルトさん回路は、しっかり体に命令を出していた。

オカルトさんによれば、サイクラーに必要な資質はいくつかある。平均的なバランス感覚はもちろん、コースをさっさと決める判断力、障害物をすりぬける動体視力、そして“ゴキブリの知恵”。

最後のは、要するにどういう選択肢をとれば自分がより確実に生き残れるかを総合的に判断する能力だ。例えばサイクラーの場合、誇り云々もさることながら純粋に機動力や衝撃力においても、よほど足場が悪くなければサイクルを捨ててはいけないとされる。
そしてゴキブリは、自分が走りまわる場所について、事前知識を得ておくらしい。

というわけで、

《ジャク、どうした!?　そっちは東だぞ!》

《計画変更だ。
南東五キロの二七インターから中環道に乗る。目的地がわからなくなった以上、相手のケツを舐めていくしかない》

きのうの夜携帯で、夜中までかかって第七学区南部一帯の高速道路とインターチェンジを調べておきました。オカルトさん知識の強い勧めだったが、どうせこういうことになると思っていたんだろうな。

確かにランボルギーニ社のスポーツカーを通勤に使っている段階で、いくら高給取りの医者でもかなりの額を車につっこんでいるはずだ。
木山先生は多趣味でもなさそうだし、おそらく金の使い道を自動車だけに絞っている。運転技術も相当だろう。

となれば彼女や『風紀委員』の連中とカーチェイスを展開することだって、じゅうぶんに予測できるわけで。

《ジャク、この展開予想してた?》

《最悪の三歩ぐらい手前としては》

《くっそ》

ジャクがわざわざ念話でうめく。おれに伝えたい不都合でもあるのか？

《初ちゃん、何か言いたいことでもあんのか？》

《あるに決まってるだろ。とにかくあの木山ってやつをどこかでかっさらえなきゃ、僕たちの負けなんだ》

その点は否定できない。

もともと初ちゃんが言いだしたことだし、わかってないはずがないか。

木山春生の“障害がない状態を保った”捕捉。

それがおれたちの目標だった。

《そして“発信器”がある以上はこっちの行動もモロバレ、成功しなければほとんど確実にろくでもないことが待ってる……だろ？》

《そんなわけで急いでねジャク》

《わかってるって》

おれも止まっているわけじゃない。
初めて説明書に載ってる最高速度を信じたおれは、さっきまで気にしていた速度制限をまるっきり捨てて加速を続けている。
あいかわらずサイレントモーターがいい仕事をしているし、時々脇をすり抜ける車の方から見ればゴーストライダーに見えるかもしれない。
そんなかっこいいマシンに乗ってないけど。

しかし、むかし自転車が軍隊で“高機動車両”として使われていた時に『銀輪（ぎんりん）』などとカッコつけた名前で呼ばれていたことからもわかるが、高速運転する自転車をはたから見ると銀の線に見えるらしい。
しかも無音なので不気味だと思う。
時々歩道にいる人が振り返ってこちらの方を見ているが、やはり追い切れていない。

まあ、そんなことはどうでもいい。
とにかく中環道にたどりつかないと。

《ジャク、インターチェンジまで二キロ》

《まだ三キロか。あースピード上がってねえなあ》

《今から上げてくれるよね》

《やってますよ》

赤信号は当然無視。バスと大型車の間を縫って、理系が喜びそうな曲線を描く。

《ジャク前！》

弾かれたような初ちゃんの念話。

もちろん声は風に流されるから念話の方がいい、というメリットは彼もわかっているのだろうが、それをとっさに実現できるあたり彼も人間離れしてきている、などと思っていたのだが。

右折のためか、交差点の真ん中で立ち往生している大型乗用車があった。

コースの直線上に。

《チクショウ》

事態を理解した意味だけをこめて念話を返し、ハンドルを左に切る。

また左のペダル先が路面にこすれてザリザリ音をたてているが、今は気にしちゃいられない。初ちゃんの声なき悲鳴が風で交差点に取り残されているぐらいのものだ。

左へ直進。元の道路に切り返すのはまず無理だ。

《ジャクどうすんの、二七インターから離れるよ》

《初ちゃん、青い車は追えてるか？》

初ちゃんのつっこみに質問で返す。非常時だし許してもらいたい。
現状で敵対勢力はなし。というより、おれたちのような小者につきあっている暇は、裏社会のエリートたる暗部能力者集団にもないのだろう。
なにせコースを大幅に外れてしまっているし。
だったらこの際、周囲のことも考えて賭けに出るしかない。

《ああ、ずっと中央環状線を走ってる。そろそろ東に曲がるころだよ。
あのまま行ったら第一八学区だけど、なんで？》

《放射三号とのジャンクションは？》

三号線は、第七学区から南東に向かう高速道路だ。
行き先は第二二・第一〇・第一一学区。
それぞれ大深度地下建設、少年更生、外部との物流がメインになっている学区だ。

《まだだけど、今度はそこで曲がると思ってるわけ?》

《放射三号かどうかはわからない。だけど絶対、次の京八多重(けいはち)ジャンクションで中環道からは離れる》

《そう言い切る根拠は?》

ちょっと非難がましい初ちゃんの念話。

まあ無理ないか。しかし今度は確証がある。

今の木山先生が、長点上機(ながてんじょうき)学園や国際空港に興味あるわけないんだから。

《このまま中環道を進んでも、第七学区中部から南東に向かって近いのは、ジャクが言うように第一八学区と第二三学区だ。

第一八学区は能力開発のトップ校がひしめいてるとはいえ、どっちかといえば今すでに高いレベルの能力者を育てることに力を入れてる。それに中学以上の学校がほとんどで、木山先生との接点は低い。

第二三学区は論外、航空宇宙開発とは何の関連もない》

《つまり、このまま環状線を進む可能性は低い。

だったら南の、少年院なんかがある第一〇学区の方が可能性あるってこと?》

《そんなとこだ。
それに先進教育局系の建物も、第一三学区以外だとそこしかないしな！》

アクセルの代わりにペダルを踏み込む。
ヘルメット越しに耳へ轟音が侵入。手首足首の皮膚がそろそろ冷たいを通り越して分厚くなってきた感触もあるけれど、かまっていられない。
もうすでにブレーキハンドルでどうこうできる速度ではないが、その時は最終手段としてペダルの逆回しを計算に入れればいいことだ。

《第一〇学区は原子力開発もやってる。大型トラックが物資を搬入しやすいように、裏道でも結構広く道幅とってあるからな。
最悪、高架下を走ればいい》

《そこまで考えてるなら、何も言わないよ》

ほとんどオカルトさん思考回路の受け売りとも知らず、初ちゃんはどこか満足げな念話をよこしてきた。

《ジャク、半分当たりだ。
京八ジャンクションから南西一帯にかけての監視カメラの映像ネットワークリンクに、他と比べても異常なプロテクトが掛かってる。今の僕じゃ覗けないけど、こりゃ異状ありって宣伝してるようなもんだね。
『警備員』が戦時体制だ。木山は一七三号バイパスに入ったんだよ》

おれの肩を握りしめる手に、必要以上の力が入っている。
初ちゃんもそろそろ限界みたいだし、おれもいいかげん車をよけ続けるのはきつい。
その状況でこの一言だ。

《一七三（イチナナサン）？　あんなん名前だけで、実質いなかの産業道路じゃねえか》

《だから道も空（す）いてるって話だろ。それに第七学区から第一〇学区の産業実験区画に抜けるには、あれが一番近いみたいだし》

舌打ちしたい思いで、初ちゃんのことばの意味を咀嚼（そしゃく）する。
一七三号バイパスは、今さっきおれたちが強制的にコース選択させられた、学園都市の南北を蛇行しながらつらぬく市道一号延長線

から分かれている。
途中で高速道路と接続し、第一〇学区の南西へつながる道だったはずだ。

学園都市南西部は正面に丘が残り、大人しか出入りしないような研究施設が多い。実験動物の処分場や原子力工学の研究がさかんで、学生には近寄りがたい場所だ。

……いや、だからこそ孤独な研究にはもってこいの場所なのか？
三号線ほど目立つ道路でもない。たしかに隠れ場所の沿線には向いている。

《クソ、了解》

高架道路を半秒立たずに潜り抜ける。
交通量の多い道で六〇キロ以上出すのはもう疲れた。追いかけるにも、産業道路の方が都合がいいかもしれない。
となると課題はひとつ。

《今おれたちがいるのはどこだ！？》

《興和会総合病院の脇。この先の八幡町交差点で左折すれば、一七三号の第一インターにつっこめる》

よし。
希望が見えてきた。
――『夢みる機械』よ、応えたまえ
心の中で意味があるともないともつかない呪文を唱えつつ、おれは前方だけを見て念話を返す。
タイミングが重要な局面だ。
《ナビありがと》
《どうも……》
「……うわっ！？」
八幡町交差点のカーブがおれの靴底と左ペダルの下四分の一をけずりとり、初ちゃんの念話が途中で地声に変わった。
一七三号バイパス。
そこで何が起きていたのか、この時のおれたちはまだ知らない。

第十四話　『自転車乗り』（後書き）

道路網はアニメ版の描写と学園都市全図、および三多摩地域の道路地図とにらめっこして作った妄想です。捏造なので気にせずさらりと流していただければ幸いです。

第十四話外伝　Ｆａｌｌｉｎｇ（前書き）

乖離と修正の始まり。

第十四話外伝　Ｆａｌｌｉｎｇ

「どうするんですか。年貢の納め時みたいですよ」

顔を左に向けて、助手席の初春飾利は諫（いさ）めるように声を出した。

電磁式の手錠がかけられた両手には、一般的な音楽プレーヤーと、『幻想御手』をアンインストールする治療プログラムを収めたＳＤカードが包みこまれていた。

いまや昏睡被害者にとって、ただひとつの希望である。

どういうつもりか、ドライバーから手渡されたものだ。

すでにオリジナルデータは、当局の不用意な捜索によって永遠に失われている。初春の手に落とされたコピーファイルだけが、学園都市とプログラム製作者自身の運命を握っているわけだった。

市道一七三号バイパス線、狭間（はざま）非常口直後。

青いスイングアップドア改造型ガヤルドが停車している。

製造元が誇るエンジンも速力も、今は役に立たない。

行く手を塞がれているからだ。
濃紺白帯に「Ⅲ」のマークをつけた、機械化歩兵部隊に。

「『警備員』か……。
上から命令があったときだけは、動きの速いやつらだ」

ガヤルドの運転席に腰を沈め、ハンドルに腕と顎をのせて白衣の女が呟く。
乾いた肌と茶色の髪は、生まれつきか長年の労苦によるものか。
目の下のクマが後者によることは確かだろう。

彼女がここまで運転、というより操縦してきたスーパーカーの前方には、同じ色により深みをくわえた紺色の防弾チョッキが並び、その彼らを守るように給湯ポットをそのまま大きくしたような警備ロボットが横隊を組んでいる。
最奥に『警備員』の装甲警備車が陣取っているのは言うまでもない。

彼らが出動してきた理由はひとつ、学生の脳に持続的な悪影響をあたえる『幻想御手』頒布（はんぷ）の主犯を拘束するため。
ありていに言って、木山春生はピンチにあった。

だが。

初春は、心のどこかで気味の悪い疑問を抑えきれなかった。

『警備員』は公組織ではあるが、自発的にその任を希望した教職員だけで作られている“義勇軍（ボランティア）”にすぎない。しかし彼らは、必要な訓練経験と資格、そして銃砲など火器をもつ治安部隊だ。

その圧倒的な鉄と鉛の暴力を前にして、かすかに笑みさえ浮かべるこの態度。

彼女はひとりの犯罪者で、科学者で、民間人のはずなのに。

この余裕はいったいどこから来るのか。

その答えは、本人から語られる。

「『幻想御手』は、人間の脳を使った演算機器を作るためのプログラムだ」

隣の拘束した初春飾利へ声を向けつつも顔と目の先はハンドルに落としたまま、運転席の木山春生は薄く嘲笑う。

『警備員』の降車勧告も、遠い雑音でしかないようだ。

「だが同時に、使用者に“ある副産物”をもたらしてくれるんだよ」

「えっ……」

助手席の絶句を感じた乱髪のランボルギーニ・フリークはガヤルドのハンドルから目線だけを上げなおし、はっきりそうとわかるほどの笑みを浮かべた。

傲慢に、卑屈に、そして楽しげに。

「おもしろいものを見せてやろう」

一七三号バイパス狭間非常口西側の路面が直径十二メートルにわたって陥没するのは、その五分後のことである。

＞i218811—2938＜

特定周波数の放電。
一部外皮の消滅。
感覚神経系の密着。

先の土煙につづき遠慮なく放たれた電撃をめざして、一路その場へ奔りくるものがいるとも知らずに。
それらの現象がつみかさなって、喜劇的な奇跡は起きる。

《せんせい？》

《せんせい！》

《せんせー？》

《きやませんせい？》

初春飾利が意識を取りもどして最初にしたことは、手の内の確認だった。

物理的な意味でのそれだ。

軽く握られたままだった両手にそれぞれ音楽プレーヤーとＳＤカードが残っていることを確認して、それらを左手にまとめ助手席のドアを開ける。

ランボルギーニドアと通称される、車軸と直角に九〇度上へ開くという日常生活では不便そうな扉を押しあげて車外へ脱した彼女は、そこに散らばる瓦礫と眼前の光景に、一瞬息を止めた。

「……道がなくなってる！？」

ガヤルドの数メートル前から先が、不完全な円を描いて切りとられたように抜け落ちている。一部はガードレールまで引き裂き、そのまま高架下へ沈んだようだ。

そしてその向こうには、彼女が『風紀委員』である以上なじみ深い紺色の集団。

横転したバス、アルミ缶のように潰れ中身をのぞかせるロボットたち。

そして人が、累々と横たわっていた。

「！！」

それが気を失う直前にガヤルドの前で停止線を張っていた『警備員』の部隊と意識するより速く、初春の聴覚は別の場所から放たれた声をとらえる。

状況からみて、その声というより咽音の主は考えるまでもない。

そして発生源の方向は――穴の中。

巨大な陥没口のふちに手をついて下を見やった彼女は、そこで意外なものを見た。

「御坂さん！？」

下は一面、砕けたコンクリートと幾何学的曲線をなす鉄骨が散乱している。

その手前側に立つのは、彼女が以前に見当違いの憧憬を向けて、今はまた違った意味で慕っている中学生、御坂美琴。

そのすぐ前で、初春をその意思にかかわりなくここまで車に乗せてきた木山春生が、犬のごとく四つ足にくずおれていた。

擬似多重能力保持者（デュアルスキル）の木山が見せている絶好の隙。

彼女の目からみても喧嘩っ早い御坂さんが、なぜそこで拘束あるいは文字通りの意味での無力化をはからないのか、初春は一瞬だけ不思議に思う。

一瞬だけ。

彼女にも、ふたりの会話は聞こえていた。

《今なんつった？》

《だから、さっきの御坂さんが木山春生と戦ってるって。結構ガチバトル》

《クソ、裏目どころじゃねーぞ！　何やってんの先生！
作戦変更だ、木山先生を“彼女から”切り離す……お願いできますか介旅さん》

《無理とは言わないけど難題だよねこれ。
なんでわざわざ右に飛ぶんだよ、しかも合図なしで》

《左に原子力実験炉があるからに決まってんだろ。あと、おれは自分の着地だけで精一杯になると思うし》

《じゃあなんでこのチャリは直進するわけ？》

《今からコースを固定して、手放し運転でやることがあるんだよ。“拍手”とか》

《はあ？》

――第一コマンド

――神ならぬ身にて月の公転運動に参加

御坂美琴の視界は歪んでいた。
平衡感覚が失われ、体の支えだけが軽くなったような浮ついた感

覚。
ただでさえ不安定な足場が、よけいに柔らかく感じた。

「なんで……なんであんなこと……」

もし。
もし今自分の脳に送りこまれた映像が、目の前にいる女の記憶なのだとしたら。

その口から無計画にこぼれた言葉を聞き取ったのかどうか。
木山春生は喉で湿った音を絞り出しながら、ゆっくりとしかし連続不均等な動きで立ち上がる。

「アレは表向き、ＡＩＭ拡散力場を制御するための実験とされていた。が……実際は“暴走能力の法則解析用誘爆実験”だ。
ＡＩＭ拡散力場を刺激して暴走の条件を知るのが本当の目的だったというわけさ」

「じゃあっ」

「暴走は意図的に仕組まれていたのさ。もっとも、気づいたのは後になってからだがね」

がつん。

ふたりの中学生の耳に、同時にそんな幻聴が届いた。

実際には存在しない側頭部への衝撃により、これまでにまして体のバランスを失い数度近く傾いた視界。目の前にいるはずの白衣の女へ呆然と焦点を合わせようとする。

今この科学者は、自分が人体実験の片棒を担がされたと言ったに等しい。

そしてそれは、おそらく事実だ。

「あの子たちのほとんどは、今なお眠りつづけている。目覚めた子はひとりだけ、しかも脳に障害が残っているが、それを治す手立てはどこにもない。

私たちはあの子たちを、使い捨ての実験動物（モルモット）にしたんだ！！」

「……でも、そんなことがあったんなら、『警備員』に通報して」

「二十三回」

御坂美琴の揺らいだ声が、水たまりに張った氷のように踏み割られる。
か細くさえある、木山の啼き声によって。

「え？」

「あの子たちの恢復手段を探るため、そして事故の原因を究明するシミュレーションを行うために、『樹形図の設計者』の使用を申請した回数だ」

《しかし常盤台のレールガン様を相手に時間を稼げとは、初ちゃんもたいがい無理を通すやつだよな》

《しょうがないだろ、もう片方の役目は僕の方が成功確率高いってふたりで合意したんだから。映画と違って、僕たちはすり抜けながらかっさらうなんて芸当、できるわけないんだしね》

《というか、それやったら先生の腹が潰れる》

《だからって減速はできないんだろ？　しょうがないよ》

《急がないと、どっちかが無茶を始めかねないしな。あー“空に還りてえ”》

《奇遇だね、僕もそう思う――
見えてきたよ》

――第二コマンド

――天を射る矢に心を重ね想う

「だが却下された！　二十三回ともすべて！！
統括理事会がグルなんだ、『警備員』が動くわけがない！！」

「だからって、こんなやり方――」

「君に何が分かるっ！！」

高架上を反対車線にむけて駆けだしていた初春が、思わずビクッと肩を震わせた。
それほどの叫び。
鬼気迫る彼女の様相は『幻想御手』の“副産物”にともなう目の

異常充血とあいまって、同じ地平にいるひとりの女子中学生を止めさせるには十分だった。

そして、倒れ伏した『警備員』たちのごく一部が見た。

先ほど青いガヤルドが走ってきたそれとほぼ同じコースを取って、矢のようにこの戦場へ突っこんでくる“自転車”を。

《ジャク、道がない。護送に五〇〇秒はくれないと》

「あの子たちを救うためなら――」

《このままつっこむ。落ちる前に飛んでくれ。作戦開始》

「私はなんだってする！！」

《りょーかい》

「この街のすべてを敵に回しても――」

『そうは行きません』

「！？」

突然、対峙するふたりの頭の中に直接声が響く。

美琴は先ほど木山の記憶を強引に押し開けたとき経験済みだが、木山にとっては初めてのことだ。念動力（サイコキネシス）系の能力で、周囲のコンクリート片を二〇個ほども浮かせて警戒態勢をとる。

しかし“頭の中の声”の方はお構いなしだ。

『木山春生、と言いましたね。悪いお話でないことは認めましょう。しかし、せっかくですが』

その瞬間、頭上に二つの影。

反射的に顔ごと空を見上げたふたりが見たのは、二輪車に乗ったまま陥没した穴の反対側まで一直線に落ちてゆく見知らぬ誰かと、高架の橋脚を這ってくるがごとく空中を鋭角に滑る別の誰か。

『お断りします』

今度は生身の声。

そこで美琴の記憶が、何かを呼び覚ました。

違う。片方については、違う。

興奮して頭の回転が速くなっているからか、その一瞬で美琴の脳裏に、三日前にも話した男子中学生が現れた。

あのにっくき上条当麻にねぎらいの言葉をかけた、生意気な彼。

そこで彼を睨みあげたのが、彼女の失策となる。

「かと……ッ！？」

はっと気づいた時には遅かった。

空中を鮫のように切りこんできた別の誰かは、瞬きするより短い間に自分の周りを避けつつも、木山春生のもとへ急接近。

状況を理解できていない体の木山にとりついて腰を両手で抱きかかえ、そのまま一度も地面に立たないまま加速し、右前方へ消えた。

「なっ！　あんた……」
「やあどうも御坂さん」

目がそれたすきに、今度はもう一方から声がかかる。
今度は落ち着いて対応しなければならない。
事情がどうあれ、今この場に立っている時点で、彼が自分と対決姿勢を取っているのは間違いないのだから。

あらためて前方に向き直る。
彼も念動力系の能力者なのだろうか、自分の脇にコンクリートの大破片をがしがしと無造作に積み上げているその少年を、美琴は知っていた。

「……加藤若一。あんたまでグルだったなんてね」

「グル？　バカ言ってんじゃないッスよ。
あんた人の恩師に、いったい何してくれてんですか」

恩師。
その言葉の意味が場のふたりの間で了解されるまで、数秒を要した。

乾いた破裂音。
骨付き肉をかじり取る時に発するあの音が、木山春生の左腕から聞こえた。

「ぐ、あっ……！」

木山の目が怒りではなく驚愕に見開かれる。そして即座に痛みで閉じられる。
今しがたの少年は、彼女を腰に抱えたまま低空を飛び続けていた。
突然いうことを聞かなくなった左腕の激痛に耐えられず冷や汗を浮かせながら、木山は残った理性を総動員して思考をまとめようとする。

――今のはわたしの筋力によるものではない、外力だ。しかし何の……！？

そこまで数秒かけて考えた一瞬後、今度は右手小指がねじまがった。

「がぁっ！！」

今度こそ考えるゆとりがなくなる。
苦吟する彼女を見下して、少年――介旅初矢はゆっくりと着陸した。
ドッと風が真上から吹きつけ、腕と指を骨折した科学者の息が詰まる。

「木山春生。
暴走能力誘爆実験で昏睡した九人を救うために『幻想御手』で一万人を昏睡させたってのは、あんたで間違いないな？」

目の裏が白く焼けるかと思うほどの痛覚刺激に耐えて木山春生が顔を上げると、そこにあったのはスニーカーの裏だった。
衝撃。

顔に泥をおしこまれ、木山はその場に倒れる。頭骨の内を縦横に駆け回る痛みのおかげで、能力を使う精神力が削り取られてゆく。
腕だけで起き上がろうとして、それも果たせない。
彼女は今、謎の引力によって体を高架下の資材置き場、ぞんざいな敷き方をされたアスファルトに張り付けられていた。
それでようやく、ここがまだバイパス沿いの場所だと知る。

「いったい、何のつもり……」

「そんなことはどうでもいい。木山春生で間違いないな？」

「……ああ」

うめき声とも肯定ともつかない発音だったが、少年はそれ以上同じ問いを繰り返すことはなかった。

「ああ、自己紹介が遅れまして。
僕は介旅初矢。『幻想御手』の被害者です」

「……それで復讐に来たかい？」

「とんでもない。それはただのついで。
そりゃもちろん、負傷すれば能力使用も控えてくれるかな、とは思ったけどさ」

常日頃の彼を知るものが見れば、目をむいただろう。
今、介旅初矢はすさまじく明るい、朗らかな顔をしていた。

「あんたを拉致ろうってのは、僕じゃなくてあそこにいるジャック――加藤若一が言いだしたことでね。僕は……」

「何!?　かとう君がなぜっ」
「うるさい黙れ聞け人の話を」

顎の下に蹴りを入れて喉を抑えた介旅が、数秒して再び口を開く。

「なんでかは知らないけど、初ちゃんは木山、あんたが犯人だって見抜いてた。そして、あんたの“今回の”実験を早めに止めようとしてた。

あんまり信用ないみたいだね、“きやませんせい”。あいつ、この騒動が“誘爆実験”とかいうのを再開する口実になるんじゃないかって心配してたよ。だからこそ、騒ぎが大きくなる前に御坂なんとかをぶつけて、一連の『幻想御手』事件を強引に収束させようとしていたらしいけど」

「……！」

木山春生が身をよじった。

よほどショックだったのか。いったい何が？

彼女はバカにしている『警備員』だが、一度その影響下に入ればとりあえずは学園都市の公的機関なのだ。『幻想御手』事件については頭にきているだろうし、よほどのことがなければ手放されることはない。

圧力によって保釈即拉致は考えられなくもないが、騒動が“レベル５の活躍”という形で完全に収まれば、暗部の関心も別の方へむくはずだ。

木山自身がささやいた“学園都市の暗部”から彼女を逃れさせるために加藤若一が打った大バクチを、彼女が理解できないわけもないだろうに。

介旅としても、彼女までが暗部にひきずりこまれるのは本意ではない。
だが、

「だけどそれは彼の願いであって、僕のじゃない。
だから僕としては、自分とジャクの目標を両方かなえる方法を考えたんだ。
あんたが『警備員』に拘束されて、なおかつこの実験を暴走させる方法はないかって」

暴走？
その言葉が、木山の感覚神経を一時的に狂わせた。

この実験の暴走。
すなわち、今『幻想御手』の影響で昏睡している一万人の学生たちが、あの実験と同じように目覚めなくなることを意味する。

そのうえで自分が『警備員』に逮捕されようものなら、その後の人生で見る空はすべて鉄格子の向こうになるだろう。残された九人の子供たちの運命は、まさしく神ならぬ統括理事会のみぞ知る、だ。
わざわざ学生を使ってそんな回りくどいことをしたがる物好きも、これまた統括理事会のみ。

「先に言っておくけど、ジャクのクラスメイトだっけ？　それをあんたが全員かき集めて一か所にかくまってるのも知ってる。その場所も知ってる――というか、よくあんな一般人が多いところに子供を九人も置いとけるね」

「……なるほど」

要するに、目の前の少年は狗（いぬ）ということだ。

かつての自分と違って、自分が狗だと知っている狗。

そんなことはさせない。

させて、たまるか。

あの惨事を、二度も起こしてたまるものか――！

そう、気力をふるって頭上のメガネ顔を睨んだ刹那。

鼓動。

水中で太鼓を打ったような、脳全体に響く音。

それを自覚したと同時に、

「うぁっ！？」

木山春生の頭蓋は、腕と指から絶え間なく駆けのぼる痛みとは別の疼痛を覚え、

「どうやら“計画通り”ってとこですか」

介旅初矢の唇が耳まで吊りあがった。

轟音と産声。

それぞれの戦場で、それぞれに勝者が生まれる。

第十四話外伝　Ｆａｌｌｉｎｇ（後書き）

そろそろ佳境。
特に今回は、ちょっとショッキングな光景がままありましたがご容赦ください。
引き続き、評価・感想などいただけましたら幸いです。

注…

『Ｆａｌｌｉｎｇ』
「没落」または「堕落」。

第十五話の一　『夢みる機械』（前書き）

対超能力者戦。

第十五話の一　『夢みる機械』

飛び降りると同時に“手”を展開。
横でさらわれてゆく木山先生がくれたテーピングのおかげで、“手”が二本でもなんとか衝撃は吸収できる。
大事なサイクルはここから不要なので遠くの空地に安置。とにかくコンクリートで柱を作らなければならない。
あとはどこまでごまかせるかだ。三〇秒もたない気がするけど。

御坂さんを土煙の向こうに盗み見る。
それなりに驚いてはくれたらしい。まあ初ちゃんと同時攻撃なんて無茶をやったんだから、ちょっとぐらい隙を見せてくれないと困るが。

まあ、同時に怒り狂ってもいるみたいだけど。

彼女とやり合えるほど木山先生の能力がブーストされているとは思わなんだ。今にして思えば予想していてしかるべきだったが、あのまま御坂さんのペースで行けば木山先生の中枢神経系まで影響が及びかねない。
それだけは防ぎたかったから、こうして自分でけしかけた相手を

止めるというバカバカしいことまで始めざるを得なかったのだが……。

「……加藤若一。あんたまでグルだったなんてね」

いや、グルもなにも。お世話になったって言ったでしょうが。

コンクリの破片を左右ふたつの三角錐に積み上げて一息つきつつ、そんな自分勝手なことを思う。

三角錐の門柱みたいだ。魔王城かここは。

「グル？　バカなこと言ってんじゃないっすよ。あんた人の恩師に、いったい何してくれてんですか」

「……恩師？

……ッ、まさかあんた！」

え？

「……あんた、誘爆実験の生き残りなの？」

えっ。
いやそうだけど何いまの言語的空間跳躍。

＞ｉ２１８１１―２９３８＜

「誰に聞きました？」

「さっきあんたの相棒が連れて行った木山本人からよ。どいて、あいつを止める」

やっぱり会話だけでは三〇秒が限界でした。

ただ、オカルトさん知識体系の第一次近似値は今がチャンスと告げている。

“手”は今も、二本の三角錐のあいだに「く」の字型に結ぶ瓦礫の列を組んで、ひざ丈の不格好な防御ラインを築こうと必死だ。

状況を整理。

今いるのは（たぶん木山先生の能力で）真円状に高架道路から切り落とされた瓦礫が散らばる荒地。

高架下にもとあったのは資材置き場か緊急車両用地、要するにアスファルト。

橋脚のあちこちに切りとられた跡や黒いススがついているあたり、相当な激戦だったのだろう。

だが、おれに同じ戦いをこなすだけの実力はない。

なにしろ『幻想御手』で上がったレベルは初ちゃんがきれいに消してくれた。おれの超能力は元通り、“手”を四本使って人ひとりを宙づりにするだけの『遠隔操作（テレキネシス）』能力だ。

まあ、あと“遮光板”があるか。

しかし相手が悪い。

「お断りします」

「あんた私の実力わかってるでしょ？　ケガさせたくないの」

もう遅えよ。

彼女の実力は嫌というほど見ている。

超能力者が掃いて捨てるほどいる学園都市でも、宇宙を構成する四つの力のうち二番目に強く、そしてもっとも汎用性が高い電磁気力を操る『電撃使い（エレクトロマスター）』の頂点。こういう風に言うと厨二病臭いが、本当にそうなのだから仕方がない。

問題はここから。

彼女の二つ名は『超電磁砲』、主に金属実体弾を電磁投射（もちろん、そのいくらかはプラズマ化しているだろうが）する戦闘スタイルだ。

「奇遇ですね、おれもです。気遣う相手は先生ですがね」

「……あんたも、木山と同じこと考えてるの？」

要するに何が言いたいのかというと、“遮光板”が通用しない。あれは光学兵器よりの武装、たとえば指向性の電撃などを跳ね返すのには使える。なぜか熱も断ってくれるが、とにかく実体・流体の攻撃は防ぐか割れ砕けるかの二択。彼女のレールガンをまともに受けて防御できるわけがないのだ。

そういう意味で、音速の三倍に届くあのエネルギー塊の軌道を読みきって的確な場所に右手を広げる上条さんは、やはり偉大な人間だと思う。

「いいえ、止めに来ました」

「だったらどうして、そこで私の邪魔して突っ立ってるのよ！」

で、そんなおれのアドバンテージは“呪術”。

もちろん霊力をできるだけ使わないという縛りがあるから、手続きは面倒になる。

しかし、それでもオカルトさん知識体系があるだけでずいぶん行動の幅は広がった。

できれば神裂の時と同じ八門陣に閉じ込めたいところだが、彼女の雷撃やらレールガンを避けつつアレを張るための小道具を用意して、なおかつ付近一帯へばら撒くだけの時間的な余裕はないだろうと出発した時から思っていたし、実際そうなるだろう。

何をやるにしろこの壮絶なガレ場であの“禹歩（タップダンス）”をやらなければいけないというのが面倒きわまりないが、このさい贅沢はなしだ。

さて。

とにかく、着地の瞬間に電撃を撃たれなくて本当によかった。

あれやられてたら、初ちゃんが彼女の相手することになりましたからね。

ともあれバトル前の“おはなし”は長い方がいい。

そろそろでかい声だすか。

「冗談はやめてほしいですねレールガン。

てめえが“止め”に入ったんじゃ、命がいくつあっても足りねえよ」

「一万人の命がかかってるのよ！？」

「違うな。一万とんで七人だ。

おれの二重被害分と初ちゃんを引いて、九人足す計算だからな」

言いながら、視線を変えずに確認する。

うなじ右のいつも凝っている筋肉あたりに伝わる、“手”にのしかかった冷たい重み。

見つけた。
みぞおちの底から、ぞろりと歓喜の情が湧いて出る。
顔に出すな、加藤若一。

「私が言ってるのはそういう数字の話じゃ……」
「ならてめえはどうなんだ御坂ァ！」

緊張がゆるんだからか、ちょっと腹立った。
時間稼ぎに怒鳴り散らしておく。背中には冷や汗かいてます。

「あんた自分で言ってたよな。最初にこれ関連の事件に首つっこんだときは、単純に強い能力者と戦いたいだけだったって。
それがいつから、可哀そうな昏睡患者のために働く正義の味方になったんだ？
『風紀委員』ならともかく、いくらレベル５でも面倒事に口出しすぎる。
どうせ佐天（さてん）さんあたりが倒れてからだろ。それまでは被害者を数字で見てたんじゃねえのかよ？」

「“佐天さん”！？
なんで、それを」

「予測ぐらいつくっての。『Ｊｕｌｉａｎ』で木山先生とメシ食っ

た時、レベル0は彼女ひとりだけだっただろうが」

言いながら“手”で背後、正確には背後地中のものを掴む。
高架道路の下、橋桁の中に這わせてあった送電ケーブルの切れ端だ。

それ自体はどうでもいい。問題はケーブルが銅で作られており、道路とともに落ちたことで切りとられている事実で、それを“手”に巻きつけられるかどうかの可否だ。
軽く引っぱりだせるわけがないので、もちろん“手”は四本使わざるを得ない。それでも束ねられた銅線のうち一部だけを持ってくる必要がある。

銅は重い。
ここでどうするかだ。

「……あんた、知ってたの？
彼女の悩みとか、そういうこと」

「周りのメンツみてれば予想ぐらいつくさ」

「だったら、なんで、犯人側にいるのよ！！」

御坂さんが体をかがめた。
ピンチ。そしてチャンス。

バジュンッ！　と形容しがたい音をたて、彼女の怒りの表れかいつもより青い雷撃が真正面に飛んでくる。
前屈の瞬間にそれはわかっていたことだし全速力で左の三角錐の影へ。
同時にほとんど渾身の力で、束ねられた銅ケーブルの一本を地中から引っぱりだす。
射線上に出せれば……！

無理でした。

銅線の束は雷撃をかすりもせず、青白い光の束はおれがいた位置の真後ろにある橋脚を焼き焦がして消えた。
化学物質が炭化した特有の臭い。そしてバラバラッと剥離音も聞こえる。
おれはコンクリート三角錐の影に飛び込んであわただしい深呼吸。

病院内の売店で買った掃除用の白い布巾に、マジックで五芒星（ドーマンセーマン）を書きこんだお手製の魔除けを頭に絞める。
コンクリの隙間から覗いてみると、御坂さんは歯ぎしりの音でも聞こえてきそうな表情でこちらを睨んでいた。

「そういうことするなら、次はコンクリートも溶ける威力のを当て

てみようか？」

「やめとけ、おれが死ぬ。少年犯罪者は社会の扱い悪いぞ」

「知ったような――」

御坂さんが口をつぐんだのは怒りのあまり、ではない。
みょうな光景が見えたからだろう。
瓦礫の中から銅線が引きずり出されて浮きあがりつつ螺旋を描いている、という。

おれの“手”は十分に役割を果たしてくれた。
電磁気を使うつもりはないが、これをふたつの三角錐の間に立てて礼だけすれば

――第一コマンド
――神ならぬ身にて月の公転運動に参加

――第二コマンド
――天を射る矢に心を重ね想う

――最終コマンド
――日光を反射する鉄柱に敬礼

とりあえず、一息。

歌（ウタ）は古来から、オカルトと深く結びついてきた。
古代の人は音楽とともに舞い、精神を統一して神前に臨む。
歌学は音楽の一種である声楽にはじまり、武術や舞踊とともに霊力を高めるパターンのひとつとされてきた。
西洋魔術師にも、魔法使用時に何かのかたちで声を出すものが多い。

もちろんこれは、日本で発達した陰陽道系呪術の方程式でもある。
オカルトさんの得意分野のひとつだ。

おれは霊力を自分の体に流せない。
だからこうしてコンクリートで依代（よりしろ）をでっちあげ、自分はその影にこそこそ隠れて歌詞（ウタ）に描かれた光景を現実にたどり、さらに“例のタップダンス”をやる、という手続きが必要になる。
なればこそ、おれはわざわざ作った銅線ケーブルの束へ頭を下げているのだ。

第一・第二コマンドはサイクルの上でハンドルを固定してすませた。

月がその公転軌道上を一キロ進むごとに（だいたい0．979秒おきに）柏手を打ち、左手にガラス片を握った状態で空の星へと還る魂を思い描く。略式どころか模造代用の嵐で術の効果範囲はおそろしく狭くなるが、もともと地球全域をカバーできる大呪術らしいし、準備としてはなかなかだ。

最終コマンドで日光を呼んだことで、日月星の“三光”が成立し、ここに呪術の下地が術式と同時に完成したわけである。

本来なら曲がりなりにもウタとして完成している歌詞に合ったすべての行動をそのまま模倣すべきで、もっといろいろやることがあるらしいが、そこはオカルトさんが無意識的行動に組み込んでいる数々の所作で補強。

当たり前だ。モンゴルからスカラープールへの移動なんて今この瞬間できるか。

だいたいどこにあるんだよスカラープールって……エジプト？

というわけで、締めはポケットの中のＭＰ３プレーヤーにやってもらう。自分で歌えば、おれに霊力が流れてしまうからだ。

頭を上げて右手で刀印を結び、上へ掲げてから音量を最大にして再生。

そして笑うべきタップダンス。

左、右、左、右、左……

――鬼神力、観音力、天地の破れ目を縫え
――幾千万の山谷抜け
――鬼神力、観音力、天地の破れ目を縫え
――幾千万の山谷抜け

朗々とした、しかしどこか優しげな声。
これによって、この切り刻まれ現代歌曲に組みこまれた術式としてのウタは完成する。

ぐらりと自分の体が傾いた。
左手の甲にぽつぽつと赤班ができたことを確認して、おれの口元が久々にゆるむ。

使う相手が御坂さんになるとは思わなかったが、

「『夢みる機械』。
考案・準備各十五分のインチキにしちゃ、上出来じゃないかな」

鬼神力（エントロピー）。

物質や熱の“拡散度”をあらわし、熱量を温度で割った値で数値化される。たとえば、塩を水に溶かして食塩水にすると、塩のエントロピーは上昇する。

ふつうエネルギーが移動するとき、周りの干渉がないかぎり常にエントロピーが増えることが知られている。エネルギーの方向性が“乱雑に”なっていくのだ。

エントロピーは増大すると混乱をきたすため、鬼神力と呼ばれる。

観音力（ネゲントロピー）は、この反対を示す。

たとえば人間もつねにエントロピーを増やしている（これをふつう老化という）が、誰もが新陳代謝によって高いエントロピーを排出し、身体を若く保っているのだ。

こういう、外部とのやりとりでネゲントロピーを保持しているエネルギー循環システムを、定常開放系という。

で。

おれが今やった呪術『夢みる機械』は、エネルギー系をいじる。

エントロピーとネゲントロピーを“非常化”させるのだ。

呪術の呪文には神前でとなえるような直接的なものもあるが、ほとんどは隠喩が込められている。

今の場合は、最初の二単語は置いといて、最後の歌詞がポイントだ。

まず「天地」。

ここでいう天地は宇宙世界のことをさす古語だが、宇宙が分子間力や電磁気力といった『四つの力』に支配されていることは述べた。

このうちもっともポピュラーな「電」はエネルギーの伝達によく使われ、また非常にすばやいという意味もある。これと対照的に「磁」は磁石をあらわす以外に、鉄や金属をひきつける性質や南北をしめす力という意味をもつ。電力や磁力はそれ自身で場を形成するが、場とは力場、すなわち磁力がはたらく空間上の点をさす。

何度も言うように、磁力と電力はおなじ電子によって伝えられる力だ。磁場も、電力によって生まれるものといえる。

これらの破れ目とは、つまり宇宙を構成する力のどれかが欠けた、不安定な空間だ。

そして日本語の問題になるが、「縫う」という単語にはいくつかの意味がある。

まず原義として、両側から近寄せて縫いあわせること。漢字でも「糸」で「逢」わせると書くわけだから、これはわかりやすい。

次に、縫い針が布の目をくぐっていくように、細いすき間を折れ曲がりながら通る、という意味。

さらに、縫い目そのものを言うこともある。

これらを総合すると、

「物理力・方術の妨害を排除し、不安定な空間に迂回して呪術を到達させよ」

ということにでもなるだろう。

要するに呪術が成ったあとは、電子的・呪術的干渉なしに、まさしく『夢みる機械』の場ができあがる。呪術の要である銅線コイルのトーテムポールが倒れない限り、この二次創作は効果を発揮し続ける。

ここはウタの呪力に言霊信仰を乗せてねじまげたものだが、それでも効果範囲が狭ければ一定の結果が出る。そしてその中を“走る”――自由移動するものが、エントロピーやネゲントロピーというわけだ。

なにも神に祈るだけが呪術ではない。疑似科学でもサイエンスファンタジーでも、信者と体系があれば呪術は成立しうる。

それが『夢みる機械』というわけだ。

往年のオカルトさんなら、ただ「桑原桑原（くわばらくわばら）」と雷除けの呪文を唱えるだけで身の安全を確保できたりするのだろう。だが、曲がりなりにも能力者のおれがそんなことをしたら、たちまち霊力の反動で血を吐いて死ぬ。

だからウタを唄い、式を描くまではやった。
あとは実践あるのみ。

……難しいことを並べたが。
要するにおれの呪術が及ぶ範囲が力学的孤立系となり、その中で物の熱量が“物理法則を無視して”変動することになる。
その範囲とは、二本のコンクリート三角錐に直接触れているもの。そしてその二つの柱を結んだ「く」の字の瓦礫ライン、および三角錐と向かい側の橋脚両端をむすぶ二本の線に囲まれた、五角形の空間。

五角形は、当然だがその頂点どうしを結ぶと五つ頂点をもつ星形ができる。
つまり五芒星、オカルトさんの言うドーマンセーマンだ。

この擬装も何もない単純な刻印を刻まれたことで、物理的に不安定な呪術空間では何よりも陰陽道の原則が優先される。エントロピーとネゲントロピーは、どちらも五行つまり木・火・土・金・水の五要素がそれぞれつくりだす反生・反剋と相生・相剋の力関係へとスライドする。

相生は、上にあげた要素が左から順に生まれてゆく法則で、相剋はこれが

「木＞土＞水＞火＞金＞木」

という図式の力関係になる法則。
反生・反剋とは、これらの関係が逆になることだ。
本来は相生・相剋が普通なのだが、それは自然界だと外部からのエネルギー干渉があるからで、エネルギー移動が断たれた呪術空間では反生・反剋と立場が逆転する。

ウタに語られた超常現象が引き金となって、五角形の空間はただの力学的孤立系から、呪術でお手軽に異常現象を取りだせる空間へと変質する。
そして、目の前の呪術空間で相生（ネゲントロピー）・相剋すなわち高エネルギー収束体を生みだせるのは、ただひとり。
要するに、

「こんの……ッ」

御坂さんが火花を散らしたその瞬間、エントロピーとネゲントロピーが両立し、呪術はおれの手を借りずに完成する。
五角形内部は陰陽道の逆流法則に支配され、

「ッ！？
くっ……あんた、何したのよ！」

彼女の一人舞台（ステージ）は、人外魔境に変わる。

「聞かれて答えるわけないでしょうが！」

三角錐の隙間から口だけ出して叫び返す。納得するとは思っていないが。

「うっさい！　なんかっ、変なことに、なってるん痛っ！！」

叫ぶ途中で、いきなり御坂さんが額の右を押さえた。

どうやら相当混乱しているようだ。体の周りに生まれた稲妻から突発的に巻き起こった旋風でスカートがはためき、制服の袖が必要以上にふくらんでいる。

手応えありだな。

あれは“火化木”、電光という「火」要素が風という「木」要素を生んで起きたものだ。反生反剋は確実に作動している。

でなければ、自分で霊力を練っていないとはいえ、わざわざ覚悟をきめて呪術を使った意味がない。なんでもかんでもあの足踏みだけで術式に霊力を流しこめるわけじゃないだろうし、そうでなくとも体にかかる過負荷で死ぬとまで言われているんだから。

あ、鼻血でてきた。
実際、反動は来ているらしい。

“発信器”？
さっきの御坂さんの電撃とアレが橋脚に当たった衝撃で、大方ふっとんでるでしょうね。どうせ高速の上で術式の準備とかやってるんだから、確実にバレてるし。
しかし外部から不法侵入してきた魔術師が魔術を使うのがよくて、おれが呪術を使っていけない理由もあるまい。

もちろんこんなその場しのぎでも呪術が使えるのは、天才的なオカルトさん記憶体系が反射レベルで補佐およびフォローしてくれているからですけれども。
関東大震災を起こした云々も、嘘じゃないかもな。

おれはこのまま術式の維持に徹する。
その間に初ちゃんが木山先生を逃がしてくれれば万々歳だ。『警備員』の護送車まで、だけど。これで約束の五〇〇秒は稼げる。

動きがないのが気になるが、うっかり顔を出して電撃でも喰らえば即死だ。電磁気は“質の高い”エネルギーで、収束されると反剋作用も効かない。
コンクリなどの水硬性セメントは表面がどんなに硬くとも「水」要素なので、原則的には“水剋火”の法則で攻撃をはね返せるはずなのだが、反剋状態では余計に事態が悪くなるだけだろう。

そう。
おれのとった戦術は次のようなものである。
『レベル5は、ひとりひとりが移動式核ミサイル発射台だ。
だが体は人に過ぎない』
要するに、レールガンがだめなら本人を狙えばいいじゃない作戦。
五角形の中では特に意味もなく物質の状態が混乱し、熱と寒風が同時におしよせているはずだ。まわりの空気そのものが“木侮金”あるいは“火化木”の反剋作用で乾燥、また暴風を起こしている今、いくら御坂さんでも派手に動けまい。
この呪術では物質の昇華や拡散そのものが“木気”すなわち風や空気を媒介にして行われているから、大気にふれているコンクリート片なんかも影響を受ける。
もちろん高エネルギー定常開放系、すなわち御坂さんの体も。
「く、そ……」
手や顔を青くしている御坂さんを見るに、本人も体温が下がっているようですね。
コンクリの「水」は空気や服、体をふくむ「木」を生む要素だが、反剋の状態になればエネルギーを奪われるのも当然だ。
体温が三〇℃を割れば、人間の意識は不鮮明になる。

あと少し。

仮死までいかずとも、行動不能になるまであと少しだ。

しかし、反剋作戦が一発で通りそうで本当によかった。

頭も知恵もある御坂さんのことだ。突発的に起きた異変で混乱している今でなければ、すぐに体を能力で電気マッサージしていただろう。

その場合、次の手は循環系反生作用――御坂さんの体そのものに反生・反剋を適用するつもりだったが、そこまで望むのは贅沢すぎるし残酷かもしれない。本人的にも、おれの精神衛生にも。

……しかし初ちゃんは、“発信器”でどんなネタを聞いてくるんだか。

能力戦の情報を“発信器”が流してるもんなのかね。

そんなふうに、明らかに格が上の相手に対して慢心していたからだろう。

『キェアアアアアアアアアアッ！！』

突如響いた高周波の“声”に気を取られた瞬間。

「く……らえっ！」

「げ」

電撃。

投擲された光槍はまっすぐ前方、電磁波の反射率がいい金属塊へ。

もちろん良伝導体であり、同じ「火」要素をあわせ持つ銅線コイルがこれを遮るわけもなく、まばゆい光が高架下で炸裂する。

衝撃に耐え、最終コマンドとして呪術に必須の銅線コイルを“手”がなんとか持ち直す。

だがその時、合計三発目の電撃が右のコンクリート瓦礫三角錐を突き崩し、後ろの橋脚を打ち砕いていた。

轟音。

第十五話の二　介旅初矢の横槍（前書き）

ユニークアクセス累計３００００人突破、ありがとうございます！
これからも精進を続けていきたいと思います、どうかよろしくお願いいたします。

それはともかく、素性がバレた後の悪役をちゃんと描きたい。

第十五話の二　介旅初矢の横槍

状況はよくない
まったくよくない。

なんだか知らないが怪音が聞こえた瞬間に御坂さんが放った電撃で、コンクリート三角錐の一方が粉砕された。
つまり、結界が五角形から四角形になったことを意味する。
御坂さんの背後にある橋脚の両端と銅線コイル、そして今おれが隠れている三角錐の四点をむすぶ四角形に。

五行反剋の法則が消え、エントロピー・ネゲントロピーの乱高下だけになったことで、呪術的な効果は半減したと言っていい。
ついでに動かせる熱量も。

扱える総熱量が目にみえて減り、ついでに高架道路が陥没した穴から日光が差しこんできやがったため、徐々に御坂さんの低体温症が解けてきている。
おれが初ちゃんに約束した時間は五〇〇秒。
なんとかしてあと一分半を稼がねばならない。

何度も言おう、状況はよくない。

＞i218111—2938＜

ここまでやらかしてから言うのもなんだが、おれに御坂さんとガチ勝負をやらかす気はほとんどなかった。
特に“誰も介入してきていない”現時点では。

それさえわかっていれば、『警備員』に見られずにどうにか現場へ潜りこんで結界だけ張ってやりすごす、という手も使えたのに。
まあここは、今さら文句を言ってもしかたない。このあたりにばらまかれていた“発信器”のネットワークが木山先生と御坂さんの超能力バトルで軒並み壊滅状態に陥っていたし、最悪の状況を考えて行動する必要があった。

先生を“できるだけ無傷で”『警備員』に引き渡すという初ちゃんの計画上、御坂さんといえども止めざるを得ない。
そして初ちゃんの方がレベルも高い以上、おれが御坂さんを引き留めざるを得ない。
ひどい話だ。

「あ……んた……」

唸り声。
まずい。御坂さんはもう、呼吸どころか舌や唇まで動かせるほどに回復している。
これはますます、コンクリート三角錐から顔なんか出すわけにいかなくなった。会話にしろ攻撃にしろ、盲撃ち（ブラインドファイア）でどうにかしなければ。

といっても、今おれの“手”は四本とも銅線ケーブルをコイルに仕立てあげるだけで精いっぱいだし、攻撃なんかできないんですがね。

「ちょ、っと」

……ん？

コンクリの隙間から見ていた御坂さんの様子がおかしい。
ほとんど狂ったかと思えるほど目を見開き、ずっとこっちを凝視している。

いや、こっちじゃない。
おれが隠れている三角錐よりさらに左、一七三号バイパスの橋脚より外側。
――初ちゃんの向かった方角だ。

どういうことだ？
初ちゃんは、まだあの方向にいるのか？
『警備員』の部隊、というか数分前まで部隊を組んでいた教職員のみなさんは、おれのすぐ後ろ上方の高架で伸びてるはずだ。
地上でいつまでもグダグダやってる必要性がどこにある？

「何よ……あれ……」

御坂さんが完全におれを眼中から外している。
何が起きているんだ？　さっきのサイレンみたいな怪音と何か関係でもあるのか？
分からんことだらけだ。かといって体を出せば電撃を食らいかねない。
さてどうするか

轟ッ！！！

「どわぁがっ」

何だ！？
左から襲来した見えない壁に全身を叩きつけられ、視界が一気に流れる。

吹っ飛ばされた！？

ノーバウンドで軽く二十メートルを水平移動する中、デジタルカメラを最大望遠に切りかえたようなスピードで崩れた三角錐の瓦礫が目の前に迫り、

「クソッ」

“遮光板”を展開したおかげで衝撃をいくらか防げたものの、おれは無防備に瓦礫の上へダイブすることになった。

なんとか仰向けになって顎を胸に押しつけ、“遮光板”の上で受け身をとる。

左半身に瞬間的な圧力、いったいなんなんだ今のは!?

御坂さんがとっさに磁力でコンクリの中の鉄骨を操作し、瓦礫で盾を作っている。おれどころではないらしい。よかったというかなんというか。

こんな時こそ冷静な、オカルトさん回路の暫定結論。

今の衝撃は左後方からの突発的ＡＩＭ拡散波動とその物理作用、要するに念動力の類。

しかし、おれも『遠隔操作』という念動力系の能力を持っているからわかる。瓦礫の音をさせないような場所から、おれと御坂さんを同時に狙うだけの幅をもって、人ひとりを軽く吹き飛ばせるような力を発せられるような能力者は、まちがいなくレベル４以上。

念動力を持つ暗部組織の介入なのか？

いや、ありえない。

念動力系の上級レベルともなれば、そのＡＩＭ拡散力場が工業的な意味で隠しもっている可能性は計り知れない。わざわざ暗部とやらに編入しない方が、学園都市としても利益が大きいはずだ。

統括理事会の意向が絡めば話は変わってくるが、この街でも七人しかいないといわれるレベル５を、リアルの紛争に何人も放りこむのは損だろう。

そもそも暗部なら、おれにしろ御坂さんにしろ（まあレベル５だし彼女は可能性低いが）、気づいていない場所からライフル弾を一発撃ちこめばそれで済む話なのだ。

今のようにおれたちを確実に殺せるわけでもない、自分の存在を知らせるだけの中途半端な能力攻撃をおこなう必要性はどこにもない。

そうだ。

御坂さんは？

「ぐっ……」

右肩を押さえ、軽く腰を落としてあらぬ方向を睨みつけていた。
さっきと同じ方角。
いったいそんな場所に何が……

その瞬間。

おれの中でオカルトさん回路が喋うべき結論を吐きだしはじめ。
おれはどこか憮然とした気持ちを抱きつつ、呆けて突っ立った。

おれが高架下を通して見た、道路反対側のある一点。
そこには、三つのものがあった。

まず、何事もなかったように立っている初ちゃん。
次に、手足を力なく投げ出して倒れ伏している木山先生。
そして、

なんだかよくわからない、宙に浮いた怪物。

いや、“なんだかよくわからない”というのは完全に文学的表現だ。おれやオカルトさんは、ほとんどその正体に察しがついている。

胎児のように小さな手足を曲げ、大きな頭に赤い目を光らせる半透明の存在。

その頭上には投げ輪のような光輪。

消去法であり状況証拠からの推論であり妄想もはなはだしいが、察しはつく。

「……飛天（ひてん）？

いや、御使（みつかい）……」

御使。

要するに、十字教の天使だ。

オカルトさん回路が動き出した。

学園都市の目標はレベル６の誕生にあるはずだ。

これを第一前提として、そこから木山先生とこの天使（仮）の関

係を考える。

『幻想御手』をばらまいて学生に迷惑をかけ、学園都市の治安を乱し、結果としてその運営をかなり邪魔してくれた彼女を、統括理事会が未だに見逃している。これは当然、『幻想御手』事件からレベル６への糸口のひとつが見つかるかも、という期待があったからとしか考えられない。

ついでに言えば、レベル５の御坂さんという“日なた”の人間がこれほど無茶をしていることを考えても、学園都市の偉い人たちがこの問題を（おそらく不本意ながら）黙認しているのは明らかだ。

問題はそこだ。

黙認するならするで、なぜ妨害因子への対策を取らなかったのか？

木山先生を拘束するために派遣された『警備員』が少なすぎる点は、おそらく常識的な判断と先生を通したい政治的判断の両方から来ているだろう。

だが、おれが少しだけ情報を流して焚きつけたとはいえ、ほとんど自分の意志で今ここにいる御坂さんをすんなり通した理由は何なのか。

答えはいくつかある。

「最初から木山先生に御坂さんｏｒレベル５をぶつけたかった」とか。

「先生をダシにして御坂さんをレベルアップさせたかった」とか。

これらふたつは、戦闘実験によって既成の高能力者からレベル６を生む、という発想を基にしている点ではコインの両面といえる。

そして最悪なのが、
「御坂さんや他人が何をしてもしなくても、元から関係なかった」
という答えだ。

この場合、御坂さんを先生にぶつけて暗部の介入を牽制しつつ事を落着させる、というおれの目論見は最初から破綻していたことになるが、現状を見るかぎり上層部もはなからあの天使（仮）の出現を予期していたと見ていい。

なんであんなものを予期していたのか？
それもまた簡単。
要するに最後の答案がもっとも高得点であり、

「レベル6が人間である必要はない、と」

そういうことだろう。

などと現実逃避気味にボケッとしながら考えているうちに、御坂さんが即席の盾から脱出して、天使（仮）に電撃をかました。
しかし胎児の姿に霊気（オーラ）の象徴としての光輪、そして近東の有翼人伝説から後になって取り入れられた翼はどこにもなし。

翼がないのは重要なポイントだ。
胎児は胎動、成長の暗示だから判断の助けにはならないとして、

これからどういう姿になるにせよ、かなり初期の十字教における天使像が底辺にあるのだろう。
上位種の化け物でないだけマシというものだ。（ファーストスフィア）

その天使（仮）だが。
あの御坂さんの電撃をはじき、赤黒くえぐり取られた背中の傷口から新しく大きな腕を二本生やし、さらに一回り大きくなって帰ってきた。
物理的な意味で。

「……っげ、なんじゃありゃ」

思わずその“成長”速度にうめき声が出たおれは、悪くないと思う。
御坂さんに向けて放たれた、氷のような物体の生成速度と同時追尾力についても、同じことが言える。
なんなんだ、あいつは。

待てよ。
オカルトさん回路が、頭の片隅に疑問を設置する。

あの天使（仮）は、初ちゃんと木山先生がいるところに生まれた。
念動力と空中での水分凝固、つまり物質の構造相転移は一致する

能力ではない。つまりあの天使（仮）はおそらく、多重能力（デュアルスキル）に似た能力をもっている。

超能力には「他人のＡＩＭ拡散力場を読みとって真似る能力」なんてのもあるらしいし、ありえない話ではない。そうでなければ念動力で極端な反発力を（大気中の水分子だけに）かけて氷を作ったことになるが、どちらにせよ初ちゃんの専門外だ。

すなわち、天使（仮）の母体は木山先生。

だが、先生がそんな能力を秘めていたとは考えにくい。それどころか能力開発を受けた可能性も低い。

ということは、アレの基底になったのは――

「御坂さん！」

「しっかりつかまってて！」

え？

右後方から聞き覚えのある声。

御坂さんが頭に花飾りのある女子の手を引っぱりつつ、橋脚から橋脚へ猿を連想させる身軽さで飛び移っていく。磁気で足裏を貼りつけるわけか。

……引っぱられてる方は、『風紀委員』の初春さん？

つーか御坂さんは、あの『幻想御手』謹製の天使（仮）に向かっていくつもりか？

なぜわざわざ近距離に……？

わからんことだらけだ。

だが、ここで独りたたずむわけにもいかない。

実はあの天使（仮）が噛ませ犬の役で実験の本番はここから、主演はまだ未登場という可能性だってあるのだ。御坂さんはともかく、初ちゃんは遊軍にしておかないと後で死ぬかもしれない。

それに、初ちゃんに確認したいこともある。

体の痛みも治まったところで、おれも高架の右側へ移動。

見えるのは高架線の防音壁を伝って移動する女子ふたりと、その正面に陣取り見境なく泣きわめき、ゆっくりと上昇する化け物。

レベルアッパーの叫びは、一万人分の感情を爆発させたようにも聞こえた。

初春さんと御坂さんが、あちこちボロボロの木山先生と対面して熱血な言い合いを始めている。
正確には初春さんの独壇場だが、その間にも天使（仮）は上昇を続けて防音壁を越え、どうやら立ち直りつつあったらしい『警備員』部隊の銃撃を正面に受けるたびに肥大化を繰り返していた。

そして残るメガネはフリーハンド。
どうも初春さんに存在を無視されてから、ずっと高架下の資材置き場外柵に寄りかかって、ニヤニヤしながら事態の推移を見守っていたらしい。

この状況でニヤニヤできるってことは、まあ答えはひとつだわな。

……くそったれ。
介旅初矢、おまえが化け物の創造主か。

介旅が木山先生に何か細工をして、『警備員』に引き渡すかわりに彼女から天使（仮）を引っぱりだした。これ以外に考えられない。でなければ、飛べるこいつがわざわざ地上で暇をつぶしているわけもない。

そもそもおれについてきた理由があの天使（仮）なのだろう。実験の大詰めとして確実にあの化け物が生まれるように、暗部というやつは俺の考えるよりもずっと早く、介入に踏み切っていたわけだ。

おれはただのピエロか。

……ああクソ。怒りすら湧いてくるのが遅れてる。

おれがまっすぐ近づいてきたことに違和感を覚えたのか納得したのか、わざとらしく驚きの表情を見せる黒縁メガネ。

まあ、それはいい。

こっちの質問にちゃんと答えてくれるかどうかだ。

「初ちゃんもういいだろ、さっさとあの化け物ブチ落として帰ろうぜ。

お前はどこに帰るんだか知らないけど」

つとめて声を抑えたはずなのだが、介旅に珍獣を見るような目で見られた。

顔が面白いことになっているらしい。

「何言ってんの？
一緒に帰るんだよ、アレの顛末を見てから。そこまでしなきゃ何ももらえない」

そう言って頭上の天使（仮）を指さす。
騒ぎが終わった後、おれも同行するのが確定事項なのか。
上等。

「手出しは無用ってか？」

「そのためのレベル５でしょうが」

……何もかもわかってるような言い方しやがって。
俺が必死こいて考えた御坂さん渦中に蹴落としキャンペーンも、結局はこいつの上司の補助プランに過ぎなかったってことか？
オカルトさん回路がフル回転してるからまだ大声は出さずにいるが、本来ならおれはこの時点で切れていいと思う。

はらわたが煮えくり返るという表現があるが、今のおれは頭蓋のなかが煮えくり返っている状態だ。
そりゃそうだろう。
木山先生を嗤ってみてるゴミクズ野郎のひとりが、一番の学友だったわけで。

「……参考までに聞きたいんだが、ありゃなんだ？」

「気づいてるんじゃないの？」

「関係者の証言って大事だと思うぜ」

俺の平板な声に、介旅がくすっと笑いを漏らした。

笑顔を見せるな目障りだ。

「……『幻想猛獣』とでも呼ぼうか。

要するに一万人分のＡＩＭ拡散力場が融合して、自律運動を始めたわけさ。木山春生が演算のために、『幻想御手』ネットワークを完全制御下に置く前にね」

「『幻想御手』から生まれた猛獣ねえ。言いだしっぺは誰だ？」

「そこまで知らないし、知ってても君に言えるほど僕は偉くない。しょせんはしがないバイトですから」

バイト？　どういうことだ。

時給いくらの仕事にしては、わざわざおれを振りまわしたり飛んで跳ねてのアクションこなしたり自分も昏睡したり、体の張りかたが尋常ではない。

「金もらえるわけ？」

「いや、身の安全」

ここから先は課金対象と言わんばかりに、一言で口が閉じられる。

まあ、理解できる理屈だ。

少しだけとはいえ裏事情をしゃべられた以上、こちらから続いて質問するような余裕は一瞬でなくなったわけだが。

「お互い苦労してるってわけだ。あとで一発殴らせろ」

「いいよ、できるもんなら」

「そのセリフ忘れんな」

おれの捨て台詞レベルにすら達しない返答を聞いてニヤッと笑った介旅初矢は、何事か思いついた様子で、美しい青春の光景を生みだしている初春さんへと歩み寄った。

第十五話の二　介旅初矢の横槍（後書き）

注…

『飛天』

仏教で、如来の周囲を飛びまわり礼賛する天人。女性像は天女とも呼ばれる。

ペルシア周辺の有翼人像が、シルクロード経由でトルキスタン・中国の仏経に取り入れられたものとされる。

飛行するために持っている特別なものは羽衣（はごろも）。基本的に翼は持っていないが、ガンダーラ近辺の像では翼がある。

『上位種（ファーストスフィア）』

十字教経典に数多く記録されている天使の中でも、神に近いとされる天使たちの総称。

上位三種ともよばれ、熾天使（セラフィム）・智天使（ケルビム）・座天使（スローンズ）に細分されるが、それぞれ蛇の頭と三対六枚の翼、一面びっしりと目のついた四つの顔と四枚の翼、燃えさかる車輪の体を持つとされ、とても人とは似つかない姿が描写されている。

そんな連中が出てこなくてよかったという、加藤の「よかった探し」に等しい思考。

第十五話外伝　『獣』（前書き）

文中に時局柄不謹慎とされる可能性のある表現がございますが、ご了承ください。

第十五話外伝　『獣』

加藤若一は、臆病な男だ。
介旅初矢もそれは知っていた。

彼の臆病さは、昨夕、彼が次のように発言したことからもうかがえる。

「例えばさ。
例えば、統括理事長の親船（おやふね）なんとかの親戚に、おれたちの同級生がいたとして。
そいつがレベル４とか５とかで成績優秀な勝ち組だったとして。

そいつが『幻想御手』を使ってた連中のことを見下して、実際聞いちまってぶっ倒れたおれとかの目の前で『ぶっちゃけバカが暴走して自爆しただけで自業自得だし同情の余地なんかこれっぽっちもねーし』とかなんとか、これ見よがしにほざいてたとしよう。
初ちゃんならどうする？

おれは何もしねえ。

黙って無視し続ける。少なくとも最初のうちは。

んで、結局五分後ぐらいに耐えきれなくなってそいつにヘッドロックとかかけて、また身体検査（システムスキャン）の時みたいに教頭から呼び出されてグチグチ言われる羽目になる……とこまで行けば万々歳。

たぶん本当のところは、その同級生から『きゃー加藤クンこわーい（笑）』とか言われて口で負けて、中一の二学期みたいにクラスのつまはじきにされるんだろうな。

でさ。

今、ヘッドロックに持っていけそうなんだ。

正直もう何度かタイミング逃してて、そろそろ最後のチャンスっぽいから、今回だけは飛びかかっていこうかって思ってるんだわ。

てなわけで、ちょっと行かなきゃなんない」

ちょっとしたごたごたの後、彼はみごとにヘッドロックに成功したと言える。

ただし、その相手が多少変わっているけれども。

統括理事長は親船さんじゃないよと突っこみたいのを我慢した自分を褒めたい。

介旅初矢は、まったく真剣にそう思う。

さて、それはともかく。
こういう臆病な男にはできない仕事が、ひとつまだ残っている。
おそらく木山春生がその種と仕掛けを持っているはずだ。

その読みは、当たっているとも外れているともいえた。

＞i21811―2938＜

侵入者。

といっても、物理的なそれとは言いがたい。女性三人の熱い会話への侵入だ。

木山が厳しい視線を送ってきたが、やり返して黙らせる。

なにせもはや、加藤若一のクラスメイトは人質に取られたも同然なのだから。

「まずいですよ皆さん。

あの化け物、『警備員』の銃撃に反応してそっちに直進しています。しかも延長線上に原子力実験炉」

「いや、何えらそうにしてるのよ」

いい感じで進んでいた会話に割り込んできたことに腹を立てたのか、御坂美琴が介旅につっかかる。

「介旅だったっけ、あんたと加藤が余計なことしなかったらこんな事にならなかったかもしれないのに」

その気持ちはわかるし、言っていることはたぶん事実だ。

彼らが時間を長引かせていなければ、そして介旅の挑発行為がなければ、あるいはあの怪物が生まれる可能性はもっと低かっただろう。そして、中学生がそろって擦り傷やあざを作り、埃まみれになることもなかった。

だが。

もはや遅い。

「それについては後で謝ります。日を改めてサンドバッグでもなんでもいいですから。

とにかく今は、あの化け物をどうにかしないと」

簡単に引き下がられたからか、美琴がだまりこむ。

彼女もわかっているのだ。今ここで介旅を指弾したところで状況がよくなるわけでも、まして解決するわけでもなく、時間を無駄食いするだけだということは。だからこそ彼を追及して、自分をふくめて場の空気を鎮めようとしているのだろうが。

そこへ加藤が追いついてきた。

鼻血をぼたぼた垂らしつつも気にしていないその姿は、今でなけ

れば誰もが笑っていただろう。

「とりあえず情報共有と行こうぜ。
おれたちふたりは、木山先生がケガしないうちに『警備員』へ突きだそうと思って御坂さんを邪魔した。『風紀委員』以外で先生をさらおうとしてる連中がいるっぽかったからな。ここまで何もないってことはただの思い違いだったんだろうし、それで話をこじらせたのは謝る。
で、ありゃ一体なんなんだ？」

もちろん彼は介旅から『幻想猛獣』の概略を聞かされているし、木山がその程度のことを思いつかないとも考えていない。しかし木山・御坂側と自分たちの間で認識のくいちがいをなくしたいのだろう。

「……私は仮に『ＡＩＭバースト』と呼んでいるがね。確かなことは言えないが……」

木山春生の概説。
おおむね現状の把握に齟齬はないようだ。その間にも上空、というより高架上層では銃声が鳴りやまず、薄青い『幻想猛獣』の体がつくる影も劇的に大きくなりつつある。
御坂美琴がイラついてきているのが明白だ。
同じ説明を二度繰り返されているわけだし、気持ちもわかる――

そんなことを考えていられる自分の意外な能天気さに、介旅は声なき失笑を漏らす。

「……言いかえれば、あれは一万人の子供たちの思念の塊だ」

再びの説明を聞きながら、初春飾利が後方の『幻想猛獣』を見上げる。

その思念を提供するひとりになりかけて脱出し、今度はまた別のぬかるみに足を突っこんでしまった身としては、とても深みのある言葉だ。

などと介旅がひとり唇をつりあげていると、

「……なんか、かわいそう」

ぽつりと声が耳に忍びこんできた。

初春飾利の声だ。

『幻想御手』を聞くに至った学生たちの末路を思う声。

思う声だ。

憐みの声ではない、もっと別の冷やかな何かをあらわす声。

だからどうと思うような介旅ではない。
それほど神経が細ければ、そもそも原理さえ分からない“謎の力”を操る加藤と友人づきあいなどせずに過ごしていただろう。さらに今ここにいる原因、すなわち覚醒直後に彼の病室を訪ねた正体不明の中年男性から突き付けられた地獄と煉獄の二択に、秒単位で即答することもなかった。

だが、彼の愚かにして親愛なる友人は、彼ほど諦めがよくない。
本人の自覚はともかく。

今回の一件についてなるべく想定外（イレギュラー）を減らすため、彼は目覚めた時からずっと加藤の脳磁界を監視（モニタリング）していた。
そのせいで彼に流れこんでいた思考回路のスイッチを、いま入れるわけにはいかない。

あわてて大気中に回路をつなげる。

《初ちゃん、おさえろ》

《いや、おさえろって何がよ。今べつにお前以外に怒るポイントないべ》

即座に返ってくる、心底不思議そうな“声”。
だが、その固有振動には振れ幅がある。介旅の危機感は間違っていなかったようだ。

介旅の知るところではＡＩＭ拡散力場の制御と銘打って行われた、能力暴走の促進物質精製工程を肌で知る加藤は、レベルアップのための“努力”を自ら押したてる人物を嗤う傾向がある。
そして“努力しないやつが悪い”という、才能至上主義とはまた違った形の差別感情にも過剰反応することが多い。

「いくら努力したって、いくらレベルが上がったって、地べた這いずり回ってる人間の顔ぶれは変わらないわけだ」

以前、加藤がこぼした愚痴のひとつだ。
自身レベル３でありながら不良に襲われ続けているからこその台詞と言える。

ともあれ「高レベル能力者になるために努力していても、なれない人は腐るほどいる」という彼の無意識にある持論は、時にまっすぐな能力者の何気ない一言で暴発する恐れがあるのだ。
今そうなることだけは、避けねばならない。

ひととおり相方を落ち着かせて、介旅は誰をも邪魔しない態勢に入った。
すなわち沈思黙考。

今更ながら、肌が半透明に見えるわりに傷口は赤黒いというのは、何かしら上皮に光学的な迷彩効果があるのだろうか。それなら無駄にエネルギーを使いそうな高度自己再生能力より、もっと表面防御力を上げてもよさそうなものだ。
せっかく一万人のＡＩＭ拡散力場をよりあわせたのだから、もっと別のところに高次元演算を割り当ててもいいのではないか。

だいたい、この実験そのものが非効率に過ぎるところがある。ここまでして『幻想猛獣』を生みだしたいなら、方法はほかにも山ほどあった。
そこまで隠密に気を使っているとも思えないのだが。

などと考えているうちに、ヒロインたちの作戦会議は終了したらしい。
気配り役は疲れると、介旅初矢は見当はずれのことを思っていた。

「……で、結局かとう君は居残り役か」
「そりゃそうでしょ。役立たず的な意味で」
つぶやく木山春生に、鼻血まみれのパーカーを脱いだ加藤若一がむくれた声で返す。
この数分間で悪化していたのは状況だけではなかったらしい。
作戦会議と言っても出撃できるメンツが限られているため、話はすぐにまとまった。
介旅を大いに慌てさせたことに、なぜか“唯一の”『幻想御手』治療プログラムを所持しており、それを学園都市の治安中枢部に渡しやすい『風紀委員』という立場も持っている初春飾利が『警備員』との折衝役に。
重力加速度を三次元空間における点単位で操作できると白状せざるを得なかった介旅、そして告白をいささか以上の暴力で実現させた御坂美琴が、『幻想御手』ネットワークを寸断するまでの時間稼ぎ、およびその後の『幻想猛獣』に与えるとどめ役としてチームに分けられた。

そして、一定以下の物体を反射し、また人をひとり持ち上げられる程度の能力者である（しかも目にみえて顔面を負傷している）加藤若一が、木山の見張り役として高架脇に残されたのだ。

「確かに、君なら私の見張りにぴったりだな。
個人的な縁もあるし、あの介旅とかいう君の友だちのように、どこかとつながっているわけでもない。あの御坂美琴という子は、なかなかの人物眼を持っているようだ。
……根拠もなく人を信じすぎるのは、どうかと思うがね」

どこかしら自嘲的な笑みとともに、木山がうそぶく。
加藤は黙ったままだ。
その視線は、別のふたりに向けられている。

何がそんなにいやなのか、心底から嫌悪の表情を浮かべて高架道路の真下に陣取り、隙あらば『警備員』を狙って振りかぶる触手を能力で押し返している。
彼の憎むべき友人、介旅初矢だ。

触手は高架道路に打ち付けられようとするたびに何もない空間でその勢いをたわめられ、空中で静止する。そして因果応報の見本を示すように、ビデオテープの逆再生を思わせる動きで空中へと跳ね上げられていた。
いわゆる“斥力場”というやつだ。

「なるほどな。
重力を伝達する重力子を能力で操作できるなら、その“逆送”による反重力――擬似的な斥力の発生も可能なわけか。
やはり能力開発というのは、機材の問題だけでなく能力者の発想の柔軟さという意味でも、年少者に限らねばならないようだ」

日の当たらない北側の橋脚側面に背をもたれてつぶやく木山。こんな時にも研究者魂が健在なのか、自分の精神を平衡に保とうとしているだけなのか。

「別にそれはいいんですけど。
おれたちなんかまだ運いいほうで、中にはリアルに頭がパーンしたやつとか、脳みそを細切れにされたやつとかもいるらしいじゃないですか。そういうので能力開発が発展してきたって思うと、ちょっとイラっときますね、ああいうの」

同じような体勢の加藤が、同じような音量で愚痴を垂れる。
似た考えを木山が持っているとは知らないようだ。

「まあいいや。
先生行きますよ。いつまでもあんなお人よし連中に構ってられっか」

「今更どこへ行くというんだ？」

「元いた場所ですよ。

どうせコトが終われば、初ちゃんを迎えに暗部とやらが車を回してくる。その時におれや先生がいないと、本格的に人狩りが始まりますからね。あらかじめこっちから公式な部署に拘束された方が、あとの面倒がなくていい。

まさかあんな化け物ひり出しといて、統括理事会だか何だかと交渉もせずに生き残れるなんて、先生も思っちゃいないでしょ？」

吐きだすようにしゃべりながら、加藤の視線が“もうひとり”へと向く。

彼が「イラっとする」と言ったのは、その両方だろう。

しかし加藤が介旅に向けたイラつきは、彼のいう「頭がパーン」や「細切れ」を主導した組織や勢力、そして彼らに従っていた自分の親友の立ち位置だ。

対して今度のイラつきは、彼――正確には彼のうちに眠る人格の友人たちを消耗品扱いした連中がつくりだしてきた“能力開発”という教育論や概念を、何の対価もないものとして享受し、それに乗って能力を開花させていった高レベル能力者に向けたもの。

その意味では、彼も『幻想猛獣』の一部となる資格はあったわけだ。

自分の醜い感情を理屈でかため、実験炉の対極に自分の身をおいて『幻想猛獣』に立ちむかう御坂美琴を嫉視しつつ逃走をはかる、加藤若一にも。

『ギェェェェェェアアアアアア！！』

すぐそばにいた元視聴者の妄念に応えるがごとく、『幻想猛獣』が啼く。

その原因はもはや明白。

高架道路に斥力場を放つメガネの少年と、

「あんたの相手はこの私よ……ってぇ！？」

啖呵を切りながら全力疾走で攻撃をよけ続ける、学園都市二三〇万人の頂点が一、御坂美琴（レールガン）の存在に他ならない。

高速で飛来する光の塊にえぐりとられた地面が口をあける。

もうもうと立つ煙が、風で山へと流された。

「ったく、少しは人の話を――」

そもそも人語を解するかも疑わしい生まれたばかりの怪物へ、美琴はさらに挑発めいた、いや単なる感情の発露を放つ。

しかし言葉によるコミュニケーションはともあれ、彼あるいは彼らにも危険を感じる力は残っていた。

今や攻撃を受けつづけて肥大化した体にふさわしい大きさにまで対比が縮んでしまった頭部、正確には額から造花のように弓なりに突き出ている何本もの“角”が光る。

その『幻想猛獣』の頭頂から吹き出したように黄色の光が集まり、分裂。

そのひとつは美琴へ、そして

「！　やばっ」

もうひとつはまっすぐ高架道路すれすれを横切るコースを取る。

「ッ！！」
「けっ」

レベル5が目を焦慮に見開いたその瞬間。
高架へと射ち出された光球は軌道をゆがめ、防音壁のそばで大車輪のようにぐるぐると回転運動を始めた。

「……え？」

思わず自分の身の危険を忘れて、そちらを見やる。
回転運動する光球が徐々に加速し、その光景を瞬かない赤目でじっと見つめていた『幻想猛獣』へと逆に“撃ち出された”数瞬後、彼女はやっと思い出した。

《こちとら重力制御能力者、ついたあだ名が『量子変速（シンクロトロン）』。
エネルギーの円形加速ならお手のもんでね》

余裕を見せつけるためか、わざわざ大気を伝ってメッセージを送ってみせた、同学年の能力者について。

「そりゃ助かるわ！　ありがとね！」

《あいつは『警備員』か初春って子のどっちかを狙ってた。
ひょっとしたら道路向こうの原子炉かも。
御坂さんは、とにかくあいつの気を反らさないように撃ちまくってくれ。
僕がそいつに攻撃しても、すぐ元通りでおしまいだ！》

「言われなくても！！」

御坂美琴が、前に向き直る。

よそ見した化け物に、加速しプラズマ化したコインを一発。
彼もレベル3、負担をかけさせていい相手ではない。

もちろんあの介旅という男、信頼に足る相手ではないだろう。
タイミングよく目覚め、自分たちの推理に一言二言で大きな貢献をして、今は加藤とかいう男子をダシに使ってここにいる。
怪しいこと極まりない。

だが今は。
今、彼は彼女の背後を、初春さんと治療プログラムを守ってくれるという。

理由は知らない。知りたくもない。
ただ彼が、今の自分と同じように身を挺しても守りたいものをどこかに持っていることだけは、その態度からも確かだろう。

それに、あいつにしても原子力災害は歓迎できない。
学園都市のみならず日本の中枢、東京や神奈川といった地域が危険にさらされることは、介旅がどんな目的で動いていても避けたいはずだ。

だから今だけは、後衛（ディフェンス）として認めてやる。
自分がやるべきは、

「……シカトしてんじゃないわよ。あんたの相手はこの私って言ったでしょ」

この化け物を倒す。
それだけだ。

「みっともなく泣き叫んでないで、まっすぐ私に向かってきなさい！」

鬨の声にも似たそれに『幻想猛獣』が咆哮で応え、

介旅初矢は愉しげに歯を軋り鳴らせた。

「ああ、そうじゃん！！
時間がない！　これから転送する音声ファイルをあらゆる手段を使って学園都市じゅうに流せ！！」

横転していない方の警備車に怒鳴り声。
木山春生と『幻想猛獣』の波状攻撃に生き残った、数少ない『警備員』のひとり黄泉川愛穂の声だ。
彼女たちは、先に高架へ上がっていた御坂美琴からの連絡――と

いうより一方的な通告を受けて、初春飾利の全面的なバックアップに回ることになっていた。

ほとんど独断での行動だが、そもそもこの現場の指揮権は黄泉川にあるため、後で埋める書類の必要欄について考えなければ、何ほどのことでもない。それさえ彼女にとっては日常茶飯なのだし、何より学生の身に危険が迫っているときにどうこう言えない。

彼女はそういう人だった。

本物の、敬意を抱くほかない教育者といえる。

そして彼女の視線は、つねに前方へむけられていた。

比喩ではなく、今この瞬間は物理的にもそうなっている。

その先には、キーボードの上で激しく踊る十本の指と、花飾りに覆われたその司令塔。

『風紀委員』にしてその『守護神（ゴールキーパー）』、初春飾利がいた。

彼女は今“手動で”音声ファイルの圧縮と転送を行っている。その演算の見事さには、荒事が得意な黄泉川も舌を巻かざるを得ない。

もちろん、突然出てきたビックリアイテムに及び腰の対策本部を叱咤しながら。

「転送完了しました！」

甘ったるい、そして鋼の意志が通った宣言。
その場の三人がほんの一瞬、周囲に注意をそらし、戻す。
そのため。

「責任は私が持つ。とにかく流すじゃん！」

ふたたび電波越しの喝を入れに戻った黄泉川の肩を支えるもうひとりの『警備員』が、別の役割を持つことになったのは当然だったのかもしれない。
こうしたわけで、

「……あ、あなたは！！」

木山春生に二度銃を向けたのは、彼女――鉄装綴里（てっそうつづり）が初となる。

第十六話　取引（前書き）

ひとつの終わり。

第十六話　取引

「便利なものだな」

木山先生がつぶやく。

さっき彼女自身が道路そのものを切り取った上、今度は初春さんが持っている治療プログラム狙いで収束ビーム砲を撃ってくる『幻想猛獣』のおかげで、市道一七三号バイパス線はどうみても全面不通のありさまになっていた。

「本当に便利なら、ふたり同時にエレベーターしてますって」

おれのささやかな反論。

今、おれたちは先生の“保護”のため、高架道路に上がっている。

初春さんが駆けあがろうとして『幻想猛獣』の攻撃を受けた階段ではない。あのときのプラズマボールは初ちゃんがえげつない能力で防いでくれたが、基本的に彼が守るのは『警備員』と初春さんだ。

おれたちふたりは勘定に入っていないので、おそらく今この段階で警備車と階段を両方狙われたら、絶対に階段は守ってくれないだ

ろう。

というわけで、おれと先生は高架下を抜けて下り線側に回り、そこからおれの“手”を使ってリフトを再現していた。

最初におれが、四本の“手”を同時展開してバイパスの防音壁を掴み、ほとんど全力で見えない懸垂を敢行。高架に乗り移ってしばらく息を整えた後、ふと思いつく。

人なみに不安を感じていたのか、眉を派の字に寄せてこちらを見上げていた木山先生にむけて降ろしていた四本の“手”をねじりあわせ、先生の細い腰を二周ほど回したあとで“腕”自身を握りしめて引き上げた。

わりあい簡単だった。

というか、あんまりこういうこと言いたくないけど、先生体重何キロなんだよ。“腕”にかかる力では、おれとそんなに変わらなかったぞ。

「君の能力では、一度に四〇キロ代前半が限界なわけだ。なに、気を落とすことはない。『遠隔操作（テレキネシス）』では、学園都市の上位二割に食いこめるさ」

さりげなくおれが気にしていた情報のヒントをばらしつつ、ＡＩＭ拡散力場の専門家がそんなことをのたまう。

ひょっとしてこれは、おれを慰めているつもりなのだろうか。

まあ実際、他の能力者の例にもれず念動力者（サイコキネシスト）も五割以上がレベル0だから実質的に能力者の上半分、人数比から考えてレベル3のなかでは中の下あたりという評価でも、全体の“上位二割”に食いこめるわけだが。

……あと先生、留置所に入ったら出される食事は残さず食べようね。

体重四〇キロ台はちょっとヤバい。

生活全般を修正しないと、暗部とか関係なしに死ねるぞこの人。

「まあ、なんでもいいや。さっさと“準備”してさっさと行きますよ先生。

僕としてはクラスメイトが起き上がる前に、先生が死んだら困るんです」

「ひどいな。私はどうでもいいのか」

木山春生が笑う。

声を上げるわけでも、唇の端をつりあげるわけでもない、柔らかく心のうちを透かしたような笑み。

そういえば、先生のこんな笑顔を見るのは久しぶりだ。

加藤くんの記憶をたぐってそう思ったおれは、要するに“キビツ

系”加藤若一が彼女の笑顔を見たのはこの修羅場におけるそれが初めてだということに思い至って、心の奥底にくすぶるオカルトさんのため息を聞いたような気がした。

「……じゃ、またタップダンス行きますか」

＞ｉ２１８１１―２９３８＜

実包入ってる銃の黒い口が、こっちに向いた。

両手を後ろに組むまでは、まあやらなきゃしょうがないでしょうが。

やっぱり頭に血が上ってるのか、『警備員』の人たちも話を聞いてくれない。

特に青いポニーテールの人なんか、目尻が三〇度近く吊りあがっている。

おれの携帯を返してくれたあの人だ。警備員の支部管轄がどういう区分けになってるか知らないが、この人はかなり動き回れる立場にいるらしい。

さすがに防弾服着てると胸部も目立ちませんね、じゃなくて。

「う、動かないでください！　両手を頭の後ろにまわして、うつぶせになって！」

ポニーテールの人に肩を貸していたメガネの『警備員』がこっちを威嚇する。
声の調子や質はともかく、突撃銃（アサルトライフル）の脅威は本物だ。

「やれやれ」

木山先生、八割あんたのせいだってわかってますか？

「し、従わない場合は――」
「あのう、緊張してるとこ申し訳ないんですが、その必要はないですよ」

しょうがないので割って入る。あまりに話が進まないからだ。
それはおれが困る。主に身体的な意味で。

「……どういう意味じゃん？」

お、青髪の人が乗ってくれた。いやマジでありがとうございます。

「あの化け物見たでしょ？　今は木山（このひと）先生に、えーとなんでしたっけ先生」

「多才能力（マルチスキル）か？」

「ああそれですそれ、あんなデタラメじみた能力はありません。それどころか超能力なんてカケラも使えやしない。全部あっちに持っていかれましたから」

言いながら、自由の利く左手で『幻想猛獣』を指す。

『警備員』のふたりは眉を寄せたが、目線はこっちに向いたままだ。そもそもあの怪物があれだけ肥大化したのもこの人らが無駄に鉛玉ぶちこんだからだったと思うんだけど、気のせいでしたっけ。

「で？」

青髪の人のレスポンスはそれだけ。

次の瞬間目と顔が同時に右へ動き、

「だめだ、出てくるな！！」

牽制する方向が変わる。おおかた中に初春さんがいたりするのだろう。

知ってるって。

おれはため息をついて、ちょっとだけゆさぶりをかけに行く。

「あの申し訳ないんですけど、ちゃんとこっち見て喋っていただけます？」

ふたりとも無傷じゃないんで」

「そんなことは、見ればわか……っ！？」

ずっとこちらを注視していた銃口が、声とともに震えた。

木山先生が無傷じゃないのは、それこそ見ればわかる。白衣はどこかに放り捨てられ、服も顔も手も足も傷だらけ泥だらけなのだ。

で、おれは「ふたりとも無傷じゃない」と言ったのに、眼鏡の人がどうしてそれを当然のように認めたか。

それは現在、おれが先生の肩に右手を回して、支えてもらっているからだ。

理由は右足が歩行の役に立たないため。

で、右足が役に立たない理由といえば。

さっき言った“準備”中に、木山先生の体に反生反剋の呪術を使ったせいで、右ふくらはぎにできていたクレーターが縦長に広がり、その時の“爆発”で筋力補助のための……バネ包帯？　も破損してしまったためである。

……ここまでつとめて冷静に現状を説明してきたけど。

痛い。

めっちゃ痛い。

頭突きされたわけでもないのに、恒常的に目の前で光がちらつく。

ただ、歩く――ふくらはぎの筋肉に力を入れなければ、まだ何とかなる。

そのためおれは右足をひきずり、木山先生に肩を借りていたわけで。

『夢みる機械』の時やらかした脳内出血のせいで、バランス感覚が怪しいのもあるが。

眼鏡の『警備員』が失礼にも上ずった声をあげたのは、おれの負傷を確認してもらうために右足を太ももからぶらつかせたとき、見えたからだ。

右足の膝下後ろが真っ赤に染まっているチノパンツを。

本来なら、おれの赤い“足跡”やその合間に垂れた血痕がけんけん跳びのように路面――だった場所へついているのも見えたはずだが、この眼鏡の人は木山先生にだけ注目を向けていたらしい。

日常生活を『警備員』に守ってもらっていた身としては、どうなんだと言いたいが。

「いや、ホント正直、早めに病院行きたいなーと」

「……黄泉川さんっ！」

耳の後ろに流れてきた脂汗を無視して笑顔を作ったのだが、眼鏡の人に泣き叫ばれた。

ちょっとショック。

「……かとう君？」

いや、先生は今気づいたって顔しても遅いからね。

あのちょっと、かがまないで下さい今おれ片足立ちもきついんだから痛くて、っておいチノパンの裾をめくるなこら傷口に触るとやばいってあがががががが。

「痛だだだだだだ、ちょっと何するんですかそっとしといて下さい！

こんなところに水なんてないでしょうが！！

ねえそっちのあんた、この人止めてくださいよそれが仕事でしょ！？　こんな理由で足切り落とすとかマジ勘弁してって聞いてるんですか！？」

痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い。
木山先生マジやめてほんとにやめて。今さらキリッとした顔で『警備員』の方を睨みつけても遅いから、本当にもう遅いから。
これまで“手”で傷口と右足の付け根を押さえつけてたのに今の
で解除されてあああああ血が出る出る出るちょっとこれ本当にやばいんじゃないのか。

「初春って言ったな！」

「は、はい！」

「右奥のボックスに止血剤と包帯がある、あと鋏もってくるじゃん！」

「はいっ！」

「かとう君、うつぶせになるんだ早く！」

いやだから今そんなこと言われても

自力でできれば

とっくに

あれ
地面
近

意識が浮かんでくる。
無理やり引っ張られるというより、池の底がどんどんせりあがってくる感触に近い。

原因はなんとなくわかる。

音だ。
緊急警報放送の試験信号のような、電子音だけで構成された露骨に機械的な音。
『幻想御手』と同じような音。
違うのは、『幻想御手』が聴くものの神経を昂ぶらせるように構成されていたのに対し、こちらは放送されても奇妙に感じるだけで、不快感どころか不信感すら抱かせないような音色（そんな物あるわ

けないのだが）によってつくられているところか。

……ん？
放送？

「……ふう」

この息声は、おそらく木山先生。
ということは

「ああ、流れたのか」

治療プログラムが。いや、よかったよかった。

「加藤さん、目が覚めたんですか！？」

いきなり甘ったるい大声。どんな声だよチクショウ。
痛む頭と右足を同時に両手で押さえようとして失敗し、警備車のプラスチック成型された長椅子の上でうずくまる。みっともないな、

おれ。
……ここ車内か？
「このタイミングで目が覚めたってことは、『幻想御手』が無効化したんかね」
「なんだって？　どういうことじゃんよ」
ぼそっと呟いたはずなのに首をつっこんでくる青髪の『警備員』。あんた耳いいな。あと体ごと乗りださないで、何とは言わないけど腕に当たるから。
「おれも『幻想御手』を聞いてたんですよ。いま車の外で怪物とやりあってる男の方に、いろいろ脳をいじくられて回復したんですけどね」
正直に答える。
その方が衝撃を受けてくれるだろうし、こちらから無茶も通しやすい。
「な……」

『警備員』のふたりと初春さん、三人そろって想像通りショックを受けていただきましてありがとうございます……木山先生は専門家だからよけいに驚くのかもしれないけど、あなたは早々に回復していただかないと困るんだけどな。

回復といえば、右足の激痛がほぼ治まってる。ちょっとしびれるだけだ。

治安部隊はいい傷薬を常備してるみたいですね。

「それはどうでもいいです。とりあえず今は、木山春生の処遇についてひとつ愚見を披露させていただきたい。

それがやりたいからこそ、あんなケガまでして高架に上がってきたんですから」

「ぐけんをひろう？」

やべ、オカルトさんの古い口調が出てきた。どういうわけか知らないが、ここでキャラ改変なんぞありえない。

三人の大人はともかく、初春さんが頭にはてなマークを浮かべている。

彼女も、ひょっとして国語弱いのかな。あんだけパソコンいじれれば、それなりに語彙があってもおかしくないんだが。

「端的に言いましょう。

木山春生、ならびに僕つまり加藤若一は、認識しているかぎりの自己負罪を認めます。

そのかわり、今回の事件の動機である、僕たちふたりが被害者となった別の不祥事を正式に捜査すること、その証人として僕たちに保護プログラムを適用すること、この二点を約束してください」

頭から二、三個のはてなマークを連発している初春さんと、今の発言内容を掴んだのか硬直している大人三人が我に返る前に、ちょっくら説明。

そろそろ『幻想御手』治療プログラムも音量が小さくなってきた。終わりかな。

さて、これはいわゆる司法取引というやつだ。

捜査に協力するからなにか見返りをちょうだいという、アメリカの刑事ドラマなんかでよくあるアレ。

人口層からいって当たり前のことだが軽い少年犯罪が多く、裁判所も事件すべてを裁ききれないし刑務所もまじめにやってれば収容率二〇〇パーセントを越える学園都市では、この方法が発達している。

保護プログラムというのも、アメリカで有名になった制度だ。
あちらではマフィアや大企業、学園都市では主に武装無能力集団（スキルアウト）による口封じをふせぐため、犯罪捜査に欠かせない協力者のために新しい個人情報をゼロからでっちあげ、別人として生活を送らせる。
知らない人からすれば、証人が行方不明になったように見えるしかけだ。

もちろん、おれは木原幻生（きはらげんせい）の実験に関する捜査なんて、まったく期待していない。どうせ嗅ぎつけた統括理事会が何かしら圧力をかけて、すぐに捜査本部が無人化するに決まっているのだ。

あ、青髪の人が何か怒鳴ってる。答えないけど。
おまえも犯人だったじゃんとか、んなわけないでしょ。おれは単に木山先生を御坂さんから引き離しただけ。

おれが求めるのは、とにかく木山先生の身柄を『警備員』がキープしておくこと。
それだけで彼女の安全は相当違ったレベルになる。

先生がまだ悪あがきを続けるだけなら統括理事会もニヤニヤしながら見逃すだろうが、それが無関係の――つまりこれから誰かの実験台になる学生にまで影響を及ぼせば、まず黙っていない。
だから先生には、目立たないように復讐プランを練ってほしいのだ。

おれ自身については初ちゃんの介入もあるだろうし、見通しは暗い。

オカルトさんの知識にある“身代わりの術”でも実行すればどうか分からないが、単純に木山先生の身の安全を図るための術をかけただけで足がイカれるようでは、科学的能力者が呪術を使う危険性というのも間違っていないことになる。

《ジャク！！》

噂をすればなんとやら、初ちゃんお得意のエセ念話がやってきた。妙に思念、といおうか、おれの脳内で再生される初ちゃんの幻聴がブレて聞こえる。彼が言ってた“波が荒い”というのはこういうことなのか。

頭痛がひどくなってきたから、あまり幅のある念話は欲しくないんだが。

《何だよ、こっちは手負いなんだ手短に――》

《こっちも焦ってるんだ！　木山につないでくれ！！》

《どうやって》

《手ぇ繋げばいい話だろ！　早く！！》

それだけ叫んで念が切れる。

いったいどうしたというんだ？　『幻想御手』の治療プログラムはさっき途切れたし、もう『幻想猛獣』もネットワークを失って行動不能に陥ったはず……

頭が痛いな。行動不能に……

いや。

そうじゃない。

ネットワークを喪って、エネルギー供給源とともに首輪も失ったわけだ。

……やっべ。

「木山先生、途中で悪いんですが、外に出てください」

「……なんだって？」

まだ硬直していた木山先生と、こっちに向けて何かわめいていた『警備員』がまた同時に固まる。頭が痛いのこいつのせいかもな。おれはそんな二人の視線を、またしびれて動かしにくくなってきた右手の人差し指で、かすんで見える後部扉に誘導した。

「外、さっきより、状態悪くなってる、みたい、ですよ……」

呆然と扉を眺める木山先生の手指に、左手で触れる。

《初ちゃん、これで、いいか》

その瞬間。

左手から脊髄にかけて何かの衝撃がほとばしり、おれは意識を簡単に手放した。

――満願成就の時というわけだ

――憑霊、喜べ

――きさまは残してやる

第十六話　取引（後書き）

次回、『幻想御手』編は完結する予定です。
上条さんサイドは、その後で補完することになると思います。
……たぶん。

注…

『自己負罪』
自分に責任がある罪状のこと。自分がやった犯罪行為。
これについての自白を強制されない、自分が不利になる証言をしなくていい、という原則を自己負罪拒否特権という。
加藤はこの特権を放棄して、自分から罪（あの時すでに捜査されている木山先生の逃亡を助けた＝犯人隠避罪）を認めるかわりに、木原幻生の実験を追及しろと要求した。

第十六話外伝の一　Ｒｅｑｕｉｅｓｃａｔ　Ｉｎ　Ｐａｃｅ（前書き）

『幻想御手』編、本編終了です。

音。

電子音。
人の精神を落ち着かせる音。
ＡＩＭ拡散力場の相互干渉を解く音。

それが流れたとき。
正確には、その曲が流れた直後。

御坂美琴の体全体を、ついに『幻想猛獣』の触手が捉えた。

「やばっ！！」

『幻想猛獣』は学習していた。

この小さな敵は、生まれた直後に自分／自分たちが受けた鉛玉をはるかに超えるエネルギー流を生みだすことができる。

そして、それこそが彼女に発現した超能力。

高度な自己再生能力を持っているらしい自分／自分たちがソレを攻めあぐねているのは、ひとえにその敵が素早く動きまわり、またこちらの狙いが甘くなりがちな攻撃を、能力で防いでいるからに他ならない。

ならば。

どちらか一方の反応だけでもふさいでしまえば、自分／自分たちがこれ以上痛い目を見ることもない。

足を掴んで振り回しただけでは、地中の磁鉄が反発して軟着陸させるだけだ。

それは先程も試験済みである。

小さな敵がついに空中へ固定される。

その頭めがけて繰り出される、ほとんど柱と言っていい太さの触手。

正面から放たれたそれは、しかし当然のように電撃で迎えうたれ、醜く破片を散らすにとどまった。

もっとも、それが『幻想猛獣』の敗北を意味するわけではない。

高度な自己再生能力を持っているらしい自分／自分たちにとって

――何が起こった？

御坂美琴も、同じことを考えている。

いくらやってもすぐに再生するんじゃ意味がない。

……そのはずだったのだが。

現実としてあるのは、溶け爛（ただ）れるばかりで一向によみがえる気配を見せない、赤黒の触手。

御坂美琴の心にまず浮かんだのは、安堵ではなく奇異の念だった。

これは何だ？

という。

もちろん、その迷いを自らに許す彼女ではない。
特に今このとき、ＡＩＭ拡散力場の集合体という得体のしれない怪物を少々荒っぽく誘導している最中には、もともとレベルの高い頭脳が活性化し回転がさらに速くなる。
すぐに独りで結論を導き出した。

「治療プログラム……！　初春さん、やったんだ！」

視界の端に収めるのは、紺色に白帯の警備車。
今この時まで、付き合いはじめて一週間になる若き『風紀委員』が、その特技を存分に発揮していたのだろう。

目の前には、自らに起こっている自体が理解できないとばかりに潰れた触手を見やり、聞き苦しい呻きをたてる化け物。
しかし、化け物と呼ばれていた要素の一端は、たった今かなたに消え去った。
残ったのは図体だけ。

何度も言うが、彼女の頭脳はそもそもレベルが高い。

電磁気力などという“世界を統べる四つの力”の一を、周囲五〇メートルにわたって意のままにする演算能力は、何も超能力のためだけに使われてはいないからだ。
だから、時を待たずして状況と展望を掴むことができる。

すなわち。

「悪いわね……
これで、ゲームオーバーよっ！！」

轟く雷光。
圧倒的な圧力と電熱により、『幻想猛獣』はその場に崩れ落ちた。

＞i218112938＜

やれやれ。

介旅初矢は、誰もいない高架下でこっそりと息をついた。

彼がひとりさびしく守備についている間に、今回の騒ぎで主犯格といえる木山と加藤のふたりが『警備員』へ自首しに行ったことは、彼も気づいている。

身の安全を確保しがてら、能力暴走促進物質の抽出実験について公権力に暴露する、といったところが妥当なセンだろう。

そこはいい。

元々彼の目的、というより彼を臨時雇用した誰かさんの目的は、ほとんど今この瞬間に真っ黒焦げの姿をさらした『幻想猛獣』、あ

るいはそれを木山が生みだすプロセスを見ることだったと思われる。
その任を果たした介旅自身について、文句は言わせない。

「バイトもこれで終わり、かな」

小さく安堵の一言を漏らしたところで、誰の罰も当たるまい。

問題は次だ。
あえてセンスのない言い方をすれば、抽出実験というのは確実に学園都市の“裏”あるいは“闇”と呼ばれる部類の研究に属する。
一度そういうところに片足だけでも突っこんだ人間が今さらになって『警備員』を頼るという姿勢は、彼や友人をおとしめた連中からすれば褒められたものではないようだ。

『警備員』に拘束されたとしても、統括理事会からの圧力で即時釈放、その直後に拉致監禁、数日後に遺体で発見という流れがすぐに想像できる。
その辺、ジャクは理解しているのだろうか――

そんな未来の心配をしていた介旅の左目が、何かを捉えた。

左目と断るまでもなく、彼の視界いっぱいには薄い桃色の上皮か

ら赤黒く変色した『幻想猛獣』が横たわっている。
その向こうにある放置された農林試験場との間には、中学二年生とは思えない威風を見せつけるようにして御坂美琴が立っていた。
彼女はおそらく『幻想猛獣』が進路を変えずに原子力実験炉へ突き進んでいたとしても、黄色と黒の原子力マークを背にしてあのように立っていたのだろう。
その御坂がふっと体の構えを解き、胸をなでおろして額の汗をぬぐった。

違う。
自分が見たのは、そんな光景ではない。

介旅初矢は、ほんの十度だけ首を左に巡らせて視線を集中し――

焼け焦げて表面が硬化した触手が、震えるのを見た。

《この野郎、まだ生きてやがる！！》

「えっ」

喉ではなく頭で声を出したのは、果たして正解だったのかどうか。
やっと目の前の異変に気づいた御坂を確認し、ついでに心の中で盛大に悪罵を叩きつけながら、介旅は必死で空間上にあるはずのないものを探った。
彼の友人へつながる回路を。

《ジャク！！》

《何だよ、こっちは手負いなんだ手短に――》

加藤若一の返信が、明らかに波の上下を見せている。
何か憔悴（しょうすい）するような事件が高架の上であったのかもしれないが、そんなことを気にしている余裕は彼にもない。

《こっちも焦ってるんだ！　木山につないでくれ！！》

復活をとげようとしている『幻想猛獣』に、高架の側面で展開していた斥力場をそのままにして斜め上から押しつける。
怪物の背中が圧し潰されて泡立ち、ついに甲羅が生まれた。
再生能力はなくとも適応の速さは変わらないらしい。

《どうやって》

《手ぇ繋げばいい話だろ！　早く！！》

そこまで伝えて、いったん回線を閉じる。

ここから先、彼は言葉でしか御坂美琴を援護できない。

加藤若一の考えにはいろいろと勘違いもあったが、少なくともある一点でだけは正鵠を射ていた。

“早く事件を解決しないと、誰かが介入してくる”という点だ。

彼はそのために学園都市でもっとも有名なレベル5を巻きこむという荒業に出たわけだが、介旅自身もその作戦に手を貸した以上、ヒーローあるいはヒロインの座を御坂が独占したまま終わってもらわねばならない。

でなければ、どこぞの知りたがりや出しゃばりが能力全開でやってくる。

この事件は“表の世間で大々的に名が知られており、かつまとも

な学生である御坂美琴が解決する”からこそ、性根の腐った連中への抑止力となりうるのだ。
ここで彼女が負傷ましてや死亡などすれば、学園都市に少なからず影響力をもつ彼女の両親が黙っていないし、『警備員』も本腰を入れて事件の裏を捜査しはじめるだろう――という無言の脅しによって。

本当に上の上にいる、たとえば統括理事会などは、それも気にしないのだろうが。

これは彼に“仕事を依頼”した人物も言及していたことだ。
急がねえとみんな死んでメデタシメデタシになっちまうぜ、と。

《初ちゃん、これで、いいか》

加藤からの念話。
即座に彼の神経回路へ割り込みをかけ、そのまま木山との調整を終わらせる。

《木山、外に出ろ。困ったことになった》

《……今行く》

念話が終わる。
相手がバイパス上にいることを意識して上目遣いになっていた両眼を前方へ振りもどすと、御坂美琴が何ごとかをわめいていた。

「話が違うじゃない……」

驚きと呆れ、そして自分でも腹立たしいことに一抹の焦りを声ににじませて、御坂美琴はつぶやいた。

あの怪しい介旅が、おそらく無意識に放った念話のようなもので気づいた時には、もう化け物は化け物と呼ばれる資格をとりもどしていた。
十本以上もの足で立ち上がるそれを見て、腹の底が冷たくなる。

たしかに今、彼女は追いつめられているわけではない。

バイパス線の反対側にある原子炉のような危険極まりない施設を背負っているわけでもなければ、物理的に逃げ道をふさがれているわけでもない。

『幻想猛獣』の刺激反応性と再生能力の消失を考えれば、彼女自身の気力が許すかぎり長期戦に持ちこんでもいいはずだ。

だが、美琴の主観でいえば、これ以上足を引いていい理由はどこにもなかった。

昏睡から目覚め、今から考えると恐らくはこの怪物を出現させたくない一心で木山春生を追ってきた加藤若一。

その加藤に言い含められながらも『幻想御手』を聞いて倒れ、いまだに目覚めていない佐天涙子（さてんるいこ）。

木山に再会する前の晩、『幻想御手』使用者と勝負するのだと出かけていった自分を止めようとして負傷に負傷を重ね、今は支部で後方支援に回っている白井黒子（しらいくろこ）。

いろいろ考え合わせれば、御坂美琴が今ここで独り苦戦している理由のひとつひとつは、どれも自身に関係しているのだ。

それどころか『幻想御手』利用者の心理についても、その形成の

一端をレベル5の自分が担っていたと言えなくもない。
ならば、不始末の処理も単独で済ませるのが筋というもの。

まあ、そうは言っても――

「だったらどうしろって言うのよ！」

打つ手が見えない。
とにかく電撃で一部ずつ焼いていくしかないのか、そう思った時。

《核だ！》

突如、頭に直接打ちこまれる声。
それもこれまで思念を送ってきたのとは別人だ。

「……木山！？」

思わず高架を見る。
その上に右手を抑える木山春生、下に顔をしかめた介旅初矢。
どうやら中継通信ということらしい。

《力場を固定している核のようなものが、どこかにあるはずだ。それを破壊すれば……》

耳を通さない声に、美琴は目を逸らさぬまま頷く。
攻略の道が見えたそのタイミングは、しかし別の始まりでもあった。

『ママ……？』

御坂美琴にとって、木山春生にとって、そして誰より初春飾利にとって、それぞれ聞き覚えのある声が『幻想猛獣』から発せられたのは、数秒を経た後のことである。

『幻想猛獣』の切りつぎ独演会があったものの、そのあとは圧巻だった。

大電流による抵抗熱で『幻想猛獣』の外装を焼き落とし、中心軸に向けて『超電磁砲』を一発。

それで大勢が決してしまったのだから。

ピン、と軽い金属音。

伸ばした右手に青白い雷光がまとわりつき、肘先の延長線上には見えない磁場が一直線に形成される。

狙うは中央。『幻想猛獣』を効率よく貫くにはそこしかない。

……恐らくそうであってほしい、と介旅初矢は切に願う。

射線上にバイパス、つまり警備車や木山があることから、万一ということで御坂は急旋回し、コインを打ち出す方向を変えている。

これに追随した『幻想猛獣』がそのまま機先を制しようと動いたところを、

「できるだけ早くしてくれ……」

高架下にとどまっていた介旅が怪物の下腹全体に加速をかけ、どうにか移動を押さえているところだ。御坂は近づかれることを計算に入れてわざと大きなコースで走っていたのだがのだが、さすがに五〇メートルも離れると介旅に伝える手段がない。

もし“念話”を逆探知して伝えられたとしても、『幻想猛獣』を御坂に近づけるつもりは、介旅にもなかったけれど。

コインが落ちる。

親指が伸びる。

轟音。

断末魔の叫びとともに、『幻想猛獣』の胴体中心部に大穴が開く。穴そのものが高熱で周囲の肉を焼き焦がし、外側への侵蝕を始める。介旅も一度は憧れた力押しだが、今は彼女をみて感嘆している場合ではない。

空中へ弧を描くようにして飛びだしたのは、赤茶色の三角柱。

木山が何か叫んでいるのを見ると、あれが御坂に告げていた“核”というやつか。

介旅が『幻想猛獣』を抑えたおかげで御坂と怪物との距離が広がり、その分だけ怪物の受けるエネルギーが減衰したことが、核の無事につながっている。

そうと知らない介旅は、しかし余裕を持っていた。

あの電磁砲（レールガン）で蒸発どころか溶けもしないその頑丈さは、ただの中学生でしかない介旅に目を見張らせた。いつか、あれが学術的に議論の的となる日も来るのだろう。

だが今日ではない。

あの核を構成の基本にしている『幻想猛獣』ではあるが、逆に言えば核が完全に残っているかぎり、いつでも肉片からの再生が起こりうるのだから。

だからこそ御坂は自分に近づかれてでも多くの熱量を怪物に届けようとしたのだし、

だからこそ介旅という防衛線（デフライン）が生きてくる。

「何だか知らないけど、重さはあるんだよな」

誰も答えるもののない問いをつぶやき、自嘲の笑みを漏らしてから、介旅初矢は初めてその能力を開放した。

三角柱の表面に生まれていた細かい傷痕。
そのすべてから細い光芒が射し、同時に三角柱そのものが外から無理やり力で押しこめられたように折りこまれ、縮んでゆく。
縮む、縮む、縮む――。

爆発。

これが彼の能力。
もはや『量子変速』から逸脱した上位能力。
名前はまだ特にないが、威力はともかくプロセスの珍しさにおいては誰に譲るつもりもない。生き残った“発信器”の向こうにも、その事実は伝わったはずだ。

公的な記録では、『幻想猛獣』を倒したのは御坂美琴となる。
それはいい。実際、九割五分は彼女の手柄なのだし。

ただ、あの化け物にとどめを刺したのが介旅初矢であること。
それを、どこかから見ているだろう統括理事長のアラスカなんとやらに理解してもらえれば、十分だ。

硬質の音とともに飛散する三角柱のカケラと、それに合わせて崩壊してゆく『幻想猛獣』の巨躯をうすぼんやりと眺めながら、生存可能性をほんの少し上げることができた自分を、介旅初矢は喉の奥でこっそりと称賛した。

その日の夜。

集合住宅の一室から天空へと放たれた『竜王の殺息（ドラゴンブレス）』によって、学園都市が所有する人工衛星のうち、もっとも重要な一基が破壊された。

架空の視座からすれば、“四日早く”。

第十六話外伝の一　Ｒｅｑｕｉｅｓｃａｔ　Ｉｎ　Ｐａｃｅ（後書き）

インデックスさんの顛末については、今後掲載する予定です。
しかし、ここまでで五十部か……
長いな……

注…

『Ｒｅｑｕｉｅｓｃａｔ　Ｉｎ　Ｐａｃｅ』
「安らかに眠れ」。死者への慰霊の言葉。

第十六話外伝の二　上条当麻、反駁す

「――有り得ねえよ」

む、と表情を曇らせる女。

黒い長髪を後頭部につめて幾房にも垂らし、肩から胸だけを隠して裾を結んだシャツと左足のみを根元から断ちきったデニム、さらに片足だけのブーツは、他人の目に違和感を植えつける。

ウエスタンベルトに佩(は)いた長刀は、いまだ数寸より先に抜かれていない。

『必要悪の教会(ネセサリウス)』の魔術師。

神裂火織(かんざきかおり)である。

これに相対(あいたい)するは、ハリセンボンのように尖った髪型の少年。

カッターシャツにスラックスとスニーカーという、学生服を除けば典型的な日本の高校生としての服装が、なぜか彼にはよく似合っ

ている。

その少年は、右手を前に出し左足を一歩引いて構えながら、先の言葉を繰り返す。

「聞こえなかったか？　有り得ねえ、ってんだよ。人間の脳の容量は、意外に大きいんだ」

＞i21811―2938＜

二度繰り返される言葉。

もっとも。

そう言われて十を理解できるほど、かれらふたりは互いを知らない。知る気もない。

今この半径二キロの結界において、ふたりの間で交わされたのは拳と衝撃、そして互いが他方から護ろうとしている『禁書目録（インデックス）』なる少女の特殊すぎる才能――完全記憶能力についての会話のみ。

そこで神裂が出した“人間の脳の要領は意外に小さい”という導入でしかない言葉に、少年が噛みついただけにも思えるのだ。

「……あなたが何についてそう言っているのかは、理解できませんが。

どのような基準で脳容量が大きいと言われたにせよ、それも彼女の“完全記憶能力”の前では――」

完全記憶能力。

常人が無意識のうちに忘れ去ってしまう些細な記憶、たとえば今日歩いてきた道の街路樹についていた葉の数であるとか、昨日電車に乗った駅のホームにいた人々の特徴であるとか、そういった“自分に関係ない記憶”まで脳に保存されてしまう、特異体質。

しかし言いかえれば、一言一句たりとも間違えてはならない、損じてはならないような文献を記憶するには、間違いなく適任と言える。

そもそも、彼女が『禁書目録』とされたのは、この能力によるところが大きい。

イギリス清教は、確かに『禁書目録』という存在を必要としていた。しかし、わざわざ“彼女”を『禁書目録』にしたてあげたのは、

それなりの理由あってのことなのだ。
それが少年にとって、あるいは俗世にとって唾棄（だき）すべきものであっても。

そして、その『禁書目録』が収める膨大な文章図式ゆえに、彼女の記憶野はすでに八五パーセントが埋められている。
残りの十五パーセントで、生活上の記憶をやりくりせねばならない。
ゆえに、一年ごとに記憶をリセットしなければ、彼女の脳は破壊される。

『禁書目録』を守るためには、彼女を狩り出さねばならない。
同僚として、また友人として、苦渋に満ちた選択肢なのは言うまでもない。

しかし今は、それが神裂火織の論理だった。

とはいえ。
ある意味では、当然というべきか。
そんなことで少年は、上条当麻（かみじょうとうま）は止まらない。

「だから、それが有り得ねえって言ってるんだ。
何がおかしいか分かってねえみてえだから、ひとつ教えてやる。
俺の知り合いが言ってたことなんだけどな。
“たった一〇万冊程度”の本の内容を完全に記憶しても、普通の生活に関わる脳の機能はほとんど圧迫されねえんだよ！！」

「な……！？」

今宵初めて、女の長身が微動した。
それまでの中心線を保った動きから考えれば、はっきり

「揺れた」

と言っていいかもしれない。

「そんなバカな。
人間の脳は幼少期の成長によって多少の違いこそあっても、記憶容量に重大な変化など起きるわけが――」

「だから！！
そもそも人間の記憶ってのは、“慣れ”とか“思い出”とか“意味”とか、ジャンルによって脳の中で記録する場所が違うんだ。本の中身をどれだけ覚えたって、それは“慣れ”でも“思い出”でもねえだろ！！
いくら完全記憶能力ったって、もし本当に一年で脳がパンクするんなら、インデックスは『必要悪の教会』に入る前からずっと寝たきりになってるはずじゃねえのか！！」

ふと。
神裂火織は、違和感を覚えた。

科学的事実と言いながら、その意味するところの根拠に科学的要素などない。
記憶の“ジャンル”という言い方にしても、脳全体から記録する場所が分けられているという主張にしても、あまりに論理性がなさすぎる。

だが、今こうして自分の目の前で、自分が納得できないというだけで彼女に反攻しようとしている少年は、その薄弱な根拠をもとにした空論を、自信満々に並べ立てている。
これはいったい、どういうことなのだ？
なぜ、ただの“知り合い”のことばを、ここまで信じられるのか？
その答えは、相手から発せられる。

「ああっ、くそ！　なんで気づかねえんだ！
てめえら魔術師だろ!?　あいつの記憶を消すのも魔術なんだろ!?　しかもきっちり一年ごとの真夜中に！

さっき、普通の人間は記憶を知らないうちに整理してるって言ったよな。じゃあなんでインデックスだけ、わざわざ一年ごとにくぎって記憶を消す必要があるんだ？　誰がそう言ったんだ!?
小さな女の子の頭に魔導書ぶちこんで、自分たちの思い通りにしようなんて勝手なこと考えてるような連中が、てめえらにインデックスのことをバカ正直に全部説明するとでも思ってんのか？　『必要悪の教会』だか何だか知らねえけど、魔術の世界ってのはそんなに優しい平和なもんなのか!?

インデックスは一年ごとに記憶を消さなきゃ生きていけないんじ

ゃない。
“一年ごとに記憶を消さなきゃ暴走するような呪いがかけられてる”可能性ってやつを、考えたことねえのかよ！？」

呪い。

その言葉に、神裂は正しく反応した。

ここは科学の街、学園都市。

呪い、などという単語を軽々しく口にすれば、それは自分の評価が軽くなることを意味するほどの街だ。

そんな街で呪いという概念、そして初対面だったであろうインデックスがその被害者になった可能性というものについて、いとも簡単に述べるだけの宗教観を持つもの。そしてなおかつ、目の前の少年と関係がありそうな人間といえば、ただひとり。

そう。

あの、古風かつ粗暴な口調を持つ少年。

「――加藤（かとう）、保憲（やすのり）」

「へ？」

ぎり、と女の奥歯が鳴る。

その一瞬のうちに、互いは同じ少年について、別の顔を思い出していた。

上条当麻は、いま自分が言った理屈のほとんどを提供した、得体の知れない下級生を。

インデックスについて偉そうにしゃべった後に毒づいたその怒りを。

神裂火織は、科学的能力者でありながら魔術を使った、得体の知れない中学生を。

自分に絶対の自信を持つ、あの高らかな嘲りを。

「加藤……そうか、あいつも襲われたって」

だから、口の中で呟いた当麻の声を聞き取ることができたのは、ただ神裂の異常な聴覚による恩恵のみを理由としない。

聴覚情報と思考の一致ゆえだった。

上条当麻の念頭にある「加藤」の名は「加藤保憲」ではなかったのだが、いかな聖人と言えど人の思考を覗けるわけではない彼女が知るはずもない。

「襲われた？　来襲してきたのは彼奴（きゃつ）の方です」

「んなっ、聞いた話と違うぞ！？」

身体の危機なしでは初めてうろたえた当麻に、神裂は言い放つ。

「もう結構です。

――あなた、あの男に誑（たぶら）かされましたね」

「たぶらかされた？」

それは騙すとか、迷わせるという意味のはずだ。

しかし当麻は、そもそも騙されるほど加藤と話をしていない。先刻から彼が並べているあの置手紙には、確かに信じられないような

ことも書いてあったが、少なくとも目の前の鉄面皮よりはインデックスを案じているように見受けられた。

身に覚えのない当麻は、突如話が通じなくなった相手の変貌に眉をひそめるばかり。

だが相手は太刀の柄に手をかけ、問答無用の構えだ。

神裂火織は、優先目標に若干の修正を加えていた。

目の前の少年を必要以上に傷つけることは望んでいなかったが、あの加藤保憲の手駒にされているとなれば容赦も難しい。彼がどんな異能の力を持っているにせよ、ある意味では当初の予定通り、数日間眠ってもらうことになる。

その方がインデックスを取り戻しやすいのだから、なおのことだ。

「それなら話は早い。あなたは自分の意志でインデックスを護りたいのではない、彼女を陥れたいあの少年に操られているだけ。

ここで踏ん張っても、あなたにとって何の益もありませんよ」

もっとも、自覚はないのだろうが。

もともと思考を操るとはそういうことだ。本人は自分の思考回路と自分の意識を同一視しているから、誰かに考え方を誘導されているという発想がない。

こうもやすやすとひとりの人格に手を加える加藤保憲という男にふと思考をむけ、そのために自分が被る労苦とインデックスにひたひたと近づく命の危険を思って、神裂火織があの男に対する暗い意志を固めたその時。

ぎり、と音がした。

人払いがなされた、澄んだ空気に響く音。
先ほどのような、彼女自身が奥歯をかむ音ではない。
その源は。

高校生の左手に握られた、白い手巾（ハンカチ）。
彼女の驚異的な視力によれば、墨で五芒星（ペンタグラム）が染め抜かれている。
その意味に思い至った彼女が驚愕するより早く、

「……ふっざけんな」

目の前の少年が作る、握り拳だった。

「俺には、自分が誰かに操られてるかどうかなんて分からねえ。でも、それは別にして、今ここで言えることがひとつだけある。

なんでお前ら、インデックスを呪われたままにしてんだよ。

なんで敵として追い回してんだよ！

てめえら、何勝手に見限ってん――」

轟ッッッ！！

ある方角――ちょうど月詠小萌の私宅がある方角から、まばゆいばかりの閃光に続いて大音がとどろいたのは、上条当麻がそう叫びかけた瞬間のことである。

第十六話外伝の二　上条当麻、反駁す（後書き）

その頃の上条さん前編でした。
後編は加藤くんの知覚上、また後になります。
ご了承ください。

第十六話補遺　平井保昌の密書（前書き）

加藤保憲と戦った男の遺書。

第十六話補遺　平井保昌の密書

明治四五年七月、ひとりの男が自殺した。享年七二歳であった。

男の名は平井保昌（ひらいやすまさ）。明治一の大陰陽師（おんみょうじ）であり、同時に『一國の首都喪失記』（※全集第十巻収録）にも登場した呪術師・加藤保憲（かとうやすのり）中尉と壮絶なる決闘を行い、敗れた人物でもある。

彼は自死の直前、同じく加藤に立ち向かった同志であり、またみずからと違って加藤にこれからも立ち向かわねばならない幸田露伴（こうだろはん）に対し、一通の書をしたためていた。

その内容は東洋学に精通し、ともすれば迷信に走りがちとされた露伴にあてられた手紙としてもあまりに奇抜であったため、新発見の遺稿のなかでも無視されてきた。

しかし、東洋学の権威とすら言われていた彼の精神的世界観を考えるにあたって、この書簡は大きな役割を果たすものと考えねばならない。

特に先述の『一國の首都喪失記』は彼が明治期に発表した論文『一國の首都』の改稿といえるものだ。しかしここに突然あらわれた加藤保憲という陸軍軍人について、この書簡ほど多くを語るものはない。

また、これまでほとんど顧(かえり)みられてこなかった、差出人も特徴的である。

平井保昌が職業的な陰陽師であったことは上述したが、彼はそれどころではなく、陰陽道(おんみょうどう)本院の総帥でもあった。

陰陽道本院とは、明治維新後に太陽暦への切りかえが行われ、暦(れき)道(どう)をつかさどる陰陽師――なかでもその本家である土御門(つちみかど)家の衰退を目のあたりにした平井ら中堅陰陽師たちが、世にはびこるインチキ占い師を少しでもへらし、陰陽道を体系化して組織を建てなおそうとしたものである。

明治維新後、朝廷の陰陽寮が廃止されて公的な後ろだてを失った彼らから職を奪うように、自称陰陽師たちが全国で出現していたのも理由のひとつだ。

東京に事務所をおき、ここでキリスト教神学校のように陰陽道の教職者を育成しようというのであった。

しかし、本院はできたものの運営はうまくゆかず、この書簡の差出日――すなわち明治帝を死の淵から救いあげられなかったという決定的な事実をもって、土御門家と陰陽道は衰亡への道を転がり落ちてゆくことになる。

少なくとも、公的な文書によれば。

さて、その平井保昌が幸田露伴に、ただ加藤保憲という人物ひとりの調書を送るという事実は、それだけ露伴がこの人物に興味、あるいは警戒を抱いていたという証左と考えていいだろう。

その原因は、『一國の首都喪失記』によって明らかになる。

つまり露伴は、加藤中尉が大正の関東大震災に、大きな影響をもっていたと考えていたのだ。

ここでは、露伴が大正大震災に関連してもっとも強く関心を持っていたと思われる、この加藤保憲についても考察するものとする。

＞i21811―2938＜

まず、書簡は『壬子七月（みずのえねみづき）』と書きだされている。

この年、グレゴリオ暦でいう一九一二年七月三〇日、明治天皇が崩御なった。

陰陽道本院は東京道場の陰陽師たちを総動員して加持祈祷（かじきとう）に当たったが、それらがなんら奏功することなく天皇が別世界へと旅立ったことで、陰陽道それ自体が衰退する決定的な原因になったことは述べた。

そしてこの日、平井保昌は殉死するかのように自らの命を絶つ。

後述のように明治大帝の死が確定したかのような文章から、この書簡が七月三〇日またはそれにごく近い日付で書かれたことは確かといえる。

傍証ではあるが、陰陽道本院から発見された資料『賀茂日記』においては、若き第二代総帥となった賀茂保経（かもやすつね）が自決した平井の遺書から墨の香りを写した、などと記述されているため、おそらく殉死の当日に記されたものだろう。

「壬子」と干支で年を数えながら「七月」と太陽暦で月を数えているのは、文を書いたことに旧訓「ふみづき」を当てたものか、または旧暦七月、今でいう六月ごろにほとんどの内容が整理され下書きされていたことを示している。

本文はまず、幸田成行（※露伴の本名）と約束のあった

『加藤保憲陸軍歩兵中尉ノ身上調書ニ付不十分乍ラ次ノ如ク報告イタスモノ也』

として、加藤の素性を完全には追いきれなかったことを率直に記している。

その上で、平井はまず加藤の出身から論ずる。

以下、適宜大意を訳出する。

『加藤中尉の出身地、和歌山県龍神村は、有名な霊地とされます。開祖は修験道（しゅげんどう）の開祖でもある役小角（えんのおづぬ）といわれていますが、地理的に高野山の裏側にあたるため、弘法大師空海（くうかい）が護法尊（ごほうそん）である難陀龍王（なんだりゅうおう）のお告げを受けて開いたともいわれております。

この地は温泉が多く、古くから修行の地とされ、鉱産資源もあるといいます。

江戸時代には、干支が亥年になるごとに風呂場を浄め改築すると

いう風習があったそうで、これにからんで猪を崇拝しています。
ちなみに、猪を崇拝する祭司がいた集団としては古代の葛城（かつらぎ）一族が有名ですが、この葛城氏の流れをくむ集団が開拓してきたのかもしれません』

和歌山県田辺市龍神村は、現在でも国が指定した温泉地として有名である。
千メートル級の低山が連なる紀伊山地の真ん中で、古代から宗教的な聖地でもあった。当時は国境など関係なく、修行者たちは吉野から熊野、そして紀伊へと山の中をめぐり、精神を高めていたのだ。

『ところで、龍神村に加藤という姓の家はありません。加藤姓の住民がいたという記録も文書では見当たりません。

ただ、この村は修験者（ゲンザ）の修行場に近く、奈良の葛城山と同じように妖術を使う不審者が出没するという噂があります。

『日本書紀』斉明天皇紀元五月の条には、「空中に龍に乗るもの

がいて、顔だちは唐人に似ていた。葛城山から生駒山の方向へ抜けていった」と書かれている通り、龍神村にも渡来系の呪術師が住みついていた可能性もあります。

加藤の祖先も、唐あるいは朝鮮出身の妖術師の血統に連なる家系のものでしょう。

ちなみに、この龍神村は役小角が開いたという伝説から、鬼が住むところとも言い伝えています。われわれ土御門家に伝わる陰陽道では、鬼とは式神（しきがみ）のことであり、これは目に見えない使い魔のようなものでございます。

しかし、その正体は判然とせず、また全ての陰陽師が同じ種類の式神を使っている保証もありません。ひどい時には、家々に伝わる秘伝のかたちで特殊な式神が生き残っている場合もあります。

つまり式神とは、陰陽師のために力を使うよくわからないものの総称とされていますが、私が考えるところ、この式神とは龍神村に土着していた土蜘蛛（つちぐも）――すなわち、水の民や山の民と呼ばれる先住民系の使用人を指しているのではないでしょうか。

あるいは、むかし帰化人と呼ばれていた渡来人たちのことなのかもしれません。おそらく、加藤はこの“鬼”の家系出身なのでしょう。ただし、この件に関してはまだ調査の余地が多く、確かなことは言えません』

古文書に登場する土蜘蛛あるいは海蜘蛛（うみぐも）、水人（みなと）あるいは阿民（あのたみ）などと呼ばれる、天皇に従わなかった地方豪族たちや（神武天皇の東征があったとした場合の）先住民や被差別集団を、ヤマト朝廷系の宗教者が召使いとして働かせていたことを、この一文は示唆している。

さらに、加藤が渡来人であった可能性まで示されている。

彼らも地理的に言えば“日本人”と言われていいはずなのだが、朝廷に従わなかったため“日本人”のカテゴリーから外されてしまった。

『一國の首都喪失記』で高笑いする加藤の「ヤマトを滅ぼす」という信念に、こうして露伴の目の前で根拠が与えられたことになる。

（中略）

『幸田殿、以上が私に把握できるかぎりの加藤の秘密となります。私が思いますに、加藤中尉の行動を解きあかす鍵は、これまで述べたような歴史上の秘密の裏に隠されているのでしょう。

そして、その鍵とは、

怨念！

これ一言につきます。

つまり、加藤のめざすところはただ破壊のみであります。

帝都の破壊のみであります』

ここで平井は、大和朝廷にしいたげられた民という自己認識をもって、朝廷つまり天皇を頂点とする日本の体制をひっくりかえすために、帝都とよばれた東京の破壊を目論んでいると指摘する。

そして平井が露伴にあてた手紙という時点で、その予想されうる手段については（現実性についてはともかく）疑う余地がない。

すなわち、呪術だ。

『不肖この平井保昌、幸田殿に知りうるすべての秘密を明かすことが、帝国の安全に直結するものと信じております。

すなわち、加藤は奇門遁甲（きもんとんこう）の術を使うことで、帝都の全面的な破壊をもくろんでいるのです』

奇門遁甲。

紀元前から存在するとされる、中国の呪術のひとつだ。地相（ちそう）を占い、大地のエネルギーの流れを読みとり、その流れに沿って――場合によっては流れを人為的につけかえて、災害を未然に防ぐ国づくり町づくりをめざす思想体系。

もちろん、逆に悪用すれば土地に災害を与えることもできる。

そして陰陽師なら、その程度のことは知っていて当たり前。加藤という男が本当に平井を下すほどの使い手ならば、遁甲の逆用も可能という共通認識が、平井と露伴の間に存在したのだろう。

『一言主（ひとことぬし）、菅原道真（すがわらのみちざね）、平将門（たいらのまさかど）など、帝都に眠る名だたる御霊（ごりょう）、たたり神を地中から呼び起こし、まつろわぬ民の霊力を結集して、帝都に集中攻撃をかける腹なのです。これはもはや戦争と言っていいでしょう。

幸田殿、これは私にできる最後のご奉公です。私は日取事（ひどりのこと）によって、加藤がいつ帝都の破壊を完成させるつもりでいるかを占いました。

その年は亥（い）の年です。

お忘れなさいませんよう！

かれら怨念の民がかつて崇拝した猪の年、亥年です！』

オカルティストとしては、衝撃的な告白である。

一言主は日本神話に登場する神で、あの雄略天皇をひざまずかせた大神であり、同時にその祭りを主宰する賀茂氏の没落に従って神から霊へと引きずりおろされたいわくつきの存在でもある。『古事

記』にある彼の言葉、

「吾（われ）は悪事（まがごと）も一言、善事（よごと）も一言、言い離（はな）つ神。
葛城の一言主の大神なり」

は、あまりにも有名だ。

菅原道真と平将門については、多くを語る必要もないだろう。
前者が宮廷で失脚し祟り神となった代表的存在であり、後者が朝廷に叛旗をひるがえして敗れた関東の大怨霊であることは、読者諸賢におかれては常識の範疇と信ずる。

すなわち、加藤の目的は、古代日本に暮らしていながら日本人と認められなかった人々の復権。
そして、その決定を受けいれてきたヤマト系の人々への復讐にある。

その第一歩として、東京の破壊をめざしたにすぎない。
とはいえ、その東京破壊に対してすら、呪術で彼に抵抗できるよ

うな個人あるいは一族は残っていないのだが。

逆に言えば、彼のめざす呪術的に平穏な共生世界を妨害するものがヤマト朝廷、およびその後継たる日本政府以外にも現れたとき、加藤はその“新たなる邪魔者”に対しても、容赦なく牙をむくだろう。

関東大震災を誘発したと、明治の二大オカルティストをして信じ込ませた、その呪力と行動力によって。

たとえば――

今の日本で支配的となった近代西洋科学体系を象徴するような団体や土地があるとするなら、それらは彼にとってもっとも分かりやすいターゲットとなりうる。

――引用文献

団宗治『平井保昌書簡に関する私見』新版　幸田露伴全集　第二巻』pp. 369－376　合羽淳編『改訂岩波書店、1996年

第十六話補遺　平井保昌の密書（後書き）

金髪アロハシャツの実家は、明治時代が最後の華だったというお話です。

表向きにも、実権的にも。

ちなみに上記の１９９６年版『幸田露伴全集』は、“オカルトさん”の世界で相次いだ地震や噴火で東京に人口が流入し、大規模な再開発が行われたときに新しく未発表の原稿が発見されたことで編集しなおされたものです。

私たちの世界には存在しません。

さて、『幻想御手』編は今回で終了。次回は、ついにあの人が登場です。

引き続き、評価・感想お待ちしております。

注…

『幸田露伴』

明治期の作家。文学博士、第一回文化勲章受章者。おもに小説を発表していたが、伝記や古典の評論も数多い。中国道教の研究者でもあり、東洋呪術に理解が深かった。

“オカルトさん”の世界では、明治時代に彼と対立した三人のひとり。

『護法尊』

護法善神ともいう。

仏法や仏教徒を守る霊の総称。四天王に大黒天、弁才天など、有名な“ナントカさま”たちはだいたいここに含まれる。

転じて、修行している陰陽師や修験者などを危険から守るための守護霊や使い魔を護法童子と呼んだりもする。

『難陀龍王』

護法善神の一柱。八大龍王の筆頭。密教では雨乞いの神とされる。

『土蜘蛛』『海蜘蛛』『水人』『阿民』

「古事記」「日本書紀」「風土記」などに登場する地方豪族の蔑称。

第十七話　統括理事長（前書き）

「開封して九ヵ月後に災厄・大戦争・天変地異が生じても、出版社は責を負わない」

アレイスター・クロウリー『法の書』日本語版

第十七話　統括理事長

「む……ぐ」

情けないうめき声は、もちろんおれ。
またベッドの上での目覚めですかそうですか。

結局『幻想猛獣』や初ちゃん、そして木山先生がどうなったのか、何もわからないまま、おれは薄汚い物置の全景を視界に収めることになった。

無人。

まあここは、命があっただけで感謝すべきだろう。木山先生が心配だが。
御坂（みさか）さんはどうせ死んじゃいないだろうし、おれが心配する必要はない。最悪の場合でも、白井（しらい）さんが『空間移動（テレポート）』で脱出させているはずだ。

むしろ今おれが速やかに行うべきは、自分の状況を把握することだ。

おれをここに拉致ったのは明らかに学園都市関係者だろうし、そうなると呪術が使えるかどうかが問題になってくる。

……いや、例のインデックスさんによれば超能力者が魔術を使うと何かしら反動が出るらしい、つーか実際に脇腹が痛かったり手に痣ができたり鼻血が出たりしているんだが、それをくぐり抜けて呪術らしきものを他人任せで発動できるかどうかが問題だ。

そういえば。

脇腹の痛みも鼻血も止まってるな。

そしてまた手術衣。

とにかく、学園都市の武装組織が、呪術対策をしていない理由がない。

なにしろオカルト全般を排撃しておきながら、学園都市と魔術師連中は何かしら交流を持っているふしがある。

少なくとも、インデックスさんは“科学的超能力と魔術を同じ人が使うことはできない”という事実を知っていた。彼女が知っているということは、まず間違いなくイギリス清教と、そしておそらく十字教系教団全体の偉い人たちも知っているのだろう。

そこが問題だ。

宗教がらみの連中は、オカルトさんをふくめて狂信的なやつばかりが目立っているが、実際のところ大部分の頭の中はかなり合理的だ。もともと西洋科学自体“全能の神が創りたもうた世界を理解することで、神の御意志に近づく”ためだったことを考えれば、まあ当たり前かもしれない。

で。

そういう連中が超能力と呪術の関係について断言するということは、それなりの根拠や実例があったはずなのだ。

つまり、魔術師どもは科学的超能力について知識がある。

逆に、科学者が呪術について知っていることもありうるだろう。オカルトさんが言っていた、第二二学区の大深度地下建設が実は龍脈（レイライン）を突き刺すための坑道だという話が本当だとしたらなおさらだ。

あのときインデックスさんは、超能力を才能と表現した。才能あるものが才能なきものと同列に術を扱えば脳が破壊される、とか言ってた気もする。

木山先生が言っていた暗部というのが、よく考えるとおれ自身はまだ実在を確かめてはいないのだが、本当にいるとすれば（おそらく魔術師たちと共同して）“そういうこと”を調べる人体実験でもやっていたに違いない。

加藤くんの例もあるし、学園都市に人道を期待するのは三年前にやめている。

――いや、待て。

今の“脳が破壊される”は、インデックスさんも上条さんやおれには言ってない。月詠先生へのことばだ。

なんでそんなものを覚えてる？

おれは聞いてないはずなのに。

答えは出なかった。

「あら、意外に早起きなのね」

突如、自分の“すぐ左”から声をかけられて、思考停止したおれは悪くない。

そう思う。

>i233462938<

そこは、いかにも平成ひとケタ的未来を体現したような場所だった。

壁じゅうを肉ひだのように這い回るコードとチューブ。

何を送っているのかさっぱりわからない気送管。

そのチューブが何本もよりあわさって、大部屋の中央にあるどでかいカプセル、というよりビーカーへ続いている。

ビーカーは理科室でよく見る円筒形。強化プラスチック製か何かだろう。

中身は――まず、おそらくは電解質溶液。赤い液体ということしかおれには分からないが、高校理科の知識がそう踏んだ。

そしてその中に逆さに浮かんでいるのは、人だ。

緑色の手術衣に身を包んだ、たぶん男。
今はおれとおそろいの服ということになるが、嬉しくもなんともない。

灰色の長髪と白い肌。冷たい金属色の瞳。
おれとオカルトさんがいちばん嫌いな人種だ。整形でもしたのかコラ。

「ほら、さっさと歩く」

病人に無茶いわないでくださいお姉さん。

どうも『空間移動（テレポート）』系の上位能力を持っているらしいそのお姉さんは、おれのベッド脇にいきなり出現したかと思えば、ベッドまるごとおれをこの大部屋に転送しやがった。
まだ起きあがってすらいないんですが、歩けと言われても。

『いや、構わない』

声が響いた。

ますますもって性別不詳の声。子供のように高くもあり大人のように落ち着きもあり、とくに根拠のない希望に満ちたようでもあり、理不尽な絶望を味わっているようでもあり。

ともあれ、この場にいるのは三人。

おれの脳内で眠ったままの加藤くんとオカルトさんを計算に入れなければ、そうなる。

ならば、声の主はひとり。

「……ベッドの上から失礼ですが、どちらさまで」

失礼のないように、円筒へむけて丁寧語。

こいつはラスボスでないにしろ、大ボスなのは間違いない。

科学的超能力では、人の首を物理的に飛ばせるのだ。こいつがそういう能力者だったらどうしようもないし、本人は違っても部下に

似たようなのを抱えてたりしたら目も当てられない。

「先に君が名乗ってはどうかね？」

「どうせご存じでしょう」

嫌味をこめて返す。

少なくともこいつは、“発信器”のことを知っているに違いない。

そこから集まってくる情報も。

「そうだね、加藤若一（かとうじゃくいち）――いや、加藤保憲（かとうやすのり）と呼ぶべきかな？」

「……お好きなように。

どっちにしても、今この場でおれという個人を表していることには違いありません」

「なるほど、興味深い意見だ」

逆さに浮いた男の口がニヤリと引き下がる。

何が興味深いんだろう。

正直まあ予想はしていた。

加藤保憲――オカルトさんは、たとえ結界の中とはいえ一度みずから名乗っている。
あの神裂（かんざき）とかいう黒宗女に。

赤毛黒コートの魔術師と組んで行動しているようだったし、おそらく後で連絡でも取っていたのだろう。
その時に加藤保憲の名前が出た可能性はじゅうぶんにある。

……あいつ、あれだけ必死こいてインデックスさんを探しておきながら、まさか“発信器”に気づかなかったなんて言うんじゃないだろうな。
そうでないとしたら、学園都市側に抗議の意味を込めて、わざとオカルトさんの名前を口にしたことになるから、個人的にはもっと心象悪くなるんだが。自分たちの邪魔だから学園都市に投げようって発想が気に入らない。

まあ、初ちゃん以上に嫌悪感が出ることはないけど――

忘れてた。

「すいません、結局あの場はどうなりました？
初――介旅とか木山先生とか」

木山先生という言葉は強調しておく。

この“ビーカーさん”も木山先生をあやつって、加藤くんの意識に回復不能なダメージを与えたひとりなのは間違いないだろう。
そんなことを気にする人間とも思えないが（だいたい、どんな変人でもまずは頭に浮かべる服装というものについて、この男には絶望的にセンスが見受けられない）、これから何を言われるにしても、最低条件は押さえておきたい。

木山春生の“公式な”拘束。
これができなければ、おれがわざわざ初ちゃんにつきあった意味がない。
まあ、ほとんど気絶してるうちに運ばれただけだったとしてもだ。

「君が遭遇した事件のことを言っているのなら、おおむね収束したと言っていいだろう。もうひとりの彼が言う『幻想猛獣』は核を破

壊されて消滅、あの場にいた科学者は『警備員（アンチスキル）』に連行された。今ごろは取り調べ中だろう」

「それはどうも」

ほっと一息。

現時点では、木山先生を消しに行くような新しい理由はできていないようだ。要するに木原幻生（きはらげんせい）の研究も、ビーカーさんにとっては無駄な資源と機材の浪費にすぎなかった、ということか。

それはそれで複雑な気分だ。

もちろん、今ここでビーカーさんがおれに嘘をついており、実は木山先生も暗部とやらに捕まっている可能性だってある。

しかしそんなことをして、ビーカーさんに得があるとも思えない。たしかに木山先生は実力のある人だが、本気で先生を欲しがっていたのなら、おれが御坂さんを使って小細工をもくろむより前に拉致っていたはずだ。それに、頭脳労働向きで身体能力が高くない彼女は、身柄を拘束するより遠く離れた場所から脅しつけた方が仕事も早いだろう。

だいたい、先生が暗部に来たとおれが知って怒り狂ったところで、

あの転移（テレポート）お姉さんがおれの胴回りに鉄骨でもぶちこめばそれで一巻の終わり。

わざわざ彼が時間を取って、おれと直接対面してくれる意味もなくなるのだから。

……そういえば。

どうしてビーカーさん――一目見て学園都市の偉いさんだとわかるような人が、一介の学生であるおれに話しかけているんだろう。

などと思っていると、

「そろそろ出てきてはくれないか？　私も時間が惜しいのでね」

逆さの両目で睨まれた。

……え？

ちょっと待ってどういうことだ？

ひょっとしてこの人、本当にオカルトさんのこと知ってる

「か・と・う・や・す・の・り。
君のことだよ」

――みたいですね。

これ、どう説明しよう。

オカルトさんの声が脳内に聞こえたり、あまつさえオカルトさんの意識が加藤くんの体を乗っ取ったりしていたのは、ひとえに『幻想御手』のネットワークあったればこそだ。アレのおかげで演算能力が高まり、ひとりの脳にふたつの意識を無理なく同居させることもできたわけだし。

しかし「もういない」なんて言ったら確実に首ひっこ抜かれて終わる。

ごまかそうなんてバカな真似をしたらすぐバレて終わる。

どうすればいいんだ。

あれこれ思案するものの、いい答えが出てくるはずもなく。

そんな俺を観察するように見ていたビーカーさんが、ふと目線を上げた。

そこにあったのは、

全身真っ黒な制帽マント姿の、オカルトさんの胸像。
もちろん台座なんてあるはずがなく、そのオカルトさんをかたどった“影”は、俺の頭上に支えもなしで浮いていた。

「ひょっとして、ふざけているのかい？」

いささか笑いを含んだビーカーさんの声。
その笑いには命の危険を感じるんですが。

つーかなんだあれ。
窓ひとつないＳＦチックな空間のわりに明るいこの大部屋で、ただひとつ影の胸像だけが真っ黒をつらぬいている。
おまけに見上げれば、内側から外側は見えるらしい。
いったい何をどうすればおれにこんな芸当が――

あ。

“遮光板”か。
おれがカツアゲに遭ったとき目くらましに使ったあれを、裏表ひっくり返したのか。

――うつけめ

――自分の能力は把握しておくものだ

って、おい。
何さらっと復活してんだアンタ。
しかも今、声が聞こえたぞ。脳内じゃなくて耳から。

――なに、ここだけの話だ

――あの円筒の周囲には、きさまの能力を増進するような力場が張られているらしい

――よって演算能力も上がり、おれもこうして顕現できるというわけだ

ニヤニヤしながら前だけ向いておれに話しかけるオカルトさん。

視線がビーカーさんの方に固定されている。恨みでもあるのか？

「なるほど、『虚数学区』の面白い副作用というわけだね」

対してこちらもオカルトさんに笑いかけるビーカーさん。
空中に火花こそ散っていないものの、双方にこやかに殺気立っている。
いや、殺気立っているのはオカルトさんだけかもしれないな。ビーカーさんはよくわからん。

「さて、これから君たち“ふたり”に働いてもらうことになるが」

「えっ」

思わず声を上げたおれに、ビーカーさんは不思議そうな顔。

「聞いていなかったのかね？　もうひとりの彼が事情を説明したと言っていたが」

……情報共有は大事ですよビーカーさん。

まあ、“もうひとりの彼”――初ちゃんはおれがいろいろ考えると踏んだんだろう。

この場で何を言われても、おれは拒否できない。

なにしろ今、ビーカーさんの口から「あの場にいた科学者」という、明らかに木山先生を示す言葉が出てきている。これはつまり、おれがビーカーさんの機嫌を損ねようものなら木山先生が何か恐ろしい目に遭う、という無言の脅しだ。

そうでなくとも、南沢中学が謎のガス爆発を起こすとか、加藤くんのクラスメイトたちがいる先生のアジト（場所は初ちゃんがたぶん知っている）が誤って爆破解体工事に巻きこまれるとか、選択肢はいろいろあるし。

問題は、あちらさんに選択肢がいろいろあっても、こちらにはないという点だ。
木山先生については、一時保留とするしかない。

「……おれも命は惜しいです。お引き受けいたしましょう」
「賢明だね」

ビーカーさんが唇を下に――本人的には上につりあげたそのとき。
オカルトさんが、またひとつ爆弾を放りこんだ。

――自己紹介もなしとはな

――末世隠忍（ペルデュラボー）とやらは、同輩への礼を知らぬか

それがどんな効果を及ぼしたかはさておき、

「失礼なのは君の方だろう？　せめて黒祀祭主（バフォメット）と呼んでほしいものだ。

それに私は、こう見えても学園都市（ここ）の統括理事長を務めている」

――成程（なるほど）、新世界（イルミナティ）の神というわけだ

――笑わせてくれる

少しだけ口元が引きさげられたビーカーさんの呆れ顔を見てオカルトさんの影が本当に爆笑をはじめ、おれは彼をなだめつつ

「学園都市の統括理事長って、親船（おやふね）とかいう婆さんじゃなかったっけ」

などと困惑していたというのは、はなはだ余談である。

第十七話　統括理事長（後書き）

注…

『末世隠忍』『黒祀祭主』
いずれも、アレイスター＝クロウリーの魔法名。
彼は一般に知られているだけでも、五～六種類の魔法名を名乗っている。
“オカルトさん”は“ビーカーさん”の正体を、早くから見破っていたことになる。

『新世界の神』
イルミナティ、すなわち啓明の意。
ここでは啓蒙専制的、すなわち上から目線の指導者という意味を含む。

第十七話外伝　佐天涙子の疑問（前書き）

三日後、ファミリーレストラン『Ｊｕｌｉａｎ』にて。

第十七話外伝　佐天涙子の疑問

『幻想御手』騒動も一段落した、七月二十八日。

黒い長髪を花形の飾りのついたヘアピンでまとめた女子中学生が、今まさに地獄の門を通らんとする勢いでファミリーレストランへ突入した。

彼女にとって、全く不可解な存在への答えを見つける目的がある。

その証人には、心強い先輩もついてくれる手はずになっていた。

彼女の名は佐天涙子（さてんるいこ）。

柵川（さくがわ）中学一年生、レベルは０。

それが、彼女の不愉快な記憶すべての元凶であり、結果であった。

とはいえ、彼女はまだ恵まれた、あるいは復帰の早かった部類に入る。

もともと有形無形、時には無意識の蔑視にさらされつつも、本人としては十分に楽しい生活を送ってきたこと、そして頼もしい同輩がいたことで、彼女は『幻想御手（レベルアッパー）』の使用という不名誉な自己レッテルから急速に立ち直りつつあった。

もともと屈折していた心情が『幻想御手』事件によってさらに折れ曲がった人間もいることを考えれば、彼女は立派な人間といってさしつかえない。

だが。

その佐天涙子に『幻想御手』の使用を思いとどまらせようとした某人物は、そんな彼女でさえ不信感をぬぐえない。

初日に頭突きを食らうという、彼女からすればどう見てもいい出会いではなかったそのひとつ年上の男子が初春（ういはる）に呼ばれた理由も、今となってはなんとなく察しがつく。

あの能力者らしからぬ物腰は、確かにあの頃の彼女にとっては何

か資するものがあったのだろう。
今となっては不信の源になるが。

その不信は、彼女以外にも抱いているものがいたらしく。
結局ただひとり行方がつかめた（まあ、どうせ初春が違法な電子操作をやらかしたのだろうと佐天は踏んでいたが）男子を呼びつけ、ほとんど包囲網のように真実を聞きだすこととなった。

その話を聞く相手が、話題の中心よりもさらに不審きわまる人物で、しかも佐天自身は初対面というのが引っかかるところだったが、贅沢は言っていられない。初春によれば、本人はケガが原因で入院中らしいのだ。
イメージがだいぶ崩れたとはいえ、せっかく常盤台のお嬢様が（強引に）セッティングしてくれた“オハナシ”の席を蹴るのももったいないし。

というわけで、気合を入れて『Ｊｕｌｉａｎ』の扉をくぐった佐天に、

「佐天さん、こっちこっち」

その“先輩”が、左手でさえない男子学生の頭を指が白くなるほどわしづかみにしつつ、右手を大きく振った。

＞i21811―2938＜

「低能力性不安障害（LLPAD）ってやつだね」

『えるえるぴーえーでぃー？』

おうむ返しに、四人の声が重なった。

ファミリーレストラン『Ｊｕｌｉａｎ』。

そこには、いわゆる“いつものメンバー”――すなわち常盤台中学の御坂美琴（みさかみこと）および白井黒子（しらいくろこ）、柵川中学の初春飾利（ういはるかざり）および佐天涙子（さてんるいこ）の他に、もうひとり特別ゲストが強制連行――もとい招待されていた。

『日を改めてサンドバッグでもなんでもいいですから』

御坂美琴が、この弁明ともとれるセリフを思い出したのが昨日深夜。

それから三時間あまり、初春が公共監視システムにハッキングして居場所を特定し『空間移動（テレポート）』でそこに黒子が現れる、という強引な捜索を続けた成果がここにあった。

いつの間にやら学園都市の薄暗い穴蔵へと居場所を変えていた介（かい）旅初矢（たびはつや）は、本人いわく“バイトのシフト”を開けさせられ、今こうして何ひとつ喜べるポイントのない、不愉快なハーレム状態に陥っていたのである。

「ＬＬＰ、つまり低レベル超能力者（Ｌｏｗ－Ｌｅｖｅｌ　Ｐｓｙｃｈｉｃ）がもつ不安性の人格障害――って言ってもよけい分かりにくいか。

要するに能力レベルが低い自分、能力レベルを上げられない現実と、それに何の対策もとれない自分が嫌になって、でもレベルは上がらないからまた悩んで悪循環。あるとき、これでたまった鬱憤（うっぷん）が爆発すると変な行動を取りはじめる。

露骨に言えば、レベル０コンプレックスってやつ」

レベル０という単語で一年生ふたりが反応するが、それを眼前の男子は見なかったふりで話を進めた。

「どうもジャック……加藤若一のことね。
彼も、そのＬＬＰ不安障害にかかってたみたいなんだ」
「へ？」

思わず、佐天の口から間抜けな声が出てくる。
確かに、加藤は『幻想御手』を使って、後ですごく後悔したなどと彼女に言った。
しかも彼女が“『幻想御手』を持っている”ことを脅迫材料に使い、近くの路地裏に引きこんでそのセリフだ。
彼の意味不明な行動の最たるものだろう。

しかし、なんといっても加藤はレベル３。
レベルを上げたくて『幻想御手』を聴くような人間にはカテゴライズできない。それに、初春があの事件の夜に電話で話してくれた、

「能力はひねるもんだ」

という発言とも矛盾する。

いったいなぜ、彼がそんな病気の患者になってしまったのだ？

「早々に申し訳ありませんが、ひとつよろしいですか？」

どうやら、その疑問を抱いたのは彼女だけではなかったらしい。左右に側頭部から赤茶けた髪を幾房かに分けてのばした中学生が、いかにもうさんくさそうに介旅とやらを睨みつつ口をはさんだ。

「これは病院の時から気になっていたのですが、そもそもなぜおふたりは『幻想御手』をお聞きになったのですか？

レベル３のあなた方が、今さらああいったものを聞いたところで効果も不確定、利点が見出せません。言い方は悪いですが、レベル０や１といった皆さんのようなハングリーさも持ってらっしゃるとは思えませんのに」

そして、それを聞いた介旅が、口元を緩ませる。

「いい質問だね」

「ＬＬＰ不安障害は、なにもレベル０だけに起こるわけじゃない。ジャクが患者になったことからも分かるように、最大でレベル３の人間がかかってる。

結局は、レベルより自分とまわりの認識の問題なんだ。

だいたい、レベル０の判定が出たとしても正確には“レベル１未満の能力”。つまり能力はあるけど、学園都市の役には立たないと判断されているケースが多い。元から勝手な基準なんだよ、そもそも。

だからゼロに一億をかけてもゼロだけど、レベル０が一億人協力しあえばレベル５の足元ぐらいには及ぶかもしれない。少なくとも『幻想御手』なんか、まさにそういう考え方のプログラムだったわけだし。

だから能力開発教育を受けて、本当に何の能力も出てこない学生は逆にレアで、それはそれで別の能力じゃないかって言われてるほどなんだ」

「えっ」

介旅の説明に、思わぬところから反応が出た。
演説していた男子は不思議そうに、その口を半開きにした同学年の女子を見やる。

「何か？」

「い、いいいやなんでもないの。続けて」

レベル５なら、これぐらい知ってるだろう。
その思いを口に出さない介旅は、ずいぶん成長したと言える。

「……まあ、そう言うなら。

で、要するにＬＬＰ不安障害は、レベルの数字にかかわりなく“自分に出てきた能力は何の役にも立たない”って本人が思いこむことから始まる。
あるいは、ジャクの場合だとＲＳＰＫ症候群っていうんだけど、能力にかかわる別の病気のせいで“自分は能力者失格だ”とか思いこむ場合もあるね。

患者として言わせてもらえば、身の回りの生活で役に立たない能力を持っている人は、この病気に大なり小なりかかってる」

「……患者？」

枯れた声が彼の発言を繰り返す。

『風紀委員』としては、聞き捨てならない発言だったのだろうか。

「恥をさらすようだけど、今でも僕はこういう考え方から抜け切れてない。まあ、昔は今よりさらにひどかったけどね。

能力判定が出たってだけですごいことなのに、あの頃は“たったレベル2”とか“カツアゲから逃げることもできやしない”とか、ぜいたく言ってひがんでばっかりだった。あげくの果てに『風紀委員』を逆恨みしたこともあったっけ――

あ、すいません今のなかったことにできませんか」

軽薄におどける彼を無視して、女子四人はそれぞれに黙りこむ。

それぞれが気づいていたのだ。

ひとつの気まぐれをきっかけに仲良くなった四人の間には、認識していなかったし認識しまいとしていた、おそろしいほどの溝が横たわっていることに。

御坂美琴のように、“真の”超能力を持つものがほとんどいないのは当然として。
白井黒子のように、超能力を生活や職場で生かすこともできず。
初春飾利のように、わずかでも超能力を持つという判定を見ることもできず。

御坂美琴のように、目の前に現れたハードルは高さがどうであれ飛び越さなければ気がすまない、そんなハングリー精神を保てるわけでもなく。
白井黒子のように、血を吐くような努力であっても、とにかく行動すれば能力レベルが上がるわけでもなく。
初春飾利のように、超能力以外にこれと認められる特技があって、誰かの役に立てると実感できるわけでもない。

佐天涙子はそんな状態で、能力者たちと一緒に遊んでいるのだ。

ＩＤデータに記載された『レベル０』の表示でふと浮きあがる、胸がへこんだような感触を自らの友として。
“能力者”の話を聞くたびに心の底から湧きあがる、濁ってねばついた黒い感情を自らの影として。
超能力を求めて学園都市にやってきた大多数の人々が、無能力だと告げられて絶望し、怒り、泣き、最後には笑いはじめる心象風景

を自らの糧として。

もちろん、他にも友人はいただろうが。
少なくともこの三人の前では、それでも彼女は笑っていたのだ。

タフな精神を持ったにせよ、良くも悪くも彼女は凡人である。
そして“自分たちも実はそれを認識しており、心の奥底では彼女を下に扱いながら共に過ごしていた”可能性すらないとはいえない。
そのことを、三人はいやいやながら認識させられていた。

しかし、そういう風に他の三人から勝手な思考を向けられていた佐天涙子も。
思うところがなかったわけではない。

「……加藤さん、てっぺんまで登っちゃってたのかな」

ぽつり、と。
佐天涙子が、静かにこぼす。

「てっぺん、ですか？」

いま自分は、心底から不思議そうな顔をしているのだろう。
自覚しながら隣の初春飾利は問い返した。

彼女とてレベル1、科学的超能力としては“何の役にも立たない”部類に入る。
しかし、いま目の前の不気味な男子が言った“ＬＬＰ不安障害”という病気になった人の心理は、実のところあまりよくわからなかった。彼女自身がとくに気にしていなかったこともあるが、加藤と結びつくところがあまりにも少ない。

なんたって、すでにレベル3。
しかも銀行強盗を「無駄」と言い切り、『幻想御手』の危険性を誰よりも早く看破して『風紀委員』を誘導したような人間だ。能力で悩みを持つようには思えない。

逆に彼がもし本当にＬＬＰなんとかになっていれば、『幻想御手』はほとんど救い主にすらなりうる。なにせ、自分の能力が“役立たずではなくなる”のだから。
だが彼は、事情聴取でその発想を否定した。

その矛盾が、彼女にはわからない。

無理もないことだ。

初春飾利にとって、超能力は発展途上のものなのだから。

「たぶん加藤さんは、心のどこかで“おれはレベル3以上にはなれないんだ”って、自分でもあきらめちゃってたんだと思います。てっぺんまで登って、あとは平らか下がるだけって」

「……あっ」

だから、同級生が示した説に認識が追いついた初春の耳に

『能力はひねるもんだ、そうだ』

加藤の言葉が新しい意味を伴ってリフレインされたのは、偶然ではない。

能力は工夫して使うもの。
そうしなければ応用も威力そのものも広がらない者が生んだ、苦肉の策なのだ。

「ちょっと待ってよ。
そんなこと言ったら、私はどうなるわけ？」

当然とも言うべき反論。
しかし御坂美琴は、佐天ではなく目の前の一度なぎはらった少年を問い詰める。

美琴も世間の皆が皆、自分と同じだけの行動力を持ってはいないと知っているが、自分のそれをあからさまに否定するような考え方には賛同できない。
そこで、やはり介旅ではなく佐天が返答することになる。

「だからこそ、じゃないですか」

「え？」

「ひょっとしたら、あたしみたいに最初から無能力者（レベル0）って言われるより、能力はあるのにレベルが上がらない方が、余計につらいかもしれない。

“レベル1からレベル5になった人もいるのに、自分は何も変われない”んですよ？」

前半は完璧な嘘だ。

息をのんだ御坂をながめつつ、介旅は即断する。

佐天の理屈は、目の前のレールガンを丸め込むためのごまかしにすぎない。

いくら判定基準の上でレベル0とレベル1が連続していようと、そこに使われた“ゼロ”という単語が生みだす視覚的な、そして精神的な影響は大きい。

学生たちにとって、レベル0とレベル1の間には無限の差があるのだ。

ＩＤを見て「レベル0か」と軽くいなされる。この光景ひとつとっても、レベル1より上の学生にはありえない。レベル1というだけで学生の“上位四割”に入るこの学園都市において『その他大勢』扱いを受ける苦しみは、理由は別にしろ、介旅初矢その人とも無縁ではない。

ちなみに彼は、逆に「レベル2なのに」と言われたこともある。

中学校の入学当日に財布の中身を抜き取られ、半泣きになってい

たところへぶらぶらと歩いてきた『風紀委員』の一言だった。
それ以来ほとんど無茶なやり方でレベルアップを模索していた彼が、加藤によって能力の方向性を与えられたのは、彼にとってはかなりの奇跡と言っていい。

関係ないけどこいつ大物だな、と彼の眼鏡が光る。

この場でもっともフォローを受けるべき立場“と、学園都市内では見なされている”にもかかわらず、ジャクの心理についてこれだけ冷静に分析するとは。
まあ、無意識のうちに「高レベル能力者（みさかみこと）にこれ以上“救われる”・“守られる”のは避けたい」という判断が働いていても、介旅としては驚かないどころか心の底から同意したいと感じているのだが。

さて。
佐天の意見、後半は同意できる。
しかし。

「それはありえない話じゃないね。
だけど、僕が今日呼び出されたのはジャクの行動について説明するためのはずだ。
ジャクの心の中については、そっちの常盤台の頭いいふたりに任

せるとして、とにかくそんな前提があったってことを分かってくれないかな」

彼にも都合がある。

へたに加藤が同情の、あるいは“根性を叩きなおす”対象にされて、居場所をかぎまわられてはたまらない。

それとは別に、いいかげん話題を戻したいとも思っていた。

御坂美琴と戦い、木山春生（きやまはるみ）をかばったことから、加藤と介旅は『幻想御手』に実は賛成していた、と思われている。

しかし彼は『風紀委員』に現物を提供し、その危険性を訴え、佐天には個人的に使うなと釘を刺すなど、一貫して『幻想御手』に反対の意志を示しているように見えていた。

この矛盾が、彼女たち四人の主な疑問点だ。

もちろん、美琴が木山学級とその事件について要点をかいつまんで供述したことから、『風紀委員』のふたりは裏事情についてある程度の推測がつく。初春から話を聞いた佐天も、それは知っていた。

だからこそ、木山春生と同席したあの場面ですら、強硬に『幻想御手』を否定した彼の考えが理解されない。
特に事件当日の加藤を見ている介旅は、途中まで加藤にも確たる情報がなく、ほとんど場当たり的に動いていたのではないかと踏んでいるが、清く正しい彼女たちはそう思ってくれないようだ。

「……で。
ジャクがなんで『幻想御手』に反対したか、だけど」

佐天涙子は、ひとり道を歩いていた。
彼女の疑問は解消されないどころか、むしろ増幅していたからだ。

「要するにＬＬＰ不安障害の発作と、そう言えるかな」

介旅と名乗る先輩は、加藤の行動についてそれだけでまとめてしまった。

クラスメイトを助けるためには、『幻想御手』をばらまかなければならない。自分から『幻想御手』を聞くくらいだから、かなり思い入れがあったのだろう。

しかし、そのために利用されるのは加藤自身と同じ（だと彼が勝手に思い込んでいた）悩める低レベル能力者たちだ。

その葛藤と、前からたまっていたレベルが上がらず超能力が“役に立たない”という悩みがあったところに、同じように苦しんでいた介旅初矢が昏睡。これが引き金となって一種のパニック状態になった彼は、ちょうどその場へ救い主のように現れた『風紀委員』へと訴えた――

説得力があるように見えて、まるでない。

加藤若一という個人の行動を、異常のひとことで片づけるような言い草だった。

佐天涙子も、加藤若一に好意を抱いているわけではない。
むしろ嫌いだ。
会ったのはたった二回だけだが、印象は人一倍濃い。初日から不気味な言動をくりかえすし、『幻想御手』について知っていたにもかかわらず口をつぐみ、そのくせ自分ひとりにだけ忠告するという嫌味ぶり。
彼こそがレベル０を見下しているのではないか、とすら思える。

だが、気になった。

彼の言動が、本当に病気の発作からくる一時的なものなのか。
それとも、加藤なりに一本筋を通したつもりだったのか。
衝動説を強調している介旅初矢は、加藤の親友だという。だとすれば、なにか別の理由を隠すために介旅が加藤をかばっていることも、考えられるのではないか。

もし本当に、彼が一時の気の迷いでレストランまで同行し、証言したのだとしたら。
気の迷いで、彼女に警告したのだとしたら。

彼女は、そして『風紀委員』と一万人の『幻想御手』使用者は、たったひとりの病人によってその運命を振りまわされたことになる。逆に何か理由があっての行動だったとしたら、やはりその理由のために、彼女や多くの人々が踊らされていたことになる。

そんなことは、許せない。

彼女の胸中で固まった意志は、後になって彼女の“心強い先輩”の行動に、ある選択肢をつけくわえることとなる。

明らかな誤解とともに。

第十七話外伝　佐天涙子の疑問（後書き）

加藤株の大幅値下げ。
精神異常者、あるいはゲス野郎ポジションが定着しました。

第十八話の一　Ｇｉｓｋｒａ　Ｊ？ｎｏｓ（前書き）

そのころ、主人公勢は。

第十八話の一　Ｇｉｓｋｒａ　Ｊ?ｎｏｓ

どうも、加藤若一（かとうじゃくいち）です。
本題に入る前に、ちょっとした小話を聞いてください。
すぐ終わるから。

ギシュクラ・ヤーノシュと史書に記される男がいる。

チェコの貴族階級出身。ギシュクラ云々はハンガリー風の読みかえで、正確にはヤン・イスクラ・ズ・ブランディサという。

十字教新教（プロテスタント）の先駆者ヤン・フスに従って現在のチェコ国内を転戦し、フス軍の内紛で穏健派に敗れたのち傭兵団となってヨーロッパ各地を放浪、最後にはハンガリーの名君マーチャーシュ一世“烏王（コルヴィン）”に仕えた名将だ。

ちなみにヤンは英語のジョンにあたる。

彼はマーチャーシュ烏王のハンガリー軍に降伏したのち、軍事的才覚を買われて傭兵団まるごと召し抱えられ、直属の親衛隊長とされた。ひょっとすると歴戦の兵士たちに国を荒らされたくなかっただけかもしれないが。

とにかく烏王は彼らに黒一色の制服をあたえ、派手な軍服の貴族たちと区別した。

ここから、親衛隊は『黒衛軍（フェケテ・シェレグ）』と呼ばれることになる。

――といった歴史的な故事にちなんで、おれが案に出した『黒衛（ブラック）』という名称は、あっけなく否定された。

介旅……初ちゃんいわく

「僕だって恥の意識はある。そこまであからさまにヒーロー気取りはしたくないよ」

『先生』いわく

「響きはいいが、文脈から単語を拾うときに分かりにくいな」

そして、ビーカーさん改め本名不明の統括理事長いわく

「すでに『ブロック』という団体があってね。紛らわしいので却下させてもらう」

完全否定である。

特に最後、名前被りとかいくらなんでも理不尽じゃないか。

まあ、なぜこんな命名談義をやる羽目に陥ったかについては、これから順を追って説明していきたい。

＞i21811―2938＜

思えば、学園都市というのは科学的な街だ。
自分たちが知っている理屈で説明できなければ、自分たちにわかる他の理屈を求める。それが納得できなければ、遠慮もなにもなく排斥しにかかる。

逆に言えば。
彼らが知っている科学というものの延長上に可能性が見えれば、それは彼らにとってもありうべき事象だ。
こっちは研究対象になる。

つまり。

……おれのことを、知らないわけないんだよな。
覚醒とかそういうレベルじゃなく、脳内のありがたくない同居生活やらパーソナリティーやら。

それどころか、“キビツ系”の世界に帰る目処がほとんど永遠に立たないことを理解して病院で大泣きしたこととか、オカルトさんの非行の数々とか、そういう黒歴史に近いことも把握されているのだろう。

あの“発信器”どもは、人間の呼気にふくまれる二酸化炭素の濃度から、その息を吐いたやつが能力者かどうかまでわかるらしい。脳波を観測されてても、おれは驚かないぞ。

で。

統括理事長のはてしなく自己中な要求は、まだ続いていた。

「君たちには償ってもらわねばならないことがいろいろある。しかしその前に、理由だけは聞いておきたい」

ほざけビーカー野郎。

「個人的な考えでは、償ってほしいのはこっちの方なんですけど」

「金銭的には、私のプランが被った損害の方がはるかに大きい。さて、なぜ君はあのような無軌道な行動に出たのかな」

吐き気がした。
虫酸（むしず）が走るとかそういう意味じゃなくて、胃がちぢみあがっている。

統括理事長の声は柔らかい。
しかし鼻から下は笑っていなかった。

もともと、この人はおれのことを不穏分子だと思っていなかったらしい。あるいは単純に、戦力評価が小さく見積もられていたのか。
ともかく、おれが『幻想御手』についていろいろ考えたり動いたりしたことは目の前の統括理事長にとって悪い意味での驚きであり、それで自分のやりたいことが阻害されたか何かでおれを今いじめているのだろう。

……器の小さいやつだな。
ヤケになったキビツ回路が、そんな結論を出す。

自分の想定外のところで何か起きたら怒るなんて、ほとんど小悪党のやることだ。
“発信器”のような強い味方がいながら、そして初ちゃんという

おれに一番近い情報源がありながらおれの暴走を考えに入れないのは、怠惰を通りこしてわざとやっているようしか思えない。

もちろん本当にそれが真実で、今は怒ったふりをしている可能性もあるが、そんなことをしてこの人にどんな得があるのかさっぱり分からない。

聞いているとオカルトさんに用があって、おれと本物の加藤くんはただのおまけ扱いらしいが、加藤くんやおれを“殺して”オカルトさんの人格を引きだすぐらい、学園都市のトップならためらうことなく実行するだろうに。

まあ、分からないものはしょうがない。

せめて分かるように質問してもらおう。

「無軌道、とは？」

「無軌道ではないかね？

『幻想御手』を聴いてその効果を確認しながら能力の使用は控え、頒布している科学者の正体を掴んでおいて接触を図るでもなく、『風紀委員（ジャッジメント）』の前では強い否定論を唱えつつ、事件に介入した第三位（ミサカ）から科学者をさらう。

君は何がしたかったのだ？」

ああ。

こいつ分かってて聞いてるな。

しかし、いま並べられた行動のどこで、おれは地雷を踏んだんだろう。

「何と言われれば、先生の安全確保としか言いようがないですね。

『幻想御手』でレベルが上がったあと、初ちゃん相手に能力を使っていたのはそちらも知ってのとおりですし、先生に直接の接触をとると彼女が死にそうだったんでパス。『風紀委員』には話が大きくなる前にできれば解決してもらいたかったし、御坂さんを邪魔したのは彼女と先生がバトル始めると絶対に重傷を負うと思ったからです。

無傷で刑務所に入ってくれれば一番よかったんですが、それは初ちゃんが妨害してくれましたから、個人的にはトントンですね」

「彼はあれが仕事だったのだ。責めないでやれ」

おっと。

重要な発言きましたよ。

初ちゃんの“仕事”とは何か。

そもそも統括理事長は、あの事件で何を求めていたのか。

おれが以前から考えていたように、一万人もの学生を昏睡させるような暴挙を学園都市が放置するとは思えない。

それだけで緊急救命システムがパンクするし、昏睡する過程でレベルが上がった犯罪者連中の取りしまりに『風紀委員』が振り回されることになる。治安悪化は言うに及ばず、捜査に駆り出される『風紀委員』や『警備員』の方も疲労がたまり、本来の教育や『風紀委員』たちの能力開発にも支障がでてくる。

だからおれは、学園都市上層部から木山先生を逃がそうとして、あの無茶をやった。

ところが実際は予想とまったく異なり、上層部はこの騒ぎを黙認した。

理由はひとつしかない。

黙認してひきおこされる社会的混乱よりも、もっと大きな見返りが期待できたからだ。

バイパスでの戦いは、ある程度まで“通常の”能力戦だった。

たしかに木山先生の『多才能力（マルチスキル）』は恐ろしいものだったようだが、ひとりがレベル6になるのに一万人を常に必要とするようなシステムは、能力として完成されているとは言いがたい。

となると、残る“特異点”はひとつ。

『幻想猛獣』を生みださせることが、初ちゃんに与えられた命題だった。

それが“プラン”に沿う行動だった。

そういうことになる。

――ハ、ハ、ハ！

――崑崙（ヒマラヤ）にまで登った男が、器の小さいことだ

――箱庭を掌（て）に転がして創造主気分か

考えている間に、またオカルトさんがケンカを売っていた。

ある意味ナイスフォローだけどちょっと待って。

それたぶん、本人に一番言っちゃいけないことだよね。特にこの人は西洋人ぽいから、神になったつもりとか言うと怒られるんじゃないかな。十字教的な意味で。

つーかそもそも、なんでお前はそうやって独立した行動をできているんだ。

「ここでしか顕現できない君に何を言われてもね」

さて、あいかわらず統括理事長は穏やかに邪悪な笑顔。

しかしそこへ、さらにオカルトさんが爆弾を放りこむ。

――確かにおれは、ここでしか顕現できまい

――だが東京の地霊どもは違う。やつらは今度こそ気合を入れおった

――店子が地主に喧嘩をかけられて勝つのは、たやすいことでは

ないぞ

統括理事長の口元が吊りあがった。

つまり、おれたちの基準で考えれば口がへの字に曲がったわけだ。

オカルトさん、何を言った？

「……根拠に欠ける発言だね。

これまで私が何をしても知らんふりをしていた東京の魔術的防衛網が、なぜ今になって動くと思えるんだい？」

おっと。

何か引き当てたかな。

比喩表現でなく学園都市については全能にひとしい統括理事長といえども、外の世界についてはその限りでない。

だいたいこの人、相手がこれまで何もしてこなかったからって、警戒を怠るような性格ではないはずだ。少なくともそういう根性では、『幻想猛獣』をきちんとあの場所で生みだすことはできなかっただろう。

そして警戒を怠っていないなら、そう言うはずだ。
“これまで何もしかけてこなかった”なんて軟弱な理由を、わざわざ表に出さない。

要するにオカルトさんは、統括理事長の痛いところをついたのだ。

――ハッ、ハ、ハ、ハ！

――なぜ今になって動くだと？

――ここはヤマトだ、十字教の天下ではないのだぞ

オカルトさんは意味不明な理屈で、統括理事長を嘲笑う。
まあ、呪術に関して知識を共有しているおれはそれなりに分かるし、そうなると呪術に一枚かんでそうなこのビーカー野郎も、それなりに予測はつくのだろうけれど。

「日本では邪霊を滅するのではなく鎮める、だから彼らは今でも生き残っている、という点について言っているのかい？
だとしたらとんだ見当外れだ。彼らは東京の西に、彼らの存在を全否定しかねないこの学園都市を建設することさえ止められなかっ

た、矮小な集合無意識体だよ。
今さら学園都市を攻撃するような大義名分も実力もあるまい」

――そう思うか？

おれの直上にいるオカルトさんの虚像が、笑った。
真上をふり仰いだわけではないが、分かる。

今、オカルトさんは相当嫌な顔をして笑っている。

――きさまは今まで地霊どもが“なぜ動かなかったのか”を考えるべきだったな

――度重なる騒乱や攻撃に耐え、果ては海龍の頭を関東で押さえつけた地霊どもが

――きさまを攻撃しない理由など、ひとつしかない

統括理事長は黙ったままだ。
図星なのか、笑うべき大勘違いなのか。

この場をふたりに仕切られるのも腹が立つし、おれも少し考えてみることにしよう。

東京が明治維新以来、関東大震災を除けば“大災害”に遭っていないのは事実だ。三年前の大地震のときも、東京は一夜明ければ元に戻っていた。政府と電力会社の無能の結末に他ならない、計画性なき停電や放射性降下物（フォールアウト）などはあったにしても。

その関東大震災は、オカルトさんの理論によれば“地龍が暴れた”せいになる。しかし、今その地龍に特大の杭をさしこんでいるのは、他ならぬ学園都市。

つまり目の前のビーカー野郎だ。

龍脈というのは、強すぎても災害を引きおこすが、弱すぎると今度は土地がやせて人の住める場所ではなくなるらしい。

東京をそこまでされて、土地神が黙っているわけもない。

となると、彼らが攻撃をためらう理由はやはり、

「科学力、そういいたいのかね？」

沈黙を破ったのは、統括理事長。

オカルトさんがさらに笑みを深くする。

――その通り

――地霊どもは自分たちの土俵に立てないからこそ、動きを控えていた

――だが、今となってはその必要もあるまい

――学園都市の内部で、決して小さくない規模の呪術戦が行われたとあればな

つまり、こういうことだ。

オカルトさんの言う“東京の地霊”が実在するとして、彼らは仮想敵つまり学園都市側がどういう論理体系で迎撃してくるかわからないから、手札が限られている彼らの側からは攻撃するわけにいかなかった。

しかし学園都市で呪術師が黙認され、呪術を使った戦闘まで起きているとなれば、学園都市も少なからず論理体系の基盤に呪術を置いていることになる。

基礎さえ呪術なら、それは呪術戦であり、論理的には地霊たちの呪術で対抗できる。

“東京の地霊”という概念は、要するに不特定多数の人々が組み上げた呪術に他ならないのだから。

そして。

そういう考え方の発端を作った“学園都市内部での呪術戦”をやらかしたのは――

「犯人は君か、かとうやすのり」

むしろ楽しげに、統括理事長は吐きすてた。

オカルトさんは当然のようにその糾弾を受ける。

――おれとしては、この体がどうなろうと構うところではない

――だがそちらにとって、学園都市の呪術的な第一目標が失われることは

――都合が悪いのではないか？

――やつらは、もはや力を失った土御門陰陽道など相手にせぬぞ

数秒の後、今度は統括理事長が笑みを浮かべた。

「そういうことなら、君たちの仕事の内容も決まってくるね」

――当然だ

……というやりとりがあって、おれ（オカルトさん）は正式に暗部というところへ所属することになった。

ビーカーからのご宣託によれば、

「君たちには外部からの不法侵入者、特に“まともな人間”では手に負えない集団の迎撃を行ってもらうよ」

だそうで。

その“君たち”が集まって、いま自分たちの総称を決めていたのだ。

もちろん、おれたち以外にもこの種の稼業についている組織は数限りなく存在する。

下部組織をいくつも抱えた統括理事長お気に入りの団体から、事情があって普通の学生でいられなくなった高レベル能力者とゆかいな仲間たち、といったレベルのつきあいまで多種多様らしいが、とにかく彼らもそれぞれに名前を持っているらしい。

だから、おれたちにもグループそのものを表す単語が必要というわけだ。

……ちなみに、おれがいいかげんな気持ちで「じゃあ『グループ』で」と奏上したら、一発で却下された。

すでに『グループ』という名前の暗部組織は設立が決まっているらしい。

「色系統はだめですか『先生』」

「無難っちゃ無難だけど、ジャクはちょっとロマンチックすぎるんだよ」

「まあ、そうだな」

メンツは予想通りだった。

マップ兵器および司令塔として、“初ちゃん”こと介旅初矢（かいたびはつや）。

いろいろあったことを水に流したわけではないが、戦闘のツートップとして固定された以上は対立したまま組織が創設されてしまうとふたりとも死ぬので、暗部にいるうちは互いに出し抜かないという協定を結んだ。

このまま使い捨てられることはないと言質をとったわけだ。おれから彼に何もしないという言質も取られてしまったが、危険な世界に堕ちた以上この身の安全には代えられない。

最悪の場合は、保護と引きかえに約束全部をなかったことにすればいいだろう。おれに突っかかられては損をするからこそ、初ちゃんもこういう協定を結ぼうと言いはじめたわけだし。

高レベルの演算能力と能力を手に入れた彼にとって、ただの計算や分析で対抗できないオカルトさんの呪術はそれなりに抑止力をもっているのだ。

変数をいじればいいだけなのに、哀れな話である。いいぞもっと迷え。

次に前衛として、“おれ”こと加藤若一。

そして後方支援担当の、色素が薄い長髪と白衣が似合う『先生』こと木山春生（きやまはるみ）。

最後のバカについて知ったとき、おれの中にいる加藤くん記憶体系の怒りが爆発したのだが、それは長くなるのでここでは省略したい。

「あああもうめんどくさい。だったら濁点をちょっと移して――」

結局、この初ちゃんの発言がそのまま通り。おれたち「対外魔術戦組織」のコードネームは、『フラッグ』で決まった。

まあ、いいネーミングじゃないかな。死亡フラグ的な意味でも。
どう考えても、今いるこのホテルの一室が、前の世界でもこっち
でも短いおれの人生最初で最後のアジトになりそうだし。

……あかるいみらいがみえない。

第十八話の一　Ｇｉｓｋｒａ　Ｊ？ｎｏｓ（後書き）

リアル厨二の加藤くんが“加藤くん”の魂に引っぱられた回でした。

第十八話の二　ブラック会社に勤めてるんだが

ひっそりと設立された『フラッグ』の初仕事は、尻拭いでした。

『でっかいお掃除だにゃー』

およそ真面目とは思えない口ぶりの“連絡係”さんによれば、そういうことになる。

統括理事長の説明によれば、この人はおちゃらけた（ついでに言えば、どう考えても未成年の）声音に反して、暗部の中でもなかなかの地位にいるらしい。

それゆえにかなり多忙な人で、本来なら『フラッグ』のごとき新

参弱小組織など相手にしてもらえないのだが、呪術側に強いという暗部でもけっこうレアなおれの長所をうまく使えるのはこの人ぐらいなのだという。

彼が片手間に面倒見てくれなければ、『フラッグ』の価値は半減すると言われた。

……要するにあちらさんも呪術師なんだろうな。

もう学園都市が呪術を認めてることは、公然の秘密でいいみたいだ。

いま、おれたち三人は何の変哲もない、白地に薄汚れた茶色の帯を巻いた業務用のバンに乗って目的地へと向かっている。運転は『先生』の担当で、くれぐれも交通法規を守れと冗談のようなオーダーが来ていた。

連絡係さんはここにおらず、ゼロ円ケータイでおれたちに指示を飛ばしている。

『お仕事は簡単。センセーたちとは別の集団が目標を追いつめるから、やつらを誘導して捕まえる。

加藤、おまえの奇門遁甲（きもんとんこう）なら簡単だろ？』

遊びに行くような口調で、連絡係さんが命令する。

おれとしては不本意極まりないが。

「おれは今回限りの使い捨てっていう理解でいいんでしょうか」

いちおう質問。

科学的能力者が魔術を使うと、神経がやられ体も損傷を受ける。
これは三度にわたって経験済みのことだし、あまり大きな陣を敷くことになるとおれは即死確定だ。
脇腹の痛みも鼻血も足のえぐれも、カエル顔のおっさんが治してくれたと知らされた後では、さすがにもう無理をする気にはまったくなれません。

だがこれは、先方も了解の上らしい。

『何すっとぼけてんだにゃー。おまえが一回、自分では魔力を使わずに広域結界を張ってたことぐらいお見通しだぜい？
最悪、能力者じゃないセンセーに全部やってもらえばいいんだから、まったくお気楽な仕事だにゃー』

それだけは正直やらせたくなかったんだが、上から選択肢を示されるイコール命令にも等しい。
それで行くしかないか。
……個人的には、電話越しの声を聞いた瞬間に明確な悪意をもって動きだしたオカルトさん知識体系が、何か余計なことをしないように祈っているわけだが。

あんたユカリさんをさらうとき、陰陽師に勝ったんだろ。
あの夢が嘘じゃないなら、もう少し落ち着いてほしい。

「で、捕まえた後は？」

この気疲れする上司に早くもうんざりしたのか、初ちゃんが声を上げる。
といっても、左の襟につけてピンマイクへぼそぼそとしゃべりかけるだけだ。このバンは窓ガラスが鉛処理されていないので、声を拾われるのだという。
どうせ車内に“発信器”がいるんだろうし、気にしても始まらないと思うんだが。

『とりあえず手足は潰せ。ついでに周りの掃除でもして失せろ。
あとは俺たちの仕事だ』

「……りょーかい」

いきなり口調を変えた連絡係さんに思うところがあったのか、初ちゃんが不快感をにじませて返事した直後、通信は切れた。

「なんだ、本人が出てくるならおれたちが仕事する意味がないじゃないか」

愚痴る初ちゃん。

肉声になっていたので、あわててフォローに回る。

「まあチュートリアルってことなんだろ。きのこる先生の授業受けたきゃ雑務できるところを見せてくれ、みたいな」

「ジャクはよくそうやって平気でいられるね」

「腰が抜けてるだけだ。あと、おまえが誰かに不満を漏らすシーンも貴重だからな」

「言ってろ」

運転席から、ふたりともそろそろ到着するぞ、と落ち着きすぎる女性の声が聞こえてきたのは、そんなくだらない話をしてから数分後のことだった。

>i2181111—2938<

状況を整理しよう。

今おれたちは、第一九学区のとある雑居ビル、だったのだろう何かの二階にいる。

というのは、外壁の装飾が取り外されたコンクリートとガラスだけのしろものをビルと呼ぶべきかどうか迷っているからだ。

初ちゃんの助言に従って断熱マットをもってきておいて本当によかった。夏とはいえ、夕暮れ時のコンクリは冷たい。

おれたちが古式ゆかしいペーパーで与えられた情報によれば、今回目標となるのは同じ暗部組織の『アナテマ』。

その名のとおり宗教関係の悪事に手をそめ、最近は護教的な神学研究者（いまさら驚くことでもないが、学園都市にも宗教学・神学の研究者は存在する）を次から次へとドブに叩きこむ、まさに“絶滅（アナテマ）”のための組織だ。

…しかし宗教ネタとしては最悪の部類に入る名前だな。

センス的にもピー音的にも。

とにかく、彼らの大粛清（エジョフシチナ）は結局、語源通りの結末を迎える。

“エジョフシチナ”とは、むかしソヴィエト連邦なる国の大粛清を実行し、最後は自分も巻きこまれて処刑されたエジョフという人の名前をもじったものだが、同様に『アナテマ』も結局は処刑される運命にあるわけだ。

個人的には『アナテマ』よりも彼らに命令を出していた連中を九星陣に閉じ込めてやりたいのだが、それはおれたちの命が危ないのでやめておく。

初ちゃんを怒らせると、後でとんでもないしっぺ返しをもらいそうで怖いし。

で。

今おれが廃ビル二階に寝そべっている理由は、その『アナテマ』のメンツが連絡係さんと愉快な仲間たち（いれば、だが）にいぶり出されてくるのをじっと待っているためだ。

すでに初ちゃんは虚空（こくう）の一点を見つめ、いつでも重力場を展開できるようにスタンバイしている。寒い中で視点と姿勢を固定しているので、その重力場（ブラックホール）の展開位置を決めたのはついさっきのことだ。

『先生』はおれの指示通り、ルーズリーフで作った五芒星（ドーマンセーマン）の周りを時計回りに、例のステップを踏みつつ何週も回りつづけていたが、今はある一点――星形の頂点のひとつに向かい合うようにしゃがんでいる。

コースは渦巻き状になるので、おれの“伸びる手”がガレキをそこらへんからかき集め、そのブロックだか何だかを並べて『先生』のためのコースを作ってあった。

もう、役目は果たしたわけだが。

「きた」

初ちゃんのつぶやき。

オカルトさんがおれの体から微弱な斥力を出していたのと同様に、彼も付近一帯の道や建物の床などに重力場を“貼りつけて”いた。

その能力式センサーパッド（サイキック）に感アリ。

初仕事の始まりだ。

……と、カッコつけておいてなんだが。

仕事はすぐに終わった。

合流地点としてちょうどよかったのか、面白いように陣の方へとびこんでくる『アナテマ』の連中。

知らされていた人数は十二人。

そいつらは全員、九星陣のなかで日暮れを待つ運命にある。

とはいえ、安心はできない。

キリスト教的な組織名から考えて、こういうチームには十三人目がいるのがお約束。例えば後方支援とか狙撃担当とかでね。

その余分な誰か、またはリーダーがこちらに気づいてからが本勝負というわけだ。

もちろんその間に陣が解ければ、おれたちは不合格になる。

《初ちゃん、お前のセンサーに感は？》

《あるけど遠い。十三人目はとっとと逃げる方を選んだみたいだね》

《そっちもおれたちの担当になるんかいな》

《難しいところだね》

初ちゃんと念話を交わす。

ここで十三人目の捕獲がおれたちのトレーニングメニューに含まれていれば、もちろん追わないと『フラッグ』は役立たず扱いにされ、木山先生や九人のクラスメイトたちの命が危なくなる。それに初ちゃんも何かしらの弱みを握られているのだろうから、お互いにまずい。

だが、逆に先走って十三人目に負けでもしたら、その場合も同じコース。

……つまりは

《まあ、選択肢があるとは思えないけど》

《クソ》

連絡係さんから新しいアナウンスがないかぎり、この戦場（シアター）に立っている兵士（アクター）はおれたちだけ。脚本を書いているのが誰であれ、作戦（プレイ）が終わらないかぎり降板は許されない。

《じゃ、行ってくるよ》

《おう》

そんなわけで。

おれはなんの罪悪感も抵抗もなく、初ちゃんを十三人目の追撃に送り出した。

悪いことをしたとは思わない。

なんといっても、彼は汚れ仕事の経験者で、暗部の先輩だ。実力もおれより上。

その正反対で、しかも九星陣を張っていて動けない『先生』と個人的にも親しいおれがここに残るのは、当たり前の話だろう。

「どうした、かとう君」

『先生』が小声で尋ねる。

さすがに初ちゃんがいきなり消えれば不審にもなるか。

だが、そこを動いてもらうわけにはいかない。

なんといっても、

『納莫三曼多没駄喃（イマすぐ　オきろ　バカヤロウ）、阿毘羅吽欠薩婆訶（シカトすんじゃねえ　イソげ）！』

今この場も、戦場なのだから。

バキィン、と大音響のその音は、『先生』を直撃した何かが発したものだ。

しかし、何らかの攻撃特性があったはずのそれも、彼女に何の影響も及ぼしていない。

当然だ。

彼女自身が『反生反剋』なわけだし。

反生反剋。

御坂さんを一分だけ釘づけにした、あの反生反剋だ。

世界の運行が相生相剋になっている通常の場合、光という『火』の攻撃にさらされた人間は体が燃える、焼け切れるなどの状態に陥る。さらに呪術的な意味が込められた場合、それもまともに受け取って効果が発動してしまう。

これは人間が『木』属性であり、『火』の気を当てられると『木』から『火』が生まれてしまうからだ。これを『木生火』という。

では、反生反剋の場合は？

簡単なことだ。

「木＞土＞水＞火＞金＞木」

という相剋の図式がまるっきりひっくり返った反剋で、『火』が燃やすのは『水』。

そして相生の順も逆になり、

「木↓水↓金↓土↓火↓木」

上の表のように、左から右へと要素が生まれることとなる。

どうやってるのか知らないが、『火化木』――“火が木に化ける”状態にある『先生』に光で攻撃しても、それを吸収されてしまうだけだ。

場合によっては、呪術的特性までも。

要約すると、こういうことである。

十四人目だか十五人目だか知らないが、呪術師ざまあ。涙拭けよ。

こうした傍目から見るとインチキな五行思想を現実に可能とするてっとり早い方法が、先ほどの真言（マントラ）だ。

密教において全宇宙の支配者であり、また宇宙そのものである大日如来（だいにちにょらい）、すなわち毘盧遮那仏（びるしゃなぶつ）にささげる真言には、その詠唱の中に

五大元素を象徴する単語が入っている。五大元素＝世界の全てを支配するミホトケ様、というわけだ。

『阿毘羅吽欠（アビラウンケン）』。

一文字一文字が五大元素のどれかの象徴とされるこの単語によって、この場の五行力場は完成する。

元々この五文字は、五大は五大でもインド＝アーリア系の思想――阿（ア）が土、毘（ビ）が水、羅（ラ）が風、吽（ウン）が火、そして欠（ケン）が無あるいは空を示すとされているが、まあおれの知識は陰陽道系だし、五行思想と無理やり結びつけてもいいはずだ。

もちろん、今の真言だけで『先生』をそんなデタラメな体にしたわけじゃない。

『幻想御手』事件終盤、おれたちが司法取引を持ちかける前に『先生』――木山春生（きやまはるみ）へ施した“保険”がこれだ。

あのとき、木山先生が銃で撃たれたり殴られたりしても呪術でリカバーできるように、初ちゃんの裏切りを知ってパニックに陥ったおれが必死に考えた呪術だった。

銃弾が怖いなら、その体を銃弾より相対的に硬くすればいい。

さっきの真言は、その呪術を活性化させる――『先生』が自分から触れたものだけではなく、『先生』へ当たりにいったモノやヒトにも効果が表れるように、いわば封印を解くためのものにすぎない。

とはいえ、クロウリー統括理事長の言うところによれば、これも魔術ではあるわけで。

パン、とくぐもった音。
左手小指に激痛。

あー、反動きたか。
とっさの判断で、禹歩（うほ）もなにもせずに霊力を使ったからな。
しかしおれは、もうひとつ呪術を必要としている。ケガで動けない状態だからこそ。

「？（オン）　摩諭吉羅帝（マユキラテイ）　莎訶（ソワカ）
オン　マユキラテイ　ソワカ
オン　マユキラテイ　ソワカ……」

徐々に左手全体が痛くなってくるのを自覚しながら、おれは孔雀明王（くじゃくみょうおう）の小真言を唱え続ける。

孔雀明王（マハーマユリー）は、名前のとおり孔雀（マユリ）の神だ。
孔雀は害虫や毒蛇を食べることから、人の害悪を取り除くはたらきを示すという。また仏教の敵や人間の煩悩（悟りにいたる道の障害物）を排除するとも。
要は危なくなって頼れば助けてくれる、苦しい時の味方だ。

もちろん、見えない攻撃を受けつつあるおれが、いま苦しくない

わけがない。
だから助けて、デッカイ孔雀（マハーマユリー）さん。

まあ、日頃の行いや報いの収支がいいからだろう。
救いは来た。
ただし、思わぬ方向から。

「……かとう君、いったい何が起きているのか説明できるかね？」

『先生』の声に振り向いたおれは、思わず驚愕と歓喜の叫び声をあげた。

十二人の『アナテマ』たちを閉じこめている九星陣を崩さないために、自分がぐるぐる歩き回っていた中心にしゃがみっぱなしの『先生』が。

霜の下りた肩を両腕で引き寄せて、寒そうに震えていたのだ。

脳内のオカルトさん知識回路が、嬉しそうにうなりを上げつつ高速回転を始める。

こっちに来てから国際的な呪術知識を持つに至ったオカルトさん回路は、ちょっとした禁書目録（インデックス）に等しい。

もちろん知っているのが姿かたちと名前だけで、どんな呪術を使ってくるかまでは知識にないようなエセ魔道図書館だが、それでも偉大なネット（誰かが余計な気を利かせて、学園都市に．ａｃという国別ドメインを割り当ててやがった。日本政府涙目）に載っている程度のことは一般常識として記憶している。

つまり。

第一次攻撃が光を使ったもので、それを『先生』の反剋が吸収し。

第二次攻撃で、『先生』に霜が下りている。あるいは、呪術を吸収した『先生』に霜が下りた。

こんなヘンテコな攻撃は、ネット弁慶知識にはそうそうない。

逆に言えば、特定が容易ということだ。

すなわち。

「ええ、説明はつきますとも、今すぐにね――

黎明冷気（イッタコリウクィ）、見事なり！」

叫んで下宿の鍵を『先生』へ投げつけたおれに、天からの光が降り注ぎ、

虚無から出現した孔雀の翼によって遮られた。

第十八話の二　ブラック会社に勤めてるんだが（後書き）

注…

『きのこる先生』

インターネットスラング、およびアスキーアートキャラクターの一種。

「この先・生きのこる」を「この先生キノコる」と誤読することで発生した。何かが危機に瀕しているときに忽然と現れ、どのようにして生き残ってゆくべきかを指導して去ってゆくという。

ここでは「まず“危機を迎える”ことができるまで生き残ろう」という意味あいで使われた。

『納莫三曼多～』

本来の読みは「ナウマク・サンマンダ・ボダナン、アビラウンケン・ソワカ」。

本来の意味は「あまねく諸仏に帰依したてまつる、五大元素をつかさどる仏（＝大日）よ、わが願いを叶えたまえ」といったところ。

ここでいう“願い”は『先生』の身を守ってほしい、ということになる。次に唱えた孔雀明王の真言は、加藤自身を守るためのもの。

『黎明冷気』

イツラコリウキ。アステカ神話で、霜を象徴する神。

ナワトル語のつづりをアルファベットに翻字すると“Ｉｔｚｔｌａｃｏｌｉｕｈｑｕｉ”になるのだが、“オカルトさん”の知識ではナワトル語の“ｔｌ”音を終末音（「トル」）以外はタ行で表すため、「とある」本編とは神格名の日本語表記が異なる。

第十八話の三　おれはまだ頑張れるかもしれない

イツタコリウクィ。

アステカの神の一柱で、明け方の冷えこみと霜をつかさどる神らしい。

かつてはタウィスカルパンテクーティという名前の明けの明星（みょうじょう）つまり金星をつかさどる神だったが、あるとき太陽神オルリン＝トナティウに万物を傷つけることのできる激しく燃える槍（学者によれば、光のことらしい）を投げつけて返り討ちに遭ってしまい、金星も奪われる。

その後、彼はイツタコリウクィとなるのだが、この名前を訳すと

『植物を殺す霜』

という意味なんだとか。

だから、今おれが下宿の鍵を『先生』にぶつけて『金侮火』――金で火すなわち攻撃を剋さなければ、『先生』は物理的な意味で氷

の女王になるところだった、というわけだ。
反生反剋で、呪術の思わぬ特性が出る弱点と言ったところか。

「……どういうことか、説明してくれていないぞ」

「五感に働きかける能力とでも思ってください。幻聴幻覚幻肢痛、なんでもありです」

「まるで『幻想御手（レベルアッパー）』だな」

意味の分からない自嘲めいた言葉だけで黙ってくれた『先生』に感謝しつつ、その場でおれは嫌なことも思い出していた。

曙光上帝（タウィスガルテクーティ）は、その大げさな名前に恥じない前歴を持っている。
こいつが金星となって天に昇る前はなんと過去世界の太陽神であり、人身御供の儀式をやるやらないで夜の神と揉めて、結局負けたおかげで捨て台詞を吐きつつ地上から追い出され天界へ逃げ出した、というのだ。
その旧名は、日本史専攻の“おれ”でも知っている。

有翼大蛇（ケツァルコアトル）。

……クソ。

相手の呪術師、想像以上にでかい伏線張ってやがった。

＞i218811—2938＜

視界が虹色に覆われた。
名状しがたい音とともに、目の前を覆った孔雀の翼が“分解されて”消えてゆく。
孔雀明王が、またおれを守ってくれたというわけだ。
ともあれ狙撃ポイントの方向は把握した。孔雀明王の光が派手にちらつくが、能力戦だと思えば何の違和感もない。
とりあえず、いちばん基本的なことをやろう。
遮蔽物に移動だ。

「『先生』」

低くささやく。

「今度はどうした、かとう君」

同じように低い声で返してくる『先生』。

彼女のいいところはここだ。聞いても無駄だとわかっていること

は、基本的にわざわざ口にしない。
あとで物証とともに質問が来たりするから、怖いところでもあるのだが。

「さっき『先生』に当てて、おれにもずっと当たりそうだったあの攻撃は、どういうものか想像できますか」

「光だな」

先生が即答した。

「音より早く到達しているし、衝撃波の類が一切ない。もちろん私たちに感じ取れないだけかもしれないが、そのような中途半端な規模の衝撃で遠くから人を殺そうと考えているのなら重大な思い上がりだ。
何より、人に幻覚を見せるのに手っとり早いのは光のいたずらだよ」

「ありがとうございます」

幻覚じゃないんだけどな。
その呟きは押し殺して、おれは考える。

光による攻撃、おそらく金星が関わっているのだろうが、そんなかすかな光は人の目に見えない。となると、相手も真っ暗闇にいるわけで、狙撃が不得手なおれに位置の特定は不可能。

しかし光から生じるのは神話的にも火か熱であり、霜を生みだすというのは聞いたことがない。

もちろんそういう呪術なのだろうが、対抗策が限られてくる。

ただ呪術のおそろしいところは、どこまでも神話伝説に基づくことだ。

説話にいわく、現世の太陽神オルリン＝トナティウに光を当てると反射されるという。今は夜だから太陽を使った反撃なんぞできやしないが、太陽神を擬似的に創り出すことはできる。

偶像を使って。

オカルトさんの夢で、阿倍仲麻呂さんが保名くんを守るのに使っていた『偶像の理論』は、現代でもじゅうぶん応用がきくらしい。

例えば、ストリップの劇場に引きこもりが顔を出すと、天照大神（あまてらすおおかみ）の伝説が引き金となってその引きこもりを輝かせることがありうる。

もちろんその輝きは一瞬で冷めた空気にとってかわるのだが、とにかく一瞬でも人の注意を引くのだ。

この『偶像の理論』を極めた、というよりも意志ではなく先天的に発現しているのが、あの言動いちいち腹立たしい神裂火織（かんざきかおり）。やつ

は体の各所に救世主の徴（しるし）が出ている『聖人』なのだそうだ。
常識離れした脚力やら何やらは、いわゆる神のご加護というやつらしい。

まあ、神裂は今んとこどうでもよくて。
今はどうやって太陽神を出すかだ。
太陽神といっても、どこの神話でもいいわけではない。例えばうっかり天照大神なんぞを召喚しようものなら、「太陽神＋最高神」というステータスがつき、ケツァルコアトル＝敵と同じ術使いになってしまう。

そうなったら負けは確定だ。
ただでさえ太陽神召喚による攻撃反射を選択した時点で、相手の土俵に乗っかっているのだ。敵の正体が分からない以上どうしようもないことだが、できるだけ敵につけ入る隙を持たせない反撃が望ましい。

できれば相手の、あるいは相手が使っている武装の形状や材質をつかみ、そちらに向けて攻撃する方がずっと楽だし安上がりにもなる。
呪術戦は情報戦なのだ。

などと心の中でつぶやいていると、いきなり凄まじい音波が右耳にねじりこんでくる。左に飛ばされつつ流し目をくれると、もたれ掛かっていたコンクリートの壁が粉砕されるのが見えた。
そして、孔雀の羽の破片も。

敵の攻撃は、物体を“分解”する特性を持っているようだ。
そして敵は、いま砕かれたコンクリの方向にいる。

「ぶへっ」

「かとう君!?」

「『先生』はそこから動かないでください、絶対に。
オンマユキラテイソワカ、オンマユキラテイソワカ……」

転んで立ち直り、思わず一歩を踏み出しかける『先生』に警告。
足を使って結界を作る反閇（へんばい）をやった以上、余分な一歩は結界をぶち壊すもとになりかねない。
能力者であるおれも、呪術にはほとんど対抗策を取れないわけだが。
また被害担任の禹歩でごまかして、時間を稼ぐぐらいしか――

仕方ない、それでいくか。
目の前で再び散る孔雀の羽を見て、そう思う。

「そうと決まれば。

誰とも知らぬ呪術師よ、ひとつ“呪い返させて”もらうぞ……」

陰陽師のよくする呪術、あるいは使い魔として有名な式神または式という単語を使った熟語がある。

いわく、「式を返す」。

意味は簡単で、文字通り式神を返すことなのだが。

式神を誰かのところに送る（これを“打つ”という）ことはその相手を攻撃、おもに殺害することと同義であり、式を“打ち返す”ことができる陰陽師は、まず自分に向けて打たれた式を叩き墜とした、という前提がつくことになる。

このため「式を返す」には、自分がされたのと同じことを相手にやり返すとか、または後手からの一撃（バックハンドブロウ）――攻撃を受けきって逆襲に転じる、という意味をもつ。

……まあ、誰かがこの熟語を使ってる場面は、オカルトさんの夢の中にしかないけど。

さて、科学的能力者ゆえに文字通りの意味で式を返せないおれとしては、頭を働かせるしかない。

今現在の敵、『アナテマ』の十何人目かの呪術師について、だいたいのところ“何者が”“何によって”攻撃してきたのかは分かった。その攻撃が“何ゆえに”かは言うまでもないし、“いかにして”もだいたい掴んだ。

では、“何を使って”？

おれが詳しくないアステカ神話関係なのは間違いない。呪術の特性から考えて、イツタコリウクィにかかわるものなのも確かだ。

なんせ、反生反剋によって攻撃を吸収した『先生』に霜が立っていたのだし。

今が夏という点を考えると、これが呪術によるものと考えられる。

そして夜明けの冷え込みをつかさどる神であるイツタコリウクィが、前身だったタウィスカルパンテクーティがつかさどる金星からの光を使った呪術でおれたちを攻撃し、その呪術によって霜が下りるほどの低温が生みだされる。

ここまでは間違いないだろう。

このように神格を超えた攻撃のパターンを繰りだせるのは、互いに同一視や化身本地が重なりあう多神教の強みだ。

だからこそ、金属製の鍵一本でその呪力を無効化されてしまうように、他の呪術体系に比較的影響されやすいという弱みもある。一神教系の呪術ではそういう弱点が少ないため、方程式が創られはじ

めてから呪術を防ぐには、レベルを上げて物理で叩くか発動条件をなんとかして消し飛ばすか、そういった乱暴な方法をとるしかない。

そう、神格を超えた攻撃だ。

「……かとう君、さっきから天井を眺めてどうしたんだ？
それと、いいかげん私も地べたにうずくまっていたくはないんだが」

「すみません『先生』、ちょっと黙っててください。
端末に連絡係さんから通信が入るまで『先生』はそのままでお願いします」

「そうか……。
屋内で日暮れを仰いでいる君を見ていると、何となく不安になるのだが」

「えっ」

『先生』、今なんと？

「屋内で日暮れを仰いでいる君を見ていると……と言ったが」

頸椎の音をたてて振り向き、ガラスが“分解”された窓から外を見る。
日は沈んでいるが、まだ残光は残っていた。

日暮れ時。つまり、宵（よい）だ。

バカかおれは。
宵といえば夕星（ゆうづつ）、宵の明星だ。

『先生』が吸収した攻撃は、初めから相手を凍らせるものだったわけじゃない。
金星の万物を傷つける槍が太陽に跳ねかえされて金星にぶつかった後、天上から降りてきたために呪術が「冷えこみ」を獲得したにすぎないのだ。

つまり『先生』の霜は、神に降臨（墜落）伝説があったために生まれた副産物。
攻撃の本流は、すべてを分解する（おそらくは）光線。

“光によってエネルギーが伝達される攻撃”ではない。
“光そのものが攻撃”。

敵の呪術師が使っているのは、イツタコリウクィの伝説じゃない。
金星の神、タウィスカルパンテクーティの方だ。

太陽（ひかり）が天から地に落ちる日暮れ時は、まさにタウィスカルパンテクーティの槍が地上のすべてを傷つけるのにふさわしい。
金星も観測できることだし。

そして金星から地上に落ちてきた光をおれの所に誘導というより反射させたのは、まず間違いなくタウィスカルパンテクーティ自身、あるいはそれを象徴するご神体だ。
いま思いつくのは、ひとつだけ。
イツタコリウクィの誤訳『曲がった（カーヴド）黒曜石（オブシディアン）の小刀（ナイフ）』。

要するに、おれが相手にしていたのは黒曜石のカケラと金星の公転軌道に関する知識、および角度の計算だけで人を殺せる、けっこ

う手軽な呪術だったというオチ。
ケツァルコアトルなんていう伏線もなし。
もっと比喩表現に関する発想を豊かにする必要があるな、おれ。

それはともかく。
相手についてここまで分かれば、反撃の選択肢も増えるというものだ。

黒曜石というやつは、決して珍しい存在ではない。
日本国内だけでも複数の産地があり、「黒曜石」以外に地元で使われる名前や、伝説にちなんだ通称がいくつも知られている。栃木の北の方では、三万五〇〇〇年前の石器まで見つかったそうだ。

そして黒曜石は、同時に石器時代の小国家群を支えていた。

この黒曜石器を中心とした部族国家制を崩したのが、九州の筑紫あたりにいた旧ヤマト部族と言われている。
当時すでに銅剣も鉄剣も輸入されてきていたが、まだまだ黒曜石や石剣の需要は各地で高かった。日本列島への重金属製品輸入ルートを一挙に独占したヤマト王権が、そういう部族を次々に併合していったのだ。

古事記・日本書紀に書かれた神武天皇やヤマトタケルの征服事業をうのみにはできないが、オカルトさん知識によると（大幅な年代のサバ読みなどの神話的要素を取っ払えば）書いてある事件そのものはけっこう信用できるらしい。

だから今の天皇陛下には申し訳ないが、マネをさせてもらう。
ちょうど鳥もいるし、太陽信仰ともかぶるし。

悪く思うな、アステカの呪術師。
ここは文化的には日本なんだ。

「『先生』、一分だけ目をつぶっててください」

「……いろいろ言いたいことはあるが、今の状況をより理解しているのは君だ。従おう」

『先生』が猶予つきで許してくれました。
後がこええ。
しかし、やらないと膠着状態だ。金星が地平線に沈むまで、向こうが何もせず待っててくれる確率は低い。
最近めっきり使わなくなった“伸びる手”でまわりのガレキをつかみ、右肩に申し訳のような土台をつくりながら、おれはまた口を開く。
足が勝手に踊りだした。習慣になるのはいいことだ。

「？っ（なあ）……
鉢納摩入縛羅鉢羅婆哩多耶吽（そこのドアホ　アカリ　こっちにヨコせや　コラ）。

オン　ハンドマ　ジンバラ　ハラバリタラ　ウン
オン　ハンドマ　ジンバラ　ハラバリタラ　ウン
オン　ハンドマ　ジンバラ　ハラバリタラ　ウン……」

略式だが、どこまで行けるか。
頼みの綱の阿弥陀（ドアホ）に、ハンドマという抽象的な呼びかけで通じるのかどうか、確証はない。

ただチベット仏教の信者はいつも「オン・マニ・パドメ・フン」と唱えている。蓮華を意味する「パドメ」は「ハンドマ」と同根の言葉だし、あれで観音菩薩に祈っているのだから、阿弥陀如来も門徒（じん じゃ）だったキビツ系の精神が唱える光明真言ぐらいは聞いてくれないと、割に合わない。
みんな救うって言ってることだし、約束守ってもらうぜ。

光明真言。
その名のとおり、光をもたらしたまえと願う呪文だ。
本当は五人の仏に願うのだが、そんな悠長なことはやっていられない。というわけで、キビツ時代に信じていた阿弥陀如来へ、祈る相手をしぼることにした。

あーまた鼻血でてきたな。
魔術の反動に最近なんとも思わなくなってる自分が嫌だ。

「オン　ハンドマ　ジンバラ　ハラバリタラ　ウン
オン　マユラ　ギランディ　ソワカ
ナウマクボウダヤ　ナウマクダツマヤ　ナウマクソウガヤ

オン　ハンドマ　ジンバラ　ハラバリタラ　ウン
オン　マユラ　ギランディ　ソワカ
ナウマクボウダヤ　ナウマクダツマヤ　ナウマクソウガヤ

オン　マユラ　ギランディ　ジンバラ　ハラバリタラ　ウン……」

途中から、孔雀明王の大真言を混ぜる。
日本語発音から外れた、本式のやつを。

やりたかったのはこれだ。
光をあらわす真言と、孔雀の神格をあらわす真言。そうでなくと

も、孔雀明王には金色孔雀王という別名がある。これを合わせれば、少なくとも今この瞬間、呪術の使いすぎで極端に霊力が高いこの空間では、効果が望める。

すなわち、“金色に光り輝く孔雀”の出現。

これが何を意味するか、相手が知る必要はない。おれだけ知ってればそれでいい。

日本史専攻三回生としてはちょっと気恥ずかしくなるが、ともかく俺の右肩には金色に輝く孔雀が載っている。

この姿を窓から外にさらせば、

「勝ったな」

連絡係さんから携帯に着信があったのは、初ちゃんが帰ってきた二分後だった。十三人目が向かった先に十四人目がいて、長引いたらしい。

ということは、おれとやりあったのは十五人目か。

『先生』は帰りの道のりに備えて手指を温めるのに忙しく、おれはあのあと襲ってきた強烈なめまいに立っていられなくなって座りこんでいたので、初ちゃんが応答する。

おれがあのとき使ったのは、金鵄（きんし）の再現だ。

黒曜石など石剣をまだ使っていた原ナラ諸族と、鉄剣を主兵装とした神武天皇ひきいるヤマト族との決戦のさなか、天から飛来して神武天皇の弓の先に止まったとされる、自ら金色に光り輝くトンビを金鵄という。

こいつが発したまばゆい光のせいで、ナラの兵士はみな目がくらみ、勢いづいたヤマト軍の攻撃でナラ連合軍は総崩れになった。

もちろん、天皇家の先祖の天照大神や“日の御子”信仰と無縁ではない。

さらに、おれはキビツつまり吉備氏の子孫で、吉備氏は大吉備津彦（おおきびつひこ）、つまり第七代孝霊天皇の息子の子孫。加藤くんの系譜は分からないが、オカルトさんと同系だとすれば同じ吉備氏と阿倍氏の子孫で、阿倍氏は第八代孝元天皇の息子である大彦（おおびこ）の子孫だから、どっちにしろこの呪術に有効な『偶像性』はあるわけだ。

動き続ける金星を追いつつ、動く目標のおれに光が当たるように黒曜石の角度を微調整するまで、どんなに相手が早くても十分の一秒はかかるだろう。

ところがこっちは太陽神の加護があり、十分の一秒あれば孔雀の光が相手に届くのにはじゅうぶんだ。

日本神話は、多くの日本人が“根拠もないのに、なんとなく”存在を認知しているもののひとつだ。日本列島全域という、それなりに広い範囲からの集合無意識的な強制力によって、光に当たった黒曜石はナラ軍のごとくボロボロになって崩れおち、使用者は視神経を永遠に刺激されつづけて視界を真っ白に塗りつぶされる。

そういう計画であり、あれから攻撃がないところを見ると、どうやら実際にそうなったらしかった。

身を守ってくれるわ反撃を手伝ってくれるわ、孔雀明王さまさまだ。

「……はい……はい、了解です。それじゃ撤収しますね」

そう返して、初ちゃんがこっちをチラ見する。

「……ええ、わかりました。代わります」

言いながら携帯を放ってよこす初ちゃん。おいこっちは動けないんだぞ、取り落としたらどうしてくれる。

ともあれ、通話に出なければならない。

「はい、代わりました」

『おーうご苦労さん。お前とやりあった魔術師は、こっちで確保しといたぜい。

目が見えなくなって動けないらしかったから、楽させてもらったにゃー』

能天気な連絡係さんの声が、そこで途切れる。

『……にしても、さすがに金烏（きんう）はやりすぎだ。探索魔術ってもんを考えろ』

「いやですねえ、まったく」

『何？』

おれは『フラッグ』の事実上の合格通知に喜びを隠せないまま、そして連絡係さんへの憎悪に満ちたオカルトさん知識体系に誘導されるまま、調子に乗って答えてしまった。

「ありゃ金烏じゃなくて金鵄ですよ、きんし。だからこそ、あの呪術師が行動不能になったんでしょ？今はこれが限界なんで、勘弁してもらえませんか土御門（つちみかど）さん」

「……なに？」

今ちょっと失言もあったりしたが、ともかく。

おれの学園都市での生活は、形は変われど続くようだ。

東京を亡ぼしたり学園都市を焼き尽くすのも、まだまだ先の話。

少なくとも、今のところは。

第十八話の三　おれはまだ頑張れるかもしれない（後書き）

注…

『曙光上帝』

トラウィスカルパンテクウトリ。アステカ神話における金星神、破壊神。

ここで使われたのは、「とある」本編でいうところの『トラウィスカルテンパクウトリの槍』である。誰の専用でもない簡便な呪術だが、加藤はそれを破るためだけにわざわざ神武天皇の伝説まで持ちだして対抗した。

これは呪術師として、褒められる姿勢とは言えない。

『阿弥陀如来』

大乗仏教に言う如来のひとり。浄土教の本尊。

仏になるために立てた四十八願のひとつで「わたしが仏になったら世界じゅうすべての人々を救います」と言っていたため、現世で仏教の教える“正しい道”を実践できない人々（猟師や武士など“殺し”が職業の人、貧しくて寺にも相手にされない人など）の信仰を集めた。

“キビツ”が属していた本願寺教団も、阿弥陀信仰の集団。

『オン　マユラ〜』

孔雀明王の大真言。

意味は「大孔雀明王よ、我が願いを成就せられたし。われ佛陀を拝し、仏法を拝し、僧坊を拝す」といったところ。

後半には“おれは仏教の信者だから助けろ”という無言の要求が含まれている。

『金烏』

伝説上の、三本足で金色に光る烏。八咫烏とも同一視される。太陽の中にいるとされており、月にいるとされた兎とあわせて金烏玉兎という。阿倍保名の小舟に入れられていた巻物『金烏玉兎集』の名は、日と月の運行にあわせて世の流れを知るといった意味合いで、この二つの伝説からきている。

このため、金烏は陰陽師にも崇拝される。

第十八話補遺　腹中虫（前書き）

この四つの生き物には、それぞれ六つの翼があり、その翼のまわりも内側も目で満ちていた。
そして、昼も夜も、絶え間なく叫びつづけていた。

――『ヨハネの黙示録』

第十八話補遺　腹中虫

時は遡り、七月二十四日の夜。

目が覚めたのは、水を打ったように静まり返る夜の闇のなかだった。

夜半に目を覚ますことは、これまで何度もあった。自分に宿る魔道書たちの防衛機能がそうさせたのだと、彼女はなかば信じかけている。

そうでもなければ、凄腕の魔術師をふたりも敵に回して、自分が一年間ずっと逃げ続けられるわけがないからだ。

インデックス＝リブロルム＝プロヒビトルム、通称インデックスは、上着をかきこんでもう一度寝ようとした。

今は金属の安全ピンでとめられているこの上着は、そこらの品物ではない。

『歩く教会』という、彼女を魔術師たち（と、彼女の感情にまかせた無謀な行動）から護ってきた、無感情な“霊装”だった。

それを破った初めての人間が、誰あろう上条当麻なのだが。

そこまで考えて、彼女は自分が今どれほどの危機にあるかを思い出した。

彼と銭湯へ行く途中、インデックスは彼と別れ帰ってきた。理由は思い出したくない。

そのあと彼女がふて寝してから、まだ三十分経っていない。目が覚めたのなら、相応の理由があるはずだ。

誰かに触られるまで近寄られることは魔道書たちが許さないだろうから、誰かが近づいてきているか、もしくは何か聞こえたか、さもなければ自分自身の原因（空腹など）か。

三番目はすぐに否定された。

自分は好き嫌いをする方ではないが、こもえの作る料理はこの国では五本の指に入るおいしさだと思う。それをおかわりせずに残すなど、とんでもない話だ。

最初と二番目の選択肢は、どちらも身の危険を示している。

が、どちらも感じられない。眠っていた時には遠くにかすかな声が聞こえていたような気がしたのだが、起きてみるとまったく聞こえなくなっていた。

あの歌は何だったのだろう。

歌？

いや、インデックスはひとり布団の中で思い返す。
あれは歌じゃない。
じゃあ、何？

詠唱だ。

そこまで考えて彼女は布団を跳ね上げ、両足を振り子のようにスイングさせて飛び起きた。右手の近くにあったビールの空き瓶をわしづかみ、腰を落として身構える。

魔術相手にそんなことをしても意味がないという批判は当たらない。詠唱が聞こえるほど近くに、敵対的な魔術師がいるという証明だからだ。

至近距離での詠唱は、ほとんど自殺行為に近い。それをわざわざ行うのは、予想外の敵が現れた場合、腕や足などを魔術で補強して肉弾戦をおこなう場合、追いつめられてまず相手の目をくらます必要がある場合など、限られた場面だ。

それをやってのける相手には、物理攻撃も無効とは言えない。

だが、そんな判断をした彼女を嘲笑うように。

インデックスの腹部は、ピリッと痛みを訴えた。

＞i233346—2938＜

予想外の事態に、インデックスは顔を少しだけ赤らめた。
一年間の記憶しかないとはいえ、自分の性別について理解していないわけではない。
それに腹痛は、彼女の大食癖と不衛生な生活につきものだった。

まだ右手にビール瓶を握ったまま、左手でそろそろと痛む箇所に手をあてる。
その瞬間、またピリピリと腹部から痛みが駆けあがってきた。痙攣(けいれん)しているようだ。

――おかしいよ、これ。

インデックスは額に汗を浮かべて、さらに強く腹を押さえつけた。しかし痙攣は止まらない。

息を殺してさらに腰を落とし、彼女は身を縮めた。そのとたん激しい痛みが腹を襲う。まるで冷たいものを刺しこまれるような、続いて胃に火がついた何かを放りこまれたような灼熱感。

さらに、巨大な長虫が胃の中でうごめき回っているような違和感が襲い、インデックスはたまらず両膝をついた。

手を離れたビール瓶が転がる。

インデックスは最低限の防衛本能だけで歯を食いしばり、うめき声をあげて布団の中を転がった。

顔がゆがみ、全身の筋肉が硬直する。

そこへさらに激しい痛みが、胃から下腹部にかけて大波のように襲ってきた。

腹の中を、虫が這いずり回るようなこの感触は、いったいなんだ？

彼女の中の魔道書が高速回転を始める一方で、人間としてのインデックスはこうなった原因を、一年間の記憶の中からすくい出そうとしていた。

時間のかかる魔術や呪いではありえない。それならば、とっくに彼女は見つけて自分で解除しているだろう。

つまりこの呪いにかかったのは最近ということになるが、ここ数日の逃避行では魔術を感知していないし、きょうはどんな異能も消し去るとうまと共同行動をとっている。魔術が立ちいる隙は――

そこまで考えて、インデックスはひとつの文章を思い出す。
それは、こんな風にしめくくられていた。

『――上に乗っかってる白い飴玉は、インデックスさんの分のお守りです。見た目通りのしろもので、ふつうに彼女が口の中で転がしてくれればそれでいいです。

右手では触らないでくださいね。割とマジで。

カトウ　ジャクイチ』

地理的な要因から、戦場となるべき月詠小萌（つくよみこもえ）の私宅に一番乗りの栄誉を与えられたのはステイル＝マグヌスだった。

上条当麻にとってはそれが自分以外で最良の選択肢だったが、本人としてはどのようにとらえるべきか、議論の余地がある。

なぜなら、彼がそこで見たのは

「――警告、第三章第十四節。

Ｉｎｄｅｘ－Ｌｉｂｒｏｒｕｍ－Ｐｒｏｈｉｂｉｔｏｒｕｍ―禁書目録の『首輪』第一、第二結界の貫通、および第三結界の呪術的破壊を確認。

再生準備……失敗。自動再生は不可能。

現状、一〇万三〇〇〇冊の『書庫』の保護のため、侵入者の迎撃を優先します」

などと全身から光を発して宙に浮きながら呟きつづける、虹色の瞳をしたインデックスのような何者かの姿だったのだから。

「『書庫』内の一〇万三〇〇〇冊により、結界を破壊した魔術の術式を逆算。

……成功。古代道教の蠱術（こじゅつ）を陰陽五行思想により再構成したものと判明。

対道教用の術式を組み込み中……失敗。該当する魔術に有効な術式は発見できず。

対陰陽道用の術式を組み込み中……失敗。該当する魔術への対抗術式は発見できず」

あまりといえばあまりの展開に唖然とするステイル。

ある意味では当然でもある。

彼はこれまでのところ、インデックスの脳の八割以上を占拠する記憶を一定期間ごとに消さなければ彼女は生き残れない、ということだけを聞かされてきた。それに対する疑念もあったものの、実際に彼女が苦しみはじめるとそんなことはどうでもよくなった。

そうやって何度、記憶を消したことか。

回数でいえば決して多くない。しかし、なればこそ彼女と彼の記憶の乖離（かいり）は、回を追うごとにはなはだしいものとなっていった。

それがどうだ。

魔力を使えないはずの彼女が魔道書を縦横に操り、自らにかけられた“呪い”を解こうとしている。

いや。

そもそも“彼女はインデックスと呼べる人格なのか”？

「――警告、第四章第十八節。

術式の構成を基に、対侵入者用の特定魔術（ローカルウェポン）を組み上げます」

侵入者とは誰だ？

ステイル自身という可能性も考えたが、そもそもインデックスがこの状態にならなければ、彼はこの薄汚いアパートに今夜足を運ぶつもりはなかった。

しかし、彼以外に魔術師の姿は見受けられない。

……まさか、本当に呪いなのか？

「――警告、第五章第二一節。

侵入者駆除に対して、最も有効な魔術の組み合わせに成功しました。

これより、特定魔術『毒蛇に与える鉄槌（マッレウス　セルペンテルム）』を発動。

侵入者を破壊します」

ステイルが考え込む間にも、事態は進んでいる。

インデックスは瞳を虹色に輝かせたまま、底においてあったビール瓶の太い部分を両手でつかんだ。

そして何やら奇怪な文字（ステイルはそう思ったが、このとき瓶の表面に浮かんだのはシッダーム文字というインド系の文字だった）によって魔法陣が刻まれたそれを“逆手に持ちかえ”、

「我が名が最強である理由をここに証明する（Ｆｏｒｔｉｓ９３１）」

今にも胸に瓶を突き刺そうと――

「『魔女狩りの王（イノケンティウス）』！！」

――そのようなことを、黙って見ているステイルではない。

状況はまったく把握できないが、彼女が自身を害するようなことがあってはならない。

誰がそれを許しても、彼が許さないからだ。

一瞬で先端部がゲル化したビール瓶が、インデックスの胸にぶつかって形を崩す。

どろどろのガラスが畳に落ちて煙を上げた。

「――警告、第六章第三〇節。

新たな敵兵を確認」

「……しかし、いったいどうなってるんだ？　インデックスが魔術を使うなんて……」

「戦闘思考を変更。戦場の検索を開始」

「……決まってんだろうが」

突如、背後に声。

振り返るまでもなく、あの生意気な素人が彼を押しのけ、こちらに飛んできた白く光る文字列を打ち消すため、右手を前に突きだした。

「――現状もっとも難度の高い敵兵・上条当麻の破壊を最優先します」

「インデックスは魔術を使えないなんて、教会が嘘ついてやがっただけだろうが！！」

一瞬の後、聞きなれた佩刀の音が左に並ぶ。
確かめるまでもない。
神裂火織（かんざきかおり）はその圧倒的な身体能力をもって、彼をここに連れてくることを選んだのだ。

「神裂、この異常な状況について何か言うことはあるかい？
もちろん僕に理解可能な内容の」

「この事態を作ったのは“彼”ではありません。
彼には、インデックスの記憶にまつわる不合理を延々と指摘されましたよ」

小声で事情を伝える聖女。
その意味を問う間もなく、目の前で実体化した文字列を打ち消しつづけている男が、声を張り上げた。

「ああ、そうだよ。
インデックスは一年おきに記憶を消さなきゃ助からないってのも大嘘だ！
こいつの頭は、教会の魔術に圧迫されてただけなんだ！　そいつ

を打ち消しちまえば、もう記憶を消す必要なんかなくなっちまうんだよ！

神裂には言ったけどもう一度言うぞ、冷静に考えてみろ！

『禁書目録』なんて残酷な役目をこいつに背負わせやがった連中が、てめえら下っ端に心やさしく真実を全部話すとか思ってんのか！

なんなら、インデックス本人に聞いてみりゃいいだろうが！！」

そのインデックス本人はしかし、彼に対して攻撃の手を緩めない。

「――『毒蛇に与える鉄槌』は、上条当麻に対して効果が見られません。

特定魔術『聖ジョージ（セント）の聖域』を発動。上条当麻の破壊を継続します」

小柄な少女からほとばしる文字列が、白い光の奔流へと変わってゆく。

上条の右手が、徐々に魔術師たちの方へ押されてくる。

ふん。

だから、どうだというのだ。

魔術師は背に手を添えた。
決して、好意的な感情からではない。

「曖昧な可能性なんていらない。あの子の記憶を消せば、とりあえず命を助けることができる。
僕はそのためなら誰でも殺す、いくらでも壊す！
そう決めたんだ。ずっと、前に」

そうであるならば、無論のこと返ってくるのは反対意見。
むしろ本性をあらわそうと、狙っていた節もある。
だが。

「“とりあえず”、だぁ？
ふざけやがって。そんなつまんねえことはどうでもいい！　たったひとつだけ答えろ、魔術師！

てめえはインデックスを助けたくないのかよ！！」

思わぬ方向からの切り返しに、赤髪の青年がたじろぐ。
すかさず、無能力者は言葉を継いだ。

「てめえらずっと待ってたんだろ！　インデックスの記憶を奪わなくても済む、インデックスの敵に回らなくても済む、そんな誰もが笑って誰もが望む、最高なハッピーエンドってやつを！！
今まで待ち焦がれてたんだろ、こんな展開を！　何のためにここまで歯を食いしばってきたんだ！？　てめえのその手で、たったひとりの女の子を助けてみせるって誓ったんじゃねえのかよ！？

お前らだって主人公の方がいいだろう！？　脇役なんかで満足してんじゃねえ！　命を懸けて、たったひとりの女の子を守りてえんじゃねえのかよ！？
だったらそれは全然終わってねえ、始まってすらいねえ！
ちょっとぐらい長いプロローグで、絶望してんじゃねえよ！！

手を伸ばせば届くんだ。いい加減に始めようぜ、魔術師――――！？」

上条当麻の長広舌を遮ったのは、彼自身でも背後の青年でもない。
演説を聞いて顔をうつむけていた聖人でもない。
いつの間にか喉を押さえて苦しがっていた、前方のインデックスその人。

そして、思わぬ方向からわきおこった大笑いだった。

――ハ、ハ、ハ、ハッハッハッハッハッハ！！

――あきらめろ、英人に黒宗！

――どう見てもきさまたちの負けよ！　ハハハハハハハハ！

ねじれ曲がってはいたが、明らかに誰もが聞き覚えあるその声。
その相手に対し、

「何者ですか！？」

ある者は正体を、

「いったいどこから……」

ある者は場所を、

「どうやってここに！？」

ある者は手段を問うた。

そして答えは、最悪の方角から。

――さわぐな、見苦しい

――腹中虫（ふくちゅうむし）から声を出しているだけよ

声は、インデックスから。
正確には、インデックスの方角から、彼女が口を動かすこともないままに出ていた。

「腹中虫!?　まさか、あなたは――」

――黙らんか、見ているこちらが恥を覚える

――さて上条、名演説を途切れさせてすまんが、おれの術はこれまでだ

――こやつの呪術をそらしてやる。あとはうまくやれ

「なんだって!?　加藤、お前加藤だろ!?
いったいインデックスに何したんだよ」

――ゆくぞ

声が途切れた瞬間、インデックスの喉がえずきあげた。苦しみをこらえるように、虹色の瞳が天井を仰ぐ。

上条を狙っていたすさまじい光の濁流が、一気に向きを変えて天空高く撃ちだされ、

「ガボッ」

次の瞬間。

白い粘液とともに、多数の足を持った巨大な芋虫――に似た何かが、インデックスの口から出現した。

白い。生白い。

それが不気味に思えるのは、人の肌色に似ているからだろうか。

そう思えたのも、また一瞬。
いまだインデックスの口から上空へ射出されつづける白い光にまとわりつかれ、芋虫はすぐに白く輝く羽根となって散っていった。

沈黙を破ったのは、やはり上条当麻。
あの芋虫が変化したとしか思えない、輝く羽根を見つめる。

「なんだ……これ」

「これは……『竜王の殺息（ドラゴンブレス）』！？
伝説にある、伝説にある聖ジョージのドラゴンの一撃と同義です！　それにたった一枚でも触れてしまえば――」

だが。

同僚の警告をそこでさえぎり、ルーンの魔術師が咆えた。

「『魔女狩りの王』！　行け、能力者！」

我に返った上条当麻は勇躍した。彼が守るべき、たったひとりの女の子のもとへ。

第十八話補遺　腹中虫（後書き）

注…

『蠱術』

蠱毒（こどく）とも。陰陽師がよくする外道の呪術。

蛇や虫など、動物の霊力を利用した呪いの一種。この術が完成すれば、仕掛けられた相手はほぼ助からないといわれた。

術師は日どりを決めて多くの毒虫や毒蛇を集め、まじないをかけて容器に密封する。虫たちが互いを食い合い、最後に一匹だけ残った虫を相手に届けると、その相手の心身に陰性の気を及ぼし、最悪の場合は即死する。

加藤は“オカルトさん”の知識から、この蠱術が遠隔操作でも使えると知り、インデックスを内側から攻撃することで迎撃呪術を発動させた。

『毒蛇に与える鉄槌』

「魔女に与える鉄槌（Ｍａｌｌｅｖｓ　Ｍａｌｅｆｉｃａｒｖｍ）」より。魔女の存在を論証し、彼らの発見及び証明の手順を説いた本。Ｈ・クラマーおよびＪ・シュプレンガー、１４８７年。

毒蛇はエデンの園でイヴを誘惑した悪魔であると同時に、蠱術ではもっとも強い呪いの形代となる存在。ふたつ合わせて『毒蛇に与える鉄槌』では、東洋蠱術に対する処置法という意味をもつ。

東京にて（前書き）

「そうだ、東京市改造の霊的段階と呼んでもいい。
吉相と霊力に守護された永遠不滅の神都を造りあげるのだ」

――荒俣宏『帝都物語』

東京にて

東京。

膨張を続ける、世界有数の巨大都市。
一国の首都としての立ち位置は、その背後に学園都市という「他国」をつきつけられた現在に至るも、ひとつとして変わっていない。

闇を嫌い、光を求めて、休みなく働きつづける街、東京。
だが、東京にも闇は存在する。
人の業からくる闇ではない、さらに深い闇が。

ここも、その闇のひとつだ。

東京都千代田区、大手町一丁目一番地。
このキリも縁起もいい数字が、緑に覆われた塚に割り当てられた

のは偶然ではない。
そこで、ひとりの男が永い眠りについているからだ。

平安と呼ぶもおこがましい時代、朝廷に叛旗をひるがえし、関東に無何有之里（ユートピア）を築こうとしてその夢なかばで倒れた、悲劇の英雄。
のちに朝敵として記憶の抹消が試みられるも早くから神田明神として神格化され、江戸の総氏神、総鎮守として親しまれた豪傑。
平将門（たいらのまさかど）。

その怒りと無念の魂は、今も怨霊としてこの地にとどまっているという。
禁を犯し睡（ねむ）りを妨げるものたちに祟りを及ぼし、千年の永きにわたって畏れ、敬われてきた東京の守護神、将門。
もはや彼は、東京一円に鎮まる大地霊といってよい。

将門の霊を呼び覚まし、東京を滅亡させようと図るひとりの男がいる。
光と闇のはざまにうごめくその男を、霊たちは

“鬼”

と呼んだ。

鬼が封じられて十七年。
悪夢は、再び甦らんとしていた――

＞i233346―2938＜

最初に気づいたのは、銅像たちだった。

明治維新からあの悲惨な敗戦に至る一連の時代、東京は近代日本の首都としてその発展が図られていた。しかしここで、軍事上のものとは別に“帝都の霊的防衛”政策も、同時に行われていたのである。

たとえば、上野寛永寺の再興。

江戸時代、江戸城の北東――“鬼門”にあたる方向を鎮護するた

めに建立されたこの寺は、上野戦争で荒廃したものの明治になって寺地を縮小の上、同じ役割を与えられた。

たとえば、日本橋の新造。

それまで木造だった日本橋を西洋風の石造建築で掛けなおし、さらに獅子や鳳凰の像をふんだんに置いたこの橋は、日本全国の道路の始点であるとともに、有事の際には敵軍の渡河（とか）や遡上（そじょう）を抑える霊的な防衛拠点でもあった。

たとえば、靖国神社。

“戦争犯罪人の神社”として無理やり有名にされてしまったこの神社は、もともと天皇のために戦死した者たちをまつる神社だ。しかし隠された目的として、戦死者たちの霊魂をここに集め、広く東京に霊的障壁（バリア）を作る意図があった。

そんな「帝都・東京」の霊的防衛にあって一役買ったのが、銅像たちだ。

東洋科学が幅を利かせていた明治期には、風水や地相占術（ちそうせんじゅつ）と言った理論体系も健在だった。そうした理論に基づいて、龍脈（レイライン）や龍穴（パワースポット）の締めきりつけかえ、さらには新しい流路の掘削など、土木工事のように霊的エネルギーを誘導するため、金属・土類でつくられ一般の

目をごまかせる銅像が、地鎮のために多く設置されたのだ。

たとえば、上野公園の西郷隆盛（さいごうたかもり）像。

西南戦争で反乱軍を率いたとはいえ、当時はまだ江戸だった東京の街を戦火から守り、明治政府でも重鎮となったまぎれもない英雄。その彼をかたどった像の役目は、建てられた上野公園がもと戦場、さらには寛永寺の敷地だったという事実からも明らかだ。

たとえば、靖国神社の大村益次郎（おおむらますじろう）像。

明治維新で名軍師として活躍し、明治年間には日本陸軍の基礎を築き、結局暗殺された彼の銅像が靖国神社に建っているのだ。目的は言うまでもない。

たとえば、皇居前広場の楠木正成（くすのきまさしげ）像。

内情はともかく後醍醐（ごだいご）天皇にほとんど献身的に仕え、絶望的な戦闘に挑んで最後は自決するその生涯が“御国の盾”として称賛されたことを考えれば、皇室の無事を祈って銅像が作られるのも無理はない。

たとえば、気象庁前の和気清麻呂（わけのきよまろ）像。

宇佐八幡に参拝して皇位の簒奪（さんだつ）を防いだ英雄であり、平安京造営の第一人者でもある彼の像もまた、楠木正成と同様に天皇を守るため作られている。

“都を造った男”として、東京の霊的安定も期待されているだろう。

彼らはその対象こそ違え、総じて“東京を守る”こと、さらに拡大して“日本を守る”ことを目的に、歴史的人物の虚像を利用して建てられた。

だから――

東京の霊的防衛網を脅かす存在。

そういうものが現れれば、反応するのが当たり前なのだ。

昭和六三年（１９８８年）、国鉄分倍河原駅前に建てられた新田義貞騎馬像は、そうした霊的防衛ラインの前哨としての役割があったといえる。

西に学園都市という巨大な半独立国をかかえることになった東京。その防衛においては、それまでのように幕府や古代蝦夷の怨霊や国外からの物理的・呪術的侵攻にそなえるための北東・南東方面への防衛だけでなく、西方からの侵略にも備えねばならなかった。

侵略は、実際に行われている。

立川の米軍基地跡を利用して造られていた陵すなわち昭和記念公園は、あのいまいましい“壁”で東京から切り離され、学園都市の敷地へとりこまれていた。

学園都市推進派の国会議員たちによって。

こういった事情のため、鎌倉幕府を倒し天皇親政をめざして立ちあがった新田義貞が、東京のとなりにある学園都市、すなわち“君側の奸を討つ”として選ばれたわけだ。

もちろん、表向きには古戦場跡という理由をつけて、内密に。

学園都市の外縁を一周する“壁”にもっとも近いこの新田騎馬像、正確には新田義貞が駆る馬の像が震えだしたのは、その日の深夜のことである。

もちろん、馬だけが異常を感知したわけではない。

新田義貞その人も、馬上で青くさびた銅の目をカッと見開いた。瞳孔に内側から光の筋が通り、まさしく眼光となって一直線に飛びだす。

光は空中でなにかに突き当たったように中天高くへと飛び上がり、そこでひとつの光球を形づくった。丸い光から角のようなものが前につきだし、両脇と後ろの上方から平たい布らしき延長がのびてゆく。

それは、徐々に形を成していった。

金烏。

日本神話に語られ、勝利の象徴として尊崇されているその聖なる鳥をかたどった光は、まさしく自分自身の生存が重要とばかりに東へと風をきった。

知る人ぞ知る一族あげての失敗王・義貞は、しかし今度こそ失策を犯さなかった。

そのために彼の騎馬像は、あえて学園都市に背を向け、東向きに建てられていたのだ。不審な霊気を感じたその瞬間、人の感覚器――すなわち霊力の放出路がほとんど集中する顔面を、東に向けていられるように。

東京の先輩たちに、文字どおり一刻も早く異常を伝えられるように。

新田義貞像は、役目のひとつを果たした。

あとは自分が感じた異常が、どれほどのものか慎重に探ってゆくべきだ。

学園都市から出る気配がないならそれでよし。しかし万一“外”に出て、しかも東京を目指すようならば、彼は自ら動いてでも東京の霊的防衛を支援しなければならない。

そう、彼らは動くこともできる。

西洋に泥人形（ゴーレム）あるように、日本にも物体に霊力を込めることで自律的行動をもたらす術式は存在する。

古代に行われていた人柱の代わりに発達した技術だ。もともと怨霊や霊的侵攻を抑えるためには、銅像自体に霊的な防御でもしなければ、中身がガランドウになっている普通の銅像では持ちこたえられないのだ。

貧乏近代国家・日本の状況が要請した結果と言える。

とはいえ、学園都市でなくとも科学優先の世の中になりつつある現在、銅像を走らせるなどしてあからさまに霊的防衛網を誇示するのはよくない。ついでに言えば、彼ほど偶像として効力のある像は、学園都市周辺にほとんどない。

だから新田像は、相手の出方を待つことにした。

自分は東京を守るのが役目ではない。

東京に危機を知らせるため、ここにいる。

ならば最後まで、危機を背後に感じつつ、分倍河原駅にとどまらねばならない。

しかし彼が伝令を飛ばすまでもなく、東京の夜は大混乱に陥っていた。

花街では長髪の女性ばかりが連続して行方不明となり、彼女らを安い賃金でこき使っていた風俗店の幹部と地域一帯のヤクザが檄を飛ばした。彼らどうしが互いににらみ合いを始めると、血のにおいを嗅ぎつけた得体の知れない者どもがその周囲にむらがった。

そのハイエナたち全員が人だったのかも定かではない。

鉄道はここ一週間というもの、夜間にばかり起きる置き石や線路内立ち入りのせいで、安全確認の頻度が六割がた増すことになった。乗客も急ブレーキが日常的になるとさすがに文句をつけた。

川辺で姿を消す人の数が激増していたことに気づいたのは、とある警察官である。

東京ではなく江戸と呼ばれていたころに栄えていた浅草から隅田川近辺にかけて、吸い寄せられるように川へ向かったのち連絡が取れなくなった、というケースが相次いで起きていたのだ。

問題は、それら行方不明者のほとんどが自殺を思いつくような精神状態とは思われず、また死体が発見されない点にあった。

こうした一連の騒ぎを、地龍（レイライン）を抑え怨霊を鎮める立場にいる東京の銅像たちが察知しないわけもない。
ただ、その騒ぎの出所が掴めていなかった。

なにしろ自分たちが守っている北東・南東方面には異常が見当たらない。
東京から北東をむいた大村益次郎像・和気清麻呂像、東京の北東に立ち上野を守護する西郷隆盛像、そして皇居前から南東をむいた楠木正成像、いずれも敵とよべるものを感知していないのだ。

そして東京の西に、すべての呪術をただ一言のもとに否定し、そう大言するだけの実力を持つ学園都市がある。
狙ったように巨大龍脈（レイライン）を掘りぬいておいて何の反応も示さないほど呪術を知らない学園都市の科学力がある以上、良くも悪くも超常的な何かが、化けの皮をはがされないままで東京に潜入できるわけがない、はずだった。

そうした意味では、新田義貞騎馬像はその役目を十分以上に果たしたことになる。

学園都市が東京に害なす霊体を“飼っている”、と報告したのだから。

方針は決した。

国家による神道政策のせいで複合的な退魔術式が吹き飛ばされ、物質的・精神文化的な侵略によって国民の半数が潜在的な十字教徒につくりかえられ、さらに東京を栄えさせていた地龍の首に杭を打ちこまれるのを黙って見ている時代は終わった。

彼らの得意分野が目の前に名乗りを上げて現れたのだ。全力をもって出迎えに当たらねばならない。

もちろん、彼らは自分たちに伝えられた敵だけが襲来するとは思っていない。

新田像によれば相手は陰陽道と風水に通じているという。なぜそこまで詳しく分かったのか疑問だし、むしろ学園都市側が“本命”から目を反らせようとして、わざわざ小者の霊波を流したのかもしれなかった。

だから、彼らは準備する。

明治政府が世俗国家の衣をまとい、官僚の書類と論文によって大国主（おおくにぬし）の尊厳を地に落としたように。

在野の霊能者が十字教と神道をまぜあわせ、新たな宗教を作ったように。
帝都の霊的防衛を担う、もの言わぬ銅像たちは準備する。

“神殺し”。

日本神話で幾度となく繰り返されてきた日常茶飯事を、彼らは二柱の神に助力を願うことで再現する腹づもりだった。
まず、天皇家の氏神であり、皇居内に八咫鏡という分霊をおく天照大神。
そして天皇制の永続性を象徴する軍神であり、また今も多くの信者をかかえ神仏習合の最たる存在とされる、八幡大菩薩。

どちらも終戦直後、十字教徒と社会主義シンパが入り混じったGHQの政策によって、非常に大きな被害を受けた神といえる。
彼ら天津神（あまつかみ）には、もとをただせば小山（シナイ）の主でありながら世界中に

教会をひろげ、調子に乗って唯一絶対を称するような神に従う気などさらさらない。ましてやその唯一神をあがめ、エイワスなる天使から秘術を授かったと触れまわる十字教系の魔術師、アレイスター＝クロウリーを敵に回すことに、何らの躊躇（ちゅうちょ）を覚えるものではない。

彼が学園都市で魔術を排したから、発達した科学の前では地霊の秘術もかすんでしまうから、これまで積極的攻勢を控えていただけのこと。

しかし今、もはや遠慮する意味も余裕もなくなった。

こうして。

近代日本の先祖が作った銅像たちは、子孫たちの知らぬ間に、戦闘態勢を造りあげようとしていた。

狙うは、科学の街。

学園都市。

第十九話　合同会議

目が覚めた。

なぜ？

オカルトさん知識体系が脳内で警報を鳴らしているが、それだけではない。

記憶しか残っていないはずの“加藤くん”思考回路が、どこからかおれに、いや彼の声を聞き取れるすべてのものに対して、分かりやすいメッセージを呼びかけ続けている。

「何か起きる、気を付けろ」と。

だが、いったい何に気をつけろというのか。

だいたい今は初仕事の翌朝、いや違った。腕時計を見て確認したが、まだ初仕事の日の夜ではないか。

確かに“常在戦場”の心得は大切だ。特に、この言葉を残した上杉謙信よりも不確定な上司の方針につきあわされて、織田信長よりも人権を理解したうえで無視する傾向の強い職場にあっては。

だが正直この日だけはぐっすり寝ていたい、と呑気なキビツ回路が脳内で力ない反発を行っている。

数秒後までは。

ゴォッ、と一瞬の地鳴り。

それだけでキビツ記憶体系が反応し、おれは自分の意志というか筋肉の働きで、わざとベッドから転がり落ちた。そのまま布団をかぶる。

縦揺れはなかった。

小さな箱を指の動きだけで左右に動かすように、小刻みだが大幅に揺さぶられる部屋の中で、おれは布団にくるまったまま、足先や額をあちこちにぶつけ続けていた。

早く終われと、正体不明の地震とも呼べない揺れに対して恨み言をつぶやきながら。

>i21811—2938<

おはようございます、加藤若一（かとうじゃくいち）です。

夜が明けて、次の日の朝。

オカルトさん知識体系の暫定結論が、たまには神道・陰陽道系の呪術も使え、と脳内でメッセージを出してきた。

こっちはそもそも呪術なんか使いたくないんだって。

きのうだって『先生』の運転するバンがどこに行くかと思えば救急科に連れこまれ、気がつくとカエル顔のおっさんがため息をついてこっちを睨んでいた。

おかげで左手小指は常人と変わらない動かし方ができるようになったが、力を入れるなと強く言われた。

どのくらい力を入れたらアウトなのかと聞いてみれば、キーボードをブラインドタッチするときに小指で「A」を押すのがもうダメらしい。

最初から小指使うなって言えよ。

ともあれ、そもそも“伸びる手”だけで天から降ってくる案件を解決していきたいおれとしては、呪術そのものに忌避感というか怖れがある。

その天がおれを呪術戦に巻きこむ気満々なのは知っているが、だからといって能力者であるおれが呪術を使うとき、常に死の危険を思い浮かべなければならないのは変わらない。

連絡係さんから禹歩やドーマンセーマンでごまかせと非公式に指令が来ているが、昨日の戦いでそんなものを先に用意できないのは分かったはずだ。

それとも、生き残りたければ事前に全部準備しておけ、というメッセージなのか。

そうなんだろうな。

チクショウ、土御門家は先祖の薫陶著しいことで。

そうそう。

あの連絡係さん、本当に土御門の名字を持っている可能性が大きくなってきた。

あのあとおれは慌てて、すみません陰陽師といえば土御門なもんで、思わず呼んじまいました、忘れてくださいと謝ったのだが、向こうは好きに呼べばいいと言うばかり。聞きなれない名前で呼ばれた人間に特有の

「はぁ？　なんだそりゃ」

的な反応がカケラも見られなかったのだ。

おまけに、おれに土御門の名前を呼ばせたオカルトさん知識体系はグッジョブみたいな反応を返してきやがるし。

まあ本当に土御門の家系なら、先祖である安倍晴明に恨み骨髄のオカルトさんが彼だけには悪意に満ちた反応ばかりする理由も分かるのだが。

いやもう脳内で論理のこじつけと土御門家の失策の記録がごうごう渦巻いて、けっこう困ってます。チャンスさえあれば、あっちが覚えているかどうかも分からないような千年分の嫌味を一気に放出しかねない。

夢の中のオカルトさんはもっと冷静だったんだがな。

おれの精神構造が彼に引きずられて傲慢に冷たくなってきたように、オカルトさん知識体系の論理構造もおれや加藤くんの思考回路に似てきているんだろうか。

名前といえば、まだおれはビーカーの中の統括理事長の名前を知らない。

しかし、オカルトさんに応えて彼が言った「黒祀祭主（バフォメット）」を名乗っていた魔術師は、オカルトさん知識にある限りではひとりしかいない。

だから今後は、その人の名を取って、ビーカーさんをアレイスター＝クロウリーと呼ぶことにしよう。

十九世紀から二〇世紀初めにかけて活躍したとされている人物だが、魔術が現実に存在する以上は本人が生きてここにいる可能性もあるし、オカルトさんはその前提で話をしていたようだし。

携帯がメール着信を告げたのは、そんなことを考えているときだった。

昼食を済ませたおれは、昼下がりに下宿を出た。加藤くんの体は中学生のはずなのに、大学へ登校する気分を思い出して、他人にばれないように苦笑をひとつ。

ちなみに、おれと初ちゃんは書類上、まだ南沢中学に在籍している。

オカルトがらみの事件はあまり多くないから、何かのドジで手入れが入ったときのことを考えて、おれたちの義務教育だけは終わらせたいという土御門さんの意向らしい。あとで「どんな判断だ」とか言われないようにしなければ。

しかし、ドジを踏んでも助けてくれるのはありがたいが、学園都市ではそんなに呪術師って貴重なのか。

非科学的な人間があまりいないのはわかるけど。

脇道から大通りに出た。

区道三九号線、公式な愛称は「木の葉通り」。

街路樹があるからかどうか知らないが、ずいぶんとまあ頼りない通称をつけたものだ。何ごとにつけ日本の公官庁より洒落っ気が多いと言われている学園都市の当局だが、こうしたところはセンスがあまり変わらない。

さて、この三九号線にはもうひとつ、カッコワライをつけたくなるようなどこかの役人に決められた愛称とは別の通称が存在する。人呼んで「ケンカ通り」。

おもてむき繁華街の大通りだが、一本裏筋に入るとむさくるしい兄ちゃんたちがタバコ片手にたむろしている三九号線の実態を、非常にうまくとらえた通称だと思う。

そのケンカ通りを交差点で右に曲がり、バス停に向かう。

おれが使うのは人気のない系統なので、こういう大通り近辺でないとバスを捕まえられないのだ。

そんな万年赤字路線にも無人バスを使ってくれるのは、学園都市

の技術と財力のおかげだし、その辺は感謝すべきなのだと思うけれども。

二〇分ほどガラ空きのバスに揺られ、第十三学区の北部に入る。支給された電子マネーを清算機にかざして降車し、ぶらぶらと歩く。目的地はおれより加藤くん知識体系の方が詳しいから、おれが歩くときに何かを考える必要はない。

十五分ほどで到着。

加藤くんにとっては思い出すもおぞましい、そしておれにとってはそれなりに懐かしい場所だ。

先進教育局本部ビル。

現在は閉鎖されて機材も何もかも搬出され、昨日もぐりこんだ廃ビルのようにみじめな姿をさらしているそこが、『フラッグ』のミーティング会場に指定されていた。

「ああ、ちょうどよかった。君の方が分かりやすく説明できるだろう」

今回のミーティングに指定されていた部屋の扉を開けた途端、どこか救われたような声でそんなことをのたまった人がいる。
目の前の机にノーパソを置いて、ソファに座った『先生』だ。

彼女は昨日の初仕事でおれの名前を連呼していたが、連絡係さんから

「どうしてお前が『先生』としか呼ばれないのか、よく考えてみろ」

と怒られて以降、おれの名前を口に出さなくなった。
今朝、二重三重の転送によっておれにこのミーティングを知らせるメールを出したときの文面にも、もちろん書いていない。自分たちのことも『フラッグ』と呼ばず、『ウチ』とだけ表現することになった。
『先生』は学習能力は高い人なんだが、いかんせんこれまでと全

く違う常識体系を最初から創るには、まだ時間が足りないようだ。

「ちょうどよかったって、何がですか」

「彼から質問攻めに遭ってね。話が学問的になってきているから、私はどうしても専門用語を使ってしまうんだ」

「『先生』の専門領域なんて、おれに分かるわけないじゃないですか」

「そうでもないと思うけど」

狭い部屋の真ん中に置かれた机を挟んで、木山先生の反対側にパイプいすを持ってきて腰かけた初ちゃんが、そこで口をはさんだ。

一日ぶり、初ちゃん。

仕事がらみの場面で軽口を叩き、それ以外では口もきかない間柄になった――というか“そういう間柄にしてもらった”わけだが、元気してるか？

おれは元気とは言えないね、もちろん。

友人がひとりもいなくなってしまった今となっては、それも当然だろう。今現在、お前とは仕事上の関係なわけだからな。

「どうだかな」

「まあ見てみなって」

初ちゃんが手に持っていた印刷が雑な紙束の一番上だけを抜き出して、机の上をおれの方に滑らせる。

お約束のように紙っぺらは途中で先の方から浮きあがり、空中でくるりと一回転した後で『先生』の方へ滑っていった。

ふたつの溜め息。

「……で、それにはどんなことが書いてあるんだ？」

「『警備員（アンチスキル）』の先進状況救助隊（MAR）とかいう部署から回ってきたペーパーらしいんだけどね。ちょっと見覚えある単語があったから、経験者の知恵を聞きたくて」

「ちょっと待て。ＭＡＲだと？

『警備員』の内部資料が、なんでウチみたいな末端まで回ってくるんだよ」

思わず関係ないところにつっこみを入れてしまった。

しかしこれは実際おかしな話だと思う。公式に設立され、ネットで見つけた根拠条例や管理規則を読めば基本構成がすぐにわかってしまう『警備員』と『フラッグ』などの暗部組織の間に、情報のや

りとりはほとんどない。

「末端って言うけど、ウチの連絡係さんは統括理事長とサシで話せる数少ない人のひとりらしいよ？
それはともかく、これは暗部にかかわる全ての一次・二次組織に出てる通達の附属文書なんだ。今回の事件は表沙汰になってるから、ここに書いてある部分には手を出すなってことみたい」

「事件？」

暗部の食指が動くような事件があったのか？
いや、それにしては色々と静かすぎる。オカルトさん知識体系に従って作っている広域呪符にも、何ら反応は見られない。
この呪符を作る過程で、陣を敷いたり呪言を書いたりするだけなら体も問題ないことが分かった。要するに霊力を自分の体に出し入れするのがいけないんだな。

それはともかく。
事件が表沙汰になったって、

「何の事件だよ？」

「それについては、これからテレビ会議が――もう始まってるじゃんか！
『先生』、お願いします」

ちらりと非難のまなざしを初ちゃんに向けた『先生』が、目の前に置かれたノーパソのエンターキーを面倒臭そうに押す。
部屋の右奥にある小さな液晶テレビの画面が、黒から青へと変わった。

『……について超常現象などと騒ぎ立てる学生が出てこないとも限らんから、あらかじめ釘をさしておく。
これは超常現象ではない。
『乱雑開放（ポルターガイスト）』の原因は、ＲＳＰＫ症候群の同時多発じゃん』

カメラがあるのは屋内らしかった。音響まで考えてあるのだろう部屋に、マイクで増幅された声が染みとおっている。
画面中央上には演壇と青地のスクリーンがあり、そこに

『ポルターガイスト

「ＲＳＰＫ症候群』

と白抜きで大書されていた。その下に書いてある説明らしき文章は、カメラの解像度の問題で読めない。

画面の下半分は、人間の頭とおぼしき小さな円形が大量に揺れていた。彼らがこの会議の参加者というわけか。

聞き覚えのある声が続ける。

『ここから先は、先進状況救助隊のテレスティーナ＝ライフラインさんから、説明してもらおうじゃん』

カメラが寄った。

銀行強盗の翌日、おれに携帯を返してくれた巨乳でポニーテールの『警備員』さんが、スーツに身をかためスクリーンを背にして演壇に立っている。そこへもうひとり、別の女性が演壇の向かって右から歩いてきた。

明るい青のスーツに、赤い木工ドリルのような長髪が特徴的だ。スポットライトで見えにくいが、眼鏡をかけているらしい。

マイクが手渡された。

ボゴン、と鈍い音。

『えー、ただいまご紹介いただきました、先進状況救助隊のライフラインです。
ＲＳＰＫ症候群とは、能力者が一時的に自律を失い、みずからの能力を無自覚に暴走させる状態をさします』

ちらりと初ちゃんが画面から目をそらし、おれに視線を流す。
うなずくおれ。

ＲＳＰＫ症候群、正式名称を反復性・偶発性・念動力・症候群。
この病気は、加藤くんが被害者となった誘爆実験での昏睡状態について弁明するため、おれの持病という設定にされた。

能力が暴走して長く意識を失うというおれたちの症状を説明するためには、ＲＳＰＫ症候群の症例がちょうどよかったのだ。
そのため、おれはＲＳＰＫ症候群がどういう症状を一般にもたらすのか、周囲に嘘をついて被験者覚醒の事実を関係者に知らせないために、かなり勉強している。おかげで初ちゃんも、おれが“自分の”病気について詳しいと考えたわけだ。

そして今のところ、このライフラインという女の説明は間違っていない。

『個々の現象はさまざまですが……これが同時に起きた場合、暴走した能力は互いに融合しあい、一律に『乱雑開放』現象として、発現するというわけです』

また、ちらりと初ちゃんがおれを見る。
おれは首をかしげて保留の合図。
『先生』は眉間にしわをよせている。

『さらに、この『乱雑開放』現象がその規模を拡大した場合、体感的には地震と見分けがつかない状況を呈します。
これが、今回の地震の正体ということになります』

地震？

……そうか。
この『警備員』の会議は、昨日の地震に関する話が議題にあがっていたのか。
しかし、たった一度の地震で『警備員』が会議を起こすことは考えられない。会議するとしたら、こんなのんびりした雰囲気ではありえない。
となると、すでに他の学区で、このタイプの地震が何度も起きていることになる。

初ちゃんの横目。

おれは軽くうなずく。

『ＲＳＰＫ症候群の同時多発の原因については目下調査中ですが、一部の学生の間では、この現象を愚にもつかないオカルトと結びつけ、事実無根の噂を流す傾向が見られます。それによって集団ヒステリーなどが起き、被害が拡大することも考えられます』

初ちゃんが苦笑する。

おれは自分から『先生』に視線を向けたが、反応はない。

『今回、風紀委員（ジャッジメント）の皆さんに集まってもらったのは、そのような噂を学生たちが面白半分で広めないよう、注意を促してもらいたいからです』

なに？

この会議には『風紀委員』も参加しているのか。

どおりで会場がやけに広いと思ったわけだ。

しかし、なんか引っかかる言い方だな。

要約するとこの人、

一、地震は、ＲＳＰＫ症候群の同時多発が原因。
二、同時多発の原因は不明。
三、『風紀委員』は地震に関する流言をおさえろ。

という三つの点について言ってるわけだ。
しかし、それぞれに割かれた説明の分量はかなり違う。

気がつくと、初ちゃんがジト目でこっちを見ていた。
気分を表すために、左目の下を二、三度ヒクつかせてやる。

『このような不可解な現象が起こっているのは事実ですが、その事実を私たちはしっかりと受け止め、原因特定や人心の安定など、今できることをやり続けなければなりません。そのために、私は『警備員』と『風紀委員』の緊密な協力が必要と考えています。
私からは以上です』

マイクを返してもらったポニーテールの警備員さんが、休憩と『風紀委員』メンバーの解散を宣言して、会議は中断された。

液晶テレビが消える。
誰も何も言わなかったが、三人ともだいたい同じことを考えていることは、全員が理解していたと思う。

この地震には、何か裏がある、と。

第二十話の一　Ｍｅｓｓａｇｅ

「なんだ、今のは」

ふてくされたような声を出したのは、『先生』。

おれと初ちゃんは、互いが第一声を出すだろうと踏んでいたので、正直なところ驚きを隠せないでいる。

『先生』は別に怒っているわけではない。激しているわけでもない。

ただ、不満はあるようだ。

「ＲＳＰＫ症状の同時多発だと？

笑わせるな。確かに単発の患者は能力者が集中するこの学園都市で珍しくないが、同時多発現象を起こすほどの患者が一学区の一区画に集中しているとでも言うつもりか？

本気でその程度の認識しかしていないのなら、『警備員』も底が知れる」

訂正。

不満というより軽蔑の念が大きいようですね。

しかし、おれと初ちゃんは別のことで顔を見合わせる。
表沙汰になっているから手を出すなと“上”のお達しがあった事件で、『警備員』は路線を誤ったまま動いている。ということは、統括理事会あるいはその下にいる今回の地震についての担当者は、『警備員』には違う方向へ突き進んでいってほしいことになる。
何のために？

決まっている。
どこかの誰かが、それで得をするからだ。
主にビーカー野郎とか。

だが、どんな得だ？

そこから先へ考えを進める機会は、外からの介入によって失われた。

《ジャク》

久々と言っていい念話もどきに、目を見開いたおれは悪くない。

初ちゃんはそう思っていないらしいが。

《今の発言、元患者としてどう思う？》

《元患者、か。
そういやお前、おれのことゴマカすのに変な病気でっちあげたらしいな》

《ＬＬＰ不安障害は実在する病気だって。
僕も月一で治療薬もらってるし……って、話をそらさないでよ》

嘘でもいいから引っかかってくれよ。
こっちはその件も結構気にしてるんだから。

《で、どう思う？》

《ＲＳＰＫ症状の同時多発がどーだかーだってか？
まあ、『警備員』や『風紀委員』ならまず信じるだろうな》

《……どういう意味？》

《うつ病患者の九割が自殺願望持ってるって言われて、おまえは信じるか？》

《いきなり迫られたら信じないけど、可能性ゼロとも言えない》

《そういうこと。ちなみに今のは完全なデタラメだからな。詳しくは分からないけど、学者先生が言ってるならたぶんそうなんだろう、って考えるには十分な理屈がすぐ作れるんだよ、精神や能力関係の病気は。特に治安当局者は騙されやすい》

初ちゃんが、怪訝そうな目でこっちを見てきた。

『先生』はまだぶつぶつ言っているし、まだ“会話”は続けられる。

《悪いけど、意味が分からない。治安関係者なら能力のことも一般人よりわかってて当然じゃないの？》

《能力や能力者の“常識”についてはその通りだろうけどな。能力疾患に陥るようなやつは適性検査で落とされるから、『風紀委員』にこういう分野の理解者はいないに等しいと思う。『警備員』はそもそも教師の集まりで能力者じゃないから、能力については想像するしかない》

《なるほど》

ここまで現実世界でささやかな独演会を続けていた『先生』が、やっとおれたちの存在を再認識してくれたらしい。
声がかかった。

「君たちは、今の映像についてどう思う？」

＞ｉ２１８１１―２９３８＜

「俗っぽい表現を使えば、“ゲロ以下のにおいがプンプンするぜ”ってとこですね」

ブフッ、と初ちゃんが手で口をおさえて吹きだした。

今の答えはおれ。

“加藤くん記憶体系”からそれっぽいセリフを探してきたんだが、予想外の方面がツボに入ったらしい。

「なに、“こいつは生まれついての悪（ワル）だ”とか思ったわけ？」

「いやそこまでじゃないが。

ともかく、ゲロ以下の臭いってのはおれの正直な気持ちですよ」

つっこみを流しつつ『先生』に答える。

「臭い、というのはどういう意味かね？」

「臭い、怪しい、って意味ですけど」

「言っている内容がおかしいから怪しい、ということか？
それなら、どこがおかしいと思った？」

『先生』がわざわざこっちに顔を向けて、こころなしか前より増えたクマが目立つ眼でおれを見据えた。

わざわざこんな質問するってことは、木山先生がさっき大声で言った文句とは違う点を挙げなきゃならないんだよな。

どうせ違う点しかわからなかったから、いいんだけど。

「簡単に言うと、こういうことです。

あのインフラさんでしたっけ、彼女は最初に『ＲＳＰＫ症候群の同時多発』だかなんだかのメカニズムを詳しく説教することで、聞いている人たちの心をへし折った。

次に、自分たちの仕事だったはずの原因特定についてさらっと流し、さっきのショックで“事件の重大さ”を『風紀委員』たちに叩きこんだ状態で、情報統制を呼びかけている。場の空気的には事実上の命令に近いですよ。

つーか、合同会議でわざわざ言うことでもない。

『風紀委員』には、自分の署名つきで通達を回しておけば済む話

です。アレ、半分以上脅し入ってるでしょ。

……あの女は結局『風紀委員』を抑えに回ったんだと思いますよ。わざわざ根回しして学生を呼びつけて、ＲＳＰＫうんたらの解説までやったのは、お前らはデマの相手だけしてろって言うためだったんじゃないかと。

ついでに、自分のセクトだけで主導権を握ろうとしてますね。事前合意はあったんでしょうが、会議の司会に断りもなく、勝手に『風紀委員』へ事情を説明、呼びかけまでやった。『風紀委員』の役割分担が学区『警備員』全体の総意だとしても、彼女以外の誰かに発表されたくなかったのは確実です。

何か企んでますよ、あの女」

おれの長広舌を、ふたりは真剣に聞いてくれる。

やっぱり、それなりに疑問点があるんだろうな。あのとってつけたような説明には。

「あー、そっちか」

「一応筋は通っているな」

初ちゃんと『先生』の反応はこの通り。
『先生』のおっしゃるように、おれの疑問というより推測は“筋しか通っていない”のが欠点なんですがね。陰謀論がどうやって生まれるのか、よくわかる。
って、そっちか？

「じゃあ初ちゃんはどこが引っかかったんだよ」

「どこもなにも、名前と通信だけど」

「名前と通信？」

聞き返したおれには答えず左手をのばし、机の端で所在なさげに揺れていた紙をつまむ初ちゃん。
あの、暗部に回ってきた書類というやつだ。

「ああ。

あのライフラインって女が隊長やってるＭＡＲ――先進状況救助隊ってのは、高機動装置での緊急救命を実証するために創られた実験部隊みたいな連中で、人命救助の名目で駆動鎧（パワードスーツ）やら救難ヘリやら、いろいろ豪勢なオモチャを持ってる。

まあそれだけで怪しいんだけど、そもそもなんでそんな機械化部隊が、超能力の病気にしゃしゃり出てくるわけ？　ってのが一点」

初ちゃんがスッと右手の人差し指を立てる。

似合ってないが、しゃべる内容が興味深いので黙っていよう。

『先生』もまじめに聞いているし。

「もう一点は、さっきの会議の中継映像。

あれ、別に『先生』がパソコンいじったわけでもないのに、休憩になった瞬間に映像が切れたよね。

つまり、あの映像は僕らが独自に苦労して、監視カメラとかをのっとって得た画像じゃないんだ。中継そのものは公式にやっていて、関係各局にもつながっていた。その回路に僕らが割りこんで盗み見ていただけってこと。

なのに、その関係部局は『風紀委員』と一緒に情報を切られた。

治安維持の観点から『警備員』の会議を中継したくないのは分かる。だけど、それならどうして、合同会議の方は中継したわけ？

しかも“僕らでさえ簡単に映像を取れるような”ザルセキュリティの中継」

これが、二点目。
初ちゃんの声とともに、彼の右手がＶサインを作った。

言われてみれば、確かにそうだ。
『先生』はハッカーと言えるほどそっちの技術があるわけではなく、初ちゃんはもっと悪い。あの映像は、学園都市のどこかへ公的に送られていた公算が強い。
その映像はといえば、肝心なところはインフラ（仮）の独演会。
映像が誰に送られたにせよ、地震の原因はすでに解明されているという“事実”、そして流言蜚語（りゅうげんひご）を抑えたいという意向を示しただけだ。

誰の？
究極的にはインフラ（仮）の意向だろう。政治的にはＭＡＲの。
しかし形式上は学区の『警備員』の総意だ。

「あの地震と関連事項は『警備員』、つーかＭＡＲの管轄だから、お前らは手を出すな、っていうメッセージ？」

あてずっぽうで、口に出してみる。

「だが、それならなおさら、わざわざ合同会議を開いてライブ映像を配信することもないだろう。私たちにさえ附属文書としてペーパーが回ってきているのだから、公的機関には書類を送った方が効果もあるはずだ」

『先生』のつっこみ。

官僚主義に苦労した記憶については腐るほどあるのだろう、実感こもった言い方だ。

だが。

「そこなんです。開く必要がない会議をわざわざやった。

『風紀委員』を呼び集めて合同会議開くとなると、通知から会場のセッティングから、相当な手間と費用がかかるんですよ。紙っぺら一枚で済むものを、そこまでやった理由がなにかあるはずです。

ＲＳＰＫ症候群を使った嘘までついて、あの女は何がしたかったんですかね？」

「それは違うよ、ジャク」

初ちゃんが鼻にずり落ちた眼鏡を人差し指で直して、割り込んできた。

「もともと、今回の地震に関して『警備員』と『風紀委員』の合同会議が予定されていたところに、彼女が乗っかったんじゃないかな。なんたって地震の原因を早々につきとめた功績があるんだし」

「嘘だけどな」

「嘘でもなんでも、事態を進展させたのは彼女だ。主導権は握れる」

「なるほど。
ではなぜ、ライブ中継などという面倒なことをしたのかな？」

最後のは『先生』の発言だ。
もはや三人とも、“ライブ中継が途中で切られた”のではなく“途中まで見せられていた”ことに疑問を抱いていない。

当然だ。『警備員』は学園都市の治安組織、機密事項もあるだろう。
実際に治安が守れているかどうかは別として。

「そりゃやっぱり縄張り宣言じゃないですかね。入ってくんな、って」

「映像でそんなことするより書類の方がいいんだって」

「書類が届かない団体だってあるだろ」

「書類が届かないような団体は、そもそも映像見てないから」

話しあいは次第に、おれと初ちゃんの言いあいの様相を呈してきた。

「そういうやつらのためにも、おれたちはライブ映像まで流したんだから見とけよ常考、とか」

「費用対効果ハンパないことになるよ」

「じゃあ、やっぱり書類が届かないけど映像は見てそうなやつらへのメッセージとか」

「どこにあるんだよそんな公的機関」

「誰が公的機関っつった？

少なくともここにひとつあるだろうが。ペーパーが公式に回って

きてない団体」

「……えっ？」

「えっ」

おれの放言がひとつの理由になって、結論がまとまった。
すなわち、

『一、先進状況救助隊は、学園都市の裏側にも通じている

二、合同会議のライブ中継は、彼らが同業他社に向けたシグナルである

三、その相手に『フラッグ』は含まれていない』

と、いうものだ。

暫定結論が出た後、この件は忘れようと初ちゃんから提案があった。反対者はいない。

また面倒くさいことに首をつっこんでしまったと嘆く彼を見ながら、

「……少々まずいことになってきたな」

と呟いた『先生』の意図を、おれが量りかねて迷っていた、その時。

おれのポケットが、新しく支給された携帯によって小刻みに震えた。

反射的に取り出す。

この新しい携帯の番号を知っている人間は、今おれの目の前にいるふたりと土御門さんだけのはずだ。タッチパネルを兼ねたモニターに表示されるダイヤル名義を見る。

「０９０」で始まる、一般的な携帯電話の番号。

おれは、この携帯にかけてくる可能性がある三人を、すべてアドレス帳に入れている。　名義も秘匿しろと言われたので、それぞれ「ハ１」「ハ２」「ハ３」という名前で登録したのだが、それはどうでもいい。

とにかく、誰とも知れぬ人間から電話がかかってくるなど、ありえないはずなのだ。

はずなのだが、今こうしてその事態は起きている。

思わず顔をあげた。

目の前に初ちゃんの顔。

残像が見えそうな勢いで、首を横に振りはじめた。

了解ですチーフ。

「出ないのか？」

そして空気をぶち壊す『先生』。

「相手がアドレス帳に載ってないもんで」

「そうか」

さすがに『先生』も黙ってくれた。
コール音が十五回鳴り、留守番電話サービスの音声が流れる。
これで切れてくれ、それであんたとのつながりも切れる。互いにとってその方が、あとあと幸せになれるだろうさ。

『ただいま、電話に出ることができません。ピーという発信音の後に』

そこまで電子音声が言った瞬間、
ガガガッと最近のエレクトロニクスにあるまじき雑音が入り、

『か・と・う・さぁ～～～ん?

いらっしゃらないんですの～～～～?』

……おい。

おい待て。

なぜ。

どうして。

よりによって白井黒子（オマエ）が、おれの二代目携帯の番号を知っているんだ！？

第二十話の二　加藤若一、怪力乱神を語らるること

おれは混乱の極みにあった。
なぜ白井黒子（しらいくろこ）が、レベル４の『風紀委員（ジャッジメント）』が、おれに新しく暗部から支給された携帯電話の番号を知っている？
初ちゃん・『先生』・土御門さんの三名以外、教えていないし知るはずもないのに。

これはおれだけで判断できる問題じゃない。音量をマックスにしてスピーカーを部屋の中央に向ける。

目を丸くする『先生』。
目の下が引きつる初ちゃん。
それぞれ妥当な反応だが、そうじゃなくて何か、この状況を突破できる策をくれよ。

『携帯電話を変えられたようですので、申し訳ありませんけれどメ

ーカーの顧客リストにハッキングさせていただきましたの。姉妹会社の携帯電話に取りかえられれば、データは残ってしまいますから』

「な……ん……だと……？」

思わず声が出た。

姉妹メーカーでデータ共有だ？

土御門のバカヤローッッッ！

あんだけ秘匿秘匿とうるさく言っといて、結局身バレの原因はお前がよこした携帯かよクソッたれが！！

『それはともかく、お姉様の能力はご存じでしょう？　今、その携帯電話が発信している“留守番電話サービス”の特殊な電波を逆探知することもできますわ。

わたくしとお姉様がそちらに空間移動（テレポート）するという選択肢もございますが、それがお嫌でしたら今すぐ通話に出られることをお奨めいたしますけれど……』

初ちゃんを見た。
ひきつった顔が頷く。

クソ。
土御門さんには新しい携帯を手配してもらうしかないか。
あっちの失策なんだ、経費は出してもらう。

「……もしもし」

＞ｉ２１８１１―２９３８＜

『あら、やっとつながりましたわね』

「どうでもいいよ、こっちはいい具合に静かだったんだ。用件だけ言ってさっさと切ってくれ。前科者に何の用だ？」

できるだけつっけんどんに言い返す。

八割がた本音なので、難しいことではない。

しかし、俺の先を見通す能力というのは、まだまだ甘すぎるようで。

この時白井さんが何を相談しにわざわざハッキングまでしたのか、その理由を思いつくには至らなかった。

『そんなに怒らないでくださいまし。今回はあなたでなければ解決

しえない問題についてお話したいと思っておりますの』

「ざけんな。あんたの回りには、おれなんかよりずっと頼りになるアドバイザーが何人もいるだろうが。最低限『風紀委員』のお仲間に聞きゃいいだけの話だ。本音を吐け」

『ですから、その『風紀委員』の職務上の問題ですの。この件については、お姉様もほとんど役に立てないと』

「切るぞ」

最初は演技だった劣等感が、本当に刺激されてきた。

初ちゃんが彼女たちに告げたらしい“レベル０コンプレックス”は、確かにおれの中にもある。だが、そうと知ってわざわざ学園都市でたった七人のレベル５たる御坂美琴（みさかみこと）さんの名前を出してきたんだとすれば、愚かの極みだ。

これ以上、この携帯で無駄話はしたくない。

ただ、あっちはそう思っていないようだ。

『お待ちを！　ことはＲＳＰＫ症候群に関わりますの！！』

「……ＲＳＰＫ症候群？

なんで知ってんだ……初ちゃんか？」

言いながら初ちゃんをにらむ。
目をそらすな。発言に責任持てよ。『フラッグ』解散の危機がもう到来したんだぞ。

『そうとも言えますが、今は介旅さんとは関係ありませんの。
ただ、ＲＳＰＫ症候群が同時多発する可能性について、御存じではないかと思いまして。
それが地震に発展する確率も』

おいインフラ（仮）。
どうすんだこれ。
明らかに『風紀委員』の誰かが、さっきの会議を疑ってるぞ。

あの女が蚊帳の外に追いだしたはずの『風紀委員』が、またもや独自の捜査というやつを始めてしまう。特にこいつが所属している一七七支部の独断専行は、シャレにならないほど事態を把握しやがるから始末に負えない。

初ちゃんに視線で援護を求める。
首は横に振られた。
考えてみれば当たり前か。あの会議を見ていないし、インフラ（仮）のことも知らないはずのおれたちが、あの会議を見て考えたこ

とを白井さんに教えられるわけがない。

「地震？　昨日の地震のことか？
なんでそれがＲＳＰＫと関わってくるんだ」

『先進状況救助隊……『警備員』の方によれば、ここ最近の地震はＲＳＰＫ症候群の同時多発が重なって起きているものだそうですの。私たちはその事実を広く学生に知らせる役割をいただいたんですが……ご存じありませんか？』

「同時多発？　いや、知らねえ。
複数の念動力が同時に干渉しあって、ニセの地震が起こることはあるらしいけどな。
だから、五年前に地震が起きたような記録がなければ、おれが知るかぎりＲＳＰＫの症状が同時多発するなんてことはありえない」

『五年前……と申しますと？』

「おれがＲＳＰＫでぶっ倒れた年だよ」

おれは、白井さんが木山学級について何も知らない、と思っていることになっている。だからこういう表現を取らざるを得ない。
実際のところ、“おれ”は何も覚えていないのだが。

『！！　……分かりました。それについて、少し調べてみますわ』

「そりゃよかった。じゃあ切るぜ」

『ご協力ありがとうございます』

おれは皆まで聞かず、終話ボタンを押して机の上に放り出した。
何年ぶりかで使うスティック型の携帯が、紙の直上で止まる。

「……初ちゃん、あそこの連中の勘はどうなってんだ？」

「僕が聞きたい」

「それはともかく、さっきの対応はまずかったな」

珍しく、先生からダメ出しが入った。
どういうことだ？

「あの電話に出ていた彼女は、私が参加させられた実験のことをあらましだけでも聞いている。あのような回答をすれば、もうひとつの可能性に彼女が気づくのはすぐだろう」

「もうひとつの可能性？」

「人工的にＲＳＰＫ症状の同時多発を引きおこす技術がある、という可能性だ」

そんなばかな。

と、おれは表情を全面的に変える。

「そんな技術あるわけないでしょう」

「人工的に能力を暴走させる技術はあったのだ。頭から否定してかかるものではない」

「だとしても、なぜそれがまずいんです？」

横から盛大なため息が聞こえた。

「なんだよ初ちゃん」

「あのさ、僕が自分で蒸し返すのもなんだけど。

さっきの結論で、ＭＡＲは暗部ともつながってて、そのＭＡＲが同じ暗部へ“この件には手を出すな”ってシグナルを送ってる、ってことになってただろ？

ジャクのやったことは、『風紀委員』をけしかけてＭＡＲが独占したいＲＳＰＫ症候群の分野に手をつっこませる、立派な妨害工作になりえるんだよ」

妨害工作とは心外な。

おれはフォローを入れたつもりだったのに。

なにしろＲＳＰＫ症候群といえばそれらしく聞こえるが、要は能力の暴走だ。

そして、この人口２３０万人の学園都市の中で、今なお恒常的に能力が暴走しつづけている人間を、おれ――というより“加藤くん”は九人だけ知っている。

そしてさきほど『先生』が口走ったように、人為的にＲＳＰＫ症状を引き起こす技術は存在する。加藤くんたちが白い粉を投与されたアレだ。

となれば、あの九人または似たような境遇の『置き去り（チャイルドエラー）』たちに何らかの能力場的干渉を与えて、地震を起こすこともできるはずだ。白い粉を知らない初ちゃんの手前さっきは否定したが、それだけの技術が学園都市にないとは言い切れない。

さらに言えば、おれが想像できる範囲内でそういうことをやりそうなのが、統括理事長傘下の暗部組織、つまりおれたちの同業他社で、次点が初ちゃん言うところの“いろいろ豪勢なオモチャを持ってる”ＭＡＲ、先進状況救助隊ということになる。

「妨害工作もなにも、公式なペーパーのコピーが回ってきたってことは、ＭＡＲがやる予定の後ろ暗いプランが統括理事会ぐらいのレベルで承認、じゃなきゃ黙認されてるってことだろ？　だったらおれたちも、一応はその線で動いとかないと。

とりあえず『風紀委員』にはあの実験の被害者に目を向けてもらって、ＭＡＲを側面援護したかっただけなんだけどな」

一七七支部の運と実力をもってすれば、あの九人について何かしら動くだろうし、そこから実験へと“公式に”たどり着いてくれるかも……

あ。

まずい。

俺が目覚めたとき、他の九人と一緒に寝ていた。
どこで？
どこかはともかく『先生』のアジトで、だ。
実験についてまでならともかく、あの部屋までたどり着かれるのは非常にまずい。
正義感の強いミサカとゆかいな仲間たちのことだ。九人の同級生を見つけたら、絶対に公的な保護とか言いはじめるだろう。公的保護なんか受けたら、“投薬ミス”で二、三日のうちに死ぬのは確実だ。
ぐわあ、脳内の加藤くん記憶体系から猛烈な非難が来てるぞ。
そんなおれ（と、たぶん『先生』）の葛藤を完全に無視して、初ちゃんが言いつのる。
「側面援護って言うけど、あの白井って子がいる支部は、『風紀委員』の中でも断トツの捜査力と命令無視の回数を誇ってるんだよ？正直、彼女たちには何の情報も与えるべきじゃなかった」

「じゃあどうしろってんだ。
この情報通信ネットワークが無駄に発達した学園都市で、自分がかかった病気について情報サイトで調べたり、コミュニティで情報交換しない方がおかしいだろ。ひとつぐらいヒント与えてちょうどいいんじゃないのか？」

「それなら前半だけにすればよかったのに」

「こっちはただでさえ隠し事もってると思われてるんだ。多少は正直なフリしたっていいだろ」

だが、おれのせいで九人のクラスメイトは危険にさらされてしまったわけだし。
どういう論理で関連づけと調査をやってるのかは分からないが、その可能性はこれから先、つねに保たれるわけだ。
やべえ、罪悪感で頭が痛い。

「……でも実際、物理的干渉なしにＲＳＰＫの同時多発なんて、ありえるんでしょうか」

おれは救いをもう一方に求めた。

求めるべきではなかったかもしれないが。

答えたのは、イツタコリウクィのように冷たい声。

「ありえるな。

それこそあの九人のように無意識下にある状態で能力が発動したとき、なんらかの干渉によって能力場が融合し、ＲＳＰＫ症状となることはじゅうぶんに考えられる。

これが昔『乱雑開放』現象と呼ばれていた、という点では、あの説明は正しい」

「その“なんらかの干渉”について、詳しく」

「能力の種類にもよるが、たとえば意識不明の高レベル精神感応能力者（テレパス）が覚醒するとき、不快の念を周囲にばらまいたとしたら、その念を受けとった能力者たちにＲＳＰＫ症状が出ないとは言い切れない」

「なるほど。

個々のＡＩＭ拡散力場に他の能力者から干渉があれば、ＲＳＰＫ症候群になるかもしれないってことですね」

「必ずしも能力者からの干渉である必要はない。

たとえば、開発が進んでいるときく対能力防護音響装置（キャパシティダウン）のような物にしても、場合によっては対象のレベルより大きな能力暴走の引き金となりうる」

「どういうことですか？」

「私が聞いていた話では、あの装置はＡＩＭ拡散力場を振動させる域の音響を発して、高能力者ほど激しく耳障りな音を感じさせるようなものだそうだ。

本当かどうかは分からないが、もしそうだとしたら高能力者ほど音を敏感に聞きとり、そのせいで演算が難しくなることになる。

しかし逆に、装置によって演算能力を低下させられたことで、かえって周囲を無差別に攻撃するような暴走が起きないとも限らない。

この暴走が干渉となって、ＲＳＰＫ症状が同時多発することも考えられる」

さっきから機密をペラペラしゃべっている『先生』と、良き生徒役を務める初ちゃんにうんざりしながら、おれは二日前のミーティング後に壁へ書きなぐった五芒星をぼんやり見ていた。

中心の逆五角形の中に、人間の目のマークが書き加えられている。

……寝ていいかな。

今日の議題はもう終わったみたいだし。

土御門さんには、また今度文句を言おう。

知らないところから着信があったから、向こうから文句の電話がくる可能性はあるが、その時はこちらから文句を言ってやればいい。

ちょっとだけ寝よう。

実際にはそんなことを思うヒマもなく眠りに落ち、あとで初ちゃんに起こされ散々嫌味を言われることになったのは、はなはだ余談である。

第二十話の二　加藤若一、怪力乱神を語らること（後書き）

書きため予約分終了。

【重要なお知らせ】

更新再開しました。

第二十一話の一　同級生（前書き）

更新遅れて申し訳ありません。
今回は容量少ないですが、ご笑覧ください。

第二十一話の一　同級生

翌日。
朝一番で土御門さんに身バレの件で文句をつけると、かなり不機嫌になりながらも三代目の携帯を回してくれることになった。
やったね。

どうも、加藤若一（かとうじゃくいち）です。

その八時間後に、また問題の相手から電話がかかってきた。
自室（もちろん暗部に用意された隠れ家（セーフハウス）のひとつで、現在引っ越し中）に空間移動（テレポート）されてはたまらないので、早めに出ることにする。

今日の昼にまた起きた地震で本棚その他が崩れて足の踏み場がなくなった仮の我が家を見ながら、通話ボタンを押す。
前回とは違って背後にごうごうと、バスか何かが移動しているような音がしていた。

「今度は何だよ」

『ご機嫌よろしゅう、加藤さん。
突然ですが、枝先絆理（えださきばんり）さんという方をご存知ですか？』

思わず、どっからそんな名前引っぱりだしてきたとつっこみたくなった。

＞ｉ２１８１１―２９３８＜

枝先絆理。
木山学級での出席番号は二番。三番がおれだ。
前に“おれ”が、この世界の命名法について考えるとき例に持ち出したように、とにかく会えば忘れない、印象が深く刻みつけられるような子だった。
らしい。
少なくとも、加藤くんの記憶ではそうだ。
子供には少し大きい気もする、彼女の黄色いカチューシャのせいだろうというキビツ系思考回路の反論は、一発で却下された。
能力は、たしか念話能力（テレパシー）。
本人が誇らしげに自分のことを念話能力者（テレパス）だと言っていたし、間違いない。
というか、木山学級でも都合のいい時だけ共犯者、普段は笑いもの扱いだった加藤くんがこれほど彼女のことを覚えているのだから、かなり面倒見のいい子だったようだ。

実験の犠牲にならなければ、今ごろはちょっと鼻っ柱が強いけれどみんなに慕われる、感じのいい女子中学生になっていただろう。

で。

そんな彼女に、白井さんは何をしようというのだ？

おれから彼女への呼び方が“白井黒子”に変わるような内容だと面倒なので、それだけはあってほしくないのだが。

「まあ、知ってるというか覚えてるというか。彼女にはずいぶんお世話になったよ。

今度は人のプライバシー侵害まで始めたか？」

『お世話に、とは……いったいどこで？』

「自分に都合悪いとこはスルーかよ。

まあいいや、ＲＳＰＫつながりに決まってんじゃねえか。こう言えばわかるだろ？」

最後に余計なひと言をつけくわえ、おれが「彼女も木山学級について知っていることを知っている」事実について示唆しておく。
彼女ならすぐに気づいてくれるだろう。

『……彼女も、ＲＳＰＫ症候群の患者さんですの？』

次の声が返ってきたとき、通話口の後方で「白井さん！　いいかげんに――」などと、甘ったるい声がした。
やっぱり周りに誰かいたか。今のは花飾りの初春さんかな。

しかし、白井さんは何を目的にこんな質問をしているんだ？
こう何度も、『風紀委員』でも何かの公式な機関の研究者でもない自分に電話で質問をしてくることも不思議だが、こちらから何か聞くのは守秘義務に触れるだろう。
つまりこっちは釈放者という罪悪感もあいまって、彼女にできるかぎり正直に答えねばならないという心理が（他にどんな理由もなければ）働くわけだが。

それを計算に入れたとして、おれから価値ある情報を引きだせると考えた理由はどこにあるんだ？
彼女たちの中でおれだけが頼りになる情報源のジャンルといえば、やっぱりＲＳＰＫ症候群ということになるが、『警備員』が首をつっこんできた今はそっちに頼るのが普通だ。今この時点でおれに何か言わせて、得は少ない。

それとも、『警備員』に言えるレベルではない不確定情報の補強ということか？
だとしても地震と枝先さんに、なんの因果関係がある？

「患者だからおれと知り合いなんだろうが。それがどうした？彼女のパーソナルについて教えろなんて言われても困るぜ。ここ三年間会ってないんだから」

『それはこちらで調査済みですの。加藤さんにお聞きしたいのは、枝先さんとどのようにお知り合いになられたか、という点についてですの』

このアマ知ってて聞いてやがる。
『先生』が片手間に作ったバックストーリーでうまくだまされてくれるわけがないし、少しアレンジも加えるか。

「院内学級ってやつだよ。
この病気は治りが遅い――というか何をもって治癒とするのか不明瞭で入院が長くなるから、どうしたって学校の勉強についていけなくなる。それなら入院中に、相当する部分を勉強しとけばいいってわけだ。
同じ病気の同じ学年、同じ『置き去り（チャイルドエラー）』。知り合いになっても罰は当たらないだろ」

『なるほど、そういうことですの。
では彼女の能力『精神感応』について、なにか御存知ですか？
特定の相手に強い影響を与えるとか――』

なんだ、それは？
特定の相手に強い影響をあたえる『精神感応』？　なんでまた、
そんなニッチなもんを調べようと思ったんだこの人は。
それが地震やＲＳＰＫ症候群につながるというのか？

ふと、きのうの『先生』の言葉がよみがえる。

『たとえば意識不明の高レベル精神感応（テレパス）能力者が覚醒するとき、不
快の念を周囲にばらまいたとしたら――』

ＲＳＰＫ症状の同時多発が起きるかもしれない、それが地震にな

るかもしれない。
そんな話だったはずだ。

そして彼女が数秒で考えついたことなら、専門家が二時間ほど考えれば誰でも思いつくだろう。
事件に関して病理学者が考えついたことは、その学者がＭＡＲ所属でないかぎりはすべて『警備員』に伝わるし、情報のカケラぐらいは『風紀委員』にも伝わるだろう。神がかりの一七七支部メンツが、そこから全体像を組み上げるのはたやすい。

だとするならば。
白井さんは枝先さんが、

いや、違う。

彼女と彼女のかたわらで今も昏睡している加藤くんの“同級生”残り八人が、地震を引き起こした張本人とみているわけか？

「……だったらどうなんだ。犯罪に走る可能性が高いからって、予防拘禁でもするか？
笑えるな。まさに学園都市の司法（ジャッジメント）ってわけだ」

『加藤さん？』

「あんた、おれがどういう十四年間送ってきたか知ってるんだろ？だったらおれが何も言わなくても、その問題についちゃ解決できるはずなんだけどな。ずっと思ってたけど、電話かけてくるタイミングが怪しすぎるんだよ。
あんたは頭いいから、もう腹ん中ではこれからどうするか決めてるんだろ。要するに、おれの“同級生”が地震を起こしてるって、そう思ってるんだろ？」

『それは――』

「いいかよく聞け。
どっから枝先さんの話を聞いてきたかは知らねえけどな、ＲＳＰＫ症候群の患者なんてのは彼女以外にも腐るほどいるんだ。
ろくに探してもいないし見つかるあてもない相手を疑う以外に、『風紀委員』ができることなんて大量にあるだろ。夢を見るのはそのあとじゃねえのか。

ついでに言っとくと、もし枝先さんが本当になにか関わってたとしても、おれは全力で擁護するからな。彼女はおれの本当に数少ない友達のひとりで、ついでに言うなら片手で数えられる恩人のひとりで、もっと言えば今もまだ目覚めてない実験被害者のひとりなんだから、当然の判断と思ってほしいね。

理解してくれるとうれしいんだけどな。情に流されやすい衝動犯なんかに情報を求めるから、こういうことになるんだよ。

以上、終わり、だ。クソが」

加藤くんに憑りついてから初めて、加藤くん自身による咽喉（のど）の奪還を自覚しつつ、おれは声に合わない丁寧さで終話ボタンをきっちりと押した。

捜査をミスリードしながら同級生の情報を与えないというのも、なかなか難しい。

我ながらやり方がバカだとは思うが、オカルトさん論理体系もこの発言を支持したからこそだ。

ちゃんと理由はある。

どうせ枝先さんの同級生であるおれの発言を白井さんが最後まで信用するとは思えないし、いずれこの件で血眼になった御坂さんあたりが電話交換施設にハッキングして、初ちゃんの新しい携帯番号をバラしてしまうだろう。

そうなれば、彼が同じことについて冷静に答えることになるのは明白、というわけだ。

まあ、たぶん初ちゃんは“確かにありうる。いや絶対そうだ”とか適当に答えて、『風紀委員』の捜査を引っかきまわそうとするのだろうが。

これまで表に出てこなかった加藤くん意識系の影響なのかは分からないが、なんとなくいらついてきたおれは少し外へ出ることにした。

いまだにカツアゲされる危険はじゅうぶん残っているのだが、そんなことを言っていると買い物もできやしない。特にそろそろ冷蔵庫が電源を切ってもいい状態になりつつあるので、まとめ買いしておく必要がある。

本当に久しぶりに、全電動自転車（サイクル）のペダルを漕いでモーターに活を入れる。

多少モーターが呟いているのは、メンテ不足だから仕方ない。

暗部に入るとかなりの給料がもらえるというし、今日は特売よりも安全性を考慮して、普通の自転車程度のスピードで行くとしよう。

そんなことを考えようとしても、すぐに考えが別の方へ、より正確に言えば元の方へと戻ってしまう。

加藤くん記憶体系の干渉が、ここにきて出てきたのか。

それにしても『幻想御手（レベルアッパー）』で出てこずに枝先さん関係で干渉が出るとは、ひょっとして初恋というやつなのか？

……などという現実逃避すらきっぱり無視して、加藤くん記憶体系は今までおれが見たこともなかったような木山学級の風景を、次々と脳内に映し出してゆく。

危険だっつーの。

そんなぼんやりした状態のおれを、身バレした携帯に届いた一通のメールが一気に氷点下へ叩き落とした。

第二十一話の一　同級生（後書き）

作者的にはリハビリ回。
本来ひとつだった第二十一話のワンシーンだけを分割しております。

第二十一話の二　木山春生の保釈（前書き）

どうやら更新休止中に６０万ＰＶ・６万ユニークアクセスを突破していたようで、まことにありがとうございます。
物語はすでに折りかえしておりますが、これからも精進を続けていきたいと思います。
それでは、第二十一話本編をどうぞ。

第二十一話の二　木山春生の保釈

あわてて綿パンのポケットから携帯を取りだし、画面に光る文字を確認する。

差出人名は「ハ１」。

『先生』だ。

赤信号まで走って、携帯を右手に持ちかえる。

内容は恐らく次のミーティングだろうなどと甘いことを考えていたおれは、いつもなら淡々と時間・場所が記されているだけのメールの文面を見て、血の気が引いた。

『不測の事態。

すぐに集合』

メールを打つときは、検閲を考えてそれなりの暗号を使うことにしている。

『フラッグ』のことを“ウチ”と呼ぶのにはじまって、他の暗部

組織を“クラス”、土御門さんを“委員長”などかわいいものばかりだが、今回のメールにはそういう単語類が何も含まれていない。ただ単純に、文面通り文字通りの意味でしかないメールだ。

そして、それが問題になる。

あの『先生』がこんないい加減なメールを、たとえ機密保持のためだとしても打ったというのは、おれにとって結構なショックなのだ。

もちろん暗部の構成員的にも、これを捨て置くわけにはいかない。彼女がおれに連絡を回したということは、当然ながら上部組織に位置する土御門さんや一応はわれらがリーダーである初ちゃんに、すでに連絡済みということでもある。無視はできない。

おれはサイクルのハンドルを切り、西へ向かった。

晩飯はコンビニだな。

＞i218112938＜

「保釈されることになった」

おれを迎えた『先生』の第一声がそれだった。

……すみませんちょっと言ってる意味が分からないんですが。

どういうことだ？

『加藤も来たし、これで全員かにゃー？』

あ、土御門さんもいたんですね。

そう思って見わたした室内には三人しかおらず、『先生』に支給された携帯電話のキーボードライトが点灯して、机の上で存在を主張しているだけだった。

電話会議とは、また古風な。

「そうだな。これでそろった」

『先生』の返事。

じゃー始めるぜい、とお気楽に前置きだけ言ってから、土御門さんの声が変わった。

正直に言って、土御門さんも状況はよく掴めていないらしい。

ただ、暗部の仕事をしていても『先生』はとりあえず犯罪容疑者であり、書類の上では彼女が提案した（ことになっている）司法取引に応じるかどうかを『警備員』が決定するまでは身柄を拘束――逮捕されていることになっていた。

だから彼女の行き先は、要観察者あつかいで公式な尾行者を従え

て日常に復帰するか、または本格的に刑務所か、という二択だったはずだ。

土御門さんも、この要観察者という線でまとめようと工作していたらしい。

保護観察処分で『先生』を『警備員』の（そしてもちろん暗部の）監視下に置きつつ、本人には後方支援の形で仕事をさせるつもりだったのだろう。あるいは、まだ彼は刑務所送りになった人間を脱獄させて、そのまま自分の保護下におけるほどの権力はないのかもしれない。

だが。

結論は恐るべき方向に飛んだ。

木山春生（きやまはるみ）の「保釈」。

執行猶予も観察もない、裁判どころか尋問すらない、まったくの政治判断と言える荒技を誰かが使ったのだ。

誰かが。

そこも問題のひとつ。

なんだかんだいって暗部の奥深く、首までどころかシュノーケルをつけてようやく呼吸できるレベルまで浸かっている土御門さんが、少なくともこの短期間で問題の相手の名前を突き止められなかった

という事実そのものが、こっちには不気味だ。

そして、保釈と同時に第七学区の某病院（これも名前は突き止められなかったらしい）から、木山春生なる研究者に院内の某医師（同上。ここまでくると明らかに土御門さんが嘘ついて隠しているんだろうが、さすがにつっこまない）が『能力の暴走状態についての共同研究』を求めているので、可及的速やかに当人に照会されたい、との連絡が入った。

“上”から。

要するに文書だけではどこの誰かもわからない人間が、私的に公式なルートで木山先生を求めているのだ。

こっちも『先生』がいないと困るというのに、そのあたりの事情はまったく無視して。

だが、相手は土御門さんの“上”に文句を言える立場だ。

つまるところ、統括理事長とサシで話せるレベルの人間ということになる。

そんな人間が、いったいどれだけいることか。

名目上は統括理事長の直属になっている“だけ”の暗部組織と、メンバーや連絡係たちが統括理事長にお目通りできる暗部組織は、表面上扱いが同じでも情報力やいざという時に無理押しできる幅に相当の開きがある。そのうえ学園都市の表面で日の光を浴びている人間ともなれば、かなり限られてくるはずだ。

そんな超大物が、木山先生を引き抜きにかかっているのだ。
実際に彼女がＯＫを出せば、ひょっとすると出さなくても相手がその気になれば今すぐに引き抜けるのだろうし、そのとき木山先生に降りかかる暗部の報復攻撃もかわせる、または抑え込めるだけの実力を持った相手と見ていい。

ま、それはそれとして。
一番の疑問点は、

「……で、なんでそれをわざわざ、僕たちに言ってくれるんですか？」

初ちゃんの言ったその点にある。

権力者ではないとか生意気なことを考えてみたものの、なんだかんだ言っておれたちの社会的生命どころか物理的生命まで、土御門さんに握られているのは間違いない。
そもそも彼の上から来た話なんだから、その場で握りつぶして知らん顔していればどうとでもなるのに――

「同じ連絡が、私の携帯電話に直接メールで来たものでね。どういうことだと彼に問い合わせたら、全員を集めて説明すると言われたんだ」

「……先生の携帯に？」

……おい。

おい。

『フラッグ』の電子機器の管理はどうなってるんだ？そういうのをやれと言われていない以上、上層部が管理することになっているはずだが、その辺どうなんですか電話の向こうの土御門さん。

「……土御門さん、おれの携帯にしてもそうですけど。おれたちに自前で電子防護とか期待されても無理なんですからね？」

『悪い』

素直に謝る土御門さん。これで終わってくれれば文句ないのだが、

『でもま、加藤の場合は相手が悪かったにゃー。
恐らくその白井とかいう『風紀委員』、第七学区の『風紀委員』活動支部で名の知れた『守護神（ゴールキーパー）』を味方につけてたぜい。じゃなきゃ、姉妹メーカーとはいえ情報共有化されたスペースなんてものは、まず見つけられるもんじゃない』

だいたいこういう風に事情説明という名のいいわけが入るのだ。
何なんだ『守護神』って。初春さんも一見して相当の使い手（パソコンの）だったが、あれ以上がいるのか。

よく考えてみれば、自分の能力を見せつけるわけでもなく運動も苦手そうな初春さんが『風紀委員』になったんだから、それなりのスキルがあって当たり前なんだよな。
やっぱりああいう特殊スキルがないと、低レベル能力者は『風紀委員』になれないのかねえ。
おれはレベル3だけど、その能力を使う機会がここんとこまるでない。

で。

「それで、どうするんですか？　わざわざ全員集めてこんなこと話すってことは、あなたが却下して終わり、じゃないんでしょ？」

もしそうだったらタダじゃ済まさんぞと声音で語る初ちゃん。
こいつも何か用事あったのかな。

「センセーに本人から連絡があった以上、情報はいつでもお前や加藤に伝えられる。そうなってからしぶしぶ認めても、どうしようもないからにゃー」

なるほど。

土御門さんは三人だけで『先生』の脱退を決められたくなかったと。

そりゃそうだ。おれたちに押しつける仕事のレベルも変わってくるし。

「それに、センセー本人は乗り気だぜい」

あれ？

土御門さん、まさか許可（ゴーサイン）出す気ですか？

「当然だ。

私が居心地のいい『警備員』の留置所よりこちらを選んだのは、君たちの無礼きわまる要求あってのことだからな。今と将来の私にとってよりよい条件を、君たちより影響力の大きい誰かが保証してくれると言うなら、喜んで飛びつくさ」

今のが『先生』の言い分。

ええまあ、みなさん先刻ご承知のこととは思いますが一応。

この人は、本人いわく“必ず救うことができる”人質となったおれの同級生九人のために、暗部入りを了承したのだ。

恐らく初ちゃんの上司、もしかすると土御門さんは、『先生』の決断次第で九人の生命維持装置は外されることになる、とでも脅したのだろう。自分より彼らの命を大事にしている節のある『先生』にとっては、文字通りの殺し文句になりうる。

『先生』によると——というか、どこからか彼女が入手してきた資料によると（今回の引き抜きに関してわざと流された情報の可能性もあるが）、おれたちが投与された白い粉は能力体結晶というもので、暴走能力者から取り出された神経伝達物質や各種ホルモンを調合したものらしい。

その最初期の結晶は化学式をデータ化されており、その周囲に与える影響はオフィスＰＣでも試算できるという。だから、とにかくその最初期の結晶データさえ手に入れば、同級生たちを眠りながら暴走能力者にしている呪縛を解くためのワクチンソフトも作成可能というわけだ。

こういう資料は非公式　非合法な実験の結果なわけで、それをたやすく手に入れられる環境という意味では、暗部の方が条件はいいみたいですね。

……唯一の生き残りである“おれ”が“加藤くん”の意識を乗っ

取り、ついでにオカルトさんという余分なものまで目覚めさせてしまったことを思えば、その現状にもいささか異論を唱えたくなるのだが。

しかし、今『風紀委員』の手が枝先さんに伸びていることを考えると、ここで疑いなく賛同すべきなのかどうかは思案のしどころになってくる。

だから、

「君はどう思う？」

そうまっすぐ見つめられても困るんです、いろいろと。

『センセー。ちょっと聞きたいことがあるんだけどにゃー』

おれより先に、土御門さんが不気味な声を出した。

表面上は快活だが、意味するところは冷たいのだと端々に出ている声。

案の定、声は

『お前、正気か？』

すぐにその色を変えた。

これに対する疲れた瞳は、従前のまま動かない。

「正気だとも。

もともと暗部と呼ばれる地位に堕ちるにあたって、子供たちの生命についての保証……というよりも生殺与奪を握った宣告かな？ともかくそういうシグナルがなければ、私はきょう晴れ晴れと『警備員』の庁舎から外へ出ていたことだろう。

それ以上の待遇を、人の生き死にに関わる副業もなしに、やらせてくれるというのだ。中世人なら相手は悪魔だと言うかもしれないが、子供たち九人と引きかえになるのが私の魂ひとつなら、それこそ安い買い物だ」

『裏切り者の魂は高くつくぞ』

「この話は君よりも上から降りてきたのだろう？　暗部のことはよく知らないが、誰かに話を一方的に押し付けられるだけの有力者なら、私どころか子供たちとここにいるふたりも同時に保護するだけの権力を持っているはずだ。

そしてその事は君もよく知っている。そうでなければ、連絡係も含めて問題を討議するなどという今のこの異常事態に発展するはずがあるまい。

たとえ私が原因でこの『フラッグ』が崩壊しようとも、この問題に関して君は私に干渉できないのだよ。

それが嫌なら、子供たちについてもっと良い条件を出してくれればいいだけだ。

今のままでは十人目の彼がいたころの設備にも劣る。せめて生命維持装置が固定された有蓋ベッド九個と、二二〇ボルト三〇アンペアの電源装置三個は絶対に必要だな」

いきなり具体的に飛びだした『先生』の発言を、おれと初ちゃん、そして土御門さんがそれぞれ無言で考える。

考えて。

『……要するにセンセーは、正気だけど本気じゃない、ってことか

にゃー？』

若干呆れ気味の土御門さんが確認を取り、

「ノーコメントだ」

おれたちふたりが同時に、まじめくさった『先生』の表情を見て吹きだしたのは、はなはだ余談である。

第二十二話　再会

毎度お世話になっております、加藤若一（かとうじゃくいち）です。
状況を手っとり早く説明しておきたい。

要するに、『先生』には共同研究の要請に応じるつもりなど、最初からなかったのだ。

移籍できる場所があって、そこは今の定位置よりも魅力的であり、自分に直接オファーが来ていて法的には自由になった今は断る理由がないと言いつのる。自分をとどめおかせたければまず設備の充実を、というわけだ。

言いかえれば“辞める辞める詐欺”。

そのあと『先生』が土御門さんに要求した条件には、

『一、以下の諸条件および追加事項を双方とも確実に履行すること

（約束は守れ）

二、『フラッグ』構成員の「与えられた敵」以外からの殺傷に対する十分な補償

（内ゲバの責任は上が取れ）

三、同構成員の平時における身体と精神の安全（おれたちを実験に使うな）』

という三本を軸に、実に細かい福利厚生条件までくわえられていった。

驚くべきは、その七割を丸呑みした（三本の基本方針は全部通った）土御門さんと、彼にそこまでさせる状況を造りあげた某病院の某医師の能力だろう。

もっとも、そこまでできる人なら元からこういう可能性まで計算して、強引な保釈要求と“共同研究”の連絡を取っていた可能性もある。

だいたい土御門さんより大きな権力を持っているのなら、最初から事前通知などせずに『先生』をかっさらうべきところ、わざわざ『先生』に考える余地を与えているところがまず怪しい。おれたちの労働争議を見越した、もとから期待していない要請とも思いたくなる。

そもそも『先生』は、その共同研究の相手からして信用していない口ぶりだった。

おおかたどこかのマッドサイエンティスト、おれをかっさらおうとした科学者Ａのような連中のひとりなのだろう。コネとカネとい

うのは、だいたい汚い奴の周りに集まるものなのだから。
たとえ土御門さんを黙らせることができる大物でも、頼ってみれば実は性格が悪いクソ野郎でした、では話にならない。権力をフル活用してありもしない餌を撒いてみました、という可能性だってあることだし。

もちろんカエルの顔をした小児科医（どうも、総合診療を受け持っていたらしいが）が木山先生を救おうと奮闘してくれた結果なのかもしれない、などと夢を見たこともあるが、常識的に考えてその説は却下した。これは『先生』も同様だそうだ。

ともあれ、外部からの引き抜きをダシに使ったおれたち（正確には『先生』）の第一回労働闘争は、かくして華々しい勝利を収めた。第二回の予定は現在のところないが、そういうものがあるとしたら土御門さんが主導権を握ることになるだろう。
おれたちは今回よくなった雇用条件の悪化を回避するため、これまで以上に頑張る必要性も出てきたわけだ。

などとカッコつけてはいるが、これが学生ふたりにやる気を出させるために『先生』と土御門さんが打った芝居でない、という証拠もないわけで。

とりあえず真実を知って落ちこむのは後でもいいだろうということで、おれは『先生』に枝先さんの件を告げ、どこか安全な場所に

移した方がいいと思いますと言ったのだが、

「それはいいが、ここ以上に安全な場所が今の私たちにあるのかね？」

と問い返されて言葉を失い、そのままの流れで『先生』以外は解散になった。

……わかりやすいって点では、相当危険だと思うんですが。

＞i21811―2938＜

二日後。

夕方、「ハ1」すなわち『先生』から召集メールが来た。

完全下校時刻を過ぎてバスが止まるだろう時間帯なので、サイクルで近所まで走行して関係ない駐輪場へ留めておくことにする。

この街では、自転車や自動二輪に違反切符を張られることが滅多にない。

切符を張った以上、既定の日数が過ぎれば回収せねばならないが、回収すればそれらを最終的には外部へ持ち出すことになり、それは部品の細かいところで学園都市の技術流出につながるからだ。

この街の進みすぎた技術のせいで、廃品回収すらまともにできないありさまである。

指定された部屋――今回はいつものミーティングに使う小会議室ではなく、おれたちの実験を上から見下ろしていた管制室だ――に入ると、そこには先客がいた。

『先生』だ。

電源が落ちているからか、懐中電灯を持っている。

初ちゃんの姿は見えない。

「あいつはどうしたんですか？」

答えてくれるかは疑問だが、一応聞いてみる。

電気の通っていない場所でミーティングなどという時点で、話がメチャクチャすぎるのだが。

「彼は今、別の所にいる。

それより、君もそろそろ見てみたまえ。懐かしいものと面白いものが見られるぞ」

『先生』、今日はちょっと悪い方に興奮気味だな。

おれはともかく“加藤くん”がこんなところに来て、いい思い出なんかあるわけないのに――

音。
金属音。

とっさに振り向いたおれの反応を見て、口角を上げた『先生』が顎をしゃくる。
つられてみたその方向には、一部ガラスが割れた大窓。
その向こうには、例の『能力体結晶』投与実験に使われた機器――が昔は鎮座していたのだろう、露出した配線と床のへこみ、そして人影が見えた。

人影？

思わず窓に近寄って見る。
大人にしては小さすぎるような背丈にほっそりした健康的な体躯……未成年か？

そこまで考えたとき、人影はこちらに感づいたようで手前の扉方面に突進し、続いて右から階段を駆け上がってくる金属的な音が響き始めた。

「『先生』、やっちまいました。すみません」

「気にすることはない。あれが今日のゲストだよ。手は出さないでくれ」

扉の影になる位置に移動して身構えるおれを見て薄く笑い、言葉通り気にした風もなく扉の正面へ体を移す『先生』の表情におれが疑問符を浮かべているうちに、人影は階段を上りきったようだ。床と靴とがこすれる音に変わる。

『先生』の背後に“遮光板”を展開。

そして数秒後、管制室の手前中央にある扉が爆発するように開かれた。

空虚に響いた扉の音で、実験室の方を向いていた『先生』が振り返る。

「……君か」

『先生』は、あまり驚いていないらしい。おれの注進でそれが分かったのだとすれば、おそらく『風紀委員（ジャッジメント）』がらみの誰かだろう。

そして、ドアに隠れているおれからは見えない相手も、それは同様のようだ。

「やっぱり、木山春生（きやまはるみ）……！」

！？

この声は、まさか

「何か用でも……」

「今回の事件もあんたの仕業なの！？」

……間違いないな。

『先生』、いや木山先生に向かって「今回の事件“も”」などと言える女子学生は、学園都市広しといえども三人だけ。

そのうちひとりはレベル1、また別のひとりはもっと丁寧または慇懃無礼な口調を常とする点から、ここに潜入できる見込みがあるのはただひとり。

常盤台の『超電磁砲（レールガン）』、御坂美琴（みさか　みこと）さんだ。

しかし、なぜここに来た？

何のために……枝先（えださき）さん関連か？

それならなぜ、木山先生を犯人扱いする？　事情を知っている彼女が。

おれが静かに混乱している間に、話が進みだした。

「君もあいかわらずだな」

「答えて！！」

「……だとしたら、どうする？」

おい。

何言っちゃってんの先生。

おれの理解では、今回の地震は枝先さんが意志疎通能力（テレパシー）により他の八人のＡＩＭ拡散力場に干渉して、震源が形づくられている。どうやって群発地震のレベルまで持っていけるのかは分からないが。

そして、それは昏睡している枝先さんの仕業であり、先生は関係

ないはずだ。

というか、そんな挑発的なことを言えば……

あースパークが見える、

「許せるわけないでしょおおおおっ！！」

来ました放電。

幸運にも一瞬だけ判断が早かったおれは、円筒形に“遮光板”を立ち上げて耐える。

だが耐えられなかったものもあったらしい。

ゴン、とブゥン、の中間のような音が響き、別の所から電気を供給していた以外の電源が復旧した。

全ての電源が。

何が言いたいかというと、防犯ベルも機能を取り戻したのだ。

ジリリリリリリリリリリリリリ……！

おれにとっては郵便局のクソいまいましい非常ベル以来の響き。
想定の範囲内と言わんばかりに泰然とした先生とは正反対に、自分がやらかしたことの重大さにまだ気づいていない様子の美坂さんは、珍しくおろおろと左右を見回している。

「ぬぐっ、な、ちょっと、何これ？」
「ハァ……」

ため息をついた先生が、ゆらりと前方へ足を踏み出した。

「仕方ない、来たまえ」
「え？」

ぽかんとする御坂さんを尻目に、彼女を追い抜いて先生が管制室を出る。

「かとう君、きみも出てきなさい」
「へ？」

扉の陰でひたすら待っていたおれは、喜んでその指示に従った。

恐ろしい勢いでぶつかってきた扉が直撃した鼻を押さえながら、ではあるが。

木山先生のランボルギーニをサイクルで追いかけるというなかなかスリリングかつ作業的なことをさせられ、たどり着いたのはどこかの病院だった。

相当大きい。

なんでサイクルで車を追いかけたかって？

そりゃ、サイクルで来たことがばれてたからですよ。あの人、完全下校時刻後も動けるようにしとけっていう土御門さんの指示を悪用しやがった。

まあ二人乗りのガヤルドに三人乗せろとは、おれも言いにくいけど。

そんなわけで、病院にいくつかある通用口のひとつに鼻先をつっこむような形でランボルギーニが停車したとき、おれはまず手足をさすって血行を回復させる必要があった。

こういうとき、四本の“伸びる手”が役に立つ。なんか悲しいけど。

「ここって……」

降車した御坂さんがつぶやく。

見覚えあるのか。彼女の記憶に残ってるということは、有名な病院なんだろうな。

こっちは呪符を撒くのに忙しいから、いちいち思い出してられないが。

「こっちだ」

そして、そんな彼女やおれを見向きもせずに通用口をくぐる木山先生。

あいかわらずなのはどっちだ。

「ちょっと加藤、どういうこと？
あんたも事件に加担してるわけ？」

曲がりくねった職員用の細い通路を抜けながら、御坂さんがおれ

にターゲットシーカーを振ってくる。
『幻想御手（レベルアッパー）』事件の展開が展開なだけに疑い深くなっているのだろうが、そういう人をすぐ犯人扱いする姿勢はよくないですよ。
今回おれは本当に何も知らないんだが、そう言っても聞いてくれないだろう。
これはおれの自業自得だが。

「だったらさっさと逃げてますって。
おれが聞いたのは、今日あの場にいれば面白い場所へ連れて行ってやる、という口約束だけです。隠れていたのは、『幻想御手』の恨みかなにかで木山先生を殺そうとする武装無能力集団（スキルアウト）とかを迎撃するためですよ」

「……私は不良ゴリラと思われてたわけ？」

「あんなところに行くからには用心しないと」

今だってそうですが、と付け加えると、今度は御坂さんがため息をついた。
前方ではエレベーターの右で、あとから取り付けられたように不自然なテンキーを操作し終えた木山先生が、おれたちを待っている。

おれが前に寝かされていた簡易ベッドも楽々と通れそうな幅をもった扉が開き、三人の人間がそこから出てきた。
もともと病院のエレベーターは、そういう目的で幅を広くとってあるらしい。

おれの前で周囲を見回していた御坂さんの足が、急に停まった。
さすがに彼女の背中にぶつかりたくはないので、こちらも急停止する。
いったいなんだ？

「これは……！」

御坂さんの声。
だから何が、

そう言おうとして、思い出した。

白い部屋。
カプセルみたいなベッド。
電源装置。

立地条件は違う。少なくとも、おれはこの病院を知らない。
だが、目の前にある光景は、

「私の記憶をのぞいた君なら、知っているだろう」

目の前で眠っている九人は、疑いようもなく――

「私の、教え子たちだ」

第二十二話　再会（後書き）

やっと本編と絡みます。

第二十二話外伝　釣り野伏、あるいは陽動

少し、時間を遡る。

「釣り？」

『そうだ』

場にそぐわない言葉に、介旅初矢（かいたびはつや）は思わず通話口でオウム返しをやらかした。

しかし、電話の相手は気にしない様子で言葉を続ける。

『私と彼が小エビになって、魚を寄せる。君には私たちに食いついた魚を、水中から引き上げてほしい』

「……いやまあ、そこまでは別に構いませんが、三つ質問いいですか？」

『ああ』

介旅としては、この頼みは受けたくなかった。

“ウチ”――『フラッグ』に関係のない、まったくの私事だからだ。

もはや友人と呼べる関係ではない加藤若一に、介旅にとってはただの加害者でしかない木山春生。給金と身の安全が保障されていなければ、誰がこんな連中と行動をともにするというのだ。

だから、電話越しに問う。

「まず一つ目。今日その魚が釣れなかったらどうするつもりです？」

『釣れるまで、何度でも糸を垂らすことにする。どうせ、いずれは彼にも教えておくべきだった用事もあるから、それはそれで損にはならないさ』

「じゃあ二つ目。狙ってたのと違う魚が釣れたらどうするんですか？」

『その可能性はゼロに近い。しかし、そんな時のために会議室に彼をおき、病院の方に君を向かわせているのだ。

どちらもコソ泥に入るには魅力に欠ける場所だから、私は心配し

ていないがね』

「分かりました。
最後に三つ目――ウチの仕事じゃないのに、俺がこの件を手伝わなきゃいけない理由は何ですか？」

その問いにも、電話の向こうにいる木山春生は冷徹に答えた。

『決まっているだろう？
今ここで獲物を釣っておかなければ、私と彼は後手後手に回った状態で私闘を続けざるを得ない。いつかは暗部組織を逸脱した暴走行為を始めることになる。
そうなればウチは解散、君は再配置だ。
不祥事を起こした組織のリーダーとして、懲罰人事もありうる。
ウチの良好な労働条件を失いたくなければ、君は私たちをサポートするしかない。
それに――』

「……よくわかりました」

このおばさん、けっこうな狸だな。

＞i218811—2938＜

「私の記憶をのぞいた君なら、知っているだろう。
私の、教え子たちだ」

木山春生は、言い捨てるように言葉を吐きだした。
聞く側に立っていた御坂美琴の前髪から、青い電光が飛び散る。

「やっぱり……
『乱雑開放（ポルターガイスト）』を起こしていたのは、あんたなのね！」

「……そうだ」

「ッッ！！」

その電光が空間上の一点に結ばれようとしたとき、

「ッ！？」

先ほどと同じく声にならない声を、今度は御坂美琴の口が疑問形にして絞り出した。

目の前にある、黒い大きな板。

彼女がその存在すら頭から消し去っていた、本来ならば彼女の眼前にあるベッド群の中にいたはずの人間――加藤若一の能力である。

「加藤！　どういうつもりよ！」

「まあ、話は最後まで聞けってことですよ。

あとここは病院なんで、電撃はご勘弁。おれたちだけを焼くならともかく、罪も関係もない他人の生命維持装置まで狂わせたくはありませんから」

そう言われて、自分がしようとしたことの重大さに気づく美琴。

矛、というより電気を収めたとたん、今度は別の人物が登場していたことに気づく。

「誰！？」

そう言って右に身構えた彼女の目には、

「やれやれ、先に言いたいことを言われてしまったね？」

苦笑しながら猫背の体を床に擦りつけるようにして現れた、初老の医師が映っていた。

「ちょ、え？」

背後から素っ頓狂な声。

状況は見なくてもわかる。たった今現れた、このどこかで見たことのある医師と背後の加藤に、何らかの関係があるのだろう。

ＲＳＰＫ症候群の症状が出たとき、実際にはこの医者に治してもらったのだろうか、などと考えながら変装用のプラスチック製仮面（お祭りで買ったゲコ太を模しているものだが）をいじくりまわしていた美琴は、そこでようやく思い出した。

彼女と黒子に、『幻想御手』使用者の脳波について教えた医師。
美琴本人の表現によれば“リアルゲコ太”。

「あの時の……！」

「久しぶりだね？」

平たい顔が、やさしく笑う。
危険はもうないと判断したのか、黒い大きな“遮光板”を消滅させた加藤が、美琴に疑問符をつけた。

「あれ、御坂さんもお知り合いで？」

「『幻想御手』の時に、ちょっとね。
……ていうか、いったい、何がどうなってるのよ！」

カエル顔の医師は、眠り続ける子供たちに目をむけたまま動かない木山をちらりと見てから、加藤に目で合図する。
背後から、自分に向けられた悪意が薄れるのが感じられた。
壁に下がった加藤を確認して、カエル顔の医師が語りはじめる。

「木原幻生。
彼がすべての始まりなんだね？」

回想。

『あんなもので、本当にレベル６が創りだせるもんですかな？』

『もちろんだとも』

『本当かい？　いたずらに意識障害を招き、重篤な副作用を起こすのではないかな？』

『すでに実験は着実に成果を上げている』

『そのために、どれだけの犠牲を払ったんだい！』

『犠牲？
私の実験に犠牲者などいない、いるわけがない。フッハッハッハッハッハ……』

狂科学者（マッドサイエンティスト）の名に恥じぬ言動に、美琴は戦慄する。
同時に、何かたとえようのない気味の悪さを感じていた。

自分と同じ人間が、こうもかけ離れた倫理観を持てるものか、と。

「彼がその存在をどう認識していたかは知らないが、犠牲者はいたんだよ」

カエル顔の医師は語り続ける。
加藤の口がへの字に曲がった。

「『幻想御手（あの）』事件に関わり、ことの経緯を知り、そして確信したんだ。
木山くんが救おうとしていた置き去り（チャイルドエラー）が、能力体結晶の実験台にされたんだってね」

思わず、美琴は木山に顔を向ける。
否定など返ってこないと知っているのに。

彼女に与えられた情報は、もっと悪いものだった。

「あの時きみに話した『暴走能力の法則解析用誘爆実験』すらも方便だったんだ。
君の見たあれは、能力体結晶の投与実験だ……！」

木山の左拳が握られる。

「まあ、先生でさえ騙されていたってのは、一面の救いではありましたね。
これで先生が知っててあの白い粉を飲ませたんだとすれば、おれはいったい誰を恨んで生きていけばいいんだってことになりますから」

下らないことを言って空気を和ませようとでもするつもりか、美琴は振り返って加藤をにらんだ。

そして、一歩引く。

そこには、泣き顔にも笑い顔にも見える、醜悪にひきつった表情の少年が立っていた。

「……でも、レベル6なんて取っかかりも見つかってないようなもののために？

そんなイカれた実験のせいで、この子たちはこんなにされたって言うの！？」

そこまで叫んで、美琴は気づく。

そうでなければ、木山春生などという人並み以上に知性と良心ある科学者が、犯罪者に身を落とすものか、と。

「僕にできるのは、医者としてこの子たちを救うことだけだ。そこにいる加藤くんのように自力で意識を取りもどすことは、きわめて難しいと言わざるを得ないしね？

幸い、全員を集めるのにそう時間はかからなかった。

僕はこの街では多少顔が利くからね？

後は目覚めさせるために専門家の話が聞きたかったが、連絡はすぐに取れた。木山くんも、まともに話ができる医師を探していたら

しいからね。
ただ、加藤くんが目覚めてから木山くんが思いつめるようになってね？　形式だけでも休養を取るよう勧めたんだが、結局彼女がまともに休んだのは、あの『幻想御手』が秘密裏に完成してからだった。
あのとき木山くんも私の患者にしておくべきだったと後悔しているよ」

「それで、保釈を……」
「てことは、引き抜きはやっぱりあんたが」

カエル顔の医者が憂い、それを聞いてふたりの子供が声を上げる。
両方に頷いたのは木山だった。

「無理を押しつけたのは私の方だ。先生にはいくら謝罪してもしきれない。
ここの設備を使えるように手回ししてくれたおかげで、あの子たちを目覚めさせるメドがついた」

「じゃあ、助かるんですか！？」

美琴より早く、加藤が身を乗りだしてなかば叫ぶ。
だが、

「いや、別の問題が発生したんだね」

答えは期待していたそれとは別の方角から、別の意味をもって彼に襲来した。

「問題？」

「覚醒が近づくと、ＡＩＭ拡散力場が異常値を示した」

「それって……」

「能力の暴走だ。
そしてＲＳＰＫ症候群の同時多発を引きおこした」

美琴が代わりに質問する形になっているが、それでも十分だ。
加藤も知らなかったらしい事実を明らかにするためには。

「なんで……」

「木原（かれ）の研究は進展していたんだね。　改良を加えられた能力体結晶が……」

「この子たちを眠りながらにして、暴走能力者にしてしまっていた」

「じゃあ、この子たちが目を覚まそうとすると……」

「ああ。『乱雑開放』が起こる」

この一連の会話のあいだほとんど黙りこんでいる加藤若一は、美琴に自分の同級生を“この子たち”呼ばわりされることに多少の反感を抱いたものの、それ以上に自分へ届いた警報を気にせざるを得ない。

彼がこの病院に入るとき周囲へ撒いていた広域呪符が、敵対的な何かを捉えていた。

「何か、方法はないの？」

「暴走を鎮めるワクチンソフトを開発している」

「だったら――」

「ただ、能力体結晶の根幹をなしているのは、『一次標本（ファーストサンプル）』と呼ばれる、最初期の人体実験の被験者から精製された成分だ。ワクチンソフトを完成させるには、どうしてもそのデータの解析が必要なんだ。

今のところデータの捜索に成果はないが、だからといって諦められるものか。

あのデータは能力体結晶の研究に必要不可欠なものだ。それだけ

のものが、易々と廃棄されるはずがない！　どこかに、必ず……

わたしは――」

「すみません、ちょっといいですか」

美琴は話の腰を強引に折ってしまった加藤をにらみつけた。

彼自身にもかかわることだというのに、いったい何の真似を――

「外に、何かいます」

その頃。

病院の前は、ちょっとした騒ぎになっていた。

灰色とオレンジに塗り分けられたバンと二台の四トントラックが、これでもかとばかり四車線の道路上にぶちまけられている。
当然、その態勢は通常の物ではありえない。
あきらかに運転席が潰れた状態で並木につっこんだもの、空中へ飛びあがり損ねたように横転したもの、尻からまっすぐ道路に落下したもの。

“まるで重力を無視したように”。

「さーて、分かってんだろ、ＭＡＲの皆さん？」

介旅初矢は、ニヤニヤと陰湿な擬音を唇に張りつかせ、三日月形に笑った。

「暗部にメッセージを送ったってことは、お前らも後ろ暗い組織ってことだ。
だったら利害関係がモロに衝突する別の暗部組織に邪魔される可能性も、しっかり考えとかないとなあ？」

介旅は、木山が電話で最後に語った言葉を思い出す。

『それに、この一件は表沙汰になっているとはいえ、ＭＡＲが何かを目論む時にそれが我々と衝突する可能性はかなり大きい。
今のうちに“暗部組織どうしの私闘”という形に持ちこんで、本物の『警備員』や学生を巻きこまないようにしておきたいのだ。
なにしろ、これは私事なのだからな』

そしてライフラインとかいう女の公式な肩書階級がＭＡＲのものだけである現状では、あの女が組織を私物化しているのか、ＭＡＲ全体が暗部組織なのかは判然としない。
が、可能性としては前者が圧倒的に大きい。暗部組織ならば、わざわざ公的組織としての顔を立てる必要もないだろう。
つまり、あちらにとっても今回のことは“私闘”として扱いうるのだ。

だからこそ、介旅も出てきた。
これでＭＡＲが公式に彼やジャクのことを指名手配するなどということになれば、連絡係の人（ジャクはなぜか土御門さんと呼んでいるが）は怒り心頭だろう。
そうならないためにも、ここでＭＡＲの先陣を潰さなければならない。

横転したトラックから、駆動鎧（パワードスーツ）が這い出てくる。

そのアーム先端には、無骨な鉄棒が握られていた。

「やっぱり荒事用か……」

つぶやいて、病院前の歩道の生け垣に隠れている介旅初矢は、両目を見開いて駆動鎧の脚を見つめた。

収束、そして

爆発。

くだんの駆動鎧は空中高く放り上げられ、後に続こうとしていた別の二機の胸板を爆風が叩いて数メートル吹き飛ばした。

二機はよろけて道路上に倒れ、そこへ空から降ってきた片足の駆動鎧が直撃。

もともと外部への輸出用で、あまり耐衝撃性能がよくないＭＡＲの駆動鎧は、落下の衝撃に耐えきれなかった両腕部が電光を発し、動かなくなった。

「ナイス！」

介旅はひとりガッツポーズ。
これによって、道路の惨状はさらに拡大することとなる。

しかし、道路上へ惨劇を広げることに夢中になるあまり、彼は気づいていなかった。

一台の目立たない業務用トラックが、連続する爆発の衝撃で飛びちった何かの紙切れを踏みしだきつつ、第三新病棟の救急用玄関へ回りこんだことに。

一瞬の出来事だった。

轟音。
飛び散るエレベーター扉の破片。
熱気。

全員がエレベーターの扉に注目した直後、それは現れた。

部屋の左後方にいた加藤と美琴、および前方中央にいた木山春生を自らの加速にのせて弾きとばした駆動鎧によって、『幻想御手』後に新しく造り直されたのだろう“白い部屋”のガラス壁が粉砕され、さらに左側の一番手前に設置されていた枝先絆理（えださきばんり）の生命維持天蓋ベッドが白い床から引き剥がされるまで、三秒とかかっていなかった。

「クソ野郎……ッ！」

この数時間で初めて驚き以外の感情を出した加藤が、駆動鎧の前面に黒い遮光板を立ち上げて一時的に目をくらます。
そのまま枝先の天蓋ベッドを“伸びる手”で取り返そうとして、

「げぶっ」

駆動鎧に“裏拳を食らわされた”加藤が背後の壁まで一直線の軌道を描いて吹っ飛び、体の一瞬後に後頭部を打って崩れ落ちた。

「なんっ……！」

状況の急激な変化に自失していた美琴が、ようやく指先に稲妻を走らせたその時には、駆動鎧はエレベーターの床を踏み抜き、自重で落ちてゆくところだった。

すべてが終わってから、呑気に非常ベルが鳴りはじめる。

美琴は、改めて周囲を見回した。

両腕で頭をかばっているカエル顔の医師。
ほとんど大の字といってよい状態に手足を弛緩させて倒れた木山。
ぐったりと壁際にくずおれている加藤。

破砕された全面ガラス。
ひとつだけ、乱暴にコードやパイプが引きちぎられた天蓋ベッドの跡。
そして、もはや床面積の半分は役に立たないエレベーター。

それらの情景を生みだしたのは、たった一機の駆動鎧。
そして、

「何なのよ、今の……？」

少女の呟きに、答えられるものはいない。

第二十三話の一　また木原か

雑音とともに、ため息交じりの声がした。

『やられちったにゃー』

土御門さんが気分を落とすなんて、珍しいこともあるもんだ。
そんなことを考えながら、早朝ミーティングの彼のお話を聞いてるふりをする。
前に声を出さないようにあくびしたら、その直後に土御門さんが『加藤はきっちり寝たほうがいいにゃー』などと言ってきたショックは忘れない。

おはようございます、加藤若一（かとうじゃくいち）です。

で、今の土御門さんのセリフだが。

例の枝先（えださき）さんだけをさらった駆動鎧（パワードスーツ）は、病院の玄関に設置された監視カメラの映像から形式年式を割りだした結果、やっぱりというかＭＡＲ所属の機体だと判明した。

はなからこっちが、というより“暗部のどこかが”奇襲をかけてくることを承知の上で、そのドサクサに紛れて誘拐を決行する気だったらしい。

まあいい。初ちゃんの許可もあって、やつらはいまや『フラッグ』のいつか殺すリスト筆頭だ。土御門さんはそのことを知らないが。

なるべく早く、復讐と枝先さんの奪還を試みないと。

そして枝先さんのベッドだけをさらっていった理由だが、これは土御門さんが嫌な方向に解決してくれた。

ちなみに、移送費用をおれと『先生』が負担することで、さらわれなかった八人の同級生は『先生』……というよりカエルのおっさんが指定した別の病院へ搬送されている。

『先生』は移送につきあって（変な実験場へ運び込まれないように）徹夜、おれは彼女の指示でいつでも出られるようにしていたため徹夜、初ちゃんはおれが妙な行動を起こさないか見張っていて徹夜という、笑えない三連星のオチがついていた。

その『先生』は夜が明けてから、一言もしゃべっていない。

よっぽどショックだったんだな。おれもそうなってしかるべきなのだが、オカルトさん回路の浸透は予想以上に進んでいるようだ。

それについて何の感想も浮かばない自分が気色悪い。

話を戻して。

『先生』によると、枝先さんの能力はおれの記憶通り『念話能力（テレパシー）』。

だが能力体結晶を投与されたことで暴走した彼女は、通常とは異なる『精神感応（テレパシー）』を手に入れた。

つまり（土御門さんいわく）、今の彼女は遠く離れた誰かと心中で会話できるだけではなく、遠く離れた誰かに自分が感じている物事を伝えることができるのだ。

この差は大きい。

伝えられるものが、思念から五感すべてに広がったのだから。

さらに言えば、その感覚は能力者どうしで感染することもある。

ならば、彼女に何らかの刺激を与えるとどうなるか。

まず数か月を共に過ごした木山学級の置き去り（チャイルドエラー）たちに、そして木山学級に転入するまでを暮らしていた施設の友だちに、彼女は次々に念話を送ることになる。

能力が暴走している今、その能力に距離や減衰率などの要素は問われない。

……いや、おれは？

『加藤は魔術で身を守ってるから、自分への悪影響は遮断される。しょうがないにゃー』

また魔術か。

初ちゃんが退屈して、「もうそれでいいよ」って顔してるぞ。カーゴパンツのポケット全部に呪符つめこんでるおれが言えることじゃないけど。

そういえば土御門さん、「呪術」のことを「魔術」って言うよな。陰陽道の本家なのに、もしかして十字教徒（キリシタン）なのか？

『話を戻すぜーい』

了解了解。

……んで、そうなると枝先さんを狙った理由は当たり前なのだという。

つまり、そういう高度な意思伝播能力を持った枝先さんを実験台に使うことで、より多くの成果が見込めるからだ。

何の実験？

能力体結晶の投与実験に他ならない。

……またかよクソ。

＞ｉ２１８１１―２９３８＜

枝先さんで実験すれば、彼女がレベル6にならなくても、そのショックを他の置き去りたちや彼女の友だちに伝えることができる。あわよくば、そっちの方で誰かがレベル6になるかもしれない、というわけだ。

いささか以上に楽観的なバクチ的実験だと思うのは、おれが被験者候補のひとりだったからだけではないだろう。

しかし、仮にも人命救助をお題目に掲げた組織の行動にしては、あまりにもお粗末だ。あのインフラ（仮）に私物化されているにしたって、やることが貧乏性すぎる。

その辺どうなんですか土御門さん。

『それはしょうがないにゃー。能力体結晶投与実験は、木原幻生（きはらげんせい）が残した負の遺産。現代とはまた違った科学的手法ってもんが試されてた時代の名残だにゃー。

それにお前らの間では悪評しかないジジイらしいけど、彼の研究手法にはいまだに学ぶべきところも多い、あれはあれで傑物なんだぜい？』

学ぶべきところ、ねえ。

人体実験は本人の許可を得る前に行え、とかか？　あるいは洗脳

や情操教育で、狙った被験者が自発的に志願するようにあらかじめ仕向けろ、とか。
能力体結晶の実験は、どちらの要素もあったがな。

そんなことを考えていたおれの思考回路は、次の瞬間に吹き飛んだ。

『それから今回の事件、『フラッグ』には待機命令が出てる。今後は動くなよ』

「……はぁ？」

思わず相手をバカにするような声が出たのは許してほしい。
実際、心の中ではバカにしていたのだ。

「ここまでペラペラ情報しゃべっといて動くなとはどういう意味だ」

と。

『いいか？　まず、お前らが知らないかもしれない前提条件を伝えておこう。ＲＳＰＫ症候群患者の共鳴についてだ』

「共鳴？」

なんだそりゃ。

『先生』はともかく、あとのふたりは知らないぞ。

『やっぱり知らないか。

例の木原幻生が提唱した概念で、ＲＳＰＫ症候群になった能力者の能力特性と一致する能力者も、同じようにＲＳＰＫ症候群を発症しうる、ってことだ。

問題になるのは“能力”じゃなくて“能力特性”だから、複数の能力者とも反応する。これが連鎖反応を起こすと、『乱雑開放（ポルターガイスト）』の論理から、超巨大地震が発生しうる』

連鎖反応って……どこまで連鎖が続くかにもよるだろ。

だいたい、この街は人口の七割近くが一般人と無能力者（レベル０）なんだから、それほど騒ぐことでもないだろうに。

『レベル０の意味はレベル１未満、能力はちゃんとあるって介旅も言ってたにゃー。だから連鎖自体はレベル０にも起こりえる。

俺が独自にやった試算だと、もしその枝先って子と加藤以外の八

人すべてに共鳴が起きた場合、全学生の約七一パーセントが連鎖に巻きこまれてＲＳＰＫ症候群を発症することになるにゃー』

ちょっと待て。
ちょっと待てよ。

これ、インフラ（仮）も知ってるんだよな。
枝先さんに能力体結晶を投与したら、確実にこうなるんだよな。

こんなハイリスクノーリターンの世界に足を突っこんでいいのか？
お前それでいいのか？

『彼女が躍起になる理由は置いといて、統括理事会はいったん表沙汰になったこの事件を暗部に解決させたくないらしい。そのための誘導はすでに行っている』

誘導？　誰に？

聞くまでもないか。
昨日おれの鼻を扉で潰したのが誰かを考えれば、一発でわかることだ。

『風紀委員（ジャッジメント）』第一七七支部とゆかいな仲間たち。
そりゃあ確かに、超能力者（ヒロイン）には不足しないだろうけどさ。

『というわけで、テレスティーナ＝木原（きはら）＝ライフラインに関して、
お前たち『フラッグ』の行動は許されない。
おとなしく次のミーティングを待ってろってことだ』

……えっ？

「土御門さん、今んとこもう一回お願いします」

『なに？
おとなしく次のミーティングを』

「違えよクソガキ、その前だ！！」

思わず荒い声が出たが気にしない。
どうせ精神年齢はこっちが上だ。
でもクソガキ発言に動じない土御門さんマジ大人。

『……なんなんだいったい。
“テレスティーナ＝木原＝ライフライン”に関して、お前たち『フラッグ』の行動は許されない……これで満足か？』

「……また木原か」

つぶやいた。
さすがにこれは声に出さざるを得ない。

まあ統括理事長ならわかってくれますよね。ほかの理事どももわ

かってるし別に言葉にしてもいいよね。
“発信器”が周りを飛んでると思うと、発言ひとつにも気を配らんといかんから困る。

立ち上がる。
荒々しく床を蹴るわけではない。いつものおれと同じように、初ちゃんよりのっそりと、おっさん臭く。
カーゴパンツのポケットに両手をつっこんで、背中を丸める。
表情筋を操作すれば完璧なのだが、そこはあきらめよう。

「ほんじゃ初ちゃん、行こうぜ」

「……はいはい」

俺の言いたいことが分かったのか、苦笑しながらもついてきてくれる初ちゃん。
なんだかんだいって、やっぱこいつ計算高いやつだ。

『……何を言っている？

今、待機しろと言ったんだぞ』

そういえば携帯切ってなかったな。

それにしても今の土御門さんの口調、どっかで聞いたような口ぶりだ。

要するに中身が似ているのだろう。自分の頼みごとはともかく、命令には背かれたことがほとんどない人間特有の声だ。

いや、こっちにしてみれば単に間抜けな声なんだけどさ。

「あんた莫迦か？

あの統括理事長サマが、事件当事者がふたりもいる『フラッグ』に、わざわざ待機命令なんてものを出した理由ぐらいわかるだろ」

『だからおまえたち、特に加藤、お前が暴走しないように……』

「ないない。理事長そんなまどろっこしいことしないって。

んなことするぐらいなら、とっくに同業他社がここを襲撃してるよ。その方が、誰か知らないけど能力者の経験値稼ぎにもなるんだし。

統括理事長はどうみても、おれたちに今回の事件を知らせて、もっと言えば焚きつける方向で話をつくってる。じゃなきゃ、わざわざ静観しろなんて言うわけあるか」

『勝手に動かれて困るのはこっちだぞ？　あんな破格の好条件を押

しつけておいて……』

「で、だ。

そもそも今回のコレに、ＭＡＲ以外が関わってないことはあんたが証明してくれた。

おれたちよりセキュリティランク高そうなあんたの話を疑ったってしょうがないから、つまり本当にどこのメンツも関わってないわけだ。

前回と違って」

前回と違って、を強調する。

木山先生は『幻想御手（レベルアッパー）』を作ったとき、学園都市の能力者数バランスを崩す＝クロウリーのプランとやらを乱す可能性があるから“警戒”された、とおれは踏んでいる。

では今回、あの時とは質が違うとはいえ人的・物的被害が多数出ている事件について、またもや『風紀委員』の支部ごときが関係者以外に誰の協力も妨害もなく、ひたすら独自に木原を追っているのはなぜか？

プランに引っかからなかった。

それだけだろう。

「要するに統括理事長的には、動いても動かなくても、というか事件そのものはどうでもいいんだろ？

つまり木原テレスティーナの実験が成功する確率はほぼゼロ、失

敗しても親なしのガキが何人か死ぬだけ。

そのまま行けば実験を妨害するだろう治安関係者の動きをあえて押さえつけてるのも、あんたらにとっちゃ“もしかすると何か面白いことがあるかもしれないから”にすぎない。例えばまあ、この後いつかダシにする予定の某能力者が、自分たちに都合よく思考回路をチューニングされてくれるかも、とか」

それなら。

件のガキ連中が助かっても、クロウリーとしては何も問題ないわけだ。

こういうときだけ頭が回る加藤くんの知識体系もすごいが。

『だからこそ、無理に出る必要がないと言ってるんだ。

それに統括理事長の直接命令だぞ？　日本語ちゃんと分かってるのか？』

「当然のパーペキに理解してございますですよ。

出るなって言うけど、この話ぁおれたちの対能力者攻撃実験には最上級だろうさ。

なんせＭＡＲを追ってるメンツの中には、あの“奇跡のレールガン”だっている。どうせ彼女の経験値稼ぎとか、暗部の上っ面だけ見せとく意味もかねて治安部隊がフリーズしてるんだろうし、そこまで計算づくならおれたちが出ても死にゃしねえよ。

つーか、今日はおれたちオフのはずなんですけど。なんで休日の行動までいちいち指図されなきゃいけないわけ？」

『そういう問題か！　だいたい……』

土御門がなにか説教かましてきたが、聞こえない。

単に、おれたちが暴走して一番困るのが監督者の彼というだけだろう。

知ったことか。

こっちはクラスメイトの命がかかっているのだ。致命的な刑罰がないとわかった以上、できる範囲で目いっぱい勝手にさせてもらう。

ちなみに、おれが口にした“奇跡のレールガン”は半ば本心だ。

暗部に入ってから彼女の身上調書を読んだが、あれだけの能力者にしてあれだけの両親の娘。そもそも彼女が好き勝手に学園生活（笑）を満喫できているのも、『風紀委員』の一七七支部が罰されないのも、それがレベル５の第三位に対する挑戦と受け取られかねないからだろう。そんな彼女が成功を確信して介入しないような案件であれば、もとよりおれたちにできることはひどく少ない。

……という、加藤くんの知識体系が出した結論に逆らえないおれ。

こういう時にちゃんと空気を読むオカルトさん知識体系を恨みたいですよ。

「あんたにおれたちを止めるだけのヒマはないみたいだし、正直言ってあんたの都合とかどうでもいいし。なんかしら相応のペナルティくらうとは思うけど、こっちから理事長の思惑に自主的に乗っかるんだから、少しは手加減してほしいもんだわ。
じゃ、まあ、そういうことで」

『おい、待』

ブツン。

言ってやった言ってやった。
自分の将来はともかく、あの正統派陰陽師に好き放題言えたのは爽快きわまる。

正直、今もっとも心配なのは初ちゃんの今後だ。しかし、レベル5を何人も暗部に抱えこんでる時点で彼の命もスペアと言わざるを得ないし、そのことは彼自身が一番よく知っている。
だからこそ一瞬で勝率を計算し、苦笑ひとつでおれに続いてくれたのだろう。
やっぱりこいつ、できるやつだ。

おれはそういう反応が返ってきたら、徹底的に甘えることにしている。

しょせんレベル3ですからね。

頭も悪いし、彼が隠れて何か企んでいても、おれがそう疑った時点でほとんど成功しているようなものなのだ。気にしていても始まらない。

「じゃ、あらためておふたりさん、行きましょ」

「私を置いていく気かと思ったぞ」

分かっていたことだが、立ちあがった『先生』からクレームがついた。

おれがあえて呼ばなかったというのに、やれやれ。

これまでは彼女のどなりちらしそうな感情を抑えるため、会話には加わっていなかったのだが、ミーティングが終わったことで気分も変わったらしい。

相手が駆動鎧に乗っていることを考えると、生身の人間には来てほしくないのだが、『先生』の運転技術とランボルギーニ（ガヤル

ドというらしい）の加速力がカーチェイスに必要なのも確かだ。

ちらりと見た感じ、『先生』は目の回りだけが異様に輝いている。ここに留め置いたり待避させたりするのは逆に危険だ。そもそも暗部のキャラクターとしての『先生』はともかく本物の木山先生は、運転手の役割だけを甘んじて受け入れるような人ではない。

……何を言っているんだ、おれは。

どれもこれも、最初から分かっていたことではないか。

「まさか。

そんな危ないことできるわけないでしょうが」

「分かっているならいい」

そういって、『先生』が初めて笑顔を見せた。

ああ、そうとも。

あのメス豚を“悪役”なんかにしてやるものか。

御坂さんのレールガンなんて、豪勢なもので倒させてたまるものか。

ちょっと痛々しいが、しかしこれがおれの本音だ。

このまま最後まで言ってしまおう。

木原テレスティーナ。

お前は誰にも知られずに負ける。

レベル３の『量子変速（シンクロトロン）』と『遠隔操作（テレキネシス）』相手に、情けなく地べたを這いずりまわって敗北するのだ。

それがお前にふさわしい。

これは悪者と正義の味方の対決ではなく、ただの汚い戦争なのだ。

手が汚れた者同士の私闘で、お前は負けてぶざまに転がるのだ。

それが双方にふさわしい。

行くぜ、加藤若一。

あのメス豚に、御坂美琴（ヒロイン）の面を拝ませるな。

第二十三話の二　学園都市を呪う者

「ところで、本当にいいの？」

「何が」

廃ビルを出て、おれと『先生』はサイクルに飛び乗る。さすがに『先生』は横座りだ。

初ちゃんが地面すれすれを“飛行”しながら、サイクルをトップギアで加速したおれに聞いてきた。

「今回の独走だよ。それこそ誰かが止めに入るんじゃない？」

「そんで主役連中に勘付かれるってか？　冗談じゃねえよ。そんなことする暇があったらさっさと木原を叩いてるさ」

「主役連中って誰のこと？」

「きのう『先生』にまとわりついてた御坂（みさか）さんその他」

「うっは、またあいつらか」

走りながら初ちゃんが器用にため息をつく。
いや、実際は走らずに浮遊しているのだから器用でもないか。

「このあたりで降ろしてくれ。車に戻る」

「了解です『先生』。じゃ、おれはこのまま続行するから、そっちはナビに回ってくれ」

サイクルを急減速。おれの方につかまった『先生』の体ががくんと揺れるが、気にする風もない。
浮遊をやめた初ちゃんには『先生』についてくれるよう頼む。
これは車内の方がナビゲーションには快適で向いているだろうという判断と、初ちゃんが隣に座っていれば先生も無茶はしないだろうという計算が入っている。

「心配しなくとも、無茶なことはしないさ」

笑う『先生』。
嘘つけ。『幻想御手』のときだって、散々無茶しやがったくせに。

「まあ、できたら見張っとくよ」

「是非とも頼む。『先生』は絶対、最後にはおれを放り出して彼女

を助けに行くからな」

「そうならないようによろしくってこと？　難易度高いね」

「いざとなったらお前が力でハンドル奪え」

「ひどいことを言うな、ふたりとも」

口の上では快活でも、三者三様に顔が重苦しい。

これは仕方のないことだと諦めて、おれはサイクルのギアをもう一度ローに戻した。

追いかけっこに再挑戦だ。

＞i218811―2938＜

しばらくサイクルを遊ばせていると、左前方の側道から青いガヤルドが急カーブで道路にひねりこんできた。

『先生』、やっぱり相当焦ってやがる。ジャクは大丈夫かな。

《ジャク、今市道に出た。そっちは大丈夫?》

《こっちは順調、青いケツがよく見える。そっちからもバックミラーで確認してくれ》

初ちゃんのエセ念話も、心なしか早口で脳内再生される。
しばらく時間があって、また頭の中にジャクの声がした。

《確認した。それと、一応言っとくよ。
さっきから『警備員』の監視カメラが、特定の護送車団（コンボイ）をトレースしてる。今は都市高速五号線、第十八学区第五インター付近》

《特定のコンボイってのは？》

《上から見える特徴としては、カラーリングがグレーとオレンジ。
僕は保留にしたいんだけど、ジャクどう思う？》

《同意見だ。他に『警備員』が追ってるトラックはないのか？》

《探してみる？》

《頼む》

きのうの病院では、ＭＡＲのカラーリングを施したバンやトラックを数台犠牲にして、結局まんまと枝先さんを奪いとられた。
あの時の監視カメラ映像を初ちゃんが反省会で提出したのだが、そこに映っていたのは何の変哲もない輸送トラックで、カラーリングは白一色だった。
明らかにＭＡＲのシンボルカラーは、敵を誘導させるために使われている。

それを知っているからこそ、初ちゃんも意見を保留したかったの

だ。
　食いつくには金属色があからさますぎるし、切り捨てるにはもったいない色だし。

　それに、走行している場所も怪しい。
　第一七学区は、学園都市で使われる工業製品の製造を中心に発展してきた学区だ。施設はほとんど自動化されており、人口だけで見れば学園都市の最下位をひた走っている。
　その第一七学区へ向かう、学園都市の北西へ抜ける道路が、都市高速五号線なのだ。第一八学区の北口でＶの字型に曲がり、東の先端が北東を向いている以外は、ほとんどの部分で北西から南東へと一直線を保っている。

　一方の第十八学区と言えば、『幻想御手』事件のときにおれが先生の行き先ではないと即断した場所で、能力開発ではトップクラスの有名校がひしめいている。
　そんな場所から五号線に乗っているトラックの行き先など、特定できないに等しい。

　相手には無数の選択肢。対して、こちらは“相手と同じ”という一種類の選択肢しか許されない。

「面倒くせえな……っ」

根拠もなくいらついてきた分の力をペダルに押しつける。
サイクルが敏感にその力を感じ取り、現在のギア比換算から言ってもっとも適当な力を動力部に要求。無音モーターは忠実に命令を実行した。

目の前にガヤルドの後部車体が見えてくる。思わずブレーキを握ろうとしたその時、

念話が来た。

《ジャク、当たり引いたぞ！！》

次の瞬間、青いガヤルドが右へ急カーブを切った。
ハンドルを三〇度ほど傾け、右足を道路の上で滑らせるように開いて、おれもカーブをなんとか曲がりきる。
狭い側道を制限速度の二倍以上でガンガン飛ばすガヤルドに立ちこぎとモーターの力で必死でついてゆきながら、おれはなんとか念話を返した。

《当たりってなんのことだ》

《他に『警備員』が追ってる車や車列はなかったから、ＭＡＲ本部入り口の監視カメラから映像を引っぱってきたんだ。『警備員』の施設には、だいたい似たような位置にカメラが設置してあるからね》

《で？》

《さっき言ったコンボイが出て行ってから十数分後に、白一色のトラックが二台、民間にしては整いすぎた隊列でＭＡＲ本部を出た。たぶん――》

《そっちが本命か！
で、行き先は？》

《この真東から東南東ってとこまでは特定した。そこからは相手の出方待ち》

真東だと？
初ちゃん、やっぱお前すごいよ。その範囲まで絞りこむなんて。

《上出来だ！　とりあえず、その範囲内でＭＡＲの施設は？》

《調べたけど、ない》

《なら通信関係の研究施設を当たってくれ。いくつか理由はあるが、ＭＡＲが偽装して建物を持ってる可能性がある》

《通信関係？　その根拠は？》

《第一に、ＭＡＲの本部に突っ立ってるデッカイ電波塔や、念話能力者（テレパス）だけをさらっていったことから考えて、やつらが超能力と通信能力をかけあわせて考えていた可能性は高い。

第二に、真東にある第二三学区は航空宇宙関連の施設が多い学区だ。たとえ能力関係の施設でも、通信研究目的とか名乗っといた方が書類上無難だ。

まだ言おうか？》

《いやもういいよ。なるほど、やってみる》

前方にインターチェンジの料金所が見えてきた。

当たり前のように自動支払機を備えているガヤルドはなんのためらいもなくそこを通り過ぎ、おれはその陰に引っぱられるようにして無断で通る。

前回もやらかしたことだが、二輪車だからこそできる芸当だろう。前回と同じように、今は『警備員』も他のことで手一杯だろうし。

第二三学区へは、中央環状道路左回り線から放射二号線に入る。

だからまず、木山先生のガヤルドとおれのサイクルは、中央環状道路左回り線の本線へ入ったわけだ。

だがそこで、

『い～～～いねェ！
そのくらいでなきゃ、ぶっ殺し甲斐がねえもンなァァァァ！！』

奇声とともに路面が割れ、地底怪獣の爪のごとく建設機械のマニューバが突き出てきたのは、完全に予想外だった。

マニューバから腕、そして胴、脚とアスファルトを引きやぶりつつ建設機械が登場し、そして宙に浮かぶ姿を轟音で察知し、誘惑に勝てず振り返って目撃したおれは、一瞬ではなく本当に呆然として

しまった。

空中に浮かぶ二腕二脚の建設機械。

シュールレアリズム以外の何でもない。

……ああ、スピーカー越しだからわからなかったけど、こいつ木原のメス豚か。

あの紫色の駆動鎧は間違いなく枝先さんをさらったアレだ。

しかしまあ本性あらわにしちゃって、メス豚ってより野ブタだな。

あ、建機のかかとに車輪が出てきた。

それでもめり込んでアスファルト削ってやがる。ダサいと笑うべきか、それとも重量に恐怖すべきか。

ああいうのも駆動鎧に含まれるのかな。しかしでっかい建設用車両っつーか、いったいどこでこんな相撲できそうな駆動鎧を使うんだ。

『クソいまいましいガキどもは、餌につられて見事に正反対へ暴走中だ。

テメェらだけでこの状況、何とかなるとでも思ってんのかァ！？』

……で。

スピーカー越しの汚い声を無視しつつ、なんでおれがこんなことをのんびり考えているかといえば、それは視界が限られる関係でガヤルド車内から後方へ攻撃できない初ちゃんにかわって、おれがこ

のバカ建機を始末せねばならないという現実から逃げているからに他ならない。
どうやらレールガンとゆかいな仲間たちは、全力で囮を追っているようだし。

《……ジャク》

《ここは任せろ。さっさと行け》

《そういう死亡フラグやめた方がいいよ》

《お前ネタ分かるのかよ。あと『すぐ追いつく』とは言ってないから大丈夫だ》

《それだけ言えれば平気だね。それじゃ、頼む》

状況は伝わったらしい。
青のガヤルドが加速するのを見て、おれはハンドルを直行に固定する。

『ほォらほォらァ！
命賭けで逃げねェと、ペシャンコになっちまうぞォォォォ！？』

黙れメス豚。

お前にゃ聞いてねえよ。

それじゃあ一発、『自転車乗り（サイクラー）』の流儀にはちょっと反するけれど、メス豚の思い通りバトル展開にしてあげようじゃありませんか。

オカルトさん知識体系によれば、サイクラーの心得の重要なものに

「自分のペースを保て」

というのがあるらしい。

これは何も、走るペースだけをさすのではない。だいいち走るペースなど、グループを作った時点で自分のものではなくなってしまう。

そういう場合は、自分が楽しく走れる許容範囲のスピードを提案すべきなのだという。もし却下されたら、その時点でそのグループのメンバーとは“一緒に楽しく走れない”のが明白なので、早々に脱退して自分に合ったグループに接触した方がいいそうだ。

同じことは、スピード以外についても言える。

ただ漫然と走るのが好きなのか、開けた道でスピードを追い求めるのか、人ごみの中をすり抜けるスリルを重視するのか。それぞれグループごとに特色がある。

その中にあって、グループの許容範囲を満たしつつも何か光るものがあるようなサイクラーを、仲間たちは称賛するのだそうだ。

もっとも、そこまで厳しく自分を縛るグループはほとんどなく、その日その日で方向性を変えるような弱小グループがわんさかいるのが、東京湾岸におけるサイクラーの現実ということだったが。

ちなみに、オカルトさん自身がこういう心得を守っていたわけではない。

むしろ彼は手下の水虎（河童の一種と考えておけばいいそうだ）にエサを与えるためと称して、若いサイクラーたちを次々に跳ね飛ばしていく“サイクラー・キラー”と呼ばれる人種だった。

“サイクラー・キラー”はつまるところ仲間殺しであり、一般人を轢き殺すことを目的とした“マーダー”よりもさらに悪い、言ってしまえば全くもって誰にも評価されない種類のサイクラーだ。

だがこれについては、オカルトさんのそれまでの行状からして、当然と言えば当然の話ということになる。

まあ、そんなわけで。

時間稼ぎもかねてメス豚の思うとおりバトル展開に乗ってあげた

が、その内容については“おれのペース”を守らせてもらう。

ハンドルを直行に固定したおかげで、体を傾けないかぎりコースは曲がらなくなった。

おかげで前後の車輪も安定し、これから手放し運転を長くつづける予定のおれとしてはありがたい限りだ。

位置関係を確認する。

おれたちは東に向かっていて、おれはメス豚の建機に先行している。

つまりおれは建機の東、メス豚はおれの西。

これで間違いないな。

左右の肘をハンドルに乗せ、両手の小指と薬指を組む。

両手の中指の先を合わせ、人差し指は両方とも外に向けて伸ばし、親指は左が上になるように重ねる。

ちょっと面倒だが、これで大威徳明王印（だいいとくみょうおう）の完成だ。

印を結べば、あとは唱えるだけ。

「？（ニシの）悉怛哩（デカブツ）　迦？波（バクハツ）　吽欠（しろ）　莎訶！（ってな）」

大威徳明王の真言。

五大明王のなかで西方守護、つまり西からくる敵を撃滅する役目で、また名前のとおり恐るべき明王として記憶されている彼は、何をおいても『怨敵調伏』に特化した明王だ。

例えばチベットの説話で、悟りをひらく直前に殺された恨みでこの世にとどまり無差別殺人を繰り返す悪霊を、見かねた文殊菩薩が大威徳明王に化けて倒したなどというストーリーに代表されるように、仏教尊格の凶暴な一面をあらわしている。

「オン　シュチリ　キャラロハ　ウンケン　ソワカ
オン　シュチリ　キャラロハ　ウンケン　ソワカ
オン　シュチリ　キャラロハ　ウンケン　ソワカ……」

『あァ？
さっきから何ブツブツどもってやがんだァ？』

メス豚はもう待ちきれないようだ。
それではどうぞ、お待ちかねのスーパー保憲タイムでございます。

大威徳明王に儀式の上で願うことは、通常ただ一種類。

怨敵調伏。
つまり、相手の死だ。

「ほいっと」

真言を七度唱えたのち、前回の反省から薄いプラスチック素材のカードに取り換えた呪符を、カーゴパンツから取り出して後方へ投げつける。

一束を六〇枚つづりにしているから、必要になるのは二束。しめて一二〇枚だ。

“草木国土悉皆成仏”という言葉がある。

これは日本呪術の特性を、非常にうまく言い表したものだ。

どんな生き物にも霊力は宿っている。ほんの少しだけではあるが、超常・異能の世界を認識する可能性は残っている。たとえ能力者でも、個人差はあれ霊力を持っているのだ。ただ単に少なすぎて使えないだけで。

その意味では、“能力はあるが役に立たない”レベル０と立場は似ている。

さて、その霊力に反応した呪符たちが、次々と建機のコクピット付近に集ってゆく。

五、六枚は風で飛ばされているが、問題ない。今回本当に必要なのは一〇八枚なのだ。

……とはいえ効率悪いから、今後このやり方は封印しよう。

『テメェ、何のつもりだァ？
コンなもンで目隠しできるとでも思ってンのかァァ？』

いい加減うるせえな。
なんか粘着されそうな気がするが、ここは答えてさしあげようか。
右手で刀印を切って、真言を唱える。

「否。
オン・シュチリ・キャラロハ・ウンケン・ソワカ！！」

バチン、と音がした。
視界の“右側”にアスファルトが迫っている。

上半身が横倒しになった態勢を自覚し、あわててハンドルを空いている左手で握ろうとすると、今度は左手が動かない。さらにパニックになりかけたところで、上体がふわりと浮きあがった。

初ちゃんの能力だ。

《こうなると思ったよ》

《すまん》

彼の能力でバランスを立て直したおれは、右手でハンドルを握り左手を見た。

肘から先の肉が全面的に裏返っている。また入院決定かな。

痛みを感じないのは、おそらく脳が状況を理解していないからだろう。できれば永遠に理解しないでいてほしい。

だがそんな感傷的なシーンでさえ、あの女はぶち壊してくれる。

ぎしぎしと嫌な音をたてて、建機が徐々に減速を始めていた。

クソ。

“死んだ”のは、あの建機か。

『てンめェェェェッ！！　いったい今何しやがった！！

何もンだクソ野郎ォォォォォァッ！！』

《うわー、怒ってる》

いつのまにか前方に戻ってきたガヤルドから初ちゃんが冷静にコメントするが、今こそ危ない。

だいたいあの手の建機は、腕からパイルバンカーか何かを射出できるようになっているものだ。今すぐ加速せねば、『先生』が危険にさらされる。

《初ちゃん、加速しろ。まだ終わってない》

《わかった……用心深いね、いいけど》

ともあれ、第一段階はおれの勝ちだ。

それをあのメス豚に理解させるためには、多少の演技も必要だろう。

そう考えたおれは、加速したガヤルドの後ろ姿を見送ってからサイクルの上でわざわざ振り向き、死にゆく建機に向けてオカルトさん風に叫び返してやった。

「ハ、ハ、ハ！　でかい図体に油を回しそこねたか！！！

まあよかろう、名乗ってやる。

我は加藤保憲（かとうやすのり）！　学園都市を呪う者なり！！」

第二十四話の一　起爆剤

だいぶ音量、というか思念量は小さくなっていたが、初ちゃんから

《次のジャンクションを左》

などというエセ念話が届いていたので、どうやら『先生』は無事に放射二号線へ入れたらしいと推察がついた。

あと問題なのは、待ち伏せがないかどうかだ。

ＭＡＲは小さな組織ではない。囮のコンボイを作れるだけのトレーラーや、ガレキ撤去用の名目で予算と実物を獲得した多砲身機関砲（チェーンガン）搭載の“救難”ヘリも配備されており、駆動鎧などは数十基のオーダーにのぼる。

その一部が先回りしていても、不思議には思えない。

……などというおれの心配は、まったくの杞憂に終わった。

思えば青いガヤルドが見えてきた頃から、逆に別のことが不思議

に思えてならなかったのだ。一体なぜ、対向車線やガードレールの向こうに、こんなにたくさん煙が上がっているのだろう、と。

その疑問は、ようやく姿を見せた救難ヘリの末路を見ることで氷解する。

末路、などと言う単語を使っていることからわかるように、彼ら二機の“救難”ヘリはエンターテインメントの金言、

「ヘリは墜ちるもの」

をその身でもって証明する存在となった。

……要するに、初ちゃんの『量子変速』で周囲の空間だけ重力加速度を書き換えられ、そのまま墜落したのだ。

あーあー可哀そうに。

ヘリパイにも結婚相手や子供がいたかもしれないのに、初ちゃんも短絡的なんだから。

もちろんこちらを殺しにかかっている以上、立場が逆になっても文句は言えないというのが筋道だが、呪術戦に持ちこんだ結果として半ば以上をオカルトさんに乗っ取られつつある今のおれに対して、もともとの“おれ”すなわちキビツ系思考回路が小さく抵抗したと見ることができるだろう。

おれという人格は、自分で思っている以上に常識的だったらしい。

それはともかく。
これでなんとか、おれはガヤルドに追いつけたわけだ。

《悪い、遅くなった》

《やあジャク、今来てくれてよかったよ。
さっきまで汚い花火大会でね、破片がそこらじゅうに散らばってヤバかったんだ。あのとき一緒にいたら、間違いなく怪我してたよ。
車にも二、三本筋が入ってるし》

《なに！？》

《ああ心配しないで、乗ってるふたりと走行系に異常はないから。
ただ、『先生』は怒り心頭でね。僕の給料何ヶ月分かを奪いとって修理代にしてやる、って息巻いてた》

なるほど。
ジャクはつまり、ふたりの精神面まで含めて許容範囲を超える異常は見られないと言いたいのだろう。
車の修理などと言う、まあ確かに金銭的には高くつくが今の状況にあっては些事でしかないことで怒れるところまで、精神の余裕が戻ってきたことになるからだ。

《まあ、それなら大丈夫だな》

《大丈夫じゃないって。僕の給料だよ!?》

《だから大丈夫なんだよ。考えてみろ、おれと『先生』は八人分の移送費用でもう給料が数か月分吹っ飛んでんだぞ？
　このうえ車の修理代まで自腹きって、お前が悠々と外食してるのを見てられるか》

《そういうことじゃ……まあいいや。
　そうそう、ジャクが言ってた通信関係の施設、割り出せたよ》

《トラックは入ったか!?》

《まだ。でも方向的にはそこに向かってる》

《よし、二号線降りたら脇道に入ろう。『先生』の用意は？》

《できてる》

《なら急ごう》

おそらく初ちゃんが代理中継していたのだろう、おれが念話を送

ったのとほぼ同時に、エンジンがひときわ高く唸ってガヤルドが加速した。

急がなければならない。

なんといっても、おれは木原テレスティーナを殺していないのだから。

＞ｉ２１８１１―２９３８＜

こういう考え方をするようになったのは、いつからだろう。

なぜか『警備員』が封鎖線を張っていた出入口を開けてもらって放射二号線を降り、件の通信施設への道を急ぎつつ、おれの一部はそんなことを考えていた。

おれ、すなわち元・吉備津脱解（きびつとりひろ）は、誰かを殺す殺さないなどということを平然と思える類の性格破綻者予備軍ではない。

故郷の世界、すなわち学園都市も世紀末の群発地震もなかった世界においては、ちょっと暗い傾向はあるもののまだ有り得るパターンの性格を持っていたと自負している。

少なくとも、おれのたった四人だけの友人のうち、三人はそうだと認めてくれた（残るひとりは言をはぐらかして、答えてくれなかった）。

それがどうだ。

今や自分の同級生が死にそうな目に遭っているのに、その事態を引きおこした張本人をいかに惨めったらしく殺すかなどという、ほとんど馬鹿げたことすら考えている。

脳内のオカルトさん知識体系という強烈な個性の重すぎる影響なのか、それとも自分の隠された本性というやつなのか。

ハンドルを切りながら、おれとしては前者の説を推したいものだが、と思う。

だが同時に、後者の理由が一〇〇パーセントでは確実にないものの、まず〇パーセントでもないと、脳内の別の部分が冷徹にはじき出している。

ただ、ともかくオカルトさんという個性に影響されているのは確かだ。

このオカルトさんという人物、人を人とも思わない俺様主義の思考回路で、自分の役に立つものはとことん利用してから殺し、自分の気に入ったものは何十人何百人を殺してでも守り通すという相反するようなこともやってのけている。

あの“旧オカルトさん”の思考回路を受けついだ人間であり、彼の夢によると平将門ともつながりがある人物ともなれば、それなりに人とは違う神経を持っていても仕方がないと思わされてしまう。

だが、要するにそれは一〇〇〇年前・二〇〇〇年前で思考回路が止まっているわけで、こちらとしては迷惑および異常きわまりない。

そんな人物が脳内で自分勝手に結論を出し、『幻想御手（レベルアッパー）』を聴いた際にはしゃべり、笑い、さらに体を乗っ取ることもあったのだから、何かにつけて反射的に動く体の方が彼の凶暴性に慣れてしまっ

て、戻ってきたおれの意識に影響を与える、などという事だってありうるのだ。

先程の「学園都市を呪う者」発言など、完全に学園都市の運営側へケンカを売った行為とみられるだろう。おれ自身は学園都市の一機構に隷属する存在にもかかわらず、だ。

これは明らかにオカルトさんの影響と見ねばなるまい。

ただ、オカルトさんの影響力が高いにしても、おれサイドの順応が早すぎる。

工業地帯に入っていくガヤルドを追っていたおれは、また考える。

要するに暇なのだろう。

友人の危機というこの時に余裕をもってサイクルの上で考え事ができるというその事実が、おれに考え事の種を与えている。

おれが今の状態になり、加藤若一として目覚めたのが、小六の秋。

それから今年の七月十八日まではオカルトさんを論理・知識体系として脳内でそこそこの地位を与え、七月十八日から二十三日まではオカルトさんを別個に独立した人格として脳内で特権的な地位を与えていた。

こうしてみると、オカルトさんが“起きていた”時期というのは、意外に短い。

まあでも、そのあと勝手に“遮光板”を使って出てきたり、勝手

に統括理事長にケンカを売ったり、おれを今の暗部の位置に押しこんだり、ホント存在感あるよなあの人。

ともかく、おれが“影響を受けた”と言い張るには、オカルトさんが実体化していた期間は短すぎるのだ。

となると、もっと前からオカルトさん論理・知識体系の形で、おれが影響を受けていたんだろうか。

しかし、オカルトさん論理体系・知識体系が提出というか押し付けてくる暫定結論は、無視して何ら実害のないものだった。実際、おれは上条（かみじょう）さんに声をかける時、彼の警告を無視している。

つまり、オカルトさん論理体系は選択肢を提示はしても、おれがそうした選択肢を選ぶように誘導はしていない。

もちろん選択肢を限るという形での誘導は別だが、そもそも選択肢自体を無視することもできていたのだし、あの頃はまず人の生き死にが身近にまだなかった。

であるならば。

おれが木原テレスティーナをメス豚と呼び、彼女の死にざまを妄想してニヤニヤする、正直言って気持ち悪い人種になったのは、暗部に堕ちてからということになる。

早い。
変化が早すぎる。これはいったいどういうことだ。

結論が出ないまま、青いガヤルドについて左に折れると、めざすべき通信施設が見えてきた。
あわてて塗り直したのか、ＭＡＲの模様が白地の下に出た輸送車が、コンクリートの掩体壕のような台形の地上建物奥にちらりと見える。
あの建物の形状からすると、地下の方が容積大きいんだろうな。
エレベーターがあることを祈るか。

初ちゃんが遠慮仮借なく能力を使ったのだろう、二台のトラックが後部扉を開いたまま空へと吊り上げられ、中からぼろぼろと駆動鎧が転がり落ちてゆくのが、ガヤルドの後ろにサイクルをつけたままでもよく見えた。

通信施設の中央管制室で、一〇〇キロオーバーの走行をつづける木山先生を追いかけるため立ちこぎを続けていて足が痛くなったおれは、初ちゃんが主電脳に割りこみをかけるのを見ながら、その後ろで左手を消毒しつつだらしなく座り込んでいた。

さっきまでさんざんいろいろと揚げて落としておきながら、よく初ちゃんはハッキングなどかけられるものだと思う。

包帯を巻いたはいいが結ぼうとして失敗し、手首と肘先に出てきた包帯の切れ端をどうにかくっつけようと奮闘している最中、残りのふたりはシリアス極まりない会話を交わしている。

「どうだ、分かりそうか？」

「申し訳ないですが、こいつはちょっと厳しいですよ。ジャクはあの建設用駆動鎧を完璧に封じたわけじゃないって言ってますし、こうなると追いつかれた時のことも考えておくべきかもしれません……

やべ、地雷踏んだ」

「大丈夫か！？」

「大丈夫ですよ、身内のプログラムのふりしてますんでとりあえずは。

……やっぱり利用者名簿はアドミニ権限じゃないと無理っぽいですね。そこまで面倒なことはできないし……電源供給から探っても

いいですか？」

「それはいい考えだ。あの形式のベッドは大量に電気を食う。さっそく始めてくれ」

「了解です」

ハッキングと言っても、E．T．よろしくキーボードの中心近くに手の指をあてて、そこで重力子を操ることでコンピュータを動かしている。

その様子をぼんやり見ていたおれのうなじに、ピリッと鋭い痛みが走った。

昨日と同じだ。

残った二束のうち一束から十枚ほど抜きだして、扉に張っておいた呪符が破られるとき今のようにうなじが痛む。

人は悪い予感や何かの気配があるとき首の後ろで感じると言うが、そこだけは鏡を使わないと自分の目で見えない場所だからかもしれない。

それはともかく、おれは情報の収集を続ける。

耳鳴りや幻覚などで、呪符が情報を知らせてくれるかもしれないのだ。できるだけ頭をボーっとさせておく必要がある。

金属板の階段を下る足音。複数だ。
何やらかしましい声。メス豚のような自己陶酔演技の入った声ではない。
新手か？

『……戦闘の跡……』
『……破って……』
『お姉様……お力を……』

オーケーだいたいわかった。
さすがは統括理事会、予定通りのご到着ってわけだな。

「ふたりとも悪いけど、新手が来たぜ」

その言葉に、コンソールを睨みつけていた二人が向き直る。

「本当か！」
「相手は誰！？　あと人数分かる！？」

詰め寄るふたりを白いぐるぐる巻きの何かに化けた左腕で抑えな

がら、おれは正直に答えた。

「『風紀委員』および有志。総勢五名、うち最低二名は能力者。……これはおれの単なる想像だけど、御坂さんたちとここでハチ合わせるのはまずいんじゃないかな」

はやる『先生』を押さえて、おれたちは大量にあった空室のひとつに潜りこんで過ごすという、とてつもなく古典的な方法に出ていた。

初ちゃんのもはや重力操作と呼べるのか疑わしい電子的侵入行為によって、中央管制室のマイクが拾った音をこの部屋のスピーカーが流すようになっている。

マイクが最初に拾ったのは、誰かが椅子に座る音、そして算盤を弾くようにリズミカルなキーボードの音だった。

なんだ？

いったい誰が打っている？

『どう、いけそう？』

押し殺した、これはたぶん

「佐天（さてん）さん……？」

おれ以上に驚いている、初ちゃんの声。

そうか、初ちゃんも彼女に、というよりも今中央管制室にいるメンバー全員に（恐らくは）会ってるんだったな。

『風紀委員』プラスアルファのアルファが気になっていたが、御坂さんはまず確定として佐天さんが出てくれれば、もう四人までが判明したことになる。

五人目は誰だ？

『待って、プロテクトが堅い……』

これは語りかけられた初春さんの声。

プロテクトが堅いとはどういうことだ？

まさか今、彼女は主電脳の正面玄関を蹴破ろうとしているわけか？

彼女、本当にそんな特技あったのか。

『まったく、お姉様がひとつ残らずお片付けになるから……』

『しょうがないじゃない！
さっきは囮だなんて思いもしなかったんだから……』

この疲れた声は白井（しらい）さんと御坂さん。
何やら、白井さんが御坂さんをなじっているようだ。木原のメス豚が叫んでいた通り、彼女らは囮のコンボイを追っていたようだが、“囮をひとり残らず片づけた”＝“戦った”＝“電池切れ”ということか？
つまり、普段の彼女なら初春さんに頼らずとも主電脳を陥落させられる、という意味に取れるんだが、それで大丈夫なのかな。

「彼女も、普段はきみと同じように電気機器を使っているようだな」
『先生』の評。「きみ」は初ちゃんをさす。
できればここは否定してほしい所だった。御坂さんのレベルになれば、ほとんどどんなセキュリティも一点突破できるじゃないか。微弱な電流を走らせてプログラムをソフト面で突破しなくとも、最悪プログラムを切るぐらいはできる。

つまりあれか、やはりE．T．式は電磁系能力者の常なのか。
それとも主人公補正か？　まったくヒロインはこれだから……
ああいやいや、こういう思考回路が自己研鑽への道を閉ざすと御坂大先生がおっしゃる通りでして……

待てよ。

ヒロインといえば。

どうして彼女たちはここにいるんだ？

あの二台の車に枝先さんが乗せられていることは、ＭＡＲが事件の黒幕であることを知らなければ感づかないはず。

彼女たちは、どこでＭＡＲの正体に気づいた？

御坂さんとメス豚の発言から、彼女たちが初めのうちは囮を追っており、ついでにその囮部隊と大立ち回りを繰り広げていたことが分かる。

となれば、囮の方に気づいたのはかなり早い。

恐らく『警備員』から衛星画像をもらっていたのだろうが（なにしろ『警備員』があのコンボイを追っていたわけだし）、まず『警備員』に画像調査を頼む時点で早すぎる。

昨日の病院で枝先さんの強奪に遭遇していた御坂さんがそのことを仲間たちに話したとしても、ＭＡＲを疑う確実な理由にはならない。ＭＡＲの塗装を真似した、どこか別のグループかもしれないからだ。

ならば、もうひと押しどこかであったはずだ。
それはどこだ？

『けど、今回の事件にもあの木山が関係していたなんてね……』

少し大人っぽい声。
どこかで聞いたことがあるが、誰だったかな。
どうもスピーカーから流れてくる声で思考が中断される。

「これ、五名中四名が能力者だよ。
嫌な連中が来たな」

初ちゃんがそう言うならそうなんだろうけど、つまりレベル０は佐天さんだけか。
結局このちょっと年上っぽい人は誰なんだ？

「おい……」

「静かに。あの人は銀行強盗事件で僕から事情を聞いてた人」

あー、いたなそういえば。
メガネをかけた、たぶん女子高生の『風紀委員』。名前は知らんけど。

『子供たちが目覚めるなら学園都市が壊滅してもいいなんて、無茶苦茶にも程がありますわ』

『でもあの人がいなかったら、こうして春上（はるうえ）さんの居場所も突き止められなかったわけですし……』

白井さんのぼやきに佐天さんがフォロー。

春上さん？　誰だそれ。

というか、あんたらの中で『先生』はどういう立ち位置なんだ？

『それにしても、春上さんと枝先さんをさらって、ＭＡＲは何をするつもりなんでしょう？

確かに春上さんは、枝先さん限定で強い『精神感応（テレパシー）』とＡＩＭ拡散力場への干渉力を持っていますが、それが分かっている今、改めて要求することもありませんでしょうに』

『うーん……』

白井さんの疑問に、御坂さんが考え込んでいる。

とりあえずこいつらが誘拐の主体を“ＭＡＲ”として考えていることは分かった。

ＭＡＲとは反対側に自分たちを寄せる“もうひと押し”が、これ

か。

おおかた春上さんとやらも、ＭＡＲが附属病院からどこかに転院させると言いつつ、自分の腹のうちに隠しこんだに違いない。

医療組織はだいたい転院時に“神隠し”を起こすからな。

ところが間の悪いことに、春上さんはヒロインズの誰かと友人関係にあった、と。

御坂さんが昨日の枝先さん強奪騒ぎをみんなに話して、不審を抱いたメンバーがＭＡＲに春上さんのことを問い合わせたら矛盾が出てきたとか、そんなところかな。それでＭＡＲのトラックを画像検索してもらったらコンボイが出てきて、仲間たちが飛びついてしまったと、だいたいこんな理由だろう。

囮を見破ったのは、恐らく直接的には初春さんの功績だ。

絶対関連があるはずの木山先生のガヤルドが、明らかにコンボイとは違う方向へ進んでいることに気づいたのだろう。

木山先生が関連しているはずだと最初に考えたのは、御坂さんあたりだろうが。あの人はバトル中でも考えることをやめないから、自分たちが時間稼ぎに使われている可能性とあわせて囮方面での木山先生の不在を疑ってもおかしくない。

それにしても運のいい人たちだ。

御坂さんたちにしろ、春上さんという人にしろ。

ここにいるのが“おれ”ではなく加藤くんだったら、血の涙を流してうらやましがるだろうに。

加藤くんに憑依してこちらで生活を送ってきて、時々思うことがある。

学園都市はこれほどまでに完璧な科学都市で、文句のつけようがない理想を体現した街といえるのに。

なぜ、おれはカツアゲに遭うのか。

なぜ、無能力者はそれだけで蔑視されるのか。

なぜ、加藤くんは誰にも助けてもらえなかったのか。

ちょうど今、勝利の女神どもが“彼女たち”のもとへ突き進んでゆくというのに。

しかしこの場でそんなことはどうでもいい。

とりあえず、ふたつ分かったことがある。

まず、春上さんという人は、限定された状況下で高レベルの精神感応を示すこと。ここでの意味は“相手が限定される”ことだそうだが、その相手が誰あろう枝先さんだ。まさに“絆が万里を超える”わけだな。

次に、春上さんは枝先さんとおれの同級生八人へ能力暴走を引きおこす

「起爆剤」

として、ＭＡＲに目をつけられたということ。

おおかた、メス豚は能力体結晶だかで春上さんを廃人にしてそのショックを枝先さんに伝え、枝先さんと彼女から念を受けとったおれの同級生八人をレベル６にできればいい、などと都合のいいことを考えていたのだろう。

その予備実験というか予備動作を行うために、このふたりを誘拐したと。

バカバカしいこと極まりないが。

……心の中に眠っていたオカルトさんんが、脳内で爆笑を始めてますよ。

いわく「レベル６とやらを誕生させるためなら学園都市の七割を崩落させるか、思い切りの良さは買うが成功しなければただの悲劇どころか喜劇になるぞ」だそうで。

いやまったく同感。そういえばＲＳＰＫ症状の共鳴で、全学生の七割が発信源の巨大地震も起きるんだったな。

統括理事会という連中も、人が悪い。

レベル６から地震まで、何でもかんでもヒロインズ――いや、ヒロインの両肩に背負わせるつもりか。

「まずいぞ。早くふたりを救い出さねば……」

無人のはずの部屋で気ばかり急く先生をなだめるおれたちの耳に、ある意味では待っていた声が飛び込んできた。

『あった！！

今この施設内で、消費電力が桁違いの場所！

最下層ブロックの……！』

第二十四話の二　立ちはだかるは

ドガン、と重い音。
どうやったのか知らないが、駆動鎧の横っ面が“張り飛ばされて”、見ている分には愉快な状況となりつつある。
何が？
決まっているでしょう。
木原のメス豚に。

「……なンだテメェら」

「まったく、いいかげんにしろと」

まるで生身の人間のようにギギギと音をたてそうなスピードでゆっくり前に向きなおるメス豚に、初ちゃんの心底うんざりしたような声が重なる。
場所は掩体壕のような通信施設の入り口、その真ん前。
おれと初ちゃんは、まさしく背水の陣を敷いて木原の走路妨害を敢行していた。
立ちはだかるは加藤に介旅、てなもんである。

「ハイハイ戻って戻って邪魔だから」

「……邪魔だァ？　テメェら、ここをどこだと思ってやがる」

「先ほど統括理事会に接収された通信施設ですよ。関係者以外立ち入り禁止、ってね」

「このガキ……」

おれたちの背後に控える地下通信施設が自分の本拠地だと信じて疑わないメス豚を、初ちゃんが邪険にあしらいながら面白そうな眼で見る。おれや『先生』も以前はあんな目で見られていたのだと思うと少しばかり複雑な気持ちだが、とはいえ悪い気はしない。

あのメス豚が自分の立場を知る日が来た今となっては。

それにしても楽しそうだな初ちゃん。

いつでも自分が相手をひねりつぶせるという優位は、人にここまでの余裕を与えるのかと驚く俺に、脳内でオカルトさん回路がふふんと笑った。

考えてみれば、オカルトさんもいつも圧倒的優位に立ちながら何度も負けてきた人だったような気がするな。その手のことには十分な経験を積んでいるわけだ。

＞i21811―2938＜

「っとに、何にも聞いてないの？　こちらも急ぎの用事でしたものでってか。

あ、そうそう自己紹介してなかったね。

わたくし、学園都市統括理事会附属旗旒紋章委員会調査第三部の副部長を務めさせていただいております、えー生神要と申します。

先進状況救助隊のテレスティーナ＝ライフラインってあんたのことだろ？　命令が出てるはずなんだけど、なんでそっちに連絡行ってないのかな……」

なんとまあ、ちらりと後ろの爆撃にも耐えられそうな施設入り口を横目に、おれは呆れに近い思いを抱いた。

よくもああすらすらと、息を吐くように嘘を並べられるものだ。

『フラッグ』という名前から、あそこまで架空の組織名を膨らませることができるのも素晴らしい。つーか、誰だよ生神要って。

「テレスティーナはあたしだけど、なンか用？
ちゃっちゃと終わらせて失せろ」

「失せんのはあんただよクソババア、場を読めっての。
さっきから聞こえてないのかな？　この施設は一時的に統括理事会、の代理として我々二名が接収させてもらったんだよ。あんたがどんな権威を振りかざして何をわめこうが、僕たちは統括理事の誰かから指令が来ない限りここを引き上げない」

「ンだとぉ？
ここは『警備員』先進状況救助隊が借り上げた施設だ。統括理事会の名を騙るたぁいい度胸だが、あとで泣きを見るのがどっちか分かってンのか？」

メス豚は動揺もせずに言いかえしてきやがる。こういう場数は踏んできたのかな。

ただ、こんな場面では頼りになる初ちゃんのこと、息をするように嘘がポンポン口から飛び出してゆく。

「そっちの事情なんて知ったこっちゃない。

こっちにはプラチナバーグ統括理事のお墨付きもあるんだ、なんだったら旗旒紋章委員会に問い合わせてみる？　『警備員』風情がでかい口たたいてると痛い目見るよ」

「だいたいその旗旒紋章委員会ってのが胡散臭ェ。組織名は聞いたことねェし、そもそも実在しない組織名を誰かがデッチ上げても追いきれないとこだからなァ、統括理事会ってのは」

「聞いたことあろうがなかろうが、実際に存在するんだからしょうがないでしょ。

ああそうそう、統括理事で思い出した。親船最中統括理事からあなたに、メッセージをお預かりしておりますが、読み上げますか？」

そこまで聞いて、打ち合わせ通りにおれは駆動鎧の背後へ回る。

これまでもそうだったが、ここからが初ちゃんの正念場だ。

もちろん親船理事からのメッセージなど存在しない。

おれたちが、というより初ちゃんが勝手にでっち上げて発表する

だけのシロモノだ。
しかし、それを伝達する数秒間、メス豚は初ちゃんに注目せざるを得ない。彼は自分の身ぐらい自分で守れる能力者だから、俺が心配する必要はないし義理もない。

「メッセージだァ？
あのババア、今ごろ何の用があってお手紙なンぞ寄越しやがった」

「知らないよこっちが知りたいよ何であんた何も知らないんだよ。
まあいい、どのみち云いたいことがあるのは変わりゃしないんだ。
以下、大意のみ伝達を命じられているので、多少こちらのアレンジが入る点はご了承。とにかく口頭でお伝えさせていただきますよ。

よくもここまで来たものだ。
きさまは私の全てを奪ってしまった。
これは許されざる反逆行為といえよう。

この最終人間兵器をもって、きさまらの罪に私自らが処罰を与える。

死　ぬ　が　よ　い　」

シューティングゲームのセリフ丸パクリか。
まさしくシューターだな初ちゃん。
あと最終人間兵器とかさすがに言いすぎ。

だが、

「何ィ？」

メス豚には通じなかったようだ。
そりゃそうか。アーケードゲームとかやるようなご家庭の人間じゃないものね。

「……だからさっきから場を読めっつってんだろクソババア」

初ちゃんもいい加減キレてきたみたいですね。
こういう漫談で時間を稼げるのは、下にいるヒロインズのためにはちょうどいいのかもしれないが、こっちは神経がささくれ立つばかりである。

だからして、初ちゃんがおれを空中へ放り上げるタイミングは今しかない。

ちらりとこちらを盗み見る初ちゃんに右目でウィンクする。
リフトオフ。

「あのね？
今この下で、清く正しいヒロイン連中が囚われの女の子を助けようとしてるわけ。
ラスボスの魔王はそこにいない時点でもう出場資格を失ってるわけ。

だってそうだろ、ヒロインが悪の根拠地に忍びこんでお姫様を助け出そうってその瞬間に、いきなり現れて背後からの一突き（ドルシュトース）をかますような小悪党がボスキャラになれるわけねえんだよ。せいぜい前座が精いっぱいだ。
だからあんたも晩節を汚したくなければ、今すぐ回れ右することだね。

あんたがさっさと諦めて青服（アンチスキル）に出頭すれば、それで丸く収まるの。
それが嫌なら、今からここでレベル３（笑）にやられて這いつくばる運命が待ってるんだけど、どっちがいい？」

「あ？
テメェ何ほざいてやがる……」

「？（イマ）、辺雑羅（オレは）、薩？（ムテキ）、吽（だ）ッ！」

禹歩のステップを手で調子取りつつ、金剛薩（こんごうさった）？の真言をひとつ。

両の足裏に咒符を一枚ずつ配置。

絶対に肉体を破壊できない釈迦のガードマン金剛薩？の加護により、呪術ですら破壊しえない神経回路と肉体を一時的に手に入れたおれは、ちょっとやそっとでは傷つかない、比喩的にはまさに黄金の肉体と精神を持つことになる。

このため、術の反動もすぐには来ないし、肉体強化の呪言とともにゆっくり解呪すれば筋肉痛レベルの異常まで反動を抑えることができる。逆に破られた時の反動も倍増どころではなくなるのだろうが、そこまではこの短期間に実験しきれていないし、する必要性も感じない。

破られたら死ぬわけだし。

これに木山先生特注の発条包帯（テーピング）で両足を保護すれば、それなりに衝撃を吸収してくれる。

だからして、空中に放り出され無事に着地することも不可能ではない。

風を切る。

直下に紫色の駆動鎧。

その右腕の先には白い槍。
どうするか考える時間もない。

呪符が駆動鎧の左肩に当たり、破れて消える。
スニーカーの踵と駆動鎧の肩が、互いの衝撃を抑えきれず一瞬で潰れた。

着地の衝撃を逃がす方法など知らないはずだったが、オカルトさんは覚えていた。
足を制御して腰を限界まで落とすあいだに急減速。背中につきあげた痛みは無視。

すぐに後ろへ飛ぶ。さらに両足の調整。
床に着地、脊髄に痛み。
目線を上げると、ススにまみれた駆動鎧。
見えてもうれしくもなんともないですね。

「……テメェ、何しに来やがった」

その鎧を操縦している口裂け女――木原が、ギョロ目でこっちを睨む。
さすがにおれのことは覚えていたようだ。
びしびしと目にみえて悲鳴を上げる駆動鎧の左腕先端にあるマニ

ユーバが、突然にぎりこんでいた五指を開いた。
命令系統いかれたな。

「何しに来たっつってンだろうがァ！」

メス豚が駆動鎧の右腕を繰りだすが、あいにくおれのビビリ根性は半端ではない。
何が言いたいかといえば、前面に腕を交差させて“遮光板”を立ち上げた場合の防御力も、また半端ではないのだ。

鈍い音とともに“人間の腕にぶつかって”ひしゃげた右腕の先の槍型マニューバを見て、木原の顔が痙攣する。
そんなメス豚に、おれはとりあえずクレームからぶつけることにした。
加藤くん意外に口が悪いんだ、と実感した瞬間である。

「他人が感動的な再会やってる所で口からションベン垂れてんじゃねえよ、メス豚」

第二十四話の二　立ちはだかるは（後書き）

長すぎたので二分割し、加筆修正しました。

注…

『よくもここまで～』
（C）ケイブ『怒首領蜂』、１９９７年。
シュバルリッツ・ロンゲーナ大佐の名台詞。
ちなみに作者は大佐蜂どころかグラディウスも無理。

『？辺雑羅薩？吽』
本来の読みは「オン・ベザラ・サッタ・ウン」他。金剛薩？への呼びかけを意味する。

第二十四話の三　Ｒｅｓｕｒｒｅｃｔｉｏｎ（前書き）

分割後半です。

第二十四話の三　Ｒｅｓｕｒｒｅｃｔｉｏｎ

中央管制室に『風紀委員』一七七支部ならびに愉快な仲間たちが来ていることを知った初ちゃんとおれは、第一目標だった

「メス豚にヒロインの面を拝ませない」

というスローガンに、多少の変更を加えることにした。

春上さんという迂回路を使ってではあったが、彼女たちとハチ合わせてしまったのだ。このうえは彼女たちが実験層に下るのを待って、中央管制室を奪還するしかない。

しかし、

「それは危険だよな」

という、おれの意見も通った。

つまり、おれとしてははなはだ不本意ながら、メス豚の建機や駆動鎧はともかく本人は命がある可能性が非常に高い。となれば当然、ＭＡＲまたは彼女個人の目的である春上さん経由の“起爆”を行うために、意地でもこの施設へ残存兵力とともに殺到するだろう。

「まあ、残存兵力があるのかどうかは知らないけど」
初ちゃんも、おおむねこれに賛同してくれた。
ところが、これに収まらないのが『先生』だ。

「それはどういうことだ？　ふたりの子供たちが実験台にされるのを、指をくわえて見ていろと言うのか！？
ここまで来ておきながら、そんなことができるものか！！」

「落ちついてください、『先生』」

「これが落ちついていられるか！
だいたいきみは最近少しおかしいぞ、どんなことにも必要と考えられる以上の冷静さで対処している。他の八人が安全な場所にいるから頭を冷やせるとでも思うか！？」

「ですから、『枝先さんを助ける』ことと『今ここで待つ』ことは両立しえるんです」

「……なに？」

中央管制室に入ったときから、おかしいと思っていたのだ。
施設の中の通信設備、特に音響系設備が異常に整いすぎている。
音響兵器による内線作戦――敵を施設内におびき寄せて掃討する

ことまで考えているのではないか、とは初ちゃんの弁。おれも異論はない。

だからメス豚を施設へ入れないための水際作戦を、おれと初ちゃんで行うことにする。

「それこそ、前に『先生』が言ってたキャパシティダウンなんかが装備されていないとも限りませんから、まず『先生』は御坂さんたちの様子を見た方がいいと思うんです」

「様子を見て実際にそういうプログラムが走ったら、どうしろと言うんだ」

「その時は僕たちは床を転げまわるだけの役立たずになりますので、頃合いを見てもらって管制室に突入、イスかなんか引っつかんで主電脳を物理的に破壊してもらいます」

けっこう自信ある作戦だったんだが、『先生』には呆れられた。

現状じゃ仕方ないと思うんだがな。

まさか『先生』を反生反剋にして駆動鎧と戦わせるわけにもいかないだろう。木侮金で『先生』の体を金属より硬くすることはできるが、それでも体格や出力やスピードに差がありすぎる。

だいたい、『先生』にアクションを期待するのはまず無理だ。

「しかしメインコンピュータを破壊すれば、とらわれた子供たちを目覚めさせられないのではないか？」

「ああいう実験場のコンピュータが独立してなかったら、機密ダダもれですよね」

「……なるほどな。現状では他にいい手もないか」

『先生』がため息をつく。

その時、おれのうなじにチクチクと連続する刺激が走った。

相手は大型。これは、

「……ええ。

標的もこちらに近づいてきたことですし」

＞ｉ２１８１１｜２９３８＜

そして今に至ると。
ジリジリ音をたてていた機械鎧の右肩が沈黙した。

「ンな……」

人間による質量攻撃という未知の戦法を目にしてか、それともお気に入りの駆動鎧に傷がついたことを恨んでいるのか、メス豚の鳴き声が怒気をはらむ。
それを無視して、ここを先途としゃべりまくる初ちゃん。

「だいたいあんた何様のつもりだ？
何がＭＡＲだ、何が先進状況救助だ、黙って聞いてりゃ調子こいてベラベラ吹いてんじゃないよまったく。あんたらが貰ったオモチ

ャでやった事といえば、あの木山春生よろしく武装無能力集団（スキルアウト）に音楽ファイルばらまいて喜んでるか、あとなんだっけ、人さらいか？
『警備員』が聞いて呆れる。みんなの共有財産に何してくれてんの」

「共有財産？」

駆動鎧に生身で対抗できる人間というものを初めて目にしたのか、メス豚の気勢はそがれたままだ。

「そうだよ、あんたが気前よく使い潰しやがったスキルアウトのこと。
確かあれだ、対能力防護音響装置（キャパシティダウン）とかいうのの実地調査だっけ？
よくまああれだけ非効率に人間を使えるもんだよ、公的機関しかも『警備員』ならもっとうまく実験の体裁だって整えられたと思うんだけど？
能力犯罪者に使うって発想がどうして出てこないのか疑問だね。貴重な人的資源をボロボロボロボロ取りこぼして、結局何がしたかったのさ」

口をゆがめて、嘲りもあらわに吐き捨てる初ちゃん。いいぞもっとやれ。

ところが。
木原テレスティーナの回答は、こちらの予想の斜め下を行った。

「……テメェら、何言ってんだ？」

「は？」

思わず聞き返す。

メス豚の顔に笑みが戻った。

「何を言い出すかと思えば、そんな事か。テメェら能力者でも、スキルアウトなんて気にするンだなァ。

ちょうどいい、このテレスティーナ＝木原＝ライフライン様が、テメェらに学園都市の目的ってやつを教えてやるよ」

「……学園都市の、目的？」

「超能力の開発じゃねえのかよ」

そろそろ忘れられそうなので、安全圏に飛びのいてから一応会話に参加しておく。
だが相手は、おれの言葉尻をうまく拾ってくれたようだ。

「超能力（レベル5）の開発？　違ェな、絶対能力（レベル6）の開発だ。
そのためには何をしたって公的に許される、統括理事会もゴーサインを出す。
レベル6を生みだすのが学園都市の目的、大量の学生の能力開発はそのための“手段”に過ぎねェ。そして手段は違えど、目的においてはこの実験も間違っちゃいねェ」

「それがどうしてスキルアウトの使い捨てにつながるのか、今ひとつピンとこないんですがね」

「分かンねェか、この街そのものがレベル6を作りだすための巨大な実験場なんだ。その学園都市にいるテメェら学生は、スキルアウトだけじゃねえ、全員がそのために飼われてる家畜なんだよ！！
考えてもみろ、二三〇万なんてどえらい人口を抱えて、そのうちの五割近くを失敗作に仕立て上げながら、どうして能力開発が続いていると思う？　その先にレベル6が見えてるからだろうが！」

「レベル6ねぇ……」

聞こえるように言ったつもりはなかったのだが、どうやら聞こえてしまったらしい。
豚のシーカーがこっちに向いた。

「なンだクソガキ、自分がその境地に届かないからってひがんでも無駄だぜ？」

「いや、ほんの数週間前に似たようなことやって、でっかい失敗した人を知ってますんでね」

「ああそうだな、テメェあの木山とつるンでるンだったな。どうりで見つかるのが早いと思ったぜ。
あのクソアマはどうした？　元気か？」

「元気なんじゃないですかね。人さらいを通報したらしいですし」

「何だと」

豚の顔に縦じわが一気に寄る。もはや若作りをあきらめたんだろうか。

「さっきからのあんたの演説、聞かせてもらいましたよ」

「それがどうした？」

「学園都市はレベル６を作るための飼育場で、その中で暮らしてるおれたちはみんな家畜――ていうお話、興味深く聞かしていただきました。
まあ特におれみたいに後ろめたいことの多い生活を送ってると、

なかば賛成したくなることもありますね」

こんなセリフを地下にいる御坂さんが聞いていれば、確実におれは敵を増やすことになるだろう。もう遅いかもしれないが。

でもおれは、これからもっと敵を増やすことになる。

「しかしなぁ木原、お前は気づいていない、いや気づこうとしていなのだろう？

だからこそ滑稽さが増すのだがな」

「なァにィ？」

おれの口調か、それとも言った内容にか知らないが、メス豚が唇をねじり下げた。

重々しい機械音がして、イカれた駆動鎧のマニューバ、潰れた槍の先端を銃身のようにこちらへ向ける。

だがおれは嗤ったままだ。

「分からぬか！

きさまら研究者も、学園都市の運営者によって観察される、取り換えのきくモルモットということだ！！

スキルアウトだけが家畜じゃねえ？
ああそうだな、スキルアウトだけでも学生だけでも、きさまのごとき馬鹿面さげた自称科学者どもだけでもない、その全員が家畜なのだ！！
それすら知らずに人間様気取りとはおこがましいわ、四つ足をつかんか豚が！！」

「て、ンめェッ……」

煽り耐性が弱い人の常として、キャパシティを超える罵倒を並べると反応が一瞬遅れる向きがある。
その隙に金剛薩？の異常な力が、駆動鎧の左腕から指をねじり切った。
絶句する豚に、破断面を押しつける。金属片が顔に食いこんで痛いだろうが、そこから指をねじりまわして顔をえぐってやるのがオカルトさんクオリティ。

「豚よ、豚足だ。食うがいい！
それともきさまは便所の中身が好きか？　便所豚か？　ん？」

「黙れやァッ！！」

あ、やべ

衝撃。
浮遊感。
また衝撃。

体に傷はないものの、脳と内臓が妙な反響音をたてて揺れているのが分かる。
左腕を振り子にして、施設入口の脇まで吹っ飛ばされたか。
金剛薩？の加護は筋肉や骨、感覚器を最良のコンディションに持っていくけれど、体重を重くするとか衝撃を跳ねかえすとか、そういう部類じゃないからなあ。
まずい、頭がふらつく。反響音がひどい。何が無敵だ。

目を開けると、初ちゃんが駆動鎧の左腕を爆破していた。あいかわらずどういう能力か分からないやつだ。

「テメェ、何しやがンだクソガキ！！」

「そっちこそこんな怪しい施設で何しようってんですか。親船理事を怒らせたとなると、あんた相当後ろめたいことやってるわけです

よね」

言い合いはまだ続いているらしい。初ちゃんもまだ親船とか言ってやがんの。

今のうちに回復だ回復。

両手を合わせ、親指と小指どうしを合わせる。蓮華印といって、観音菩薩の加護を得るための結界に必要な印だ。

「決まってンだろ？　目的を果たすのさ。

これからここで、学園都市初のレベル6が生まれる。もうひとりのガキの精神感応能力を使ってなァ！」

「……え？

“あいつら”じゃなくて？」

「バカかテメェは。そんなにポンポンとレベル6ができてたまるかよ。

今回の被験者はふたりだが、夢の世界から生きて帰ってくるのは春上衿衣（はるうええりい）ひとりだけだ。

特定波長下におけるレベルを超えた受信能力。

こいつの能力は能力体結晶との共鳴に、実に都合がいい。高位のテレパスは希少だからなァ。

なァに、ちょっとばかりあのガキの、頭の中のゲンジツってやつを拝借するだけだ」

はるかかなたのサツマイモ鎧では、豚が狂ったようにしゃべり通している。
なにか逆鱗に触れたかな？

「自分だけの現実（パーソナルリアリティ）……」

「ふン、呼び方なンかどォでもいい。
要はその脳内活動をつかさどる神経伝達物質、とりわけ眠れる暴走能力者のそれを採取し、この『一次標本（ファーストサンプル）』と融合させる。
暴走能力者ひとり分じゃ抑止力として不安だが、あるとねェとじゃ大違いだ。
それによって能力体結晶は完全なものとなるのさ！」

だんだん自分に酔いはじめた豚が、コクピットの内側から透明なプラスチックケースを取りだした。
中に入っているのは、細長く赤い石。
あれが『一次標本』か。

「あのジジイはそのことに気づかず、ひったすらこいつのマイナーチェンジに気を取られてたようだがなァ。
……さて」

油断していたらしい。

豚に近づいていた初ちゃんが、視界の端まで駆動鎧に蹴っ飛ばされた。

「これでようやく実験開始だ。モルモットはおとなしく、分をわきまえて動けよ？
ヒャッハッハッハッハッハ！！」

両手を失った駆動鎧が、それでも誇らしげに施設入口へ、つまりはおれの方へと足音も荒く近づいてくる。
回復しきっていないし、ここは施設内で追撃するというのもありか？

いや、ここで少しぐらい勝利に貢献してもいいか。
おれは自分で『フラッグ』の出撃を言いだしておきながら、ここまでほとんど何もしていない。土御門さんに笑われるのは、後が怖いので御免だ。
脇役とはいえそれなりに力を持っているのだから、役には立っておかねばなるまい。
逆に言えば、自分は主人公になれないと悟ったわけでもあるが。

「オン　アビラウンケン　ソワカ

オン　アビラウンケン　ソワカ
オン　アビラウンケン　ソワカ……」

例の大日如来の小真言を唱える。反動負担は金剛薩?の加護で後回し。

駆動鎧の右腕でスタンガンのようにバチバチと音をたてる雷光に自信が今更わいてきたのか、ハイテンションになって独り言をわめきつづける豚の右側面に立ち、振りむいた豚の視界に入りつつ駆動鎧の右足に咒符を張りつける。

反剋の呪を一言。

「金侮火」

反応は劇的だった。

これまで先端がねじれ曲がりながらも順調な電子の収束を見せていた右腕先端部から、一瞬にして光が消える。

「何ィッ!?」

叫ぶ間も有らばこそ、駆動鎧の隅々に行きわたった電子が一斉に運動を開始し、駆動鎧そのものの電気配線や集積回路を侵してゆく。結果、駆動鎧の“膝が落ち”、メス豚は名の通り四つん這いの姿勢になる。

『金侮火』の反剋作用により、エセスタンガンではなく駆動鎧そのものがエネルギーを蓄えはじめる。これが駆動鎧のあちこちで、回路を弾けさせたわけだ。

四つん這いになったことによる位置エネルギーの変化に伴い、電子の一部は装甲鈑表面に決定的な電位差を発生させ、結果として新しく、その場限りの雷を表面に呼び出した。

つまり、落雷である。

「グギャアアアアアア！？」

その叫びは、新たに形成された重力場によって寸断された。

その後、無関係な人間の前でエセ念話を使いたくない初ちゃんの携帯通話を受けて中央管制室から上がってきた木山先生が、意識を失ったメス豚から奪いとった『一次標本』の解析に励みつつも件の春上さんや枝先さんおよびヒロインたちと人情ドラマを繰り広げている間、倒れたおれを担いで初ちゃんが地上階の医務室に潜み、土御門さんに救急要員の派遣を要請していたというのは、はなはだ余談である。

第二十四話の三　Ｒｅｓｕｒｒｅｃｔｉｏｎ（後書き）

注…

『Ｒｅｓｕｒｒｅｃｔｉｏｎ』
「復活」・「再生」。

『便所豚』
人間の糞尿を主食とする豚。もちろん家畜として飼育されているものに限る。
中国南部の畜産業者がかつて行っていた飼育形態。

第二十四話外伝　特別な日（前書き）

ひとつのエピローグ。

第二十四話外伝　特別な日

八月九日。

今年は土曜日であり、日本式の学校暦を採用している学園都市ではそんなもの関係なく遊び回る学生たちの元気な声が、朝から響いている時期でもある。

これが二〇日を過ぎたころになると、だんだん外で遊んでいる学生たちの声が、安堵とヤケの二種類に分かれてきたりするのだが、今日の時点ではまだまだ外に出ている誰もが余裕たっぷりだ。

ところが。

さまざまな条件により、まれにではあるが、焦りや困惑と言ったものを含んで声を出す人々もまま見られる。

そのような人々の中には、同じ理由で声にマイナスの感情が入っている人々もいる。

そんな一例が、ほら、ここにも。

>i218811—2938<

「まだかなぁ」

「もうすぐだよ」

「早く来ないかなぁ」

周りで清く正しい声がまた上がる。
彼、加藤若一（かとうじゃくいち）は、果たしてこの場にいていいものかどうか、自問せざるを得ない状況に陥っていた。

彼はいわゆる『木山学級』の生き残りである。
今となっては全員が健常ではないにしても平常の心身を取り戻しているため、生き残りという表現は不適切かもしれないが、少なくとも周りはそういう単語で認識していた。

では、今はどう呼べばよいのか。
彼の元“クラスメイト”たちは、口をそろえてこう言う。

「加藤くんは、僕らの友だちだよ」

……本当にそうか？　人殺しのおれが？
自分にそう問いかけてみるが、誰も答えてはくれない。
この場においては、その問いに価値はないともいえる。

そして、彼自身も思考を放棄しかけている。
原因は彼の頭の中にいる“空想上の仲間”だった人物だ。
学術用語であり空想上の者でも仲間でもないこの人物は、昨夜つまり八月八日の夜半を彼にしか聞こえない架空の声でわめき散らして過ごしていた。教会騎士団がどうの錬金術がどうの日取事（ひどりのこと）がどう

のと聞きなれない単語の羅列を延々聞かされた彼は、結局寝つけたのが午前四時というありさまである。
つまり加藤は、ありていに言って寝不足だったのだ。

「……おれ、なんでここにいるんだろ」

「僕が聞きたい」

前方から、やる気というものが一切感じられない声が上がる。
彼、介旅初矢（かいたびはつや）は、果たしてこの場にいていいものかどうか、自問せざるを得ない状況に陥っていた。

彼は『木山学級』と何のかかわりもない。
強いて言えば、職場でその生き残り、および学級を率いた木山春生（きやまはるみ）本人と面識があるぐらいのものである。

それが災いしてか、本来なら彼がいるべきではないこの場に、彼は呼び出された。
理由は目の前のバカにある。

彼には論理がまったくわからない技術を使ってテレスティーナ・木原（きはら）・ライフラインに立ち向かった結果、反動で一度は心臓が止まるところまで行ったこの同僚は、まだ自力で立ち上がるだけの筋肉を回復していないのだ。

だから日常生活には彼が介護してやらねばならないし、動くときは当然ながら車いすを押してやらなければならない。

それに、この論理が分からない術を更に意味不明な論理で解説する、独立した思考体系が脳内にあることも、彼の不安材料だ。

加藤を『幻想御手』から救った時に彼の脳内を走査していて見つけたものだが、これが自分の本脳へ侵蝕してきたとあって大慌てでサーチの枝を切ったのだ。彼（加藤保憲（かとうやすのり）、と氏名を申告した）のおかげで、ジャクの使っている妖術の意味は分かるようになったが、そういうものが実在するという事実は彼を恐怖に陥れつつある。

ともあれ彼は介護のためだけに、『木山学級』に同席することを許されていた。

ある女子にいわく、

「かとうくんのこと助けてくれて、ありがと」

ということらしい。

よくわからないが、そう言われたのだからそうなのだろう。

そういう事にしておく。

「衿衣(えりい)ちゃん、初春(ういはる)さんたちは？」

右斜め前で盛大にため息をついた部外者の少年を眺め、目尻を下げながら少しだけ笑いを浮かべた枝先絆理(えださきばんり)は、自分の車いすの取っ手を握っている同窓生に問いかけた。

彼女は、自分の意識しないところで、多くの人を駆りたててきた張本人でもある。

木山が教師という職業に対する考え方を改めたのは、彼女の意図しない一言がきっかけになっているし、まだここに来ていない常盤台の先輩がその木山という人物に対する見方を改めたのも、彼女にまつわる木山の記憶を読んだことからだった。

だが、彼女自身はそれを知らない。

知る必要もない。

そういったことを励みにしなくとも、彼女には自分の信念と自分の進むべき道があるのだから。

今は友達の手を借りなければ進めないけれど、それは永遠に続くわけではない。

それに彼女には、どれだけ遠く離れていても万里を超えて共にある、永遠の友人もいることだし。

「すぐに追いつくから先に行ってて、って……
それにしても遅いの、せっかくの記念日なのに……」

前方の車いすに座っている枝先絆理からの問いかけを受けた春上衿衣（はるうええりい）は、小首をかしげ眉の端を下げて答えた。

彼女は『木山学級』と関連を持っているわけではない。
しかし、距離や強度を問わない特殊な精神感応（テレパシー）でつながっている枝先が学級に編入されたことで、否応なしに関わらされることとなった。最近では、ほとんど珍品といえる彼女の能力を目当てに、現役の『警備員』に誘拐されるというヘビーな体験もしている。

しかし、彼女の新しい友人とその仲間たちが彼女を救出し、その後に枝先らも目覚めるという快挙をなしとげてくれた。
その一部には、右前方にいる車いすの少年も関わっていたはずなのだが、事件の解決にあたった人々はそれについて口を開こうとしない。

まあ、事情を知っている人たちがそういう態度なら、それはそれでいい。
問題は、いま彼女たちが遅刻しそうになっているという現実だ。
春上衿衣はそう考えて、ひとつ息をついた。

「早くしないと、間に合いませんよぅ！？」

「御坂さんと白井さんが遅刻なんて、めずらしいですね！」

息せき切って走りながら、それでも余裕を忘れない。
そんな級友を密かにうらやましく思いながら、初春飾利は警戒の叫びを発する。

彼女と彼女たちを待つ春上衿衣が知り合ったのは、不定期の転入生として担任の大圄から春上を紹介されたことによるものだった。
大圄は単に、自分のクラスにいる『風紀委員』が慣れない転入クラスや新生活をサポートしてくれればというだけの意図だったのだ

が、後になって考えてみると、これが恐ろしい幸運だったと言うしかない。

何しろ、春上と初春ら仲間たちが知り合いになったことで、『乱雑解放（ポルターガイスト）』事件は解決を見たことになるのだ。

途中で、ちょっと不愉快な行き違いはあったにしても。

だから、前回とは違って。

今回は遅れるわけにいかないのだ。

「まったく、お姉様ったら今日に限って寝坊なさるなんて……」

「うっさい！　あんただってぐっすり寝てたじゃない！」

敬愛する先輩の反論を受けつつ、白井黒子（しらいくろこ）は考える。

今回の事件は、彼女と初春が逆方向に先走った結果として、あまりよくないプロセスを残すことになった。

しかし、事件そのものは終わってはいない。むしろこれからが始

まりとさえ言っていいだろう。

テレスティーナ・木原は、あのいまいましい加藤の破壊工作によって駆動鎧（パワードスーツ）が内部破壊された時、両手をついて四つ足の形になった。そのとき左手の偽超電磁砲（ファールスレールガン）の電場が本物の超電磁砲（レールガン）の斜角と中途半端に交わっていたせいで、頭部装甲がなくなり頭を前に出したかたちの木原は重傷を負った。

彼女が目覚めるまで、事件の終わりは始まってすらいない。
そのためにも、今日この日を盛大にしてやらねばならないのだ。

「でも、意外でした！　御坂さんがこんなアイデアを思いつくなんて！」

「なーに言ってんの！　御坂さんらしい、実にロマンチックなアイデアじゃない！」

隣を走る花飾りが上下に揺れるのを見ながら、佐天涙子（さてんるいこ）は世のすべてを笑い飛ばすように声を放った。

もともと、彼女はすべてを笑うたちの人間だ。
そうやって自分を集団の中で保ってきたこともあるし、学園都市に来てからはそうでもしなければ精神の平衡を保てそうになかった。

いま目の前を走っているレベル5の彼女にしてもそうだ。
意識的にとは言わないが、レベル5であることを誰もが褒め称えるこの学園都市では、彼女さえもその頸木からは逃れられていなかったと言える。
だから佐天の犯した過ちを帳消しにできるとは、さすがに思わないが。

しかし、そういう面も含めて、彼女は彼女だ。
だからメルヘンチックな一面も、彼女の個性と認めたうえで大いに笑ってあげようではないか。
世に言うところ、「悪口はよくても陰口はダメ」なのだそうだし。

「ああ、なるほど！」

「そんなんじゃないわよ！」

不本意にも自らの背後で納得の声を大きくあげてくれた『風紀委員』の後輩に、御坂美琴（みさかみこと）は振り返ることなく反論した。

学園都市に七人しかいない（その割に、テレビなどに主演しているのは御坂ともうひとりいたかいないか程度なのだが）レベル5。

その肩書きがあったからこそ、白井黒子に出会い、初春飾利に出会い、佐天涙子に出会うことができた。

もちろん、その後で相互に行き違いや何やで、最初のイメージを取り戻すのに時間がかかったこともあったけれど、人間同士のつきあいに波乱はつきものと思っている。

とはいえ、第一印象が重要なのは古今東西変わらない。

だから今日だけは早起きする必要があったのだが……

御坂美琴、このとき短い人生で何度目かの不覚を取っていた。

「……あぁ、白井さん？　え、まだ着いてないの？

いや、用ってわけじゃないんだけどね。例の人、意識を取りもどしたそうよ。

全身にひどいやけどを負ってるから、長期の治療と回復を待って事情聴取が始まる予定だけど、簡単に口を割りそうにないわね」

『風紀委員』活動第一七七支部で、固法美偉（このりみい）は年下の同僚に電話で報告を行っていた。

年下の同僚――白井黒子も、彼女の“お姉様”に負けず劣らず、危険を承知でつっこんでゆく傾向が抜けないひとりだ。特に高レベル能力者に見られるその傾向は、状況によっては命取りにもなりうる。

なんといっても、『風紀委員』の大多数はただの学生であり、ただの能力者に過ぎないのだから。

その彼女が独断専行の危うさを知ったのは、去年の郵便局事件。だがそこに加わったもうひとりの独断専行は、やはり今回も事件に食いついてきていたのだと言う。

加藤若一。

ただのレベル3にしては強すぎる戦闘能力を持つ少年。

こちらについても調べを進めておいた方がいいかもしれない、固法は牛乳をすすりつつそんなことを思った。

「そうですの……ええ、ありがとうございました」

「何？」

携帯を切る白井に、もはや走るのをあきらめた御坂が問いかける。

「まだまだ全容解明には時間がかかりそうですわ」

「ふーん」

「はっ、こうしてはいられませんの！　急ぎませんと」

「あ！！」

黒子のその叫び声と、初春のその叫び声は、ほとんど同時だった。

「え？」

一同の注目が初春に向かう。

彼女は左手を高くさしあげ、ひとさし指を突きだしてまた叫んだ。

「あれ！！」

「え？　……うあっ」

そして四人は、状況をはっきりと理解する。

マイクから出るような、甲高い音。

広告用スクリーンを設置した飛行船が病室の斜め上を飛んでいることは知っていたが、この新しい聴覚情報は木山春生の集中力を書籍から引きはがすに十分だった。

それでも彼女は面を上げない。

この六日間で色々と思うことがあり、少し長めに療養期間を取ることにしている。ここで焦って行動しても仕方がない。

自分は能力も何もない、ただの人間なのだから。

ブゴッ、とマイクに呼吸音。

そして、掛け声。

『せーの、
きやませんせー！』

「な……？」

そこで彼女はようやく、窓の外を見る。
広告用スクリーンが設置された飛行船。
そこに、九人の子供たちが満面の笑顔で並んでいた。

『おたんじょうび、おめでとー！！』

『せんせい、早くよくなってね！』

『わたしたちもがんばるから！』

『まってるよ、せんせい！』

『ぼくも！』

『ありがとう、きやませんせい。大好きだよ！』

木山春生はそこで、ようやく涙を流した。

八月九日。

今年は土曜日であり、日本式の学校暦を採用している学園都市ではそんなもの関係なく遊び回る学生たちの元気な声が、朝から響いている時期でもある。

ところがさまざまな条件により、この日に特別な意味を含ませる人々もまま見られる。

そんな一例が、ほら、ここにも。

第二十四話外伝　特別な日（後書き）

これにて『乱雑開放』編の本筋は終了となります。長かった……。
次回は伏線です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3797s/

とある憑霊の帝都物語

2011年10月11日11時59分発行